

富田新井遺跡・富田大泉坊B遺跡・ 富田大泉坊A遺跡・富田宮田遺跡・ 富田宮下遺跡

主要地方道藤岡大胡線に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2009

群馬県前橋土木事務所
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

富田新井遺跡・富田大泉坊B遺跡・
富田大泉坊A遺跡・富田宮田遺跡・
富田宮下遺跡

主要地方道藤岡大胡線に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書
二〇〇九

群馬県中部県民局前橋土木事務所
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



富田新井遺跡・富田大泉坊B遺跡・
富田大泉坊A遺跡・富田宮田遺跡・
富田宮下遺跡

主要地方道藤岡大胡線に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2009

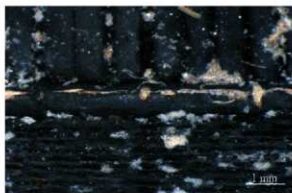
群馬県前橋土木事務所
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



富田大泉坊A遺跡出土壺拂



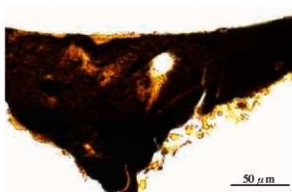
上位結束部反射電子像写真



株結束部反射電子像写真



下断面反射電子像写真



漆膜断面反射電子像写真

序

前橋市北東部の旧大胡町と現前橋市群馬県南部の藤岡市を繋ぐ県道藤岡大胡線（県道40号線）は主要地方道路として大きな役割を担っています。しかしその交通量は多く、各所で渋滞も発生し、歩道のない箇所も少なくありませんでした。このため群馬県では4車線化やバイパス工事を進め、前橋市東部地区でも高崎駒形バイパスと接する東善町交差点から一般国道50号線小島田町交差点までは既に4車線化されています。そして小島田町交差点以北富田町交差点までの区間も歩道付きの4車線或いは2車線道路化する事業が平成14年度から始まり、まもなくそれも完成しようとしています。

この間、私ども財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団では工事予定地に在った富田大泉坊A遺跡、富田大泉坊B遺跡、富田新井遺跡、富田宮田遺跡、及び富田宮下遺跡に対する埋蔵文化財の発掘調査を、平成16年10月から平成20年3月にかけて断続的に実施して参りました。これらの遺跡群からは旧石器時代から縄文時代にかけての遺物包含層、弥生時代から古墳時代に移る時期の溝と多くの木製品や土器類、古墳時代から平安時代の集落跡と水田址、中・近世の建物跡や井戸など、各時代に亘る様々な遺構や遺物が出土するなど、その成果は少なくありませんでした。特に古墳時代前期頃のものとして想定される黒漆塗りの堅櫛は、綿貫観音山古墳例に続く本県2例目の堅櫛出土例として、また県外例のような竹製ではなく草を編んだものに漆を塗布したものであることを確認できた点に於いて注目されるようになりました。

此の度、こうした調査成果を掲載した埋蔵文化財発掘調査報告書を刊行することとなりました。本報告書が考古学研究者に限らず、郷土史を研究される県民の皆様にも活用されることを期待しております。

最後になりますが、群馬県前橋土木事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、前橋市教育委員会文化財保護課、並びに関係各位に厚く御礼申し上げます。また発掘調査及び整理業務に携わった関係者の労をねぎらい序とします。

平成21年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 高橋 勇 夫

例 言

1. 本書は(主)藤岡大胡線住宅市街地基盤整備事業に伴い発掘調査された、富田大泉坊A遺跡(遺跡略号 FODA)、富田大泉坊B遺跡(遺跡略号 FODB)、富田新井遺跡(遺跡略号 FOA)、富田富田遺跡(遺跡略号 FOM)、富田富下遺跡(遺跡略号 FOS)の発掘調査報告書である。

2. 本遺跡群は群馬前橋市富田町、小島田町、江木町内に所在する。

3. 発掘調査及び整理事業は前橋土木事務所の委託を受けた財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が行い、群馬県教育委員会がその調整を行った。

4. 発掘調査の期間は次の通りである。

発掘調査 第1次調査 平成16年10月1日～平成17年3月30日
第2次調査 平成17年3月31日～平成17年5月31日
第3次調査 平成17年10月1日～平成18年3月31日
第4次調査 平成18年10月1日～平成18年12月31日
第5次調査 平成19年4月1日～平成19年5月31日
第6次調査 平成20年1月1日～平成20年3月31日

整理期間 平成19年4月1日～平成21年3月31日

5. 発掘調査及び整理事業体制

事務担当 小野 宇三郎、高橋勇夫、住谷永一、木村 裕紀、津金澤茂吉、
神保佑史、萩原利通、右島和夫、矢崎 俊夫、西田健彦、
萩原 勉、佐藤明人、相京建史、上原恒夫、中東耕志、関晴彦、
笠原秀樹、石井 清、大木紳一郎、佐嶋芳明、竹内 宏、
高橋房雄、國定 均、須田 朋子、吉田 有光、今泉 大作、
齋藤恵利子、柳岡良宏、矢島一美、栗原 幸代、
清水秀紀、佐藤 聖行、齋藤陽子、田中賢一、
今井もと子、内山佳子、佐藤美佐子、本間久美子、
北原かおり、狩野真子、若田 誠、松下次男、
吉田 茂、武藤秀典

調査担当 石坂 茂、井川達雄、桜岡正信、石守 晃、谷藤保彦、高井佳弘、津島秀章、
須田貞崇、堀口英子、弥城 淳

整理担当 石守 晃(平成19年4月1日～6月30日、平成19年10月1日～平成21年3月31日)

新倉明彦(平成19年7月1日～9月30日)

整理作業 岩淵節子、長岡美和子、馬場信子、堀米弘美、渡辺八千代、吉川えり子

竹鶴小百合

木製品実測・プレバート作成 小池 緑、野沢 健、生方茂美、

機械実測 田中精子、田所順子、伊藤博子、岸 弘子、福島瑞穂、小池益美、山口洋子

金属器処理 関 邦一、小村浩一、森田智子、津久井桂一、多田ひさ子

デジタルデジタル写真図版作成 牧野裕美、市田武子、安藤美奈子、酒井史恵、廣津真希子、

荒木絵美、高梨由美子、矢端真観、横塚由香、下川陽子

7. 本書作成の担当は次の通りである。

編 集 石守 晃

執 筆 遺物観察表（縄文土器）：橋本 淳

上記以外：石守 晃

遺構写真撮影 各発掘調査担当

遺物写真撮影 佐藤元彦

石材鑑定（遺物観察表） 飯島静男

8. 保管については、出土遺物は群馬県の所有に帰し、群馬県埋蔵文化財調査センター内に収納される。
9. 本書の作成に於いては以下の方々にご協力・ご指導戴いた。記して感謝の意を表します。（敬称略）
前橋市教育委員会、小笠原良人、岩崎琢郎、小島純一、前原 豊、山下歳信、和久裕昭、地元関係各位

凡 例

- 1 挿図中に使用した方位は、座標北を表している。
- 2 遺構断面実測図、等高線に記した数値は標高を表し、単位は“m”を用いた。
- 3 遺構名称、遺構番号は調査段階のものをそのまま踏襲した。遺跡別の遺構では大泉坊 A 遺跡の土坑のみ 1 面と 2 面のものがあるが、特に面による表記上の区別は行わなかった。
- 4 本書に於けるテフラ（火山噴出物）の略号は以下の通り
As-A：浅間山噴出 A 軽石（天明 3 年 / 1783）
As-B：浅間山噴出 B 軽石・火山灰（天仁元年 / 1108）
Hr-FP：榛名山二ッ岳軽石（6 世紀前半）
Hr-FA：榛名山二ッ岳火山灰（5 世紀末～6 世紀初頭）
As-C：浅間山 C 軽石（3 世紀末葉）
As-SJ：浅間総社軽石（1.1 万年前）
As-BP：浅間褐色軽石（1.8～2.2 万年前）
AT：始良・丹沢火山灰（2.2～2.5 万年前）
Hr-HA：榛名八崎軽石（3.0 万年前）
- 5 遺構実測図の縮尺は下記を基準としているが、例外としたものは各図に記載している。
竪穴住居 1 / 60 竈 1 / 30 溝・道 1 / 100
井戸・土坑・ピット、その他 1 / 60
- 6 遺物実測図の縮尺は下記を基準としている。高、例外或いは木製品は図に縮率を記している。
土器・陶磁器等：甕・壺・内耳鍋等 1 / 4 碗・坏・高坏・埴・皿等 1 / 3
石器・石製品等：石鎌 4 / 5 スクレーパー等 1 / 3
打製石斧、石製品 1 / 4 紡錘車 1 / 3
金属製品：刀子・鎌・包丁等 1 / 3
木製品 ： 1 / 6、1 / 8、1 / 12、1 / 16
- 7 図中のスクリーントーンは灰、黒色処理、或いは赤色塗彩を現している。

目 次

第1章 発掘調査のはじまりとその経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 発掘調査の経過	3
第3節 発掘調査の方法	6
第4節 調査区における自然堆積層	7
第2章 遺跡を取り巻く環境	10
第1節 地理的・地質的環境	10
第2節 歴史的環境	11
第3章 富田新井遺跡で発見された遺構と遺物	15
第1節 1面の遺構と遺物	15
住居(竪穴住居) 16 / 掘立柱建物 74 / 溝 87 / 井戸 92 / 土坑 94 / ビット 101 / As-B 下水田 104 / 噴砂痕 104 / 遺構外の出土遺物 105	
第2節 2面の出土遺物	106
遺物包含層	106
第3節 旧石器の試掘調査	116
第4章 富田大泉坊B遺跡で発見された遺構と遺物	117
第1節 1面の遺構と遺物	117
住居(竪穴住居) 118 / 掘立柱建物 142 / 道 146 / 溝 150 / 旧河道 158 / 井戸 159 / 土坑 161 / ビット 166 / As-B 下水田 169 / 畠 169 / 遺構外の出土遺物 172	
第2節 2面の出土遺物	174
遺物包含層	174
第3節 旧石器の試掘調査	182
第5章 富田大泉坊A遺跡で発見された遺構と遺物	183
第1節 遺跡の概要と遺構面の区分	183
第2節 1面の遺構と遺物	185
道 185 / 女堀 185 / 溝 186 / 旧河道の出土遺物 189 / 土坑 189 / ビット 198 / As-A 下水田 203 / 1面の遺構外の出土遺物 203	
第3節 2面の遺構と遺物	205
溝 205 / As-B 下水田 217 / 噴砂痕 217	
第4節 3面の遺構と遺物	218
溝 218 / As-C 上水田 232 / 6区3面の水田 236 / グリッド取り上げ遺物 236	
第5節 4面の遺構と遺物	239
溝 239 / As-C 下面 267 / 谷 269	
第6節 縄文時代の小河道と遺物	270
6区の旧河道 270 / 縄文時代の遺物 270	

第7節	遺跡全域の出土遺物	272
第8節	旧石器の試掘調査	273
第6章	富田宮田遺跡で発見された遺構と遺物	274
第1節	1面の遺構と遺物	274
	溝 274 / 土坑 275 / ビット 277 / As-B 下面 278 / 噴砂痕跡 279 / 遺構外の出土遺物 279	
第2節	2～4面に発見された遺構	280
	2面 280 / 3面 280 / 4面 282	
第3節	5面の遺構と遺物	283
	旧河道 283	
第4節	旧石器の試掘調査	284
第7章	富田宮下遺跡で発見された遺構と遺物	288
第1節	1面の遺構と遺物	288
	住居(竪穴住居) 288 / 溝 291 / 井戸 299 / 土坑 299 / ビット 300 / 風倒木 303 / 遺構外出土遺物 305	
第2節	2面の遺物	306
	試掘調査 306 / 縄文時代の遺物包含層 306 / 土坑 308 / 旧石器時代の遺物包含層 309	
第8章	科学分析報告	
第1節	群馬県、富田大泉坊B遺跡における自然科学分析(株式会社古環境研究所)	311
	土層とテフラ 311 / 植物珪酸体分析 313 / 花粉分析 315	
第2節	富田大泉坊A遺跡における自然科学分析(株式会社古環境研究所)	316
	土層とテフラ 316 / 植物珪酸体(プラント・オパール)分析	318
第3節	富田大泉坊遺跡の樹種同定分析(野村敏江、バレオ・ラボ)	322
第4節	漆塗り堅櫛の塗膜分析(藤根 久、バレオ・ラボ)	331
第5節	富田宮下遺跡・富田大泉坊A遺跡出土木製品の樹種同定 (佐々木由香・藤根 久、バレオ・ラボ)	333
第6節	富田大泉坊A遺跡の大型植物遺体	333
おわりに		336

挿 図 目 次

第1図	主要地方道藤岡大胡線と本道跡群位置図	1
第2図	試掘調査の記録(抜粋)	2
第3図	藤岡大胡線と調査道跡及び調査区	6
第4図	台地部分の基本土層	8
第5図の1	低地部分基本土層	8
第5図の2	低地部分基本土層	9
第6図	道跡群周辺の地理及び地質図	10
第7図	周辺道跡分布図	12

〔富田新井遺跡〕

第8図	富田新井遺跡1面	15
第9図	1号住居と出土遺物(その1)	16
第10図	1号住居掘り方と出土遺物(その2)	17
第11図	2号住居と出土遺物(その1)	18
第12図	2号住居竈、住居掘り方と出土遺物(その2)	19
第13図	2号住居の出土遺物(その3)	20
第14図	3号住居出土遺物	20
第15図	3号住居	21
第16図	4号住居と出土遺物(その1)	22
第17図	4号住居と出土遺物(その2)	23
第18図	4号住居出土遺物(その3)	24
第19図	5号住居と出土遺物(その1)	25
第20図	5号住居竈・掘り方と出土遺物(その2)	26
第21図	5号住居掘り方	27
第22図	6号住居と出土遺物	28
第23図	7号住居と出土遺物(その1)	29
第24図	8号住居と出土遺物(その1)	30
第25図	8号住居の出土遺物(その2)	31
第26図	8号住居掘り方と出土遺物(その3)	32
第27図	9号住居の出土遺物(その1)	32
第28図	9号住居と出土遺物(その2)	33
第29図	9号住居の出土遺物(その3)	34
第30図	9号住居の出土遺物(その4)	35
第31図	10号住居	36
第32図	11号住居と出土遺物(その1)	36
第33図	11号住居竈及び掘り方と出土遺物(その2)	37
第34図	11号住居掘り方と出土遺物(その3)	38
第35図	12号住居と出土遺物(その1)	39
第36図	12号住居竈及び住居掘り方と出土遺物(その2)	40
第37図	13号住居(左)と14号住居(右)	41
第38図	15号住居及び竈と出土遺物	42
第39図	15号住居掘り方と住居掘り方	43
第40図	16号住居と出土遺物	44
第41図	17号住居	45
第42図	17号住居竈及び出土遺物(その1)	46
第43図	17号住居掘り方と出土遺物(その2)	47
第44図	17号住居掘り方	48
第45図	18号住居と出土遺物(その1)	49
第46図	18号住居掘り方と出土遺物(その2)	50
第47図	19号住居と出土遺物	51
第48図	20号住居と出土遺物	52
第49図	20号住居竈	53
第50図	21号住居及び竈と出土遺物(その1)	54
第51図	21号住居掘り方と出土遺物(その2)	55
第52図	22号住居及び竈と出土遺物(その1)	56
第53図	22号住居掘り方及び住居掘り方と出土遺物(その2)	57
第54図	22号住居出土遺物(その3)	58
第55図	23号住居及び竈と出土遺物	59
第56図	24号住居	60

第57図	25号住居と出土遺物	60
第58図	26号住居と出土遺物	61
第59図	27号住居と出土遺物	62
第60図	28号住居	63
第61図	29号住居	63
第62図	29号住居竈と出土遺物(その1)	64
第63図	29号住居掘り方と出土遺物(その2)	65
第64図	30号住居と出土遺物(その1)	66
第65図	30号住居竈及び掘り方	67
第66図	30号住居掘り方と出土遺物(その2)	68
第67図	31号住居と出土遺物	69
第68図	32号住居及び竈と出土遺物(その1)	70
第69図	32号住居掘り方及び掘り方と出土遺物(その2)	71
第70図	33号住居及び掘り方	72
第71図	33号住居竈と出土遺物(その2)	73
第72図	33号住居出土遺物(その3)	74
第73図	1号掘立柱建物	75
第74図	2号掘立柱建物	76
第75図	3号掘立柱建物	77
第76図の1	5号掘立柱建物と柱穴断面(その1)	78
第76図の2	5号掘立柱建物と柱穴断面(その2)	79
第77図	6号掘立柱建物	80
第78図	7号掘立柱建物	81
第79図	8号掘立柱建物	82
第80図	9号掘立柱建物と出土遺物	83・84
第81図	1号溝列(4号建物)	85
第82図	2号溝列	86
第83図	1号溝と出土遺物	87
第84図	2号溝と出土遺物	88
第85図	3・4号溝と出土遺物	89
第86図	5・6号溝	90
第87図	8号溝	91
第88図	9・10号溝と9号溝出土遺物	92
第89図	1号井戸	93
第90図	2号井戸と出土遺物	93
第91図	3号井戸と出土遺物	94
第92図	4号井戸	95
第93図	1区の土坑(2号土坑)	95
第94図	2区の土坑群と出土遺物(その1)	96
第95図	2区の土坑群と出土遺物(その2)	97
第96図	2区の土坑群と出土遺物(その3)及び3区の土坑(その1)	98
第97図	3区の土坑(その2)及び4区の土坑群	99
第98図	2区のビット群	100
第99図	3区のビット群(その1)	101
第100図	3区のビット群(その2)と4区のビット(その1)	102
第101図	4区のビット群(その2)	103
第102図	A=B下土田	104
第103図	遺構外の出土遺物	105
第104図	縄文包含層遺物分布図(その1)	106
第105図	縄文包含層遺物分布図(その2)	107
第106図	縄文時代出土遺物(その1)	108
第107図	縄文時代出土遺物(その2)	109
第108図	縄文時代出土遺物(その3)	110
第109図	縄文時代出土遺物(その4)	111
第110図	縄文時代出土遺物(その5)	112
第111図	縄文時代出土遺物(その6)	113
第112図	縄文時代出土遺物(その7)	114

第113回	縄文時代出土遺物（その8）	115
第114回	縄文時代出土遺物（その9）	116
第115回	旧石器試掘坑設定位置図	116

〔富田大泉坊B遺跡〕

第116回	富田大泉坊B遺跡1面	117
第117回	1号住居と竈	118
第118回	1号住居掘り方及び竈掘り方と出土遺物	119
第119回	2号住居及び竈と出土遺物（その1）	120
第120回	2号住居掘り方と出土遺物（その2）	121
第121回	2号住居掘り方	122
第122回	3号住居と住居掘り方	123

竈及び出土遺物（その1）

第123回	3号住居掘り方と出土遺物（その2）	124
第124回	3・4号住居の出土遺物	124
第125回	4号住居と住居掘り方及び出土遺物	125
第126回	4号住居竈と竈掘り方	126
第127回	5号住居と掘り方	127
第128回	6号住居と出土遺物（その1）	128
第129回	6号住居掘り方と出土遺物（その2）	129
第130回	7号住居と住居掘り方及び出土遺物	130
第131回	8号住居及び住居掘り方	131
第132回	9号住居と出土遺物	132
第133回	10号住居と出土遺物	133
第134回	11号住居と出土遺物（その1）	134
第135回	11号住居出土遺物（その2）	135
第136回	12号住居と出土遺物（その1）	135
第137回	12号住居竈・竈掘り方と出土遺物（その2）	136
第138回	12号住居掘り方	137
第139回	14号住居	137
第140回	14号住居竈と竈掘り方及び出土遺物	138
第141回	15号住居と竈及び出土遺物	139
第142回	15号住居掘り方と出土遺物	140
第143回	16号住居及び竈と出土遺物	141
第144回	16号住居掘り方と竈掘り方	142
第145回	1号掘立柱建物	143
第146回	2号掘立柱建物	144
第147回	3号掘立柱建物	145
第148回	4号掘立柱建物	147・148
第149回	1号道路と出土遺物	149
第150回	2号道及び1号溝と出土遺物	150
第151回	2号溝及び3号溝	151
第152回	4号溝と出土遺物	152
第153回	5号溝	153
第154回	6号溝と出土遺物及び 7～11号溝と7号溝出土遺物	155・156

第155回	8・9・11号溝出土遺物	154
第156回	12号溝（田4-1号溝）	157
第157回	田河道と出土遺物（その1）	158
第158回	田河道出土遺物（その2）	159
第159回	1号井戸	160
第160回	2号井戸（田4-1号井戸）と出土遺物	160
第161回	3号（田4-2号）井戸	161
第162回	土坑群（その1）	162
第163回	土坑群（その2）と出土遺物	163
第164回	土坑群（その3）	164
第165回	土坑群（その4）	165
第166回	ピット群（その1）	166
第167回	ピット群（その2）	167
第168回	ピット群（その3）	168
第169回	As-B下水田	169
第170回	畚	170
第171回	地割れ直（噴砂、その1）	171

第172回	地割れ直（噴砂、その2）	172
第173回	遺構外の出土遺物	173
第174回	縄文包含層遺物分布図（その1）	174
第175回	縄文包含層遺物分布図（その2）	175
第176回	縄文包含層遺物分布図（その3）と 縄文時代出土遺物（その1）	176

第177回	縄文時代出土遺物（その2）	177
第178回	縄文時代出土遺物（その3）	178
第179回	縄文時代出土遺物（その4）	179
第180回	縄文時代出土遺物（その5）	180
第181回	縄文時代出土遺物（その6）	181
第182回	旧石器試掘坑設定位置図	182

〔富田大泉坊A遺跡〕

第183回	富田大泉坊A遺跡1面	183
第184回	1号道路	184
第185回	女堀	185
第186回	1・2号溝	186
第187回	3号溝	187
第188回	7号溝と出土遺物	188
第189回	17号溝	189
第190回	33号溝	190
第191回	34号溝と田河道出土遺物	191
第192回	土坑群と出土遺物（その1）	192
第193回	土坑群（その2）	193
第194回	土坑群（その3）	194
第195回	土坑群と出土遺物（その4）	195
第196回	土坑群（その5）	196
第197回	土坑群（その6）	197
第198回	土坑群（その7）	198
第199回	ピット群（その1）	199
第200回	ピット群（その2）	200
第201回	ピット群（その3）	201
第202回	ピット群（その4）	202
第203回	As-A下水田（6区）	203
第204回	1面の遺構外の出土遺物	204
第205回	富田大泉坊A遺跡2面	205
第206回	4・5号溝	206
第207回	6号溝と出土遺物	207
第208回	16号溝及び19号溝	208
第209回	18号溝	209
第210回	21号溝	210
第211回	22号溝	211
第212回	22号溝出土遺物及び31号溝と出土遺物	212
第213回	23号溝	213
第214回	3区 As-B下水田全体図と中部部分図	214
第215回	3区 As-B下水田南部部分図と 6区 As-B下水田及びAs-B下水田出土遺物	215

第216回	4区 As-B下水田と5区 As-B下水田	216
第217回	富田大泉坊A遺跡3面	218
第218回	8号溝出土遺物	219
第219回	1・8・10・11号溝	220～222
第220回	14号溝の出土遺物	223
第221回	15号溝と出土遺物	224
第222回	20号溝	225
第223回	25・26号溝と出土遺物（その1）	226
第224回	25号溝出土遺物（その2）	227
第225回	1・27号溝と出土遺物（その1）	228～230
第226回	27号溝出土遺物（その2）	231
第227回	As-C上水田（その1、3区の1）	232
第228回	As-C上水田（その2、3区の2と4区）	233
第229回	As-C上水田（その3、5区と6区）	234
第230回	As-C上水田出土遺物	235

第 231 図	グリッド取り上げ遺物 (その 1)	236
第 232 図	グリッド取り上げ遺物 (その 2)	237
第 233 図	グリッド取り上げ遺物 (その 3)	238
第 234 図	富田大泉坊 A 遺跡 4 面区	239
第 235 図	9 号溝と出土遺物 (その 1)	240
第 236 図	8・9 号溝出土遺物 (その 2)	241
第 237 図	12 号溝と出土遺物 (その 1)	242 ~ 244
第 238 図	12 号溝出土遺物 (その 2)	245
第 239 図	12 号溝出土遺物 (その 3)	246
第 240 図	12 号溝出土遺物 (その 4)	247
第 241 図	12 号溝出土遺物 (その 5)	248
第 242 図	12 号溝出土遺物 (その 6)	249
第 243 図	12 号溝出土遺物 (その 7)	250
第 244 図	13 号溝	250
第 245 図	24 号溝	251
第 246 図	28 号溝	252
第 247 図	28 号溝出土遺物 (その 1)	253
第 248 図	28 号溝出土遺物 (その 2)	254
第 249 図	28 号溝出土遺物 (その 3)	255
第 250 図	28 号溝出土遺物 (その 4)	256
第 251 図	29 号溝と出土遺物	257
第 252 図	30 号溝と出土遺物 (その 1)	258 ~ 260
第 253 図	30 号溝出土遺物 (その 2)	261
第 254 図	30 号溝出土遺物 (その 3)	262
第 255 図	30 号溝出土遺物 (その 4)	263
第 256 図	30 号溝出土遺物 (その 5)	264
第 257 図	30 号溝出土遺物 (その 6)	265
第 258 図	32 号溝	266
第 259 図	32 号溝出土遺物	267
第 260 図	6 区 As-C 下面	267
第 261 図	As-C 下面出土遺物 (その 1)	268
第 262 図	As-C 下面出土遺物 (その 2)	269
表 263 図	1 号谷	269
第 264 図	6 区の小河道 (上) と 縄文時代の遺物 (その 1)	270
第 265 図	縄文時代の遺物 (その 2)	271
第 266 図	遺跡全域からの出土遺物	272
第 267 図	旧石器試掘坑設定位置図	273
〔富田宮田遺跡〕		
第 268 図	富田宮田遺跡 1 面全体図	274
第 269 図	1 ~ 3 号溝	275
第 270 図	4 区の土壌・ピット群	276
第 271 図	1 区南部 1 面 (As-B 下面)	277
第 272 図	1 区北部の噴砂痕	278
第 273 図	2 区グリッド出土遺物	279

第 274 図	1 区東壁断面図	280
第 275 図	1 区 2 面・3 面・4 面全体図	281
第 276 図	田河道の出土遺物 (その 1)	283
第 277 図	田河道と出土遺物 (その 2)	284
第 278 図	田河道の出土遺物 (その 3、縄文時代遺物)	285
第 279 図	田河道の出土遺物 (その 4、縄文時代遺物)	286 ~ 287
第 280 図	旧石器試掘坑設定位置図	287

〔富田宮下遺跡〕

第 281 図	富田宮下遺跡 1 面全体図	288
第 282 図	1 号住居・竈及び出土遺物 (その 1)	289
第 282 図	1 号住居掘り方及び掘り方	290
第 283 図	1 号住居出土遺物 (その 2)	291
第 284 図	2 号住居 (掘り方) と出土遺物	292
第 285 図	1 号溝	293
第 286 図	1 号溝出土遺物	294
第 287 図	2・3 号溝	294
第 288 図	4 号溝と 3 号風倒木	295
第 289 図	4 号溝遺物出土位置図と出土遺物 (その 1)	296
第 290 図	4 号溝出土遺物 (その 2)	297
第 291 図	4 号溝出土遺物 (その 3)	298
第 292 図	4 号溝出土遺物 (その 4)	299
第 293 図	1 号井戸と出土遺物	300
第 294 図	1 区 1 面の土壌群	301
第 295 図	1 区 1 面のピット群	302
第 296 図	の 1 1 号風倒木と出土遺物 (その 1)	302・303
第 297 図	1 号風倒木の出土遺物 (その 2)	304
第 298 図	1 面の遺構外出土遺物	305
第 299 図	調査区 1 区南部の試掘トレンチ	306
第 300 図	1 区中・北部の遺物分布図と出土遺物 (その 1)	307
第 301 図	1 区・中北部の出土遺物 (その 2)	308
第 302 図	5 号土壌と出土遺物	308
第 303 図	旧石器試掘グリッド配置図並びに遺物出土位置図	309
第 304 図	旧石器出土遺物	310

〔自然科学分析〕

第 305 図	3 区の土層柱状図	311
第 306 図	富田大泉坊 B 遺跡 3 区 B 地点における 植物珪酸体分析結果	312
第 307 図	富田大泉坊 B 遺跡 3 区 C 地点における 植物珪酸体分析結果	312
第 308 図	富田大泉坊 B 遺跡における植物珪酸体分析結果	313
第 309 図	27・28 号溝 A-A' セクション土層柱状図	315
第 310 図	富田大泉坊 A 遺跡、27・28 号溝 A-A' セクションにおける植物珪酸体分析結果	317
第 311 図	富田大泉坊 A 遺跡、10 号溝 セクションにおける植物珪酸体分析結果	317

目 次

表 1	調査経過一覧	3・4
表 2	周辺遺跡一覧	12 ~ 14
表 3	土壌一覧 (富田新井遺跡)	100
表 4	ピット一覧 (富田新井遺跡)	100
表 5	土壌一覧 (富田大泉坊 B 遺跡)	161
表 6	ピット一覧 (富田大泉坊 B 遺跡)	167
表 7	土壌一覧 (富田大泉坊 A 遺跡)	192
表 8	ピット一覧 (富田大泉坊 A 遺跡)	202
表 9	土壌一覧 (富田宮田遺跡)	276
表 10	ピット一覧 (富田宮田遺跡)	277
表 11	富田宮下遺跡 1 土壌・ピット一覧	303
表 12	テラウ検出分析結果	312
表 13	群馬県、富田大泉坊遺跡における 植物珪酸体分析結果	321
表 14	富田大泉坊 A 遺跡の出土材の樹種同定結果	325 ~ 330

表 15	富田大泉坊 A 遺跡出土材の種別樹種構成	330
表 16	生漆の吸収位置とその強度	331
表 17	整備地盤の元素分析結果 (単位%)	332
表 18	富田大泉坊 A 遺跡の植家同定結果	334
表 19	遺物観察表 富田新井遺跡	337
表 20	遺物観察表 富田大泉坊 B 遺跡	357
表 21	遺物観察表 富田大泉坊 A 遺跡	368
表 22	遺物観察表 富田宮田遺跡	386
表 23	遺物観察表 富田宮下遺跡	388
表 24	富田新井遺跡 遺構一覧	393
表 25	富田大泉坊 B 遺跡 遺構一覧	394
表 26	富田大泉坊 A 遺跡 遺構一覧	395
表 27	富田大泉坊宮田遺跡 遺構一覧	396
表 28	富田大泉坊宮下遺跡 遺構一覧	397

写真図版目次

〔航空写真〕

- P.L. 1 調査区付近航空写真（平成16年10月2日撮影）
調査区付近航空写真（平成18年10月12日撮影）

〔富田新井遺跡〕

- P.L. 2 1号住居全景及び遺物出土状況 1号住居掘り方全景
2号住居全景 2号住居遺物出土状況 2号住居掘
2号住居掘り方 2号住居掘り方全景
3号住居全景
- P.L. 3 3号住居遺物出土状況 4号住居全景
4号住居遺物出土状況 4号住居掘
4号住居掘り方全景 4号住居掘り方全景
5号住居全景及び遺物出土状況 5号住居掘
- P.L. 4 5号住居掘り方 5号住居・10号住居掘り方全景
6号住居全景 6号住居出土遺物 7号住居全景
7号住居跡 7号住居遺物出土状況
8号住居全景及び遺物出土状況
- P.L. 5 8号住居掘 8号住居掘り方
9号住居全景及び遺物出土状況 9号住居掘り方全景
11号住居全景 11号住居掘 11号住居掘り方
11号住居掘り方
- P.L. 6 12号住居全景 12号住居掘
12号住居掘り方全景 14号住居土層断面
15号住居全景 15号住居掘
15号住居掘り方全景 16号住居全景
- P.L. 7 16号住居掘 17号住居全景 17号住居掘
17号住居掘り方 17号住居掘り方全景
18号住居全景 18号住居遺物出土状況
18号住居遺物出土状況
- P.L. 8 18号住居掘り方全景 19号住居全景
20号住居全景 20号住居掘 20号住居掘り方
20号住居掘り方全景
21号住居全景及び遺物出土状況 21号住居掘
- P.L. 9 22号住居全景 22号住居掘
22号住居遺物出土状況 22号住居掘り方全景
23号住居全景 23号住居掘
23号住居掘り方全景 24号住居全景
- P.L. 10 25号住居全景 25号住居遺物出土状況
26号住居全景 27号住居全景及び遺物出土状況
27号住居貯蔵穴 28号住居全景
29号住居全景及び遺物出土状況
29号住居掘り方全景
- P.L. 11 30号住居全景 30号住居貯蔵穴 30号住居掘
30号住居遺物出土状況 30号住居掘り方掘
30号住居掘り方全景
31号住居全景及び遺物出土状況
31号住居掘り方全景
- P.L. 12 32号住居全景 32号住居貯蔵穴及び周辺の出土遺物
32号住居掘り方 33号住居全景 33号住居掘
1号掘立柱建物 2号掘立柱建物全景
3・4号掘立柱建物と1号櫓列
- P.L. 13 3号掘立柱建物 Pit土層断面 5号掘立柱建物
5号掘立柱建物 Pit1全景（旧24号土坑）
6号掘立柱建物 7号掘立柱建物
7号掘立柱建物 Pit1柱痕土層除去状態
8号掘立柱建物 8号掘立柱建物 Pit1土層断面
- P.L. 14 9号掘立柱建物全景
1号溝全景 2号溝全景 3・4号溝全景
5号溝全景 6号溝全景

- P.L. 15 8号溝全景 9号溝土層断面 1号井戸全景
2号井戸全景 3号井戸全景 4号井戸全景
1号土坑断面
- P.L. 16 5号土坑全景 8号土坑全景 13号土坑全景
26号土坑全景 31号土坑全景
15号ピット土層断面 16号ピット土層断面
A+B 下田水田全景
- P.L. 17 噴砂痕 縄文包含層遺物出土状況 2区縄文包含層
縄文包含層遺物出土状況 縄文包含層遺物出土状況
- P.L. 18 2区縄文包含層試掘状況 2区基本土層
4区全景（平成18年度調査分）
調査風景（5号掘立柱建物付近）
- P.L. 19 出土遺物
P.L. 20 出土遺物
P.L. 21 出土遺物
P.L. 22 出土遺物
P.L. 23 出土遺物
P.L. 24 出土遺物
P.L. 25 出土遺物
P.L. 26 出土遺物
P.L. 27 出土遺物
P.L. 28 出土遺物
P.L. 29 出土遺物
P.L. 30 出土遺物
P.L. 31 出土遺物
P.L. 32 出土遺物

〔富田大泉坊B遺跡〕

- P.L. 32 2区中・北部 4区南部 4区北部 4区北部
- P.L. 33 2区南部全景 1号住居全景 1号住居掘
1号住居掘り方全景 2号住居全景及び遺物出土状況
2号住居掘り方全景 3号住居全景及び遺物出土状況
- P.L. 34 3号住居掘 3号住居掘り方全景
4号住居全景（内側手前は3号住居） 4号住居掘
4号住居掘り方全景 5号住居全景及び土層断面
5号住居掘り方全景 6号住居全景及び遺物出土状況
- P.L. 35 6号住居掘り方全景 7号住居及び8号住居全景
7号住居及び8号住居掘り方全景 9号住居全景
9号住居遺物（1）出土状況 9号住居掘り方全景
10号住居全景 10号住居掘り方全景
- P.L. 36 11号住居全景 11号住居遺物出土状況
11号住居埋藏跡 11号住居埋藏跡断面掘り状況
12号住居遺物（1他）出土状況 12号住居掘
12号住居掘り方 12号住居掘り方全景
- P.L. 37 14号住居全景
14号住居掘 14号住居掘り方 15号住居全景
15号住居掘 15号住居掘り方
15号住居掘り方全景 16号住居全景
16号住居遺物出土状況 16号住居掘
16号住居掘り方全景 1号掘立柱建物柱建物全景
旧2号掘立柱建物（2a・b掘立交渉部分）
3号掘立柱建物（旧4・1号掘立）
4号掘立柱建物（旧4・2掘立）全景
1号道全景及び地割痕
- P.L. 39 2号道全景 3号溝土層断面（A-A'） 1号溝全景
4号溝全景 5号溝全景
- P.L. 40 6号溝全景 7～10号溝全景 7～10号溝全景
1号井戸全景 2号井戸（旧2区井戸）土層断面
- P.L. 41 3号井戸（旧4区-1号井戸）全景
4号井戸（旧4区-2号井戸）全景

2号土坑全集 4号土坑全集 5号土坑全集
8号土坑全集 9号土坑全集 10号土坑全集
P L .42 12号土坑全集 16 (田4-3) 号土坑遺物出土状況
17号土坑 (田4-4号土坑) 全集
18号土坑 (田4-6号土坑) 全集
19号土坑 (田4-15号土坑) 全集
20号土坑 (田4-16号土坑) 全集
21号土坑 (田4-17) 号土坑全集
22号土坑 (田4-18) 号土坑全集

P L .43 23 (田4-19) 号土坑全集
16号ピット (田4-3号ピット) 全集
7号ピット (田4-1号ピット) 土層断面
16号ピット (田4-12号ピット) 全集
24号ピット (田4-20号ピット全集)

P L .44 1区As-B下水田畦畔 1区As-B下水田全集
2区地割痕 2区地割痕

縄文包含層2号ブロック遺物集中部全集
縄文包含層2号ブロック遺物出土状況
縄文包含層3号ブロック遺物出土状況
縄文包含層4号ブロック遺物出土状況
縄文包含層5号ブロック遺物出土状況
縄文包含層7号ブロック全集

P L .45 縄文包含層7号ブロック遺物出土状況
旧石器1号ブロック遺物出土状況
3区基本土層 (E-E') 3区旧石器試掘調査風景
2区北側全集

P L .46 出土遺物
P L .47 出土遺物
P L .48 出土遺物
P L .49 出土遺物
P L .50 出土遺物
P L .51 出土遺物
P L .52 出土遺物

〔富田大塚坊A遺跡〕

P L .53 5区北側全集 3・4区調査区全集
5区調査前状況 5区全集 5区遺構確認状況
6区中・南部全集 6区北部遺構確認状況

P L .54 7区南部全集 7区北部全集 1号道路
史跡女畑 女畑 31号溝遺物出土状況
33 (田6-1) 号溝全集

P L .55 34 (田6-2) 号溝全集
10号土坑 (田7-1) 号土坑全集
22・23号土坑 (田7-12・13) 号土坑全集
29～31号土坑 (田7-20～22) 号土坑全集
(田7-39) 号土坑全集 1～4号ピット全集

6区拡張部As-B下水田全集
2区南部As-B下面と試掘トレンチ
P L .56 14・15・20号溝全集 1A号溝土層断面
2・3号溝 3号溝全集 4号溝全集
5号溝全集 7号溝全集

P L .57 6号溝全集 21号溝全集 23号溝全集
1号土坑全集 3号土坑 (田6-1号土坑) 全集
13号土坑 (田7-4号土坑) 全集
41号土坑 (田7-32号土坑) 全集

P L .58 50号ピット (田7-9号ピット) 全集
52号ピット (田7-11号ピット) 全集
As-B下水田全集 (3区) As-B下水田 (4区)
As-B下水田全集 (6区強出部)
2区中南部全集 (平成18年度調査分)

P L .59 噴砂確認状況 (2区中・北部)
噴砂確認状況 (2区中・北部)
噴砂断面 (2区中・北部) 噴砂断面 (2区中・北部)

11号溝全集 11号溝全集

P L .60 27号溝水口 13号溝全集 22号溝全集
22号溝遺物出土状況 27号溝全集 27号溝全集

P L .61 32号溝全集 As-C上水田全集 As-C上水田
As-C上水田畝・水口付近
As-C混土下水田面 (6区強出し)
As-C混土下面面 (6区強出し)

P L .62 9号溝全集 10・12号溝全集
12号溝遺物出土状況 12号溝枕列

P L .63 12号溝遺物出土状況 12号溝遺物出土状況
12号溝遺物出土状況 12号溝遺物出土状況
12号溝遺物出土状況 12号溝遺物出土状況
24号溝全集 25号溝遺物出土状況

P L .64 25・26号溝全集 25号溝遺物出土状況
25号溝遺物出土状況 28号溝全集
28号溝遺物出土状況 28号溝土層断面

P L .65 29号溝全集 30号溝遺物出土状況
30号溝遺物出土状況 30号溝遺物出土状況
30号溝遺物出土状況 5区As-C下面全集

P L .66 As-C下水田全集 (4区) As-C下水田全集 (4区)
As-C下面全集 (5区北平部)
As-C下面遺物出土状況 (5区)

As-C下面までの土層断面 (5区)
6区強出し部6面掘削状況
6区強出し部6面本貫出土状況 1号谷全集

P L .67 旧石器試掘状況 (5区) 旧石器試掘状況 (6区)
2区基1号土層 4区深掘り
6区西強出し部北壁セクション
3区As-B下水田調査風景
3区As-C下水田調査風景 5区木器等調査風景

P L .68 出土遺物
P L .69 出土遺物
P L .70 出土遺物
P L .71 出土遺物
P L .72 出土遺物
P L .73 出土遺物
P L .74 出土遺物
P L .75 出土遺物
P L .76 出土遺物
P L .77 出土遺物
P L .78 出土遺物
P L .79 出土遺物
P L .80 出土遺物
P L .81 出土遺物
P L .82 出土遺物
P L .83 出土遺物
P L .84 出土遺物
P L .85 出土遺物
P L .86 出土遺物
P L .87 出土遺物
P L .88 出土遺物
P L .89 出土遺物

〔富田宮田遺跡〕

P L .90 1区中・南部全集 1区北部全集 1～3号溝全集
4区全集 As-B下水田全集 (1区)

As-B下水田全集 (1区)
P L .91 噴砂痕 (2区) 噴砂痕断面 (2区)
2面全集 (1区) He-FA上水田全集 (1区)
He-FA上水田面 (1区南部) He-FA下水田 (1区)

P L .92 As-C混土下水田全集 (1区)
As-C混土下水田面 (1区南部)
As-C混土下水田面 (1区中部)

旧河道調査状況（1区）

旧河道出土遺物（1区20・21層）

試掘調査状況（2区） 下位面試掘調査状況（4区）

P.L. .93 出土遺物

P.L. .94 出土遺物

P.L. .95 出土遺物

〔富田宮下遺跡〕

P.L. .96 1区北半部全景 1区北半部全景

1区南半部全景 2区調査状態

1号住居北半全景（平成18年度調査区）

1号住居南半全景（平成19年度調査区）

1号住居竈 1号住居重覆り方

P.L. .97 1号住居北半部掘り方

2号住居（中央）と1号溝全景

1号溝北端付近遺物出土状況

3号溝全景 2号溝全景

4号溝遺物中部北寄り上位出土状況

4号溝中部南寄り上位遺物出土状況

P.L. .98 4号溝北半全景 4号溝南半全景

4号溝遺物出土状況（中部下位）

4号溝南端部遺物出土状況 1号井戸全景

1号井戸横断出土状況

P.L. .99 1・3号土坑全景 2号土坑全景 4号土坑全景

5号土坑全景 1号風倒木全景

1号風倒木遺物出土状況 1号風倒木遺物出土状況

1号風倒木遺物出土状況

P.L. 100 2号試掘トレンチ 2区旧石器試掘状況

縄文・旧石器上位遺物包含層遺物出土状況

旧石器下位遺物包含層遺物出土状況

縄文・旧石器上位遺物包含層遺物出土状況

旧石器下位遺物包含層遺物出土状況

P.L. 101 出土遺物

P.L. 102 出土遺物

P.L. 103 出土遺物

P.L. 104 出土遺物

P.L. 105 出土遺物

〔自然科学分析〕

P.L. 106 富田大泉坊B遺跡の植物性炭体（プラントオパール）の顕微鏡写真

P.L. 107 富田大泉坊B遺跡の花粉・種子

P.L. 108 富田大泉坊A遺跡の植物性炭体（プラントオパール）の顕微鏡写真

P.L. 109 富田大泉坊A遺跡出土材の材組織の光学顕微鏡写真（1）

P.L. 110 富田大泉坊A遺跡出土材の材組織の光学顕微鏡写真（2）

P.L. 111 富田大泉坊A遺跡出土材の材組織の光学顕微鏡写真（3）

P.L. 112 富田大泉坊A遺跡出土材の材組織の光学顕微鏡写真（4）

P.L. 113 柳表面および断面とその反射電子像（組成像）

P.L. 114 富田大泉坊A遺跡・富田宮下遺跡の木材組織の光学顕微鏡写真

P.L. 115 富田大泉坊A遺跡から出土した大型植物遺体

〔補遺〕

P.L. 116 富田大泉坊A遺跡・富田大泉坊B遺跡

宮田・宮下遺跡出土遺物

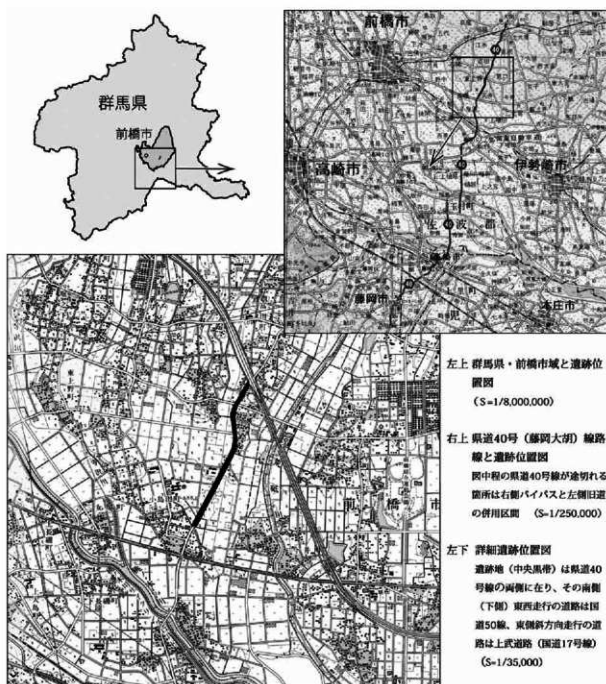
第1章 発掘調査のはじまりとその経過

第1節 調査にいたる経過

1 (主) 藤岡大胡線住宅市街地基礎整備事業

県道40号線（以下「藤岡大胡線」とする）は本県南部の藤岡市本郷と前橋市大胡町を結ぶ主要地方道路である。藤岡大胡線は全線押さえて交通量が多

く、県は予てより4車線化やバイパスの建設を進めているが、前橋市域に於いても通称高駒バイパス（高崎・駒形線）と重なる東善町の交差点から一般国道50号線と交差する小島田交差点の間は、既に片側



第1図 主要地方道藤岡大胡線と本遺跡群位置図

第1章 発掘調査のはじまりとその経緯

2車線の4車線道路として供用開始されている。

一方藤岡大胡線のうち一般国道50号線との交差点から県道76号線（主要地方道前橋西久保線、旧前橋赤堀線）との交差点以南の前橋市小島田町・富田町地域の2.4km区間は、路線西側のローズタウン住宅団地へのアクセス道路と位置付けられ乍ら、そもそも道幅が狭い上に、区間の中程は蛇行して見通しも悪く、加えて歩道もないなど通行に危険な状態にあった。このため群馬県土木整備局では小島田交差点から上武道路（国道17号線バイパス）との交差点までは片側2車線の4車線、以北富田町交差点までは片側1車線の2車線道路で何れも両側に歩道を伴う主要地方道藤岡大胡線住宅市街地基盤整備事業を計画し、平成20年度の完成を目指して平成14年度に当該事業に着手したのであった。

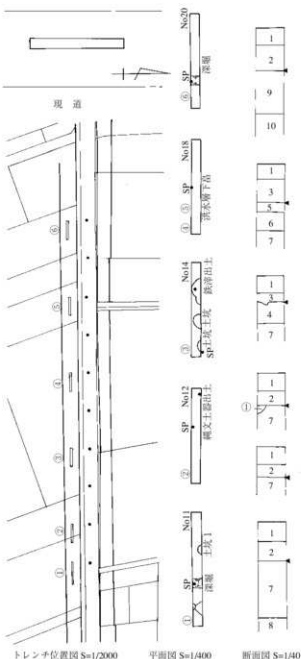
2 埋蔵文化財の調査にいたる経過

さて上述の（主）藤岡大胡線住宅市街地基盤整備事業をスタートさせた群馬県土木整備局前橋土木事務所（以下「前橋土木」とする）は、平成16年8月6日、群馬県教育委員会文化課（以下「文化課」とする）に対し、事業区域に対する試掘調査の実施を依頼した。これに対し文化課は同月19日にトレンチによる試掘調査を実施したが、その結果、土坑墓、中世皿を検出し、縄文土器・土師器・鉄滓といった出土を得たのである。文化課はこの試掘調査の成果と、事業地域の埋蔵文化財包蔵地に関する所見から本調査の必要があることを8月30日、前橋土木に回答し、併せて前橋市教育委員会に対してもその結果を通知している。

一方、文化課は翌9月1日、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（以下「事業団」とする）に当該区域の埋蔵文化財の発掘調査の委託方針を示し、同7日事業団はこれを了承。翌日前橋土木が事業団に埋蔵文化財の発掘調査事業を依頼し、同15日正式に委託が決して、事業団による本遺跡群の発掘調査が実施されることになったのである。尚、この時点から藤岡・大胡線東側は南から富田新井遺跡、富田

宮田遺跡、富田宮下遺跡、西側は富田大泉坊B遺跡、富田大泉坊A遺跡と命名されたのである。

尚、文化課は上記整備事業用地のうち、平成16年11月29日に、後の富田大泉坊B遺跡1区に対する試掘調査を実施し遺跡地に認定早速調査区に編入している。一方文化課は、平成17年7月6日には本遺跡群の北側、上武道路と県道76号線の間に試掘調査を施しているが、遺構、遺物を確認できず、発掘調査区域から除外している。



第2図 試掘調査の記録（抜粋）

第2節 発掘調査の経過

本報告書掲載遺跡は富田大泉坊A遺跡、富田大泉坊B遺跡、富田新井遺跡、富田宮田遺跡、富田宮下遺跡の5遺跡、計19調査区で、発掘調査は平成16年10月～翌17年5月、同年10月～平成18年3月、同年10～12月、平成19年4月～5月、平成20年1月～3月の4ヶ年度、6次に亘り、複数回調査が施されている調査区も少なくない。従って本項記載事項は本来多いのであるが、紙数に鑑みて、調査概要を次々ページの表1にまとめ、各遺跡の調査着手日等僅かなものを以下に記すこととした。

尚、調査期間中は図面・写真整理の基礎整理、撤収作業等を実施している。

[平成16年]

10月1日 1次調査開始。
27日 大泉坊B遺跡、3区表土掘削より本調査開始。(以下各遺跡調査概要は表1参照)

12月8日 新井遺跡、1区表土除去より本調査開始。
[平成17年]

1月28日 富田大泉坊B遺跡1次調査終了。
2月7日 富田大泉坊A遺跡、3区の表土除去より本調査開始。

27日 富田新井遺跡1次の調査終了。
3月28日 富田大泉坊A遺跡1次調査終了。

30日 1次調査完了。
31日 2次調査開始。
4月11日 富田大泉坊A遺跡、4区As-B下水田検出作業より作業再開。

5月19日 富田大泉坊A遺跡2次調査終了。
31日 2次調査完了。

10月3日 3次調査開始。
7日 富田大泉坊B遺跡2・3区の表土掘削作業より第3次調査開始。

13日 富田新井遺跡(1・2区)3次調査開始。
11月15日 富田宮田遺跡、1区より本調査着手。

18日 富田大泉坊A遺跡、2区表土掘削より3次調査開始。

12月1日 富田新井遺跡3次調査終了。

6日 富田大泉坊B遺跡3次調査終了。
12日 富田宮田遺跡3次調査終了。

[平成18年]

3月6日 富田大泉坊A遺跡3次調査終了。
31日 3次調査完了。

10月2日 4次調査開始。
10日 富田宮田遺跡1区、富田宮下遺跡1区の表土掘削より現地作業再開。

13日 富田大泉坊A遺跡6区表土掘削より4次調査開始。

11月16日 富田大泉坊B遺跡、2区表土掘削より4次調査開始。

22日 富田宮下遺跡、富田大泉坊B遺跡4次調査終了。

12月14日 富田大泉坊A遺跡4次調査終了。
21日 富田宮田遺跡4次調査終了。

31日 4次調査完了。

[平成19年]

4月2日 5次調査開始。
9日 富田大泉坊A遺跡、2区表土掘削開始。

10日 富田宮田遺跡、3区(調査段階では4区)表土掘削作業より第5次調査開始。

12日 富田宮下遺跡、1区表土掘削より第5次調査開始。

24日 富田宮下遺跡第5次分調査終了。
25日 富田宮田遺跡第5次分調査終了。

5月24日 富田大泉坊A遺跡第5次分調査終了。
31日 第5次調査完了。

[平成20年]

1月4日 6次調査開始。
10日 富田大泉坊A遺跡、7区表土掘削開始。

29日 富田宮下遺跡、2区表土掘削より6次調査開始。

2月1日 担当1名転出。
6日 富田宮下遺跡6次調査終了。

第1章 発掘調査のはじまりとその経緯

表1の1 調査経過一覧

地域	作業	平成16年			平成17年							平成18年				平成19年		平成20年						
		10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	10月	11月	12月	4月	5月	1月	2月	3月	
富田区	事前作業	■																						
	取戻作業																							
	表土原形																							
	遺構確認		■	■																				
富田区	1面原形																							
	2面原形																							
	フレ試験																							
	記録																							
大泉区	理め直し																							
	表土原形																							
	遺構確認																							
	1面原形																							
大泉区	2面原形																							
	フレ試験																							
	記録																							
	理め直し																							
坊田区	表土原形																							
	遺構確認																							
	1面原形																							
	2面原形																							
坊田区	フレ試験																							
	記録																							
	理め直し																							
	表土原形																							
井田区	遺構確認																							
	1面原形																							
	2面原形																							
	フレ試験																							
井田区	記録																							
	理め直し																							
	表土原形																							
	遺構確認																							
大泉区	1面原形																							
	2面原形																							
	フレ試験																							
	記録																							
大泉区	理め直し																							
	表土原形																							
	遺構確認																							
	1面原形																							
大泉区	2面原形																							
	フレ試験																							
	記録																							
	理め直し																							
大泉区	表土原形																							
	遺構確認																							
	1面原形																							
	2面原形																							
大泉区	フレ試験																							
	記録																							
	理め直し																							
	表土原形																							
大泉区	遺構確認																							
	1面原形																							
	2面原形																							
	記録																							
大泉区	理め直し																							
	表土原形																							
	遺構確認																							
	1面原形																							
大泉区	2面原形																							
	フレ試験																							
	記録																							
	理め直し																							

表1の2 調査経過一覧

遺跡区	年月作業	平成16年				平成17年							平成18年				平成19年		平成20年					
		10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	10月	11月	12月	4月	5月	1月	2月	3月	
4	表土掘削																							
	遺構確認																							
	1面掘削																							
	2面掘削																							
	3面掘削																							
	区																							
	記録																							
	現め直し																							
	表土掘削																							
	遺構確認																							
5	1面掘削																							
	2面掘削																							
	3面掘削																							
	プレ試験																							
	区																							
	記録																							
	現め直し																							
	表土掘削																							
	遺構確認																							
	6	1面掘削																						
2面掘削																								
3面掘削																								
4面掘削																								
5面掘削																								
プレ試験																								
区																								
記録																								
現め直し																								
表土掘削																								
7	下層掘下																							
	遺構確認																							
	遺構掘削																							
	プレ試験																							
	区																							
	記録																							
	現め直し																							
	表土掘削																							
	下層掘下																							
	1	表土掘削																						
遺構確認																								
1面掘削																								
2面掘削																								
3面掘削																								
4面掘削																								
5面掘削																								
プレ試験																								
区																								
記録																								
現め直し																								
2	表土掘削																							
	遺構確認																							
	1面掘削																							
	区																							
	記録																							
	現め直し																							
	表土掘削																							
	遺構確認																							
	1面掘削																							
	3	2面掘削																						
区																								
記録																								
現め直し																								
表土掘削																								
遺構確認																								
1面掘削																								
2面掘削																								
3面掘削																								
プレ試験																								
区																								
記録																								
現め直し																								
1	表土掘削																							
	遺構確認																							
	1面掘削																							
	2面掘削																							
	3面掘削																							
	プレ試験																							
	区																							
	記録																							
	現め直し																							
	2	表土掘削																						
遺構確認																								
記録																								
プレ試験																								
区																								
現め直し																								

15日 富田大泉坊B遺跡、4区表土掘削より6次調査開始。

3月11日 富田大泉坊B遺跡第6次分調査終了。

21日 富田大泉坊A遺跡第6次分調査終了。

31日 第6次調査完了。これにより富田新井遺跡4区の一部除き本事業発掘調査完了。

第3節 発掘調査の方法

1 遺跡の位置と調査区の位置

上述のように本遺跡群は富田大泉坊A遺跡、富田大泉坊B遺跡、富田新井遺跡、富田宮田遺跡、富田宮下遺跡の5遺跡に区分される。調査区は県道藤岡大胡線によって東西区切れ、その両側に位置している。(第3図)

その西側は南側を富田大泉坊B遺跡、北側を富田大泉坊A遺跡とするが、両遺跡は一般河川大泉坊川を境としている。調査区は第3図に示したように富田大泉坊B遺跡は南から1区～4区、富田大泉坊A遺跡は同じく1区～7区とするが、何れも調査区を分断する舗装道路(市道)によって区画される。

一方東側は南から富田新井遺跡、富田宮田遺跡、富田宮下遺跡が連なる。富田新井遺跡と富田宮田遺跡は一般河川大泉坊川を境としているが、富田宮田遺跡の北側で調査区が一旦途切れている。その北方に位置する富田宮下遺跡は国指定史跡女堀指定地の北側市道を南限としている。富田新井遺跡は南から1区～4区、富田宮田遺跡は同じく1区～3区に分かれ、調査区を分断する舗装道路(市道)によって区分される。富田宮下遺跡は南から1区・2区とするが、1区の北寄りには調査区外となっているため、1区と2区の間は連続していない。

尚、富田宮田遺跡4区は本来であれば3区として報告すべきであったが、平成18年度調査担当であ

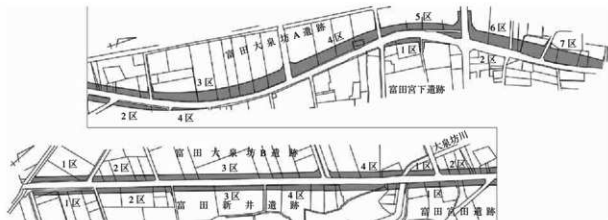
った筆者から平成19年度担当者への伝達を誤ったため、発掘調査4区としている。また区名称は算用数字によっているが、調査時点でローマ数字の誤用しているものもある。

2 調査グリッドの設定

本遺跡群に於いては1km四方を圍繞する大グリッドが設定されている。この1kmグリッドは国家座標 X=41000、Y=61000を基点としており、基点の北側及び西側の1km四方を圍繞するグリッドを1グリッドとしてその北に2・3グリッド、3グリッドの西側に4グリッドが設定されている。

そして各1kmグリッドの南東隅を基点として縦横10グリッドづつの100の100mグリッドが設定されている。100mグリッドは基点側を1グリッドとして、西側に向かって10グリッドまで、その北側は11～20グリッドまでというように10列100グリッドまで番号が振られている。

更に各100mグリッド内には縦横20グリッドづつ40の5mグリッドが設定されている。5mグリッドは100mグリッドの南東隅を基点としており、基点に接するグリッドはそれぞれa1グリッドと呼称される。グリッド番号は西に向かってA～T、北に向かって1から20のアルファベットと数字が当てられており、例えばD-12、或いは100mグ



第3図 藤岡大胡線と調査遺跡及び調査区

リッド番号と合わせて69-D-12というように表記される。

3 遺跡略号と遺構番号

本遺跡群5遺跡の遺跡略号は次のとおりである。

尚「F〇」藤岡大胡線を示す。

富田大泉坊A遺跡：FODA

富田大泉坊B遺跡：FODB

富田新井遺跡：FOA

富田宮田遺跡：FOM

富田宮下遺跡：FOS

また各遺構名称は遺跡毎、遺構毎に調査面とは関係なく通番で付されている。尚、富田大泉坊A遺跡6・7区及び富田大泉坊B遺跡4区では発掘調査段階では区名称或いは調査年度（西暦下位2桁使用）と遺構番号の間に「-」記号を挿入した仮番号を使用していた。整理段階では通番に改めているが、番号の対称は各遺構項目と遺物観察表で確認できるように記してある。

4 掘削と断面観察

- ① 表土及び調査面間の層の掘削は、調査の効率化を図るため掘削機械を使用した。

- ② 遺構の掘削は人力で行ったが水田面の表出等では一部機械掘削も併用した。
- ③ 遺構断面の観察は適宜行った。

5 記録

- ① 遺構などの記録は、測量と写真撮影によっている。
- ② このうち測量は航空写真測量と地上測量を併用して、適宜1/10、1/20、1/40、1/100、1/200縮尺の実測図を作成した。
- ③ 実測図には遺跡名、図名称・縮率・実測者・レベル高等を併記した。
- ④ 写真撮影はプロローニ及び35mmのモノクロフィルム、平成16年度は35mmカラーフィルム、平成17年度以降はデジタルカメラを用いて適宜行った。

6 出土遺物

- ① 出土遺物は出土位置を記録し、適宜写真撮影を行って取り上げ、遺構毎、種別毎に分別して収納ケースに保管した。
- ② 出土遺物の洗浄及び注記については、適宜或いは調査終了後委託して当該作業を実施した。

第4節 調査区における自然堆積層

本遺跡群各遺跡の立地は台地と低地部とに大別され、台地部は前調査区北寄りのローム層を基盤とする区域と中・南寄りのグライ化されたローム層を基盤とする区域に分けられる。土壌の堆積状態は、特に低地部に於いて地点々々で局所的な相違が認められるが、以下、その概観を述べようと思う。

ローム台地の残る区域では上位層が戦後の削平等によって失われ、ローム層の堆積を確認している。土壌はローム漸移層からローム層、ローム層中で明るい色調から暗い色調のものへと変化し、確認範囲の上位で浅間一板鼻褐色軽石（As-BP）、中上位で始良丹沢火山灰（AT）、下位で榛名一八崎軽石層（Hr

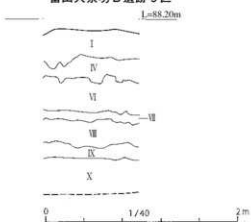
-HP、鹿沼軽石を疑う注記もあり）が確認され、中・後者の間には、赤城小沼ラブリ（AG-KLP）北橋スコリアといったテフラが観察された地点もある。ローム漸移層で縄文時代草創期・早期、以下は後期旧石器時代に相当する。尚風倒木痕の確認からかつては黒く土や低地部に見られるような比較的新しいテフラの堆積があったことも観察された。

一方、グライ化したロームの地域では浅間C軽石（As-C）混土層を確認しているが、その下には洪水層があり、総社軽石（As-Sj）を含む黄褐色土、縄文時代草創期の遺物包含層である暗褐色土、ローム層と続く土層群が見られる。しかしローム層の下は砂

富田大泉坊 A 遺跡 5 区



富田大泉坊 B 遺跡 3 区



(富田大泉坊 B 遺跡 3 区地層層)

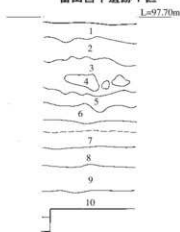
- | | |
|------------------------|-------------------------|
| I : 表土 | 5cm の円埋入。縄文時代草創期・早期層。 |
| IV : 暗褐色土 : As-C 混土。 | |
| VI : 灰黄色砂質土 : 洪水層。 | IX : 黄褐色土粘土 |
| VII : 黄褐色粘土 : As-Sj 層。 | X : 砂礫層 : 径 10mm 以下の円埋多 |
| VIII : 暗褐色土粘土 : 部分的に径 | く含む。 |

第 4 図 台地部分の基本土層

礫層となっていて、当該区域が更新世の終わり近くには低地であった可能性が窺われる。

一方低地部では地点によって異なるが、現耕土の下には近世・近代の耕作土、更に天仁元（1108）年噴出の浅間 B 軽石を包含する中世層があり、以下、浅間 B 軽石・火山灰（As-B）、5 世紀末頃の榛名ニッ岳火山灰（Hr-FA）、3 世紀末頃の浅間山 C 軽石（As-C）の堆積する相違があり、後者の上には As-C

富田宮下遺跡 1 区



(富田宮下遺跡 1 区ローム層)

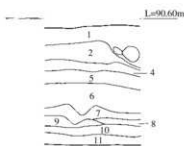
- 1 : 暗黄色ローム ; 漸移層のだがローム質強い。上位に黒赤土層出土。3mm 大の黄色軽石微量に混入。
- 2 : 黄色ローム ; 1 層より明るく比較的締まり硬い。下位から割片出土。2mm 大の黄色軽石僅かに混入。
- 3 : 明黄色ローム ; 2 層より明るくかなり締まる。全体に As-BP 多く含む特に下位は多量の軽石を含む。
- 4 : As-BP 層 ; 1 ~ 2mm の軽石からなる。ブロック状。
- 5 : 黄色ローム ; 締まり弱く軟らかい。AT 多く含む。下位から割片出土。
- 6 : 暗黄褐色ローム ; 5 層よりかなり暗く、硬く締まる。層の上位に AT の極大値包含がある。所謂暗色帯層。
- 7 : 暗褐色ローム ; 6 層より更に暗くよく締まる。AT 殆ど確認できない。
- 8 : 暗褐色ローム ; 7 層に近似するがやや明るい。
- 9 : 暗褐色ローム ; 8 層より暗く 7 層に近似。かなり硬く締まる。層下位は 10 層の軽石僅かに混入。
- 10 : 黄白色軽石層 ; 3 ~ 10mm 大の軽石の純層堆積。層厚 25 ~ 30cm。炭沼軽石か。

(富田大泉坊 A 遺跡 4 区地層層)

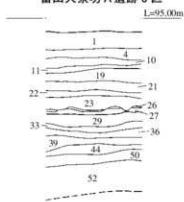
- I : 表土 ; 現耕作土。
- IIa : 鉄分沈積により褐色 (10YR4/4) を呈する。
- IIb : 黒褐色土 (10YR3/2) ; 多量の As-B 含む。
- IIc : 黒色土 (10YR2/1) ; 多量の As-BP を含む。鉄・マンガンの沈積少ない。
- III : As-BP。
- IV : Hr-FA (一次堆積層)。
- Va : 黒色粘質土 (2.5YR2/1) ; 黒泥土。多量の As-C と微量の Hr-FP を含む。
- Vb : 黒色粘質土 (2.5YR2/1) ; 黒泥土的。Va よりも多量の As-C 含む。
- VI : 黒色粘質土 (10YR2/1) と As-C の互層堆積層 ; As-C 粗砂 60% 含む。As-C は純層に近似するが、流水による二次堆積の可能性あり。下層には砂粒 (径 10mm) が堆積。
- VII : 黒色粘質土 (10YR2/1) 地山植物遺体有り。
- VIII : 灰褐色シルト質土 (10YR4/1)。
- IX : 黒褐色シルト質土 (10YR3/1)。

第 5 図の I 低地部分基本土層

富田宮田遺跡1区(中北部)



富田大泉坊A遺跡6区

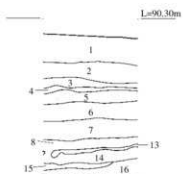


(富田大泉坊A遺跡6区堆積層)

- 1: 灰黄褐色土 (10YR5/2): 現耕土。As-A 混入。やや砂質。
- 4: 褐色土 (5YR5/1): As-A 少量混入。所々に酸化鉄付く。粘性やや欠。
- 10: 褐色土 (7.5YR6/1): As-A 少量混入。粘性ややあり。
- 11: 黄褐色土 (10YR7/8): 酸化鉄沈着層。As-A 少量混入。粘性あり。
- 19: 褐色土 (7.5YR6/1): ブロック状に As-B 混入し、ローム若干含み。酸化鉄やや多く沈着。粘性やや欠。
- 21: 19層に似るが酸化鉄粒状が少ない。
- 22: 褐色土 (7.5YR6/1): やや灰色掛かる。As-B 若干混入し、粘性ややあり。
- 23: 褐色色砂質土 (5YR5-6/1): As-B 混入。酸化鉄やや多く入り赤褐色呈す箇所あり。
- 26: As-B 層: 部分的に灰色の火山灰混入。
- 27: 黒褐色土 (10YR3/1): As-B 水田耕土。粘性ややあり。部分的に下位層小ブロック混入。
- 29: におい褐色土 (10YR5/3): 大粒の軽石 (As-C か) 混入。植物痕に沿って鉄分沈着。33: におい黄褐色土 (10YR5/3) に黒褐色土粘質土 (10YR2/1) 入るブロック混入: 粒径大きな軽石混入。粘性あり。
- 36: 粒径大きな軽石と川砂層: 黄褐色砂質土 (10YR7/3) 等混入。
- 39: 明灰褐色細砂層 (7.5YR7/2): 川砂層。大粒の軽石、におい黄褐色砂質土 (10YR7/3) 等混入。
- 44: 黒色粘質土 (10YR2/1): 一部黒褐色 (7.5YR3/1) 呈す。
- 50: 褐色土 (10YR5/1) と灰黄褐色土 (10YR5/2) の混土: As-C 多量に含む。粒径の大きなものを含む。
- 52: 黒色粘質土 (N2/1)。

第5図の2 低地部分基本土層

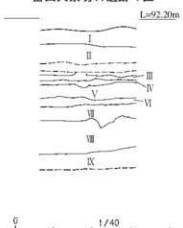
富田宮田遺跡1区(中南部)



(富田宮田遺跡1区堆積層)

- 1: 灰褐色土: 現代の盛土。ビニール・雑草含む。
- 2: 暗褐色土: 田耕作土。混入物少なく、粘性弱くバサつく。
- 3: 暗褐色土: As-B 軽石全体下位はほど多く混入。2層より暗い。
- 4: 赤灰褐色軽石層: As-B 純層。層厚 5~10cm 程度。北側台地上では確認できない。部分的に火山灰も確認される。
- 5: 黒色土: As-B 下木田耕土。上位ほど黒く粘質。
- 6: 灰褐色土: 水田下のクワイ化層。やや砂質気味で粘性強い。全体に酸化傾向。
- 7: 暗灰褐色土: 6層より暗く、粘性かなり強い。砂質弱く、混入物少ない。
- 8: 黒褐色粘質土: 混入物少なく、かなり粘質。
- 9: 黒褐色土: As-C 多く混入する。下位ほど混入量多い。
- 10: 白・赤褐色軽石層: As-C 軽石の純層。部分的に良好な堆積。
- 11: 黒色土: 混入物なく、低地部ではかなり粘質となる。
- 13: 黄白色粘質土: He-FA。南部に有。シルト質で2~4cm厚。
- 14: 黒色粘質土: 上面は凹凸ある水田面。混入物なく、粘質強い。
- 15: 灰色砂層: きめ細かい砂層。
- 16: 黒褐色粘質土: 粘質かなり強い。

富田大泉坊A遺跡4区



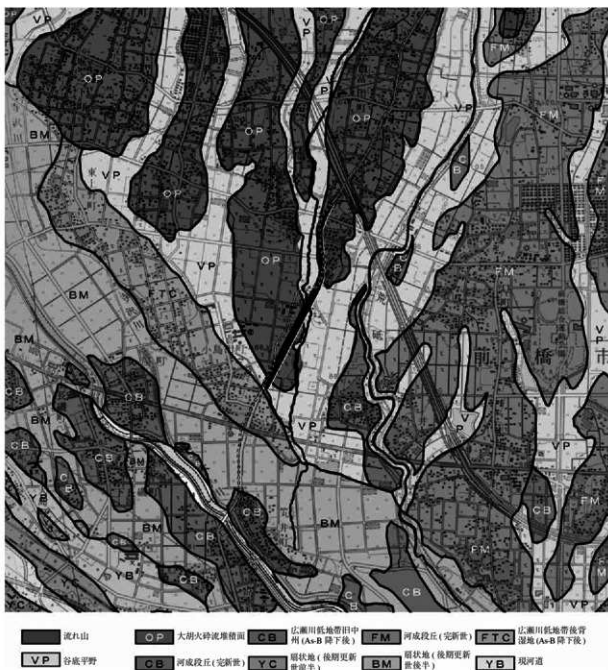
を包含する古墳時代前期層の全部若しくは幾つかを確認している。土壌の色調は上位層では灰色掛かり特に平安時代以前の層では黒色粘質土が目立つ。しかし低地部では流水の痕跡も散見され、砂礫層や灰褐色土、黒色粘質土が複雑に堆積し、その堆積状態は一様ではない。

第2章 遺跡群を取り巻く環境

第1節 地理的・地質的環境

本遺跡群は群馬県庁の東方5.7km付近の前橋市東部、赤城火山の裾野が、15世紀以前の利根川の名残である広瀬川と桃ノ木川によって形成される広瀬桃ノ木低地帯に接する付近に位置している。

赤城山麓は大小の河川によって谷地形が形成されるが、本遺跡群付近では大胡火砕流による台地を東から一級河川荒砥川、一般河川大泉坊川、大泉坊川の支流の上大日沼の用水路沿いに在った旧流路が谷



第6図 遺跡群周辺の地理及び地質図 (調査区域は中央黒帯部分、調査区域付近を走る点線は藤岡大胡線旧道)

底低地を形成している。本遺跡群のうち富田大泉坊B遺跡と富田新井遺跡は大泉坊川右岸の台地部に当たり、富田新井遺跡南端部は上大日沼の用水路付近に形成された低地部に当たる。また富田宮田遺跡1区北端から3区と富田宮下遺跡、富田大泉坊A遺跡1・2区と5区東端部、6区の大半北部と7区は大泉坊川左岸の台地上に立地し、富田宮田遺跡1区中南部と富田大泉坊A遺跡3区北半と4区と5区の過半、6区南西部は大泉坊川による低地部に当たる。

本遺跡群付近は田園地帯であるが、北西のローズ

第2節 歴史的環境

前述のように本遺跡付近は赤城山麓の末端近くに在り、台地部と低地部とに大別される。このうち台地部では旧石器から中・近世に至る遺跡群が、また低地部では弥生時代から古墳時代に移る時期以降の水田址を中心とする遺跡群が広く分布している。その分布状況と概要については第7図と表2（の1～3）に示したことが以下に若干を述べたいと思う。

時代別に見ると、旧石器の遺跡は近年の発掘調査で見られるようになったが、今回調査した区域を含む富田宮下遺跡でA T包含の暗色帯付近で旧石器が確認され、荒砥北三木堂遺跡での調査例がある。

縄文時代では本遺跡群南方の小島田八日市遺跡で草創期の遺物包含層が確認され、近隣住民の証言などから本遺跡の東方にもそうした分布が見込まれるなど、付近には縄文時代の古い時期の遺物包含層の広がりが窺われる。また今井白山遺跡等で縄文時代中期の住居も確認されている。

弥生時代の集落は荒口前原遺跡等の台地縁辺部で集落遺跡も確認されているが、本報告書に掲載した富田大泉坊A遺跡で低地部での遺物の出土も確認される。

古墳時代前期になると、集落址の分布は濃密になる。富田宮下遺跡、富田細田遺跡、荒砥宮田遺跡等の小河川沿い、或いは合流点の谷頭に立地する遺跡で集落の展開が窺われる。また二の宮千足遺跡等

タウン等の新興住宅街も散見される。また本遺跡群南部には群馬県立前橋東高等学校或いはJ A前橋が在設されている。一方、本遺跡群南方には一般国道50号線が東西に走り、これと交差するように県道藤岡大胡線が南南西―北北東方向に走っている。また本遺跡群北端を画する一般国道17号線のバイパスである上武道路が南南東から北北西に向かって走っており、今日的では自動車交通の要衝ともなっている。

の沖積地の遺跡ではこれを支えた生産址が確認されている。中期に於いては本遺跡東方の荒砥荒子遺跡で豪族居館が確認されている。また本遺跡に報告した富田宮下遺跡周辺にも当該期の集落が展開している。後期に入ってもこうした状況は継続し、荒砥源訪西遺跡等低地部の遺跡では古墳時代を通しての生産址の分布が確認されている。一方、赤城山麓側の台地上には後期の古墳群を中心に古墳の分布が広く見られる。

律令期に入っても集落の分布状況は更に継続、拡大する。荒砥大日塚遺跡等で台地部内側での集落の展開が見られる。また富田細田遺跡等多くの遺跡でAs-Bに被覆された水田址が確認されている。また荒砥宮田遺跡等ではAs-B水田下に洪水層に被覆された水田址が見付かっている。

天仁元（1108）年の浅間山の噴火によるAs-B軽石・火山灰は、こうした律令期の耕作地を壊滅させた。その後12世紀中葉頃から武士団を中心とした勢力による耕地の復旧が行われるが、その一つである未完の用水路女堀（一部国指定史跡）が、本遺跡群を横切って東西に貫通している。本遺跡群南方の国道50号線の南には中世の幹線道路であるあづま道が通過している。また近隣には大胡城の支城で齋藤氏の居城である今井城があり、小島田八日市遺跡等では中世の屋敷遺構が散見される。また富田宮下

第2章 遺跡を取り巻く環境

遺跡の今次調査区域の東には寺院の伝承が残る。

近世の遺跡は現在の集落に重複していて明瞭ではない。尚、現広瀬川から現在地への利根川の変流は

近世初頭段階では完了していないが、沖積地への集落展開はそれ以降のことである。

(事業団：(財)群馬県歴史文化財調査事業団 前橋市史：前橋市史第1巻 古墳総覧；上毛古墳総覧 中世城館：群馬県の中世城館)

表 2-1

No.	前橋市番号	遺跡名	時代							調査期	概要	関連文献
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世			
1		富田新井遺跡		○		○	○	○		平成 16～18年度	本書掲載	
2		富田大泉坊B遺跡		○		○	○	○		平成 16～19年度	本書掲載	
3		富田大泉坊A遺跡		○		○	○	○		平成 16～19年度	本書掲載	
4		富田宮田遺跡		○		○	○	○		平成 16～19年度	本書掲載	
5		富田宮下遺跡	○	○		○	○	○		平成 18～19年度	本書掲載	
6	447	東前田北遺跡				○				昭和 60年	古住	県調査会機関報
7	467	昆布特戸遺跡								昭和 61年	堀立	事業団年報
8	286	中富田高石遺跡				○					現存	
9	270	丸山遺跡		○							現存	
10	469	北原遺跡				○				昭和 61年	古住、円田繁	事業団年報



第7図 周辺遺跡分布図 (調査区域は中央黒帯。黒丸等は古墳)

(事業団) (財) 群馬県歴史文化財調査事業団 前橋市史・前橋市史
第1巻 古墳総覧・上毛古墳総覧 中世城館・群馬史の中世城館

表 2-2

No.	前橋市 番号	遺跡名	時代							調査附	概要	関連文献
			旧	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世			
11	284	第328号御殿山古墳				○					酒流	
12	449	新山遺跡								昭和60年	古墳、方形周溝墓	照調査会概観
13	658	上藤谷遺跡							○			
14	455	前山遺跡				○				昭和61年	縄土坑、古溝	調査情報報告書
15	244	大久保遺跡					○			昭和27年度、昭和63年	奈良居跡、須惠器窯、	前橋市史
16	242	中橋谷遺跡								昭和41、62年	酒流	前橋市史
17	424	柳久保遺跡	○			○			○	昭和58～62年	旧石器、古平住、古墳、水田、	調査情報報告書、概観
18	657	荒砥諏訪遺跡				○	○	○				
19	657	荒砥諏訪遺跡				○	○	○				
20	276	諏訪西遺跡				○	○			昭和31、58年	古住居跡、現存	前橋市史
21	417	荒砥諏訪西遺跡				○	○	○		昭和58年	古奈平住、古墳、水田	事業団概観
22	273	大道古墳									酒流	
23	275	第329号小坂古墳									酒流	
24	274	第330号小坂古墳									酒流	
25	272	荒砥宮田遺跡				○	○			昭和30年度	古住居跡	前橋市史第1巻
26	416	荒砥宮田遺跡	○	○		○	○	○		昭和58年	縄古奈平住、方型墓	事業団報告書
27	285	赤城神社遺跡										
28	280	前田遺跡								昭和32年度	古住居跡、酒流	前橋市史
29	331	荒川小塚				○				昭和31年度	円墳、"安政4年発掘、説、	前橋市史、事業団報告書
30	389	荒砥前田遺跡								昭和56年	古水田、B水田、堀立、溝	
31	282	第333号古墳				○					酒流	
32	656	荒川前原遺跡										
33	243	下藤谷遺跡				○				昭和62年	柳久保遺跡群に同じ	
34	659	柳久保水田跡										
35	245	須無遺跡								昭和62年	現存、柳久保遺跡群に含む	
36	429	須無遺跡				○	○	○		昭和59年	赤古平住	照調査会概観
37	255	下柳谷遺跡				○				昭和57年	現存	
38	243	下藤谷遺跡								昭和62年	柳久保遺跡群に同じ	
39	370	樋谷遺跡					○	○	○	昭和55年	古・奈・平住	
40	271	前原遺跡				○						
41	333	荒川前原遺跡				○				昭和31年度、昭和44年	弥生住居跡	前橋市史
42	387	荒砥北原遺跡				○	○	○		昭和56年	縄奈平住、古墳、方形周溝墓	
43	260	今井城										
44	390	荒砥北三木堂遺跡	○	○		○	○	○		昭和56年	旧石器、縄古奈平住、古墳	報告書
45	259	荒砥三木堂遺跡				○				昭和56年	現存	
46	190	大日塚				○					現存	
47	388	荒砥大日塚遺跡				○	○	○		昭和56年	古・奈・平住、B水田、女堀	概観
48	294	女堀跡										
49		女堀										
50	258	道上遺跡				○				平成3年	一部酒流	
51	191	谷地遺跡				○				昭和56年	国指定史跡	
52	192	洗橋遺跡				○					現存	
53	377	荒砥洗橋遺跡				○	○	○		昭和55年	古・奈・平住、B水田	報告書
54	381	荒砥宮西遺跡				○	○	○		昭和55年	古～平住、土坑、溝	報告書
56	380	荒砥天之宮遺跡				○	○	○		昭和55年	古・奈・平住、土坑、水田・堀	報告書
57	463	一之宮千足遺跡				○		○		昭和61年	縄土、奈平住、土坑、水田	事業団年報
58	376	宮川遺跡								昭和55年	古・奈住・古墳、B水田、	報告書
59	186	千足遺跡				○					現存	
60	548	中原遺跡				○	○	○		平成4年	古儀伏遺構、奈平住、平安水田	報告書
61	375	荒砥島原遺跡				○	○	○		昭和55年	赤・古・奈・平住、B水田	報告書
62	478	宮原遺跡				○	○	○		昭和62年	古墳、旧河川	市教委報告書
63	390	荒砥北三木堂遺跡	○	○		○	○	○		昭和56年	旧石器、縄古奈平住、古墳	報告書
64	259	荒砥三木堂遺跡				○				昭和56年	現存	
66	261	今井神社古墳				○				昭和55年	古墳、周堀、袖輪	報告書
67	318	今井B号墳				○				昭和23年	調査、円墳、直刀	古墳総覧、前橋市史

第2章 遺跡を取り巻く環境

(事業団：(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 前橋市史：前橋市史第1巻 古墳総覧；上毛古墳総覧 中世城跡：群馬県の中世城跡)

表 2-3

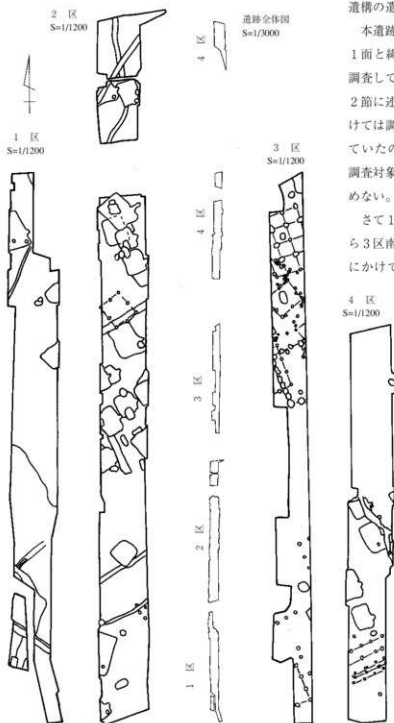
No.	前橋市 番号	遺跡名	時 代								調査期	概要	関連文献
			古墳	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世			
68	319	今井 A 古墳				○					昭和 23 年	円墳、耳環	古墳総覧、前橋市史、事業団報告書
69	385	今井神社古墳群				○					昭和 56 年	古墳	報告書
71	584	河田遺跡				○	○				平成 7 年	古・奈・平住	報告書
72	652	木身遺跡				○	○						
73	292	大泉坊遺跡				○						現存	
74	756	江木吹地遺跡				○	○				平成 17 年試掘	指定地外に女瀬	
75	371	富田宮下遺跡				○	○	○			昭和 55 年	古・奈・平住、寺跡、溝	報告書
76	655	富田細田遺跡				○	○	○					
77	290	栗原遺跡				○					昭和 55 年		
78	653	富田東曲輪遺跡				○	○	○				現存	
79	287	高石遺跡				○						消滅	
80	288	大塚古墳				○							
81	291	西原遺跡				○						現存	
82	297	竈竈 347 号墳				○						消滅	
83	296	竈竈 348 号墳				○						消滅	
84	726	富田下大日遺跡				○	○	○			平成 12、13 年度		
85	726	富田下大日遺跡				○	○	○			平成 12、14 年度		
86	440	豊野遺跡				○	○	○			昭和 60 年	古奈平住、方周墓	県企業局報告書
87	712	堤沼下遺跡				○	○	○			平成 11 年度	水田	
88	530	沼西遺跡				○	○	○			平成 2 年	平住、奈住、溝	市教委報告書
89	74	正円寺古墳				○					昭和 32 年度	前方後円・埴輪・土刀	古墳総覧、前橋市史
90	563	観之下女瀬遺跡						○			平成 6 年	平女瀬跡、現存	報告書
91	168	万福寺遺跡										現存	
92	692	下長磯城							○				前橋市史、中世城跡
93	463	二之宮宇子遺跡				○	○	○			昭和 61 年	縄土、奈平住、土坑、水田	事業団年報
94	323	竈口大道古墳				○	○				昭和 26 年度	円墳、横穴式、両輪型、消滅	前橋市史
95	277	諏訪遺跡									昭和 58 年	現存	
96	418	竈竈諏訪遺跡				○	○	○			昭和 58 年	方周墓、竈、奈平溝、	事業団概報
97	283	第 332 号古墳				○						消滅	
98	281	第 334 号権現山古墳				○						消滅	
99	279	大道古墳 B				○						消滅	
100	278	大道古墳 A				○						消滅	
101	766	二之宮熊谷遺跡						○					
102	524	今井白山遺跡				○	○	○			平成元年	古奈平住、縄敷石柱	事業団年報
103	316	荒井八日市遺跡				○	○	○			昭和 2 年度	敷石住居跡	城南地区の文化財
104	336	木瀬村 10 号墳				○					昭和 32 年度		
105		小島田供養碑							○			仁治元 (1240) 年の記念銘	市指定重要文化財
106	553	小島田八日市遺跡				○		○	○		平成 4 年	縄早期土器、中近世館跡、井戸、土坑	報告書
108	167	木瀬 7 号墳				○						現存	
109	166	木瀬 6 号墳				○						現存	
110	651	桂堂 70 号墳				○						消滅	
111	650	桂堂 69 号墳				○						消滅	
112	650	桂堂 69 号墳				○						消滅	
113	300	大塚古墳				○						消滅	
114	561	荒井中屋敷遺跡				○	○	○			平成 5 年	奈平住、中世館、上に市指定文化財【富田の宝塔】	報告書
115	299	少将塚古墳				○							
116	677	あづま道遺跡				○	○	○					
117	464	二之宮浅橋遺跡				○	○	○			昭和 61 年度		報告書
118	465	二之宮谷地遺跡				○	○	○			昭和 61 年度	奈良・平安御井、As-B 下木田	報告書
119	466	今井道上道下遺跡				○	○	○	○		昭和 61 年度	平安小殿治、中・近世道	報告書
120		富田西原遺跡	○			○			○			旧石器、As-B 下木田	
121		富田高石遺跡				○	○	○	○		平成 11～14 年度	前方後方型方形形器遺跡	報告書
122		富田津田遺跡				○	○	○	○		平成 12～14 年度	平安須志器室、As-B 下水田	
123		富田下大日遺跡				○	○	○			平成 12～13 年度	縄文住居	
124	522	野中天神遺跡				○	○	○			平成 10～14 年度		報告書

第3章 富田新井遺跡で発見された遺構と遺物

第1節 1面の遺構と遺物

本遺跡は南部の1区南寄りが大泉坊川の支流と目される旧河道、4区北端が大泉坊川沿いの低地に

当たる以外、殆どの区域は大泉坊川右岸の台地部に位置している。本遺跡は全体に後世の削平が進み、遺構の遺存状態は良好とは言えない。



第8図 富田新井遺跡1面(左から、1区、2区、遺跡全体、3区、4区)

本遺跡では古墳時代以降の遺構面である1面と縄文時代包含層である2面を確認、調査しているが、2面については後述の第2節に述べる。尚、4区中部から北部にかけては調査当初より調査対象区域に含まれていたのであるが、平成20年4月段階で調査対象区域から外されたため本書には含めない。

さて1面では2区中北部を中心に1区から3区南端部、及び3区北部から4区南部にかけて律令期の集落のものを中心とした遺構が集中的に分布していた。確認、調査した遺構は堅穴住居33軒、掘立柱建物9棟、溝9条、井戸4基、土坑33基、ピット13基であった。また遺物も律令期所産のものを中心に多数出土している。尚、後世の使用の可能性がない明らかな縄文時代の遺物については2面出土の遺物と併せて後述の第2節に報告する。

また1区南端部の低地に掛かる一画ではAs-B埋設の水田遺構が確認された。一方4区南部北寄りの一画と4区北端部に於いては後世の削平或いは大泉坊川の浸食によって削り取られ、遺構を確認することはできなかった。

1号住居 (第9・10図, P. 2・19)

概要 本住居は2区の中程に位置しているが、南東半部が調査区外に出ていて住居全体を調査することはできなかった。

遺物 土師器杯 (2)・甕片を中心に土師器碗 (1)、須恵器蓋・坏 (3~5)・甕 (6・7)、古墳時代前・中期の土師器片、石製紡錘車 (8)、台石 (9・10)、

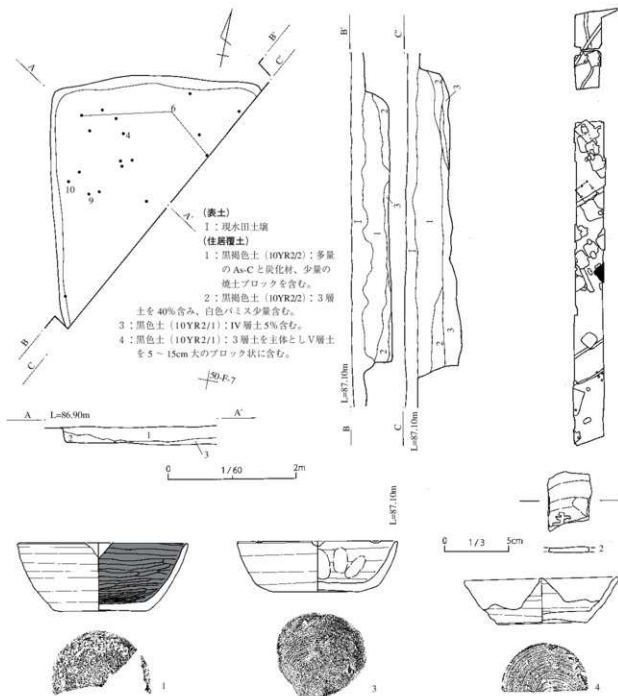
頁岩等の剥片などの出土遺物が見られた。尚、土師器杯 (2) には「土」とも読める墨書がある。

時期 本住居は出土遺物から推して概ね9世紀前半期の所産と判断される。

規模 残径：400×332cm 深さ46cm

(床下土坑1) 径：97×84cm 深さ：59cm

(床下土坑2) 径：(108)×86cm 深さ：47cm



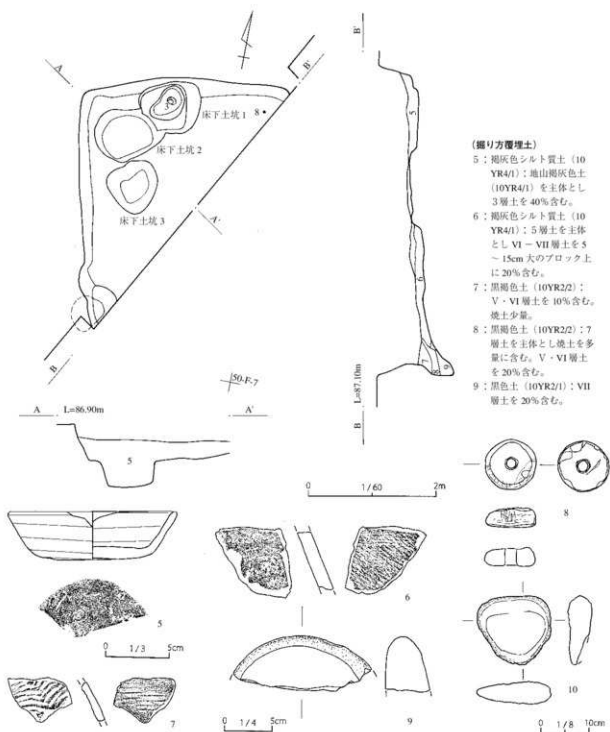
第9図 1号住居と出土遺物 (その1)

(床下土坑3) 径: 79 × 82cm 深さ: 42cm

構造 本住居は恐らくその半分ほどを調査できたに過ぎなかったと想定されるため全容は詳らかにできなかったが、プランは方形または長方形を呈するものと思慮される。

本住居は床下土坑を伴う掘り方を有し、これを褐灰色シルト質土・黒褐色土等で埋戻して床面を作っている。

尚、床面、掘り方面に於いても、竈、貯蔵穴、柱穴等を確認することはできなかった。



(掘り方覆埋土)

- 5: 褐灰色シルト質土 (10 YR4/1); 堆山褐色土 (10YR4/1) を主体とし 3層土を 40% 含む。
- 6: 褐灰色シルト質土 (10 YR4/1); 5層土を主体とし VI-VII 層土を 5 ~ 15cm 大のブロック土に 20% 含む。
- 7: 黒褐色土 (10YR2/2); V-VI 層土を 10% 含む。焼土少量。
- 8: 黒褐色土 (10YR2/2); 7層土を主体とし焼土を多量に含む。V-VI 層土を 20% 含む。
- 9: 黒色土 (10YR2/1); VII 層土を 20% 含む。

第10図 1号住居掘り方と出土遺物 (その2)

2号住居 (第11～13図、P.L.2・19)

概要 本住居は2区の中程に位置するが、住居北西隅部は調査区外に出ているため調査できなかった。

新旧の関係は不明だが12号住居と重複する。また1号溝に切られ、一方4号土坑を切っている。

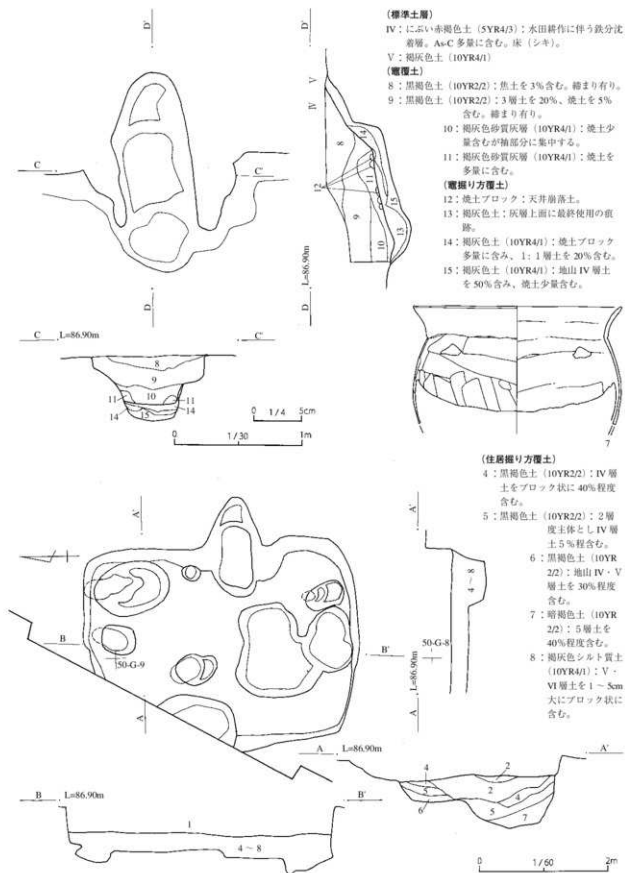
遺物 土師器の坏 (1～6)・甕 (7) を中心に、須恵器の坏 (8～11)・碗、古墳時代前・中期の土師器台付甕等の土師器片、砥石 (12)、頁岩等の薄片などが出土。土師器坏 (1) には「田」字、(3) には一筆、須恵器坏 (11) には「得」字の墨書



(住居覆土)

- 1: 黒褐色土 (10YR2/2) と1層 (現地表土) の1:1の混土。中量のAs-C (か) 含む。しまり弱。粘性は中程度。
- 2: 黒褐色土 (10YR2/2) : IV層ブロックが10%混入。As-C (か) と焼土粒少量含む。しまり弱。粘性は中程度。
- 2': 2層土に多量の焼土含む。
- 3: 黒褐色土 (10YR2/2) : 2層土を主体とし褐色土 (10YR4/4) を40%程度ブロック状に含む。焼土少量含む。

第11図 2号住居と出土遺物 (その1)



第12図 2号住居竪、住居掘り方と出土遺物 (その2)

第3章 富田新井遺跡で発見された遺構と遺物



第13図 2号住居の出土遺物 (その3)

が、(6) には「日」字の刻書が施されていた。

時期 出土遺物から8世紀後半の所産と見られる。

規模 径：438×(356)cm 深さ：48cm

(竈) 幅：128cm 奥行き：116cm

左袖 幅：32cm 長さ：74cm

右袖 幅：51cm 長さ：51cm

燃焼部 径：47×70cm 深さ：6cm

煙道 下幅：33cm 長さ：36cm

掘り方径：61×110cm 深さ：18cm

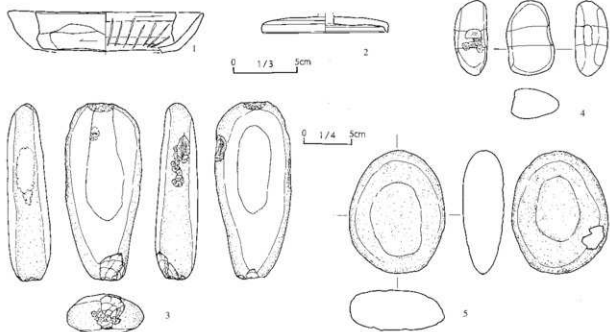
(貯蔵穴) 径：120×84cm 深さ：(41)cm

構造 本住居は横長の隅丸長方形プランを呈する。

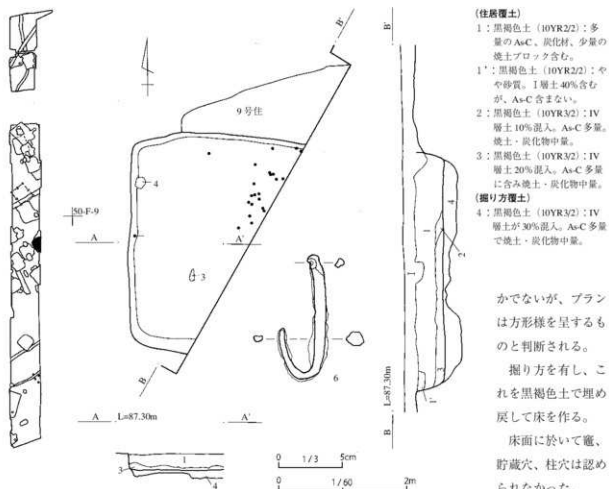
20cm 前後の深さを持つ土坑状の掘り込みを伴う掘り方を有し、これを褐灰色シルト質土で埋め戻して床面を作る。

竈は東壁中央やや南寄りに作られ、壁面を跨いで長円形プランの掘り方を掘削し、これを褐灰色土等で埋め戻して燃焼面を作っている。燃焼面両側には掘り残しによる袖が設けられているが、天井部の構造は確認できなかった。

貯蔵穴は床面に於いては確認されなかったが、掘り方面の竈左側、住居北東隅部に確認された。下位が袋状を成すが、掘り過ぎの可能性も考慮される。柱穴は認められなかった。



第14図 3号住居出土遺物



第15図 3号住居

3号住居 (第14・15図、P.L.3・19)

概要 本住居も2区中程に位置しているが、住居の南東側が調査区外に出ており、調査することができなかった。

本住居は9号住居と重複するが本住居の方が新しい。また12号住居とも重複するが新旧関係は特定できていない。

遺物 土師器坏 (1)・甕片を中心に須恵器蓋 (2)・坏或いは碗・長頸壺、僅かだが古墳時代前・中期の土師器片、打製石斧の未成品 (J89)、敲石 (3)、台石 (5)、こも編み石 (4) の出土が見られた。

時期 図示できるような出土遺物が少ないため明確ではないが、概ね8世紀後半期の所産ではないかと思慮される。

規模 径:(280)×(352)cm 深さ:47cm

構造 住居全体を調査できなかったため内容は詳ら

4号住居 (第16～18図、P.L.3・19・20)

概要 本住居も2区中程に位置するが、西半部は11号住居に切られて失われている。

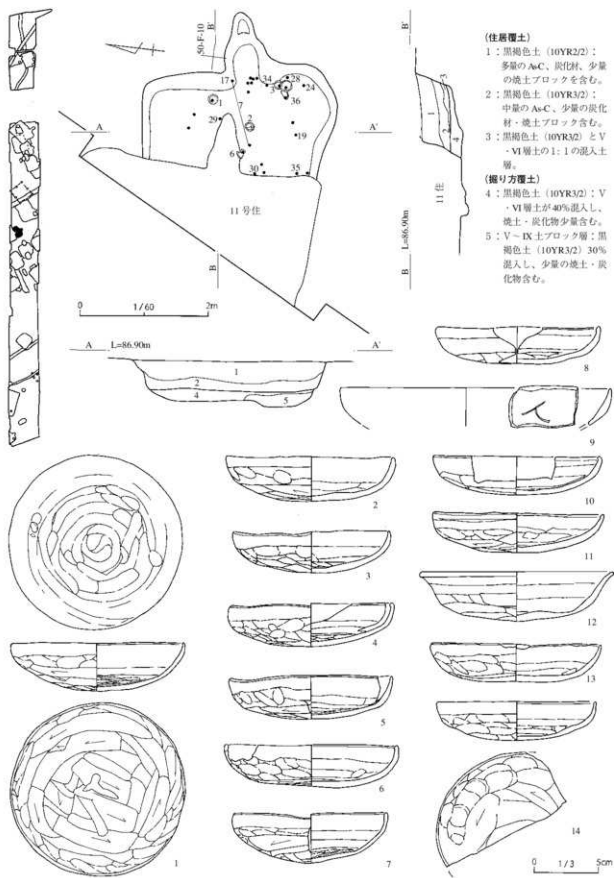
本住居は焼失住居と認識される。また掘り方面の状況から所謂お掃除住居 (大塚昌彦 2003) と判断されるもので、途中段階で焼却処分を伴う建替えの行われたことが窺われる。

遺物 本住居の出土遺物は多く、土師器の坏 (1～22) と古墳時代所産のものを含む甕 (25～29)、特に後者を中心に土師器盤 (23・24)、量は少ないが須恵器の蓋 (30・31)・坏 (32～35)・皿 (36)・甕或いは古墳時代前・中期の土師器片、竈構築材の破片 (37)、こも編み石へ転用されたものを含む磨石 (38～40)、頁岩等の薄片が見られた。高、土師器坏 (1) は「十」字、(18) には「山」字の墨書、(9) には「人」字の刻書が施されていた。

かでないが、プランは方形様を呈するものと判断される。

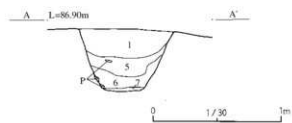
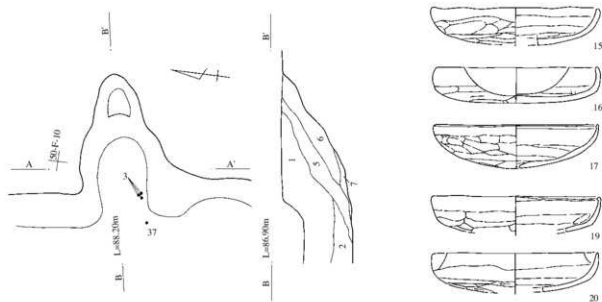
掘り方を有し、これを黒褐色土で埋め戻して床を作る。

床面に於いて竈、貯蔵穴、柱穴は認められなかった。



第16図 4号住居と出土遺物 (その1)

第1節 1面の遺構と遺物

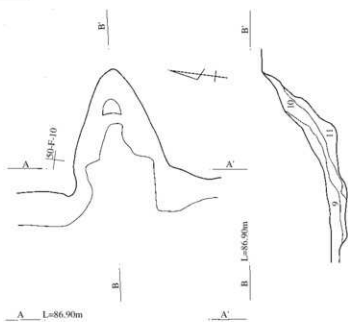
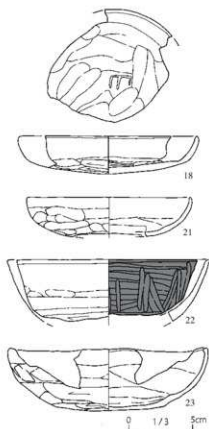


(住居覆土)

- 1：黒褐色土 (10YR2/2)；I層土 20%混入し、白色バミス中量含む。
2：黒褐色土 (10YR3/1)；IV層土を 40%含む。

(甕覆土)

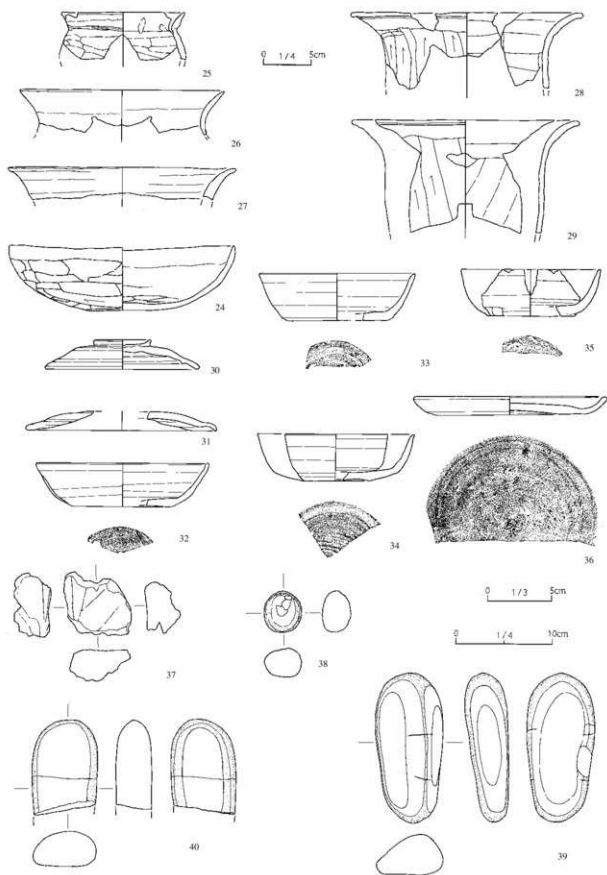
- 5：黒褐色土 (10YR3/1)；褐灰色土 (10YR4/1、V層) を 20%、焼土少量含む。竈構築材V層に類似。
6：V層土ブロックと焼土の 1：1 の混土層；天井崩落土の下位部分。
7：灰層；暗褐色土 (10YR2/4) を 30%、焼土を中量含む。



(甕掘り方覆土)

- 8：V・VI層土の混土；焼土 20%混入。
9：褐灰色土 (10YR4/1)；黒褐色土 (10YR3/1) を 30%、焼土を少量含む。
10：焼土；炭化物 20%含む。
11：VI層土；V・VII層土 20%混入。竈構築粘質土。

第17図 4号住居と出土遺物 (その2)



第18図 4号住居出土遺物 (その3)

時期 出土遺物から推して8世紀中頃の所産と判断される。

規模 径：308×(181)cm 深さ：47cm

(竈) 幅：115cm 奥行：123cm

燃焼部 径：49×36cm 深さ：0cm

煙道 下幅：14cm 長さ：70cm

掘り方 径：(58)×(60)cm 深さ：6cm

構造 本住居は西半が調査できなかったため全容は詳らかでないが、隅丸方形様のプランを呈し、南東隅部が若干膨らんでいる。

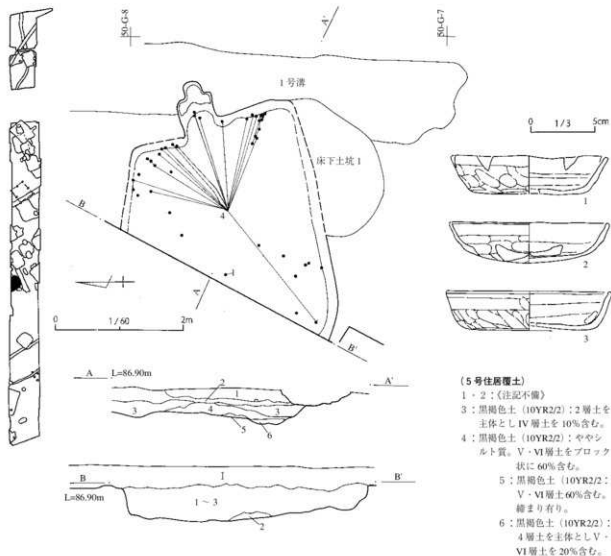
掘り方を有し、これを黒褐色土等で埋め戻して床を作る。

竈は東壁中央僅かに南寄りに設けられている。壁面を掘り込むように掘り方を掘削し、これを褐灰色土等で埋め戻して燃焼面を作られる。尚、掘り方底面には竈構築材である褐灰色土・灰黄褐色土の混土を貼り付けている。袖は壊されていたが、燃焼部両側壁際に掘り残しの袖の残穴が確認された。

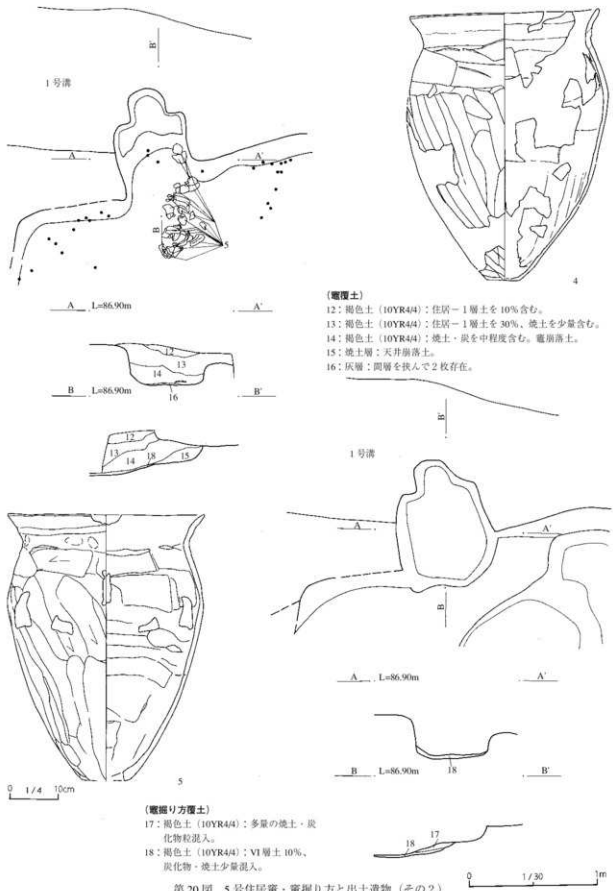
尚、床面に於いて貯蔵穴、柱穴は確認することはできなかった。

5号住居 (第19～21図、P.L.4・5・20)

概要 本住居も2区中程に位置するが、北西部が調査区外に伸びていて調査できなかった。



第19図 5号住居と出土遺物 (その1)



第20図 5号住居竈・電掘り方と出土遺物 (その2)

本住居は10号住居を切っており、竈付近を1号溝に切られている。

遺物 土師器の坏(1~3)・甕(4・5)を中心に、数は多くないが、須恵器の蓋・坏か碗・甕・長頸壺片や古墳時代前・前期の土師器片、凹石(103)、チャート片等の出土が見られる。

時期 出土遺物から推して9世紀前半期の所産と思慮される。

規模 径：(319)×(490)cm

深さ：56cm

(竈)幅：120cm

奥行き：95cm

右袖 幅：36cm

長さ：18cm

燃烧部 径：48×39cm

深さ：3cm

煙道 下幅：23cm

長さ：42cm

掘り方 径：79×81cm

深さ：(5)cm

(床下土坑1) 径：(65)×95cm 深さ：12cm

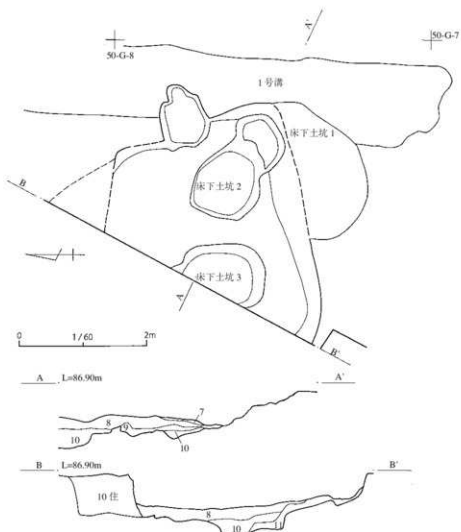
(床下土坑2) 径：106×134cm 深さ：50cm

(床下土坑3) 径：(150)×100cm 深さ：21cm

構造 本住居は北東部が調査区外に在るため、全容をつまびらかにすることはできなかったが、プランは概ね縦長の長方形様を呈する。

土坑状の掘り込みを伴う掘り方を有しており、これを地山V・VI層土や黒色土・黒褐色土等で埋め戻して床面を作り出している。尚、床下土坑のうち竈右側手前の土坑2は所謂床下粘土坑の可能性を有する。

竈は東壁中央やや北寄りに作られている。やはり壁面を跨いで掘削される浅い掘り方を有しており、



(住居掘り方層土)

7：黒褐色土(10YR2/2)；VI層土を70%含む。

8：V・VI層土ブロック(5~20mm)層；黒色土(10YR1/2)を40%含む。

9：黒褐色土(10YR2/2)；VI・VII層土を5~10cm大のブロック状に40%含む。

10：黒色土(10YR1/2)；VII層土を10~20cm大のブロック状に10%含む。

11：V~VII層土ブロック層；黒褐色土(10YR3/2)20%混入。炭化物微量を含む。

第21図 5号住居掘り方

これを焼土を含む褐色土等で埋め戻して燃烧面を作り出している。住居壁面に右袖の掘り残しの痕跡が見られるものの袖・天井は壊されていて詳細は不明である。

尚、床面に於いては貯蔵穴・柱穴を確認することはできなかったが、床下南東隅に確認された土坑1が貯蔵穴の可能性を有する。

第3章 富田新井遺跡で発見された遺構と遺物



第22図 6号住居と出土遺物

6号住居 (第22図、P.L.4・20・21)

概要 本住居は1区のやや北寄りに位置するが、東半部が調査区外に在って全体は調査できなかった。

調査範囲の中程を地割れが南北に縦走しており、東側の方が一段高くなっている。

遺物 椀・高台・器台・埴・埴 (1)・台付甕 (2)・甕・

壺 (3)・埴 (4) 等の何れも古式土師器に属する土師器片等の出土が見られた。

時期 出土遺物から推して4世紀後半の所産と判断される。

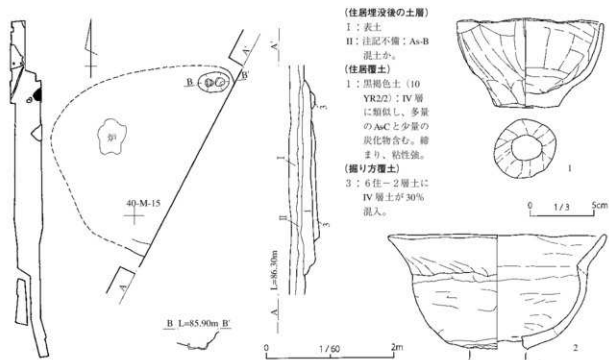
規模 径: 312 × (361)cm
 深さ: 32cm

構造 本住居も全体を調査できなかったため全容は不明だが、プランは概ね台形

様を呈すると想定される。

記録が充分ではなかったため明瞭ではないが、周溝状の掘り方を有しており、これを暗褐色土等で埋め戻して床面を作り出している。

調査範囲に於いて炉、貯蔵穴、柱穴等を確認することはできなかった。



第23図 7号住居と出土遺物

7号住居 (第23図、P L 4・21)

概要 本住居も1区やや北寄りに位置している。南東側が調査区外に在って全体を調査できず、遺存状態もさして良好ではなかった。

他の遺構との重複は見られなかった。

遺物 土師器碗(1)や高坏(2)と僅かな古墳時代前・中期の土師器片の出土が見られた。

時期 出土遺物から推して4世紀後半の所産と判断される。

規模 径：(305)×(287)cm 深さ：20cm

(炉) 径：54×44cm 深さ：0cm

構造 本住居も全体を調査できず、また遺存状態が良好ではないため遺構の状態は詳らかでなく、プランも明瞭ではないが残存状態から隅丸長方形、或いは長円形を呈するものと推定される。

浅い掘り方を有し、暗褐色土等で埋戻して床面を形成しているが、調査範囲の西寄りに地床炉が形成されている。

柱穴・貯蔵穴は確認されなかったが、調査範囲の北端に、土師器1・2が出土している径48×32cmの浅い窪みが残されている。

(住居埋没後の土層)

I：表土
II：注記不備；As-B
混土か。

(住居覆土)

1：黒褐色土(10
YR2/2)；IV層
に類似し、多量
のAsCと少量の
炭化物含む。締
まり、粘性強。

(掘り方覆土)

3：6住-2層土に
IV層土が30%
混入。

8号住居 (第24～26図、P L 4・5・21)

概要 本住居は2区中北部に位置する。

住居全体が調査区内に入っているが、竈右袖付近が1号井戸によって切られている。

遺物 土師器甕(13・14)片を中心に。土師器の坏(1～12)・台付甕、須恵器の蓋(15)・坏・高台付碗(16)・甕、古墳時代前・中期の壺(17)などの土師器片、石鏃(J76)や打製石斧の未製品(J87)、石製紡錘車(18)、未製品らしき石製模造品(19)、刀子(20)などの出土があった。高、土師器坏(2)には「卜」字の墨書が見られた。

時期 出土遺物から推して概ね8世紀後半の所産と判断される。

規模 径：554×437cm 深さ：45cm

(竈) 幅：(88)cm 奥行：114cm

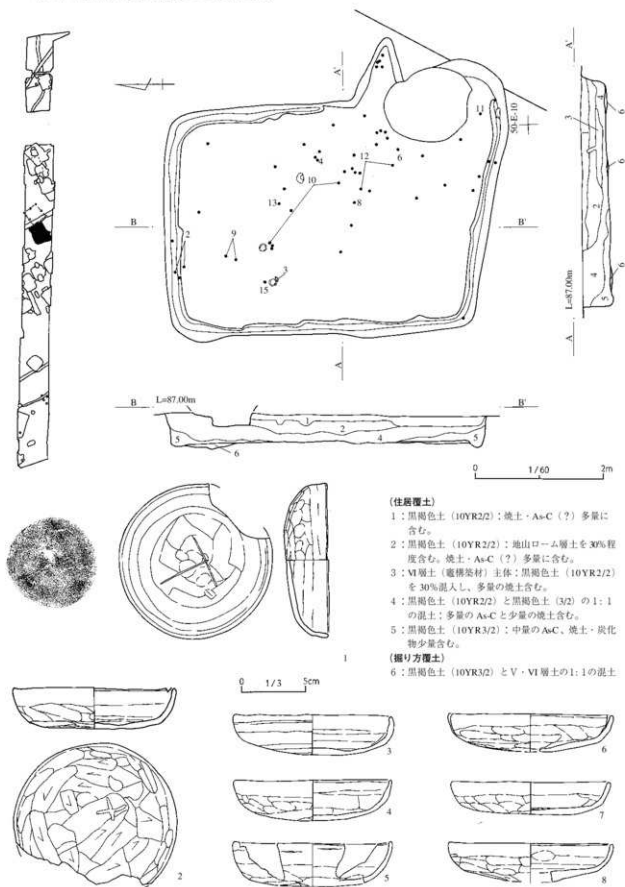
燃焼部 径：(63)×132cm 深さ：8cm

煙道 下幅：26cm 長さ：27cm

掘り方 径：(54)×135cm 深さ：26cm

構造 本住居は横長の隅丸長方形のプランを呈するが、竈右側が若干奥側に影らむ。

非常に浅い掘り方を有し、これを黒褐色土や褐灰



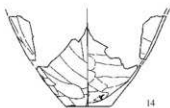
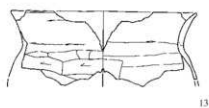
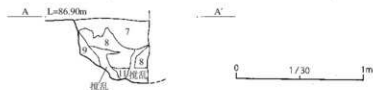
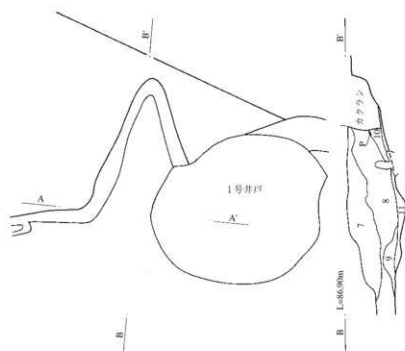
(住居覆土)

- 1 : 黒褐色土 (10YR2/2) ; 焼土・As-C (?) 多量に含む。
- 2 : 黒褐色土 (10YR2/2) ; 地山ローム層土を30%程度含む。焼土・As-C (?) 多量に含む。
- 3 : VI層土 (磁橋染材) 主体 ; 黒褐色土 (10YR2/2) を30%混入し、多量の焼土含む。
- 4 : 黒褐色土 (10YR2/2) と黒褐色土 (3/2) の1:1の混土 ; 多量のAs-Cと少量の焼土含む。
- 5 : 黒褐色土 (10YR3/2) ; 中量のAs-C、焼土・炭化物少量含む。
- 6 : 黒褐色土 (10YR3/2) とV・VI層土の1:1の混土

(掘り方覆土)

第24図 8号住居と出土遺物 (その1)

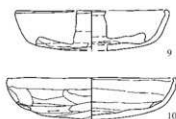
第1節 1面の遺構と遺物



16

第25図 8号住居の出土遺物(その2)

色土で埋め戻して床を作っている。高、竈右側手前はたたき状になっており、焚口手前では焼土・灰を



(竈裡土)

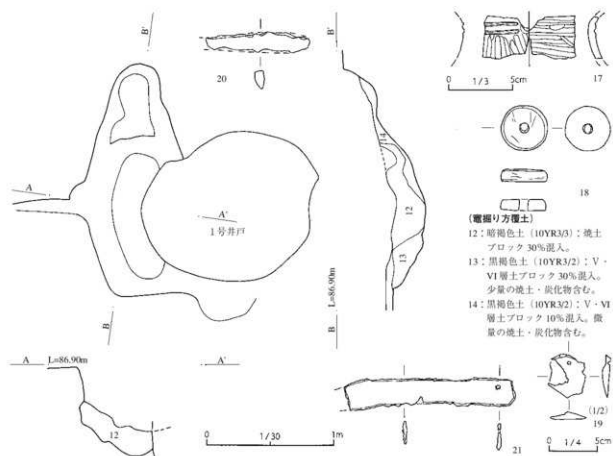
- 7: 黒褐色土 (10YR2/2); 焼土・白色パミスを中程度含む。
- 8: V層の褐灰色土 (10YR4/1) による竈構築材 5-15cm 大のブロックで80%含む。焼土を中量含む。
- 9: VI層土主体; 黒褐色土 (10YR3/2) 30%混入。多量焼土含む。
- 10: 竈構築材 (2層)の天井部崩落土。被熱により焼土化。
- 11: 灰層



サンドイッチ状に挟んで十数層に分層可能な状態であった。

竈は東壁やや南寄りに設けている。壁面を跨いで楕円形プランの掘り方を掘削し、これを黒褐色土や褐灰色土で埋め戻して燃焼面を作っているが、袖と天井は破壊され形状は把握できなかった。竈構築材は地山褐灰色土 (VI層土) を中心に用いている。

高、貯藏穴、柱穴は見られなかった。



第26図 8号住居竈掘り方と出土遺物 (その3)

9号住居 (第27～30図、P.L.5・21・22)

概要 本住居は2区中程に位置しているが、過半が3号住居に切られており、南東側が調査区外に出ていて一部を調査できたに過ぎなかった。

遺物 土師器の坏 (1～4)・甕 (6) を中心に、土師器碗 (5)、須恵器の坏・横瓶 (8)・甕 (7) や長頸壺、古墳時代前・中期の土師器片、こも編み石への転用の見られる敲石 (9) や磨石 (10～16)、こも編み石 (17～21)、石製台座 (22)、不明石製品 (23)、頁岩剥片などの出土が見られた。

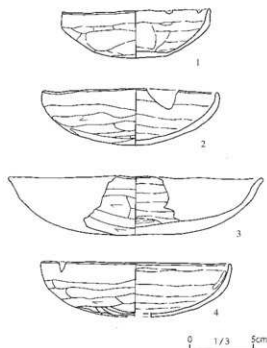
時期 出土遺物から推して、概ね8世紀前半期の所産と認められる。

規模 径:(280)×(352)cm 深さ:47cm

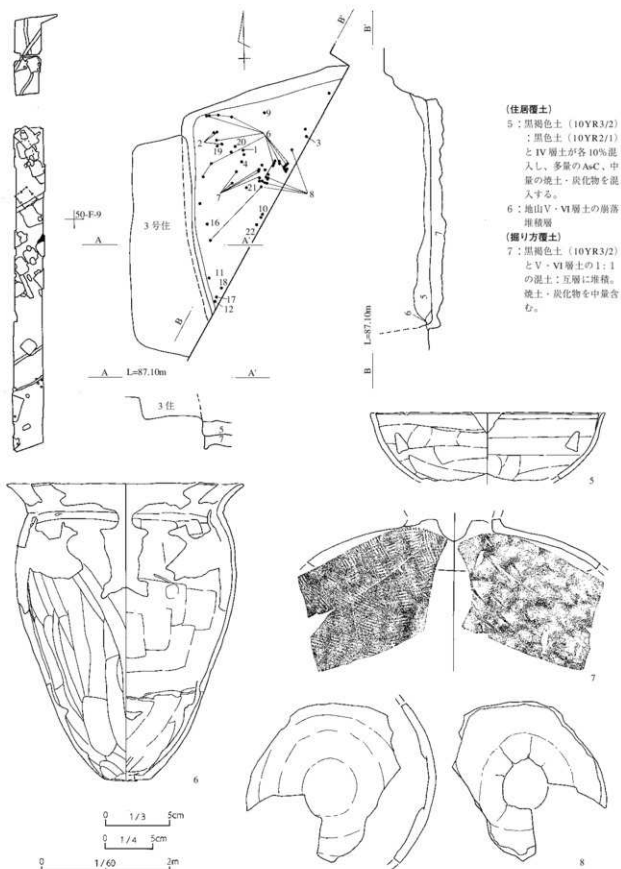
構造 本住居は一部を調査したに過ぎなかったが、プランは方形様を呈するものと判断される。

掘り方を有し、これを黒褐色土や褐色土で埋め戻して床を作っている。

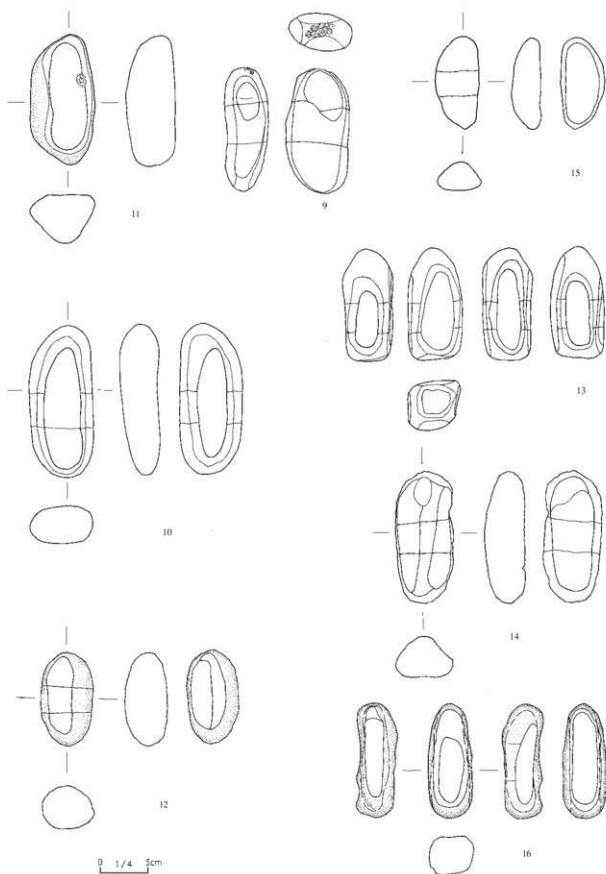
尚、竈、貯蔵穴、柱穴は認められなかった。



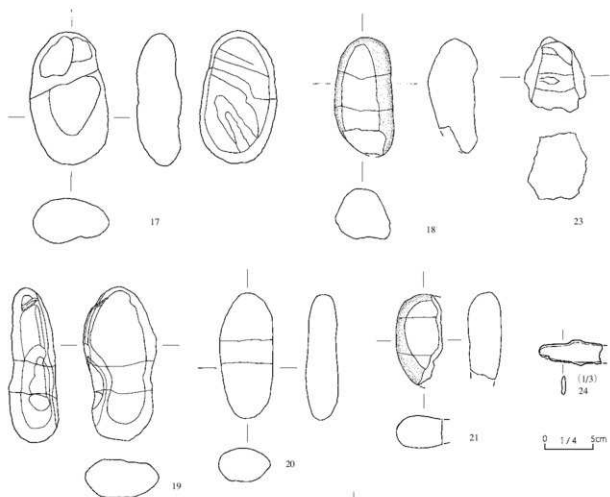
第27図 9号住居の出土遺物 (その1)



第28図 9号住居と出土遺物 (その2)



第29図 9号住居の出土遺物（その3）



10号住居 (第31図、P.L.4)

概要 本住居も2区中程に位置するが、過半が調査区外に在り、また5号住居と重複してこれに切られているため一部を調査できずに過ぎなかった。

遺物 得られなかった。

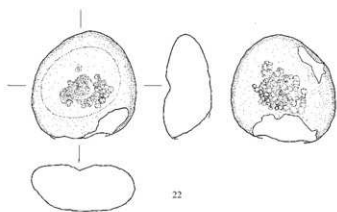
時期 5号住居との重複関係から9世紀前半以前と認識されるだけで、時期の特定には至らなかった。

規模 径：(125)×(91)cm

深さ：72cm

構造 本住居は一部を調査できずに過ぎず、プランも確認できなかった。

詳細は不明だが、掘り方を有しており、これをV～VII層土や黒褐色土等で埋め戻して床面を形成している。



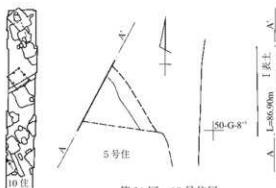
第30図9号住居の出土遺物 (その4)

11号住居 (第32～34図、P.L.5・22)

概要 本住居も2区中程に位置するが、東部が確認されたに過ぎず、過半は調査区外に在る。

本住居は4号住居と重複し、これを切っている。

遺物 土師器坏 (1～3)・甕 (5) を中心に、須恵器坏 (4) などや古墳時代前・中期の土師器片の出



第31図 10号住居

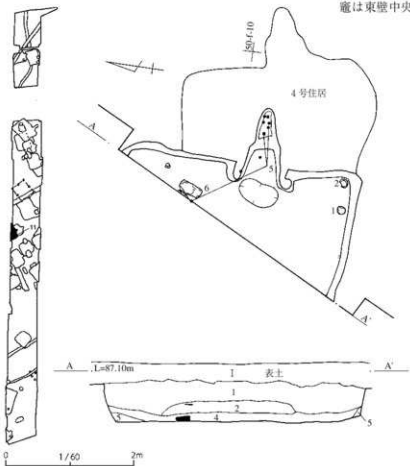
土が見られ、竈天井石(6)や頁岩等の剥片類や炭化物も採取された。土師器坏(1)には「上」字、(2)には「丁」字の墨書が認められた。

時期 出土遺物から推して概ね8世紀後半期の所産と認識される。

規模 径:(386)×(207)cm 深さ:53cm

(竈)幅:108cm 奥行:128cm

左袖 幅:33cm 長さ:33cm



第32図 11号住居と出土遺物(その1)

(住居覆土)

a: 黒褐色土(10YR2/2):5号住居一層に類似。色調がやや暗く、V層土1%、多量のAs-C、少量の炭化物・焼土を含む。

b: 黒褐色土(10YR3/2):V層土ブロック5%、As-C・炭化物・焼土少量含む。

(掘り方覆土)

c: 黒褐色土(10YR3/2)とV-VII層土の1:1の混土;炭化物少量。

d: V-VIII層土ブロックを主体に黒褐色土(10YR3/2)が30%混入。

e: 0 1/60 2m

右袖 幅:30cm 長さ:33cm

燃烧部 径:65×106cm 深さ:12cm

煙道 下幅:22cm 長さ:64cm

掘り方 径:56×(86)cm 深さ:9cm

構造 本住居は東端部を調査したに過ぎなかったため全容は詳らかでないが、方形様のプランを呈するものと判断される。

土坑状の掘り込みを複数有する掘り方を有し、これを黒褐色土等で埋め戻して床を作っている。

竈は東壁中央やや南寄りに設置されるが、壁面を



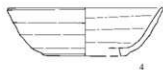
(住居覆土)

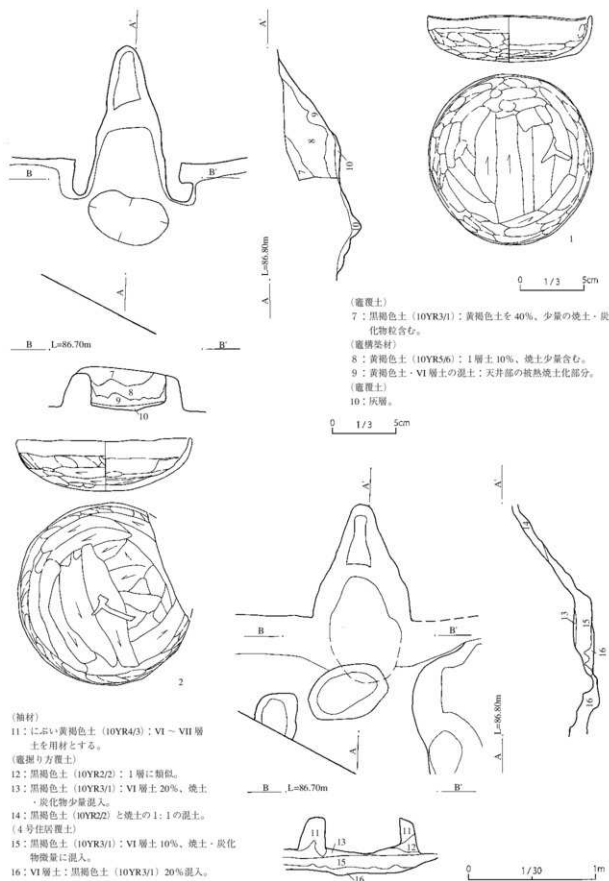
1: 黒褐色土(10YR2/2):多量のAs-C、炭化材、少量の焼土ブロックを含む。

2: 黒褐色土(10YR2/2):1層土主体とし、褐色土(10YR4/4)を3%含む。

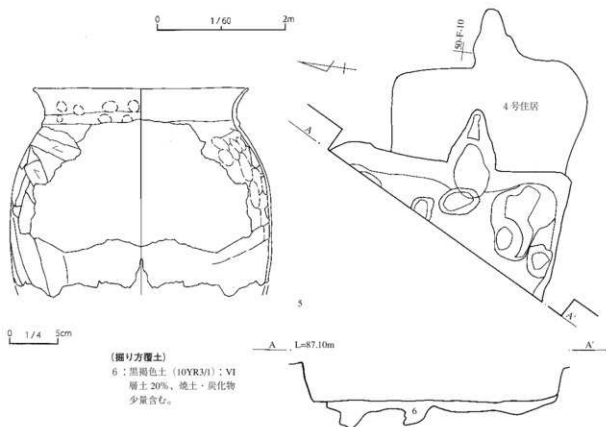
4: 黒褐色土(10YR2/2):地山VI層土を5%、焼土を極く少量(1%程度)含む。

5: 黒褐色土(10YR2/2):ややシルト質。地山VI層土を40%、焼土を少量含む。





第33図 11号住居竈及び電掘り方と出土遺物 (その2)

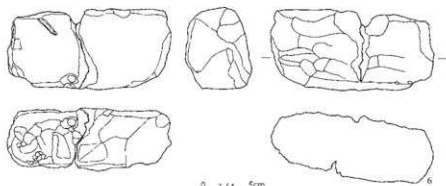


跨いで楕円形プランの掘り方を掘削し、これを黒褐色土等で埋め戻して焼成面を作っている。焼成面の両側は掘り方を若干盛り上げた上に、にぶい黄褐色土で袖を作っている。天井は崩れていてその構造は不明であるが、黄褐色土を主体とした土を用材として使用している。

床面で貯蔵穴、柱穴は確認されなかったが、掘り方面に見られる竈右側手前の窪みがこれに該当する可能性を有する。

12号住居 (第35・36図、P.L.6・22・23)

概要 本住居も2区中程に位置する。一部を他遺構と重複して確認できない部分もあったが、ほぼ全体を調査することができた。

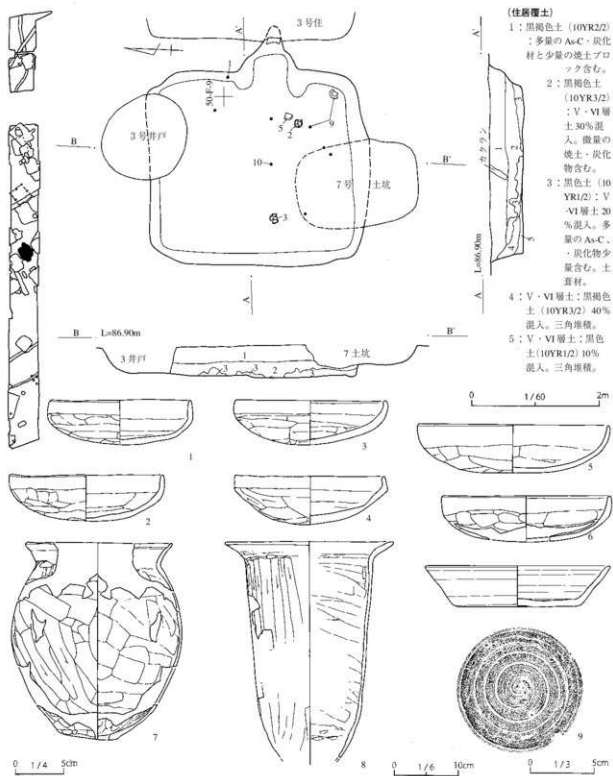


第34図 11号住居掘り方と出土遺物(その3)

北壁で3号井戸、南壁で7号土坑と重複しており何れにも切られている。また2・3号住居とも重複するが新旧関係は特定できていない。

遺物 出土遺物は多くはなかったが、土師器環(1～6)・甕(8)を中心に、土師器の胴張甕(7)、須恵器の蓋・坏(9)・甕、或いは古墳時代前・中期の土師器片やこも編み石(10)等の出土が見られた。

時期 出土遺物から推して8世紀中頃の所産と判断される。



第35図 12号住居と出土遺物 (その1)

規模 径:(315)×308cm 深さ:50cm

(竈) 幅:114cm 奥行き:(96)cm

左袖 幅:30cm 長さ:29cm

右袖 幅:30cm 長さ:44cm

燃焼部 径:52×56cm 深さ:6cm

煙道 下幅:21cm 長さ:(10)cm

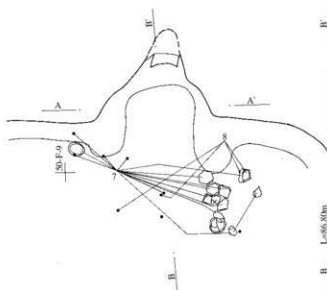
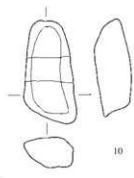
掘り方 径:55×52cm 深さ:17cm

(貯蔵穴) 径:57×48cm 深さ:14cm

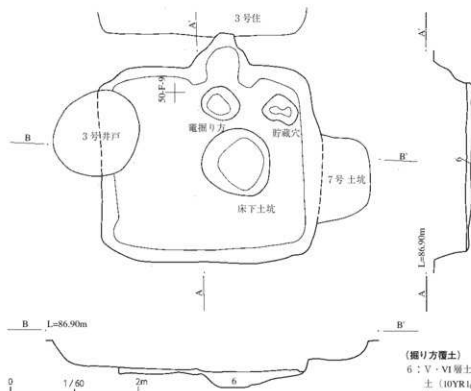
第3章 富田新井遺跡で発見された遺構と遺物

(電覆土)

- 7: 黒褐色土 (10YR2/2): VIII層土
20%混入。焼土ブロック2%、多
量のA+C含む。
8: 焼土ブロック層: V層土40%。電
覆基材の残骸。
9: VIII層土: 電覆基材。崩落により
焼土ブロック10%含む。
10: VIII層土と焼土ブロックの1:1
の混土層: 天井部崩落層。
11: 灰層
(電掘り方覆土)
12: V・VI層土: 焼土・炭化物10%
混入。



- 1: 黒褐色土 (10YR2/2): 多量のA+C
炭化材と少量の焼土ブロック含む。
2: 黒褐色土 (10YR3/2): V・VI層土
30%混入。微量の焼土・炭化物含
む。



られているが、
プランは横長の
隅丸方形を呈し
ている。

掘り方を有し
ており、これを
地山褐色土等
で埋め戻して床
面を作り出して
いる。尚、掘り
方面中央やや南
寄りに在る床下
土坑は所謂床下
粘土坑と認識さ
れる。

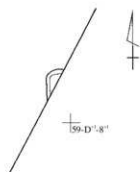
竈は東壁中央
の若干南寄りに
設置される。一
部が深く掘られ

第36図 12号住居電及び住居掘り方と出土遺物(その2)

(床下土坑) 径: 107 × 107cm 深さ: 21cm

構造 本住居は両側の一部を3号井戸と7号溝に切

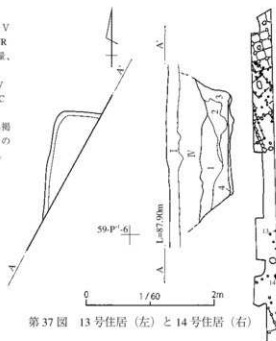
る(径60 × 54cm) 楕円形プランの掘り方を有し、
これを焼土を含む地山の褐色土で埋め戻して燃焼

**(住居覆土)**

- 1: 黒褐色土 (10YR3/2): V層土 10%, 黒色土 (10YR 2/1) 2% 混入。As-C 中量、の炭化物微量を含む。
- 2: 黒褐色土 (10YR3/2): IV層土に類似。多量のAs-C 混入。
- 3: 黒色土 (10YR2/1) と黒褐色土 (10YR3/2) の 1:1 の混土: 少量のAs-C 混入。

(掘り方覆土)

- 4: VI層土: 黒褐色土 (10YR3/2) 10% 混入。



第37図 13号住居 (左) と14号住居 (右)

面を作っている。熱焼部両側には掘り残しによる袖が残る。天井部は崩落しているが、オーブ黒色土 (VIII層土) で構築されていて、焼土化も認められる。

床面に於いては柱穴、貯蔵穴は認められなかったが、掘り方面の竈手前右側に貯蔵穴が確認された。確認面からの掘削深度は14cmであるが、床面からの掘削深度は20cmである。

13号住居 (第37図)

概要 本住居は3区南部に在り、殆どが東側調査区外に出ていて北西隅部の一部を確認できたに過ぎなかった。

遺物 僅かに8世紀の土師器坏片1点の出土が見られたに過ぎず、これも図示すべき遺存状態ではなかった。

時期 奈良時代以降の所産である可能性があるが、時期を特定することはできなかった。

規模 径: (49) × (39)cm 深さ: (32)cm

構造 本住居はその僅かな部分を調査できたに過ぎず、詳細を述べることはできない。

高、プランは方形様を呈するものと推測される。

14号住居 (第37図、P.L.6)

概要 本住居は3区南部に在り、殆どが調査区外に出ていて北西部を一部調査できたに過ぎなかった。

他遺構との重複は認められなかった。

遺物 掘り方から須恵器甕の口縁片1点が出土した

に過ぎなかった。

時期 本住居の時期は特定できなかった。

規模 径: (176) × (81)cm 深さ: 40cm

(周溝) 幅: 10cm 深さ: 5cm

構造 本住居はその一部を調査したに過ぎなかったため詳細は不詳だが、プランは方形様を呈するものと判断される。

掘り方を有し、これを褐色土等で埋め戻して床面を形成している。

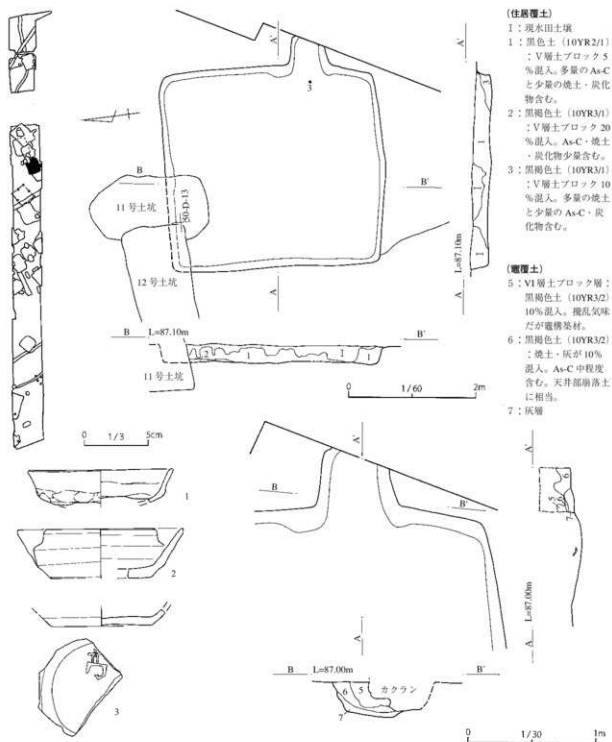
図化はできなかったが、床面には周溝が廻っている。また調査範囲に於いて、柱穴、貯蔵穴を確認することはできなかった。

15号住居 (第38・39図、P.L.6・23)

概要 本住居は2区中北部に位置する。住居本体は全体を調査することができたが、竈塚道部は調査区外に出ていて調査することができなかった。

南に19号住居と重複してこれを切り、北に11号土坑と重複してこれに切られている。高、北西隅部で12号土坑と重複するが新旧関係は特定できなかった。

遺物 量的には多くなかったが、本住居からは土師器坏 (I)・Ⅱ、特に後者を中心とした遺物の出土が



第38図 15号住居及び窯と出土遺物

あり、土師器台付甕、須恵器坏(2・3)或いは碗・甕、等の出土が見られた。高、須恵器坏(3)には「高」字の墨書が見られた。

時期 本住居の時期は明瞭ではないが、A.D.800年前後の所産と思慮される。

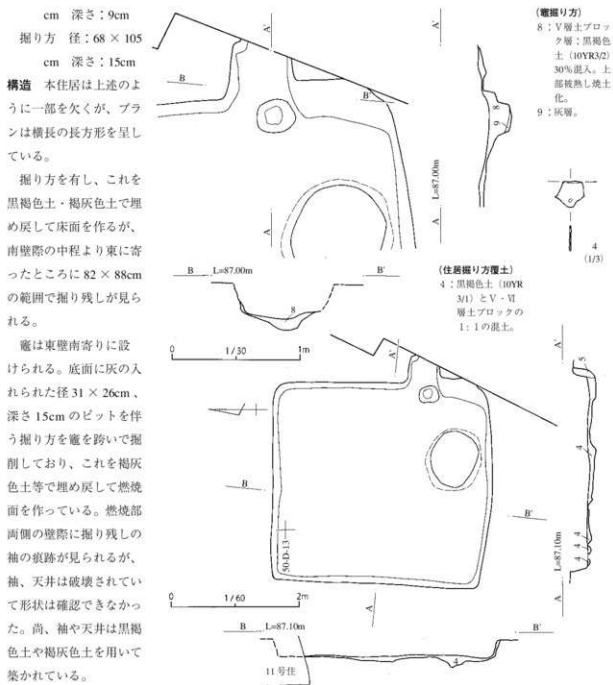
規模 径: 348 × 328cm 深さ: 31cm

(窯) 幅: 108cm 奥行き: 68cm

左袖 幅: 43cm 長さ: 20cm

右袖 幅: 26cm 長さ: 19cm

燃焼部 径: 62 × 110



第39図 15号住居電掘り方と住居掘り方

16号住居 (第40図、P.L.6・7・23)

概要 本住居は2区中北部に位置する。

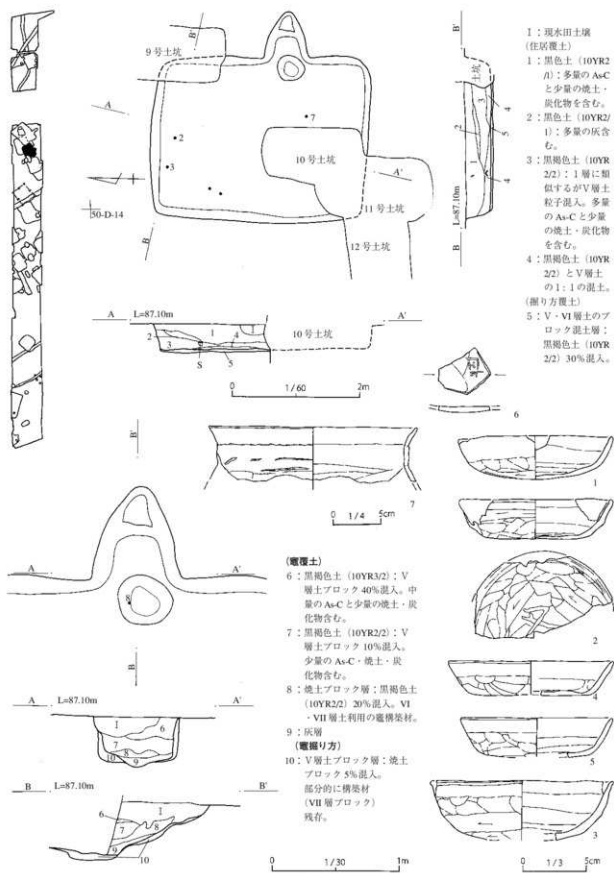
17・18号住居と9～12号土坑と重複するが、このうち17・18号住居を切るものの、9・10号土坑には切られている。

遺物 土師器坏(1～6)・甕(7)を中心に、須恵器の蓋・坏或いは碗・甕、古墳時代前・中期の土師器片の他、上位層からの混ざり込みと判断される焼

締陶器等陶磁器類の破片の出土が見られた。また竈構築材と思しき軟質の土師質破片(8)も出土している。

時期 出土遺物から推して9世紀前半の所産と判断される。

規模 径:349×266cm 深さ:35cm
(竈) 幅:76cm 奥行き:62cm



第40図 16号住居と出土遺物

燃焼部 径：47×45cm 深さ：9cm

煙道 下幅：24cm 長さ：25cm

掘り方 径：62×39cm 深さ：6cm

構造 本住居のプランは横長の長方形を呈する。

掘り方を有しており、これを褐灰色土や黒褐色土で埋め戻して床面を作っているが、掘り方の詳細は不詳である。

竈は東壁中央南寄りに設けられる。形状は不明だが壁面を跨いで掘り方を掘削し、これを焼土を含む褐灰色土で埋め戻して燃焼面を作っている。燃焼面

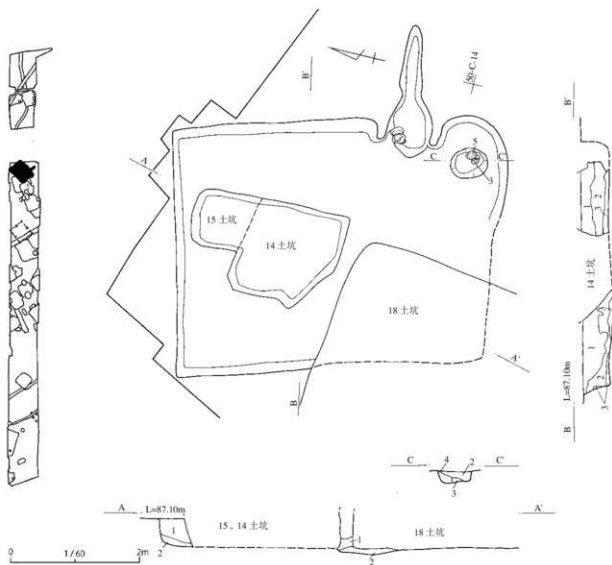
手前には径44×40cm、深さ10cmほどの楕円形様のプランを持つ掘り込みを伴う。袖、天井は破壊されていて確認できなかったが、褐灰色土、灰黄褐色土で築かれている。煙道は燃焼面より一段上がって造られている。

尚、柱穴、貯蔵穴は確認されなかった。

17号住居 (第41～44図、P.L.7・23)

概要 本住居も2区中北部に位置する。

16・18号住居、14・15号土坑と重複するが、本



(住居・貯蔵穴覆土)

1：黒褐色土 (10YR3/1)；黒色土 (10YR2/1) とV層土ブロック

各1%混入。多量のAs-Cと微量の焼土を含む。

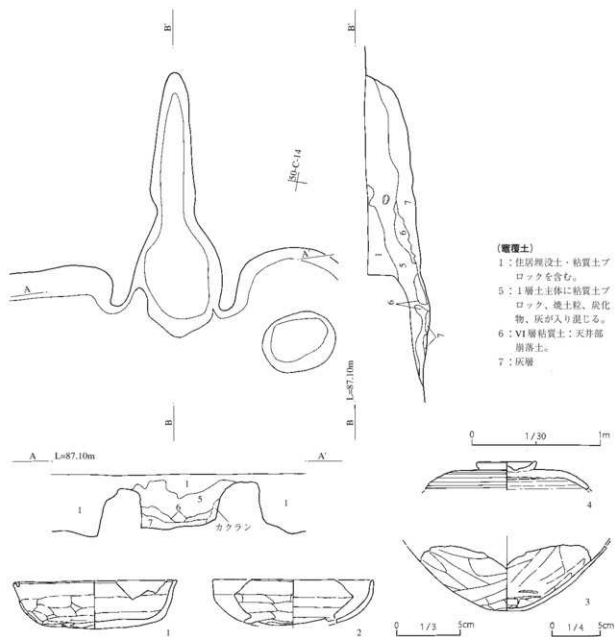
2：黒褐色土 (10YR3/1)；黒色土 (10YR2/1) とV層土ブロック

各1%混入。中量のAs-Cと微量の焼土を含む。

3：黒褐色土 (10YR3/2)；V層土ブロック20%混入。少量のAs-Cと焼土を含む。

4：黒褐色土 (10YR3/1)；黒色土 (10YR) とV層土ブロック各20%混入。少量のAs-Cと焼土を含む。

第41図 17号住居



第42図 17号住居竈及び出土遺物(その1)

住居はこれらの遺構より古い。

遺物 土師器杯(1・2)・甕(3)を中心に、須恵器蓋(4)・坏或いは碗・甕、古墳時代前・中期の土師器片、台石(5)、鍔型らしきもの(6)やこれと似るタカシコゾウらしきもの(7)の他、上位層からの混入と認識される陶器片等の出土が見られた。

時期 出土遺物から推して8世紀後半期の所産と認識される。

規模 径：533×407cm 深さ：44cm

(竈) 幅：109cm 奥行き：210cm

左袖 幅：36cm 長さ：37cm

右袖 幅：37cm 長さ：44cm

燃焼部 径：53×cm 深さ：92cm

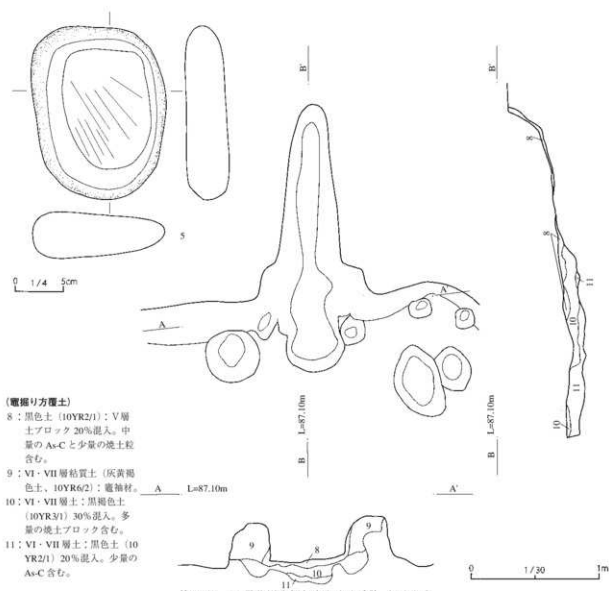
煙道 下幅：17cm 長さ：127cm

掘り方 径：84×46cm 深さ：17cm

(貯蔵穴) 径：58×46cm 深さ：19cm

(床下土坑(新)) 径：175×146cm 深さ：52cm

(床下土坑(旧)) 径：119×(88)cm 深さ：50cm



第43図 17号住居電掘り方と出土遺物(その2)

構造 本住居のプランは横長の長方形を呈し、南東部はやや膨らみを持つ。

床下土坑を伴う掘り方を有しており、これを埋め戻して床面を作っている。

竈は東壁南寄りに設けられる。壁面を跨いで楕円形プランの掘り方を掘削し、これを褐灰色土や灰黄褐色土で埋め戻して燃焼面を作っている。燃焼面両側には地山を掘り残した上で、その燃焼面側に褐灰色・灰黄褐色粘質土の土を添えて袖を作り、燃焼面から袖の内面にかけては黒色土を主体とした土壌を貼っている。天井は確認できなかったが、褐灰色土で築かれ、煙道はトンネル構造の可能性を有する。

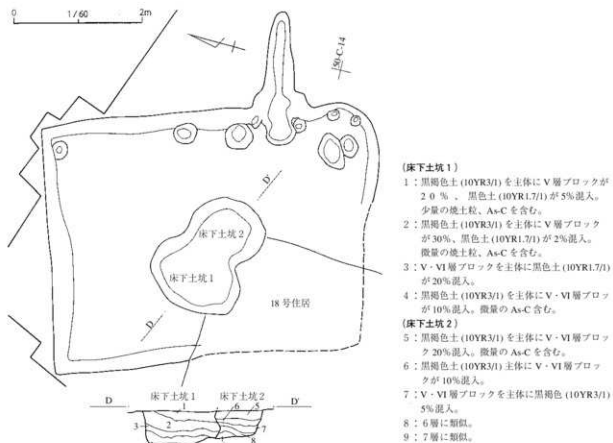
床面の竈右側手前には長円形プランの小型の貯蔵穴があったが、柱穴は確認できなかった。尚、掘り方では東壁際に径 15 × 16cm ~ 42 × 40cm、深さ 8 ~ 14cm の方形プランの小型ピットや楕円形プランの柱穴様の掘削が 5、6箇所見られたが、これらは壁面保護に伴うものである可能性が考慮される。

18号住居 (第45・46図, P.L. 7・8・24)

概要 本住居も2区中北部に位置している。

本住居は重複する16号住居より古く、17号住居より新しい。

また本住居は覆土の観察から土葺き屋根であり、



第44図 17号住居掘り方

また焼失家屋であったものと判断される。

遺物 土師器 坏 (1～7)・甕を中心に須恵器 蓋・坏 (8) 或いは碗・甕片、台石 (9)、敲石 (10)、刀子 (11)、鉄滓 (12)、竈構築材と見られるもの (13) の出土が見られた。

時期 出土遺物から推してA.D.800年前後の所産と認識される。

規模 径：420×362cm 深さ：42cm
(貯蔵穴) 径：88×70cm 深さ：(10)cm
(床下土坑) 径：81×75cm 深さ：9cm

構造 本住居は横長の長方形プランを有する。

床下土坑を伴う掘り方を有し、記録に不備があって土坑の様子は不明だが、これを埋め戻して床面を形成している。

竈は東壁に設置されたと想定されるが、確認することができなかった。

柱穴を確認することはできなかったが、掘り方面

の南東隅近くで貯蔵穴と見られる土坑を確認している。また床面に於いては北西隅から西壁、南西隅にかけて幅16cm以下、深さ6cm以下の周溝が不連続的に確認されている。

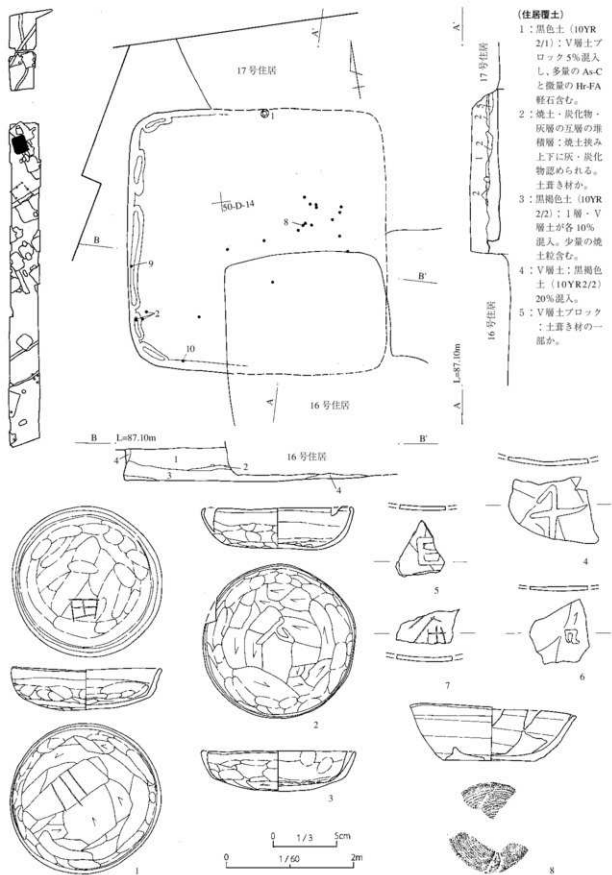
19号住居 (第47図、P.L.8・24)

概要 本住居は2区中北部の住居群址に在って、その南端に位置している。

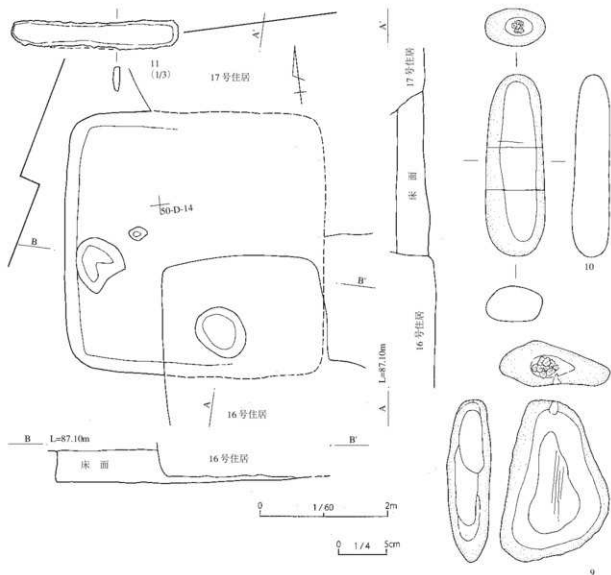
北部が15号住居に切られ、東部が調査区外に出ているため、南西部を中心とした部分を調査できたに過ぎなかった。

遺物 出土遺物はあさして多くなかったが、土師器の坏・甕 (1) を中心に、須恵器片や古墳時代前・中期の土師器片、台石 (2)、剥片 (J-93) の出土が見られた。

時期 本住居の時期は明瞭ではないが、9世紀前半期の可能性を有する。



第45図 18号住居と出土遺物 (その1)



第46図 18号住居掘り方と出土遺物（その2）

規模 径：(331)×(335)cm 深さ：28cm

構造 上述のように本住居はその一部を調査できたに過ぎなかったため、全容は詳らかにできなかったのであるが、方形或いは長方形のプランを呈するものと想定される。

掘り方を有し、これを黒褐色・褐灰色土で埋め戻して床面を形成している。掘り方の詳細は不詳。

また少なくとも床面に於いては竈、貯蔵穴、柱穴を確認することはできなかった。

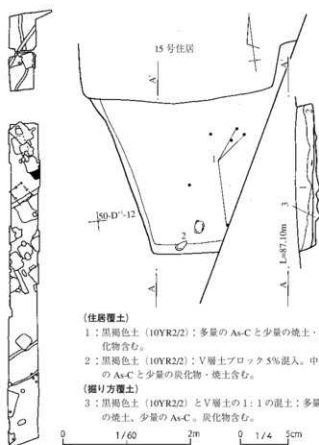
20号住居（第48・49図、P.L.8・24）

概要 本住居は4区中部よりやや南寄りに位置している。

他の遺構との重複は見られなかった。

覆土の観察所見から本住居は廃棄時に焼却処分に付された可能性が高いものと判断される。

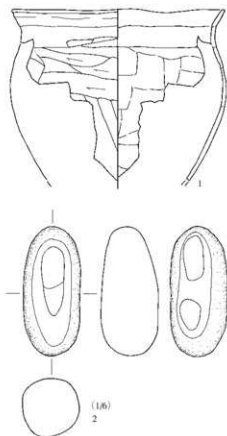
遺物 本住居からの出土遺物は多くはなかったが、土師器坏（1～3）・甕（4）片を中心に須恵器坏（5）或いは碗・壺、古墳時代前・中期の土師器片、台石（6）の出土が見られた。

**(住居覆土)**

1：黒褐色土（10YR2/2）：多量のAs-Cと少量の焼土・炭化物含む。
 2：黒褐色土（10YR2/2）：V層土ブロック5%混入。中量のAs-Cと少量の炭化物・焼土含む。

(掘り方覆土)

3：黒褐色土（10YR2/2）とV層土の1：1の混土：多量の焼土、少量のAs-C、炭化物含む。



第47図 19号住居と出土遺物

時期 本住居の時期は明瞭ではないが、A.D.800年前後の所産と感慮される。

規模 径：405×273cm 深さ：41cm

(竈) 幅：108cm 奥行：89cm

左袖 幅：32cm 長さ：22cm

右袖 幅：32cm 長さ：22cm

燃焼部 径：52×cm 深さ：57cm

煙道 下幅：44cm 長さ：29cm

掘り方 径：64×68cm 深さ：17cm

構造 本住居は横長の長方形プランを呈する。

細かい点は記録化できなかったが、掘り方を有しており、これを黒褐色土や褐灰色土で埋め戻して床面を作り出している。

竈は東壁南寄りに設置され、壁面を削り込んで縦長の隅丸長方形プランの掘り方を掘削しており、これを黒褐色土と褐灰色土で埋め戻して燃焼面を形っている。燃焼面の両側手前寄りには袖が作られるが、記録が取れていないため詳細は不詳。天井部は壊

れているが、褐灰色土で造られている。

尚、少なくとも床面に於いては柱穴、貯蔵穴を確認することはできなかった。

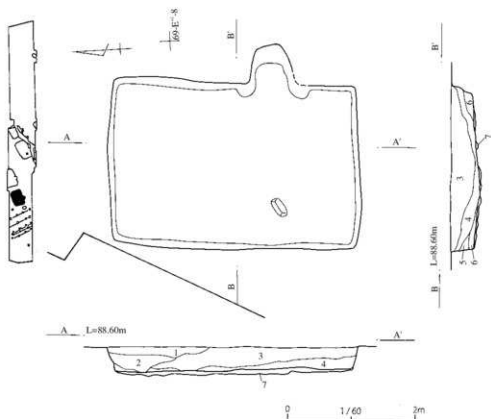
21号住居 (第50・51図、P.L.8・24)

概要 本住居も4区中部に位置するが、西側の過半部分が調査区外に出ていて調査することができなかった。

また本住居は20号住居の北側、長軸延長線上に近接して在るものの、他の遺構との重複は見られなかった。

尚、本住居は覆土の観察所見から焼失家屋と判断できるものである。

遺物 本住居の出土遺物もさして多くなかったが、土師器坏(1～3)・甕(5)を中心に、土師器小型台付甕(4)、須恵器の坏(6・7)または碗、古墳時代前・中期の土師器片、砥石(8)、或いは縄文時代



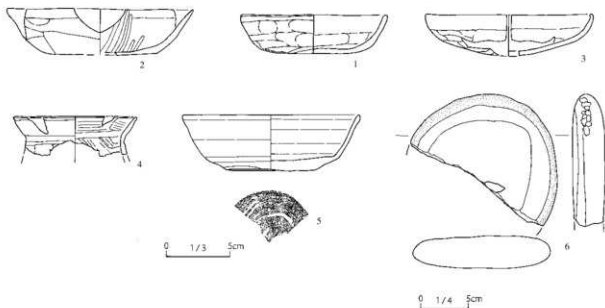
(住居覆土)

- 1：黒褐色土（10YR2/2）：V層土ブロック10%混入。As-C多量に、
 焼土・炭化物微量に含む。
 2：黒褐色土（10YR2/2）：V層土ブロック30%混入。As-C中量、
 焼土・炭化物微量含む。
 3：黒褐色土（10YR2/2）：V層土ブロック5%混入。As-C多量に、
 焼土・炭化物少量含む。
 4：黒褐色土（10YR2/2）：V層土ブロック40%混入。少量のAs-C

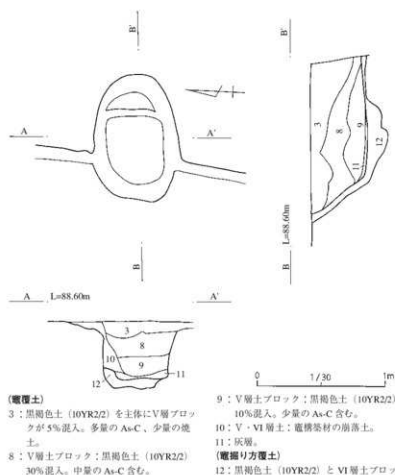
- ・焼土・炭化物含む。
 5：黒褐色土（10YR2/2）：V層土ブロック10%混入。多量のAs-C
 及び少量の焼土・炭化物含む。
 6：黒褐色土（10YR2/2）とV層土ブロックの1：1の混土；少量
 のAs-C・焼土・炭化物含む。

(住居掘り方覆土)

- 7：黒褐色土（10YR2/2）：VI層土ブロック60%混入。少量のAs-C
 含む。



第48図 20号住居と出土遺物



第49図 20号住居竈

の石皿 (J-95) の出土も見られた。

時期 出土遺物から推して本住居は概ね A.D.800 年前後の所産と見られる。

規模 径：(463)×(299)cm 深さ：cm

(竈) 幅：127cm 奥行き：102cm

左袖 幅：42cm 長さ：48cm

右袖 幅：40cm 長さ：36cm

燃焼部 径：53×cm 深さ：72cm

煙道 下幅：10cm 長さ：18cm

構造 上述のように本住居はその過半が調査区外に出ているため全容を詳らかにすることはできなかったが、プランは方形若しくは長方形を呈するものと判断される。

竈前が広く、且つ浅く陥没するような形状に掘削された掘り方を有しており、これを褐灰色土や黒色土等で埋め戻して床面を作り出している。

竈は東壁の中央より若干南寄った位置に設置されている。凡そ壁面より手前側に不定形プランの掘り方を掘削しており、これを灰黄褐色土を含む褐灰色土で埋め戻して燃焼面を作っている。この燃焼面の手前側に径 56×43cm、深さ 11cm を測る逆凸形のプランの窪みが見られる。燃焼面の両側には竈掘り方の埋土と同じ土壌を使用して袖を作っている。天井は崩落していたが、褐灰色土で作られたものと判断される。また燃焼部奥側には支脚と思しき逆位の土師器甕が据えられていた。煙道は燃焼部奥壁を燃焼面より 27cm 程高い位置より掘り込んでいる。

尚、本住居は床面に於いても掘り方に於いても貯蔵穴、或いは柱穴等を確認することはできなかった。

22号住居 (第52～54図、P.L.9・24・25)

概要 本住居も4区中程、23号住居の長軸延長線上南南東側に1.3m程離れて位置している。

竈左側の住居北東隅で3号溝と重複するが、本住居はこれに切られている。

また本住居は覆土の観察所見から焼失家屋の可能性が考慮される。

遺物 本住居からは土師器甕(8～11)を中心に土師器坏(1～7)や、量は多くない須恵器坏

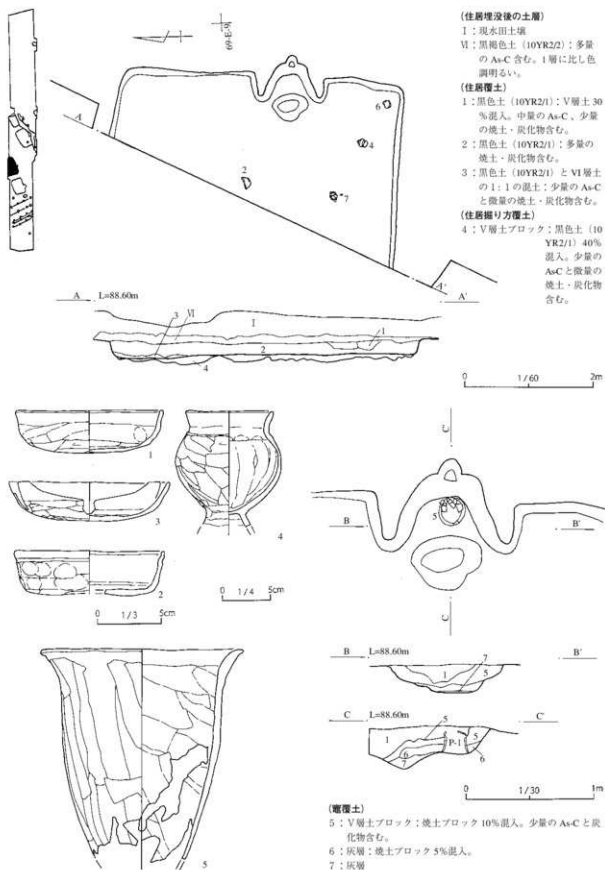
(12)・碗・甕、古墳時代前・中期の土師器片、砥石(13)、磨石(14)、こも籠み石(15・16)や火打石の出土が見られた。

時期 出土遺物から推して本住居は概ね A.D.700 年前後の所産と見られる。

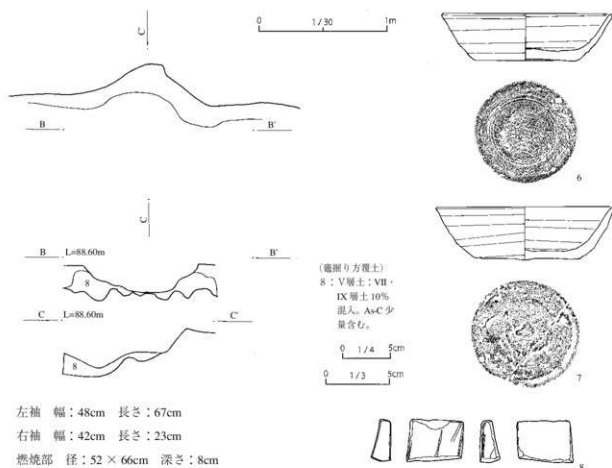
規模 径：482×308cm 深さ：26cm

(竈) 幅：142cm 奥行き：82cm

第3章 富田新井遺跡で発見された遺構と遺物



第50図 21号住居及び竈と出土遺物 (その1)



(竈掘り方覆土)
8: V層土: VII・
IX層土10%
混入。AsC少
量含む。

左袖 幅: 48cm 長さ: 67cm
右袖 幅: 42cm 長さ: 23cm
燃焼部 径: 52 × 66cm 深さ: 8cm
掘り方 径: 79 × 87cm 深さ: 23cm

(床下土坑1) 径: 83 × 192cm 深さ: 22cm
(床下土坑2) 径: 84 × 74cm 深さ: 20cm
(床下土坑3) 径: 129 × 142cm 深さ: 23cm
(床下土坑4) 径: 54 × 55cm 深さ: 18cm
(床下土坑5) 径: 95 × (95)cm 深さ: 24cm
(床下土坑6) 径: 71 × (58)cm 深さ: 16cm
(床下土坑7) 径: 96 × (76)cm 深さ: 21cm
(床下土坑8) 径: 50 × 69cm 深さ: 30cm
(床下土坑9) 径: 99 × (129)cm 深さ: 17cm

構造 本住居のプランは横長の長方形を呈する。

土坑を多く伴う掘り方を黒褐色土や褐色土で埋め戻して床を作っている。尚、竈前の床下土坑5は竈構築に伴う床下粘土坑と認識される。

竈は東壁のやや南寄りに設置される。壁面を若干掘り込んで楕円形様プランの掘り方を掘削し、これを黒褐色土等で埋め戻し、奥側では焼土等を含む褐色土を貼って燃焼面としている。燃焼面の両側に

第51図 21号住居竈掘り方と出土遺物(その2)

は地山(V層土:褐色土)の上に褐色土主体の土壌を乗せた袖が構築されるが、袖の手前側は削られている模様。天井は失われて明確ではないが、黒褐色土や褐色土で築かれていたと見られる。

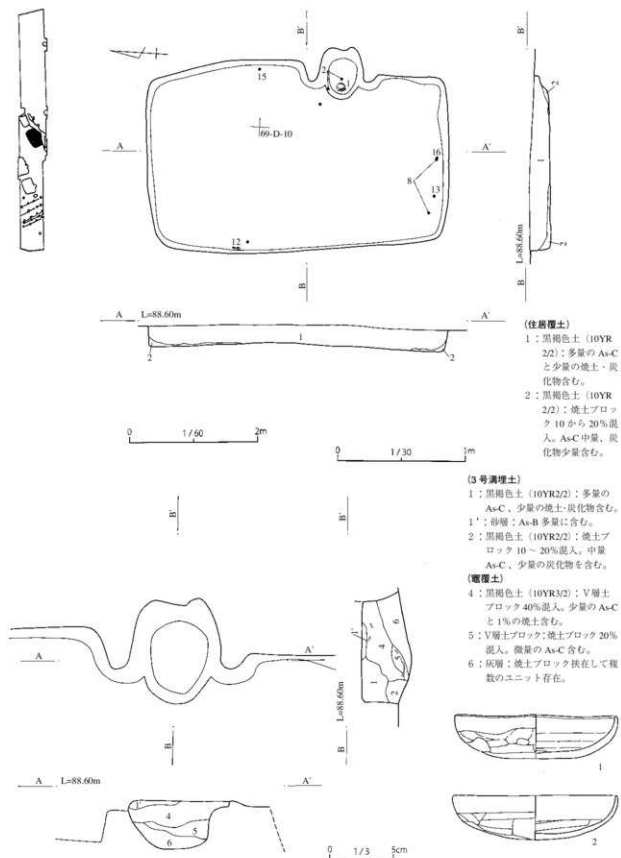
床面、掘り方面双方に於いて柱穴は確認できなかったが、貯蔵穴は掘り方面の住居南東隅の床下土坑7の南部がこれに該当するものと思慮される。

23号住居(第55図、P.L.25)

概要 本住居も4区中部、22号住居の長軸上、北北西に近接して位置するが、他遺構との重複関係は見られなかった。

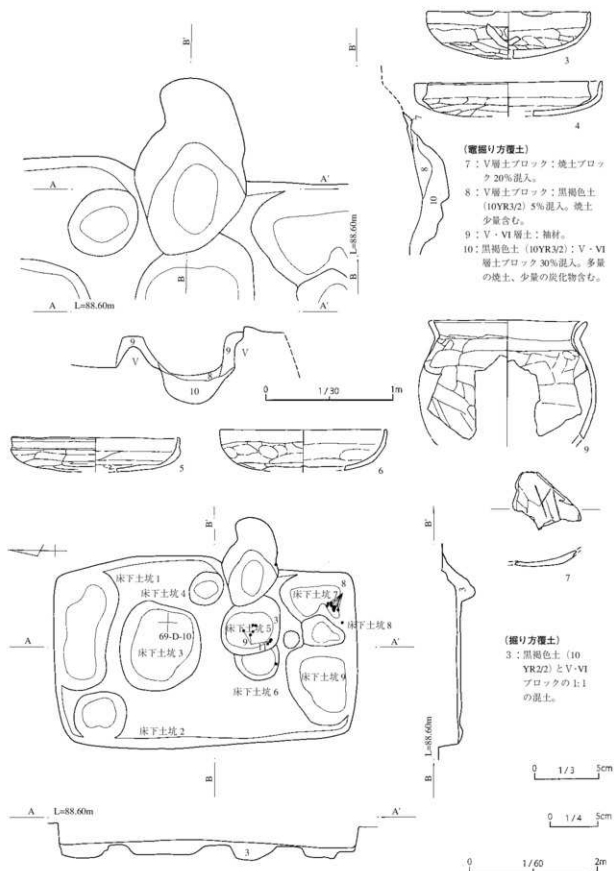
尚、本住居も覆土の観察所見から焼失家屋と認識することができる。

遺物 本住居からの出土遺物は少なかったのであるが、土器器坏(1)や壺を中心に土器器台付壺、須

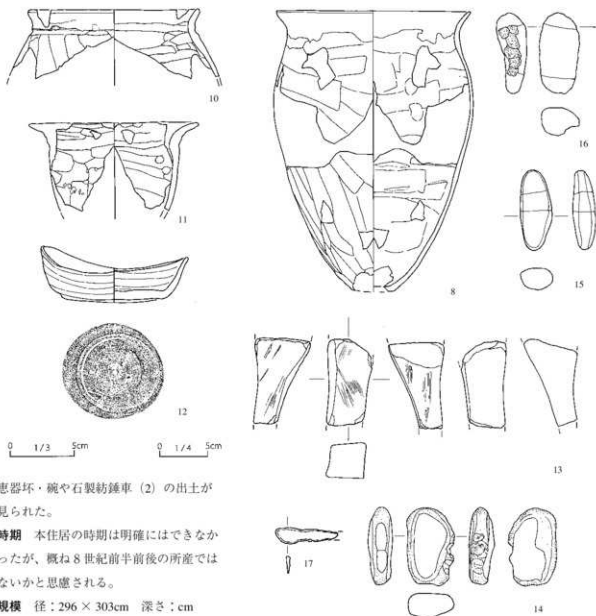


第52図 22号住居及び竈と出土遺物 (その1)

第1節 1面の遺構と遺物



第53図 22号住居電線り方及び住居掘り方と出土遺物 (その2)



第54図 22号住居出土遺物(その3)

恵器坏・碗や石製紡錘車(2)の出土が見られた。

時期 本住居の時期は明確にはできなかったが、概ね8世紀前半前後の所産ではないかと思慮される。

規模 径：296×303cm 深さ：cm

(竈) 幅：74cm 奥行き：153cm

燃焼部 径：74×107cm 深さ：cm

煙道 下幅：45cm 長さ：55cm

構造 本住居のプランは左上がやや突出する台形様の形状を呈している。

南・西壁寄りが周溝状にやや落ち込む掘り方を有しており、これを黒色土と褐灰色土で埋め戻して床を作り出している。

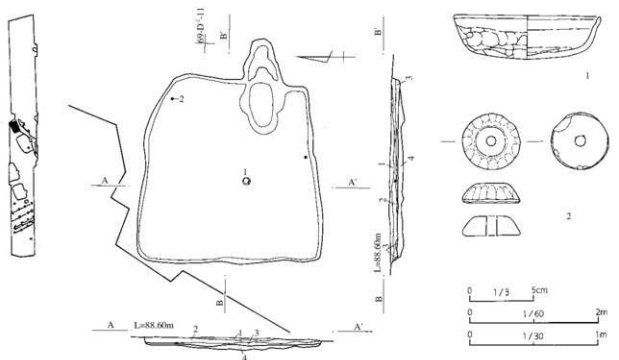
竈は東壁南寄りに設けられており、若干壁面に掛かる状態に不定形プランの掘り方を掘削し、これを褐灰色土等で埋め戻して燃焼面を作り出している。袖、天井は破壊されていたためその形状は確認でき

なかったが、黒褐色土に褐灰色土を混ぜた土壌等で構築されている。

貯蔵穴、柱穴等は床面に於いても掘り方面に於いても確認することはできなかった。尚、測定値を得られなかったが、掘り方の竈手前に柱穴状の掘り込みが見られる。

24号住居(第56図、P.L.9)

概要 本住居も4区中部に位置するが、過半は東側路線外に出ていて、北西隅部を中心とする西辺寄り



(住居覆土)

- 1: 黒褐色土 (10YR3/2): V層土ブロック 20%混入。多量のAs-C、少量の焼土・炭化物含む。
- 2: 黒色土 (10YR2/1): 多量のAs-C、中量の焼土・炭化物含む。
- 3: 黒色土 (10YR2/1): V層土ブロック 10%混入。中量のAs-C、中量の焼土・炭化物含む。上面は厚1~2cmの焼土・炭化物層が形成され封床状を呈する。

(掘り方覆土)

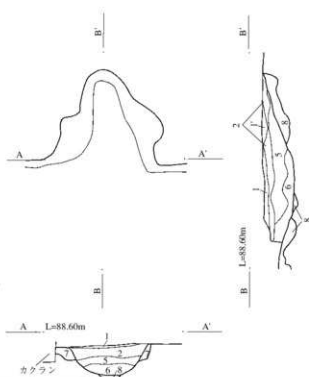
- 4: 黒色土 (10YR2/1) とV層土の1:1の混土

(竈覆土)

- 1': V・VI層土ブロック層; 炭化物層見られる。
- 1-2は住居覆土に同じ。
- 5: 黒褐色土 (10YR3/2) とV層土の1:1の混土; 多量の焼土ブロックと中量のAs-C・炭化物含む。
- 6: 黒褐色土 (10YR3/2) とV・VI層土の1:1の混土; 竈構築材だが攪乱あり。多量の焼土ブロックと少量の炭化物・As-C含む。

(竈掘り方覆土)

- 7: 黒褐色土 (10YR3/2): V・VI層土 30%混入。竈構築材(焼材)だが攪乱あり。
- 8: V・VI層土ブロック層; 黒褐色土 (10YR3/2) 30%混入。



第55図 23号住居及び竈と出土遺物

の一角が調査されたに過ぎなかった。

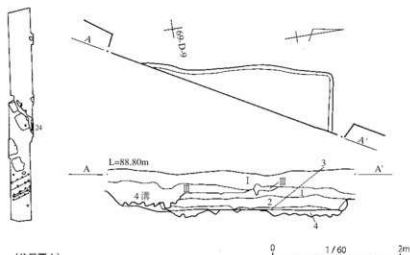
本住居は西辺で4号溝に切られている。

尚、覆土の観察所見から本住居も焼失家屋の可能性が考慮される。

遺物 本住居からは坏・甕片等合わせて14片の土

師器片が出土したに過ぎず、図示すべき遺物を得ることはできなかった。

時期 本住居は概ね律令期の所産と想定されるものの、出土遺物も僅かであり、時期の特定には至らなかった。



(住居覆土)

1: 黒褐色土 (10YR2/2); 黒色土 (10YR 2/1) 10%混入。多量のAs-C、微量の焼土・炭化物含む。上半部はIV層に該当するが区別できない。

2: 黒褐色土 (10YR2/2); 黒色土 (10YR 2/1) 2%混入。多量のAs-C、中量の焼土・炭化物を含む。

3: V層土ブロック層; 黒褐色土 (10YR3/1) 30%混入。少量のAs-C、焼土・炭化物を含む。

(掘り方覆土)

4: V層土ブロック層; 黒褐色土 (10YR3/1) 10%混入。少量のAs-C、微量の焼土・炭化物を含む。

第56図 24号住居

規模 径:(305)×(106)cm 深さ:20cm

構造 上述のように本住居はその一部を調査できたに過ぎなかったため、全容は不明だが、凡そ方形若しくは長方形のプランを呈するものと判断される。

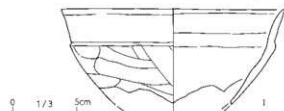
掘り方を有しており、これを褐灰色土を中心とする土壌で埋め戻して床面を作り出している。

尚、調査範囲内に於いて、竈、貯蔵穴、柱穴等を確認することはできなかった。

25号住居 (第57図、P.L.10・25)

概要 本住居も4区中部に位置するが、過半が調査区外に出ているため、北西部を部分的に調査できたに過ぎなかった。

また他遺構との重複は認められなかった。



第57図 25号住居と出土遺物

遺物 本住居の出土遺物は少なく、土師器鉢(1)の他には土師器坏片1点と古墳時代前・中期の土師器壺片1点が出土したに過ぎなかった。

時期 本住居の時期は特定できなかった。

規模 径:(185)×(139)cm

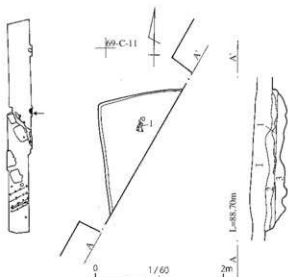
深さ:16cm

構造 本住居はその一部を調査できたに過ぎなかったため、全容は詳らかではないが、方形或いは長方形プランを呈するものと判断される。

記録化が純分ではないこともあって構造は詳らかでないが、掘り方を有し、これを埋め戻して

床面を造っている。

24号住居同様、本住居も調査範囲内に於いて竈、貯蔵穴、柱穴を確認することはできなかった。



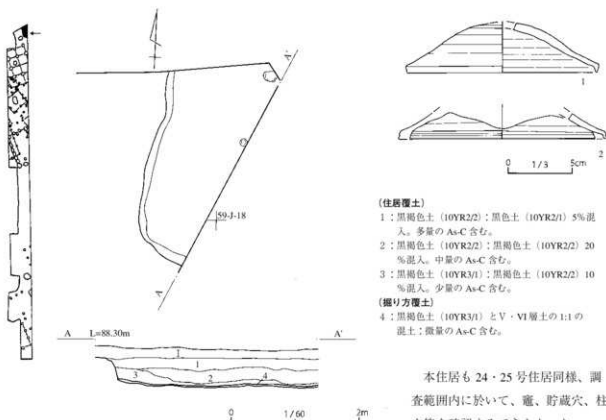
(住居覆土)

1: 黒褐色土 (10YR3/2); 黒色土 (10YR2/1) 70%、V層土ブロック 5%混入。多量のAs-C、少量の焼土・炭化物を含む。

2: 黒褐色土 (10YR3/2); 黒色土 (10YR2/1) 70%、V層土ブロック 5%混入。多量のAs-C、少量の焼土・炭化物を含む。

(掘り方覆土)

3: 注記不備



第58図 26号住居と出土遺物

26号住居 (第58図、P.L.10・25)

概要 本住居は3区北東端部に位置している。東側の過半と北側が調査区外に出ているため、部分的な調査をできたに過ぎなかった。

また他の遺構との重複関係は認められなかった。

遺物 本住居の出土遺物も多くはなかったが、土師器杯・甕片を中心に、須恵器の蓋(1・2)・杯・碗・甕、或いは古墳時代前・中期の土師器壺・甕類の破片等の出土が見られた。

時期 本住居の時期は出土遺物から推してA.D.800年前後の可能性が考えられるものの、特定することはできなかった。

規模 径:(348)×(176)cm 深さ:25cm

構造 本住居はその一部を調査したに過ぎなかったため全容は詳らかではないが、プランは隅丸方形或いは隅丸長方形プランを呈するものと判断される。

十分な記録化が残せなかったために不明なところもあるが、本住居は掘り方を有しており、これを黒褐色土や褐灰色土で埋戻して床面を造っている。

(住居覆土)

- 1:黒褐色土(10YR2/2):黒色土(10YR2/1)5%混入。多量のAs-Cを含む。
- 2:黒褐色土(10YR2/2):黒褐色土(10YR2/2)20%混入。中量のAs-Cを含む。
- 3:黒褐色土(10YR3/1):黒褐色土(10YR2/2)10%混入。少量のAs-Cを含む。

(掘り方覆土)

- 4:黒褐色土(10YR3/1)とV・VI層土の1:1の混土:微量のAs-Cを含む。

本住居も24・25号住居同様、調査範囲内に於いて、竈、貯蔵穴、柱穴等を確認するできなかった。

27号住居 (第59図、P.L.10・25)

概要 本住居は2区南部に位置する。西側の過半が調査区外に出ている、東部を調査できたに過ぎなかった。

他遺構との重複関係は認められなかった。

遺物 本住居からは古墳時代前・中期の土師器壺(9)或いは甕(7・8)の体部片を中心に、同時期の土師器椀(1)や高坏(2・3)か器古の脚部、小型甕(4~6)の出土があり、1点だけ上層からの混入と見られる須恵器蓋の破片が見られ、敲石(10)の出土もあった。

時期 出土遺物から本住居は概ねA.D.400年前後の所産と認識される。

規模 径:(330)×652cm 深さ:28cm

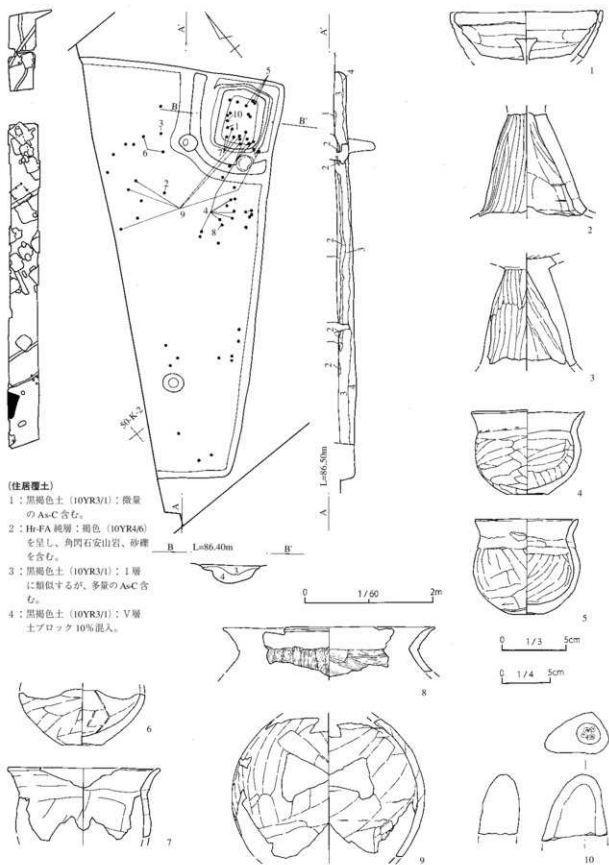
(貯蔵穴) 全域 径:158×162cm

本体 径:96×71cm 深さ:28cm

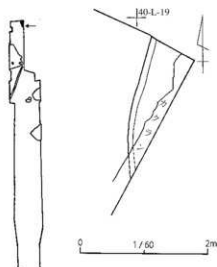
南・西側周堤 幅:63cm 高さ:10cm

北・東側周堤 幅:15cm 高さ:4cm

(柱穴1) 径:27×25cm 深さ:43cm



第59図 27号住居と出土遺物



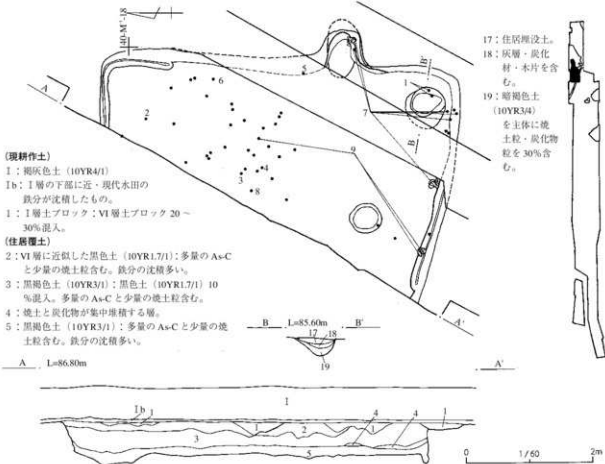
第60図 28号住居

(柱穴2) 径:30×34cm 深さ:43cm

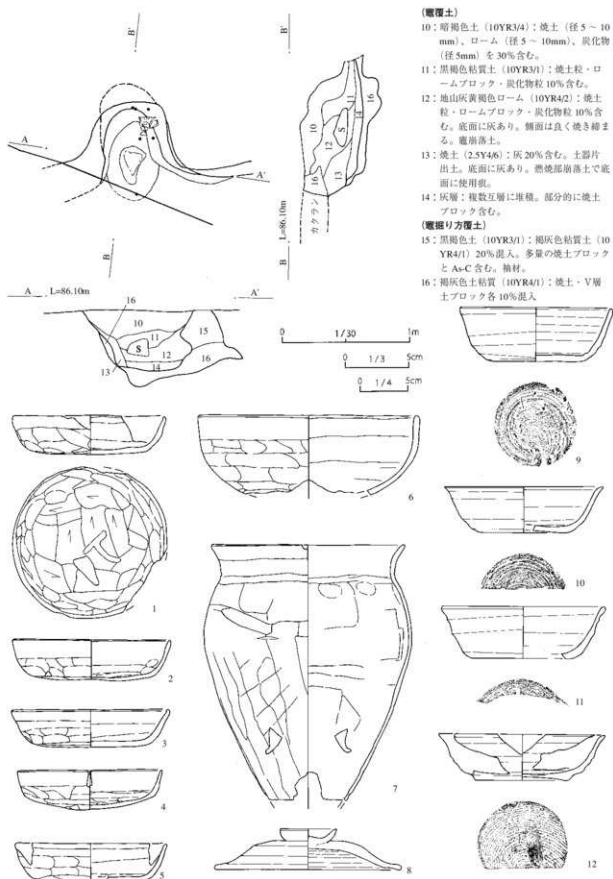
構造 本住居はその一部を調査したに過ぎなかったため空容は詳らかでないが、方形又は長方形プランを呈するものと想定される。

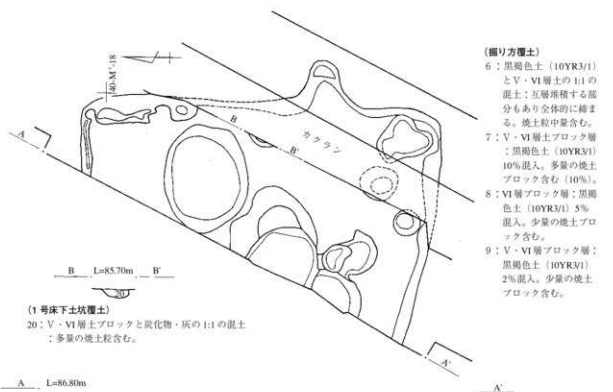
掘り方の有無に関する記録は残されていない。竈は確認されていないが、後述の貯蔵穴の存在等から北壁に設置されていたものと思慮される。

また住居北東隅に縦長長方形プランの貯蔵穴が設置されている。貯蔵穴は外周に幅10cm以下の帯状のテラスを設け、その外側、東壁と北壁際にはもう一段のテラスを、また南側と西側にはやや幅広の周堤を設けて貯蔵穴本体を委譲している。貯蔵穴本体は丸底である。尚、壁際のテラスと周堤が掘り残しであるか盛土であるかは記録が残されていないため不明である。柱穴は住居北東部の貯蔵穴周堤北西部(柱穴1)と住居南東部(柱穴2)の2箇所に確認されている。残存柱穴の柱間は380cmを測り、東壁からは双方凡そ120cm程を測る位置に確認されているが、南北方向では柱穴2が南壁からは150cm、柱穴1が北壁からは120cmを測り少し北に寄っている。



第61図 29号住居





28号住居 (第60図、P.L 10)

概要 本住居は1区北端部に位置する。東及び北側が調査区外に出ていて一部を調査できたに過ぎなかった。

また他遺構との重複も認められなかった。

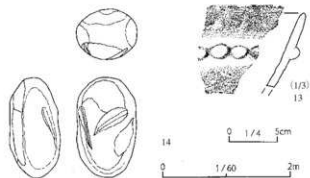
遺物 本住居からは古墳時代前・中期や律令期の土師器片や上位層からの流入と見られる施軸陶器片など合わせて5片が出土したに過ぎなかった。

時期 出土遺物も殆どなく、本住居の時期を特定することはできなかった。

規模 径:(228)×(77)cm 深さ:17cm

構造 上述のように、本住居は一部を調査したに過ぎないため、その構造は詳らかでない。西辺には直線的なところもあるが、プランも明瞭ではない。

本住居が掘り方を有するか否かの記録は無く、また調査範囲に於いて竈、貯蔵穴、柱穴を確認することはできなかった。



第63図 29号住居掘り方と出土遺物 (その2)

29号住居 (第61～63図、P.L 10・25)

概要 本住居は1区北部に位置する。

他遺構との重複はなかったが、西側が調査区外に出ていて全体を調査することができなかった。

また本住居は覆土の観察所見などから、焼失家屋であったと認識される。覆土4層に見られる炭化材は棟材及び葺き材と判断され、土葺きが施されていたものと判断される。

遺物 本住居からは土師器甕(7)、次に同坏(1~5)を中心に、土師器椀(6)、須恵器坏(9~12)・碗・甕・壺、古墳時代前・中期の土師器甕または壺片、磨石(14)・鉄滓(15)などの出土が見られた。

時期 概ね9世紀前半期の所産として把握される。

規模 径:570×(375)cm 深さ:41cm

(竈)幅:112cm 奥行き:78cm

燃焼部 径:41×72cm 深さ:6cm

煙道 下幅:52cm 長さ:6cm

掘り方 径:87×78cm 深さ:23cm

(貯蔵穴)径:63×(65)cm 深さ:27cm

(周溝)幅:21cm 深さ:4cm

構造 本住居は一部の調査に止まったため全容は詳らかでないが、プランは方形或は長方形を呈する。

深さ20cm以内の土坑状の掘り込みを多く有する掘り方を持ち、これを黒褐色土や褐色土で埋め戻して床面を作っている。

竈は東壁南寄りに設置され、壁面を跨いで掘削さ

れた浅い掘り方を焼土を含む褐色粘質土で埋め戻して燃焼面を作る。竈は壊されていたが壁寄りには焼土を多く含む黒褐色土等で作る。天井も破却。

床面に於いては竈右側の住居東南隅に貯蔵穴を設けている。柱穴は確認できなかったが、東壁北部から北壁にかけてと東端部を除く南壁に周溝が確認されている。上屋構造は不詳。

30号住居(第64~66図、P.L11-26)

概要 本住居は2区南部に位置する。

他遺構との重複は見られなかったが、東南部を調査できたに過ぎなかった。

遺物 本住居からは完形品1点(1)の11片の土師器坏を中心に、土師器高坏1片及び甕3片、古墳時代前・中期の土師器甕(2)・壺片9片と2点の竈天井石(3・4)など僅かな出土遺物を得たに過ぎなかった。

時期 本住居の時期は不明瞭だが、8世紀前半期所産の可能性が考えられる。

規模 径:(243)×(222)cm

深さ:56cm

(竈)幅:89cm

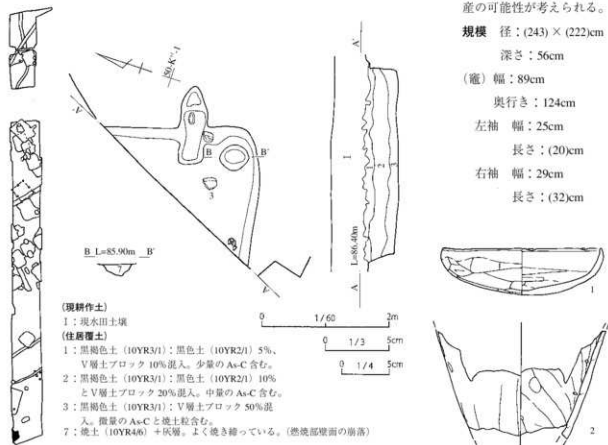
奥行き:124cm

左袖 幅:25cm

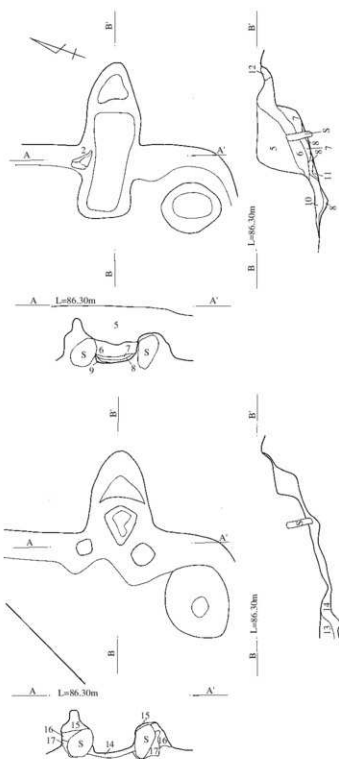
長さ:(20)cm

右袖 幅:29cm

長さ:(32)cm



第64図 30号住居と出土遺物(その1)



第5図 30号住居竈及び竈掘り方

燃焼部 径：41 × 85cm 深さ：6cm
 煙道 下幅：23cm 長さ：32cm
 掘り方 径：51 × 80cm 深さ：0cm

(竈覆土)

- 5：黒褐色土 (10YR3/1)；黒色土 (10YR1.7/1) 10%混入し、多量のAs-C、Hc-FA、焼土粒含む。鉄分の沈積多い。
- 6：褐色土 (10YR4/6)；粘質土多く含む。焼土・炭化物粒20%含む。甍崩落土。
- 7：焼土 (10YR4/6) と灰の混土；良く焼け締まる。燃焼部壁面の崩落土。
- 8：灰層
- 9：褐色土 (10YR4/6)；2層に似るが焼土・炭化物粒少ない。壁面崩落土。
- 10：黒褐色土 (10YR3/1)；VI層土・焼土ブロック各5%混入。
- 11：VI層土相当の粘質土；竈構基材の一部。
- 12：V層土；燃焼によるタール状炭化物固着。

(甍掘り方覆土)

- 13：4層に同じ。
- 14：V層土ブロック層；黒褐色土 (10YR3/1) と黒色土 (10YR1.7/1) が各10%混入。少量の焼土粒、炭化物とAs-C含む。

(甍袖材)

- 15：黒褐色土 (10YR3/1)；V・VI層土30%混入。中量のAs-Cと焼土粒含む。
- 16：VI層土
- 17：V層土；黒褐色土 (10YR3/1) 10%混入。袖石の裏込土。少量の焼土粒含む。

0 1/30 1m

(貯蔵穴) 径：46 × 41cm

深さ：20cm

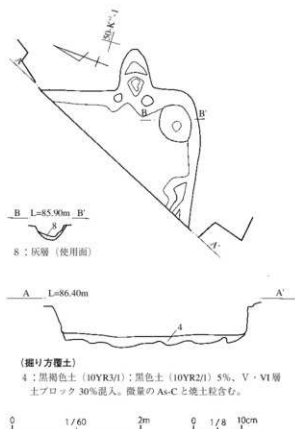
構造 本住居はその一部を調査できたに過ぎないのでその構造は詳らかではないが、プランは(隅丸)方形様を呈するものと判断される。

掘り方を有し、これを黒褐色土等で埋め戻して床面を作っている。

竈は東壁南寄りに設けられる。壁面を跨いで極めて浅い掘り方を掘り、燃焼部中央やや北寄りを掘り窪めて細長い河床礫を据え、燃焼部両側をやはり浅く掘り窪めて河床礫による袖石を差し込んでから黒褐色土や褐灰色土等で埋め戻して縦長の長方形の燃焼面を作る。袖の手前側は壊されていたが、燃焼部両側の袖石を焼土を含む黒褐色土と褐灰色土で包んで作っている。天井の構造等是不詳。

構造等是不詳。

柱穴は確認されなかったが、竈右側の住居南東隅部に小型の貯蔵穴が設けられている。



(掘り方覆土)

4:黒褐色土 (10YR3/1);黒色土 (10YR2/1) 5%、V・VI層土ブロック 30%混入。微量のAs-Cと焼土粒含む。

0 1/60 2m 0 1/8 10cm

31号住居 (第67図、P.L.11・26)

概要 本住居は2区中南部に位置する。6号溝と重複するが新旧関係は確認できなかった。

本住居の遺存状況は良好でない。

遺物 本住居からは多孔石、凹石、磨石 (1~3) が出土したに過ぎなかった。

時期 土器の出土もなく、遺構も下記遺存状態が悪かったため時期は特定できない。

規模 径:347×336cm 深さ:8cm

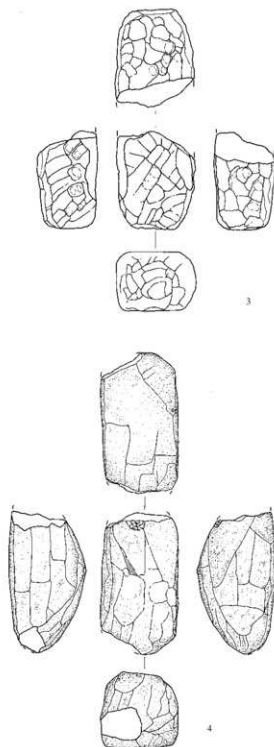
(土坑) 径:71×51cm 深さ:10cm

構造 本住居のプランはやや崩れた台形を呈する。

遺存状況が悪く表出した面が床面か、明瞭ではないが、底面東半部に硬化面を確認しているため地床の可能性を有する。

北寄り中ほどに方形の土坑を確認しているが、上位面からの掘り込みの可能性もあり、本住居に伴うかは明確にできていない。

また炉、柱穴、貯蔵穴等は確認できなかった。

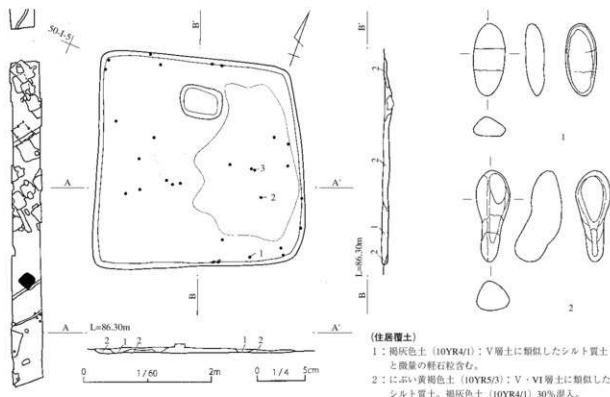


第66図 30号住居掘り方と出土遺物 (その2)

32号住居 (第68・69図、P.L.12・26)

概要 本住居は2区北部、33号住居の西側に隣接して位置している。

9号溝と重複しているが、本住居はこれに切られ



ている。また過半が調査区外に出ていて、南東寄り
を部分的に調査できたに過ぎなかった。

遺物 本住居からは比較的状态のよいもの3点(1
~3)と5片(4・5)の破片があった土師器杯、6
片の土師器壺、須恵器の杯(6)と碗(7)各1点と
磨石(8)が出土したに過ぎなかった。

時期 本住居の時期は、出土遺物から推して概ね8
世紀後半期の所産と判断される。

規模 径:(164)×(344)cm 深さ:25cm

(竈) 幅:(80)cm 奥行き:(113)cm

燃焼部 径:64×85cm 深さ:5cm

掘り方 径:72×116cm 深さ:7cm

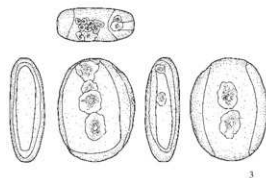
(貯蔵穴) 径:47×52cm 深さ:21cm

(周溝) 幅:12cm 深さ:-cm

構造 本住居は前述のように部分的に調査できたに
過ぎなかったためその全容を詳かにすることはで
きなかったが、プランは概ね方形または長方形を呈
するものであった。

掘り方は確認されておらず、記録も明瞭でないが
地床であったと見られる。

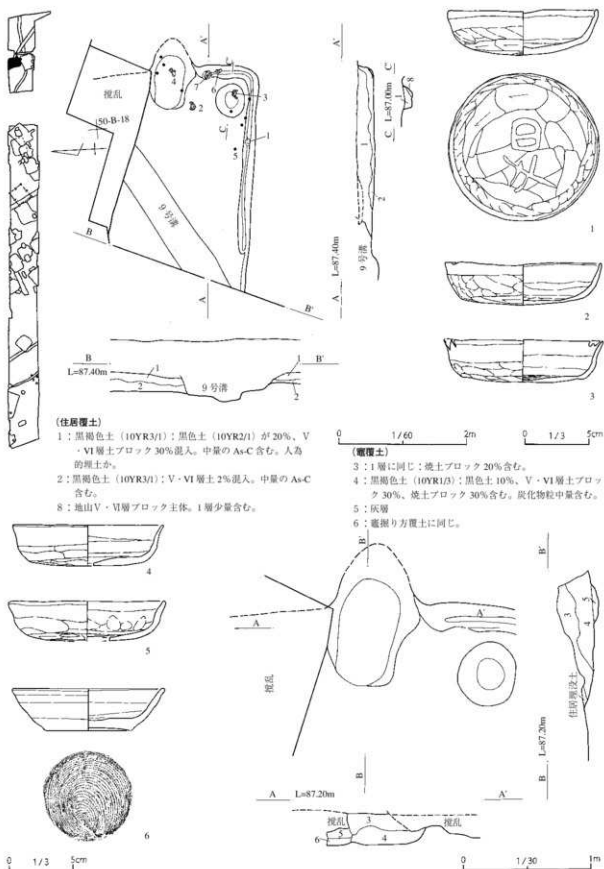
竈は東壁の設けられている。竈の北側が調査区外



第67図 31号住居と出土遺物

に在るため明瞭ではないが、他の住居の状態に推し
て、東壁の南寄りに設けられたものと認識される。
竈は壁面を跨いで縦長隅丸長方形の浅い掘り方を掘
削し、これを黒褐色土や褐灰色土で埋め戻して燃焼
面を作り出している。袖は壊されていて形状は不明
だが、褐灰色シルト質土で作られている。天井の構
造は不明である。

竈右側の住居南東隅部に小型の貯蔵穴が設けられ
るが、柱穴は確認できなかった。また調査できた範
囲では、竈右側の東壁から南壁にかけて周溝が確認
されている。



(住居覆土)

1: 黒褐色土 (10YR3/1); 黒色土 (10YR2/1) が 20%、V-VI 層土ブロック 30% 混入。中量の As-C 含む。人為的埋土か。

2: 黒褐色土 (10YR3/1); V-VI 層土 2% 混入。中量の As-C 含む。

8: 地山 V-VI 層ブロック主体。1 層少量含む。

(甕覆土)

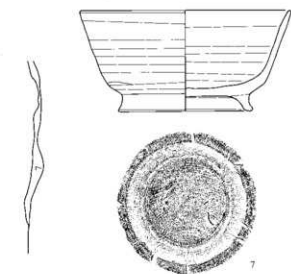
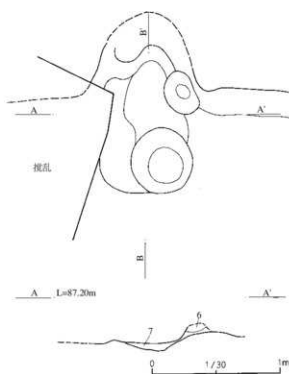
3: 1 層に同じ; 焼土ブロック 20% 含む。

4: 黒褐色土 (10YR1/3); 黒色土 10%、V-VI 層土ブロック 30%、焼土ブロック 30% 含む。炭化物粒中量含む。

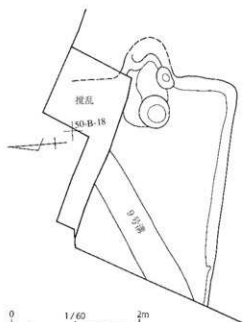
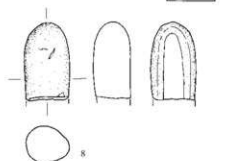
5: 灰層

6: 甕掘り方覆土に同じ。

第 68 図 32 号住居及び甕と出土遺物 (その 1)



(竈廻り方覆土)
 6：VI・VII 層シルト質土：竈軸材。
 7：黒褐色土（10YR1/3）：V・VI 層土 40%混入。中量の焼土粒と少量の炭化物含む。



第69図 32号住居掘り方及び竈掘り方と出土遺物（その2）

33号住居（第70～72図、P.L.12・26）

概要 本住居は2区北部に位置しており、32号住居の東側に近接して在る。

住居の大半を確認することはできたが、竈燃焼部の先端寄りから煙道部が調査区外に出ていて調査す

ることができなかった。

本住居は10号溝と重複しているが、これを切っている。

遺物 本住居からは土師器甕（1～3・7）・坏を中心に、土師器台付甕（4）、須恵器の蓋（5）・坏（6）或いは碗・甕、砥石（8）、敲石（9）、こも編み石（10）、不明石製品（11・12）、竈構築材かと思われる石製品（13）等の出土遺物が得られた。

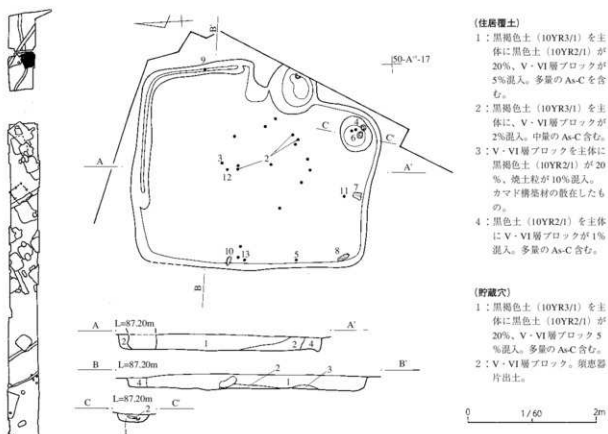
時期 出土遺物から推して本住居は概ね9世紀前半期の所産として認識される。

規模 径：398×335cm 深さ：22cm

（竈）幅：121cm 奥行き：79cm

左袖 幅：36cm 長さ：65cm

第3章 富田新井遺跡で発見された遺構と遺物



(住居層土)

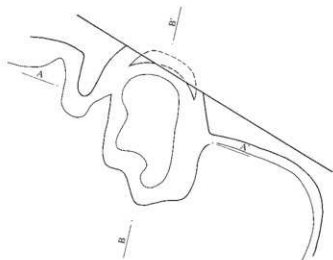
- 1: 黒褐色土 (10YR3/1) を主体に黒色土 (10YR2/1) が 20%、V・VI 層ブロックが 5% 混入。多量の As-C を含む。
- 2: 黒褐色土 (10YR3/1) を主体に、V・VI 層ブロックが 2% 混入。中量の As-C を含む。
- 3: V・VI 層ブロックを主体に黒褐色土 (10YR2/1) が 20%、焼土粒が 10% 混入。カマド構造物の散在したものの。
- 4: 黒色土 (10YR2/1) を主体に V・VI 層ブロックが 1% 混入。多量の As-C を含む。

(貯蔵穴)

- 1: 黒褐色土 (10YR3/1) を主体に黒色土 (10YR2/1) が 20%、V・VI 層ブロック 5% 混入。多量の As-C を含む。
- 2: V・VI 層ブロック。須恵器片出土。

(カマド) 73頁

- 1: 黒褐色土 (10YR3/1) を主体に黒色土 (10YR2/1) が 20%、V・VI 層ブロック 30%、焼土ブロック 10% 混入。多量の (As-C) FA を含む (カマド埋設土) 多量の土師器片出土。
- 2: 焼土ブロック (7.5R4/6) を主体に黒色土 (10YR2/1) が 10%、V・VI 層ブロック 30%、炭化物粒 20% 混入。土師器片中量出土。(燃焼部崩落土)。
- 3: V・VI 層を主体に焼土粒 (7.5R4/6)、炭化物粒 (10YR2/1) を各 10% 混入。(カマド崩落土)。
- 4: 3層に似る。V・VI 層主体。下層に炭化物粒 (9M) が堆積。(カマド使用面)。
- 5: 2層に似る。灰層を主体に焼土粒 10%、V・VI 層 10% 混入。下層に炭化物粒層を含む。
- 6: V・VI 層主体。焼土粒・炭化物粒少量含む。(支脚の痕か)。



燃焼部 径: 70 × (78)cm

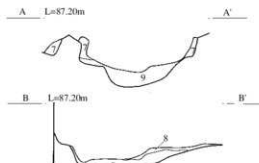
深さ: 11cm

掘り方 径: 112 × 83cm

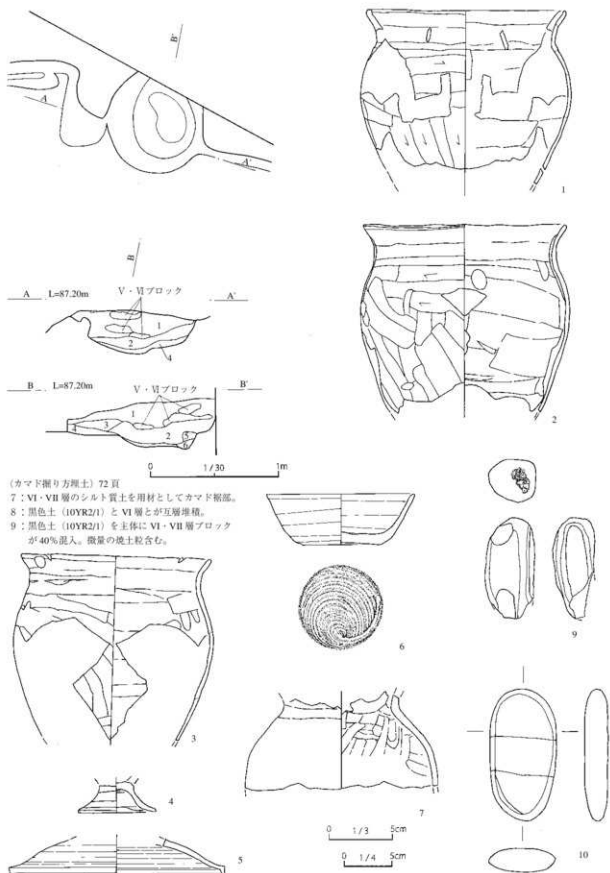
深さ: 24cm

(貯蔵穴) 径: 57 × 52cm 深さ: 15cm

構造 本住居は東壁北半部と南東隅部に影らみを持つ横長の(隅丸)長方形プラ



第70図 33号住居及び電掘り方



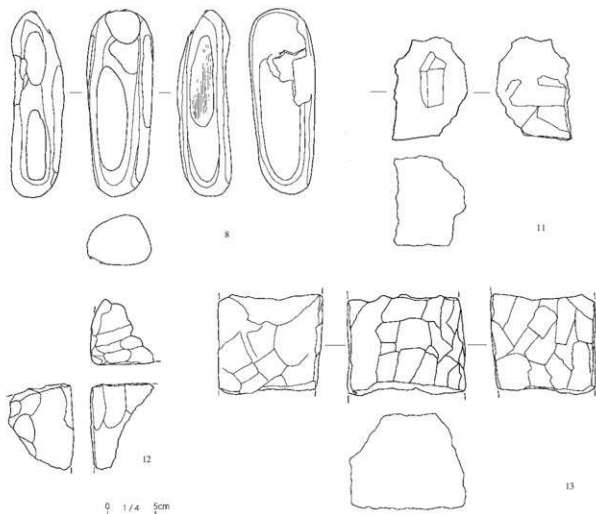
(カマド掘り方埋土) 72頁

7: VI・VII層のシルト質土を素材としてカマド版部。

8: 黒色土 (10YR2/1) と VI 層とが互層堆積。

9: 黒色土 (10YR2/1) を主体に VI・VII 層ブロック
が40%混入。微量の焼土粒含む。

第71図 33号住居竈と出土遺物 (その2)



第72図 33号住居出土遺物（その3）

ンを呈する。

記録には明瞭でないが、地床の堅穴住居で掘り方は有しないと見られる。

竈は東壁やや南寄りに設けられる。上述のように奥側が調査区外に出るため全容は確認できなかったが、壁面手前、若干壁面に掛かる程度に縦長隅丸長方形プランのやや深い掘り方を掘削しており、これを黒褐色土、褐灰色土、灰黄褐色土で埋め戻して燃焼面を作り出している。燃焼面両側には掘り残した地山（VI層土）を褐灰色・灰黄褐色シルト質土で包んで袖を作っている。天井は崩れていて確認できなかったが、袖材と同様の土で形成していたと判断される。

床面に於いては竈右側の住居南東隅に浅い楕円形

プランの貯蔵穴を設けているが、柱穴を確認することはできなかった。

1号掘立柱建物（第73図、P.L.12）

概要 本建物は3区中位南寄りに位置しているが、西半部が調査区外に出ていて調査することができなかった。

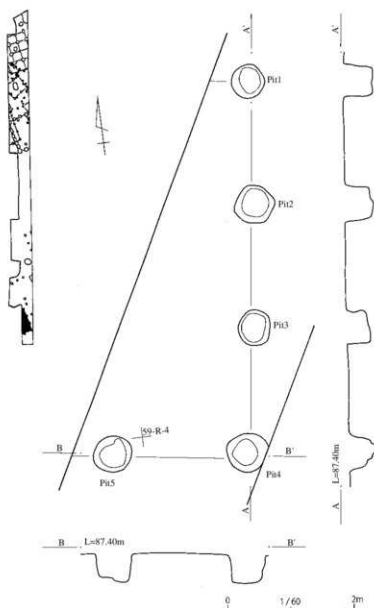
他遺構との重複関係は見られなかった。

遺物 本建物に於いては僅かに柱穴2ヶ所より土師器坏片1点づつを出土している。

時期 本建物の時期は特定できなかったが、柱穴の規模から推して古代の所産と認識される。

規模 全体(277)×349cm

梁間：277cm 桁間：平均204cm



第73図 1号掘立柱建物

- (Pit1) 径：55 × 52cm 深さ：45cm
 (Pit2) 径：66 × 60cm 深さ：43cm
 (Pit3) 径：57 × 51cm 深さ：37cm
 (Pit4) 径：64 × 62cm 深さ：44cm
 (Pit5) 径：65 × 57cm 深さ：44cm

構造 本建物は前述のように東南側を調査したに過ぎなかったため全容は確認できなかったが、恐らく南北に棟方向を取り棟持柱を持つ、2 × 3間規模と想定される掘立柱建物である。

また柱穴は方形に近い楕円形プランで、底面形態

は平底を呈するものであった。またビット2・4・5の底面には柱の加重による塑性変形が見られるため、礎板の使用はなかったものと判断される。また本遺跡での貫入試験は行わなかったため明確ではないが、前橋市元総社町鳥羽遺跡での貫入試験の成果(石守1986)から推して簡易な構造の建物であったものと思慮される。

2号掘立柱建物 (第74図, P L 12)

概要 本建物は2区北部に位置している。建物の始点を調査できたが南西角の柱穴を掘削することはできなかった。

また本建物は2号溝と重複しているが、新旧関係を特定することはできなかった。

遺物 本建物からの出土遺物は少なく、ビット1～3・6から古墳時代前期から律令期に至る土師器甕の破片など若干の出土遺物を得たに過ぎない。

時期 本建物の時期を明確にすることはできなかった。柱穴の規模は古代的要素を持つものと中世的要素を持つものの2種類があるが、比較的

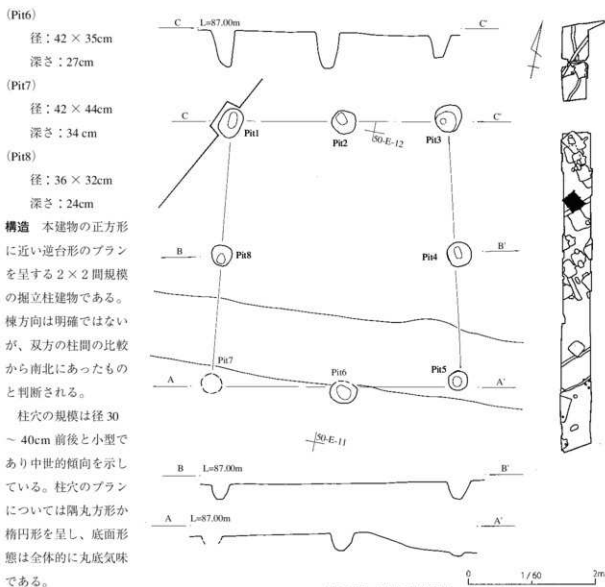
単純な柱配置であるにも拘わらず棟持柱を有するため古代の所産である可能性が考えられる。

規模 全体：420 × 456cm

建物規模：388 × 416cm

梁間：182.75cm 桁間：208.0cm

- (Pit1) 径：46 × 33cm 深さ：57cm
 (Pit2) 径：39 × 38cm 深さ：56cm
 (Pit3) 径：46 × 42cm 深さ：34cm
 (Pit4) 径：40 × 38cm 深さ：28cm
 (Pit5) 径：32 × 28cm 深さ：6cm



第74図 2号掘立柱建物

3号掘立柱建物（第75図、P L 12・13）

概要 本建物は4区中程に位置する。北列西側と南列東側が路線外に在り、全容は把握できなかった。

本建物は後述の1号櫓（4号建物）を内側に抱え込むようにしてこれと重複するが、同新田関係は特定できなかった。

遺物 出土遺物は得られなかった。

時期 本建物の時期は特定できなかったが、その構造から中世の所産と想定される。

規模 全体：500 × 627cm

建物規模：464 × 780cm

梁間：464cm 桁間：181cm（168～196cm）

(Pit1) 径：32 × 30cm 深さ：50cm

(Pit2) 径：28 × 24cm 深さ：60cm

(Pit3) 径：24 × 18cm 深さ：48cm

(Pit4) 径：30 × 24cm 深さ：60cm

(Pit5) 径：40 × 34cm 深さ：26cm

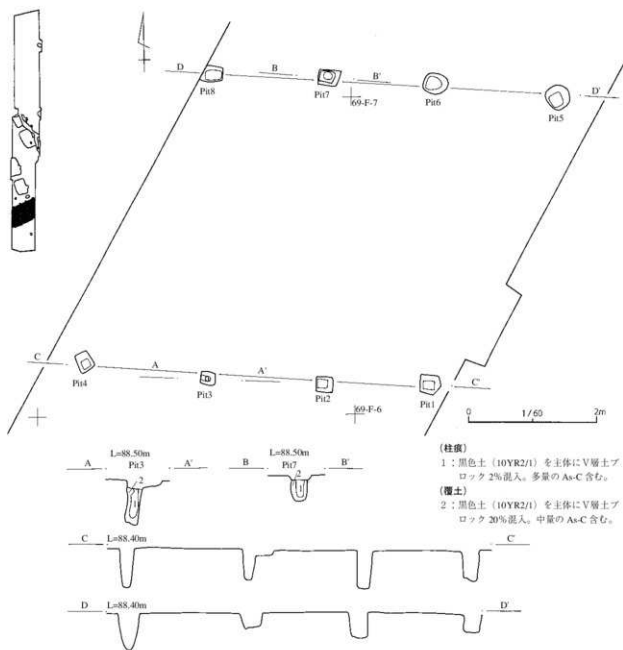
(Pit6) 径：40 × 30cm 深さ：40cm

(Pit7) 径：36 × 24cm 深さ：24cm

(Pit8) 径：32 × 22cm 深さ：58cm

構造 本建物は東西両側が調査区外に伸びるため全容は評らかでないが、確認範囲では棟方向を東西に取る1×4間の梁間1間型の掘立柱建物である。

柱穴は中世的な小型のもので、柱穴のプランは方



第75図 3号掘立柱建物

形或いは長方形を中心に、一部隅丸方形を呈する。また底面形態は平底気味のものが多く、丸底や尖底のものも混在する。

柱の形は不明だが柱痕の径は12cmを測った。

5号掘立柱建物 (第76図, P L 13・28)

概要 本建物は3区に位置する。南東部が調査区外に出ているため全容を詳らかにできなかった。

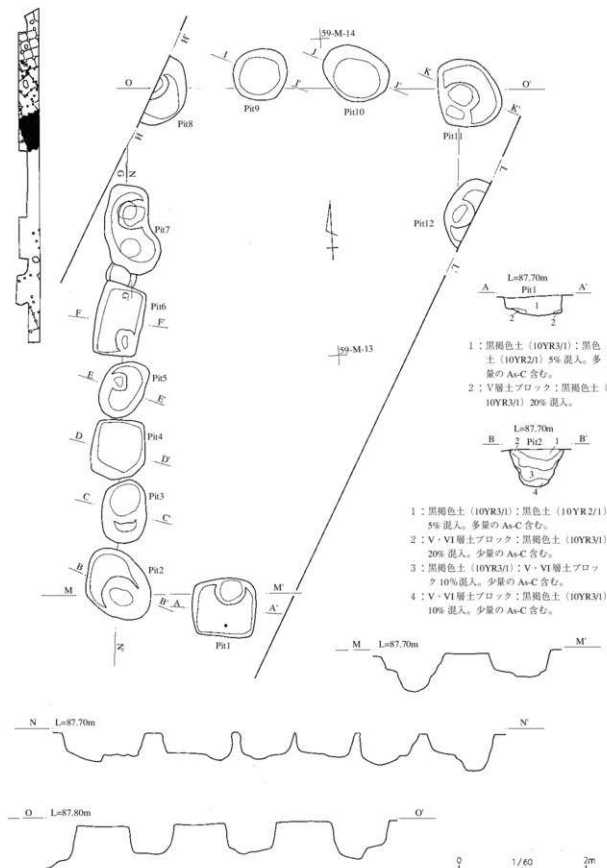
また6号建物と重複するが、新旧は不明である。

遺物 ビット1～3・5・7A・9・11・12から律令期の土師器杯・甕片を中心に盤(1)等の須恵器片、凹石(2)等を含む若干の出土遺物が得られた。

時期 本建物の時期は特定できなかったが、出土遺物と柱穴の規模、柱の配置から推して律令期の所産と判断される。高、Pit6にAs-Bが混入するため12世紀に下る可能性も考慮される。

規模 全体: 666 × 840cm

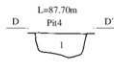
建物規模: 524 × 806cm



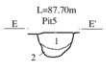
第76図の1 5号掘立柱建物と柱穴断面 (その1)



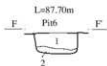
1: 黒褐色土 (10YR3/1); 黒色土 (10YR2/1) 5% 混入。多量のAs-Cを含む。



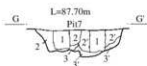
1: 黒褐色土 (10YR3/1); 黒色土 (10YR2/1) 5% 混入。多量のAs-Cを含む。



1: 黒褐色土 (10YR3/1); 黒色土 (10YR2/1) 5% 混入。多量のAs-Cを含む。
2: 黒褐色土 (10YR3/1); 黒色土 (10YR2/1) 5% 混入。中量のAs-Cを含む。



1: 黒褐色土 (10YR3/1); 黒色土 (10YR2/1) 5% 混入。多量のAs-C・As-Bを含む。
2: 黒褐色土 (10YR3/1); 黒色土 (10YR2/1) 5% 混入。中量のAs-C・As-Bを含む。



(柱痕)

1: 黒褐色土 (10YR2/2); 多量のAs-Cを含む。

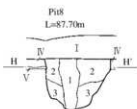
(柱穴覆土)

2: 黒褐色土 (10YR3/2); 黒色土 (10YR2/1) 2%。V層土5%混入。多量のAs-Cを含む。

3: 黒褐色土 (10YR2/2); V層土2%混入。多量のAs-Cを含む。

4: 黒褐色土 (10YR3/2); 黒色土 (10YR2/1) 5%混入。中量のAs-Cを含む。

5: 黒褐色土 (10YR2/2) とV層土ブロックの1:1の混土; 少量のAs-Cを含む。



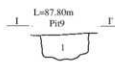
(柱痕)

1: 黒褐色土 (10YR2/2); 多量のAs-Cを含む。

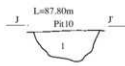
(柱穴覆土)

2: 黒褐色土 (10YR3/2); 黒色土 (10YR2/1) 2%。V層土5%混入。多量のAs-Cを含む。

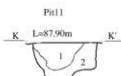
3: 黒褐色土 (10YR3/2); 黒色土 (10YR2/1) 5%混入。中量のAs-Cを含む。



1: 黒褐色土 (10YR3/1); 黒色土 (10YR2/1) 5% 混入。多量のAs-Cを含む。

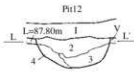


1: 黒褐色土 (10YR3/1); 黒色土 (10YR2/1) を5%混入。多量のAs-Cを含む。



1: 黒褐色土 (10YR3/1); 黒色土 (10YR2/1) 5% 混入。多量のAs-Cを含む。

2: 黒褐色土 (10YR3/1); V・VI層土ブロック5%混入。



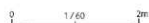
1: I層土。

2: 黒褐色土 (10YR3/2); 黒色土 (10YR2/1) 2%。V層土5%混入。多量のAs-Cを含む。

3: 黒褐色土 (10YR3/2); 黒色土 (10YR2/1) 5%混入。中量のAs-Cを含む。

4: V層土ブロック; 黒褐色土 (10YR3/2) 10%混入。

標準土層
I: 現埴作土
V: 褐灰色土 (10YR4/1)
VI: 褐灰色土 (10YR5/1)



梁間: 168.5cm (165 ~ 174cm)

桁間: 194cm

(Pit1) 径: 100 × 92cm 深さ: 31cm

(Pit2) 径: 126 × 92cm 深さ: 55cm

(Pit3) 径: 101 × 70cm 深さ: 44cm

(Pit4) 径: 95 × 84cm 深さ: 38cm

(Pit5) 径: 97 × 67cm 深さ: 40cm

(Pit6) 径: 117 × 74cm 深さ: 34cm

(Pit7) 径: 140 × 68cm 深さ: 43cm

(Pit8) 径: 116 × (52)cm 深さ: 82cm

(Pit9) 径: 84 × 82cm 深さ: 40cm

(Pit10) 径: 107 × 84cm 深さ: 49cm



第76図の2 5号掘立柱建物と柱穴断面(その2)

(Pit11) 径: 107 × 97cm 深さ: 62cm

(Pit12) 径: 114 × (46)cm 深さ: 46cm

構造 本建物は南北に棟方向を取る、掘立柱建物である。

梁方向については3間を数えることができた。

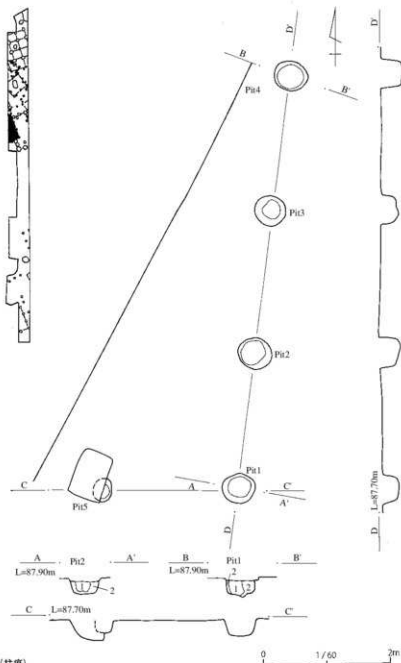
一方桁方向は北端で柱間を確認することができたが、西側列は南端から概ね105cm毎（概ね半間毎）に掘削されるものであった。一方東列は調査区外に出るためその規格を確認することはできなかった。

柱穴のプランはピット1・4・6は長方形或いは方形を呈するもので、ピット3・5・9・10・12は楕円形、ピット2・7・11は方形と楕円形を両側から接合したような形状であり、全容が不明のピット8も同様な形態になるように見受けられる。

底面形態は平底を基本とするのが殆どで、部分的に丸底を呈するものが散見された。

さて北側のピット7は南側のものが北側のものを切る南北二つの柱穴の重複したものであった。これについては西側柱穴列がピット2・4・6・7北・8を使用した時期からピット2・3・5・7南・8を使用した時期へと建替えられたものと解釈している。

また柱の形状及び規模は不明であるが、土層断面に残る柱痕の幅は20cm程を測るものであった。



(柱痕)

1：黒褐色土（10YR2/2）：多量のAs-Cを含む。

(柱穴覆土)

2：黒褐色土（10YR3/2）：黒色土（10YR2/1）2%、V層土5%混入。多量のAs-Cを含む。

第77図 6号掘立柱建物

6号掘立柱建物（第77図、P.L.13）

概要 本建物は3区北寄りに位置する。西側は調査区外に出ていて、東・南寄り調査できたに過ぎない。また南側の柱穴が攪乱により壊されていた。

本建物は5号建物と重複するが、新旧は特定できなかった。

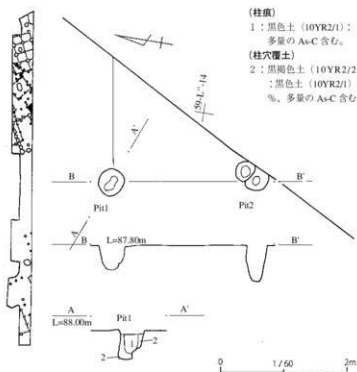
遺物 出土遺物は得られなかった。

時期 本建物の時期は特定できなかったが、柱穴の規模から推して律令期以前の所産と認識される。

規模 全体：(350) × 708cm

建物規模：(320) × (662)cm

梁間：210cm 桁間：216.67cm (210 ~ 230cm)



- (Pit1) 径: 50 × 48cm 深さ: 14cm
(Pit2) 径: 54 × 50cm 深さ: 34cm
(Pit3) 径: 49 × 48cm 深さ: 26cm
(Pit4) 径: 53 × 46cm 深さ: 23cm
(Pit5) 径: 38 × (13)cm 深さ: 20cm

構造 本建物は掘立柱建物であるが、上述のように南東寄り調査できたに過ぎなかったため全容は詳らかでない。確認された範囲は1 × 3間分であったが、2 × 3間以上の規模があったものと思われる。

柱穴のプランは円形または円形に近い形状で、底面形態は平底気味である。

柱の径は不明だが、土層断面に見られる柱痕は幅20cm以上あった。

7号掘立柱建物 (第81図、P L 13)

概要 本建物は3区北寄りに位置する。過半が調査区外に出ていて、北西の一部しか確認できなかった。確認できた柱穴が僅か2箇所であるため、欄列である可能性も否定できない。

またピット2が南北に分かれることから建替えの可能性も考慮される。

遺物 ピット1・2から坏片を中心とする僅かな土師器片が出土したに過ぎなかった。

時期 本建物は律令期以降の所産であるが、時期は特定できなかった。

規模 全体幅: 272cm

建物幅: 230cm

柱間: 230cm

(Pit1) 径: 42 × 34cm 深さ: 40cm

(Pit2南) 径: 36 × 28cm

深さ: 56cm

(Pit2北) 径: 34 × 28cm

深さ: - cm

構造 本建物はその一部を調査できたに過ぎなかったため、その構造は詳らかでない。また棟方向も特定することはできなかった。

柱穴は何れも円形プランを呈し、底面はやや尖り気味の丸底を呈する。

8号掘立柱建物 (第79図、P L 13)

概要 本建物は3区北寄りに位置する。北西部が調査区外に出ており、建物全体を調査することはできなかった。

本建物は22号土坑と重複するが新旧を特定することはできなかった。またピット3・6に隣接或いは近接して在るが、両ピットとも本建物には属さないものと思慮される。

遺物 ピット1から1片、ピット6から37片の土師器坏・甕片を中心とする出土遺物が得られた。

時期 本建物の時期は特定できなかったが、柱穴の規模と配置から律令期以前の所産である可能性が高いものと思慮される。

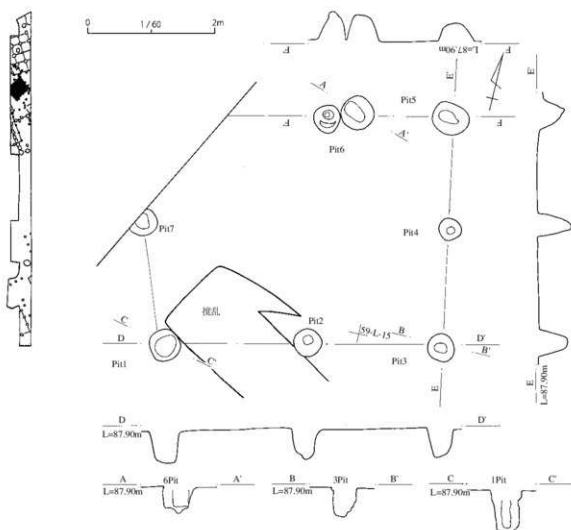
規模 全体: 410 × 482cm

建物規模: 357 × 435cm

梁間: 183cm (171 ~ 194cm)

桁間: 210cm (195 ~ 219cm)

(Pit1) 径: 50 × 48cm 深さ: 50cm



第79図 8号掘立柱建物

- (Pit2) 径：44 × 42cm 深さ：48cm
 (Pit3) 径：44 × 42cm 深さ：58cm
 (Pit4) 径：38 × 32cm 深さ：54cm
 (Pit5) 径：58 × 48cm 深さ：34cm
 (Pit6) 径：44 × 42cm 深さ：44cm
 (Pit7) 径：44 × 42cm 深さ：1cm
 (Pit3 南 Pit) 径：33 × 33cm 深さ：36cm
 (Pit6 東 Pit) 径：54 × 50cm 深さ：42cm

構造 本建物は棟方向は東西、棟持柱を持つ掘立柱建物で、確認範囲では2 × 2間の規模であった。

柱穴のプランは隅丸方形、隅丸台形或いは楕円形を呈し、底面形態は丸底を呈する。

柱の形状は不明だが、土層断面に現われた径は、Pit1で15cm、Pit6で25cmを測るものであった。

9号掘立柱建物 (第80図、P L 14・26)

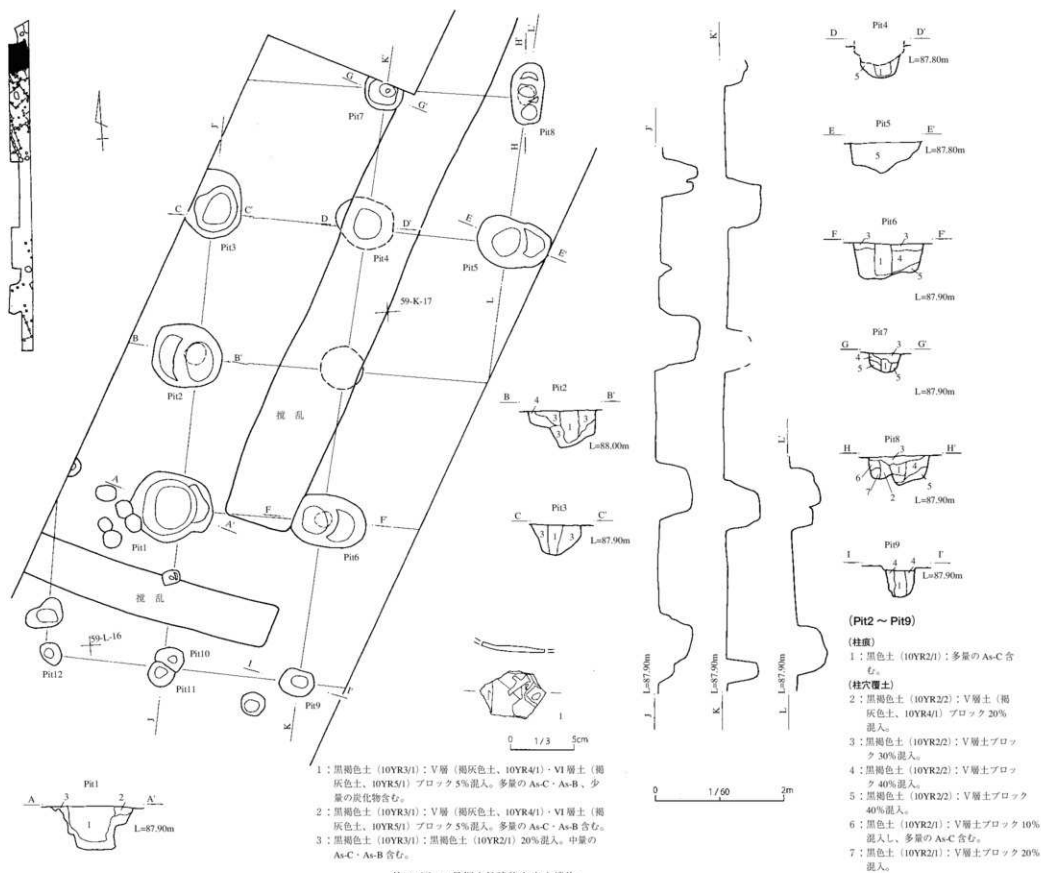
概要 本建物は3区北部に位置するが、東西両側と北側の一部は調査区外に出ている。

27号土坑と重複するが新旧関係を特定することはできなかった。

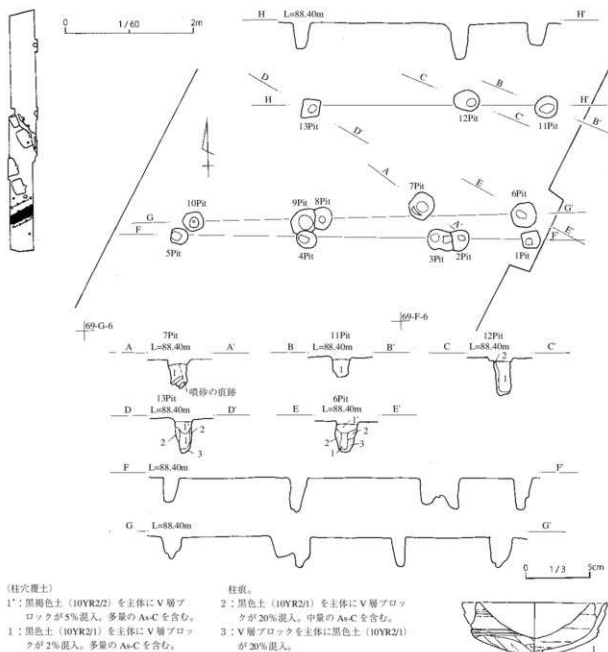
本建物は後述の構造の検討から3ないし4面の底を伴う建物と見られるため、堂或いは集落の中心的建物であった可能性が考慮される。

遺物 4・6・8・10・11・12号ピットより量は多くなかったが「富」字かと思われる墨書のある破片を含む土師器坏(1)・甕を中心に、古式土師・土師器・須恵器・灰釉陶器片等の出土が見られた。

時期 時期は特定できなかったが、出土遺物と柱の規模から推して律令期の所産と認識される。



第80図 9号掘立柱建物と出土遺物



規模 全体：750 × 995cm

建物規模：630 × 940cm

梁間：217.83cm (195 ~ 246cm)

桁間：240.00cm (215 ~ 261cm)

(母屋) 梁間：231.00cm 桁間：233.00cm

(庇) 梁間：205.67cm 桁間：243.75cm

(Pit1) 径：(131) × 109cm 深さ：68cm

(Pit2) 径：115 × 107cm 深さ：56cm

(Pit3) 径：109 × (8.2)cm 深さ：54cm

(Pit4) 径：(95) × (79)cm 深さ：52cm

(Pit5) 径：(115) × 79cm 深さ：48cm

(Pit6) 径：115 × 80cm 深さ：55cm

(Pit7) 径：63 × (42)cm 深さ：38cm

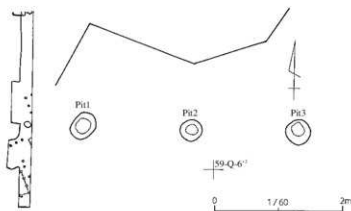
(Pit8) 径：92 × 53cm 深さ：46cm

(Pit9) 径：54 × 40cm 深さ：50cm

(Pit10) 径：46 × (33)cm 深さ：62cm

(Pit11) 径：43 × 38cm 深さ：68cm

(Pit12) 径：38 × 30cm 深さ：—cm



第82図 2号欄列

構造 本建物は総柱の掘立柱建物で、棟方向は大凡南北方向にと判断される。確認範囲では3×3間の建物として調査されているが、柱穴規模には大小が有り、母屋が2×2間で少なくとも南北と西側に庇の廻る建物であったと認識される。恐らくは東側にも庇を持ち、或いは東西に延伸する可能性も否定できない。Pit1～6が母屋、7～12が庇の柱穴である。尚、新田関係は特定できなかったが重複するPit10・11は建替えの痕跡と見られ、位置的にPit10の方が古いものと想定される。

柱穴のプランは隅丸長方形、或いは楕円形を呈するものが多く、全体として母屋の柱穴は平底気味、庇の柱穴は丸底気味である。

柱の形状等は確認できなかったが、土層断面で見られる柱痕跡は母屋に属する2・3・4・6では21～27cm、庇建物に属する7～9では15～21cmの幅を測った。尚、Pit1では柱の引き抜き痕と見られる土層の堆積状況が見られた。

1号欄列 (4号建物、第81図、P.L.12・26)

概要 本欄列群は4区南部に位置する。掘立柱建物(4号建物)として調査したが、柱穴の位置関係から3列の欄列として把握されるものである。

本欄列群は3号掘立柱建物と重複するが、新田関係を特定することはできなかった

遺物 2号ピットから古墳時代後期の土師器環(1)が出土した他、1・2・4・7・15ピットからは古墳

時代～平安時代にかけての土師器片が合わせて6片、須恵器片が合わせて2片出土した。

時期 本欄列群の時期は特定できなかったが、柱穴の規模と一部に方形プランの柱穴が見られることから中世の所産である可能性を有する。

規模 (北列) 全長:405cm

欄規模:373cm

柱間:186.5cm (121～252cm)

(中列) 全長:618cm 欄規模:

521cm

柱間:173.67cm (160～186cm)

(南列) 全長:586cm 欄規模:558cm

柱間:186.0cm (105～247cm)

(Pit1) 径:28×28cm 深さ:49cm

(Pit2) 径:36×32cm 深さ:49cm

(Pit3) 径:42×31cm 深さ:42cm

(Pit4) 径:31×28cm 深さ:53cm

(Pit5) 径:26×26cm 深さ:40cm

(Pit6) 径:43×40cm 深さ:47cm

(Pit7) 径:42×36cm 深さ:45cm

(Pit8) 径:36×25cm 深さ:50cm

(Pit9) 径:47×39cm 深さ:33cm

(Pit10) 径:34×32cm 深さ:35cm

(Pit11) 径:36×32cm 深さ:35cm

(Pit12) 径:40×34cm 深さ:50cm

(Pit13) 径:28×27cm 深さ:42cm

構造 本欄列群は東西に並ぶ3列から成る。北列と中列は177cm程隔たって併行に近い位置に在るが、北列が若干時計回りに傾く。中列と北列は30cm程離れて位置するが、南列は中列に対して明らかに時計回りに傾いている。また柱穴の位置は北列のピット13と中列のピット9、南列のピット4がほぼ通る他は一致するものはない。

柱穴はピット1・13が方形、ピット2・4～8・10が隅丸方形、他は楕円形のプランを呈する。底面形態は北列は平底、中・南列は丸底気味で、ピット4

・6・8・10の底面には加重による塑性変形と思しき形態が認められる。

柱の太さは不明だがピット3・12・13の断面には柱痕跡が残り、前者は12cm、中者は18cm、後者は15cmの径を測った。

2号柵列 (第82図)

概要 本柵列は3区南寄りに位置する。

単独のピットとして調査されたが整理段階で柵列と認定した。尚、本柵列の北側は調査区外となっているため、掘立柱建物の一部である可能性は否定できない。

遺物 本柵列からの出土遺物は認められなかった。

時期 本柵列は律令期以降の所産であるが、時期は特定できなかった。尚、柱穴の規模は律令期中世の中間規模を示すが、そのプランが隅丸方形か隅丸長方形を呈することから中世の可能性が考慮される。

規模 全長：340cm

柵規模：340c

柱間：170.5cm

(170 ~ 171cm)

(Pi1) 径：44 × 35cm

深さ：— cm

(Pi2) 径：36 × 34cm

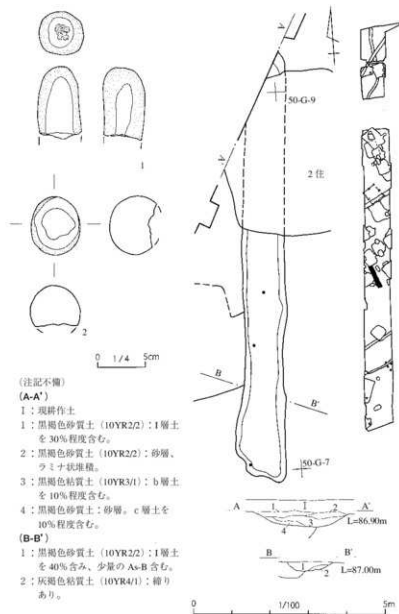
深さ：— cm

(Pi3) 径：40 × 37cm

深さ：— cm

構造 本柵列群は東西方向に並ぶ3基のピットから成る。

柱穴はピット1・2が隅丸長方形、ピット3が隅丸方形を呈する。底面形態は明瞭ではないが丸底を呈するものと思慮される。



1号溝 (第83図、P.L.14・26)

概要 本溝は2区中部に位置する。北西側が調査区外に出ていて全容は明らかにできなかった。

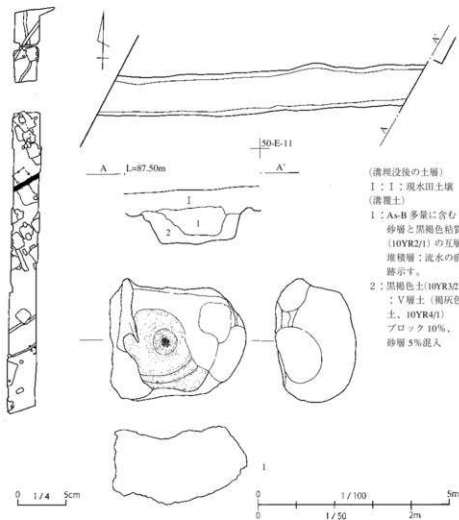
本溝は2号住居並びに4号土坑を切っている。

本溝の掘削意図は特定できなかったが、堆積土壌等から埋没は流水に伴うものと判断される。

遺物 量的には多くなかったが、土師器坏・壳片を中心に須恵器片、磨石(1・2)、凹石(J105)等の出土が見られた。

時期 本溝は重複関係から8世紀後半以降の所産ではあるが、時期は特定できなかった。

第83図 1号溝と出土遺物



第84図 2号溝と出土遺物

規模 長さ：11.3 m 幅：120cm 深さ：40cm

構造 本溝は走行を南北に取り北端で走行を北西に変じている。

掘削形態は箱型を呈するが、壁面はやや開き気味である。

2号溝 (第84図、P L 14・27)

概要 本溝も2区北部に所在する。

断面観察から、本溝は掘り直しの可能性が考慮される。尚、本溝の掘削意図は不明であるが、掘り直し段階の埋土である1層土には流水の痕跡が認められる。

遺物 量的には多くなかったが、土師器杯・壺片を中心に須恵器片、台石(1)、の出土が見られた。

時期 本溝は律令期以降の所産と認識されるが、時

期を特定することはできなかった。

規模 長さ：8.1 m

幅：122～140cm

深さ：47cm

構造 本溝は東西方向に走行を取り、挑戦的なプランを呈する。

掘削形態は箱型である。

3・4号溝

(第85図、

P L 14・27)

概要 3・4号溝は4区中程に位置する。

3号溝の北側は浅くなって消え、両溝とも南側は路線外に出るため確認できなかった。

4号溝が3号溝南側から分岐して在るが、新旧関係を特定するこ

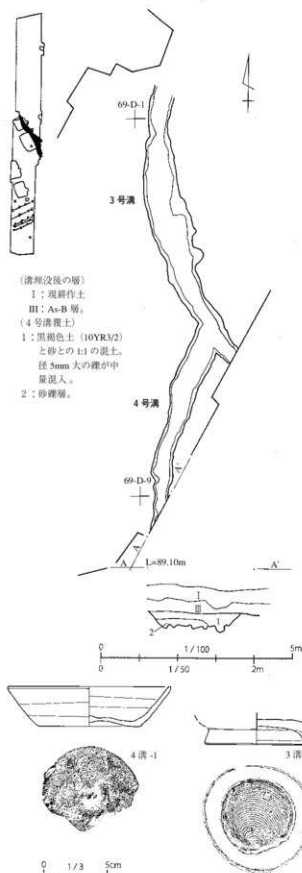
とはできなかったものの、位置関係から推して並存していたものと想定される。また3号溝は22・23号住居と重複するが新旧関係を記録に残すことはできなかった。一方、4号溝は23・24号住居と重複しこれらを共に切っている。

尚、両溝の掘削意図も特定できなかった。

遺物 3号溝からは多くの、4号溝からは比較的多くの、土師器杯・壺を中心に次いで須恵器杯(4溝-1)・碗(3溝-1)や古墳時代前・中期の土師器壺・甕、そして須恵器蓋・甕の出土が見られた。3号溝からは量は少なかったが須恵器壺、炭化物、スラグの出土も見られた。

時期 両溝は何れも8世紀後半以降の所産と認識されるが、共に細かい時期は特定できなかった。

規模 (3溝) 長さ：7.4 m 幅：48～108cm



第85図 3・4号溝と出土遺物

深さ：- cm

(4溝) 長さ：4.8 m 幅：36～74cm

深さ：25cm

構造 3号溝は北北東から入って南東方向に抜ける反時計回りに弧を描くような走行を取り、4号溝は調査区内の3号溝南端近く南南西に向かってから分岐してやはり反時計回りに弧を描くような走行を取って、南端部では南方向に向かって走行している。共に溝幅は一定しておらず、側縁のラインも一定ではなかった。

掘削形態は両溝共に箱堀であるが、4号溝の24号住居との重複箇所の底面には凹凸が見られる。

5・6号溝 (第86図、P L 14)

概要 5・6号溝は2区南部に位置し、他遺構との重複は見られなかった。

また、両溝共に東西両側が調査区外に出ているため全容を確認することはできなかった。

両溝共に掘削意図は特定できなかったが、覆土から推して掘削後比較的早い段階で埋め戻されたものと思慮される。また両溝は並走して在るため、道路に伴う側溝である可能性も残されている。

遺物 量は少なく、特に5溝では少なかったが、土師器坏・甕片を中心とし、6号溝では須恵器片や頁岩の剥片含む遺物の出土が見られた。

時期 出土遺物から律令期以降の所産と認識できるだけであり、両溝共に時期を特定することはできなかった。

規模 (5溝) 長さ：7.5 m 幅：40～50cm

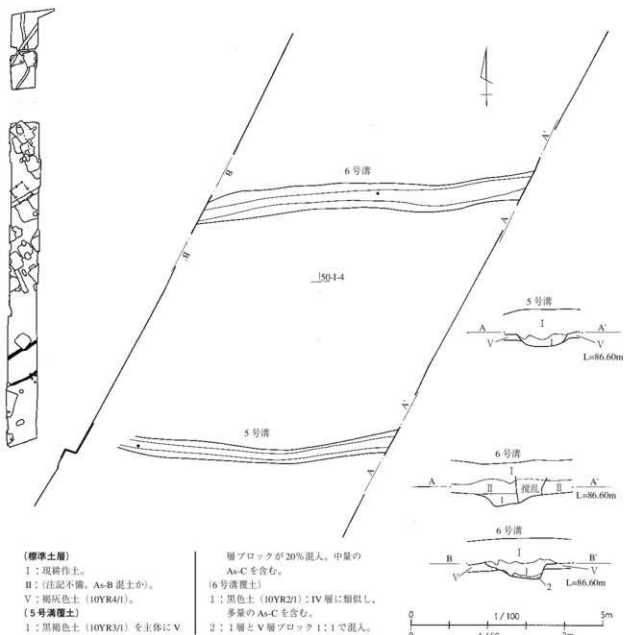
深さ：14cm

(6溝) 長さ：8.7 m 幅：64～80cm

深さ：18cm

構造 両溝共に走行を東西に取る。プランは直線的だが、共に調査区東寄りでは東北東方向に僅かに屈曲する。

また共に掘削形態は箱堀状を呈するが、横断面形はやや丸底気味である。



第86図 5・6号溝

8号溝 (第87図、P L 15)

概要 本溝はI区の北部、7号住居と29号住居の間に位置している。

本溝の北東・南西両端は調査区外に延びているため、余容を把握することはできなかった。また削平によって調査範囲の中程では遺構が失われていた。

本溝の掘削意図を特定することはできなかった。その走行は7・29号住居の軸方向には一致しないが、2区南部の27号住居の軸方向に近い。

遺物 僅かに土師器壺・甍片4点を出土している。

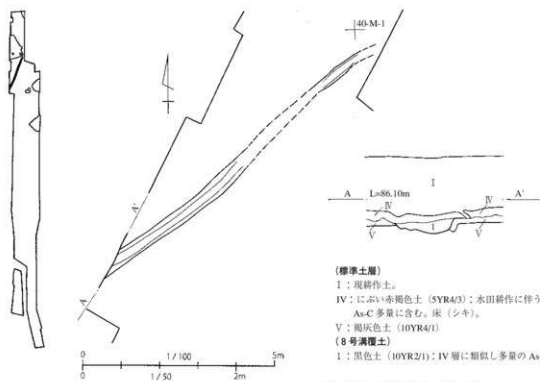
時期 本溝の時期の特定はできなかったが、調査段階では平安期の可能性が高いという所見である。

規模 長さ：9.2m 幅：25～48cm

深さ：15cm

構造 本溝は北北東-南南西に走行を取る。極めて緩やかに蛇行するプランを呈している。

掘削形態は箱壘状で、底面の掘削形態は凹凸激しく、通常の溝とは異なる。



第87図 8号溝

9号溝 (第88図、P.L.15・27)

概要 本溝は2区北部に位置している。

東西両側が調査区外に出ているため、全容を確認することはできなかった。

本溝は32号住居並びに10号溝と重複するが、何れに対しても本溝の方が新しい。

また本溝もその掘削意図を特定することはできなかった。

遺物 土師器坏・甕、須恵器葉片併せて6点と施釉陶器碗の破片1点、敲石(1)1点を出土したに過ぎなかった。

時期 本溝は覆土にAs-Bを含むことから1108年以降の所産で、且つ時的にあまり下らない頃のものとして認識される。

規模 長さ：14.6m 幅：55～78cm

深さ：35cm

構造 本溝は北東-南西方向に走行をとり、直線的なプランを呈している。

掘削形態は箱堀である。底面は平たいが、部分的に凹凸の見られる箇所がある。

10号溝 (第88図、P.L.15)

概要 本溝も2区北部の遺構集中域の一角に位置している。

本溝もまた南北両側が調査区外に出ているため、全容を確認することはできなかった。

本溝は33号住居と9号溝と重複しているが、何れよりも本溝の方が古い。

また本溝も、その掘削意図を特定することはできなかった。

遺物 本溝からは土師器片4点と須恵器片1点を出土したに過ぎなかった。

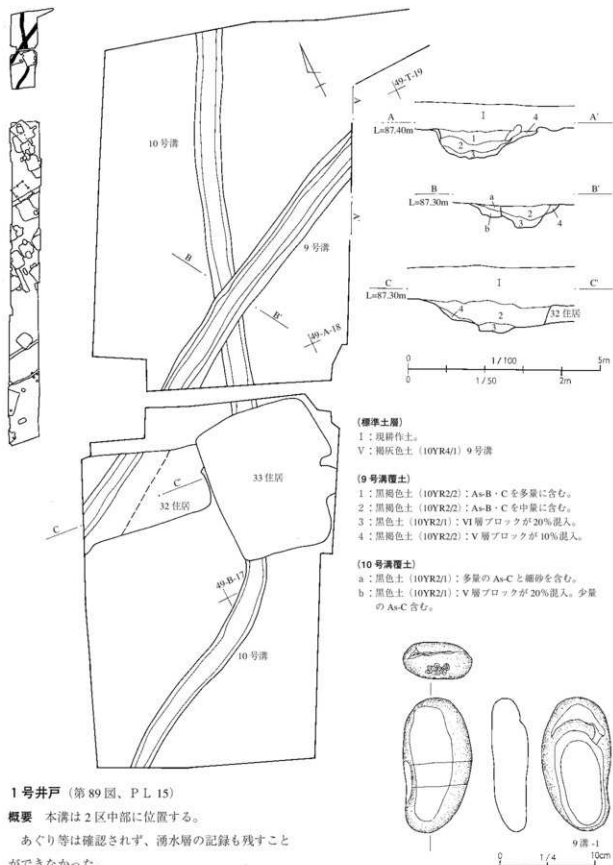
時期 本溝は9世紀前半以前の所産と見られるが、その時期は明瞭ではない。

規模 長さ：11.4m 幅：50～78cm

深さ：18cm

構造 本溝は、調査範囲に於ける中・北部では北北東-南南西方向に走行を取り、同じく中南部の33号住居との重複箇所より南では走行を南西方向に変じている。そのプランは緩やかに蛇行するものの直線的である。

本溝の掘削は浅かったが、掘削形態は葉形箱状を呈している。



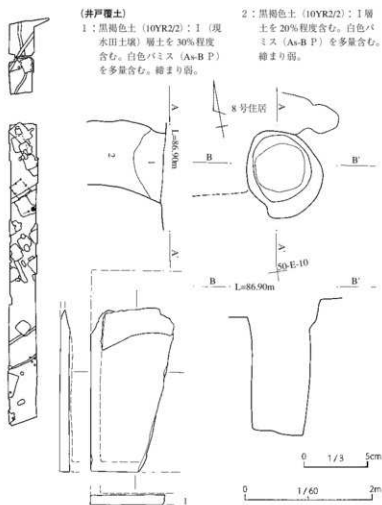
1号井戸 (第89図、P.L.15)

概要 本溝は2区中部に位置する。

あぐり等は確認されず、湧水層の記録も残すことができなかった。

遺物 土師器・甕を中心に須恵器蓋・坏・甍片や

第88図 9・10号溝と9号溝出土遺物



第89図 1号井戸

古式土師器片等や硯 (1) の出土が見られた。

時期 本井戸は律令期以降の所産と判断されるが、時期を特定することはできなかった。

規模 径：142×114cm 深さ：206cm

構造 本井戸は上位楕円形、本体円形のプランを呈する。

井筒型の井戸であり、底面は東部がやや低くなっている。

2号井戸

(90図、P L 15・27)

概要 本溝は1区中部に位置している。

あぐり等は確認できず、湧水層の記録も残せなかった。

遺物 本井戸からの出土遺物は僅かであり、土師器坏片2点と蔽石 (1) が出土したに過ぎない。

時期 律令期以降の所産と思慮されるが、時期は特定できなかった。

規模 径：92×80cm

深さ：98cm

構造 本井戸は円形プランを呈する小型の井戸である。

井筒型で、底面は平底である。

3号井戸 (第91図、P L 15・27)

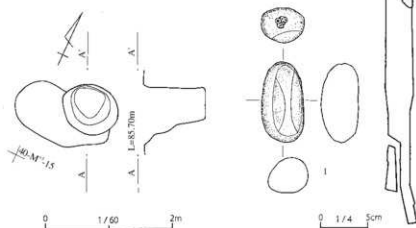
概要 本溝は2区中部に位置する。

部分的に弱いあぐりが残るため底面より65cm付近に湧水層があった可能性が考慮されるが、湧水層に関する記録を残せなかった。

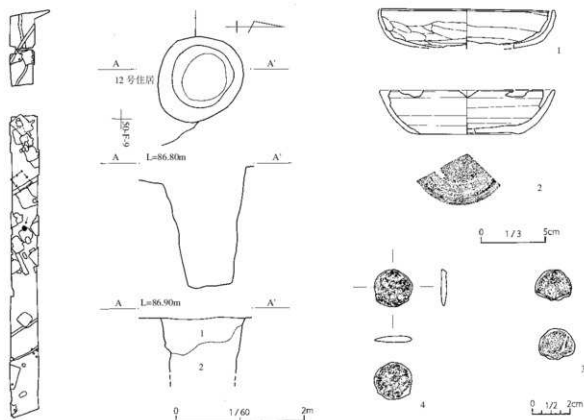
遺物 量的には多くなかったが、土師器坏片 (1)・堯を中心に坏片 (2) 等の須恵器片や古式土師器片、或いは泥面子 (3・4) 等

の出土が見られた。

時期 本井戸の時期も明瞭ではないが、出土遺物から推して9世紀前半期頃の可



第90図 2号井戸と出土遺物



(井戸覆土)

- 1 : 黒褐色土 (10YR3/2) : 暗褐色土 20% 含む。As-B (?) を多量含む。締まり弱くほそはそしている。
 2 : 黒褐色土 (10YR2/2) : 暗褐色土 20% 含む。締まり弱くほそはそしている。

第91図 3号井戸と出土遺物

能性が考えられる。

規模 径：133 × 132cm

深さ：182cm

構造 本井戸のプランは南東部が凹みかかるような楕円形を呈する。

井筒型の井戸で、底面は平底である。また底面より42～99cm付近に4cm厚以下の弱いあぐりが形成されている。

4号井戸 (第89図、P.L 15)

概要 本溝は2区南部に位置する。

あぐり等は確認されず、湧水層に関する記録も残せなかった。

遺物 本井戸からは古式土師器片1点と剥片1点が

出土したに過ぎない。

時期 本井戸の時期は特定ならされなかった。

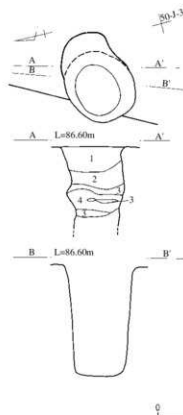
規模 径：114 × 105cm 深さ：175cm

構造 本井戸のプランは楕円形を呈している。
 井筒型を呈し、底面は平底である。

土坑 (第93～97図、P.L 15・16・27)

概要 本遺跡では1区で2号土坑の1基、2区で1・3・5～7・9～12・14・15・31・33号土坑の13基、3区で8・22・23・26～28・41号土坑の7基、4区で13・30号土坑の2基の合わせて23基の土坑を確認、調査した。以下これら23基の土坑について一括報告する。

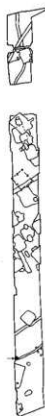
尚、本遺跡では発掘調査当初の10遺構を合わせた30基を土坑として調査していたのであるが、このうち調査段階で14・15・20・21・25号土坑を9号掘立柱建物と認識してピット1・6・9・10・11に、16・17・18・19・24号土坑を5号掘立柱建物のピット5・2・4・3・1に挿入し、処理して



第92図 4号井戸

(井戸覆土)

- 1: 黒褐色砂質土 (10YR 2/2): As-B 混土か、ロームブロック5%混じる。白色軽石粒 (As-C・FA) を含む。
 2: 黒褐色砂質土 (10YR 2/2) を主体。ロームブロック10%混る。白色軽石粒 (As-C・FA) を少し含む。
 3: 地山ローム (10YR 4/6) ブロック主体。
 4: 2層に似る。



貯蔵用に掘削された可能性が考慮される。

遺物 本土坑群では1・2・3・5・6・8～12・14・15・22・23・27・30・31号土坑から土師器片を中心とする若干の出土遺物が得られたが、他の土坑からの遺物の出土は認められなかった。また1号土坑からは、打製石斧 (J88) が出土した他、6号土坑からは古銭 (6坑-1)、31号土坑から台石 (31坑-1～3)、33号土坑から黒色頁岩の薄片 (J94) の出土も見られた。

時期 遺物の出土した土坑は何れも律令期以降の所産と確認されるが、このうち重複遺構との関係から

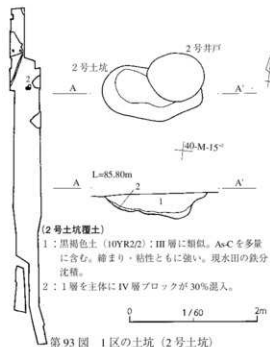
いる。ちなみに4・29・32番は欠番である。

さて本遺跡の土坑は1区北部から4区南部にかけて遺存していたが、全体としては分散して位置しており、土坑の集中する区域等は認められなかった。

また10号土坑と11号土坑、15号土坑と14号土坑が重複関係にあったが、何れも前者が後者を切っている。一方、4号土坑は2号住居と1号溝に切られ、7号土坑は12号住居を、9・10号土坑は16号住居を、11号土坑は15号住居を、14・15号土坑は17号住居を切る。11号土坑は16号住居と、12号土坑は15・16号住居と、22号土坑は8号建物と、27号土坑は9号建物、41号土坑は5号掘立柱建物と重複するが新旧関係は特定できなかった。

尚、各土坑の掘削意図を特定することはできなかったが、中近世に多く見られ近現代の芋穴に似た形状から貯蔵穴と見られている長方形プランのものが多くことから推して、2・8・26・33号土坑以外は

11号土坑は8世紀以降、覆土の観察か (以下93頁) から13号土坑は4世紀以降、7・8・9・10・26・27・

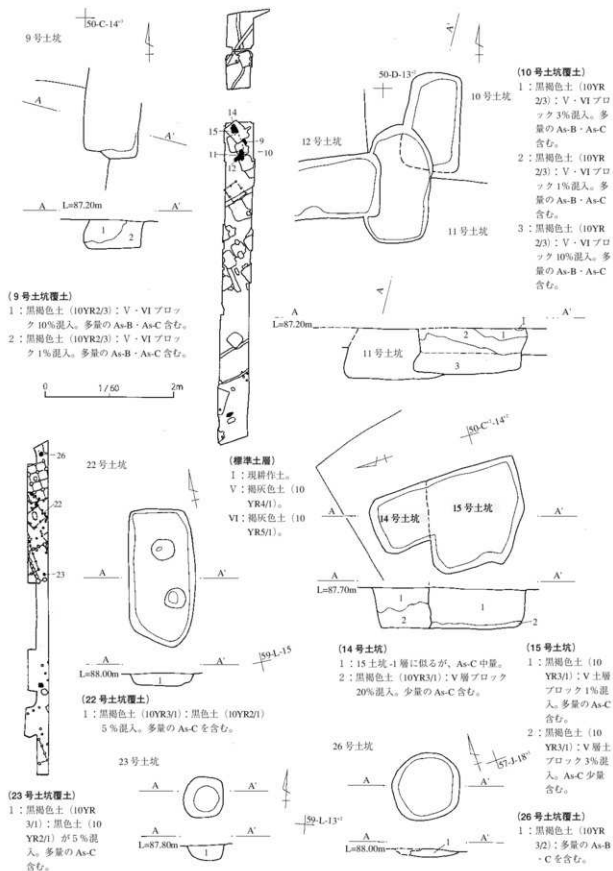
**(2号土坑覆土)**

- 1: 黒褐色土 (10YR2/2): III層に類似。AsCを多量に含む。粘まり・粘性ともに強い。現水田の鉄分沈積。
 2: 1層を主体にIV層ブロックが30%混入。

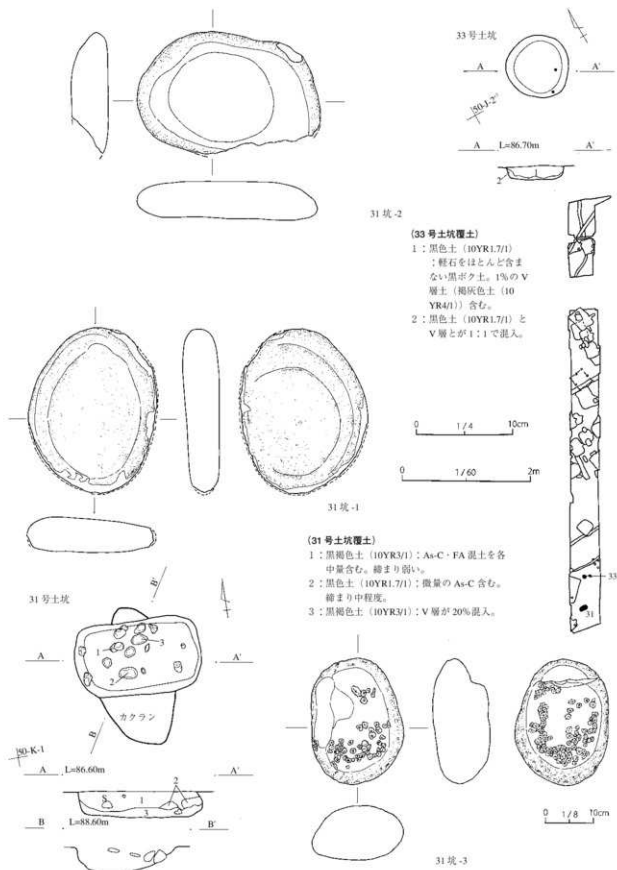
第93図 1区の土坑 (2号土坑)



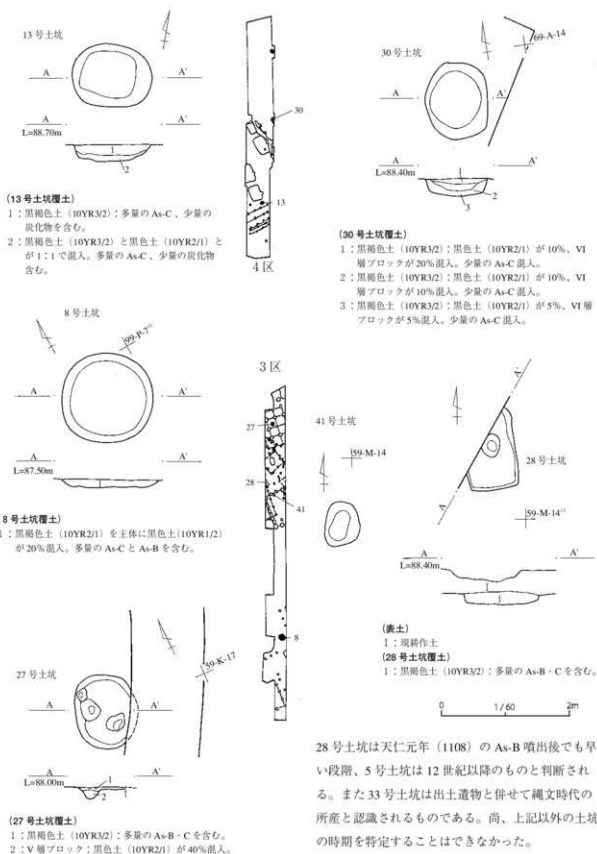
第94図 2区の土坑群と出土遺物(その1)



第95図 2区の土坑群と出土遺物(その2)



第96図 2区の土坑群と出土遺物 (その3) 及び3区の土坑 (その1)



第97図 3区の土坑(その2)及び4区の土坑群

28号土坑は天仁元年(1108)のAs-B噴出後でも早い段階、5号土坑は12世紀以降のものと同断される。また33号土坑は出土遺物と併せて縄文時代の所産と認識されるものである。尚、上記以外の土坑の時期を特定することはできなかった。

規模 (次頁の表3参照)

構造 各土坑のプランは、2・27・30号土坑が楕円

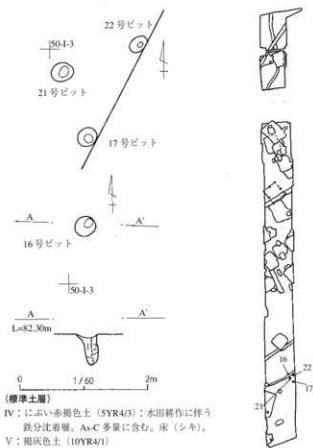
第3章 富田新井遺跡で発見された遺構と遺物

表3 新井遺跡土坑一覧

No.	径	深さ	平面形態	縦断形態	位置	遺物	備考
1	150×186	82	隅丸長方形	袋状、平底	2区	有り	東部の縦外
2	156×81	40	楕円形	船底状	1区	有り	
3	224×128	104	滴形	地下式坑状	2区	多い	地下式坑か
5	170×70	30	隅丸長方形	箱形、平底	2区	有り	
6	157×62	5	隅丸長方形	箱形、平底	2区		
7	174×133	28	隅丸長方形	箱形、平底	2区		
8	143×142	12	円形	錐鉢形、平底	3区	有り	
9	140×90	86	長方形	やや袋状、平底	2区	有り	16区より新
10	167×82	75	長方形	やや袋状、平底	2区	有り	11区より新
11	188×102	80	隅丸長方形	やや袋状、平底	2区	有り	10区より古
12	140×97		長方形	やや袋状、平底	2区	有り	
13	126×100	126	隅丸長方形	箱形、平底	4区		
14	246×90	63	楕円形	箱形、平底	2区	○	14c-15
15	1190×156	63	不正形	箱形、平底	2区	○	15a-14
22	220×106	20	長方形	箱形、平底	3区	有り	
23	77×65	23	隅丸長方形	箱形、平底	3区	有り	
26	111×108	12	円形	丸底	3区		
27	120×100	16	楕円形	平底、直面上小坑	3区	有り	
28	128×84	52	長方形	箱形、平底	3区		
30	122×98	29	楕円形	缶形、平底	4区	有り	
31	200×120	42	長方形	やや袋状、平底	2区	有り	継ぎく入る
33	102×100	22	円形	缶形、平底	2区		
41	72×54	31	隅丸長方形	丸底か	3区		

表4 新井遺跡ピット一覧

No.	径	深さ	平面形態	縦断形態	位置	遺物	備考
1	29×24	62	隅丸方形	尖底	3区		柱脚か
2	30×24	27	円形	丸底か	3区		9号掘立と重覆
3	64×34	36	楕円形	平底か	3区		
7	27×26	19	隅丸方形	丸底か	3区		
8	32×29	22	隅丸方形	丸底か	3区		
10	36×30	65	楕円形	丸底か	3区		8号掘立と重覆
11	40×30	28	楕円形	尖底か	3区		8号掘立と重覆
12	52×32	21	隅丸長方形	平底か	3区		
13	37×34	29	楕円形	丸底か	3区		
14a	40×28	46	隅丸台形	丸底か	3区		
14b	40×(22)	18	隅丸方形	丸底か	3区		14号bピットと重覆
14c	35×28	29	楕円形	丸底か	3区		59-54-14付添
15	28×23	27	楕円形	尖底	4区		柱穴、柱痕跡 9cm
16	33×30	32	楕円形	丸底	2区		柱穴、柱痕跡 10cm
17	31×30	40	円形	丸底か	2区		
21	35×29	41	楕円形	丸底か	2区		
22	30×21	41	楕円形	丸底か	2区		
23	30×30	25	隅丸方形	丸底か	3区		
24	(42)×44	29	隅丸三角形	尖底か	3区		
25	40×36	30	楕円形	丸底か	3区		
26	33×31	24	楕円形	丸底か	3区		
27	38×33	23	隅丸方形	尖底か	3区		
28	30×27	22	隅丸方形	尖底か	3区		
29	42×38	19	楕円形	丸底か	3区		
30	35×31	32	隅丸方形	尖底か	3区		
31	40×32	25	楕円形	尖底	3区		8号掘立と重覆
32	40×34	30	隅丸方形	平底か	3区		
33	22×20	17	楕円形	尖底か	3区		9号掘立と重覆
34	30×24	21	隅丸方形	丸底か	3区		9号掘立と重覆
35	30×22	25	隅丸長方形	尖底	3区		9号掘立と重覆
36	32×24	25	隅丸長方形	丸底か	3区		9号掘立と重覆
37	32×(12)	24	隅丸方形	丸底か	3区		9号掘立と重覆
38	38×32	-	隅丸台形	尖底	3区		
39	30×27	-	隅丸台形	丸底か	3区		
40	41×30	-	楕円形	平底か	3区		
41	38×28	24	方形	丸底か	4区		4号溝と重覆
42	36×34	29	隅丸方形	尖底	4区		3号溝と重覆
43	32×26	33	隅丸三角形	尖底か	4区		
44	36×28	37	隅丸方形	丸底か	4区		3号溝と重覆
45	32×28	33	円形	尖底か	4区		3号溝と重覆
46	34×30	17	楕円形	平底か	4区		23号柱跡と重覆
47	38×28	48	隅丸台形	丸底か	4区		23号柱跡と重覆



(標準土層)

IV: に近い赤褐色土 (SYR4/3); 水田耕作に伴う鉄分沈着層。As-C 多量を含む。床 (シキ)。

V: 褐色土 (10YR4/1)

VI: 褐色土 (10YR5/1)

(16号ピット柱痕)

1: IV層に似る。As-C、FA含む。

(16号ピット覆土)

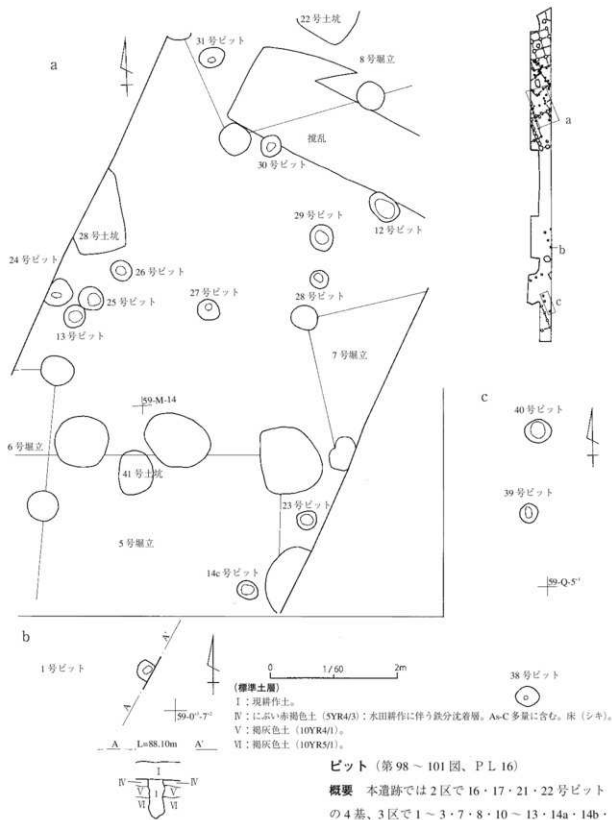
2: V層 (As-C、Hb-FA混入) とIV層 (地山ローム) の混土。

3: V層 (地山ローム) アロック; IV層を少し含む。覆土が底面の覆戻し。

第98図 2区のピット群

形、3号土坑が滴形、8・26・33号土坑が円形、15号土坑が不整形を呈する他は長方形或いは隅丸方形を呈している。その長軸は1・5・6・7・10・11・14・22・23・30号土坑が堅穴住居の長軸方向に当たる南北を向き、12・13・31号土坑はこれに直行する東西方向を向いている。

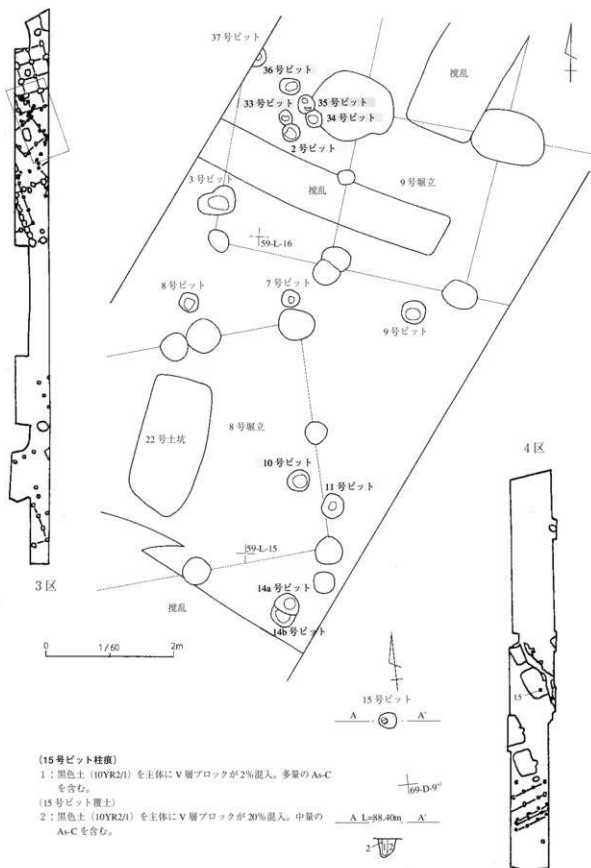
掘削形態は1・9～12・31号土坑が袋状、3号土坑が地下式坑状、8号土坑が錐鉢形、26・30・31が缶形を呈する以外は箱形を呈している。また底面形態は2号土坑が舟底形、26・31・41号土坑が丸底を呈する以外は平底であった。



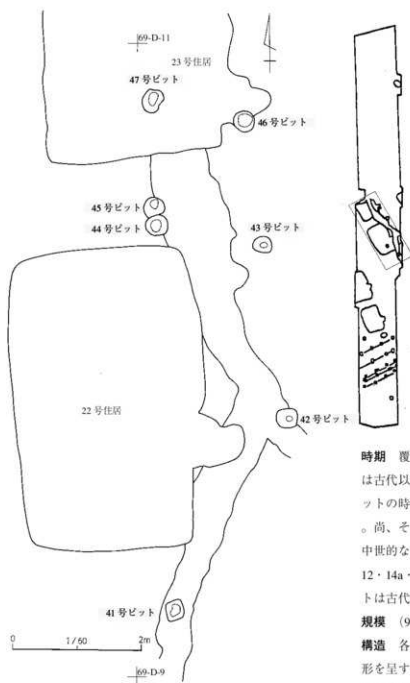
第99図 3区のピット群 (その1)

ピット (第98～101図、P L 16)

概要 本遺跡では 2 区で 16・17・21・22 号ピットの 4 基、3 区で 1～3・7・8・10～13・14a・14b・23～40 号ピットの 30 基、4 区で 14c・41～47 号ピットの 8 基の合わせて 42 基の全体として小型のピットを確認、調査した。



第100図 3区のピット群 (その2) と4区のピット (その1)



第101図 4区のピット群(その2)

さて本道跡でピットは2区南部から4区南部にかけて遺存していたが、2区南部、3区中北部、4区南部の22号住居付近に集中した分布域等が認められ、単独で在るものは少ない。

ピットのうち2・33～37号ピットは9号掘立柱建物と、14号ピットは5号掘立柱建物と、10・31・

31号ピットは8号掘立柱建物と、41号ピットは4号溝と、42・44・45号ピットは3号溝と、46・47号ピットは23号住居とそれぞれ重複するが、何れも新旧関係は特定できなかった。

15・16号ピットは土層断面観察から柱痕が見出され、柱穴であったことが確認できるが、建物或いは構列としては抽出できなかった。また他のピットも形態的には柱穴或いは杭の打設痕の可能性を有するが、その可否を特定することはできなかった。

遺物 本項に記載する全てのピットで出土遺物を得ることはできなかった。

時期 覆土の観察から1・14・15号ピットは古代以前の所産と確認されたが、他のピットの時期を特定することはできなかった。尚、その規模は全体として比較的小型で中世的な傾向を示すもの多かったが、3・12・14a・14b・24・29・31・32・40号ピットは古代的な傾向を示している。

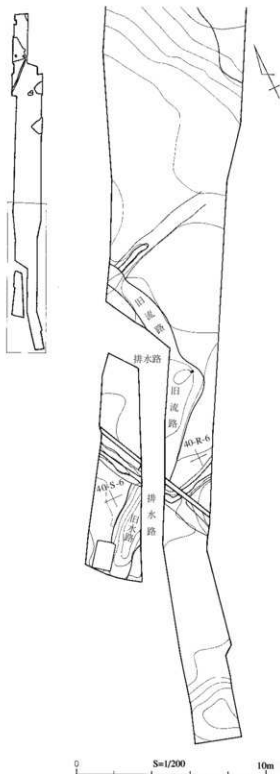
規模 (98頁の表4参照)

構造 各土坑のプランは、3号ピットが靴形を呈する以外は、方形か円形のものに大別できる。このうち方形の部類に属するものは1・7・8・21・14a・14b・23・24・27・28・30・32・34～39・41～44・47号ピットである。

掘削形態は概ね柱穴様を見せており、底面形態は1・7・11・15・22・24・27・28・30・31・33・38・42・43・45号ピットが尖形気味、3・12・32・40・46号ピットが平底気味である以外は概ね丸底状であった。

As-B 下水田 (第102図、P L 16)

概要 1区南部は土地が低くなっており、浅間山噴出のAs-B軽石で被覆した水田跡が確認された。



第102図 As-B 下水田

遺存状態は不良で、中ほどでは旧流路による窪みも確認された。

大きな流水の方向は北西から南東に向けてであろうと思慮される。

遺物 出土遺物は得られなかった。

時期 本水田址は水田面を被覆するテフラから天仁元年(A.D.1108)に埋没した、12世紀初頭以前の所産のものとして確認される。

規模 範囲：35×7.5 m

(畦) 幅：51～70cm 高さ：5cm

構造 本水田址は一部が調査できたに過ぎず、畦畔も遺存状態が良好ではなく、或いは調査区外に出たり旧流路の窪みにさえぎられているため構造を詳らかにすることはできなかった。

本水田址は遺跡南側の大泉坊川支流となると見られる谷地形へ向かう緩傾斜面を削って造られた、幅29m以上の平坦面上に造られている。個々の耕作面は範囲として確認することはできなかったが、調査した範囲の中心に南側を画する判断される西北西-東南東走行の畦1条と、8.2 m程隔てた位置に水田区画を区切っていたものと判断される東北東-西南西走行の畦2条が確認された。高、後者のうち南に在るものの西端部は前者に接続していた。

噴砂痕 (P L 17)

概要 2区6号住居付近で噴砂痕跡が確認された。

6号住居と重複し、これを切っている。

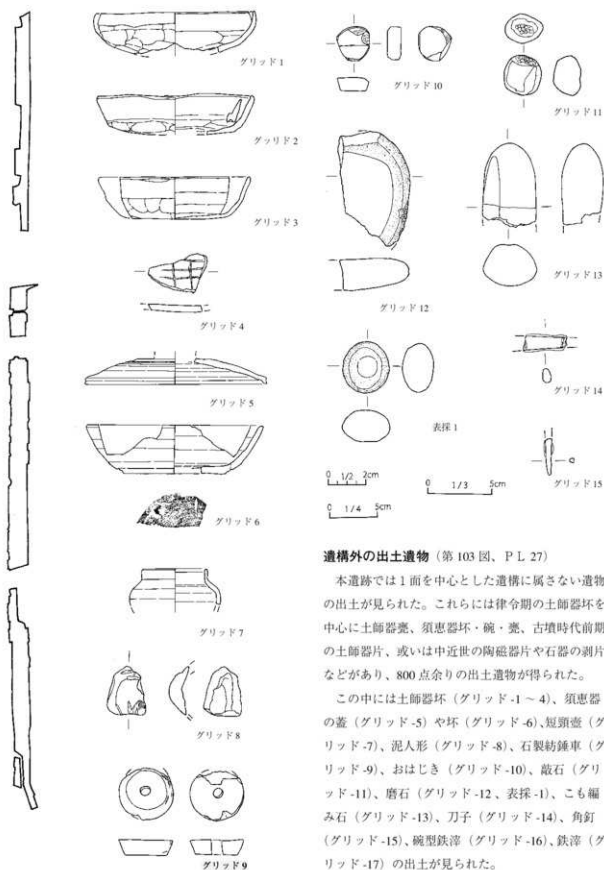
遺物 出土遺物は見られなかった。

時期 噴砂の時期は特定できなかったが、地位の地震の記録に照らして、弘安9(818)年の地震に伴うものと想定される。

規模 長さ6.8 m 幅20cm以下

構造 本噴砂痕跡は3条ほどのものが、直列、或いは筋違い不連続に連なっている。プランは全体として中・北部では南北に走るが、南部の6号溝の重複部分では北北東-南南西に走行を変えている。

断面の観察が行えなかったので、地下の状態は把握できなかった。



第103図 遺構外の出土遺物

遺構外の出土遺物 (第103図、P.L. 27)

本遺跡では1面を中心とした遺構に属さない遺物の出土が見られた。これらには律令期の土師器杯を中心に土師器甕、須恵器杯・碗・甕、古墳時代前期の土師器片、或いは中近世の陶磁器片や石器の剥片などがあり、800点余りの出土遺物が得られた。

この中には土師器杯(グリッド-1～4)、須恵器の蓋(グリッド-5)や杯(グリッド-6)、短頸壺(グリッド-7)、泥人形(グリッド-8)、石製紡錘車(グリッド-9)、おはじき(グリッド-10)、敵石(グリッド-11)、磨石(グリッド-12)、表採-1)、こも編み石(グリッド-13)、刀子(グリッド-14)、角釘(グリッド-15)、碗型鉄滓(グリッド-16)、鉄滓(グリッド-17)の出土が見られた。

第2節 2面の出土遺物

本遺跡に於いては1区から4区にかけて縄文時代の遺物の出土を見ている。
 本節に於いては遺構からの出土遺物、或いは旧石器の試掘調査途中で出土したものも含めて一括報告することとする。

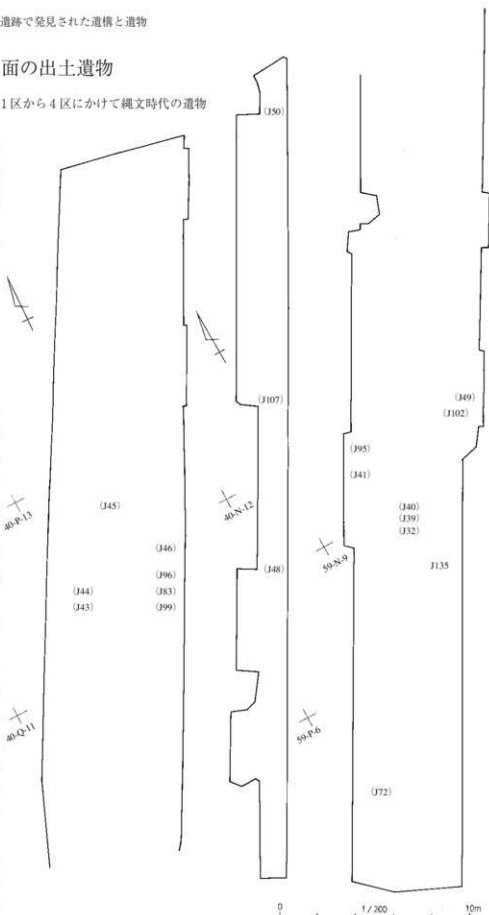
遺物包含層

(第104～114図
 P.L. 17・18・27～31)

概要 遺物包含層からの出土遺物は、特に2区南半部に於いて濃密な出土状態を示した。主には縄文時代前期の土器片と頁岩中心の石器片など750点を上回る出土遺物が得られた。

この2区南部の集中域と中程及び北よりに一箇所づつブロックと呼べるような集中的な分布域も見られた。尚、遺徳平、今次遺物整理に於いて細かい検討などを行うことができなかった。

遺物 上述のように2区の遺物包含層を中心に縄文土器片や石器剥片など多数の



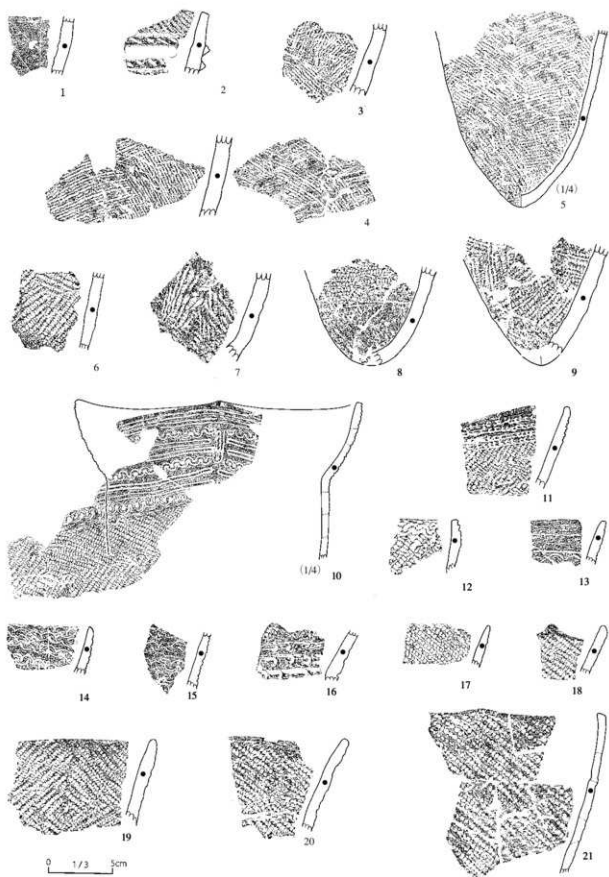
第104図 縄文包含層遺物分布図 (その1: 左1区、中3区、右4区)

出土遺物が得られたが、遺構等出土のものを含む縄文時代の遺物には、縄文土器片 (J1 ~ 55・29住-13)、土製円盤 (J56)、未製品と思われる1点を含む

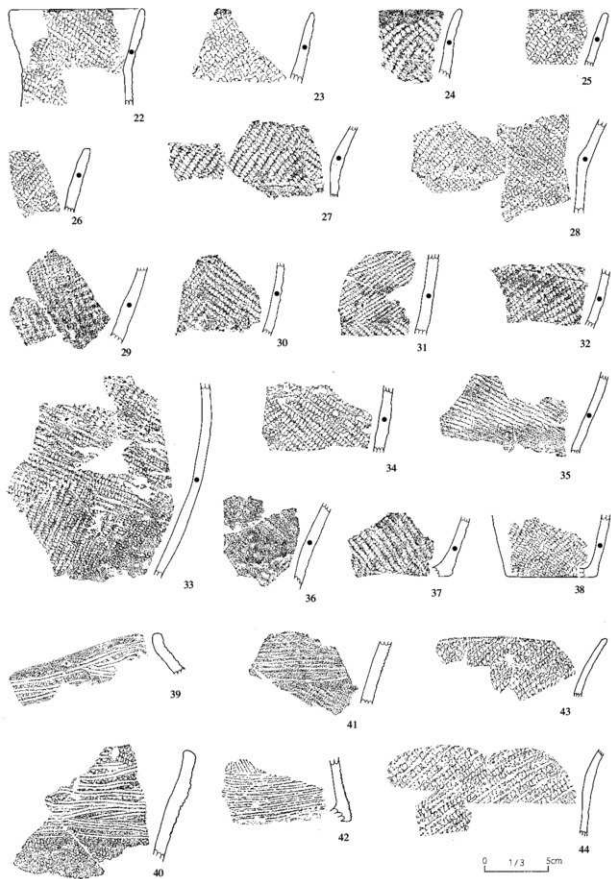
む石鏃 (J57 ~ 76)、撥形石器 (J77・78)、スクレーパー (J79 ~ 83)、未成品含む打製石器 (J84 ~ 88・135)、石核らしきもの (J90・91)、(116頁へ)



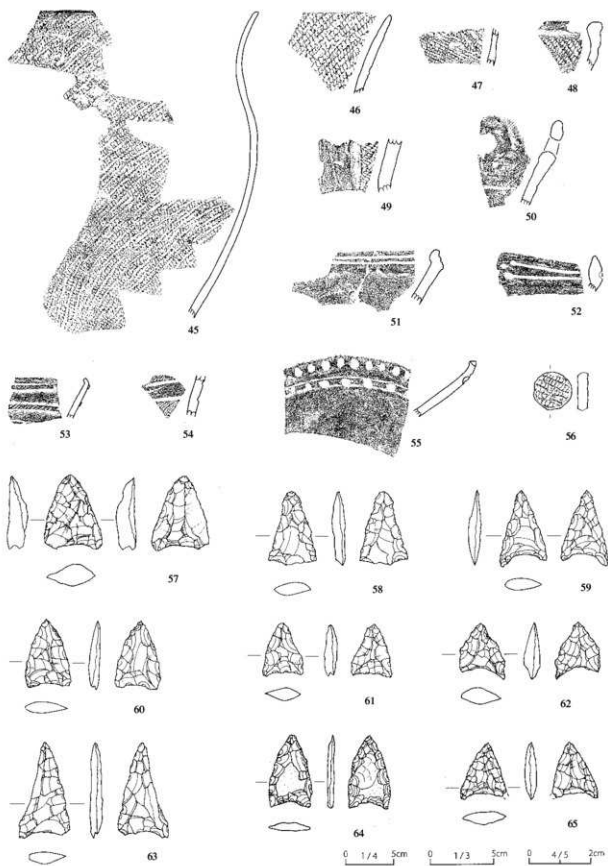
第105図 縄文包含層遺物分布図 (その2:左2区北半部、右2区南半部)



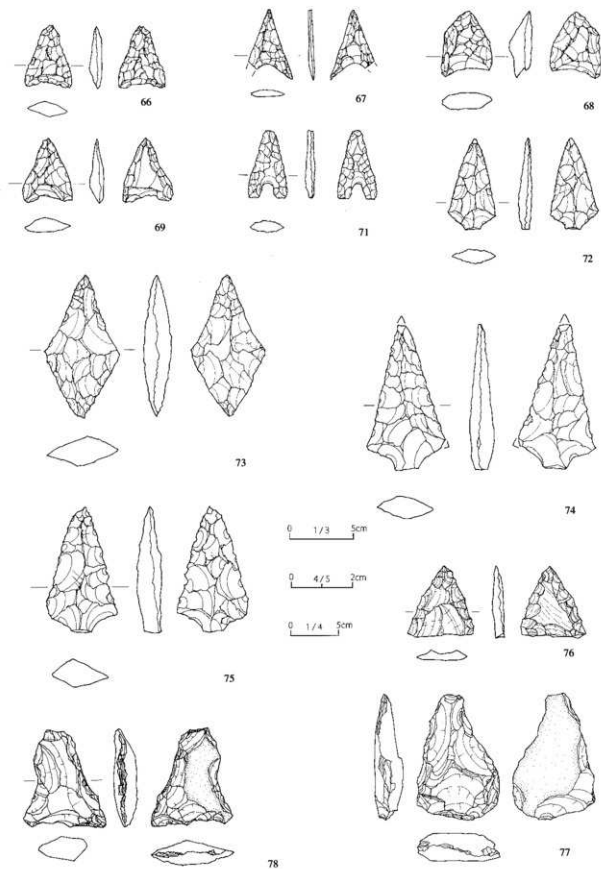
第106図 縄文時代出土遺物（その1）



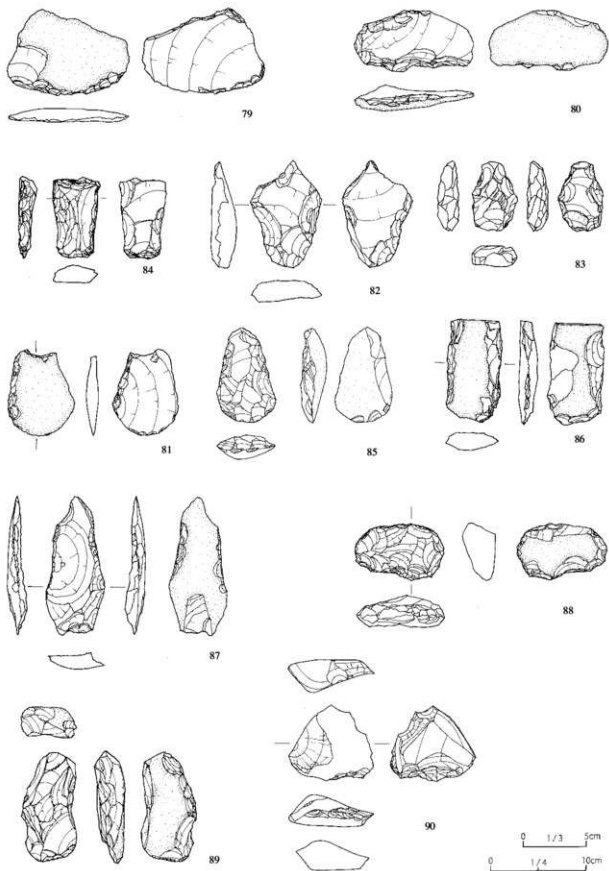
第107図 縄文時代出土遺物 (その2)



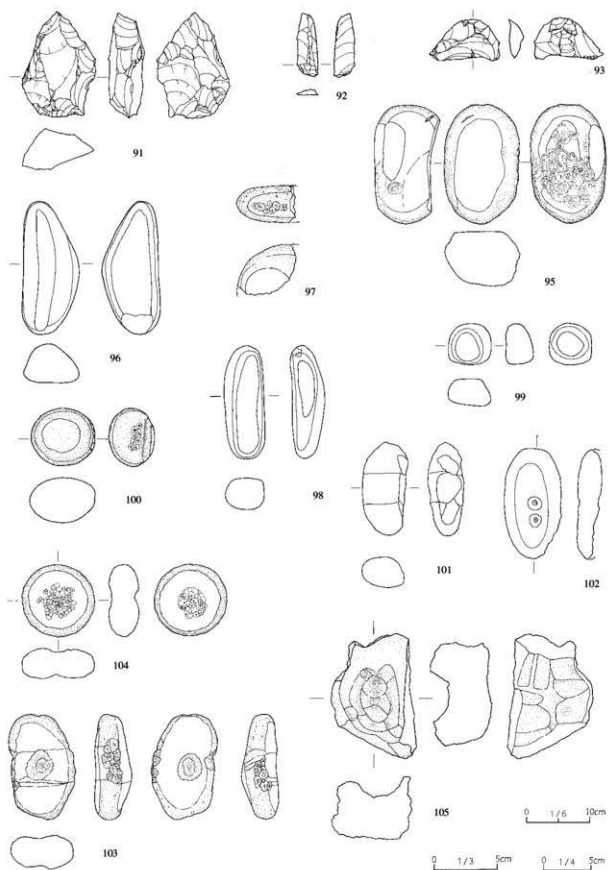
第108図 縄文時代出土遺物 (その3)



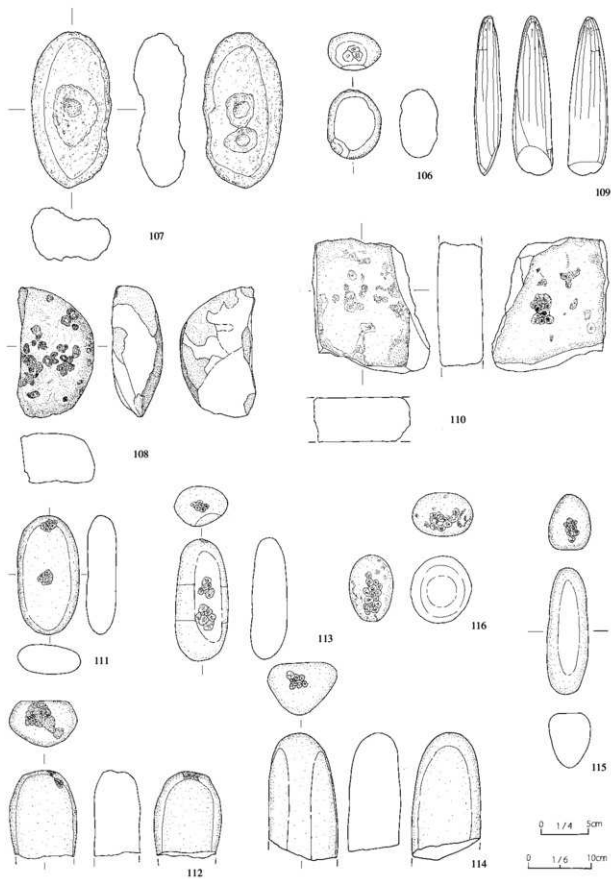
第109図 縄文時代出土遺物 (その4)



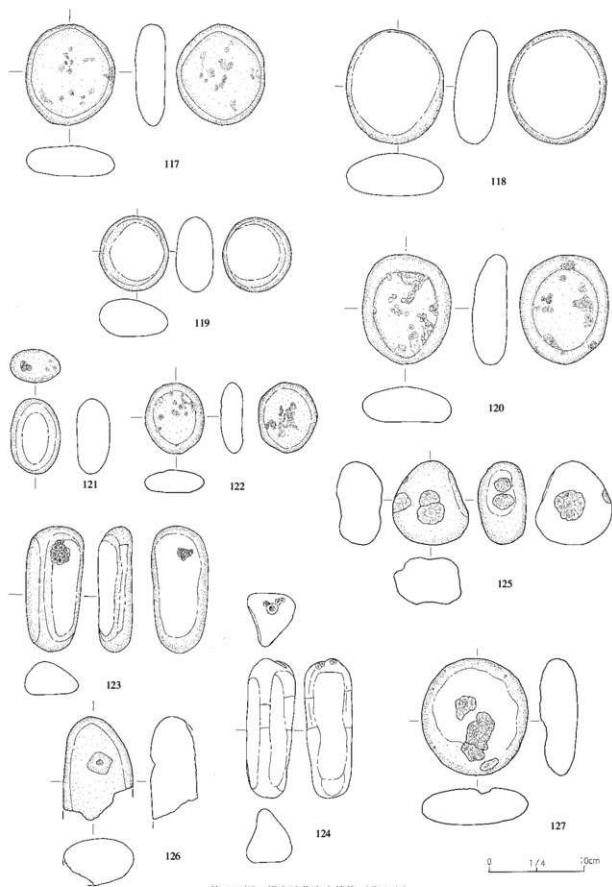
第110図 縄文時代出土遺物（その5）



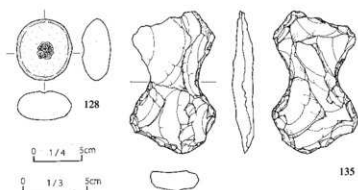
第111図 縄文時代出土遺物（その6）



第112図 縄文時代出土遺物（その7）



第113図 縄文時代出土遺物（その8）



第114図 縄文時代出土遺物(その9)

フレーク (J92～94)、石皿 (J95、110も可能性あり)、磨石 (J96～100)、こも編み石 (J101)、凹石 (J102～107・125～128)、多孔石 (J108)、磨製石斧 (J109)、敲石 (J111～116・129)、磨石 (J117～124・130～134) などが見られた。

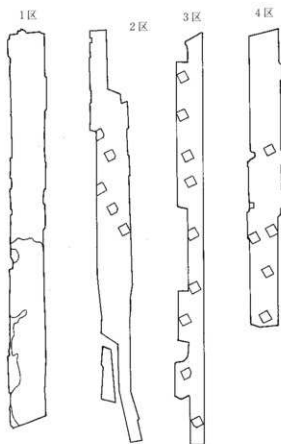
第3節 旧石器の試掘調査

本遺跡に於いては1面或いは2面終了時にグリッドに沿った調査区画を設定して旧石器の試掘調査を実施したが、当該時期の出土遺物を得ることはできなかった。

縄文土器(片)には早期の縄ヶ島台式 (J1)、前期の花積下層式と見られるもの (J2～9)、黒浜式 (J10～38)、諸磯b式 (J39)、諸磯c式 (J42)、前期後葉所産のもの (J42～47)、中期の加曾利E3式 (J48・49)、後期の堀之内1式 (J50～52・55)・2式 (J53・54)があった。

尚、遺物番号は「J」を付しているが、写真図版では見易くするため、番号の前に「縄文-」を付して標記している。

時期 上記の縄文土器の所見から縄文時代の遺物包含層は概ね前期を中心とする時期と確認された。

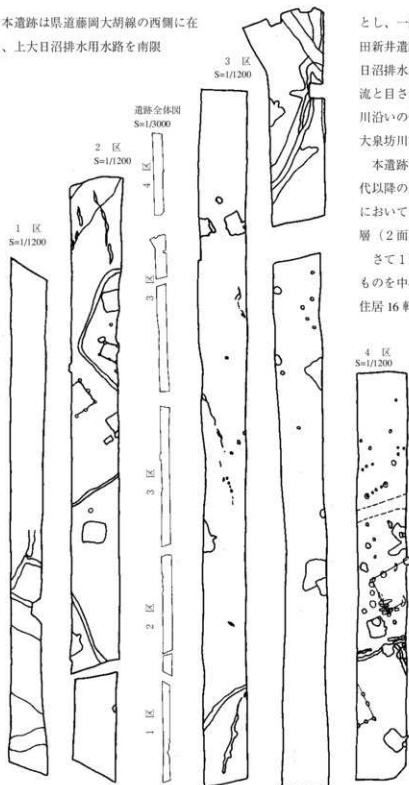


第115図 旧石器試掘坑設定位置図

第4章 富田大泉坊B遺跡で発見された遺構と遺物

第1節 1面の遺構と遺物

本遺跡は県道藤岡大胡線の西側に在り、上大日沼排水用水路を南限



第116図 富田大泉坊B遺跡1面(左から、1区、2区、遺跡全体、3区、4区)

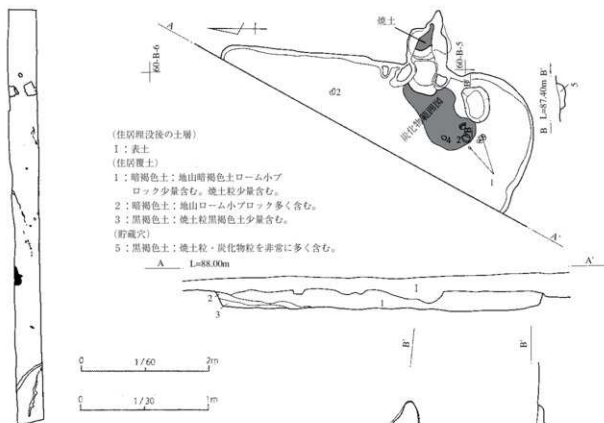
とし、一般河川大泉坊川を北限とする。富田新井遺跡同様、南部の1区南寄りが大日沼排水用水路付近に在った大泉坊川の支流と目される旧河道の、4区北端が大泉坊川沿いの低地部となる以外、殆どの区域は大泉坊川右岸の台地上に立地している。

本遺跡で調査の中心を成したのは古墳時代以降の遺構面(1面)であったが、2区においては2節に後述する縄文時代の包含層(2面)も調査している。

さて1面では2～4区にかけて律令期のものを中心とした集落遺構を調査し、竪穴住居16軒、掘立柱建物4棟、道路2条、

溝11条、井戸1基、土坑13基を調査したが、弘仁9年(818)の地震に伴うものと見られる地割れ跡6箇所を確認した。またこれらに伴って律令期のものを中心とした遺物の出土も見た。尚、後世使用の可能性がない明らかな縄文時代の遺物については2面出土の遺物と併せて後述の第2節に報告する。

また第1章に述べたように平成18年度調査の2区及び平成19年度調査の4区の遺構番号については、平成16・17年度調査からの引継ぎに不備があったため、当初区番号を付した年度毎の遺構番号を付したが、本報告では通番に振り直し、各遺構に新旧番号を併記した。



1号住居

(第117・118図、P.L.33・46)

概要 本住居は3区南半部の中程南寄りに在る。過半が調査区外に出て東側の一部を調査したに過ぎない。

他遺構との重複はない。

遺物 出土遺物は僅かであったが、土師器杯(1・2)、須恵器杯(3)、磨石(4)の出土が見られた。

時期 本住居の時期は明瞭ではないが、出土遺物から推して概ね8世紀後半期の所産と判断される。

規模 径:508×(220)cm

深さ:28cm

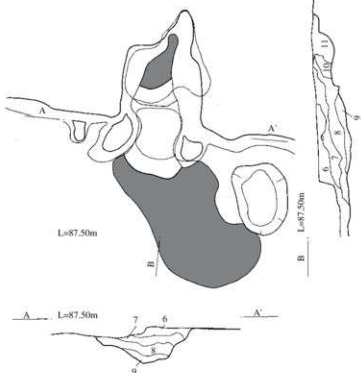
(竈) 幅:113cm 奥行:132cm

左袖 幅:57cm 長さ:78cm

右袖 幅:28cm 長さ:34cm

燃焼部 径:36×57cm

深さ:15cm



(カマド覆土)

6:暗褐色土:地山ローム粒少量含む。

7:暗褐色土:地山ローム粒多く含む。焼土粒少量含む。

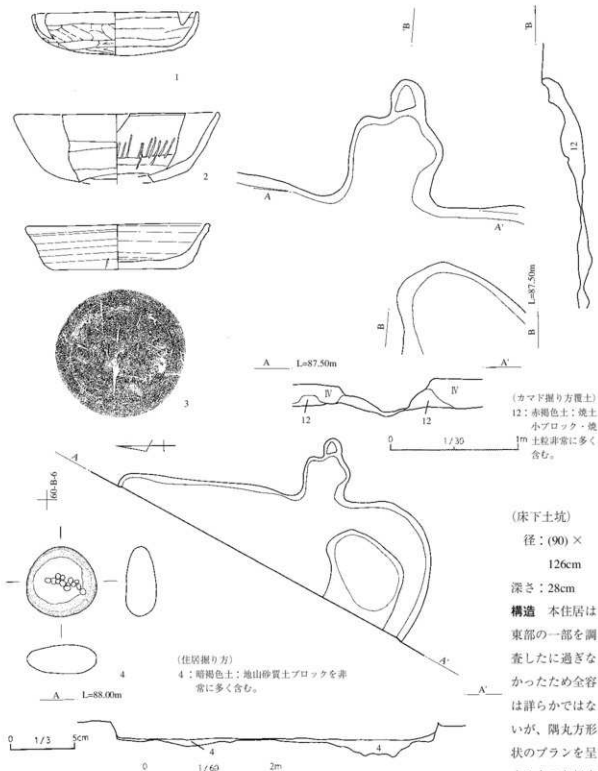
8:暗褐色土:地山ロームブロックと焼土粒・ブロック多く含む。

9:黒褐色土:炭化物粒と多焼土粒多く含む。

10:赤褐色土:焼土ブロックと地山ロームブロックとの混土層。

11:黒褐色土:IV(Aa-C)混入の暗褐色土)層土と同じ。

第117図 1号住居と竈



第118図 1号住居掘り方及び竈掘り方と出土遺物

煙道 下幅: 25cm 長さ: 67cm

掘り方 径: 63 × 67cm

深さ: 7cm

(貯藏穴) 径: 57 × 45cm 深さ: 8cm

竈右側手前に土坑を伴う掘り方を有し、これを地山砂質土を非常に多く含む暗褐色土で埋めて床を作り出している。

竈は東壁南寄りに設ける。壁面を大きく削り込ん

で浅い掘り方を掘削し、これを焼土を多く含む土壌で埋め戻して燃焼面を作っている。燃焼部両側には掘り方と同じ土壌で袖を作り出している。

床面の竈右手前には楕円形プランの浅い貯蔵穴が掘削される。尚、柱穴は確認されなかった。

2号住居 (第119～121図, P.L.33・46)

概要 本住居は3区南半部北寄りに所在する。

他遺構との重複はなかったが、竈の煙道部の先端が調査区外に出ていて調査できなかった。

尚、西側床面は少し削り過ぎているようである。

遺物 土師器 坏 (1・2)・
 甕 (3・4)、須恵器蓋 (5)
 ・坏 (6)、砥石 (7・8) の
 出土が見られた。

時期 出土遺物から推して
 本住居は9世紀前半期の所
 産と認識される。

規模 径: 345 × 306cm

深さ: 32cm

(竈) 幅: 112cm

奥行き: 99cm

左袖 幅: 39cm

長さ: 29cm

右袖 幅: (40)cm

長さ: (27)cm

燃焼部 径: 45 × cm

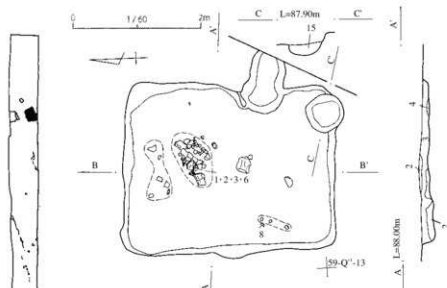
深さ: (95)cm

掘り方 径: 43 × 78cm

深さ: 24cm

(貯蔵穴) 径: 60 × 58cm

深さ: 16cm



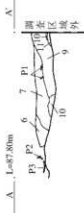
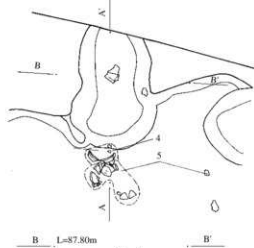
(住居覆土)

- 1: 3層土と同じ。
- 2: 暗褐色土; 灰色粘土ブロック多く含む。
- 3: 暗褐色土; 地山砂質土小ブロック・焼土粒少量含む。

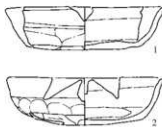
4: 暗褐色土; 地山砂質土ブロック多く含む。

(貯蔵穴)

- 15: 暗褐色土; 地山砂質土小ブロック・焼土粒少量含む。



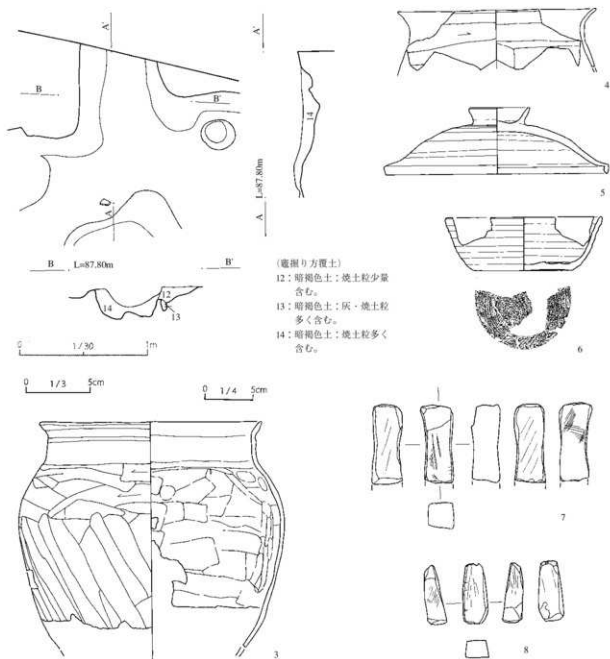
0 1/30 5cm



(オマド覆土)

- 6: 暗褐色土; 焼土粒ごくわずかに含む。
- 7: 暗褐色土; 焼土ブロック多く含む。
- 8: 灰色土; 灰を主体とする層で、焼土粒少量含む。
- 9: 暗褐色土; 焼土粒・灰ブロック少量含む。
- 10: 灰色土; III層と同じ。
- 11: 暗褐色土; 灰ブロックを多く含む。

第119図 2号住居及び竈と出土遺物 (その1)



第120図 2号住居竈掘り方と出土遺物(その2)

(床下土坑) 径: 141 × 163cm 深さ: 21cm

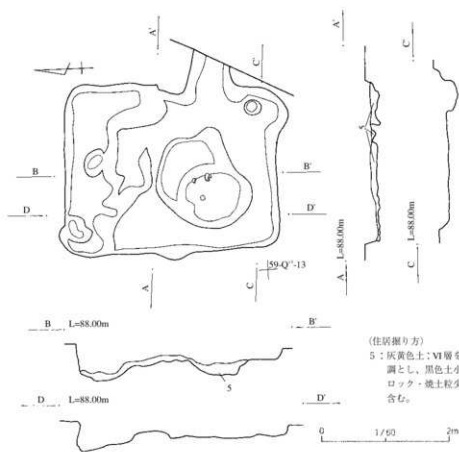
構造 本住居は横長の隅丸方形プランを呈する。

竈手前に土坑状の掘り込み、北壁と東壁北部に幅84cm以下、深さ35cm以下の溝状の掘り込みの掘削される掘り方を有し、これを灰黄色土で埋め戻して床面を作っている。

竈は東壁南寄りに設けられる。先端が調査区外に在るため煙道等は詳らかでないが、壁面を削り込ん

で浅い掘り方を掘削し、これを焼土粒を多く含む暗褐色土で埋め戻して燃焼面を作り出している。燃焼面両側には削り残しによる袖を設けており、その内側には竈掘り方に使用されたのと同じ土壌を乗せて床を形成している。

床面に於いて柱穴を確認することはできなかったが、竈右側には南壁面にもたせ掛けるように貯蔵穴が掘削されている。



第121図 2号住居掘り方

3号住居 (第122～124図, P L 33・34・46)

概要 本住居は3区南半部に在って、その北寄りに位置している。

4号住居と重複しているが、これに切られていて遺存状態は良好ではなかった。

また本住居はその東寄りを調査できたに過ぎず、過半は西側調査区外に出ていて調査することができなかった。

尚、本住居は掘り方覆土の状況から、所謂お掃除住居と判断されるものであり、従って建替えのあったことが確認される。

遺物 本住居からは土師器片を中心とした遺物の出土が見られたが、量的には多くなかった。この中には土師器坏 (1)、須臾器坏 (2)・甕 (3)の出土が見られた。また重複する4号住居と本住居の何れに属するか判断できなかった遺物には土師器坏 (3・4住-1)・甕 (3・4住-2)があった。

時期 本住居の時期は明確にはできなかったが、出土遺物から推して西暦900年を前後する時期の所産と考えたい。

規模 径: 3.6 × (153)cm

深さ: 29cm

(竈) 幅: 96cm 奥行: 96cm

左袖 幅: 15cm

長さ: 21cm

燃焼部 径: 39

× 57cm

深さ: 7cm

煙道

下幅: 25cm

長さ: 24cm

(貯蔵穴) 径: 79 × 90cm

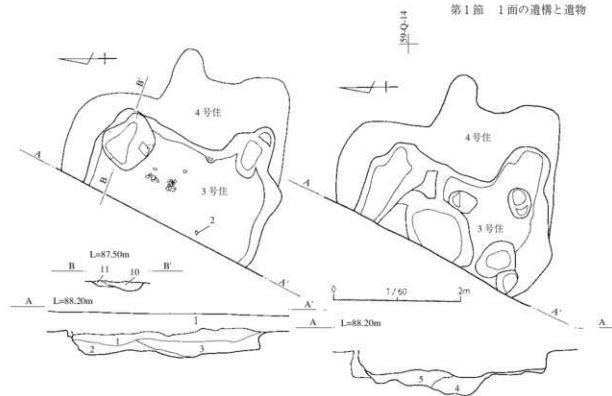
深さ: 35cm

構造 上述のように本住居はその一部を調査できたに過ぎなかったために全容は詳らかにできなかったが、プランは概ね隅丸方形様を呈するものと思える。

大小の掘り込みを伴う掘り方を有し、これを焼土を多く含む黄褐色土や灰を多く含む暗褐色土で埋め戻して床面を作り出している。

竈は東壁の南東隅に近い位置に設置されている。竈の掘り方は住居の掘り方と一体のものを有しており、これを黒褐色土等で埋め戻して燃焼部を作り出している。その左側には掘り残しの袖の痕跡が認められるが、袖や天井の構造は明らかにすることはできなかった。

床面に於いては竈左側の住居北東隅部に隅丸方形プランの貯蔵穴の掘削が確認されたが、柱穴を確認することはできなかった。



I : 表土

(住居覆土)

1 : 暗褐色土 : 地山砂質土小ブロック・白色パミス (As-C か) 多く含む。

2 : 暗褐色土 : 地山砂質土小ブロック少量含む。

3 : 黒褐色土 : 地山砂質土小ブロック・焼土粒少量含む。

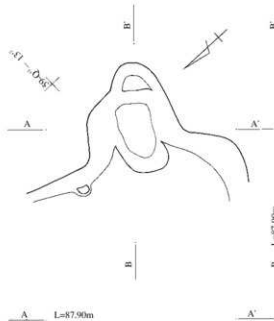
(住居掘り方覆土)

4 : 黄褐色土 : 地山砂質土ブロックを多く含む。焼土粒多く含む。

5 : 暗褐色土 : 焼土小ブロック・灰小ブロック多く含む。(貯蔵穴)

10 : 黒褐色土 : 地山砂質土粒少量含む。

11 : 黄褐色土 : 地山砂質土ブロック多く含む。



0 1/3 5cm

(竈覆土)

6 : 暗褐色土 : 地山砂質土ブロックを多く含む。焼土粒少量含む。

7 : 黒褐色土 : 地山砂質土小ブロック少量含む。

8 : 黒褐色土 : 焼土粒少量含む。炭化粒僅かに含む。

第122図 3号住居と住居掘り方と竈及び出土遺物 (その1)



第123図 3号住居電掘り方と出土遺物(その2)

4号住居 (第124～126図、P.L. 34・46)

概要 本住居は3区南半部の北部に位置している。

3号住居と重複しており、これを切っている。また本住居の西側は調査区外に出ていて調査することができず、或いは3号住居を先行掘削したため充分に遺構を確認することはできなかった。

遺物 本住居からは土師器・甕片を中心とした出土遺物が得られているが、この中で図示し得る遺物は土師器甕(1)1点のみであった。また前述したように重複する3号住居と本住居の何れに属するか判断できなかった遺物として、土師器杯(3・4住-1)・甕(3・4住-2)があった。

時期 本住居の時期は特定できなかったが、本住居と3号住居出土の出土遺物から推して、概ね9世紀前半期の所産と認識するものである。

規模 径：351×(303)cm 深さ：36cm

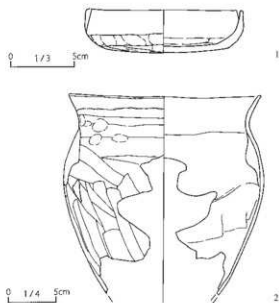
(竈) 幅：192cm 奥行：95cm

左袖 幅：79cm 長さ：33cm

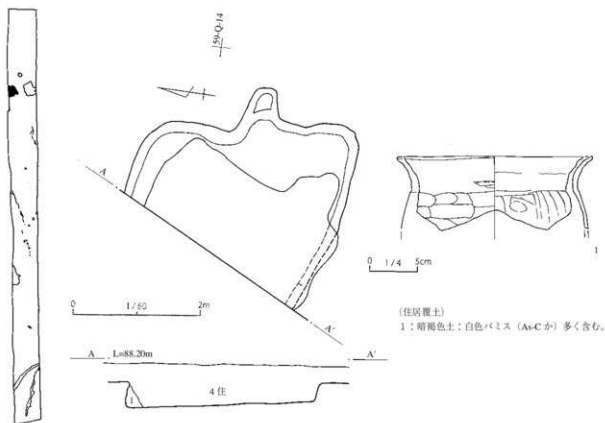
右袖 幅：63cm 長さ：21cm

丸方形様を呈するものと思慮される。

前述のように3号住居と一括で掘削したため、記録が残らなかったが、本住居は掘り方を有しており、これを埋め戻して床を作り出している。



第124図 3・4号住居の出土遺物



(住居覆土)

1：暗褐色土：白色パミス (A+C) が多く含む。

竈は東壁中程に設けられている。住居掘り方と一体の掘り方を有しており、黄褐色土や黒褐色土で埋め戻して焼面を作り出している。焼部の両側には袖に伴う地山の掘り残しの痕跡が認められるが、袖、天井の構造を確認することはできなかった。

また、掘削範囲に於いて貯蔵穴や柱穴を確認することはできなかった。

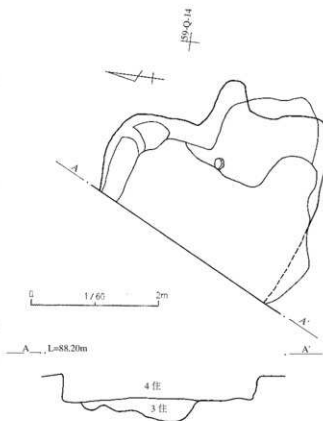
5号住居 (第127図、P.L.34)

概要 本住居は3区の北半部南寄りに位置している。

他遺構との重複は認められなかったが、大半が東側調査外に出ていてその一部を調査できたに過ぎなかった。

遺物 本住居からの出土遺物は全く得られなかった。

時期 出土遺物も無く、本住居の時期を特定する



第125図 4号住居と住居掘り方及び出土遺物

ことはできなかったが、周辺には律令期の集落が展開しているため、その一部を後世していた可能性を考慮することができる。

規模 径：(120)×(120)cm
深さ：5cm

構造 上述のように本住居は極一部を調査できたに過ぎなかったためその構造を明確にすることはできなかったが、プランは概ね隅丸方形様を呈するものと想定される。

本住居は凹凸のある掘り方を有しており、これを黄褐色土等で埋め戻して床を作り出している。

少なくとも確認範囲に於いては竈、炉、柱穴、貯蔵穴等の構造物を確認することはできなかった。

(標準土層)

II：暗褐色土：As-B 混入。

VI：灰黄色砂質土：洪水層。

(遺覆土)

1：暗褐色土：白色バミス (As-C 系) 多く含む。

2：暗褐色土：白色バミス (As-C 系) と砂質土少量含む。

3：黄褐色土：地山砂質土小ブロック (VI層)・焼土粒多く含む。

4：(注記不備)

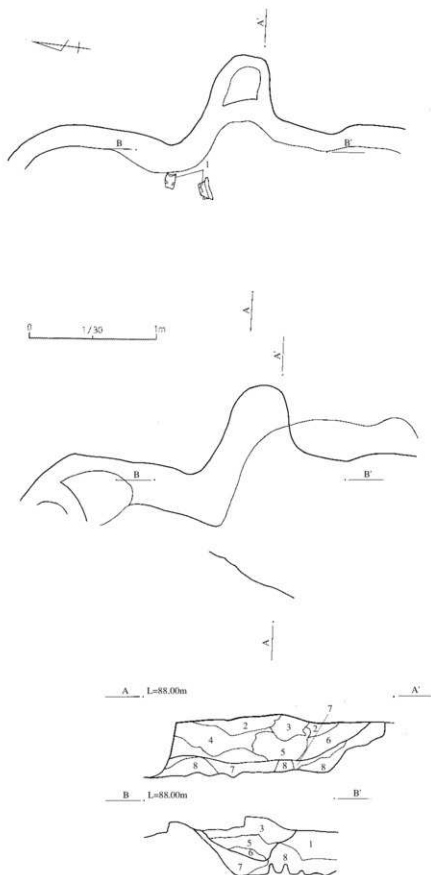
5：黄褐色土：II層に類似するが、やや多く焼土粒含む。

6：黄褐色土：地山砂質土小ブロック (VI層) 多く含む。焼土粒・灰小ブロック非常に多く含む。

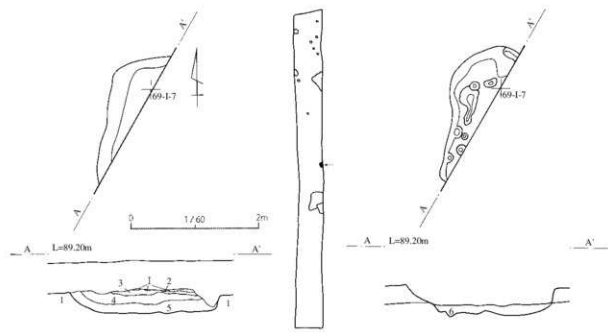
(カマド掘り方)

7：黄褐色土：IV層に類似するが焼土・灰小ブロック少量含む。地山砂質土小ブロック多く含む。炭非常に多く含む。

8：黒褐色土：白色バミス (As-C 系) 少量含む。5～15cm 大の地山砂質土小ブロック少量含む。



第126図 4号住居竈と竈掘り方



(地山)

1：表土；現耕作土。

1：暗褐色土；基本層序部分で灰黄色砂質土の上の層である。

(住居覆土)

2：暗褐色土；灰小ブロックをごく少量含む。

3：暗褐色土；地山砂質土小ブロック少量含む。

4：暗褐色土；白色パミス（As-Cか）多く含む。

5：暗褐色土；白色パミス（As-Cか）と焼土粒少量含む。

(掘り方覆土)

6：黄褐色土；地山砂質土ブロックを多く含む。

第127図 5号住居と掘り方

6号住居（第128・129図、P.L. 34・35・46）

概要 本住居は3区北半部の中程のやや北寄りに位置している。

本住居も他遺構との重複は認められなかったが、半ばが東側調査外に出ていて北西部を調査できたに過ぎなかった。

高、住居中程の底面から所謂三角地積層の上に乗るようになっている4層土（暗灰褐色土）の上方に少量ながら灰と炭らしきものが認められることから、焼却処分された焼失家屋である可能性が高いものと思慮される。

遺物 本住居からは土師器の坏（1～4）・甕（5）、須恵器の坏（6）・高台付碗（7）など、土師器坏・甕片を中心とした遺物の出土が見られた。

時期 本住居の時期は出土遺物から推して9世紀前半期の所産と判断される。

規模 径：(430)×(342)cm 深さ：50cm

構造 上述のように本住居はその一部を調査できた

に過ぎなかったため全容は詳らかにすることはできなかったが、方形或いは長方形のプランを呈していたものと判断される。

壁際に幅30～150cm、深さ4～12cmの不整形な周溝状の掘削が施される掘り方を有し、これを地山黄褐色土を多く含む褐色土で埋め戻して床面を作り出している。

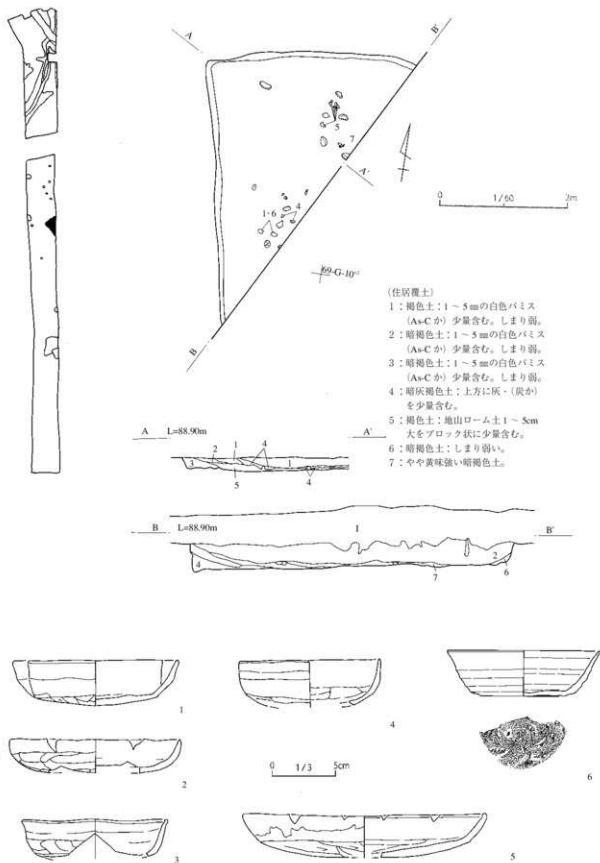
高、床面、掘り方面双方に於いて竈、柱穴、貯蔵穴等を確認することはできなかった。

7号住居（第130図、P.L. 35・46）

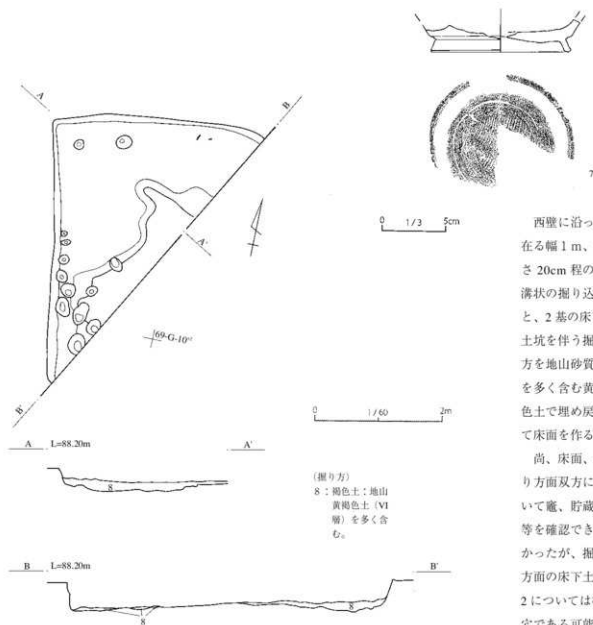
概要 本住居は3区北半部南寄りに位置している。

本住居はその北側で8号住居と重複し、これに切られている。また東側が調査区外に出ており、その西或いは北西側を調査できたに過ぎなかった。

遺物 出土遺物は多くはなかったが、土師器坏・甕片を中心に須恵器の坏（1）や甕（2）の出土が見られた。



第128図 6号住居と出土遺物 (その1)



第129図 6号住居掘り方と出土遺物(その2)

時期 本住居の時期は明瞭ではないが、概ね9世紀前半期の諸産と判断される。

規模 径：(276)×(180)cm 深さ：54cm

(床下土坑1) 径：(48)×(71)cm 深さ：6cm

(床下土坑2) 径：54×37cm 深さ：12cm

構造 本住居もまたその西側部分を調査できたに過ぎず、また調査範囲の北側も8号住居に壊されているため全容は詳らかでないが、東西方向に軸を取る隅丸方形様のプランを呈する堅穴住居である。

8号住居(第131図、P.L.35)

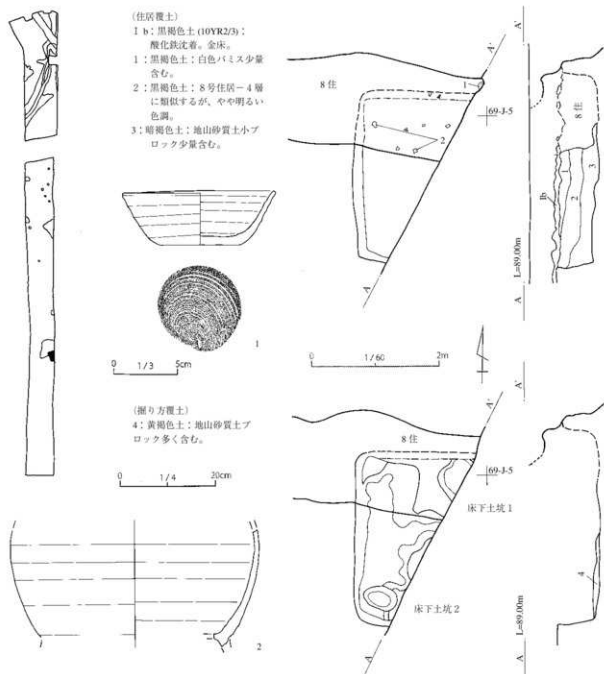
概要 本住居もまた3区北半部の南寄りに位置している。

本住居は南側で7号住居と重複してこれを切っている。しかし中・北部を撒乱によって大きく壊されており、また東側が調査区外に出ていて調査することはできなかった。

遺物 本住居に於いては土師器甕片20片が出土しているが、図示すべきものは見られなかった。

西壁に沿って在る幅1m、深さ20cm程の周溝状の掘り込みと、2基の床下土坑を伴う掘り方を地山砂質土を多く含む黄褐色土で埋め戻して床面を作る。

尚、床面、掘り方面双方に於いて竈、貯蔵穴等を確認できなかったが、掘り方面の床下土坑2については柱穴である可能性が考慮される。



第130図 7号住居と住居掘り方及び出土遺物

時期 7号住居との重複関係並びに出土遺物から9世紀以降の所産と把握されるに過ぎなかった。

規模 径:(370)×(484)cm 深さ:44cm

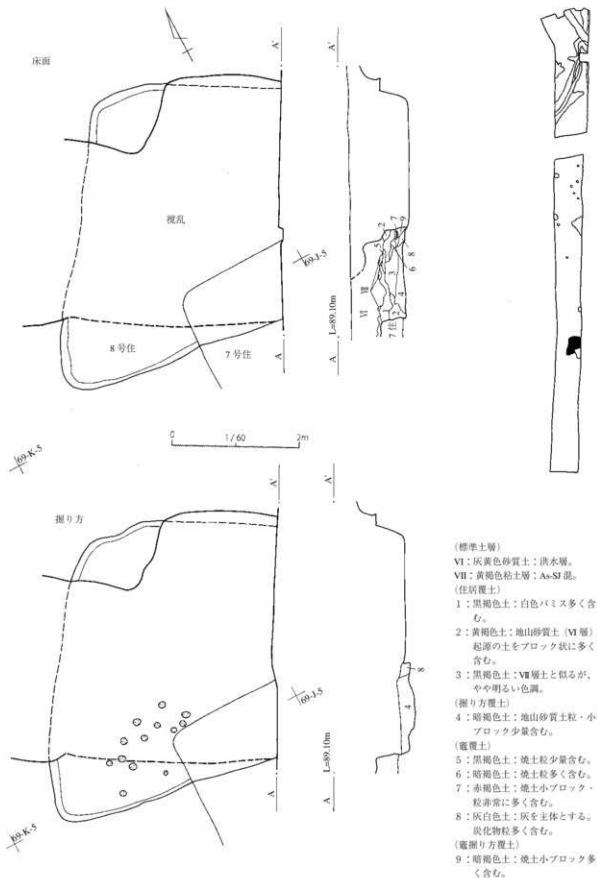
構造 本住居は上述のように東部側が調査区外に在り、また擾乱による滅失範囲が広いため、その構造は詳らかにすることはできなかった。

南部に掘削痕或いは植物痕と見られる径10cm程の小孔を伴う掘り方を有し、これを暗褐色土で埋め

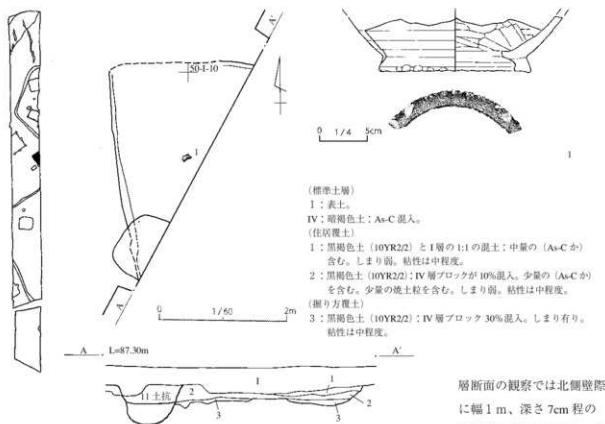
戻して床面を作っている。

住居断面の観察によって住居南東部に竈の存在を確認することができたが、遺構として面的に確認することはできなかった。

尚、床面、掘り方面双方に於いて竈、柱穴、貯蔵穴等を確認することはできなかった。



第131図 8号住居及び住居掘り方



第132図 9号住居と出土遺物

9号住居 (第132図、P.L.35・46)

概要 本住居は2区の中程に位置する。

調査範囲の南端で11号土坑と重複し、これに切られている。また南東側が調査区外に出ており、北西側を調査できたに過ぎなかった。

遺物 土師器環・堯片を中心に出土遺物は多くなかったが、須恵器堯片(1)なども見られた。

時期 出土遺物も少ないため時期特定はできなかったが、北西に近接する1号掘立柱建物と軸が近いので、律令期の所産として把握したい。

規模 径:(230)×(344)cm 深さ:20cm

構造 本建物もその一部を調査できたに過ぎなかったため全容は詳らかでないが、プランは方形、または長方形を呈するものと見られる。

十分に記録が残せなかったため詳細は述べられないが、一部を地床とした掘り方を有し、これを黒褐色土等で埋め戻して床面を作り出している。尚、土

層断面の観察では北側壁際に幅1m、深さ7cm程の周溝状の掘り込みのあったことが窺われる。

10号住居 (第133図、P.L.35・47)

概要 本住居は2区北部に位置する。

他の遺構との重複はなかったが、本住居の東部は調査区外に出ていて確認することはできなかった。

3号溝に囲われた中に在るが、走行が異なるので関連はないものと判断される。

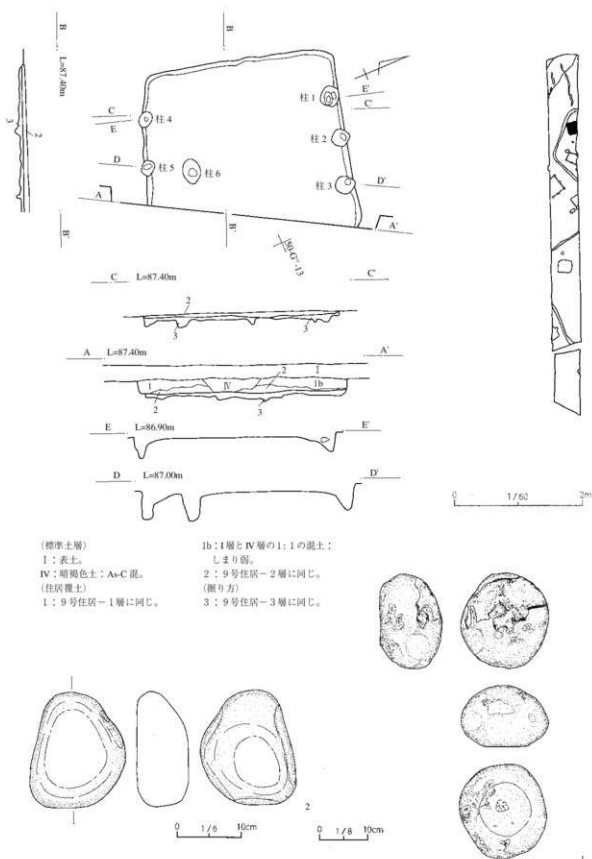
遺物 本住居からは土師器堯片を中心に僅かな土器の出土が見られたが、石鏝(J17)、台石(1・2)の出土が見られた。

時期 出土遺物からは縄文時代の可能性も残されるが、住居形態は古代～中世の可能性を示し、柱穴1～5が柱痕ではなく柱穴とするならば、その規模は中世的ではあるものの時期を把握することはできなかった。

規模 径:(240)×284cm 深さ:24cm

(柱穴1) 径:32×27cm 深さ:31cm

(柱穴2) 径:26×25cm 深さ:42cm



第133図 10号住居と出土遺物

第4章 富田大泉坊B遺跡で発見された遺構と遺物

(柱穴3) 径：30×25cm 深さ：42cm

(柱穴4) 径：25×18cm 深さ：35cm

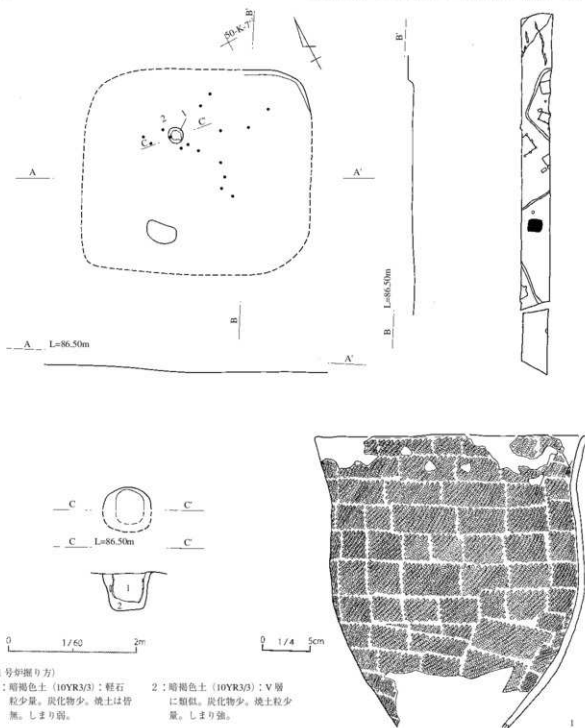
(柱穴5) 径：23×18cm 深さ：44cm

(柱穴6) 径：39×28cm 深さ：40cm

構造 本住居のプランは、東西に長い長方形を呈する。

掘り方を有し、これを黒褐色土で埋め戻して床を作っている。

竈、炉或いは貯蔵穴を確認することはできなかったが、柱穴は北壁に柱穴1～3の3基、南壁に柱穴4・5の2基の所謂壁柱穴が掘削されている。南側は東側に更に1基が想定され、北壁面の状態から南

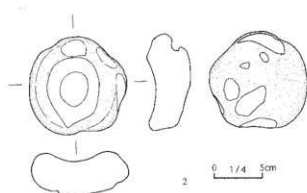


(1号の掘り方)

1：暗褐色土(10YR3/3)：軽石粒少量。炭化物少。焼土は皆無。しまり弱。

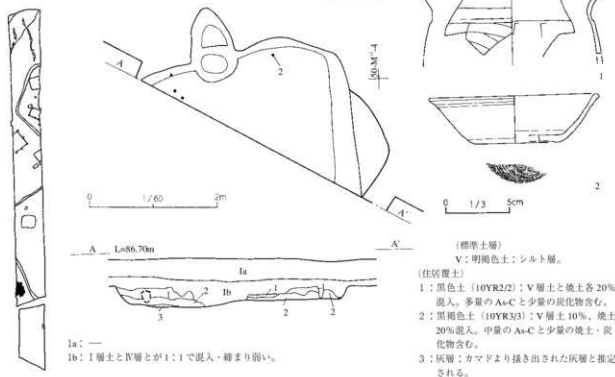
2：暗褐色土(10YR3/5)：V層に類似。炭化物少。焼土粒少量。しまり強。

第134図 11号住居と出土遺物(その1)



第135図 11号住居出土遺物(その2)

北3基づつが対になっていたものと見られるが、棟柱は見られない。柱間は桁間が北列の柱穴1・2間で64cm、柱穴2・3間で74cm、南列の柱穴4・5間で76cm、梁間が柱穴1・4間で291cm、柱穴2・5間で310cmを図る。またこの柱穴の状態から棟方向は東北東-西南西を向いていたものと判断される。柱穴の規模は中世的であるが、柱穴1には礎石と見られる礎の記録が残る。尚、柱穴6は他の5基の柱穴と規模が異なって大きく、位置的に本住居に伴わないものである可能性を有する。



第136図 12号住居と出土遺物(その1)

11号住居(第134・135図、P.L.36・47)

概要 本住居は2区中部南寄りに位置する。他遺構との重複は認められないが、上位が削平されて著しく遺存状態は悪かった。

2号炉は位置的に炉とするには疑問であることから、住居燃焼時に焼土化した可能性があり、即ち焼失家屋の可能性を有する。

遺物 撿乱に伴うと見られる古墳時代以降の土器片2片も見られたが、本住居に伴っては縄文土器深鉢(1)、石皿(2)の出土を見た。

時期 縄文土器深鉢(1)が埋甕であることから縄文時代前期黒浜期の所産と断ぜられる。

規模 径:(357)×(330)cm 深さ:4cm

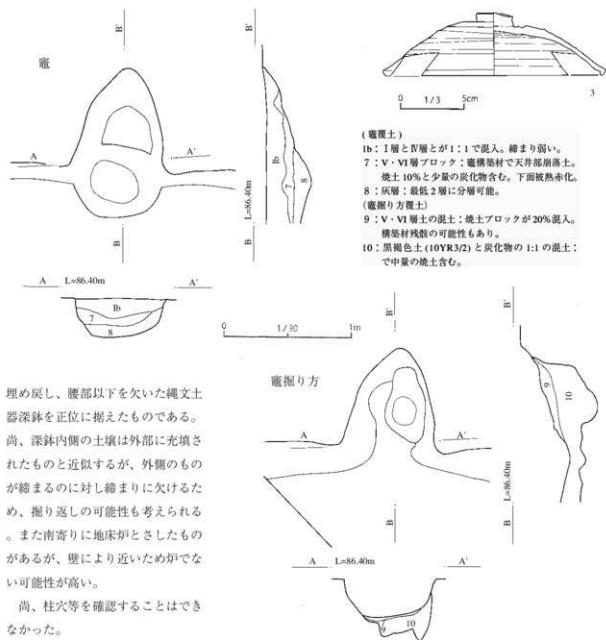
(1号炉)径:39×35cm 深さ:30cm

(2号炉)径:49×30cm 深さ:0.3cm

構造 本住居は南東-北西方向を長軸とする隅丸長方形のプランを呈する。

掘り方の有無は不明だが、地床の可能性が高い。

中央やや北西寄りに埋甕炉(1号炉)が設けられるが、柱穴状のピットを焼土や灰を含む暗褐色土で



埋め戻し、腰部以下を欠いた縄文土器深鉢を正位に据えたものである。尚、深鉢内側の土壌は外部に充填されたものと近似するが、外側のものが締まるのに対し締まりに欠けるため、掘り返しの可能性も考えられる。また南寄りに地床炉とさしたものがあがるが、壁により近いため炉でない可能性が高い。

尚、柱穴等を確認することはできなかった。

第137図 12号住居竈・竈掘り方と出土遺物（その2）

12号住居（第137・138図、P.L.36・47）

概要 本住居は2区南部に位置する。

他遺構との重複はなかったが、過半が西側調査区外に出ていて、東南部を調査できたに過ぎない。

遺物 本住居からは土師器壺片を中心に比較的多くの出土遺物が得られた。この中には土師器壺(1)、須恵器杯(2)、須恵器蓋(3)があった。

時期 本住居の時期は明瞭ではないが、出土遺物から推して概ね9世紀前半期の所産と把握される。

規模 径：(314)×(266)cm 深さ：34cm

(竈)幅：(82)cm 奥行き：120cm

燃焼部 径：69×59cm 深さ：7cm

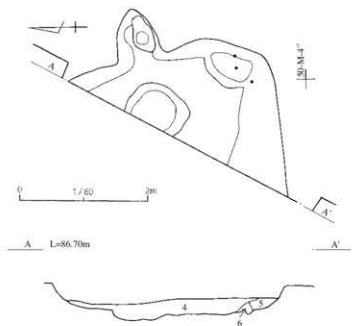
煙道 下幅：39cm 長さ：62cm

掘り方 径：45×(75)cm 深さ：32cm

(貯蔵穴) 径：80×67cm 深さ：9cm

(床下土坑) 径：94×(66)cm 深さ：18cm

構造 上述のように本住居はその一部を調査できたに過ぎなかったため全容は詳らかでないが、プラン



第138図 12号住居掘り方

は隅丸方形様を呈するものと想定される。

掘り方を有し、これを地山層土や黒褐色土等の土壌で埋め戻して床面を作り出している。

竈は東壁の恐らく南に寄った位置に設置されている。楕円形プランで一部が深く掘削された掘り方を有し、これを黒褐色土と炭の混土で埋め戻して焼面と煙道部を作り出している。袖と天井部は全く失われていて、その構造を確認することはできなかった。

調査範囲において柱穴を確認することはできなかったが、床面に於いて竈右側の住居南西隅部に半円形プランの貯蔵穴の掘削が確認されている。

14号住居

(第139・140図、P.L. 37・47)

概要 本住居は3区北端部に位置する。

他遺構との重複は認められなかったが、過半が西側調査区外に出ているため、東南側を調査できたに過ぎなかった。

遺物 本住居では土師器坏(1・2)・甕(3)と須恵器短頸壺(4)の他、土師器坏

(標準土層)

V: 明褐色土: シルト層。

VI: 灰黄色砂質土: 洪水層。

VII: 黄褐色粘土層: As-SJ混。

(掘り方)

4: 黒褐色土: (10YR3/2): V ~ VII 層土ブロック40%混入。中量のAs-Cと多量の焼土、少量の炭化物含む。

5: V・VI 層ブロック: 焼土ブロックが20%混入。

6: 黒色土(10YR1/2): V層土ブロック5%混入。

片1点と、古墳時代前期の土師器甕片3点を出土したに過ぎなかった。

時期 本住居の時期は明瞭ではないが、出土遺物から推して、概ね8世紀前半期の所産として把握される。

規模 径: (352) × (350)cm

深さ: 30cm

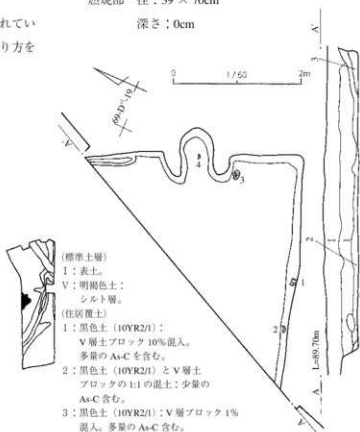
(竈) 幅: 119cm 奥行き: 87cm

左袖 幅: 39cm 長さ: 53cm

右袖 幅: 39cm 長さ: 38cm

焼面 径: 39 × 70cm

深さ: 0cm



第139図 14号住居

(標準土層)

I: 表土。

V: 明褐色土:

シルト層。

(住居覆土)

1: 黒色土(10YR2/1):

V層土ブロック10%混入。

多量のAs-Cを含む。

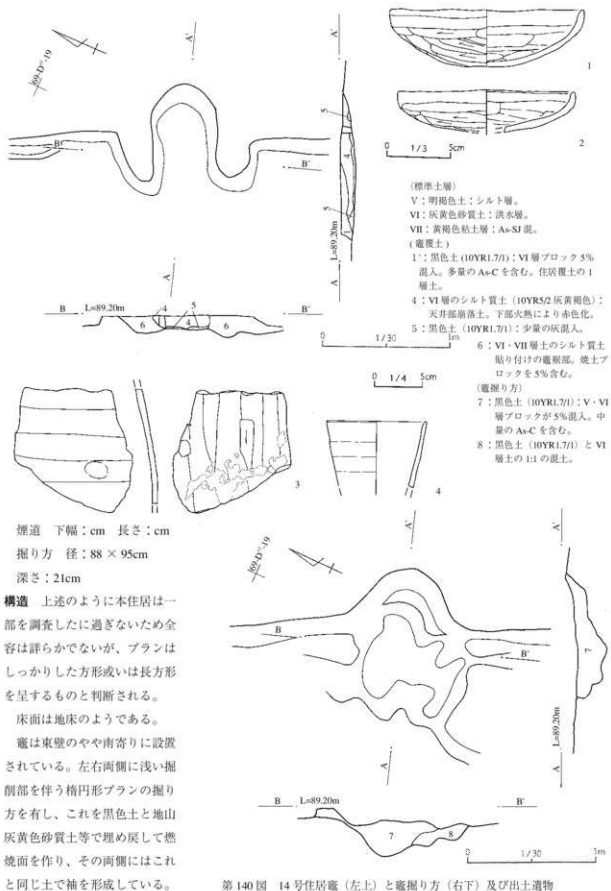
2: 黒色土(10YR2/1)とV層土

ブロックの1:1の混土: 少量の

As-C含む。

3: 黒色土(10YR2/1): V層土ブロック1%

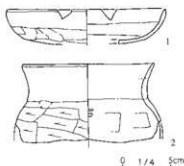
混入。多量のAs-C含む。



第140図 14号住居竈(左上)と産物取り方(右下)及び出土遺物

覆土の観察から天上部は灰黄色シルト質土で作ったことが分かったが、その焼成面は焼土化していた。煙道の形状は不明。

尚、柱穴、貯蔵穴を確認することはできなかった。



(住居灰池後の堆積層)

- 1: 砕石・盛土。
- 2: 褐灰色砂質土。
- 3: 暗褐色土: 少量の軽石 (か) 含む。

(貯蔵穴覆土)

- 4: 黒褐色土: 少量の軽石 (As-C・Hr-FA か) 及び焼土ブロック含む。
- 5: 暗褐色土: 焼土ブロック含む。
- 6: 黒褐色土: ローム小ブロック含む。

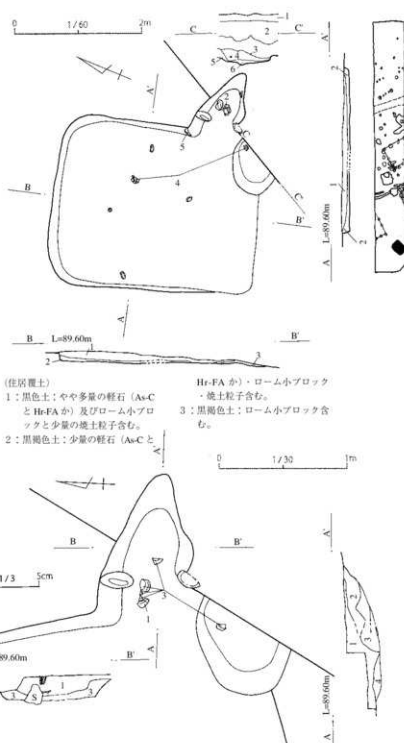


(覆土)

- 1: 黒色土: 軽石 (As-C・Hr-FA)・焼土粒・ロームブロック含む。
- 2: 赤褐色土: 焼土ブロック主体。黒褐色土含む。竜巻道・天井崩

落土

- 3: 暗褐色土: やや多量の焼土小ブロック・焼土粒・炭化物含む。
- 4: 暗褐色土: 焼土小ブロック・炭化物含む。



(住居覆土)

- 1: 黒色土: やや多量の軽石 (As-C と Hr-FA か) 及びローム小ブロックと少量の焼土粒子含む。
- 2: 黒褐色土: 少量の軽石 (As-C と

Hr-FA か)・ローム小ブロック・焼土粒子含む。

- 3: 黒褐色土: ローム小ブロック含む。

第141図 15号住居と竈及び出土遺物

15号住居 (旧4区1号住居)

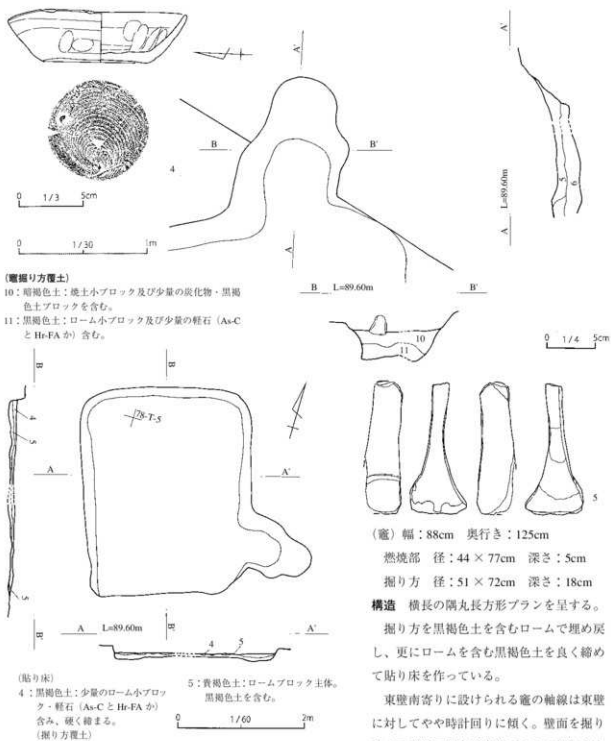
(第141・142図, P L 37・47)

概要 本住居は4区南部に位置する。

他遺構との重複は見られなかったが、南側が削平されて失われていた。

遺物 土師器坏片を中心とした僅かな出土遺物が得

第4章 富田大泉坊B遺跡で発見された遺構と遺物



第142図 15号住居竈掘り方と掘り方

られた。この中には土師器の坏 (1)・葉 (2)、須恵器坏 (3・4)・砥石 (5) などが見られた。

時期 出土遺物から推して本住居は9世紀前半期の所産と考えられる。

規模 径: 328 × 271cm 深さ: 17cm

(竈) 幅: 88cm 奥行: 125cm

燃焼部 径: 44 × 77cm 深さ: 5cm

掘り方 径: 51 × 72cm 深さ: 18cm

構造 横長の隅丸長方形プランを呈する。掘り方を黒褐色土を含むロームで埋め戻し、更にロームを含む黒褐色土を良く絡めて貼り床を作っている。

東壁南寄りに設けられる竈の軸線は東壁に対してやや時計回りに傾く。壁面を掘り込んで縦長の隅丸長方形プランの掘り方を掘削し、これを焼土や若干の炭化物を含む暗褐色土や黒褐色土、ローム等で埋め戻して燃焼面を作る。袖或いは天上部は完全に壊されているが、黒褐色土を含む焼土化した天井材を確認している。

尚、掘り方に於いても床面に於いても、柱穴或いは貯蔵穴を確認することはできなかった。

(住居覆土)

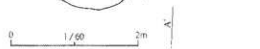
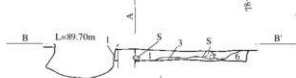
- 1: 黒褐色土: 多量の軽石 (As-C と Hr-FA か) 及び少量の焼土粒子・ローム小ブロック含む。
- 2: 黄褐色土: 黒褐色土・焼土ブロック含む。
- 3: 暗褐色土: ローム小ブロック及び少量の軽石 (As-C と Hr-FA か) 含む。
- 4: 暗褐色土: 多量のローム小ブロック及び少量の軽石 (As-C と Hr-FA か) 含む。
- 5: 黒褐色土: ローム小ブロック及び軽石 (As-C と Hr-FA か) 含む。
- 6: 黒褐色土: 少量の軽石 (As-C と Hr-FA か)・焼土小ブロック含む。

(貯蔵穴覆土)

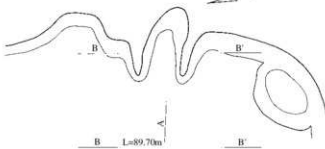
- 9: 暗褐色土: 軽石 (As-C と Hr-FA か) 含む。
- 10: 暗褐色土: ロームブロック含む。



0 1/3 5cm



0 1/60 2m

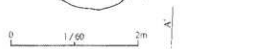
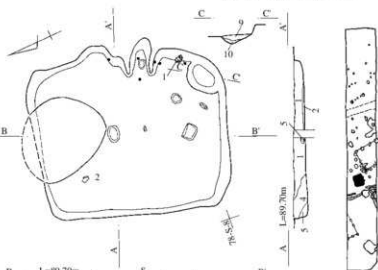


0 1/30 1m

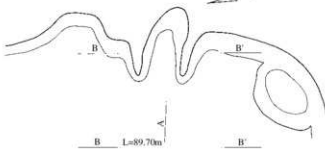
(竈覆土)

- 1: 暗褐色土: 軽石 (As-C と Hr-FA か) 及び少量の焼土粒子含む。
- 2: ロームブロック (竈構築材の崩れた

第143図 16号住居及び竈と出土遺物



0 1/60 2m



0 1/30 1m

(竈覆土)

- 1: 暗褐色土: 軽石 (As-C と Hr-FA か) 及び少量の焼土粒子含む。
- 2: ロームブロック (竈構築材の崩れた

第143図 16号住居及び竈と出土遺物

- もの)及び少量の焼土ブロック・軽石 (As-C と Hr-FA か) 含む。
- 3: 赤褐色土: 明褐色土とロームのブロック含む。煙道・天井の崩落土か。
- 4: 黄褐色ローム: 焼土小ブロック含む。
- 5: 黒褐色灰層
- 6: 暗褐色土: 焼土小ブロックと炭化物含む。

16号住居 (旧4区2号住居)

(第143・144図, P L 37・38・47)

概要 本住居は4区中部南寄りに位置する。

他遺構との重複は見られなかった。

遺物 本住居からは土師器壺片を中心とした一定量の出土遺物が得られたが、図示すべきものとしては須恵器の坏(1)・碗(2)があった。

時期 出土遺物から推して概ね10世紀前半期の所産と認識される。

規模 径: 320×276cm 深さ: 28cm

(竈) 幅: 93cm 奥行: 61cm

左袖 幅: 23cm 長さ: 33cm

右袖 幅: 24cm 長さ: 41cm

燃燒部 径: 22×44cm 深さ: 2cm

掘り方 径: 66×51cm 深さ: 12cm

(床下土坑1) 径: 75×104cm 深さ: 20cm

(床下土坑2) 径: 98×114cm 深さ: 26cm

(床下土坑3) 径: 74×66cm 深さ: 19cm

構造 本住居は横長の隅丸方形プランを呈する。

竈右手前に1基、北壁際に2基の土坑上の掘り込

みを有する掘り方を持ち、これを黒褐色土を含むロームで埋め戻し、ローム等を含む黒褐色土で貼り床を作っている。

竈は東壁南寄りに設けられる。壁面を僅かに掘り込んでプラン不明の掘り方を掘削している。この掘り方を焼土粒を含む黒褐色土やロームで埋め戻して燃焼面を作っている。この燃焼面の両側にはやや幅狭で長くない袖が設けられるが、左袖は掘り残しのものを基盤としていることが窺われる。袖は床部分では浅い掘り込みが見られ、この上に焼土粒（一部に灰）を含むロームを積んで袖を形作っている。天上部は壊されていて形状は不明だが、同様の土壌で作っていたものと想定される。

床面、掘り方面双方に於いて、柱穴或いは貯蔵穴を確認することはできなかった。尚、竈手前の床下土坑1は位置的に所謂床下粘土坑の可能性を有する。

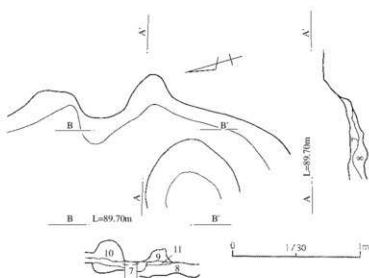
1号掘立柱建物 (第145図、P.L.38)

概要 本建物は2区中程やや北寄りに位置しているが、他遺構との関係は見られなかった。

本建物はその規模や形状を同時期の掘立柱建物の柱配置に照らして鑑みるに、西側は調査区外に出ていると想定されるものであり、従って全体を調査することはできなかったと判断される。

遺物 本建物からはPt2・3・5より古墳時代～律令期の土師器壘片等僅かな出土遺物が得られたに過ぎず、特に図示すべきものは見られなかった。

時期 本建物の時期を特定することはできなかったが、柱穴の規模及び出土遺物から推して古代の所産と認識されるものである。

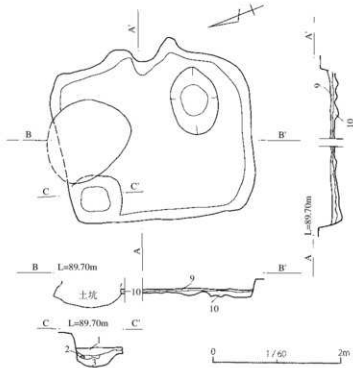


(電掘り方覆土)

- 7: 黒褐色土: ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物含む。
- 8: 黒褐色土とロームブロックの混土: 少量の焼土粒子含む。

(袖構築材)

- 9: 黄褐色土(ローム)と焼土の混土: 電軸・天井の崩れか。
- 10: 黄褐色土: 焼土含む。
- 11: 黒褐色土: 焼土粒・灰含む。15層土に類似。



(貼り床)

- 9: 黒褐色土: ローム小ブロック及び少量の焼土粒子、軽石 (As-C と Hs-FA か) を含む。硬く締まる。

(掘り方覆土)

- 10: 黄褐色ローム: 黒褐色土ブロック含む。

(床下土坑3覆土)

- 1: 黒褐色土: やや多量の軽石 (As-C と Hs-FA か) 及びローム小ブロック含む。
- 2: 黒褐色土: 少量の軽石 (As-C と Hs-FA か) 及び鉄分沈着の褐色土含む。
- 3: 黒褐色土: 多量のロームブロック含む。

第144図 16号住居掘り方と電掘り方

規模 全体:

458 × (420)cm

梁間:

平均 206cm 桁

間:

平均 186cm

(Pit1)

径: 46 × 40cm

深さ: 37cm

(Pit2)

径: 52 × 46cm

深さ: 40cm

(Pit3)

径: 42 × 34cm

深さ: 50cm

(Pit4)

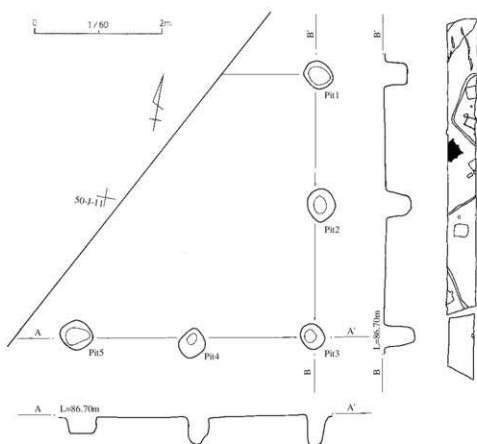
径: 48 × 39cm

深さ: 43cm

(Pit5)

径: 52 × 49cm

深さ: 27cm



第145図 1号掘立柱建物

構造 本建物は掘立柱建物である。前述のように西側に延伸すると想定されるが、棟方向はその柱穴の配置に照らして概ね東西方向であると判断される。棟持柱を有し、その規模は梁間2間、桁行2間以上と判断される。

また柱穴のプランは、どれも方形に近い隅丸形状であった。底面の形態はビット1・3・5が平底、ビット2・4が丸底であった。特にビット1・5ははっきりした平底であるため礎板の使用の可能性が考慮される。尚、ビット4の底面形態は柱の加重による塑性変形と見られるものであった。

2a・2b号掘立柱建物(旧2号掘立柱建物)

(第146図、P.L.38)

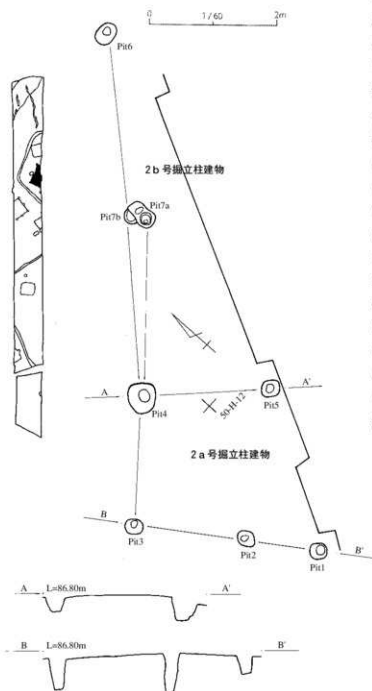
概要 本建物群は2区中程北寄り、後述する3号溝を挟んで1号掘立柱建物の北東側に位置している。

調査段階では1棟の建物としていたが、後述する

ように旧7号ビット等を加えて2a・2b号掘立柱建物の2棟の建物に分離した。

2a・2b号建物は重複関係にある。柱穴配置の状況からは2a号建物の方が古い可能性を有するものの新旧を特定することはできなかった。

さて本建物は先に触れたように調査段階に於いては梁間1間型の掘立柱建物として調査したのであるが、プランが台形を呈してビット1～3とビット4・5の南北列の走行方向に開きがあり過ぎることや、梁間1間型の建物とするには梁行が狭すぎることから再検討した結果、ビット1～3とビット7a(旧7号ビット東部分)からなる2a号掘立柱建物と、ビット4・5とビット6(10号住居内ビット)及びビット7b(旧7号ビット西部)からなる2b号掘立柱建物に分離できるものと判断した。7a号掘立柱建物に於いてはビット4を7b号掘立柱建物と共有する可能性を有し、位置的に棟持柱とする偏りすぎ



第146図 2a・2b号掘立柱建物

ているため、ビット4は2b号掘立柱建物固有の柱穴と判断した。

遺物 ビット7（旧7号ビット）から施軸陶器碗と土師器杯の破片が1点づつ得られたに過ぎない。

時期 2a、2b建物共にその時期は明瞭ではないが、柱穴の規模は中世的であり、桁間の規模に照らせば何れも室町時代以降の所産ではないかと想定される。

規模 [2a掘立柱建物]

全体 530 × (322)cm

梁間：483cm 桁間：平均 148cm

(Pit1) 径：28 × 27cm 深さ：29cm

(Pit2) 径：30 × 26cm 深さ：62cm

(Pit3) 径：28 × 26cm 深さ：48cm

(Pit7a) 径：48 × 24cm 深さ：53cm

[2b掘立柱建物]

全体 530 × (322)cm

梁間：平均 483cm 桁間：148cm

(Pit4) 径：48 × 43cm 深さ：33cm

(Pit5) 径：31 × 28cm 深さ：22cm

(Pit6) 径：39 × 28cm 深さ：40cm

(Pit7b) 径：(14) × 24cm 深さ：30cm

構造 2a・2b号建物は共に東側が調査区外に出ていて全容は明らかにできなかったが、柱間の比較から共に東西方向に棟を取る、2a号建物は張間1間型の1 × 2間以上の、2b号建物は棟持ち柱を有する2 × 1間以上の規模を持つ掘立柱建物と想定される。

また柱穴のプランはビット7bが楕円形である以外は、隅丸方形プランを呈している。底面形態はビット1・4・5が尖形をなし、ビット2が丸底、ビット3が平底を呈する。またビット7a・bは平底、ビット6は丸底を呈する可能性を有する。

3号掘立柱建物 (旧4-1号掘立柱建物)

(第147図、P.L.38)

概要 本建物は4区南部に位置するが、北西側が調査区外に出るため、全体は調査できなかった。

また他遺構との重複は見られなかった。

遺物 本建物の出土遺物は、僅かにビット3から土師器残片1点が出土したに過ぎなかった。

時期 本建物の時期については特定することができなかったのであるが、柱穴の規模及び棟持柱を伴うと見られることなどの形態の特長から推して、概ね古代所産の掘立柱建物として把握される。

規模

全体 (314) × (466)cm

梁間：平均 138cm

桁間：平均 206cm

(Pit1) 径：(38) × 46cm

深さ：28cm

(Pit2) 径：44 × 30cm

深さ：22cm

(Pit3) 径：68 × 22cm

深さ：40cm

(Pit4) 径：56 × 32cm

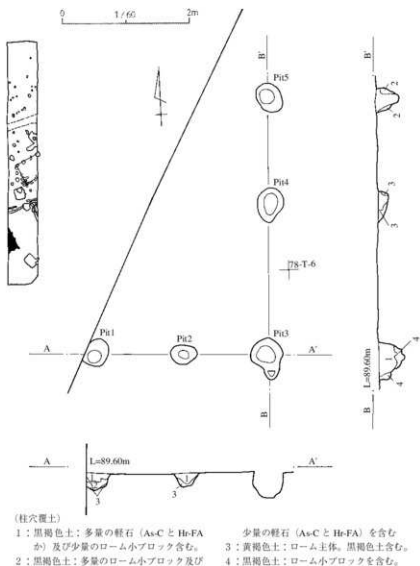
深さ：16cm

(Pit5) 径：50 × 34cm

深さ：36cm

構造 本建物は上述のように東南側を調査できたに過ぎなかったため全容は明らかにできなかったが、柱穴の配置及び規模の比較から推して、恐らくは南北に棟方向を取り、棟持柱を有する梁間2間、桁間2間以上の掘立柱建物と想定される。

柱穴のプランは楕円形状でビット4が平底状を呈する以外は丸底気味であった。尚、ビット1～3の底面には明瞭な柱の加重による塑性変形が見られ、ビット5にも弱い痕跡が見受けられる。従って本建物も礎板の使用はないことが確認され、貫入試験成果(石守 1986)に照らして簡易な構造の建物であったことが窺われる。



第147図 3号掘立柱建物 (旧08-1号掘立柱建物)

4号掘立柱建物 (旧4-2号掘立柱建物)

(第148図、P.L.38)

概要 本建物は4区の中程に位置しているが、東側が調査区外に出ていて全体を調査することはできなかった。

本建物の各柱穴はその規模等から当初個々の土坑として調査を始めたのであるが、調査の進捗に伴って柱穴であることを確認し、掘立柱建物として把握することとなったものである。尚、ビット1の調査当初の遺構番号(旧番号)は4-12号土坑であり、同様にそれぞれの柱穴の旧番号はビット2が4-13号土坑、ビット3が4-11号土坑、ビット

4が4-7号土坑、ピット5が4-5号土坑、ピット6が4-2号ピット、ピット7が4-8号土坑、ピット8が4-9号土坑、ピット9が4-10号土坑、ピット10が4-14号土坑であった。

本建物の柱穴の中ではピット4・5・6及びピット8・9がそれぞれ重複関係にあるが、前者はピット6・5・4の順に、後者はピット8・9の順に新しい。また他遺構との関係に於いて本建物は1号畝と重複してこれに切られる他、ピット2・7が攪乱により過半を失っている。

本建物は柱穴の規模が大きく、建物隅部の柱穴に部分的な布掘りが見られることから、集落内に於ける主要建物であった可能性が考慮される。また柱穴の重複関係から3時期に亘って建てられたことが窺われ、1期から2期の段階で30cm程西に拡張されていることが確認される。

遺物 本建物ではピット1(旧4-12号土坑)・ピット2(旧4-13号土坑)・ピット3(旧4-11号土坑)・ピット4(旧4-5号土坑)、ピット7(旧4-8号土坑)・ピット10(旧4-14号土坑)から土師器壺片を中心とした合わせて33片の土師器片と2片の須恵器片が得られたが、図示すべきものは見られなかった。

時期 本建物の時期は特定できなかったが、出土遺物及び柱穴の規模及び配置等から推して古代の所産と認識される。

規模 全体605×(687)cm

梁間：平均245.5cm 桁間：平均216.0cm

(Pit1) 径：145×112cm 深さ：60cm

(Pit2) 径：(96)×(91)cm 深さ：45cm

(Pit3) 径：126×92cm 深さ：56cm

(Pit4) 径：136×64cm 深さ：46cm

(Pit5) 径：108×76cm 深さ：37cm

(Pit6) 径：43×38cm 深さ：46cm

(Pit7) 径：132×63cm 深さ：68cm

(Pit8) 径：123×58cm 深さ：68cm

(Pit9) 径：100×70cm 深さ：51cm

(Pit10) 径：(125)×(122)cm 深さ：44cm

構造 上述のように本建物は東側が調査区外に出ていて全容は詳らかではないが、棟を東西に取り、棟持ち柱を有する掘立柱建物である。梁間は2間で、桁間は3間以上在るが、西側列の柱穴の平面形態と他の柱穴の平面形態に鑑みてその規模は少なくとも4間以上在ったものと判断される。

柱穴は何れも大型のもので、そのプランは長短軸の大きさが近似する形状のものとして短冊状を呈するものの大きく2つに分けられ、前者ではピット1とピット6が円形、ピット2・10が隅丸方形様、ピット3が楕円形を呈し、後者ではピット4・7・8がやや長い長方形、ピット5・8がやや短い長方形を呈している。

柱穴底面はピット5・6・7・8が平底状である以外は丸底気味であった。

柱の形状や規格は不明であるが、ピット1・3の土層断面に残る柱痕の幅は27cm程を測ることから径8、9寸の太い柱だったことが伺われる。また西側列の柱は、柱穴の形状から板材を使用した可能性が考えられる。

1号道(第149図、P.L.38・47)

概要 本道は2区北端西寄りの調査区を短く斜めに横切っており、一部を調査できたに過ぎなかった。

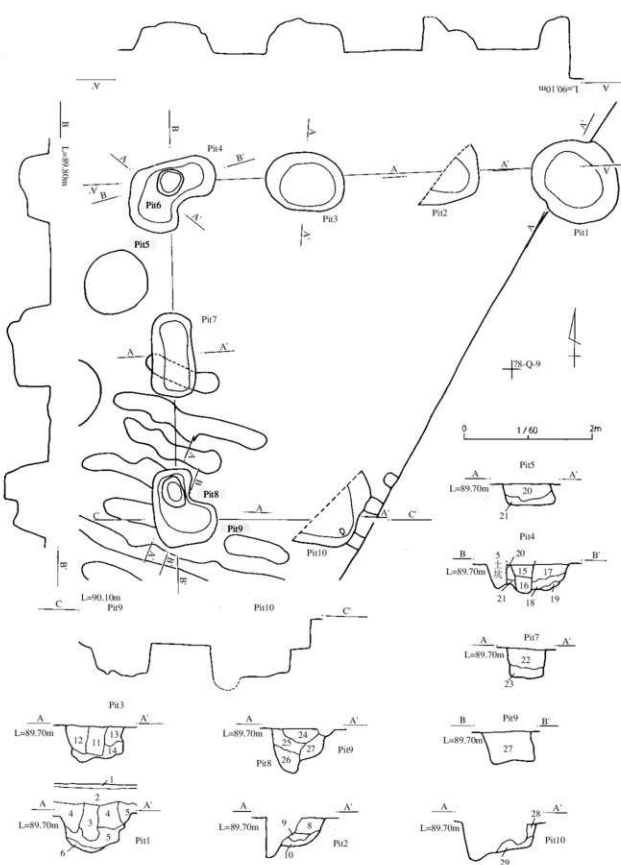
また他遺構との関係は見られなかった。

尚、本道の位置は規模から推して藤岡大胡線の旧道であった可能性が考慮されるが、時期の想定から、更にそれに先行する道路であった可能性が考えられる。また、土層断面の観察から少なくとも2～4時期の使用が窺われるので、比較的長期間の使用があったものと認識されるものである。

遺物 本道からは僅かに須恵器小型碗(1)が出土したに過ぎなかった。

時期 本道の時期は明瞭ではないが、本道の上位層に多量のAs-Bが含まれていることから中世の時間的に下らない時期に、その使用が終わっていた可能性が考慮される。

規模 長さ：14m 幅：466cm 深さ：40cm



第148図 4号掘立柱建物

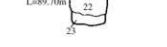
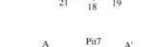


- (客土)
- 1: 砕石;
 - 2: 盛土
- (ピット1(田4-12号土坑)覆土)
- 3: 暗褐色土:少量のロームブロック含み練り弱い。(柱痕)
 - 4: 黒褐色土:多量のロームブロックと軽石 (As-CとHr-FA)を含む。
 - 5: 黒褐色土:ローム小ブロック及び軽石 (As-CとHr-FA)を含む。
 - 6: 黄褐色土:ロームブロック主体。黒褐色土を含む。
- (ピット2(田4-13号土坑))
- 8: 黒褐色土:多量のロームブロックと軽石 (As-CとHr-FA)を含む。
 - 9: 黒褐色土:軽石 (As-CとHr-FA?)を含む。
 - 10: 黄褐色土:ローム主体。黒褐色土を含む。

- (ピット3(田4-11号土坑)覆土)
- 11: 暗褐色土:練り無くやわらかい少量のロームブロックを含む。(柱痕)
 - 12: 黒褐色土とロームブロックの混土。黒褐色土には少量の軽石 (As-CとHr-FA)を含む。
 - 13: 黒褐色土:やや多量の軽石 (As-CとHr-FA?)少量のローム小ブロックを含む。
 - 14: 黄褐色ローム:黒褐色土ブロックを含む。

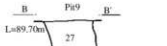
- (ピット6(田4-2号ピット)覆土)
- 15: 暗褐色土:やや多量の軽石。(As-CとHr-FA?)含む。
 - 16: 暗褐色土:軽石 (As-CとHr-FA?)及び少量のローム小ブロックを含む。

- (ピット4(田4-7号土坑)覆土)
- 17: 黒褐色土:多量の軽石 (As-CとHr-FA?)と少量のローム小ブロック含む。
 - 18: 黒褐色土:多量のロームブロックを含む。
 - 19: 黄褐色土:ローム主体。部分的に黒褐色土ブロックを含む。

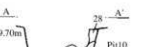


- (ピット5(田4-5号土坑)覆土)
- 20: 黒褐色土:軽石 (As-CとHr-FA?)ロームブロックを含む。
 - 21: 黒褐色土:多量のロームブロックを含む。

- (ピット7(田4-8号土坑)覆土)
- 22: 黒褐色土:多量のロームブロック及び軽石 (As-CとHr-FA?)を含む。
 - 23: 黄褐色土:ロームブロック主体。間に黒褐色土が入る。
- (ピット8(田4-9号土坑)覆土)
- 24: 暗褐色土:多量の軽石 (As-CとHr-FA?)及び少量のローム小ブロックを含む。(4ピット)
 - 25: 暗褐色土:軽石 (As-CとHr-FA?)及び多量のロームブロックを含む。
 - 26: 黒褐色土:多量のロームブロックを含む。



- (ピット9(田4-10号土坑)覆土)
- 27: 褐色土とロームブロックの混土:黒褐色土中に軽石 (As-CとHr-FA?)含む。



- (ピット10(田4-14号土坑覆土))
- 28: 黒褐色土:多量のロームブロック及び軽石 (As-CとHr-FA)を含む。
 - 29: 黄褐色土:ローム主体。黒褐色土を含む。

構造 本道は直線的な走行を示す東西両側縁は緩やかに蛇行するプランを呈し、東側に25cm、西側に15cmの低い段差が設けられ、中央部に向かって低くなる、浅い溝状の形状のものである。

また西側では上幅20cm、下幅60cm、高さ8cmの堤状の盛り土部分があり、西壁との間に上幅60cm弱の側溝が作られている。

2号道 (第150図、P.L.39)

概要 本道は3区東北端を北西-南東方向に斜めに横切っており、一部を調査したに過ぎなかった。

本道は6~8号溝と重複するが、何れに対しても本道の方が新しい。

また本道は藤岡大胡線の東側に在り、その規模からも集落間の通行路程度の道路と思慮されるが、砂

と褐灰色土が10枚以上互層になるといふ堆積状態からみて比較的長期間の使用が窺われる。

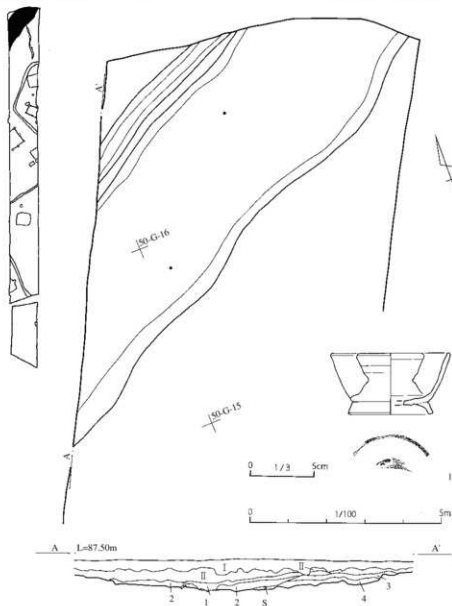
遺物 本道からの出土遺物は認められなかった。

時期 本道の時期は明瞭ではないが、重複関係と覆土に現代の耕作土に似た土壌が入ることから中・近世以降の所産と判断される。

規模 長さ：11.5m
幅：150~196cm
深さ：36cm

構造 調査区内に於いて本道は北北西-南南東に走行の方向を取るが、そのラインは時計回りに極緩やかな弧を描き、北端で西にやや傾く走行を見せる。

全体的な形態は浅い溝状を呈し、横断面形は緩やかな丸底で両側縁部が若干角度を持つ。



(道路裡土)

I：現耕作土

II：黒褐色土 (10YR3/1)：多量のAs-Bと少量のAs-Cを含む。しまり少ない土。

(路面及び路盤形成層)

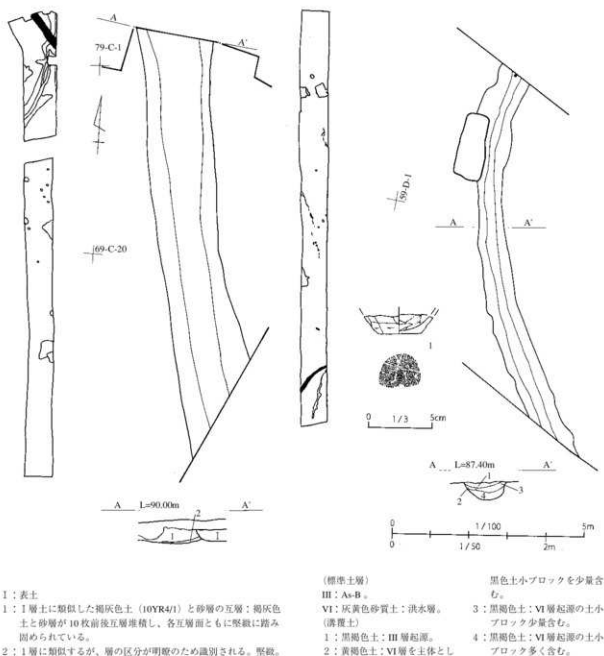
1：砂層と褐灰色 (10YR4/1) シルト質土のラミナ状に互層堆積。

2：褐灰色土 (10YR4/1)：V層ブロックが5%混入。多量の砂を含む。全体的に強く踏み固められ道路面と考えられる。

3：褐灰色土 (10YR4/1)：2層に類似するが中量のAs-C、As-Bを含む。

4：褐灰色シルト質土 (10YR5/1)：V層ブロック10%混入。軽石類殆ど含まない。

第149図 1号道路と出土遺物



第150図 2号溝(左)及び1号溝と出土遺物(右)

1号溝 (第150図, P L 39・47)

概要 本溝は3区南端部に位置する。

攪乱により一部壊されるが、その他遺構との重複関係は見られなかった。

また流水の痕跡は認められず、掘削意図を特定することはできなかった。

遺物 本溝からは土師器甕(1)片1点が出土したに過ぎなかった。

時期 本溝の時期は出土遺物等に照らして概ね律令期の所産と把握されるに過ぎなかった。

規模 長さ; 9.6 m 幅; 96cm 深さ; 23cm

構造 上述のように本溝の全容は詳らかにできなかったが、調査範囲では東から入り西南西に抜ける走行を取り、北側に影らむ円弧状のプランを呈する。

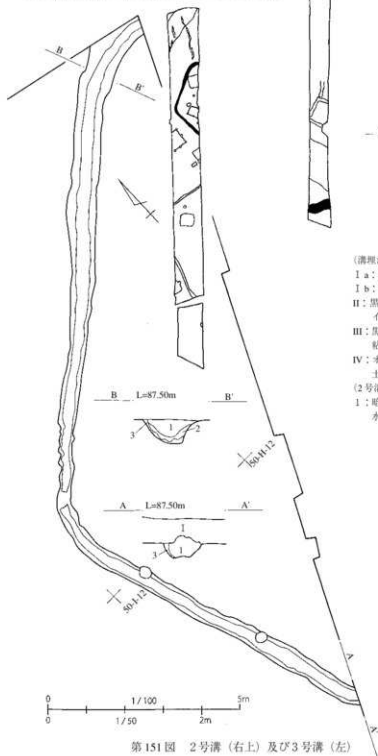
掘削形態は箱塚状を呈するが、底面の横断面は丸底形を呈する。

2号溝 (第151図)

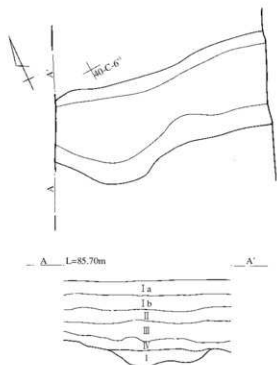
概要 本溝は1区南端部に位置する。東西両側が調査区外に出ているため、その一部を調査できなかった。

他遺構との重複関係は認められなかった。

また本溝は流水の痕跡が求められるため水路と



第151図 2号溝(右上)及び3号溝(左)



(溝槽没後の堆積土)

I a: 黒褐色土 (10YR2/3); As-A 多量を含む。現水田耕土。

I b: 黒褐色土 (10YR2/3); 鉄分沈積。現水田耕土の下部。

II: 黒褐色土 (10YR3/1); As-A 多量を含む。I層がややグライ化した土壌。

III: 黒褐色土 (2.5Y3/2); AS-A を多量を含む。しまりの有る粘性を帯びた土壌。

IV: オリブ黒色土 (7.5Y3/1); 植物遺体を多く含む。粘質土。As-B の含有も多い。

(2号溝覆土)

1: 暗緑灰色粘質土 (7.5GY3/1) と砂層のラミナ状の互層; 流水による堆積土。

(標準土層)

I: 表土。

III: As-B。

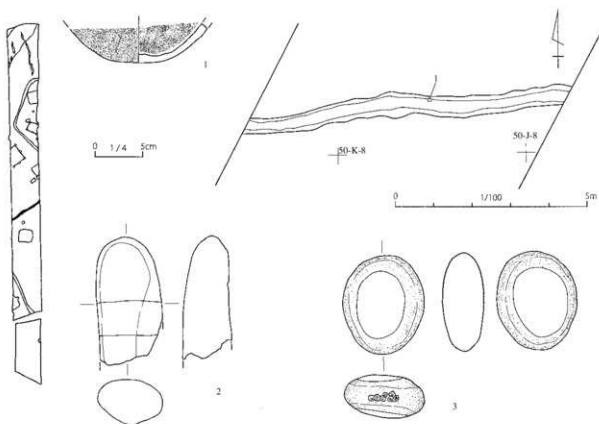
IV: 暗褐色土; As-C 混土。

(3号溝覆土)

1: 黒褐色土 (10YR2/2); I層 10~20% 混入。多量の AsC (または AsB) 含む。しまり・粘性中程度。

2: 黒褐色シルト質土 (10YR3/1); 少量の As-C を含む。しまり・粘性中程度。

3: I と IV 層の 1:1 の混土。



第152図 4号溝と出土遺物

して使用されたものと認められる。

遺物 本溝からは土器、陶磁器、板碑と見られる石片、鉄など24点の遺物が出土したが、図示すべきものは見られなかった。

時期 本溝の時期は特定できなかった。

規模 長さ：5.8 m 幅：260cm 深さ：28cm

構造 本溝はその一部を調査したに過ぎないため全容は不明だが、調査範囲では概ね東西方向に走行を取り、そのプランには緩やかな蛇行が見られる。

基本的な掘削形態は箱堀状であるが、側縁は部分的な凹凸が見られる。

3号溝 (第151図、P.L.39)

概要 本溝は2区北部に位置する。南北両側が東側に出ているため、全容は詳らかでない。

本溝は南部で2基の小ピットと重複関係にあるが新旧関係は特定できず、この小ピットが本溝に関係するか否かも特定することはできなかった。

本溝に流水の痕跡は認められなかったが、そのプランから推して区画溝ではないかと思慮される。

遺物 本溝からの出土遺物は得られなかった。

時期 本溝の時期は特定できなかったが、2a・2b号掘立柱建物の軸線と本溝の走行が近似するので、室町時代以降の可能性を有し、覆土の所見からは比較的新しい時期まで使われていた可能性を有する。

規模 長さ：22.6 m 幅：84cm 深さ：37cm

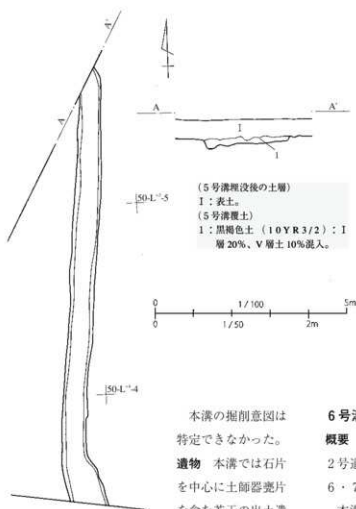
構造 本溝も両端が調査区外にあるため全容は詳らかでないが、調査区内でのプラン鉤形を呈し、その走行は方位に対して1/8回転程の角度を見せる。

掘削形態は箱堀状を呈する。

4号溝 (第152図、P.L.39・47)

概要 4号溝は2区中位の僅かに南寄りに位置するが、東西両側が調査区外に在るため全容を明らかにすることはできなかった。

他遺構との重複は認められなかった。



第153図 5号溝

恵器片 (1)・こも編み石 (2)・磨石 (3)があった。

時期 本溝は出土遺物から推して律令期以降の所産と見られるが、時期の特定には至らなかった。

規模 長さ：11.3 m 幅：94cm 深さ：10cm

構造 本溝は東西が調査区外に出ていて全容は不明だが、真の東西方向に 4° ほど反時計回りに走行の方向を取り、緩やかに蛇行するプランを呈する。

掘削形態は箱堀状を呈する。

5号溝 (第153図、P.L.39)

概要 5号溝は2区南部に位置する。

他遺構との重複関係は認められなかった。

本溝に流水の痕跡は見られず、掘削意図を特定することもできなかった。

本溝の掘削意図は

特定できなかった。

遺物 本溝では石片を中心に土師器破片を含む若干の出土遺物が得られたが、図示し得るものには須



遺物 本溝からの出土遺物は認められなかった。

時期 本溝の時期は特定できなかったが、覆土の観察から比較的新しい時期の可能性が思慮される。

規模 長さ：11.3 m 幅：94cm 深さ：10cm

構造 本溝は南北が調査区に出るため全容は詳らかでないが、調査範囲では概ね真北に対して 4° 程時計回り方向に傾く直線的なプランを呈し、北端で北西方向、南端で南南東方向に走行を転じている。掘削形態は箱堀状である。

6号溝 (第155図、P.L.40・48)

概要 本溝は3区北部に位置する。

2号道、6・7号溝と重複するが、2号溝より古く、6・7号溝より新しい。

本溝の掘削意図は断定できないが、7号溝との形態的比較から水路であったものと想定される。

遺物 土師・須恵器片24片他、後世の落ち込みと見られる五輪塔地輪等 (1・2) が見られた。分岐部分に礎等が多く見られた。

時期 本溝はAs-Bで被覆されているため、1108 (天仁元) 年を下限とする律令期の所産と判断される。

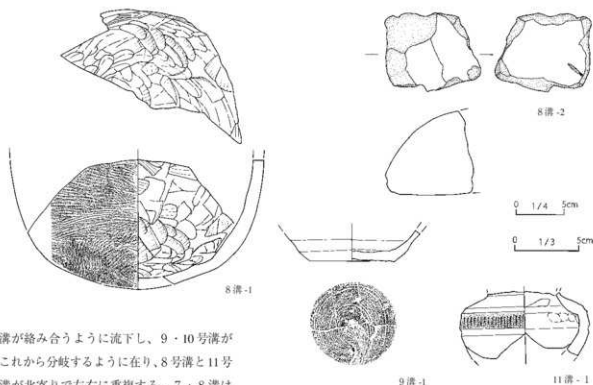
規模 長さ：30 m 幅：180cm、
分岐部分幅：340cm 深さ：10cm

構造 本溝は一部蛇行するが、北北東から西に抜ける南東に影らむ弧状のプランを呈する。蛇行部分で北東方向に幅広の溝が分岐する。

掘削形態は箱堀状を呈するが、底面の横断面形態は丸底状を呈する。

7～11号溝 (第154・155図、P.L.40・48)

概要 7～11号溝も3区北部に位置する。7・8号



第154図 8・9・11号溝出土遺物

溝が絡み合うように流下し、9・10号溝がこれから分岐するように在り、8号溝と11号溝が北寄りでも左右に重複する。7・8号溝は南北が、11号溝は南端と東部が調査区外に出、11号溝は北端が馬入れに隠れて全容を明らかにすることはできなかった。また9・10号溝は7・8号溝に重なってやはり一部を調査できたに過ぎなかった。

7～11号溝の新旧関係は、7号溝の方が8・11号溝より新しく、11号溝の方が8号溝より新しいことを確認した。また9号溝は平面的に7号溝に流入する可能性を有し、この所見に誤りが無ければ断面観察から7・9号溝は同時期のものとして把握される。尚、7・8号溝と10号溝との新旧関係は特定できなかった。

一方、本溝群は2号道と6号溝より古く、7・8号溝は位置的な重なりから6号溝に先行するものと判断される。

7・8号溝は土層堆積状態から水路と判断されるが、他の溝の掘削意図は特定できなかった。

遺物 7号溝からは土師・須恵器片27片が出土した他、上位層からのもぐり込みと見られる陶器壺片(1)が見られた。

8号溝からは土師・須恵器片290片や石器剥片4

片と比較的多くの遺物が出土したが、この他に須恵器壺片(1)や不明石製品(2)の出土が見られた。

9号溝からは土師・須恵器片や剥片等21片と須恵器坏(1)の出土が見られた。

10号溝からは土師器坏片1点が出土したに過ぎず、図示すべきものではなかった。

11号溝からは土師・須恵器片や剥片等12片と須恵器環(1)の出土が見られた。

時期 本溝群の時期は明瞭ではないが、6号溝の調査面に現れてこないこと、及び重複関係と出土遺物から概ね律令期の所産として把握される。

規模 (7号溝)長さ:27.5m 幅:185cm

深さ:48cm

(8号溝)長さ:29.75m 幅:(110)cm

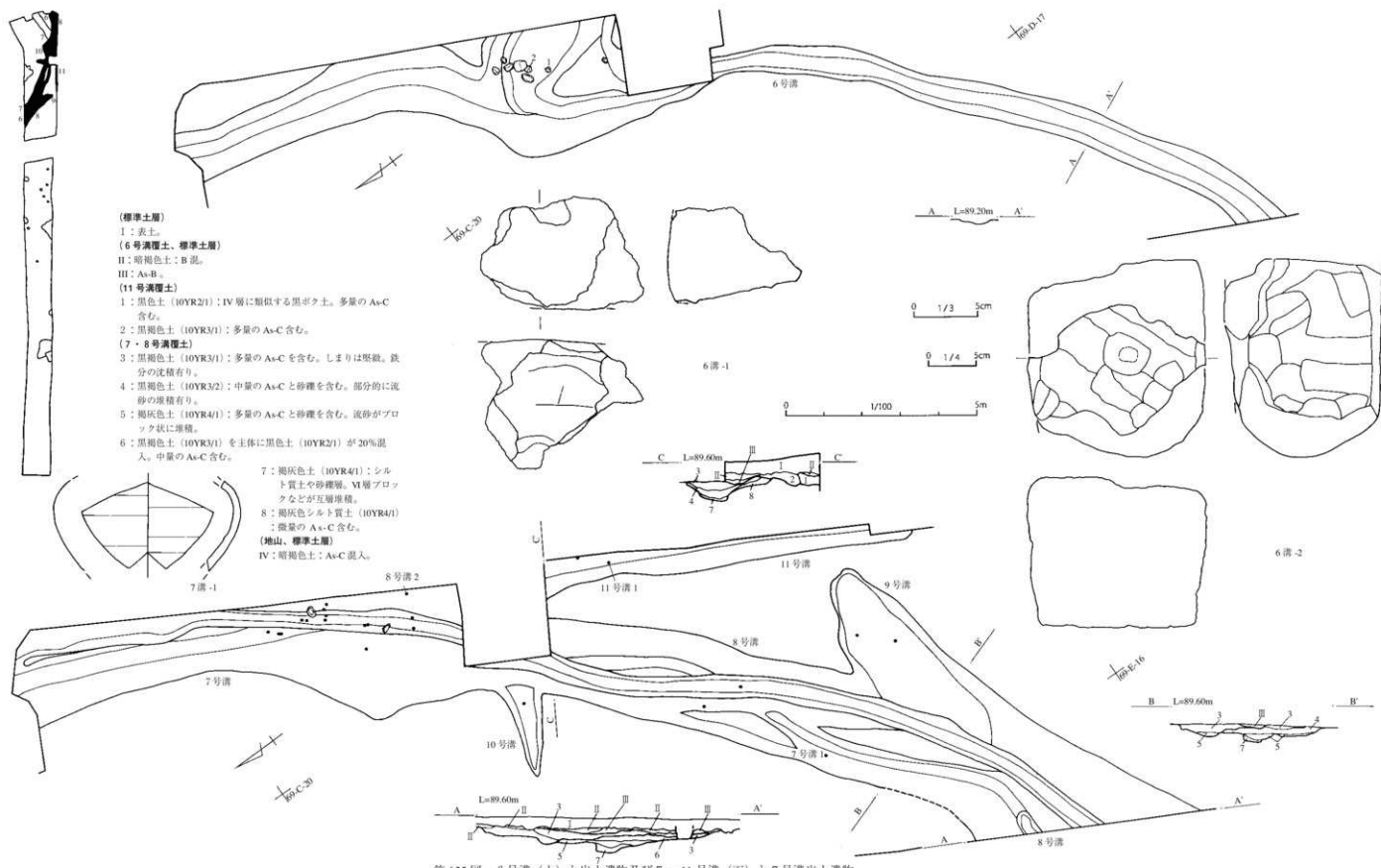
深さ:60cm

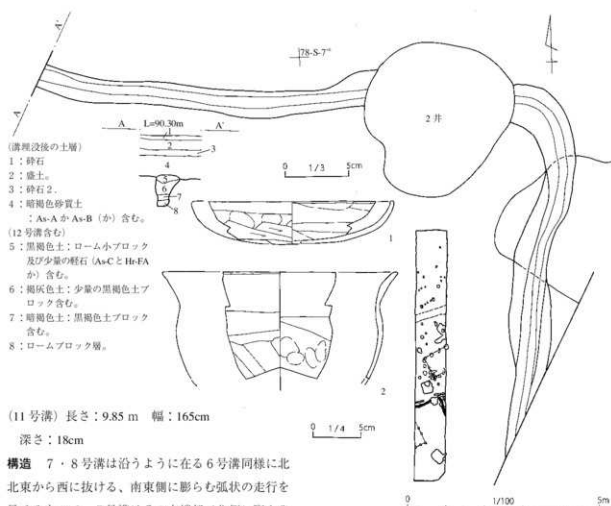
(9号溝)長さ:6.05m 幅:(205)cm

深さ:28cm

(10号溝)長さ:25.0m 幅:109cm

深さ:13cm





第156図 12号溝(旧4-1号溝)

構造 7・8号溝は沿うようにいる6号溝同様に北北東から西に抜ける、南東側に影らも弧状の走行を見せるもので、7号溝はその南端部で北側に影らみを持つ。9号溝は東北東-西南西に走行を取る直線的な溝で調査区東寄りで立ち上がるが、西側は7号溝の影らみに続く可能性を有する。一方10号溝は西北西-東南東方向に直線的に走行するもので、調査区の中程で立ち上がる。11号溝は北北西-南南東方向に直線的な走行を取る。高、11号溝北側の馬入れを境に南北で傾斜の方向が逆転するため、11号溝は西に折れて10号溝に繋がる可能性がある。

各溝共に掘削形態は箱堀状を呈するが、8号溝は幅60cm、深さ18cm程の布堀状の掘り込みが見られ、7号溝の一部にも同様の掘り込みが認められた。

12号溝(旧4-1号溝、第156図、P.L.48)

概要 本溝は4区南部に位置する。西側と南側が調査区外に出ていて全容は確認できなかった。

本溝は2号井戸と重複し、これに切られている。

本溝に流水の痕跡は見られず、掘削意図も特定できなかった。

遺物 本溝からは土師器甕片(2)、土師器坏片(1)他7点、須恵器甕片1点の出土が見られた。

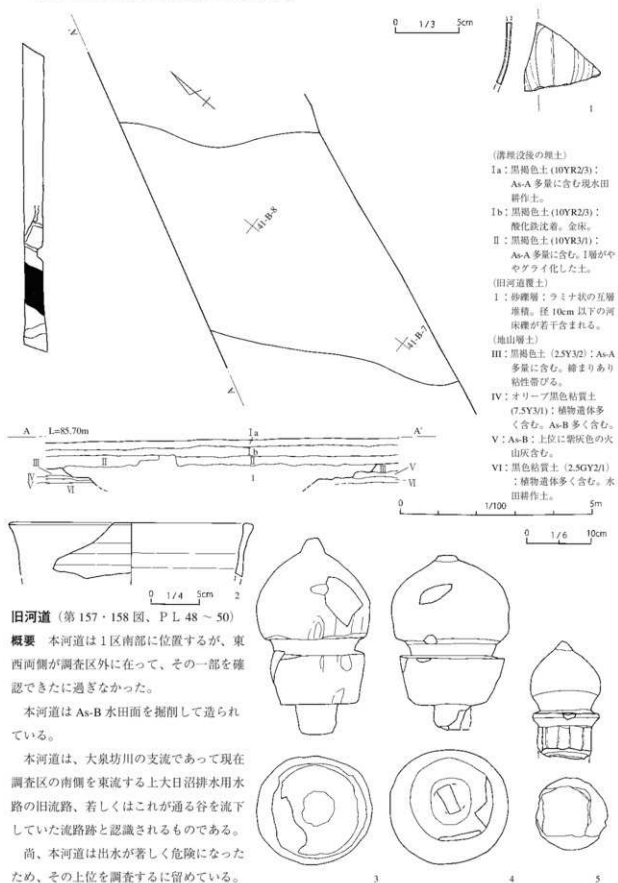
時期 本溝は、出土遺物と覆土の観察所見に照らして平安期の所産と見られる。

規模 長さ: 10.4 m 幅: 57cm 深さ: 39cm

構造 上述のように本溝は両端が調査区外に出ているため全容は詳らかでないが、調査区内に於いては西北西から入って直く東に走行を変じ、調査区の間や東寄りて2号井戸と重複した後280°近く時計回りに回転した後、南南西に変じる走行を取る。

掘削形態は葉研堀様のしっかりした箱堀状を呈しており、底面は平底である。

第4章 富田大泉坊B遺跡で発見された遺構と遺物



- (溝埋設後の埋土)
- Ia: 黒褐色土 (10YR2/3): As-A 多量に含む現水田耕作土。
 - Ib: 黒褐色土 (10YR2/3): 酸化鉄沈着。金床。
 - II: 黒褐色土 (10YR3/1): As-A 多量に含む。1層がややグレイ化した土。
- (旧河道覆土)
- I: 砂礫層: ラミナ状の互層堆積。径10cm以下の河床礫が若干含まれる。
- (地山層土)
- III: 黒褐色土 (2.5Y3/2): As-A 多量に含む。締まりあり粘性帯ひる。
 - IV: オリーブ黒色粘質土 (7.5Y3/1): 植物遺体多く含む。As-B 多く含む。
 - V: As-B: 上位に紫灰色の火山灰含む。
 - VI: 黒色粘質土 (2.5GY2/1): 植物遺体多く含む。水田耕作土。

旧河道 (第157・158図、P.L.48～50)

概要 本河道は1区南部に位置するが、東西両側が調査区外に在って、その一部を確認できたに過ぎなかった。

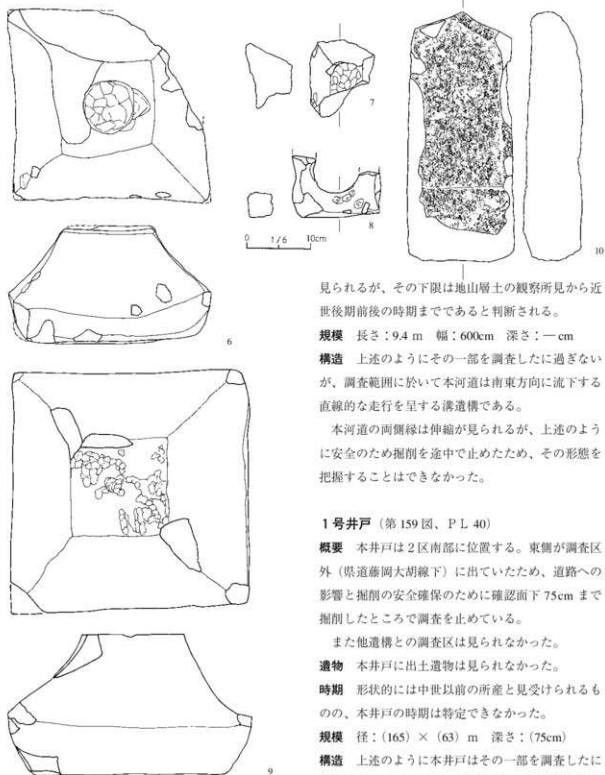
本河道はAs-B水田面を掘削して造られている。

本河道は、大泉坊川の支流であって現在調査区の南側を東流する上大日沼排水水路の旧流路、若しくはこれが通る谷を流下していた流路跡と認識されるものである。

尚、本河道は出水が著しく危険になったため、その上位を調査するに留めている。

遺物 本河道からは青磁碗(1)、陶器鉢

第157図 旧河道と出土遺物(その1)



第158図 旧河道出土遺物（その2）

(2)、五輪等の風空輪 (3～5)・火輪 (6～8)・地輪 (9) と墓石 (10) の出土が見られた。

時期 これらの遺物から、本溝は中世以降の所産と

見られるが、その下限は地山層土の観察所見から近世後期前後の時期までであると判断される。

規模 長さ：9.4 m 幅：600cm 深さ：— cm

構造 上述のようにその一部を調査したに過ぎないが、調査範囲に於いて本河道は南東方向に流下する直線的な走行を呈する溝遺構である。

本河道の両側縁は伸縮が見られるが、上述のように安全のため掘削を途中で止めたため、その形態を把握することはできなかった。

1号井戸 (第159図、P.140)

概要 本井戸は2区南部に位置する。東側が調査区外 (県道藤岡大胡線下) に出ていたため、道路への影響と掘削の安全確保のために確認面下75cmまで掘削したところで調査を止めている。

また他遺構との調査区は見られなかった。

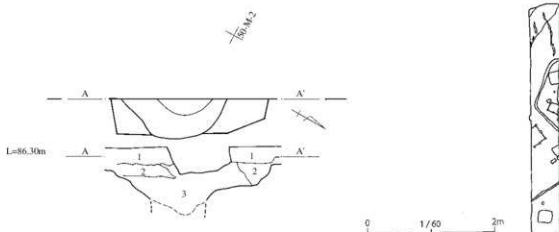
遺物 本井戸に出土遺物は見られなかった。

時期 形状的には中世以前の所産と見受けられるものの、本井戸の時期は特定できなかった。

規模 径：(165) × (63) m 深さ：(75cm)

構造 上述のように本井戸はその一部を調査したに過ぎなかったが、プランは円形若しくは楕円形を呈するものと思慮される。

掘削も途中で留めているため形状も明らかではないが、残存部の状態から本井戸の掘削形態は井筒朝顔型の井戸と想定される。



2号井戸 (旧4-1号井戸)

(第160図, P L 15・48)

概要 本井戸は4区南部に位置している。調査時点では4区(08年度)の1号井戸として調査した。

本井戸は1号溝と重複し、これを切っている。

アグリを有するため一定期間の使用が何われるものの、地山層の記録を残せなかったため、沸水層などは把握できなかった。

遺物 軟質陶器鉢(1)の他、土師器・須恵器片合わせて25片の出土が見られた。

時期 出土遺物から推して、本井戸は14世紀中頃

(現耕作上)

1: 暗褐色土: 複風が多く小礫を多く混入させる。

(井戸覆土)

2: 暗褐色土: 耕作土。白黄系粘質ロームを多く含む。

3: 暗黒褐色土: (遺構覆土) 混入物少なく粘質。土器小片を混入。

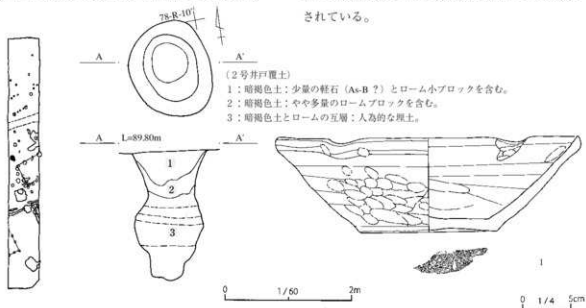
第159図 1号井戸

(以降)の所産と見られる。

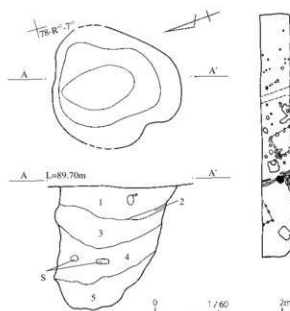
規模 径: 152 × 126cm 深さ: 204cm

構造 本井戸のプランは楕円形を呈する。

掘削形態は井筒朝顔型で、底部の径は60 × 58cmを測り、底面から90cm程の位置をピークとする、高さ80cm程、奥行き20cm程を測るアグリが形成されている。



第160図 2号井戸(旧4-1号井戸)と出土遺物



- 1: 暗褐色土: 砂質土。ローム小ブロック・黒褐色土ブロック及び軽石 (As-B か As-A) を含む。
 2: 黒褐色土: やや粘質。少量の軽石 (As-B か As-A) を含む。
 3: 暗褐色土: 砂質。やや多量のロームブロック及び軽石 (As-B か As-A) を含む。
 4: 黒褐色土: 少量のロームブロックを含む。
 5: ローム: 黒褐色土。黒灰色砂質土がラミネ状に堆積。

第161図 3号 (旧4・2号) 井戸

3号井戸 (旧4-2) 号井戸 (第161図, P. L 41)

概要 本井戸は4区中程の西寄りに位置している。

他の遺構との重複関係は見られなかった。

本井戸には部分的にアグリが疑われる箇所もあるが、明瞭なアグリは確認されなかった。また後述の形態的特徴から、跳ね釣瓶を用いていた可能性が考えられる。

遺物 本井戸からは土師器30片、須恵器4片、録

表5 新井遺跡土坑一覧大泉坊B遺跡土坑一覧

No.	径	深さ	平面形態	掘削形態	位置	遺物	備考
1	70 × 42	20	隅丸	袋状	3区		
2	52 × 38	14	隅丸長方形	平底	3区		
3	38 × 26	8	隅丸台形	平底	3区		
4	46 × 40	9	隅丸台形	平底	3区		
5	48 × 36	27	隅丸長方形	平底	3区		
6	55 × 55	31	円形	丸底	3区		
7	78 × 65	25	隅丸	平底	3区		
8	124 × (84)	27	楕円形	平底	3区		
9	150 × (59)	30	楕円形	平底	3区		
10	104 × 76	9	長方形	平底	2区		
11	100 × (54)	42	方形か	平底	2区		
12	140 × 96	25	長方形	平底	2区	○	
13	74 × 66	28	楕円形	平底・袋状	2区	○	
14	116 × (143)	44	楕円形	丸底	4区	○	4-1土坑
15	99 × 69	5	楕円形	丸底	4区		4-2土坑
16	84 × 70	34	楕円形	丸底	4区	○	4-3土坑

の破片と思しき鉄片1点が出土しているが、図示すべきものは見られなかった。

時期 本井戸の時期は明確ではないが、埋土と跳ね釣瓶を用いた可能性に鑑みれば、中・近世の所産として捉えられる。

規模 径: 204 × 200cm 深さ: 93cm

構造 本井戸は円形プランの南部が幅120cm、長さ40cm程突出する隅丸凸形のプランを呈する。

掘削形態は掘鉢型で、使用の結果と見られるが、南に延びて、底面形態は南北方向を長軸とする細長い楕円形となっている。壁面は南壁は弧状を呈してやや緩やかで、北壁は直線的で鋭角に立ち上がる。

土坑群 (第162～165図, P. L 41～43・48)

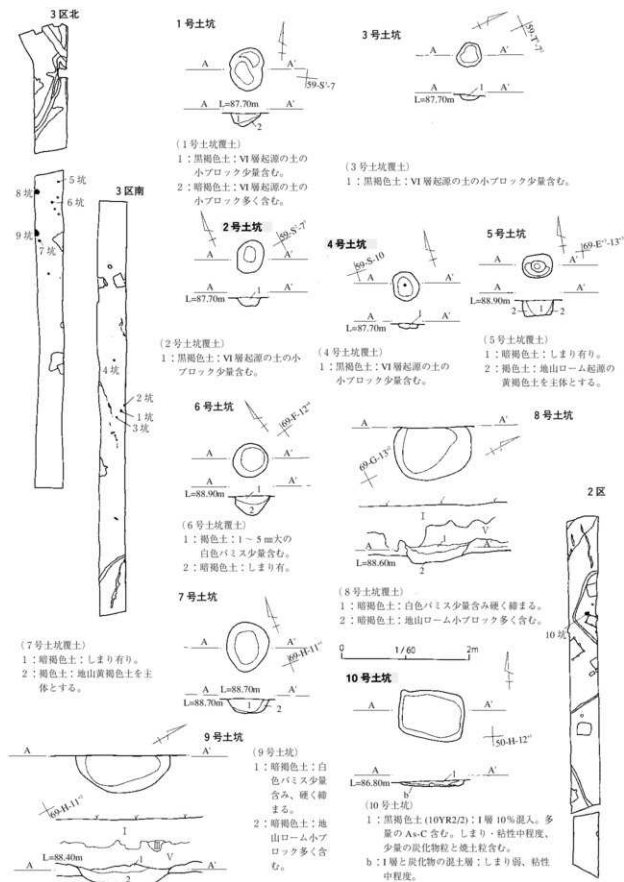
概要 本遺跡に於いては28基の土坑を調査した。

このうち4区所在土坑の遺構番号は第4章第1節に述べたように、4-1～4-4号土坑は14～17号土坑、4-6号土坑は18号土坑、4-15～4-24号土坑は19～28号土坑に変更した。また前述のように、調査の途中段階から掘立柱建物の柱穴と確認されたものが9基あった。

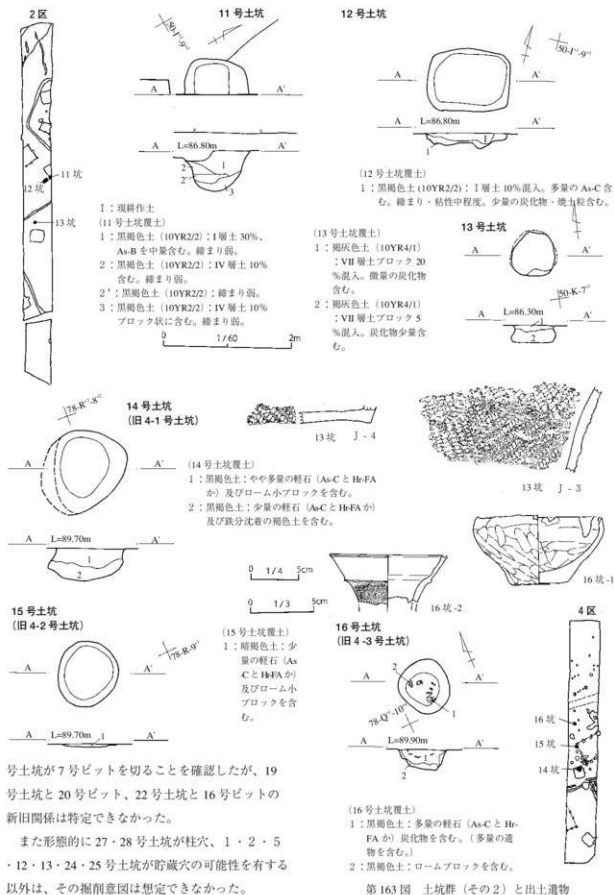
これら土坑の分布は大きくは2区北部、3区南部と3区北部から4区にかけての3区域に分けられるが、特に4区に集中的分布が見られた。

一方23～28号土坑は重複関係にあったが、このうち26号土坑が27号土坑より、27号土坑が25号土坑より新しいことを確認できた以外は新旧関係を特定できなかった。また11号土坑は16住居を、20

No.	径	深さ	平面形態	掘削形態	位置	遺物	備考
17	142 × 200	39	隅丸台形	丸底	4区		4-4土坑
18	115 × 113	22	円形	平底	4区	○	4-6土坑
19	96 × 91	15	円形	平底	4区	○	4-15土坑、21pH入
20	118 × (60)	22	円形か	平底	4区		4-16土坑
21	122 × 110	9	円形	平底	4区		4-17土坑、21pH入
22	99 × 97	13	円形	平底	4区	○	4-18土坑、22pH入
23	108 × (58)	18	不整形	丸底	4区	○	4-19土坑
24	(348) × 116	15	長円形	平底	4区	○	4-20土坑
25	(294) × 149	19	長方形	平底	4区	○	4-21土坑
26	69 × (29)	23	方形か	丸底	4区		4-22土坑
27	74 × 68	11	隅丸長方形	柱穴状	4区		4-23土坑
28	(62) × (29)	61	円形か	平底	4区		4-24土坑



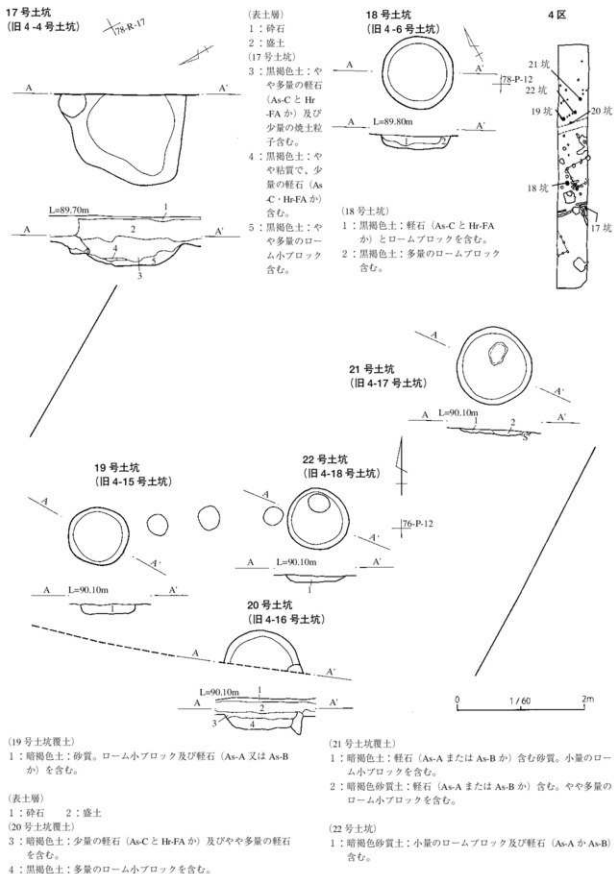
第162図 土坑群 (その1)



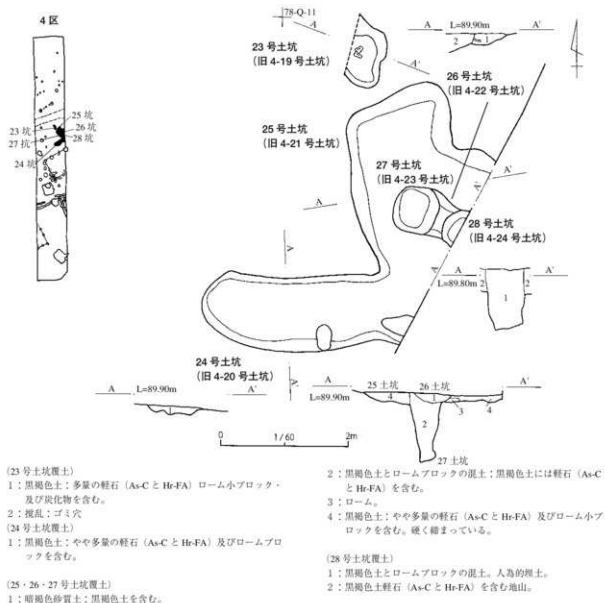
号土坑が7号ビットを切ることを確認したが、19号土坑と20号ビット、22号土坑と16号ビットの新旧関係は特定できなかった。

また形態的に27・28号土坑が柱穴、1・2・5・12・13・24・25号土坑が貯蔵穴の可能性を有する以外は、その掘削意図は想定できなかった。

第163図 土坑群(その2)と出土遺物



第164図 土坑群 (その3)



第165図 土坑群 (その4)

遺物 12・14・16・18・19・22～25号土坑からは土師器片等若干の出土遺物を得たが、13号土坑からは縄文土器片(176図掲載のJ3・J4)、16号土坑からは土師器鉢(1)と須恵器罌(2)、19号土坑からは磨石(1)の出土が見られた。

時期 各土坑のうち、22号土坑は出土遺物から現代の、また土層の埋土の観察から11号土坑は中世以降、15・19・21号土坑は中・近世以降、26号現代の所産と確認されたが、他の土坑は覆土の観察所見から古代以前の所産と認識されたが、このうち

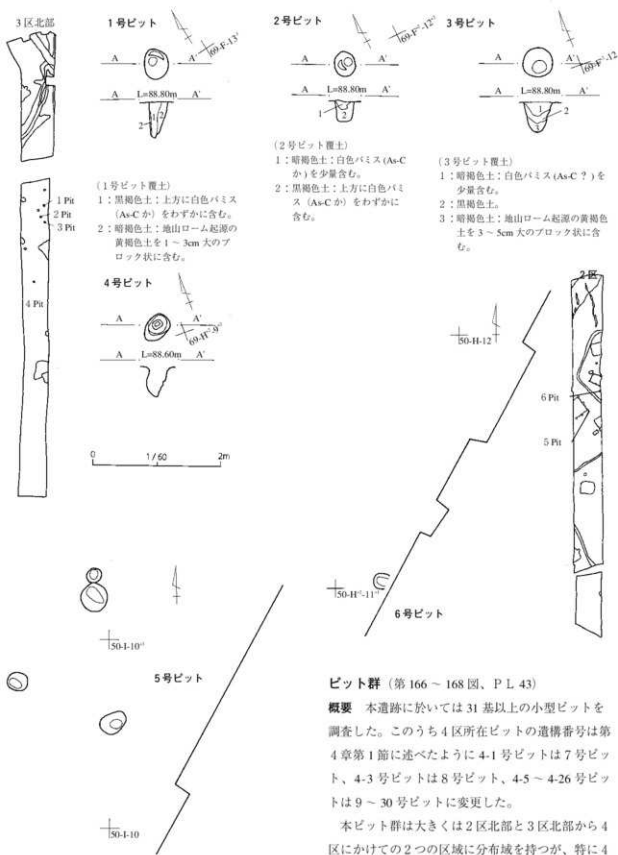
12～14・24・25号土坑は出土遺物から律令期の所産と判断されるものであった。

規模 (表5参照)

構造 平面形態は1・6・8・9・13～16・18～22・24号土坑は円形、号土坑は楕円形又は長円形、23号土坑が不整形である以外は方形或いは長方形様のプランを呈している。

掘削底面は1・6・14・15・17・23号土坑が丸底を呈する以外は平底であり、13号土坑は袋状、27・28号土坑は柱穴状の掘削形態を呈している。

第4章 富田大泉坊B遺跡で発見された遺構と遺物



第166図 ピット群 (その1)

ピット群 (第166~168図, P. L. 43)

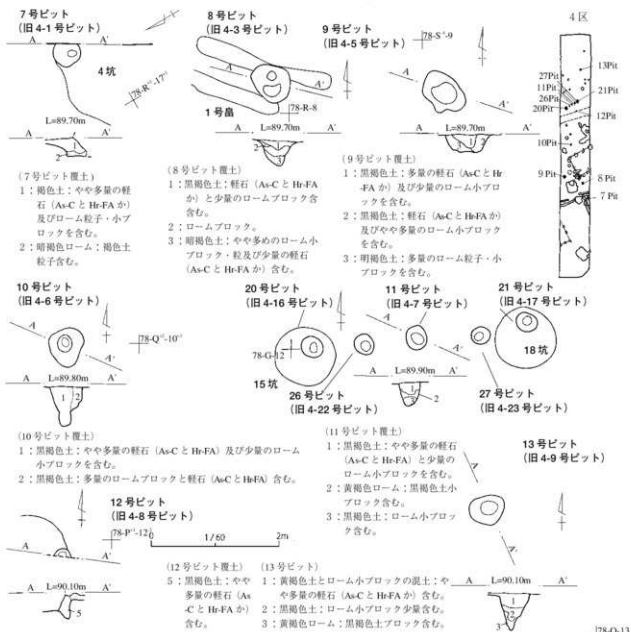
概要 本遺跡に於いては31基以上の小型ピットを調査した。このうち4区所在ピットの遺構番号は第4章第1節に述べたように4-1号ピットは7号ピット、4-3号ピットは8号ピット、4-5~4-26号ピットは9~30号ピットに変更した。

本ピット群は大きくは2区北部と3区北部から4区にかけての2つの区域に分布域を持つが、特に4区に集中的な分布が見られ、その頻度は土坑よりも大きい。

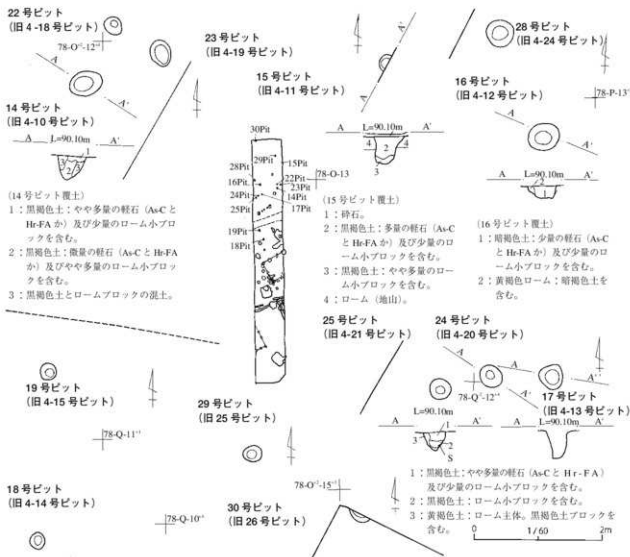
表6 大泉坊B遺跡ピット一覧

No.	径	深さ	平面形	傾斜形	位置	遺物	備考
1	49 × 38	34	楕円形	尖底	3区		柱穴、杭跡か
2	40 × 32	34	楕円形	平底	3区	○	
3	48 × 46	50	円形	丸底	3区		
4	47 × 33	47	楕円形	瓦底	3区		
5	47 × 42	42	楕円形	尖底か	2区	○	
6	28 × 22	43	楕円形	尖底	2区	○	
7	42 × (37)	29	楕円形	尖底か	4区		4-1ピット
8	62 × 44	40	楕円形	尖底	4区	○	4-3ピット
9	76 × 45	28	楕円形	丸底	4区		4-5ピット
10	60 × 48	62	楕円形	丸底	4区	○	4-6ピット、柱穴
11	38 × 32	36	楕円形	尖底	4区		4-7ピット
12	(25) × (12)	23	円形	—	4区		4-8ピット、20坑中
13	58 × 44	58	楕円形	尖底	4区	○	4-9ピット、柱穴
14	52 × 34	38	楕円形	尖底	4区	○	4-10ピット
15	28 × (14)	21	円形	丸底	4区		4-11ピット

No.	径	深さ	平面形	傾斜形	位置	遺物	備考
16	46 × 40	20	円形	平底	4区		4-12ピット
17	40 × 32	44	楕円三角形	平底	4区		4-13ピット、柱穴
18	26 × 20	13	楕円形	—	4区	○	4-14ピット
19	26 × 18	25	楕円形	—	4区	○	4-15ピット
20	32 × 35	40	円形	平底	4区		4-16ピット、19坑中
21	34 × 28	26	楕円形	—	4区		4-17ピット、22坑中
22	26 × 24	14	楕円形	—	4区	○	4-18ピット
23	12 × 22	12	楕円形	—	4区		4-19ピット
24	38 × 32	40	楕円形	—	4区		4-20ピット
25	34 × 32	45	円形	尖底	4区		4-21ピット
26	32 × 30	37	楕円形	—	4区		4-22ピット
27	32 × 24	32	楕円形	—	4区		4-23ピット
28	44 × 38	21	円形	平底	—		4-24ピット
29	28 × 26	11	円形	—	4区		4-25ピット
30	34 × (12)	7	楕円形	尖底	—		4-26ピット



第167図 ピット群 (その2)



第168図 ピット群 (その3)

小ピット同士の重複関係は見られなかったが、13・16・17号ピットはそれぞれ20、19、22号土坑の中に在ったが、このうち13号ピットが20号土坑に切られることを確認した以外は、新旧関係を特定することはできなかった。

掘削意図はその形態から1~4・6・11・14・18号ピットは柱穴と判断される。他のピットについては想定できなかったが、12・21・22・27・28号ピットと18・25・26号ピットの2群は近接して比較的直線上に在るため構列等の可能性も考えられる。

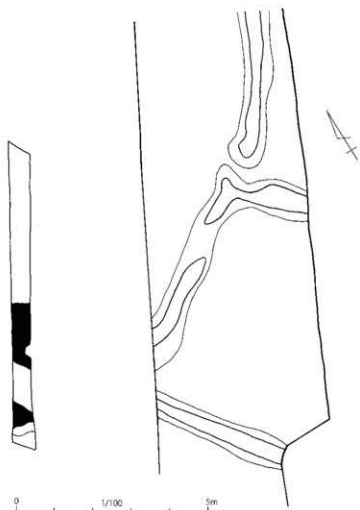
遺物 ピット群のうち、2・5~7・9・11・14・15・19・20・23号ピットからは土師器片を中心とする若干の出土遺物を得た。

時期 これらのピットのうち、1~7・10~12・14~18号ピットは堆積土から古代以前の所産と認識され、2・5~7・11・14・15号ピットは出土遺物から律令期の所産と判断されるが、他のピットの時期は特定できなかった。

規模 (表6参照)

構造 平面形態は8・10~12・27・28・31号ピットは方形或いは長方形、9・18号ピットの三角形様の形態を呈する以外は円形若しくは楕円形状のプランを呈している。

掘削底面は1・4・5・9・12・14・25・26号ピットが尖形、3・10・11・16号ピットが丸底、17・18・21・29号ピットは平底を呈している。



第169図 As-B下水田

As-B 下水田 (第169図、P L 43)

概要 本遺跡1区では県道藤岡大胡線を挟んで東側に接する富田新井遺跡1区と同様に南部が谷頭となっており、同遺跡に続く浅間山噴出のAs-B 軽石で被れた水田址を確認、調査した。

この水田址の遺存状態は良好とは言えず、畦畔が確認できたのはその北寄りの区域に限られて、中・南部は上述の旧流路によって大きく壊されていた。尚、旧流路の南部にもAs-Bの堆積が認められたためこの辺りまで水田が広がっていたものと思われる。

遺物 本水田址からの出土遺物は得られなかった。

時期 本水田址は水田面を被覆するテフラから天仁元年(A.D.1108)に埋没した、12世紀初頭以前の

所産と確認されるものである。

規模 範囲：27×5.7 m

(畦) 幅：51～31cm

高さ：5cm

(水口) 幅：34cm 深さ：10cm

構造 本水田址はその半ばが旧流路に壊されており、畦畔も一部を確認できたに過ぎないため、その構造を詳らかにすることはできなかった。

本水田址は自然地形に沿って作られているが、富田新井遺跡のもの程南北両側の傾斜はきつはななかったが、緩傾斜面を削って設けられた幅31mの平坦面上に造られている。

本水田址では北部で北北東-北東-南西方向に走行を取る畦畔1条と、これから東側に分岐する北東-南西方向の畦畔2条を確認した。前者は後者のうち北側のものと接する箇所で走行の方向を変えており、此の接続箇所の北側に水口が設けられている。水口の中央部は低くなっている。

水田区画としては3箇所を確認したがこのうち一面は南北281cmを測ったもののその面積を確認することはできなかった。

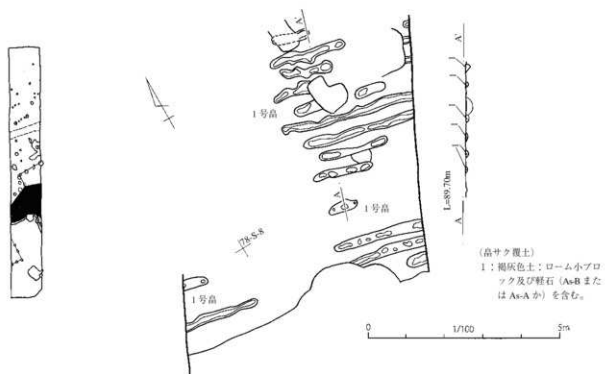
晶 (第170図、P L 32)

概要 本晶は4区のやや南寄りに位置している。

本晶は3号掘立柱建物と重複し、これを切っているが、重複する2号井戸等との新旧関係は明らかにすることはできなかった。

遺存状態は良好ではなく、その一部を調査できたに過ぎなかった。

遺物 本晶からは土師器、須恵器片を各1点出土しているが、図示すべきものは見られなかった。



第170図 高

時期 本高の時期は明瞭ではないが、覆土の軽石から推して、中・近世以降の所産と把握される。

規模 範囲：8.3×7.6 m

(サク) 幅：17～28cm 深さ：4～12cm

構造 本高では16条のサクを確認したが、東部に14条、西部に2条在って、確認範囲でも東西2区画に分けられるものと判断された。両者は2.5m程度隔たっていて、通路等の存在が想定される。

サクとサクの間隔は約50cmである。

地割れ痕 (第171～172図、P.L.44)

概要 本遺跡では2区から3区にかけて地割れ痕が7箇所確認された。

これらの地割れと他遺構との重複関係は見られなかった。

尚、確認された地割れ痕は1・2・5号地割れの土層堆積状況の観察から噴砂と判断される。

遺物 これらの地割れ痕跡からの出土遺物は見られなかった。

時期 地割れ群の形成時期は断定できないが、周辺地での地震記録に照らして弘安9(818)年の地震によるものと判断される。

規模 (1号地割れ) 長さ：15.4 m

幅：68cm 深さ：90cm以上

(2号地割れ) 長さ：12.2 m 幅：42cm

深さ：120cm以上

(3号地割れ) 長さ：7.9 m 幅：11cm

深さ：— cm

(4号地割れ) 長さ：5.5 m 幅：4～49cm

深さ：— cm

(5号地割れ) 長さ：12.1 m 幅：36cm

深さ：130cm以上

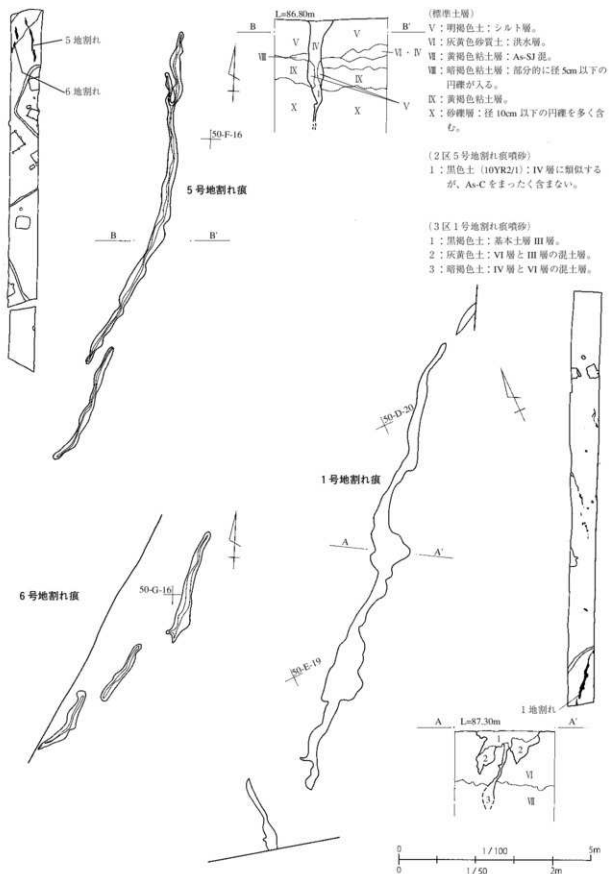
(6号地割れ) 長さ：7.3 m 幅：40cm

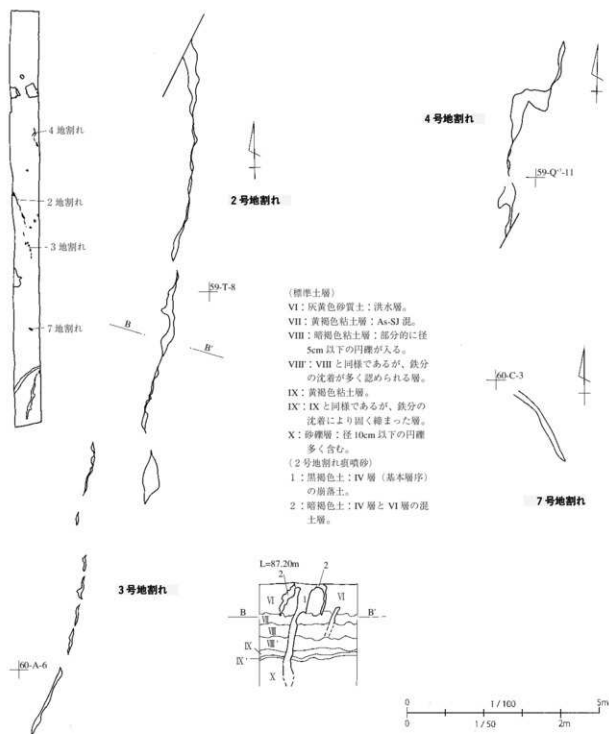
深さ：— cm

(7号地割れ) 長さ：2.2 m 幅：12cm

深さ：— cm

構造 地割れの走行は一定していないが、概ね1号地割れ痕は北北東—南南西、他の地割れ痕は北—南の





第172図 地割れ痕(噴砂, その2)

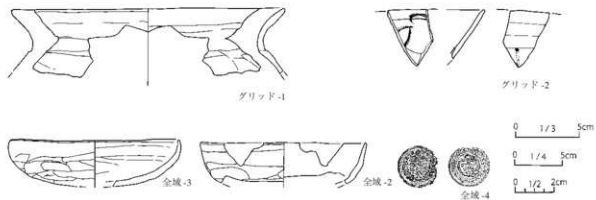
走行を取る。

全体的には直線のだが、細かくは蛇行し、その幅員も一定ではなく途切れる箇所もある。断面は上下で太くなり、中位で細くなる傾向が見られる。

遺構外の出土遺物 (第173図 P L 50)

概要 本遺跡に於いては2～4区で遺構外の遺物が得られた。

出土量は全体で900点を上回るが、その比率は



第173図 遺構外の出土遺物

遺物 遺構外の遺物は土師器甕・坏を中心に古墳時代前期或いは律令期の土師器や、量は少なかったが、弥生土器、須恵器、灰軸葉陶器、軟質陶器、陶磁器、瓦、鉄の出土があったが、この中には出土グリッド記録

のある律令期の土師器甕（グリッド-1）や龍泉窯系の青磁碗片（グリッド-2）、土師器坏（全城-2・3）、明治15年制定の半銭銅錢（全城-4）が見られた。

第2節 2面の出土遺物

本遺跡では1区から4区にかけて縄文時代の遺物の出土を見ている。本節に於いては、遺構からの出土遺物等も含め一括報告することとする。

遺物包含層

(第174～181図、P.L.44・45・50～52)

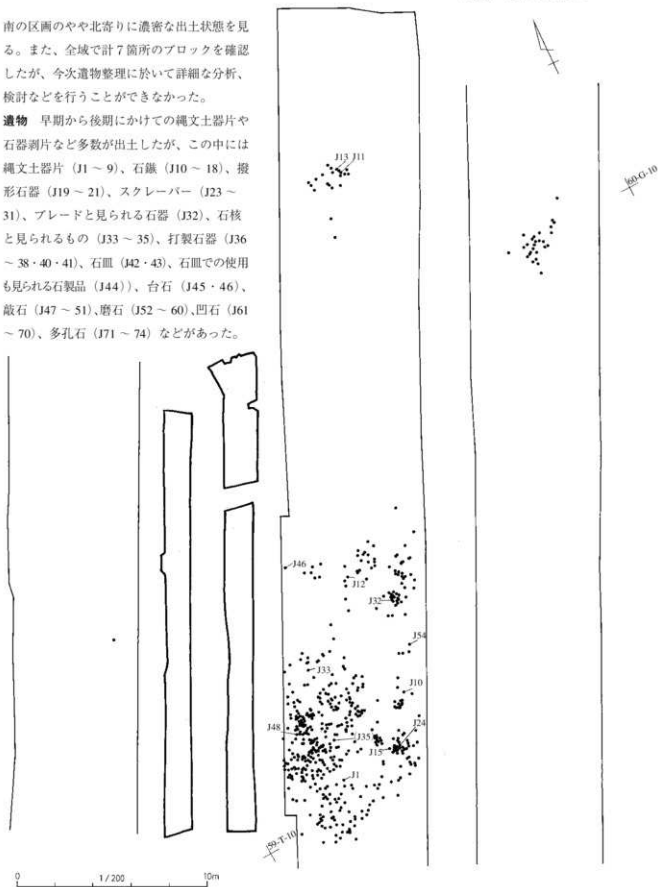
概要 遺物包含層からは縄文時代前期の土器片と、頁岩を中心とする石器の剥片など500点を上回る出土遺物が得られたが、特に3区の3つの区画のうち



第174図 縄文包含層遺物分布図 (その1、左:1区 中・右:2区)

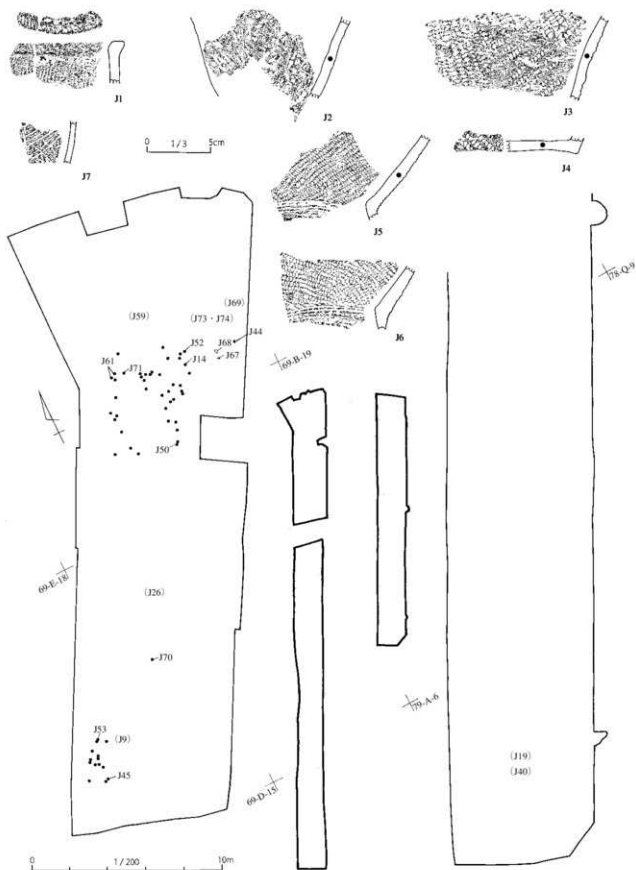
南の区画のやや北寄りに濃密な出土状態を見る。また、全域で計7箇所のブロックを確認したが、今次遺物整理に於いて詳細な分析、検討などを行うことができなかった。

遺物 早期から後期にかけての縄文土器片や石器剥片など多数が出土したが、この中には縄文土器片 (J1～9)、石鏃 (J10～18)、撥形石器 (J19～21)、スクレーパー (J23～31)、ブレードと見られる石器 (J32)、石核と見られるもの (J33～35)、打製石器 (J36～38・40・41)、石皿 (J42・43)、石皿での使用も見られる石製品 (J44)、台石 (J45・46)、蔽石 (J47～51)、磨石 (J52～60)、凹石 (J61～70)、多孔石 (J71～74) などがあつた。



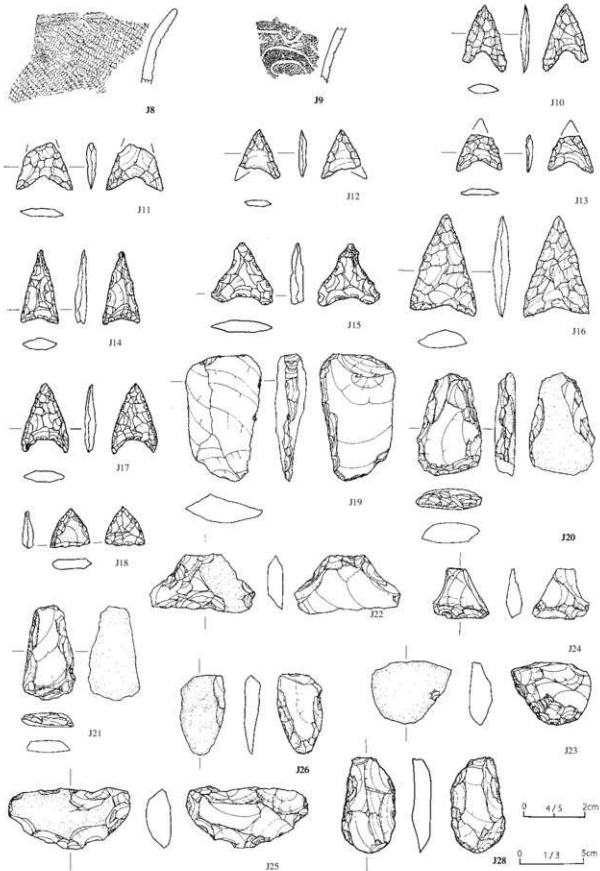
第175図 縄文包含層遺物分布図 (その2、3区)

第4章 富田大泉坊B遺跡で発見された遺構と遺物

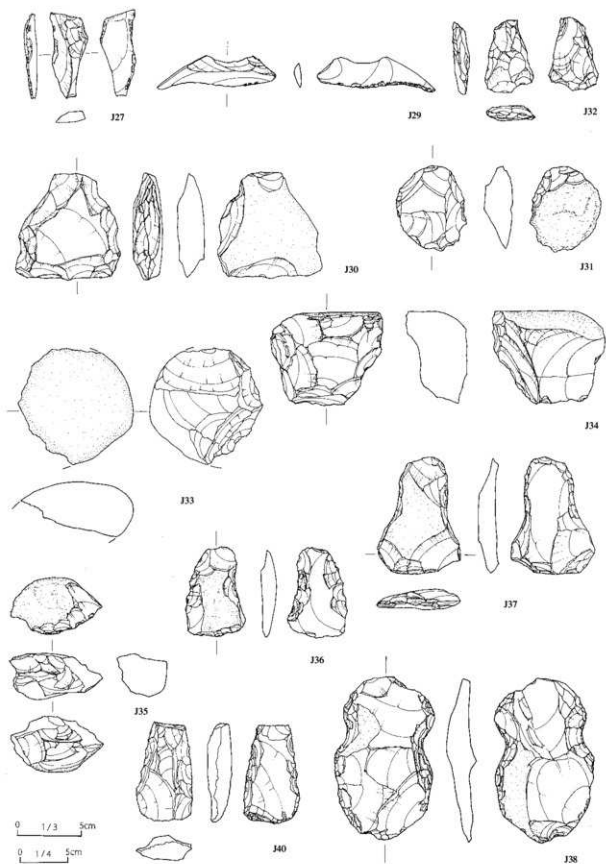


第176図 縄文包含層遺物分布図（その3、左：3区北部 右：4区）と出土遺物（その1）

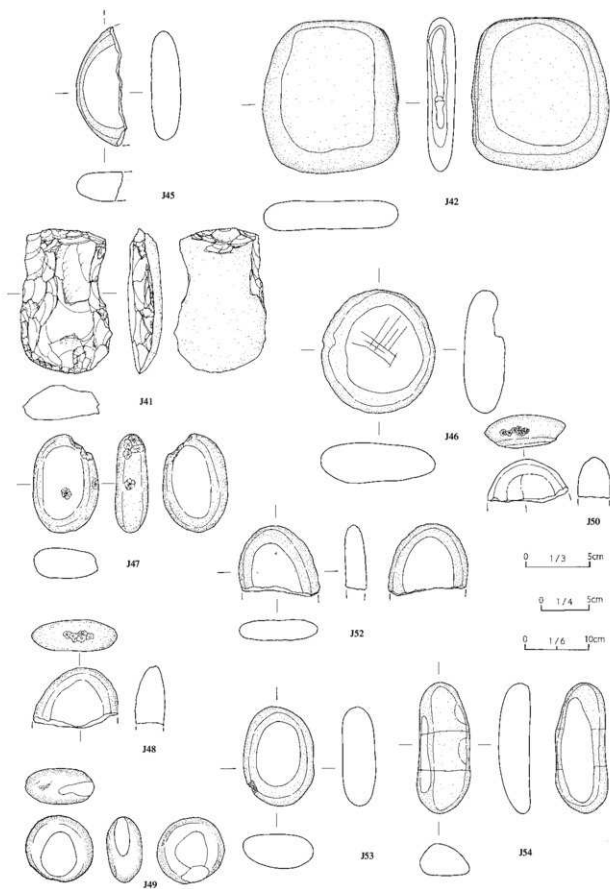
第2節 2面の出土遺物



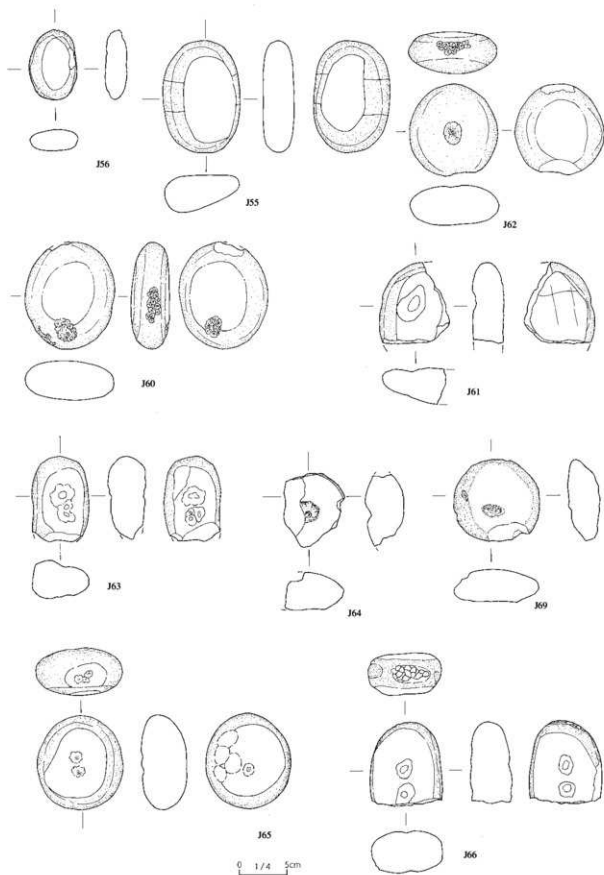
第177図 縄文時代出土遺物 (その2)



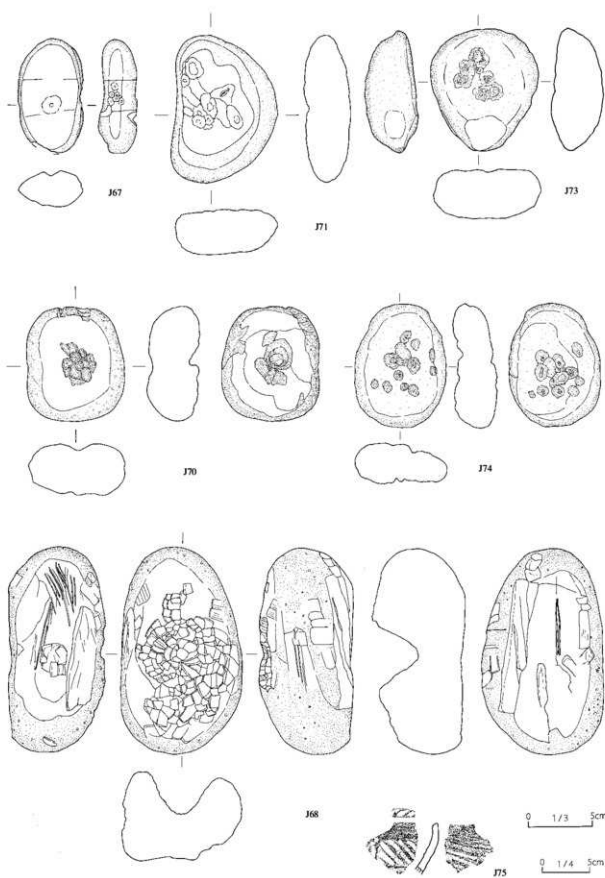
第178図 縄文時代出土遺物（その3）



第179図 縄文時代出土遺物（その4）



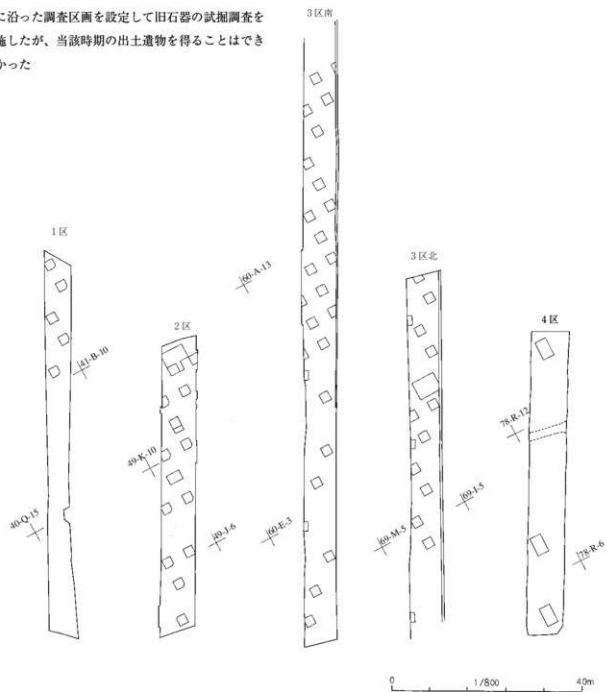
第180図 縄文時代出土遺物（その5）



第181図 縄文時代出土遺物 (その6)

第3節 旧石器の試掘調査

本遺跡に於いては1面或いは2面終了時にグリッドに沿った調査区画を設定して旧石器の試掘調査を実施したが、当該時期の出土遺物を得ることはできなかった



第182図 旧石器試掘坑設定位置図

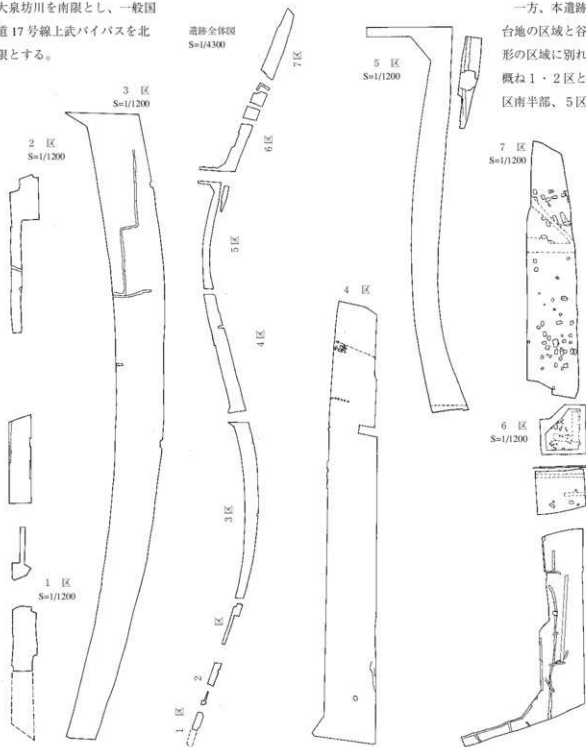
第5章 富田大泉坊A遺跡で発見された遺構と遺物

第1節 遺跡の概要と遺構面の区分

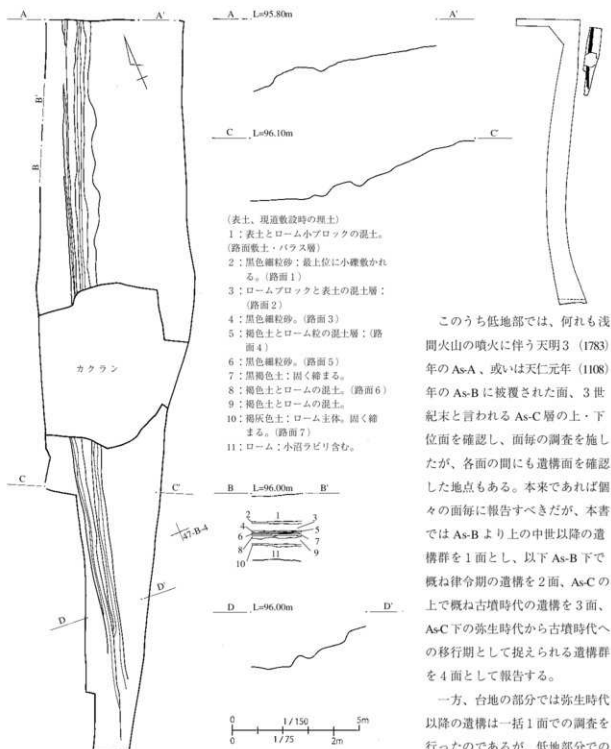
本遺跡は県道藤岡大胡線の西側に在り、一般河川大泉坊川を南限とし、一般国道17号線上武バイパスを北限とする。

本遺跡は公道によって区画される7区から成る。

一方、本遺跡は台地の区域と谷地形の区域に別れ、概ね1・2区と3区南半部、5区北



第183図 富田大泉坊A遺跡1面 (左から、1区、2区、遺跡全体、3区、4区)



第184図 1号道路

東隅部、南西隅の張り出し部を除く6区及び7区は台地の区域であり、3区北半部と4・5区及び6区南西の張り出し部は低地部に当たる。尚、4・5区の東寄りには台地と低地の端境に当たっている。

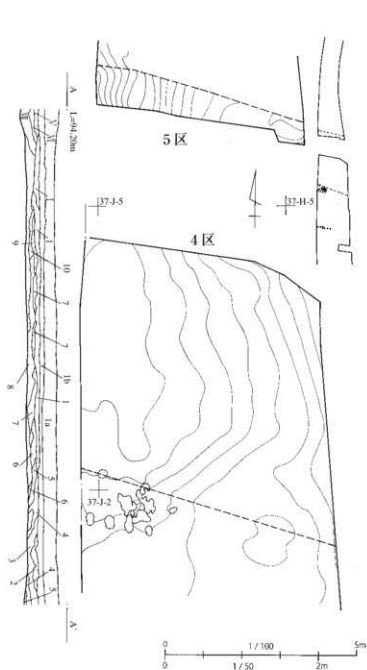
の難しかった土坑、一括ピットは1面のうち一括して報告することとした。

尚、縄文時代のものは5面、旧石器の試掘については6面として報告する。

このうち低地部では、何れも浅間火山の噴火に伴う天明3(1783)年のAs-A、或いは天仁元年(1108)年のAs-Bに被覆された面、3世紀末と言われるAs-C層の上・下位面を確認し、面毎の調査を施したが、各面の間にも遺構面を確認した地点もある。本来であれば個々の面毎に報告すべきだが、本書ではAs-Bより上の中世以降の遺構群を1面とし、以下As-B下で概ね律令期の遺構を2面、As-Cの上で概ね古墳時代の遺構を3面、As-C下の弥生時代から古墳時代への移行期として捉えられる遺構群を4面として報告する。

一方、台地の部分では弥生時代以降の遺構は一括1面での調査を行ったのであるが、低地部分での区分に依って時期の特定し易い溝遺構を4面に振り分け、時期特定

第2節 1面の遺構と遺物



第185図 女堀

1号道路 (第184図, P L 54)

概要 本道路は5区北東隅の台地部分に於いて確認された。南北は調査区外に延びている。

他の遺構との重複関係は認められなかった。

本道路は県道藤岡大胡線の旧道である。5区付近で現道は台地縁辺を通るが、地元住民の証言や地図

(女堀埋没後の土層)

Ia: 現代の表土。

Ib: 以前の耕作土。

(女堀覆土)

1: 黒褐色土 (10YR/M2); ロームブロック 20%、灰色土 (Value5) を 10%、II層土 5% 含む。

2: にぶい黄色ローム (2.5Y6/4); II層土ブロック 5% 混入。

3: II層土: 灰色土 (Value5) とロームブロック各 10% 混入。

4: I層土に類似。

5: 3層土に類似。

6: 紫木泥流礫層堆積物: II層土ブロック 10% 混入。

7: 灰色土 (Value5); ロームブロック 10% 混入。

8: 6層土に類似。

9: 7層土に類似。

10: 6層土に類似。

により、昭和20年代までは段丘崖下を走行したことを確認した。また土層断面観察で長期の使用を窺がわせる7面の道路面を確認した。

遺物 弥生時代～中近世の土器・陶磁器類80点の出土が見られたが図示すべきものは見られなかった。

時期 上述のように本道路の使用の下限は昭和20年代であるが、上限は少なくとも近世まで遡るものである。

規模 長さ: 29.2 m 幅: 71 cm

深さ: 1 cm

構造 本道路は北北東-南南西に走行を取り、直線的な形状を成す。2%の勾配で北に上っている。

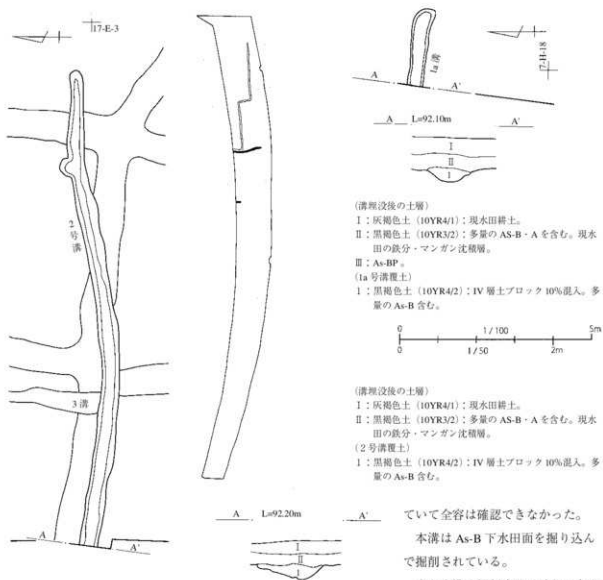
上述のように道路面は7面を確認した。形成時期は不明だが、最下面には大八車等によるらしい幅60cm程の轍痕を確認した。

女堀 (第185図, P L 54)

概要 女堀は、その一部を4区北東から5区南端部に確認した。しかし圃場整備等で大きく削平されていて、底面付近を調査できたに過ぎなかった。

他遺構との重複は見られなかった。

本溝はAs-Bテフラ降下後の復旧事業として、掘



第186図 1a・2号溝

削られ、使用前に廃棄された用水堀遺構である。

遺物 弥生土器や古式土師器を中心に、土師器、須恵器、撓乱による陶器片など266点の土器、陶磁器が出土したが、図示すべきものは見られなかった。

時期 掘削時期は12世紀中葉と想定される。

規模 長さ:13.0m 幅:21.3m 深さ:40cm

構造 女堀東南東-西北西方向に走行を取り直線的なプランを呈する。

掘削形態は箱堀状である。

1 a号溝 (第186図、P.L.56)

概要 本溝は3区北部に在る。西側が調査区外に出

遺物 出土遺物は見られなかった。

時期 As-B下水田を切るため中世以降の所産と確認されるが、覆土にAs-Bを多く含むため、As-B降下(1108年)後比較的早い段階の掘削と思慮される。

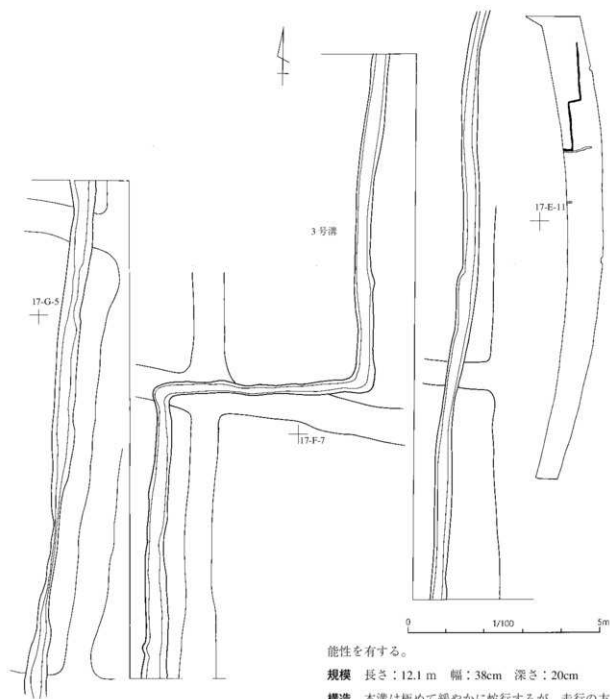
規模 長さ:2.1m 幅:50cm 深さ:20cm

構造 上述のように一部を調査できたに過ぎないが東西に走行を取り、直線的なプランを見せる。

箱堀状で、横断面形はU字状を呈する。

2号溝 (第186図、P.L.56)

概要 本溝も3区北部に位置するが、西側は調査区外に伸びていて全容は把握できなかった。



第187図 3号溝

3号溝とT字形に接続し、As-B 下水田を切る。
本溝の掘削意図は特定できなかった。

遺物 本溝からの出土遺物は見られなかった。

時期 覆土にAs-B 軽石を多量に含むため、As-B 降下（1108年）後、比較的早い段階に掘削された可

能性を有する。

規模 長さ：12.1 m 幅：38cm 深さ：20cm

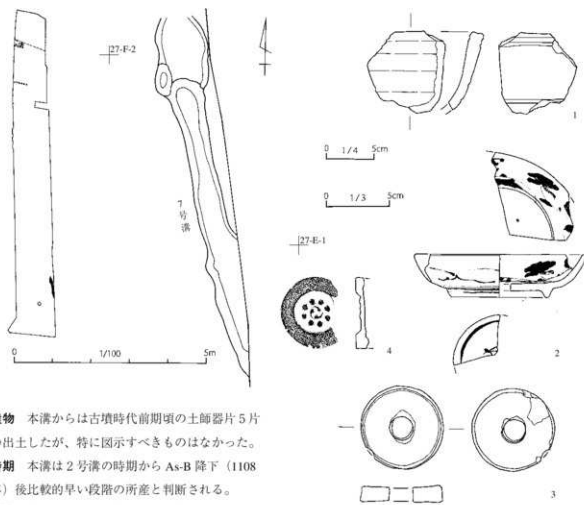
構造 本溝は極めて緩やかに蛇行するが、走行の方向は概ね東西を向いている。

掘削形態は箱堀状だが、底面は舟底上を呈する。

3号溝（第187図、P L 56）

概要 本溝も3区北部に位置する。北端は調査区内に在るが、滅失している。一方、南側は2号溝とT字形に接続しており、これと一体である。

本溝の掘削意図は特定できなかった。



遺物 本溝からは古墳時代前期頃の土師器片5片の出土したが、特に図示すべきものはなかった。

時期 本溝は2号溝の時期からAs-B降下(1108年)後比較的早い段階の所産と判断される。

規模 長さ:50.6m 幅:70cm 深さ:10cm

構造 本溝は全体としては僅かに時計回りに方向に傾く南北走行を取り、途中西側に折れを作って南に下り2号溝に接続している。

掘削形態は箱堀状を呈している。

7号溝(第188図、P.L.56・68)

概要 本溝は4区南部に位置する。北側は調査区内に在るものの滅失しており、南側は調査区外に出ていて全容を把握することはできなかった。他の遺構との重複関係は見られなかった。

また掘削意図も把握できなかった。

遺物 土師器片を中心に軟質陶器片を含む出土遺物が得られたが、この中には火鉢かと思われる土器(1)、陶器皿(2)、陶製筋こきの可能性を持つもの(3)、椀瓦軒丸片(4)が見られた。

第188図 7号溝と出土遺物

時期 本溝の時期は出土遺物から推して近世～近代の所産と思慮される。

規模 長さ:9.0m 幅:65～95cm

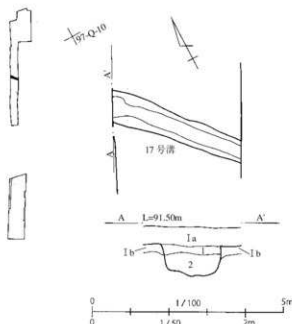
深さ:25cm

構造 本溝は北北西-南南東に走行を取り、南端で南東方向にその走行を変じているが、全体的に直線的なプランを取る。

掘削形態は箱堀状を呈する。

17号溝(第189図)

概要 本溝は2区北部に位置する。東西が調査区外に出ており、特に東側には構造物が在って調査区が狭まる区域に在るため、僅かな範囲しか調査できなかった。



(標準土層)

1a: 現代の表土

1b: 以前の耕作土

(17号溝土)

1: 黒褐色土 (10YR3/2); VI 層土ブロック 1% 混入。As-A 中量含む。I 層に近似する。

2: 黒褐色土 (10YR3/2); VI 層土ブロック 10% 混入。As-A 中量含む。I 層に近似する。

第189図 17号溝

他の遺構との重複は見られなかった。

本溝に流水の痕跡は認められず、掘削意図も特定できなかった。

遺物 出土遺物は認められなかった。

時期 覆土の観察所見から推して近世後期以降の所産と判断される。

規模 長さ: 3.6 m 幅: 85cm 深さ: 40cm

構造 本溝は北西-南東方向に走行を持つ直線的なプランを呈する。

掘削形態は箱型を呈する。

33号溝 (旧6-1号溝、第190図、P L 54)

概要 本溝は6区・中南部に位置している。南側は調査区外に出ているため確認することができず、北側は消失していて全容は詳らかにすることはできなかった。

また本溝は近代(圃場整備前)の小水路と交差してこれに切られている。

本溝は一部に流水の痕跡が認められるため、水路として使用されたものと判断される。

遺物 本溝からの出土遺物は得られなかった。

時期 本溝はテフラの観察所見から中世若しくは近世の所産と判断される。

規模 長さ: 43.2 m 幅: 88cm 深さ: 13cm

構造 全体には極緩やかな蛇行を見せ、北東-南西方向流下するが、北端では走行を北に変じている。

掘削形態は箱型を呈する。

34号溝 (旧6-2号溝、第191図、P L 55)

概要 本溝は6区南部に位置する。遺存状態は不良であり、僅かな部分を調査できたに過ぎなかった。東西両側は消失していた。

他遺構との重複は見られなかった。

また掘削意図を特定することもできなかった。

遺物 本溝からの出土遺物は得られなかった。

時期 本溝の時期は特定できなかった。

規模 長さ: 6.0 m 幅: 40cm 深さ: 7cm

構造 本溝はその一部を調査したに過ぎないが、確認範囲では鈍角な「く」字形プランを呈し、東半は北東-南西、西半は西北西-東南東方向を向く。

掘削形態は不明瞭だが、箱型を呈するものと想定される。

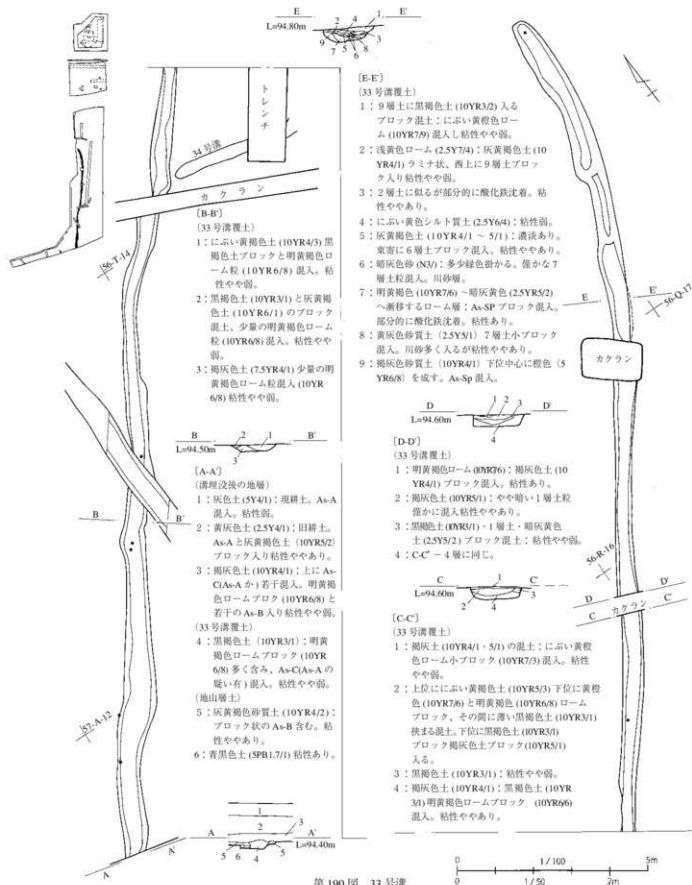
旧河道出土遺物 (第191図、P L 68)

概要 本遺跡の低地部は大泉坊川旧河道の影響を受けた区域と認識されている。後述のようにAs-C下面には流路と見られるものがあり、その後も水田等として使用されているが、As-B上面、女堀埋没後に於いても水田耕作の可能性が窺がわれ、一方でその状態から氾濫域を含む旧河道であった時期のあったことも窺がわれた。

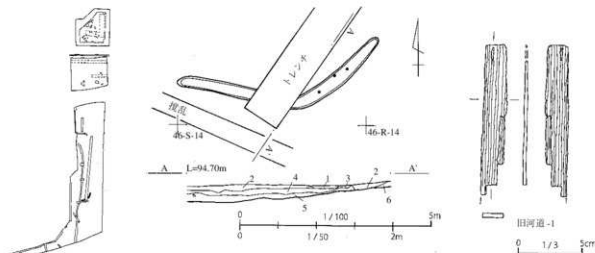
遺物 こうした旧河道は遺構としては調査していないが、3～5区の低地部分に於いて、木質の出土が見られ、曲物の側板(1)の出土が見られた。

時期 出土遺物は中・近世的である。

構造 遺構形態等は明確には把握できなかった。



第190図 33号溝



(上位層)

1：黒灰色砂質土(10YR4/1)：川砂や多く混入し、少量の明黄褐色ローム粒(10YR6/6)と小礫混入。粘性欠。

(34号溝覆土)

2：灰黄褐色土(10YR4/2)：色調やや明るい。川砂と3・6・7層土小ブロック混入。僅かの黒色土小ブロック(7.5YR2/1)混入粘性やや欠ける。

(地山層)

3：灰黄褐色砂質土(10YR4/2)：川砂多量に含み、少量の明黄褐色土粒(10YR6/8)混入。粘性やや有。

4：黒褐色土(10YR3/1)：川砂と3層土ブロック混入。粘性やや有。

5：灰黄褐色土(10YR5/2)：若干の川砂と7層小ブロック混入。

6：明黄褐色ローム(10YR6/8)

第191図 34号溝と旧河道出土遺物

土坑群 (第192～198図、P.L 55・57・86)

概要 本遺跡に於いては2区で1基、5区で1基、6区で7基、7区で55基の合わせて64基の土坑を確認したが、このうち明確なローム台地で削平を受けていなかった6区北部から7区にかけての区域での確認数が48基と圧倒的に多かった。

尚、遺構番号については第1章に述べたように引継ぎの不手際等から、平成18・19年度の調査では一時的なものも含めて区或いは年度を付した仮の番号を用いてきたが、今次整理作業に伴って、平成18年度調査の6(区)-1号土坑は3号土坑に、平成19年度の上期に調査した土坑群のうち南側(削平により現地表が低くなっているため「下」との注記もあり)の6-07S-01・02号土坑はそれぞれ4号土坑、5号土坑に、北側(削平が浅いため「上」との表記もあり)の6-07N-01～04号土坑は6～9号土坑。平成19年度下期調査の7区の土坑は7-01号土坑が10号土坑、以下7-02号土坑が11号土坑というように順次55号土坑が64号土坑に変更し、遺構

番号が遺跡全体の通番となるように整理段階で振り直した。

これらの土坑のうち

21・22号土坑、53・54・56号土坑、59・61～63号土坑は重複関係にある

が、22号土坑が21号土坑を切る他は、新旧関係を特定することはできなかった。また3・8・9・46・50・51土坑は一部又は過半が調査区外に出ていて全容を確認することができなかった。

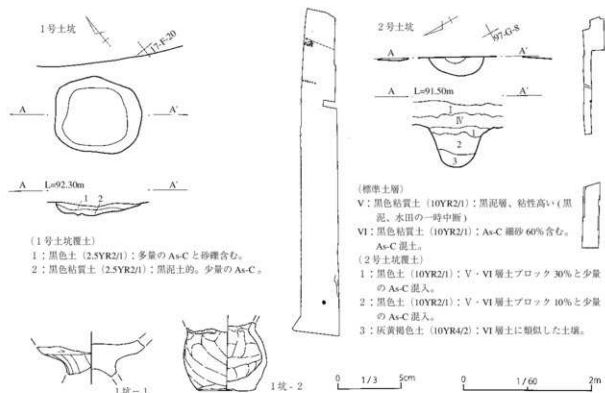
4号土坑は風倒木であり、23号土坑は灰の遺存からごみを焼却したごみ穴と想定される以外は掘削意図を特定することはできなかった。尚、長方形、或いは隅丸長方形プランの土坑は芋穴等の貯蔵目的の掘削が想定される。

遺物 これらの土坑群のうち1・10・17・20・24・28・58号土坑からは古い時期のものを中心とした土師器片や須恵器片、14～16・18・19・30号土坑からは中世以降の土器類の出土が見られたが、図示すべきものには1号土坑に弥生土器高坏(1坑-1)と同土坑上位層から手捏土器(1坑-2)、10号土坑からは須恵器片1点、14号土坑からは七輪や磁器片、15号土坑からは陶器片1点、16号土坑に焙烙鍋(1)、25号土坑に焙烙鍋(1)、32号土坑に軟質陶器火鉢(1)があり、後者には(197頁へ)

表7 大泉坊A遺跡土坑一覽

No.	径	深さ	平面形態	掘削形態	位置	遺物	備考
1	136 × 99	22	隅丸方形	丸底	5区	○	
2	86 × 100	57	隅内形	丸底	2区		
3	94 × 145	45	円形	丸底	6区	6・81 埴	
4	143 × 105	36	隅丸長方形	船底形	6区	6・078-41 埴	
5	167 × 83	15	隅丸長方形	平底	6区	6・075-02 埴	
6	66 × 40	27	隅内形	船底形	6区	6・078-01 埴	
7	74 × 50	31	隅内形	片蓋碇形	6区	6・078-02 埴	
8	180 × 72	34	隅内形	平底	6区	6・078-03 埴	
9	70 × 38	12	円形	丸底	6区	6・078-04 埴	
10	150 × 82	16	隅丸長方形	平底	7区	○ 7・01 埴	
11	130 × 74	14	隅丸長方形	平底	7区	7・02 埴	
12	124 × 68	24	隅丸長方形	平底	7区	7・03 埴	
13	80 × 58	34	円形	尖底	7区	7・04 埴	
14	138 × 90	26	隅長方形	平底	7区	○ 7・05 埴	
15	174 × 88	22	長方形	平底	7区	○ 7・06 埴	
16	142 × 96	27	隅内形	船底形	7区	○ 7・07 埴	
17	138 × 96	24	隅丸長方形	平底	7区	○ 7・08 埴	
18	140 × 78	11	隅丸長方形	平底	7区	○ 7・09 埴	
19	132 × 84	17	長方形	平底	7区	○ 7・10 埴	
20	200 × 140	38	隅丸長方形	平底	7区	○ 7・11 埴、縦り直し	
21	168 × 66	22	長方形	平底	7区	7・12 埴、22 埴切	
22	174 × 70	9	長方形	平底	7区	7・13 埴、21 埴より古	
23	112 × 89	12	隅丸長方形	平底	7区	7・14 埴	
24	100 × 82	14	長方形	平底	7区	7・15 埴	
25	108 × 81	18	長方形	平底	7区	7・16 埴	
26	166 × 90	15	隅丸長方形	平底	7区	7・17 埴	
27	87 × 62	14	長方形	平底	7区	7・18 埴	
28	98 × 84	64	小形隅内形	尖底	7区	7・19 埴	
29	118 × 80	10	隅丸長方形	平底	7区	○ 7・20 埴	
30	150 × 80	50	隅丸長方形	平底	7区	○ 7・21 埴	
31	106 × 98	6	隅丸長方形	平底	7区	○ 7・22 埴	
32	184 × 80	32	長方形	平底	7区	7・23 埴	

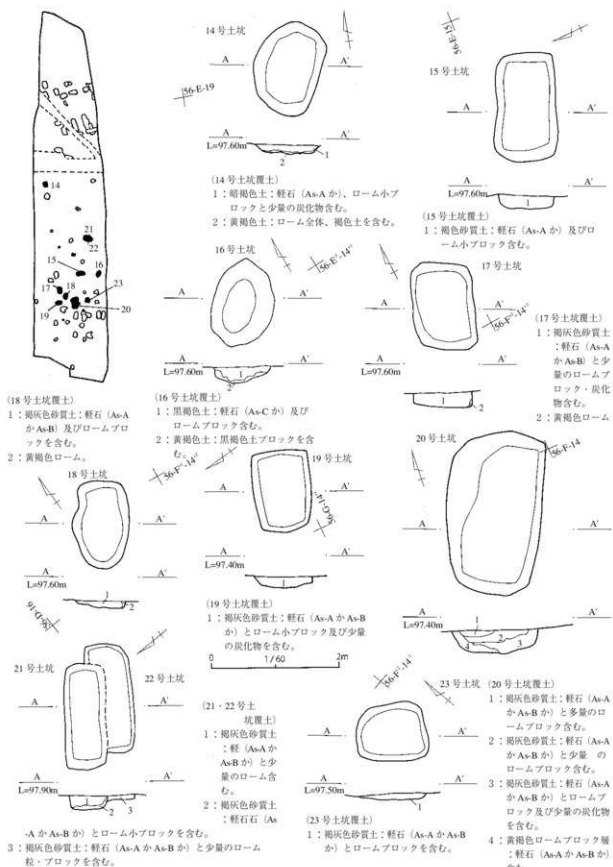
No.	径	深さ	平面形態	掘削形態	位置	遺物	備考
33	198 × 94	40	長方形	平底	7区	○ 7・24 埴	
34	138 × 108	181	凸付長方形	平底	7区	○ 7・25 埴、やや小形	
35	100 × 62	18	凸付長方形	平底	7区	7・26 埴	
36	106 × 82	13	船形	平底	7区	7・27 埴	
37	136 × 80	9	船形	平底	7区	○ 7・28 埴	
38	136 × 94	29	隅内形	平底	7区	7・29 埴	
39	73 × 62	13	方形	尖底	7区	7・30 埴	
40	122 × 76	12	船形	平底	7区	7・31 埴	
41	102 × 72	18	長方形	平底	7区	7・32 埴	
42	86 × 74	20	隅内形	尖底	7区	7・33 埴	
43	103 × 52	51	隅丸長方形	平底	7区	7・34 埴	
44	159 × 64	29	隅丸長方形	平底	7区	7・35 埴	
45	(113) × 116	40	長方形	平底	7区	7・36 埴	
46	175 × 120	43	凸付長方形	丸底	7区	○ 7・37 埴	
47	150 × 97	37	隅丸長方形	平底	7区	7・38 埴	
48	144 × 89	50	隅丸長方形	平底	7区	7・39 埴	
49	141 × 89	53	隅丸長方形	平底	7区	7・40 埴	
50	106 × 30	34	隅丸長方形	平底状	7区	7・41 埴	
51	160 × 52	52	隅丸長方形	平底	7区	7・42 埴	
52	152 × 70	11	長方形	平底	7区	7・43 埴	
53	112 × 78	41	隅丸長方形	平底	7区	7・44 埴、54・56 重覆	
54	229 × 45	43	隅丸長方形	平底	7区	7・45 埴、53・56 重覆	
55	133 × 48	38	隅丸長方形	平底	7区	7・46 埴	
56	134 × 45	26	長方形	平底	7区	7・47 埴、53・54 重覆	
57	108 × 64	26	隅丸長方形	尖底	7区	7・48 埴、58 と重覆	
58	74 × 64	28	隅丸長方形	尖底	7区	7・49 埴、57 と重覆	
59	(306) × 95	59	長方形	平底	7区	○ 7・50 埴、61・63 重覆	
60	285 × 91	56	長方形	平底	7区	7・51 埴	
61	(110) × 76	60	長方形	平底	7区	7・52 埴、59・61 重覆	
62	96 × 41	32	隅内形	平底	7区	7・53 埴、63 と重覆	
63	195 × 98	57	長方形	平底	7区	7・54、59・61・62 重覆	
64	90 × 78	82	長内形	平底	7区	7・55 埴	



第192図 土坑群と出土遺物 (その1)



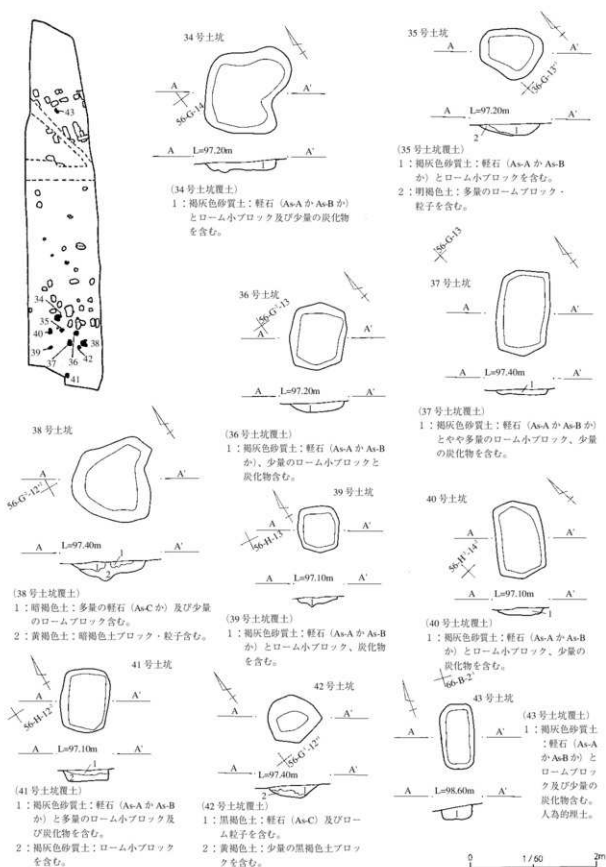
第193図 土坑群 (その2)



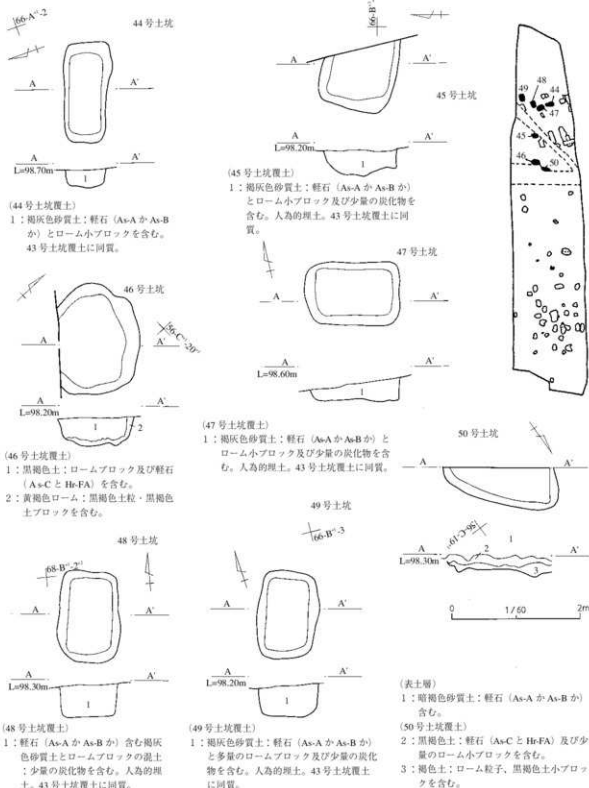
第194図 土坑群 (その3)



第195図 土坑群と出土遺物 (その4)



第196図 土坑群 (その5)



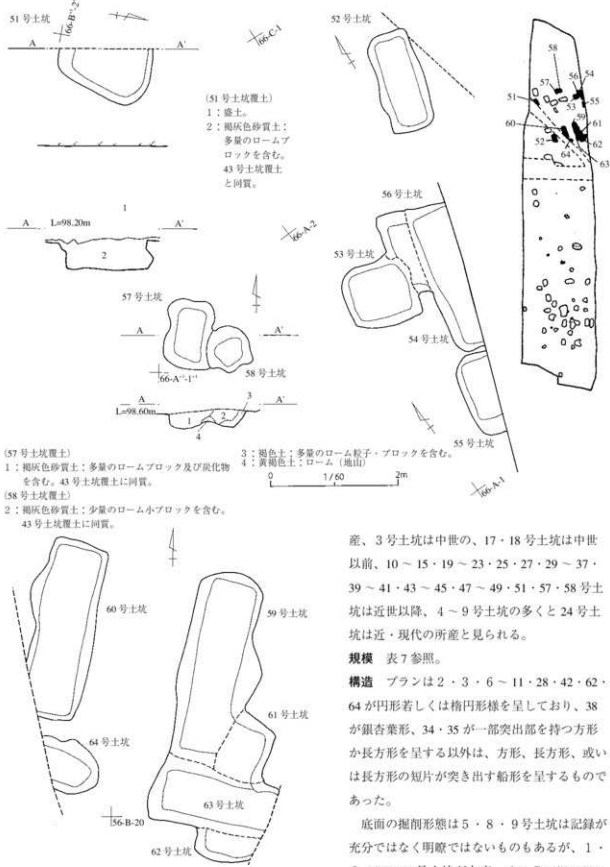
第197図 土坑群 (その6)

(191頁より) セルロイド製備衝 (2) の出土も見られた。

時期 これらの土坑の時期は特定できなかったが、

出土遺物から推して1号土坑は4世紀前半以前、24号土坑は近代以降と判断された。また覆土の観察所見から2・16・28・38・46・50号土坑は古代の所

第5章 富田大泉坊A遺跡で発見された遺構と遺物



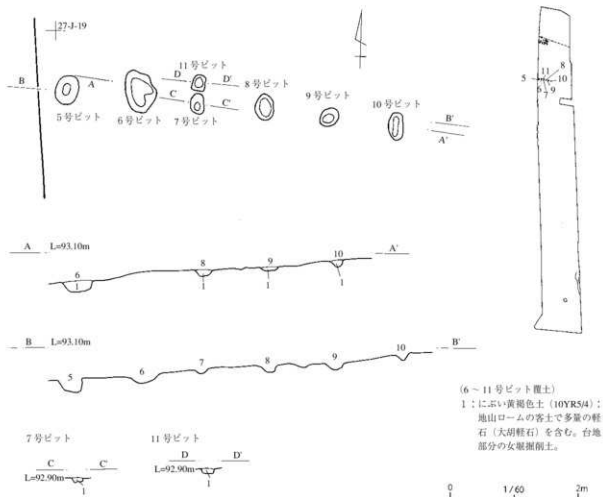
第198図 土坑群（その7）

産、3号土坑は中世の、17・18号土坑は中世以前、10～15・19～23・25・27・29～37・39～41・43～45・47～49・51・57・58号土坑は近世以降、4～9号土坑の多くと24号土坑は近・現代の所産と見られる。

規模 表7参照。

構造 プランは2・3・6～11・28・42・62・64が円形若しくは楕円形様を呈しており、38が銀杏葉形、34・35が一部突出部を持つ方形か長方形を呈する以外は、方形、長方形、或いは長方形の短片が突き出す船形を呈するものであった。

底面の掘削形態は5・8・9号土坑は記録が充分ではなく明瞭ではないものもあるが、1・2・35・46号土坑が丸底、4・7・28・38・39・42号土坑が尖底、4・16号土坑が船底形



第199図 ビット群 (その1)

を呈し、7号土坑が片葉研形である以外は平底を成すものであった。

ビット群

(第199～202図、P.L.55・58・86)

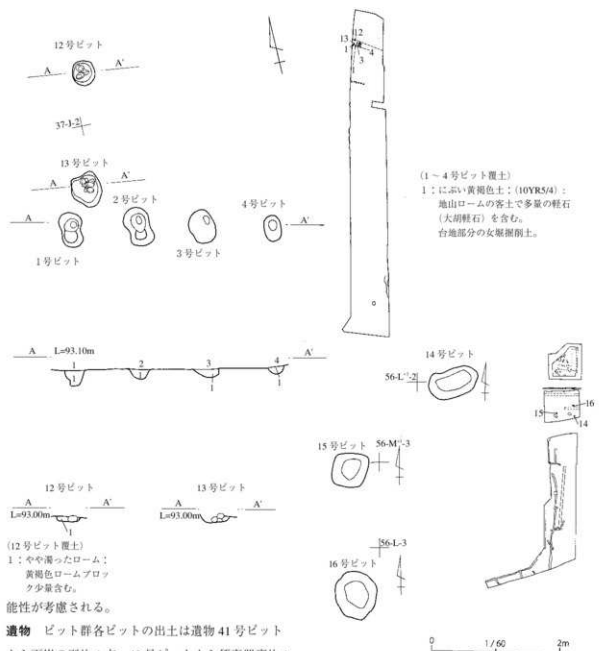
概要 富田大泉坊A遺跡では3区で13基、6区で28基、7区で11基の小型ビットを確認、調査したが、土坑とビットの区分には絶対基準を設定していないため、一部規模の大きいものも含まれている。これらのビットは3区のもの女堀周辺に集中しており、6区は北部の削平された区域の北端にも3基確認されたが、削平の浅い北部から7区にかけて集中的な分布が見られた。

尚、遺構番号は土坑と同様に仮番号を附していたが、平成19年度上期調査の6区土坑群のうち南

側地区(土坑群の項参照)の6-07S-01～03号ビットは14～16号土坑、北側(土坑群の項参照)の6-07N-01号ビットは17号ビットに変更し、以下順次番号を附して6-07N25号ビットが40号ビットになるよう、また平成19年度下期調査の7区の7-01号ビットは41号ビットとして以下11号ビットが51号ビットとなるよう、番号を遺跡全体の通番となるよう振り直している。

これらのビットのうち41・42号ビットは重複していたが、新旧関係は特定できなかった。他のビットは単独にあった。また26・42号ビットは一部が調査区が出でいて全容を確認できなかった。

各ビットの掘削意図は確認できなかったが、3区の1～4号ビットと15～17(11)・8～10号ビットはそれぞれ直線的に配置するため欄列であった可



第200図 ビット群(その2)

(12号ビット覆土)
1: やや窪ったローム;
黄褐色ロームブロック少量含む。
能性が考慮される。

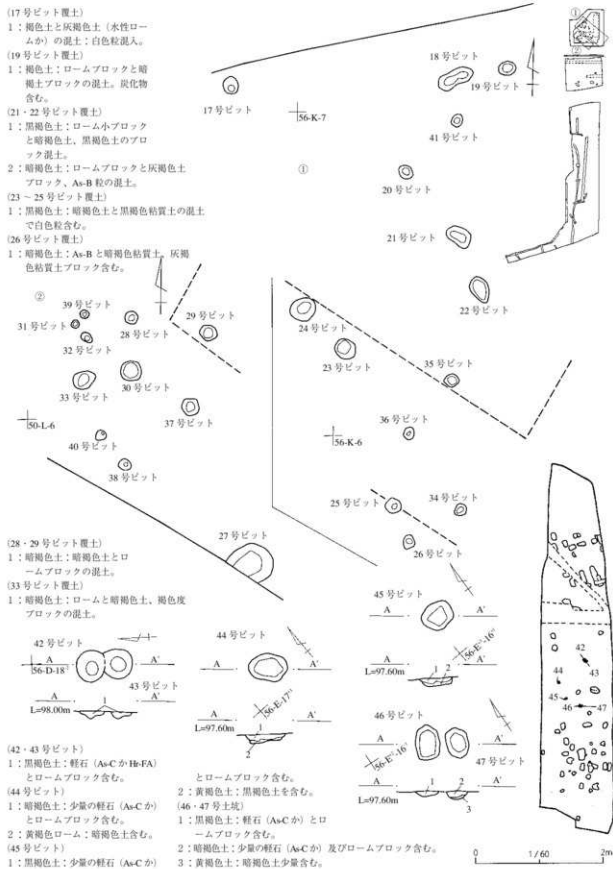
遺物 ビット群各ビットの出土は遺物41号ビットから頁岩の剥片1点、49号ビットから須恵器亮片1点が出土したのみであった。尚、共に図示すべきものではなかった。

時期 1～13号ビットは女堀と同時期の可能性も考慮されるが、中世以降の所産として把握したい。6区に在る14～41号ビットのうち17・19・21～25・27～29・33号ビットは古代の所産と見られるが、他のビットについては近・現代所産の可能性を有する。7区に在る42～52号ビットについても時

期は特定できなかったが、42～49号ビットは古代の所産、50号ビット以降は中世以降の所産と判断される。

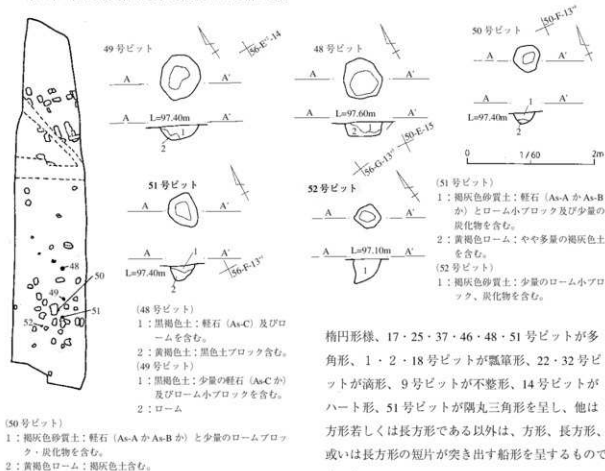
規模 表8参照。

構造 プランは3・5・8～10・14・16・19・27・28・30・33・41～44・49号ビットが円形若しくは



第201図 ピット群(その3)

第5章 富田大泉坊A遺跡で発見された遺構と遺物



第202図 ピット群 (その4)

楕円形様、17・25・37・46・48・51号ピットが多角形、1・2・18号ピットが橢圓形、22・32号ピットが滴形、9号ピットが不整形、14号ピットがハート形、51号ピットが隅丸三角形を呈し、他は方形若しくは長方形である以外は、方形、長方形、或いは長方形の短片が突き出す船形を呈するものであった。

表8 大泉坊A遺跡ピット一覧

No.	径	深さ	平面形状	断面形状	位置	遺物	備考
1	59 × 36	24	橢圓形	平底	3区		
2	60 × 41	17	橢圓形	丸底	3区		
3	52 × 41	14	楕円形	丸底	3区		
4	40 × 27	12	楕円形	尖底	3区		
5	47 × 35	24	楕円形	平底	3区		
6	71 × 49	18	不整形	丸底	3区		
7	32 × 21	8	隅丸長方形	丸底	3区		
8	41 × 28	11	楕円形	平底	3区		
9	34 × 26	7	楕円形	丸底	3区		
10	45 × 23	11	楕円形	尖底	3区		
11	26 × 22	10	隅丸長方形	平底	3区		
12	40 × 36	8	隅丸長方形	平底	3区		
13	56 × 48	12	ハート形	平底	3区		
14	79 × 67	14	楕円形	平底か	6区	6-07N-01Pg	
15	66 × 61	28	隅丸長方形	丸底か	6区	6-07N-02Pg	
16	78 × 67	21	楕円形	丸底か	6区	6-07N-03Pg	
17	28 × 20	31	隅丸五角形	平底か	6区	6-07N-04Pg	
18	60 × 24	6	橢圓形	丸底か	6区	6-07N-02Pg	
19	24 × 22	14	円形	丸底か	6区	6-07N-03Pg	
20	22 × 20	15	隅丸長方形	丸底か	6区	6-07N-04Pg	
21	40 × 25	13	隅丸長方形	丸底か	6区	6-07N-05Pg	
22	46 × 18	26	滴形	平底か	6区	6-07N-06Pg	
23	34 × 30	38	隅丸長方形	平底	7区	6-07N-07Pg	
24	42 × 34	29	隅丸台形	丸底か	6区	6-07N-08Pg	
25	26 × 24	38	隅丸五角形	丸底か	6区	6-07N-09Pg	
26	22 × 18	12	隅丸長方形	丸底か	6区	6-07N-10Pg	

No.	径	深さ	平面形状	断面形状	位置	遺物	備考
27	64 × (52)	17	楕円形	平底か	6区	6-07N-11Pg	
28	22 × 20	14	円形	丸底	6区	6-07N-12Pg	
29	29 × 22	6	隅丸長方形	平底か	6区	6-07N-13Pg	
30	32 × 30	13	円形	平底か	6区	6-07N-14Pg	
31	14 × 12	22	隅丸長方形	平底か	6区	6-07N-15Pg	
32	20 × 14	22	滴形	尖底	6区	6-07N-16Pg	
33	34 × 30	13	楕円形	丸底	6区	6-07N-17Pg	
34	22 × 18	6	隅丸長方形	丸底	6区	6-07N-18Pg	
35	23 × 19	16	隅丸長方形	平底	6区	6-07N-19Pg	
36	20 × 16	21	隅丸長方形	尖底	6区	6-07N-20Pg	
37	28 × 26	20	隅丸五角形	丸底	6区	6-07N-21Pg	
38	20 × 16	33	隅丸長方形	尖底	6区	6-07N-22Pg	
39	16 × 14	10	隅丸長方形	平底	6区	6-07N-23Pg	
40	14 × 13	23	隅丸台形	尖底	6区	6-07N-24Pg	
41	22 × 18	10	円形	丸底	6区	6-07N-25Pg	
42	50 × 38	12	楕円形	尖底	7区	7-01Pg	
43	466 × 47	10	楕円形	尖底	7区	7-02Pg	
44	62 × 34	12	楕円形	平底	7区	7-03Pg	
45	50 × 40	12	隅丸長方形	平底	7区	7-04Pg、底面方形	
46	56 × 34	10	長五角形	丸底	7区	7-05Pg	
47	30 × 34	14	船形	丸底	7区	7-06Pg	
48	66 × 50	22	隅丸多角形	平底	7区	7-07Pg	
49	74 × 54	24	楕円形	丸底	7区	7-08Pg、底面船形	
50	42 × 34	18	六角形	丸底	7区	7-09Pg	
51	56 × 30	24	隅丸三角形	丸底	7区	7-10Pg	
52	42 × 26	40	方形	尖形	7区	7-11Pg	

底面形態については記録化できた遺構についてみると、1・5・8・11～13・44・45・48号ビットが平底、2・3・6・7・9・46・47・49～51号ビットが丸底、4・10・42・43・52号ビットが突底であった。

As-A 下水田 (第203図、P L 55)

概要 6区の低地部分、即ち区南西の西張り出し部に於いてAs-Aに被覆された平坦面が確認された。

畦畔は明瞭ではなかったが、遺構面の状態と後述のように畦畔の存在が認識されることから水田面であったと判断した。

遺物 出土遺物は得られなかった。

時期 本水田址はAs-Aに被覆されているため、As-A降下の天明3(1873)年を下限とする近世中期以前の所産と判断される。

規模 範囲：20.3×3.3 m

(東側溝)長さ：1.8 m 幅：32cm 深さ：10cm

(西側溝)長さ：3.1 m 幅：52cm 深さ：4cm

(西側溝内ビット)径：45×34cm 深さ：14cm

構造 本水田址は東西の帯状の狭い調査範囲で確認されているため、その一部を調査したに過ぎない。

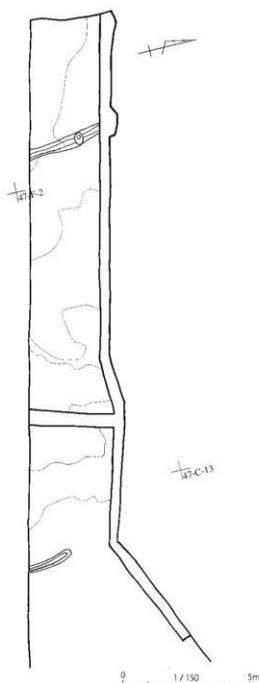
水田址の東側は15cm程の高さの段差があって、緩やかな傾斜で立ち上がっている。またその肩際に1条の溝が南に向かって掘削されていた。

水田面は比較的平坦であったが水田址西寄りにもビット1基を内包する1条の溝が南北方向に在り、目視では明瞭でなかったが、等高線によってその西側に沿って畦畔の存在が確認された。溝の東側に畦畔の痕跡を確認することはできなかった。また水田址東寄りに掘削した排水溝の西側にも等高線によって畦畔の痕跡が確認された。

尚、断面は第3面(As-C上水田)の図(第229図)に掲載した。

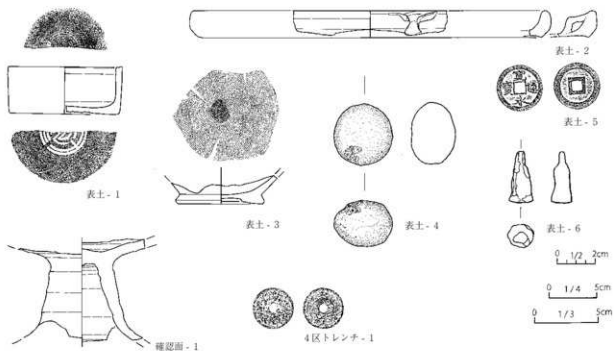
第1面遺構外の出土遺物 (第204図、P L 88)

概要・遺物 第1面及び表土からは弥生時代以降の陶磁器を含む土器類を中心とした遺物の出土が見ら



第203図 As-A 下水田 (6区)

れたが、1区に於いては土器類3点と石器片1点、2区では土器類26点、3区では土器類172点、4区では土器類520点、ビーズ玉など40点が出土しており、この中には陶器挿鉢(表土3)の出土も見られた。5区では土器類942点の他、工具と見られる鉄製品(表土-6)の出土があり、6区では土器類212点と礫石(表土-4)が見られ、7区では練炭起



第204図 1面の遺構外の出土遺物

こし(表土-1)や焙烙鍋(表土-2)を含む土器類43点、石器片6点、寛永通寶(表土-5)の出土が見られた。

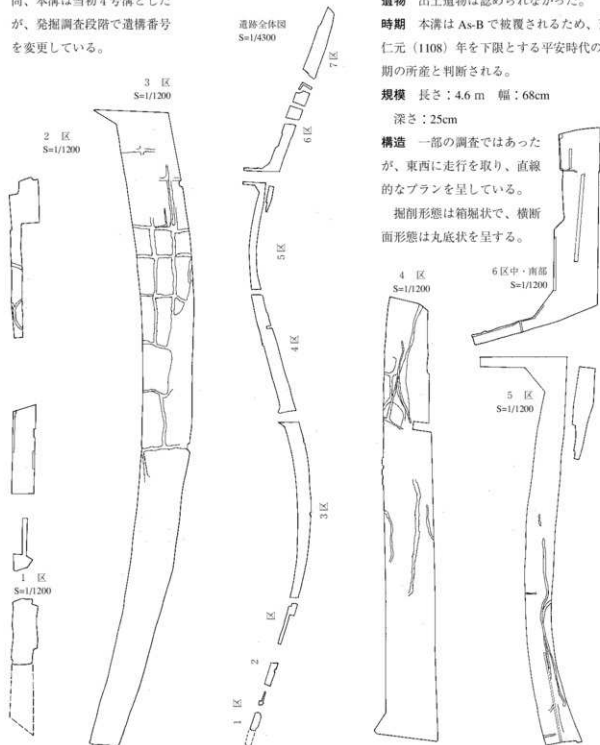
また4区の試掘トレンチでは10銭白銅貨(4区

トレンチ-1)が出土した他、土器類49点の出土があり、7区の試掘トレンチでは72点の土器類の出土が見られた。この他確認面の出土遺物として須恵器高坏(確認面-1)もあった。

第3節 2面の遺構と遺物

1 b号溝 (旧4号溝) (第206図)

概要 1 b号溝は3区北部に位置する。西部が調査区外に出るため一部を調査できたに過ぎなかった。高、本溝は当初4号溝としたが、発掘調査段階で遺構番号を変更している。



第205図 富田大泉坊A遺跡2面 (左から、1区、2区、遺跡全体、3区、4区、5区、6区)

本溝はAs-B直下に在るが、As-B下水田面を掘り込み走行の向きも畦畔と異なるので、As-B下水田に伴わないか、水抜き溝であったと思われる。

遺物 出土遺物は認められなかった。

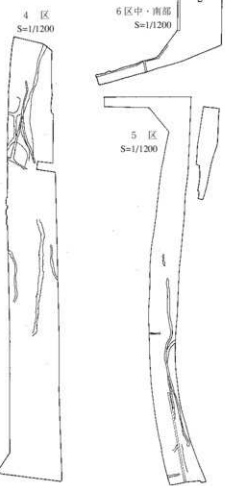
時期 本溝はAs-Bで被覆されるため、天仁元(1108)年を下限とする平安時代の後期の所産と判断される。

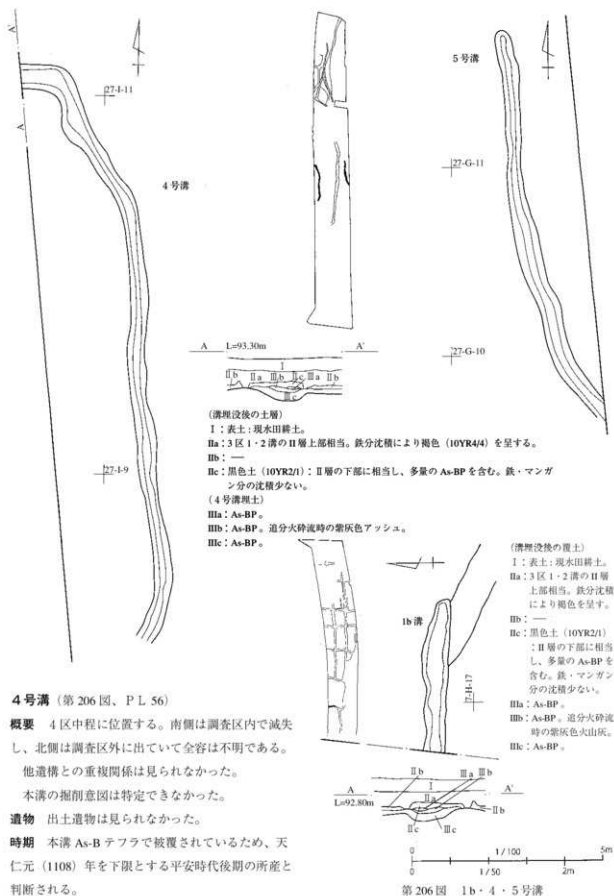
規模 長さ:4.6 m 幅:68cm

深さ:25cm

構造 一部の調査ではあったが、東西に走行を取り、直線的なプランを呈している。

掘削形態は箱廬状で、横断面形態は丸底状を呈する。





4号溝 (第206図、P L 56)

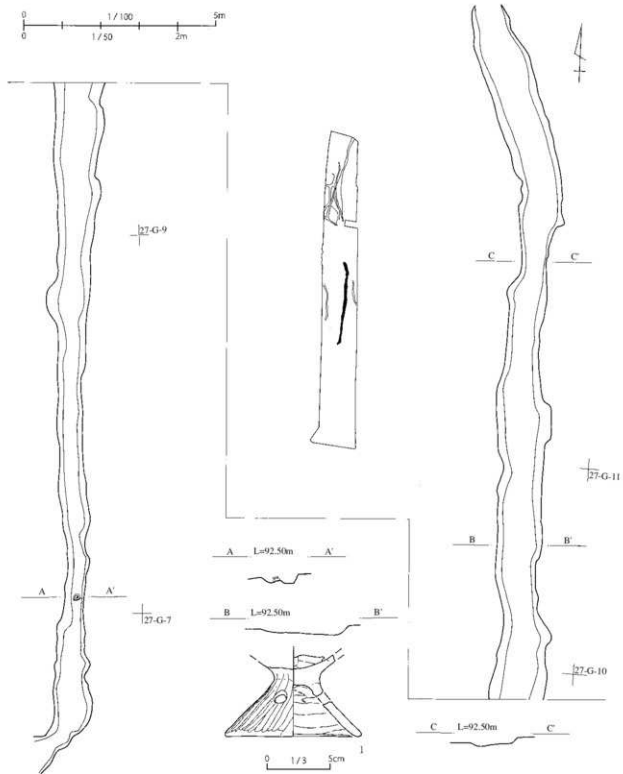
概要 4区中程に位置する。南側は調査区内で滅失し、北側は調査区外に出ていて全容は不明である。

他遺構との重複関係は見られなかった。

本溝の掘削意図は特定できなかった。

遺物 出土物は見られなかった。

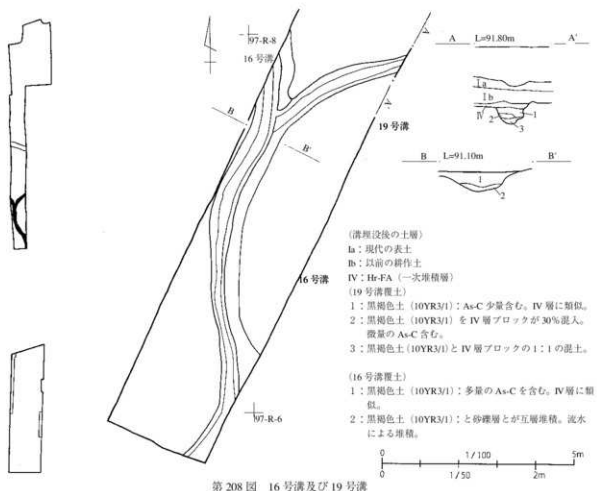
時期 本溝 As-B テフラで被覆されているため、天仁元(1108)年を下限とする平安時代後期の所産と判断される。



第207図 6号溝と出土遺物

規模 長さ：15.9 m 幅：40～78cm
深さ：10cm

構造 西側から入って南南東に、更に南に走行を
変じる。僅か蛇行するが、基本的に直線的である。



第208図 16号溝及び19号溝

掘削区形態は北部は箱影り状を呈し、南部は葉研堀状である。

5号溝 (第206図、P.L.56)

概要 本溝も4区の中程に位置しているが、南側は調査区外に出ていて全容を明らかにすることはできなかった。

本溝と重複する他遺構は無かった。

本溝の掘削意図は特定できなかった。

遺物 出土遺物は見られなかった。

時期 As-B 下面に確認されていることから律令期の所産としたが、本溝の時期は特定できなかった。

規模 長さ: 10.8 m 幅: 66cm 深さ: 10cm

構造 本溝は南北に走行を取って始まるが、南側で弧を描きながら南東方向に調査区外に出ている。

掘削形態は葉研堀状を呈する。

6号溝 (第207図、P.L.56・57・68)

概要 本溝は4区中南部に位置するが、南北が滅失して全容を詳らかにすることはできなかった。

本溝の掘削意図を特定することはできなかった。

尚、本溝は1面に含めた7号溝に連続するものである可能性も否定できない。

遺物 土師器壘片を中心に129点の出土遺物があったが、古墳時代前期の土師器高坏 (1) も見られた。

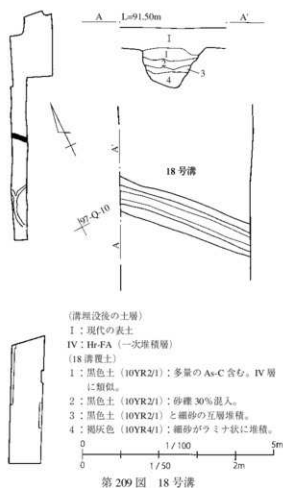
時期 本溝の時期は特定できなかった。本溝は調査面から2面に含めたが、中世以降の可能性も残る。

規模 長さ: 28.9 m 幅: 43 ~ 147cm

深さ: 12cm

構造 本溝の過半は真北に近い南北に走行を取る直線的なプランを取るが、北端で北北西、南端で南西に走行を変じている。

掘削形態は箱堀状を呈している。



第209図 18号溝

16・19号溝 (第208図)

概要 本溝は2区北部に位置する。16号溝は南北が調査区外に出ており、19号溝は東側が調査区外に出て、西側は16号溝と重複して確認できず、何れも全容を把握することはできなかった。

16・19号溝は重複するが新旧関係は特定できなかった。また他の遺構との重複はなかった。

16号溝は流水の痕跡があるため水路と確認される。19号溝の掘削意図は確認できなかったが、位置的に16号溝に合流する可能性を有する。

遺物 16号溝からは土師器7片が出土したが、図示すべきものは見られなかった。

また19号溝からの出土遺物は得られなかった。

時期 両溝とも時期は特定できなかったが、16号溝は出土遺物と覆土から律令期の所産、19号溝は覆土から律令期以前の所産として把握される。

規模 (16号溝)長さ:11.8m 幅:60~106cm

深さ:25cm

(19号溝)長さ:3.7m 幅:54cm 深さ:22cm

構造 両溝ともその一部を調査できたに過ぎなかったが、調査範囲内に於いて16号溝は概ね南北に走行を取り、緩やかなS字状のプランを呈する。一方19号溝は東北東方向から調査区に入り、反時計回りに弧を描きながら南西方向に走行を変じて16号溝に当たっている。

掘削形態は何れも箱堀状を呈し、その底面の横断面形は丸底上を呈しているが、その壁面は16号溝は聞き気味であり、19号溝は垂直に近い。

18号溝 (第209図)

概要 本溝は2区北部、東側に構造物が在って調査区が狭まる区域に位置する。東西側は調査区外に伸びていて僅かな範囲を調査できたに過ぎなかった。

他の遺構との重複は見られなかった。

また流水の痕跡があることから、水路として掘削されたものと認識される。

遺物 本溝からの出土遺物は認められなかった。

時期 細かい時期は特定できなかったが、覆土の観察所見から律令期以前の所産と認識される。

規模 長さ:3.6m 幅:90cm 深さ:53cm

構造 本溝は北西-南東方向に走行を持つ直線的なプランを呈する。

掘削形態は箱堀状を呈するが、底面の横断面形は船底状を呈する。

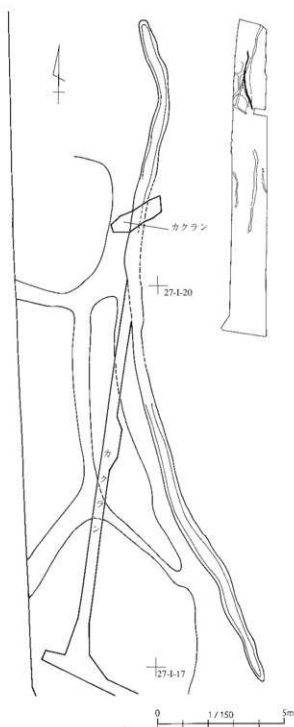
21号溝 (第210図、P.L.57)

概要 本溝は4区に所在する。全城を調査したが南北に延伸する可能性を有する。

他遺構との重複関係は見られなかったが、後述のAs-B下水田の東縁に沿うように在るため、断定はできないが水田遺構群を形成する用水路であったものと思慮される。

遺物 本溝からの出土遺物は認められなかった。

時期 As-B下水田に伴うと認識されるため、天仁



第210図 21号溝

元(1108)年以前の平安時代の所産と認識される。

規模 長さ:27.1m 幅:75cm 深さ:17cm

構造 本溝は北北西-南南東方向に軸線を持つもので、そのプランは緩やかな蛇行を見せている。

掘削形態は箱堀状を呈する。

22号溝 (第211・212図, P L 75)

概要 本溝も4区に位置するが、3面への調査途中に確認、調査された。南北が調査区外に延伸しているため全容を明らかにすることはできなかった。

他遺構との重複関係は見られなかった。

本溝には流水の痕跡が見られるため、水路であったものと判断される。また平面形状から本溝は掘り直しが行われたものと思慮される。

遺物 本溝からは土師器片を中心に弥生土器片、須恵器片等多くの出土遺物が得られた。この中には弥生土器高坏(1)、土師器器台(2)、土師器高坏(3)、土師器坏(4~6)、須恵器長頸壺(7)も見られた。

時期 発掘調査時の所見に於いて、覆土並びにVa層(As-C混褐灰色土)を掘り込むことから7・8世紀の所産と認識されている。

規模 長さ:40.7m 幅:64~300cm

深さ:20cm

構造 本溝は凡そ南に向かって流下するが、そのプランには緩やかな蛇行が認められる。

掘削形態は壁面がやや開き気味の箱堀状である。

23号溝 (第213図, P L 57)

概要 本溝は5区南部に位置する。調査区内で完結しているが北寄りて途切れるなど遺存状態はさして良好ではなく、南北に延伸する可能性を有する。

他遺構との重複関係は認められなかった。

また掘削意図も特定できなかったが、覆土から見てAs-B下水田に伴う水路であったと思慮される。

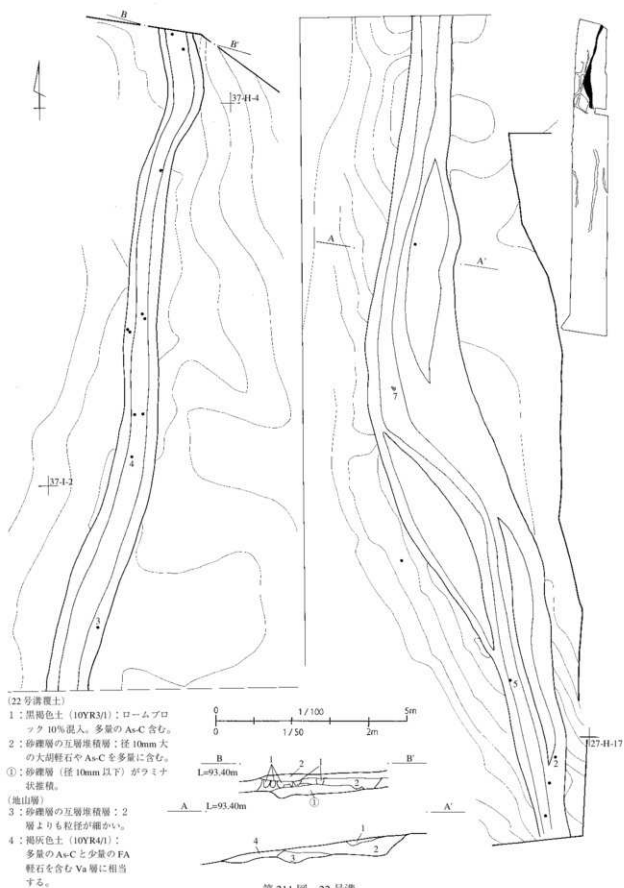
遺物 本溝からは古墳時代前期頃の土師器壺片を中心に、弥生土器片や土師器・須恵器片、瓦片、上位層からの混入と見られる陶器片など184点の出土遺物を得たが、図示すべきものは見られなかった。

時期 本溝はAs-Bで被覆されているため、12世紀初頭以前の、恐らく律令期の所産と認識される。

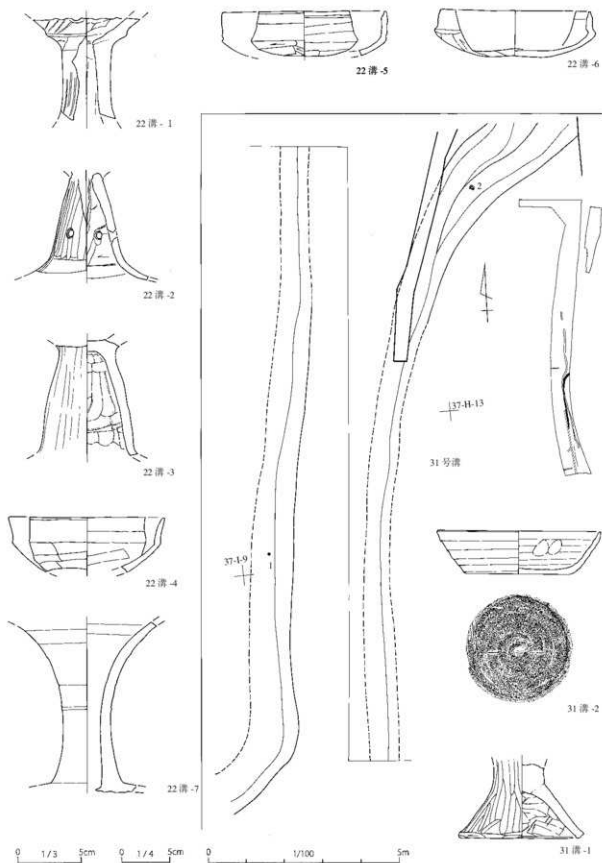
規模 長さ:59m 幅:72cm 深さ:11cm

構造 全体的としては北北東-南南西方向に走行を取るが、極めて緩やかに蛇行するプランを呈する。

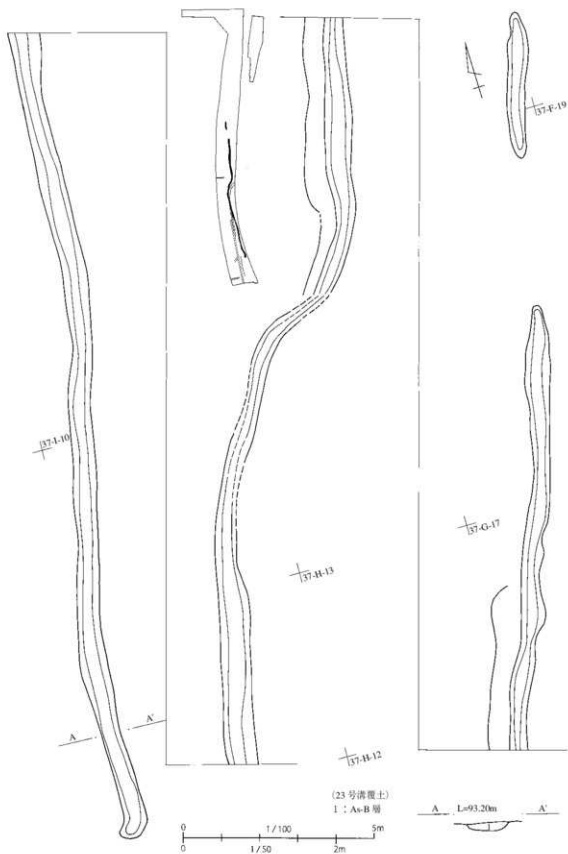
掘削形態は箱堀状を呈する。



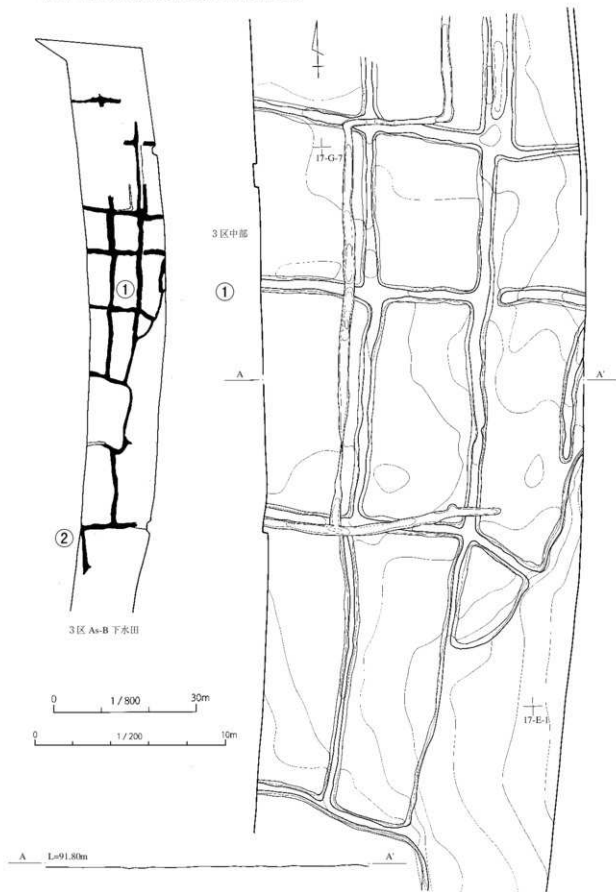
第211図 22号溝



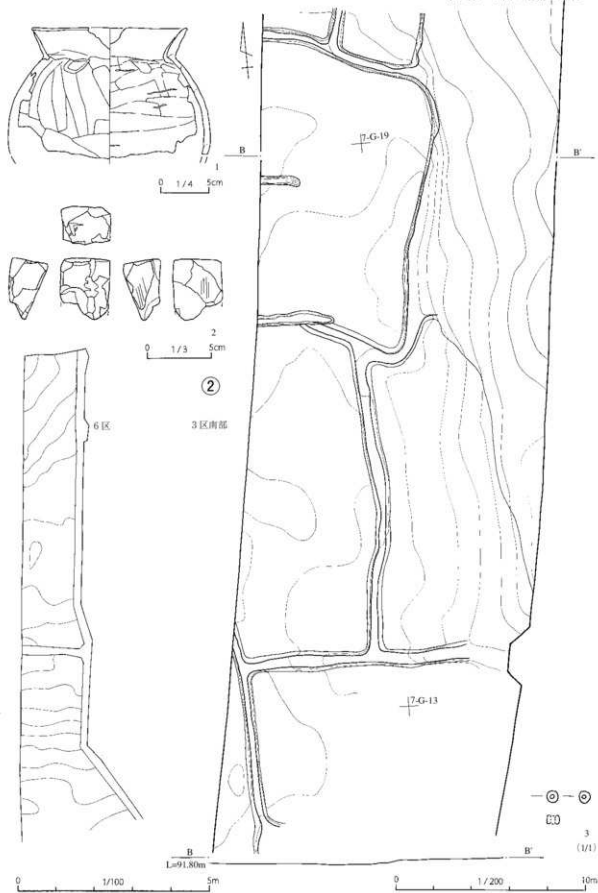
第212図 22号溝出土遺物及び31号溝と出土遺物



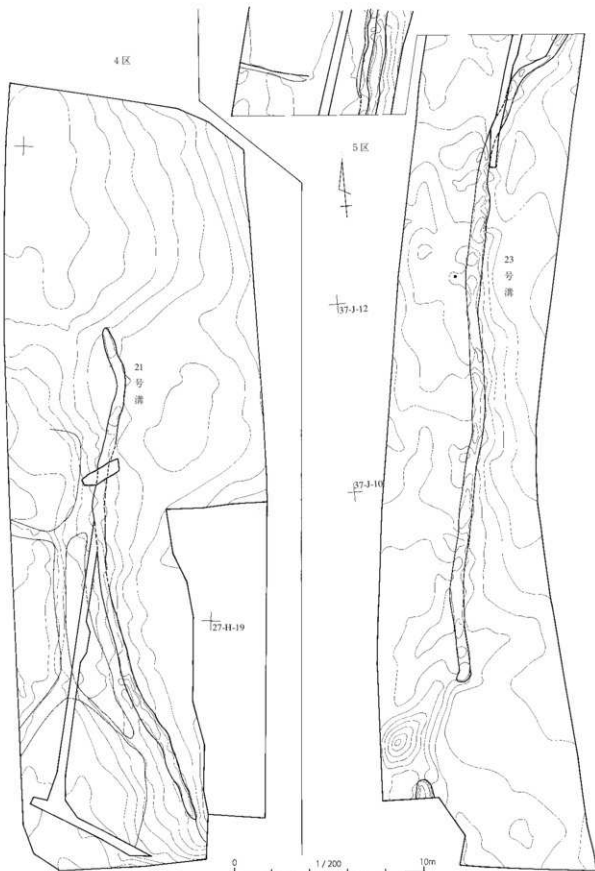
第213図 23号溝



第214図 3区 As-B 下水田全体図 (S=1/800) と中部部分図 (S=1/200)



第215図 3区As-B下水田南部部分図と6区As-B下水田及びAs-B下水田出土遺物



第216図 4区As-B下水田(左)と5区As-B下水田(右)

31号溝 (第210図、P L 86)

概要 本溝は5区南部に位置する。南北両側は不明瞭となり確認できなくなっている。また西半は失われ、溝の西壁も確認できなかった。

調査面に於いて他遺構との重複関係は認められなかった。

掘削意図は把握できなかった。

遺物 本溝からは弥生土器甕(4)や土師器壺(2)など4世紀以前のものを含む比較的多くの出土遺物があった。

時期 本溝の時期は明瞭ではないが、出土遺物等から概ね律令期の所産と思慮される。

規模 長さ：35.0 m 幅：174cm 深さ：44cm

構造 本溝は北北東-南南西方向に走行し、北端部は北東、南端部で南西に向かっており、緩やかに蛇行するプランを呈する。

掘削形態は概ね箱堀状である。

As-B 下水田 (第214～216図、P L 58・86)

概要 本遺跡に於いては3～5区及び、6区南西の張り出し部に於いてAs-Bに被覆された遺構面が確認され、水田面と判断した。

このうち5・6区に於いては畦畔を確認することはできなかったが、3区に於いて畦畔、4区南西部に於いて耕作範囲の特定をすることができた。

遺物 本水田址からは、古墳時代前期の土師器片を中心に、3区で133片を確認した。また水田面からは土師器甕(1)、砥石(2)、玉(3)の出土も見られた。

時期 本水田址はAs-Bに被覆されているため、As-B降下の天仁元(1108)年を下限とする平安時代の所産である。

規模 範囲：(3区) 10.7 × 60.7 m

(4区) 10.6 × 46.8 m

(5区) 13.6 × 41.9 m

(6区) 20.5 × 3.1 m

(畦畔) 幅：10cm 高さ：cm

(溝) 長さ9.5 m 幅32cm 深さ

構造 上述のように、本水田址で畦畔を確認できたのは3区の中位付近と4区南西部だけであり、このうち後者は耕作区画の範囲を特定できたに過ぎなかった。

畦畔の確認範囲に於いて、3区では南北に長い耕作区画を持ち障子状の配置を成している。耕作区画の規模は他遺構との重複によって確認できた箇所は少ないが、確認範囲の北部にあっては東西265cm、275cm、南北565cm、580cm、790cm、を測ることができ、東西に隣接する耕作区画の規模は類似するものであった。また南部ではややその規模が大きくなる傾向が窺われる。尚、畦畔確認範囲の北端付近では南北走行の直線的な溝が在り、これを内包するように同溝の東西両側に畦が設けられ、南端も畦で区切られている箇所があった。

一方5区のそれは23号溝を東限としてその西側で確認されている。耕作区画は23号溝沿いでは東西240cm、南北1120cmを測る南北に長い三角形様のプランのものが見られるなど、地形に合わせた形状のものを見ることができた。

噴砂痕 (P L 59)

概要 2区中北部付近で噴砂痕跡が確認された。

遺構等との重複は見られなかった。

尚、図化は実施しているが、掲載しなかった。

遺物 出土遺物は見られなかった。

時期 噴砂の時期は特定できなかったが、地位の地震の記録に照らして、弘安9(818)年の地震に伴うものと想定される。

規模 長さ4.4 m以下 幅20cm以下

構造 本噴砂痕は多数ある。

走行の方向は南北、東北東-西南西など多様で、直線的なものや断続的に大きな弧を描くものなどプランも多様である。

断面は下位に行くほど狭くなっている。

第4節 3面の遺構と遺物

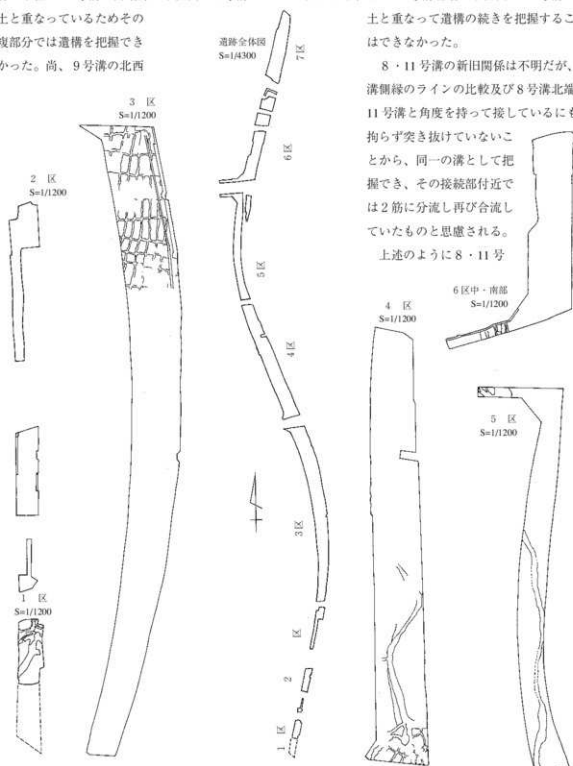
8・11号溝(第218・219図、P.L.59・62・68)

概要 8・11号溝は4区南半部に位置している。8号溝の中程と11号溝の南端部は下位面の9号溝の覆土と重なっているためその重複部分では遺構を把握できなかった。尚、9号溝の北西

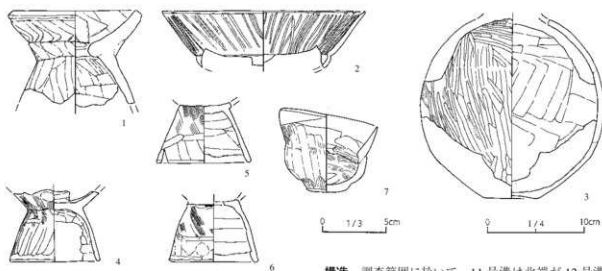
部では溝が2条在り、北西側を8号溝、南東側を11号溝としている。尚、8号溝南部は調査区外に出ており、また11号溝北端は下位面の12号溝の覆土と重なって遺構の続きを把握することはできなかった。

8・11号溝の新旧関係は不明だが、溝側縁のラインの比較及び8号溝北端が11号溝と角度を持って接しているにも拘らず突き抜けていないことから、同一の溝として把握でき、その接続部付近では2筋に分流し再び合流していたものと思慮される。

上述のように8・11号



第217図 富田大泉坊A遺跡3面(左から、1区、2区、遺跡全体、3区、4区、5区、6区)



第218図 8号溝出土遺物

溝の新旧関係は把握できなかった。尚、11号溝は後述の10号溝と重複し、これを切っている。

8・11号溝は流水の痕跡が認められることから南流する水路であったものと思慮される。

遺物 8号溝では古式土師器を中心に、弥生土器や上位層からの落ち込みと見られる土師器・須恵器片等の出土遺物を得た。土師器器台(1)・埴(2)・壺(3)・台付甕(4～6)、手捏土器(7)の出土が見られた他、8号溝のものか9号溝のものか判断のつかない出土遺物として又畝(8・9溝-1)11点の木製品があったが、木製品は9号溝に出土が多いためこれらに含まれる可能性が高いと思われる。尚、これらの木製品については後述の9号溝(第3節)に述べることとする。

11号溝からは上位層からの潜り込みと判断される施釉陶器2片の出土もあったが、土師器甕(1)、小型壺(2)など古墳時代前期の土器片20点余りの出土が見られた。

時期 出土遺物から推して、両溝は4世紀の所産として把握される。

規模 (8号溝)長さ:15.2m 幅:140cm

深さ:35cm

(11号溝)長さ:67.0m 幅:45～300cm

深さ:36cm

構造 調査範囲に於いて、11号溝は北端が12号溝と重なって把握できなかったが、確認範囲では北西-南東から北東-南西方向に走行を取り、更に南南東に走行を転じている。南端で分岐し、U字状に回りながら西流し、更に南西方向に転ずる。一方11号溝南部で分流した8号溝は南西方向に走行を取り、9号溝重複部分は不明だが、そのまま流し、弧を描き乍ら南に走行を変じている。

掘削形態は8号溝南部は東に開く箱葉研堀状を呈し、11号溝は箱堀状を呈する。

10号溝(第219図、P.L.59・62・69)

概要 本溝は4区南半部に位置する。北側は前述の11号溝と重なって不明瞭となり、更に12号溝と重なって明確にその範囲を把握することができず、南側は調査区外に出ているため、全容を把握することはできなかった。

本溝はその流路の殆どが後述の11号溝と重複してこれに切られている。

流水の痕跡が見られることなどから、本溝も南流する水路であったと思慮される。

遺物 本溝からは古墳時代前期の土師器器片を中心とした遺物の出土が見られたが、この中には古墳時代前期の土師器高坏(1)・小型壺(2)の出土が見られた。

時期 出土遺物から推して本溝は概ね4世紀前半頃の所産として把握される。

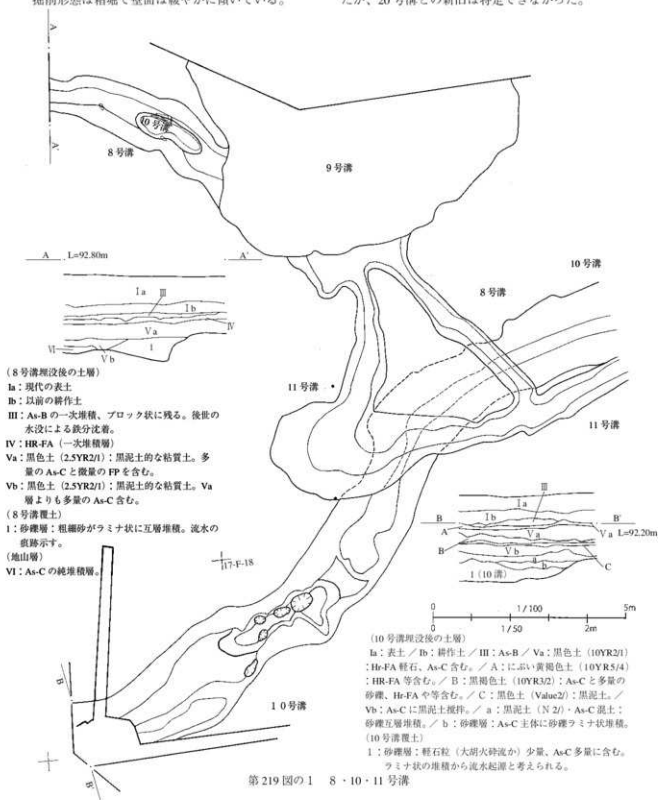
構造 本溝は西に張り出す弧状のプランを呈しているが、その走行は北端の12号溝との重複地点では北北東を向き、南端部では南東から南端で南南東に転じている。

掘削形態は箱堀で壁面は緩やかに傾いている。

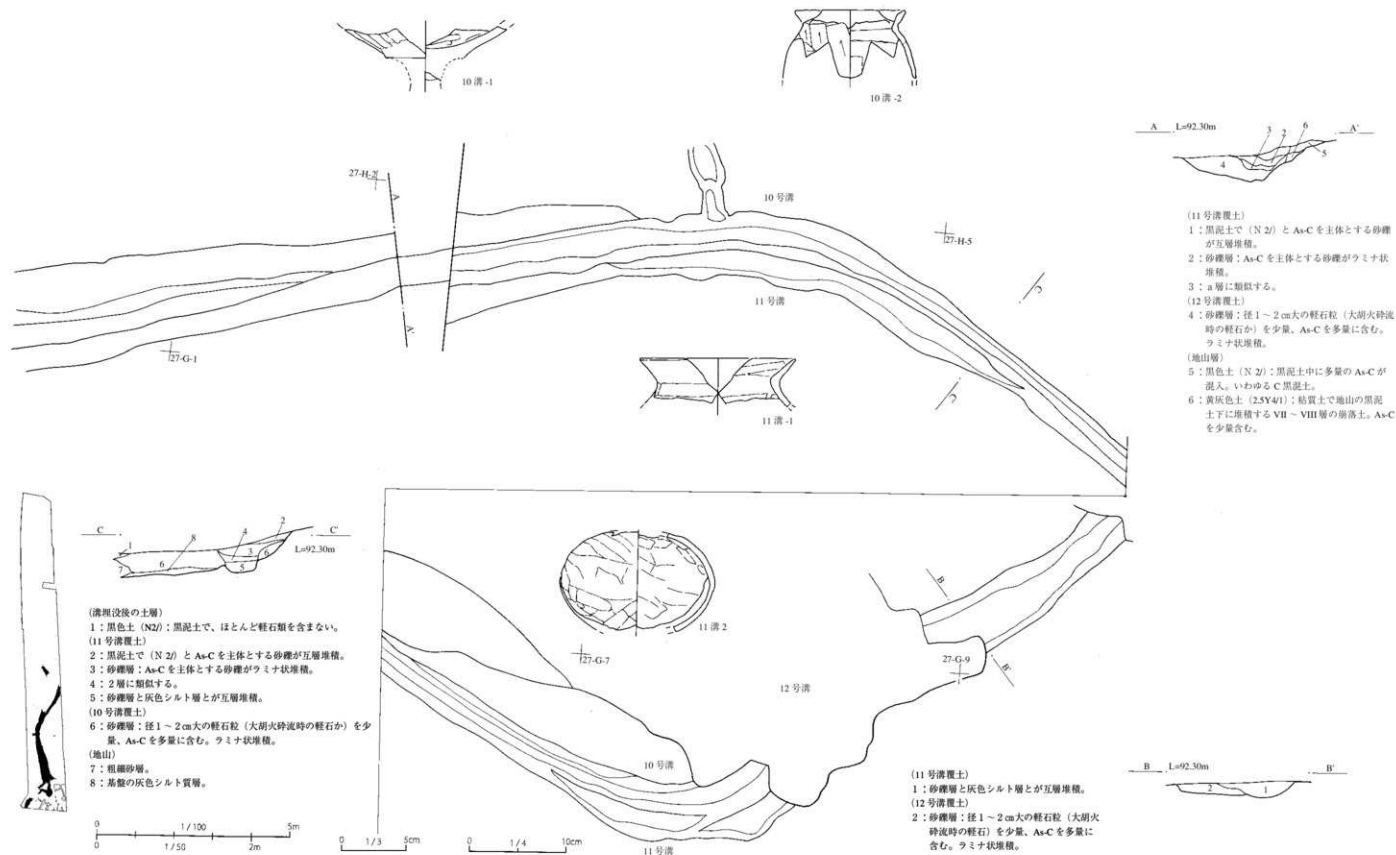
14号溝 (第220図、P L 75)

概要 本溝は1区に位置する。両端は調査区外に出ていて調査することはできなかった。

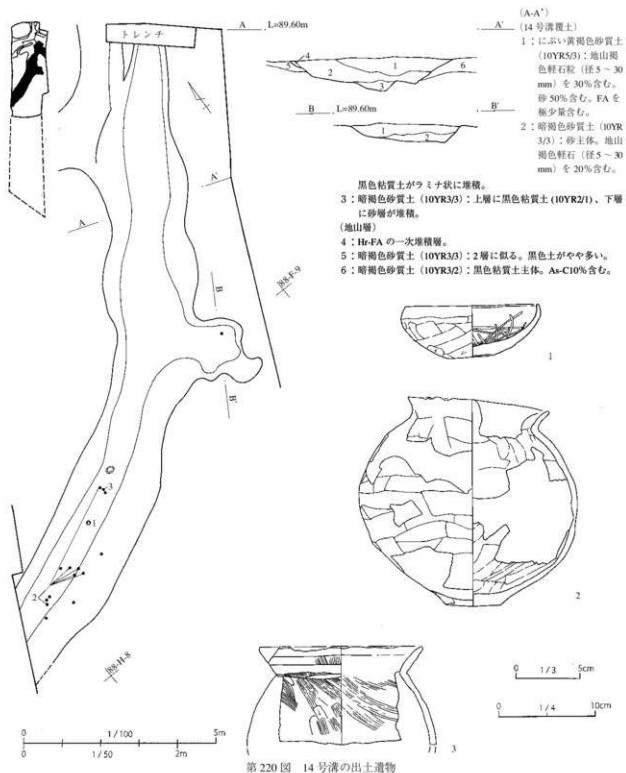
本溝は重複する15号溝より新しいことを確認したが、20号溝との新旧は特定できなかった。



第219図の1 8・10・11号溝



第219図の2 8・10・11号溝と出土遺物



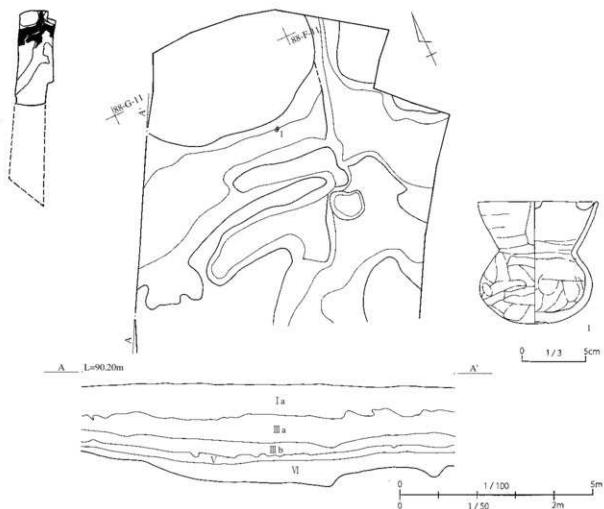
第220図 14号溝の出土遺物

本溝の覆土中には流水の痕跡が認められるため、水路として使用されたものと思慮される。

遺物 本溝からは土師器碗 (1)・甕 (2)・小型甕 (3) の出土が見られた。

時期 本溝の時期は明瞭ではないが、Hr-FAを切っていることから、6世紀以降の所産と認識される。

規模 長さ:16.4m (分岐部分:1.7m) 幅:250cm 深さ:90cm



(溝埋設後の土層)

Ia: 現代の表土

IIIa: 暗褐色土 (7.5YR3/3) As-C・Aバミス 10%含む。黄褐色軽石 (10YR5/6) 炭化物粒・焼土塊を少量含む。He-FA 降下後の耕作土。

IIIb: 暗褐色土 (7.5YR3/5) IIIa層に似る。As-CにAバミスやや多く20%含む。FA灰を少量含むやや砂質。He-FA降下後の耕作土。

V: 黒色粘質土 (10YR2/1) 黒泥層。粘性高い。黒泥。水田の一時中断。

(15号溝復土)

VI: 黒色粘質土 (10YR2/1) As-C・細砂 60%含む。AsC細砂と黒色。粘質土が互層に堆積。下層には砂粒堆積。As-C混土。

第221図 15号溝と出土遺物

構造 全容は詳らかでないが、調査範囲では北北東から入り南南西に直線的に走行してその半ばで東へ短く分岐する。そしてこの分岐地点から弧を描きながら西南西方向に走行を变じ調査区外に出ている。

掘削形態は箱型を呈するが、壁面は緩やかに傾いている。

15号溝 (第221図、P L 69)

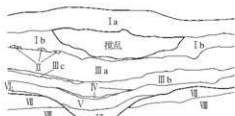
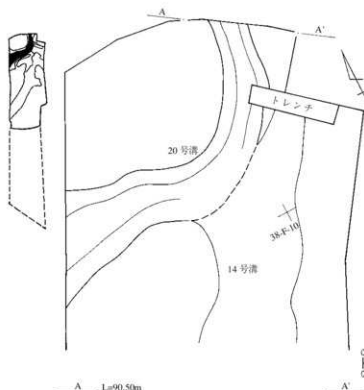
概要 本溝は1区北部に位置する。東西両側が調査区外に出ているため、その一部を調査できたに過ぎなかった。

本溝は14・20号溝と重複しているが、両溝に切られている。特にその南西部に於いては20号溝と全く重なっている。

本溝の掘削意図は特定できなかった。

遺物 本溝からは弥生土器や古墳時代前中期の土師器の出土があり、この中には土師器埴 (1) の出土が見られた。

時期 本溝の時期は詳らかでないが、出土遺物と覆



第222図 20号溝

土から推して概ね4・5世紀の所産と認識される。

規模 長さ：9.5 m 幅：100～220cm 深さ：90cm

構造 本溝は一部を調査できたに過ぎないが、調査区内に於いては北に若干膨らむ弧状のプランを描いており、西南西から入って東南東に抜けている。

本溝の掘削形態は箱扇状を呈する。

20号溝 (第222図)

概要 本溝は1区北部に位置している。本溝も両端が調査区外に出ていて全容は把握できなかった。

本溝は北部で14・15号溝と重複するが、15号溝よりは新しいことを確認したもの、14号溝との新旧は特定できなかった。

(溝埋没後の土層)

- Ia: 現代の表土
- Ib: 以前の耕作土
- II: A-B: 一次堆積。ブロック状に残り後世の水没による鉄分沈着。
- IIIa: 暗褐色土 (7.5YR3/3); As-C・Aバミス 10%含む。黄褐色軽石 (10YR5/6) 炭化物粒・焼土粒を少量含む。Hr-FA 降下後の耕作土。
- IIIb: 暗褐色土 (7.5YR3/3); IIIa層に似る。As-CにAバミス (3～10mm) やや多く20%含む。Hr-FA 灰を少量含むやや砂質。Hr-FA 降下後の耕作土。
- IIIc: 黄褐色軽石粒 (10YR5/6); 黄褐色軽石粒集中。洪水砂か。
- IV: Hr-FA (一次堆積層) (20号溝覆土)
- V: 黒色粘質土 (10YR2/1) 黒泥層。粘性高い。黒泥で水田の一時中断。
- VI: 黒色粘質土 (10YR2/1) As-C・細砂 60%含む。As-C細砂と黒色粘質土が互層に堆積。下層には砂粒堆積。As-C混土。(地山層)
- VII: 黒色粘質土 (10YR2/1) 地山植物遺体有り。
- VIII: 灰黄褐色シルト層 (10YR5/2) 砂質。

本溝の掘削意図を特定することはできなかった。

遺物 本溝からの出土遺物は見られなかった。

時期 本溝の時期は特定できなかったが、覆土から推して4・5世紀の所産として把握される。

規模 長さ：9.5 m 幅：89～

225cm

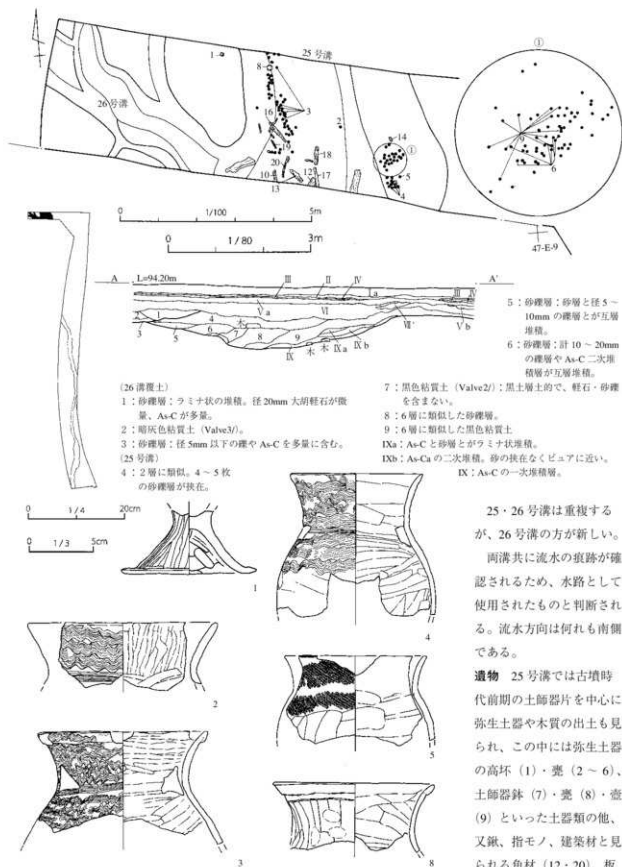
深さ：90cm

構造 本溝の全容は詳らかでないが、調査区内では北から入って時計回りに弧を描きながら西南西に抜けている。

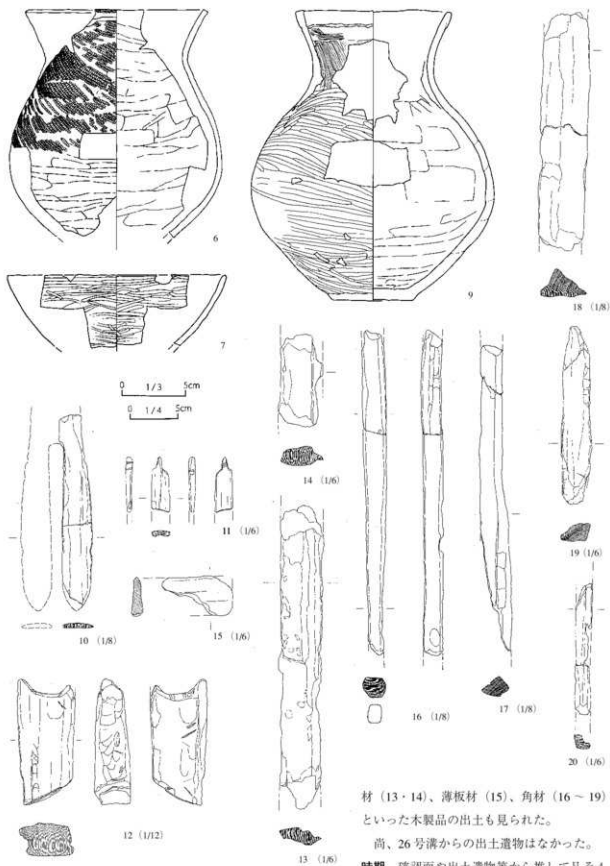
本溝の掘削形態は箱扇状を呈しているが、横断面形態は丸底を呈する。

25・26号溝 (第223・224図, PL 63・64・75・76)

概要 25・26号溝は5区北端の西側張り出し部に位置する。両溝共に南北両側は調査区外に出ていて一部を調査できたに過ぎない。ちなみに北側の6区ではその延長を確認できなかったため、上流側は西に傾むくと判断される。



第223図 25・26号溝と出土遺物(その1)



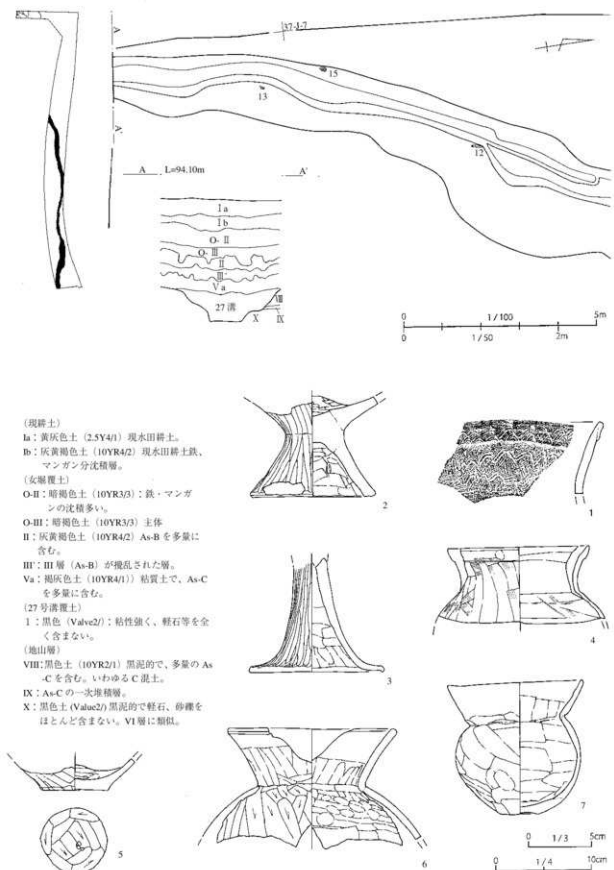
第224図 25号溝出土遺物(その2)

材(13・14)、薄板材(15)、角材(16～19)といった木製品の出土も見られた。

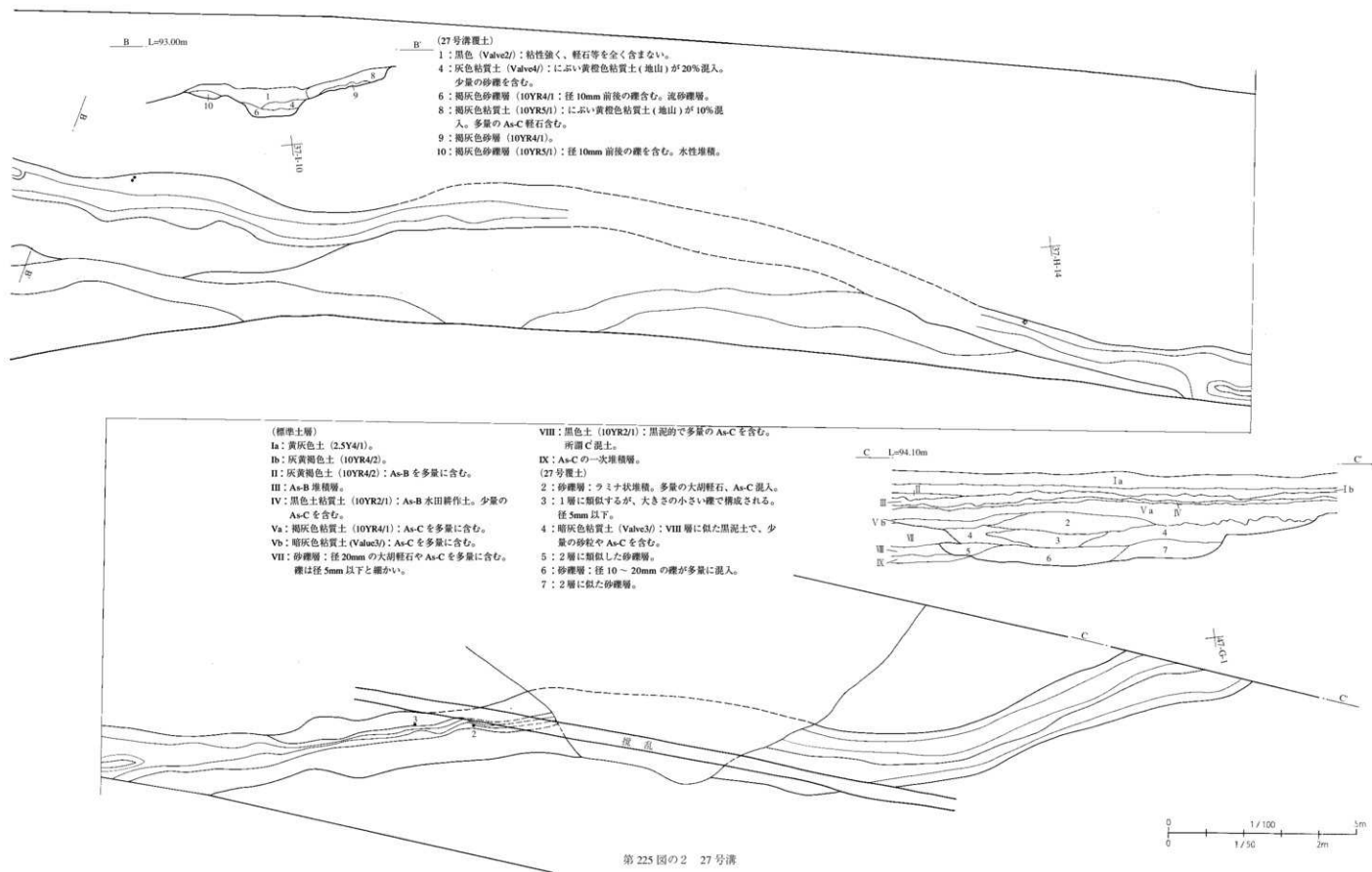
高、26号溝からの出土遺物はなかった。

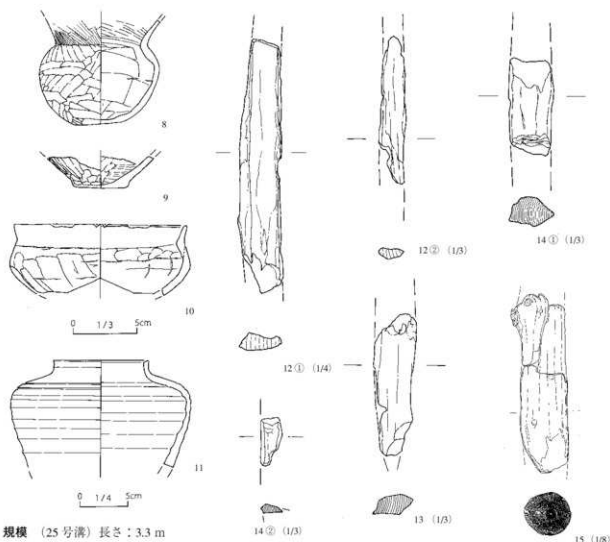
時期 確認面や出土遺物等から推して凡そ4世紀初頭以前の所産と認識される。

第5章 富田大泉坊A遺跡で発見された遺構と遺物



第225図の1 27号溝と出土遺物 (その1)





規模 (25号溝)長さ:3.3 m

幅:555cm

深さ:83cm

(26号溝)長さ:5.5 m 幅:146cm

深さ:36cm

構造 両溝とも極一部を調査したに過ぎないため全容を把握することはできなかったが、25号溝は南北に走行を取って直線的なプランを呈し、26号溝は北西-南東方向に走行を取ってやや蛇行するプランを呈する。

両溝共に掘削形態は箱堀状である。

27号溝 (第225・226図、P.L.60・77)

概要 本溝は5区中部から南部にかけて位置する。南北共に調査区外に出ているため全容を確認することはできなかった。

第226図 27号溝出土遺物 (その2)

本溝は32号溝と重複するが、新旧関係を特定することはできなかった。

本溝は流水の痕跡が認められたため、水路であったものと判断される。また土層断面の観察から5回以上の掘り直しのあったことが窺われた。

遺物 本溝からは古墳時代前期の土師器片を中心に弥生土器や木質、或いは上位層からの潜り込みとみられる須恵器片や陶器片を含む多くの遺物を見たのであるが、この中には弥生土器壺 (1)、土師器高坏 (2) や高坏または器台の脚部 (3) や壺 (4)、壺 (5・6)、小型壺 (7・8)、小型壺 (9)、坏 (10) や須恵器の短頸壺 (11) といった土器類の他、板材 (12)、杭 (13)、角材 (14)、杭の可能性を残す丸材 (15) な

どの出土が見られた。

時期 出土遺物等から推して本溝は概ね4世紀の所産と判断される。

規模 長さ：78.0 m 幅：70～316cm

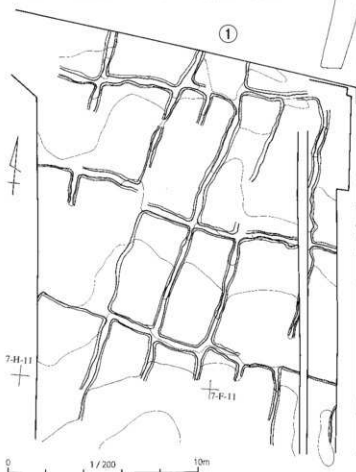
深さ：72cm

構造 本溝は全体としては北北東から南南西方向に流下するものである。プランは大きく見れば東に僅かに膨らむ弧状のプランを呈するものであったが、細かく見ると緩やかに蛇行していることを見取することができる。

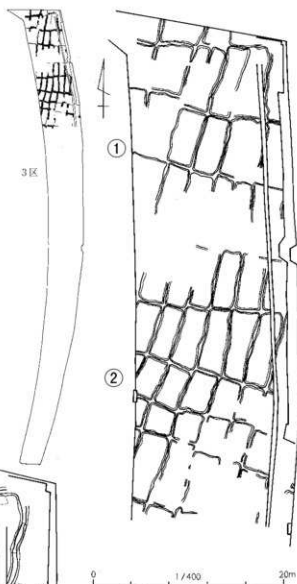
掘削形態は箱堀状を呈する。時期にもよるが壁面はやや開き気味である。

As-C 上水田 (第227～230図、P L 61・86)

概要 本遺跡では3区北部から5区にかけて、3世紀末の浅間山の噴火に伴うAs-C降下後の復旧水田と認識される、所謂As-C上水田の遺構面を確認す

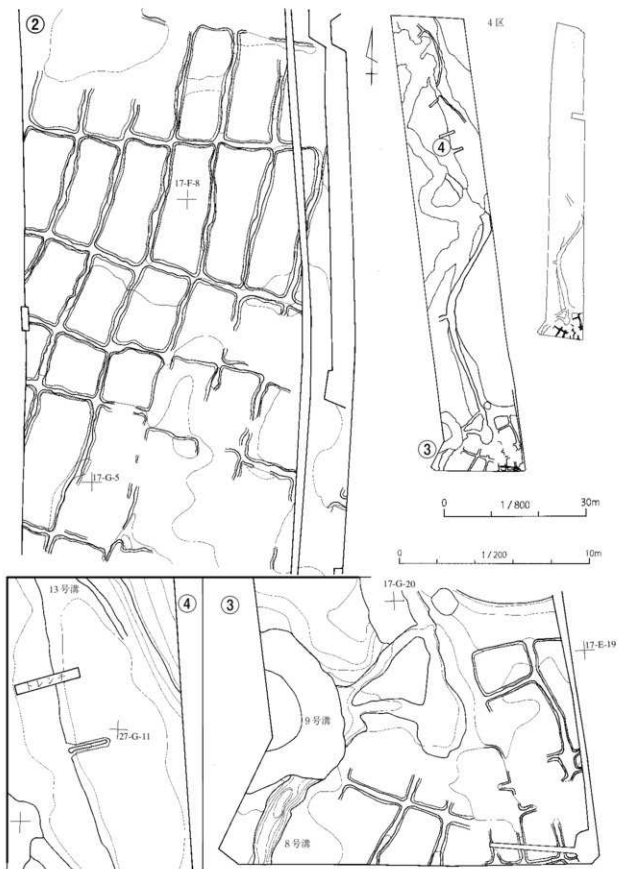


第227図 As-C上水田 (その1、3区の1)



ることができた。これらの水田面は耕作作業に伴う掘削の痕跡面である所謂擬似畦畔遺構面と認識されるものである。このうち3区北部から4区南半部と中位の一角に於いては畦畔を確認することができた。

遺物 As-C上水田址からは弥生土器甕 (1)・壺 (2)、土師器甕 (3・4)・瓶 (5)・小型甕 (6) の他、土製紡錘車 (8) や上位層からの滑り込みと見られる須恵器杯 (7) の出土が見られた。この他、弥生時代から

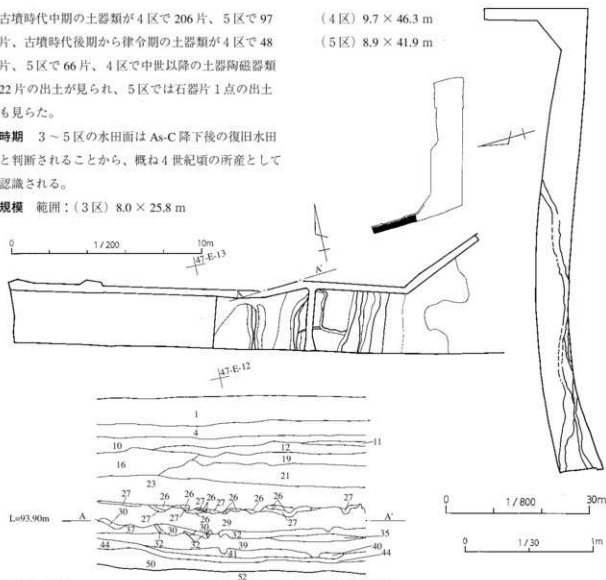


第28 団 As-C 上水田 (その2、3 区の2 と4 区)

古墳時代中期の土器類が4区で206片、5区で97片、古墳時代後期から律令期の土器類が4区で48片、5区で66片、4区で中世以降の土器陶磁器類22片の出土が見られ、5区では石器片1点の出土も見た。

時期 3～5区の水田面はAs-C降下後の復旧水田と判断されることから、概ね4世紀頃の所産として認識される。

規模 範囲：(3区) 8.0 × 25.8 m



(近世以降の層)

- 1：灰黄褐色土 (10YR5/2)；現耕土。As-A 混入。やや砂質。
- 4：褐灰色土 (5YR5/1)；As-A 少量混入。所々に酸化鉄付く。粘性やや欠。
- 10：褐灰色土 (7.5YR6/1)；As-A 少量混入。粘性ややあり。
- 11：黄褐色土 (10YR7/8)；酸化鉄沈着層。As-A 少量入り粘性有。
- 12：褐灰色土 (7.5YR5/1)；As-A 少量混入。粘性欠く。
- 16：褐灰色土 (7.5YR4/1)；As-A 混入黄褐色土と酸化鉄混入。粘性やや欠く。

(中世の層)

- 19：褐灰色土 (7.5YR6/1)；ブロック状にAs-B 混入し、ローム若干含む。酸化鉄やや多く沈着。粘性やや欠く。
- 21：19層に似るが酸化鉄粒状で少ない。
- 23：褐灰色砂質土 (5YR5/1-6/1)；As-B 混入。酸化鉄やや多く入り赤褐色呈す箇所あり。

(古代の層)

- 26；As-B 層；部分的に灰色の火山灰混入。
- 27：黒褐色土 (10YR3/1)；As-B 水田耕土。粘性ややあり。部分的に下位層小ブロック混入。
- 29；にぶい褐色土 (10YR5/3)；大粒の軽石 (As-Cか) 混入。植物根に沿って鉄沈着。粘性ややあり。

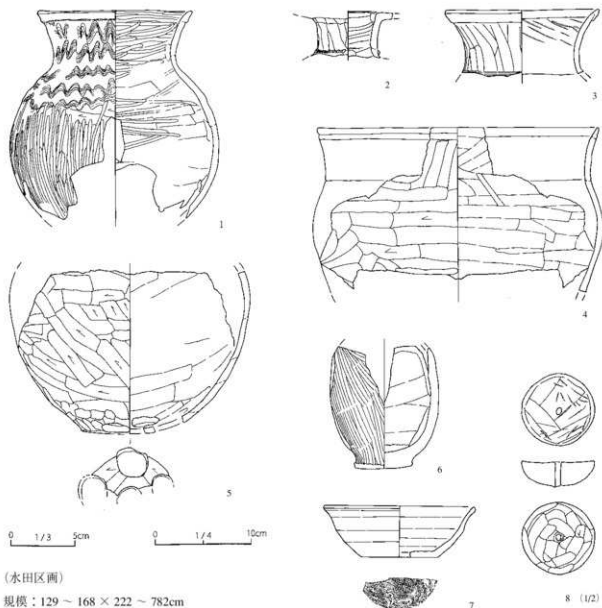
(4区) 9.7 × 46.3 m

(5区) 8.9 × 41.9 m

(古墳時代の土層)

- 30；Hr-FA 層 (明黄褐色。2.5Y7/6)；灰黄褐色土 (10YR6/2) ブロック部分的にやや多く混入する。
- 32；黒褐色粘質土 (10YR3/1)；にぶい黄褐色土 (10YR5/3) と明黄褐色土 (10YR7/6) のブロックと若干の大粒の軽石 (As-Cか) 混入。
- 35；にぶい黄褐色川砂 (10YR7/2)。
- 39；明灰褐色細砂層 (7.5YR7/2)；川砂層。大粒の軽石、にぶい黄褐色砂質土 (10YR7/3) 等混入。
- (6区の方墳時代水田耕作土)
- 40；褐灰色シルト質土 (7.5YR4/1)；黒色系の土塊。黒褐色土 (10YR3/1) 混入。粘性あり。
- 41；褐灰色シルト質土 (7.5YR4/1) と黒褐色土 (10YR3/1) のブロック混入。
- 44；黒色粘質土 (10YR2/1)；一部黒褐色 (7.5YR3/1) 呈す。(下位層)
- 50；褐灰色土 (10YR5/1) と灰黄褐色土 (10YR5/2) の混土；As-C 多量に含む。軽石の大きなもの含む軽石含む。粘性あるがAs-C 主体。
- 52；黒色粘質土 (N5)；As-C 水田耕土。部分的にAs-C 含むが元々ではない。

第229図 As-C 上水田 (その3、5区(右上)と6区)



第230図 As-C上水田出土遺物

(水田区画)

規模：129～168×222～782cm

(畦畔) 幅：10cm

高さ：- cm

構造 本水田址は小区画水田に属するものである。水田面はやや上下に圧平されていて遺存状況は良好とは言えないものであった。

畦畔を確認できたのは3区の北部と4区南端部と中位の2区域、1箇所に過ぎなかった。

このうち3区のもの、概ね北北東-南南西方向に並ぶ格子状の区画を見せるものであった。その水田区画は南北に長い長方形のプランを呈するが、その長さには長短があり、3区で測定できたものについてみると南北軸が280～782cm、平均554.42cm

であり、東西軸が129～376cm、243.53cmであった。南北長は東西列毎に揃うように区画されていた。また畦畔についてみると南北方向は直線的に繋がる傾向があり、東西方向のそれは不連続になる箇所も見られた。

一方4区南端部についてみると、その軸線は東側では南北方向、西側では北東-南西方向をなして連なる扇形状の配置を見せており、要に当たる位置の区画は三角形のプランを呈するものであった。その他の水田区画のプランは東側は南北に長い長方形、

西側もやはり南北に長い台形に近い長方形を呈するものであった。また東側には東西方向に長軸を持つ小型の水田区画も混在して見られた。4区の区画規模は、測定できた箇所においては、南北軸は222～610cm、平均364.14cmで、東西軸は138～407cm、平均268.25cmを測るものであった。

6区3面の水田遺構（第229図、P L 61）

概要 6区に於いては、区南西の西張り出し部に於いてAs-C降下後の洪水層に被覆された水田面を確認することができた。

この水田址は第229図に示した土層断面の44層等を耕作土としている。水田址は所謂As-C上水田の擬似畦畔とは異なるもので、明らかな水田面と認識している。

遺物 本水田址からの出土遺物は得られなかった。

時期 As-C降下からHr-FAの降下、即ち3世紀末～6世紀初頭の間の遺構であるが、時期の特定には至ることはできず、4・5世紀の所産として把握されるに過ぎない。

規模 範囲：19.9×3.2m

（溝）長さ：322cm 幅：221cm 深さ：5cm

（畦畔）幅：57～120cm 高さ：2cm

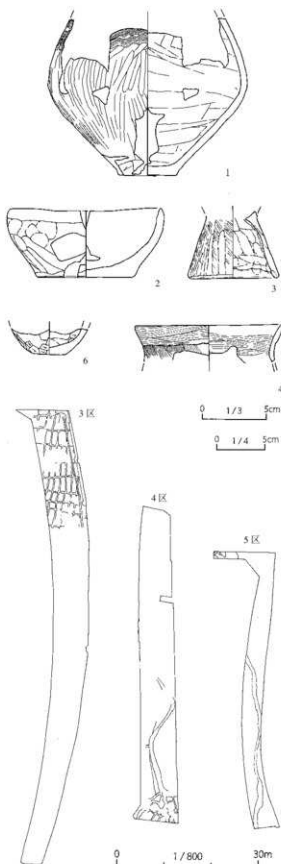
構造 洪水層確認範囲の東端近くに北北東-南南西走行の溝があり、その西側に沿って畦が確認されている。この畦から西に310cmと、更に225cm西に行った付近に、畦2条を確認した。高、両者は並行に走行している。

また溝沿いの畦と2番目の畦の間は南北に分けられる段差があり、更に北側の区画は東西に区画されている。これらの区画は北東、北西、南の順に4～5cm程の段差を以って低くなっているため、細分化されたコマ割りの存在も想定される。

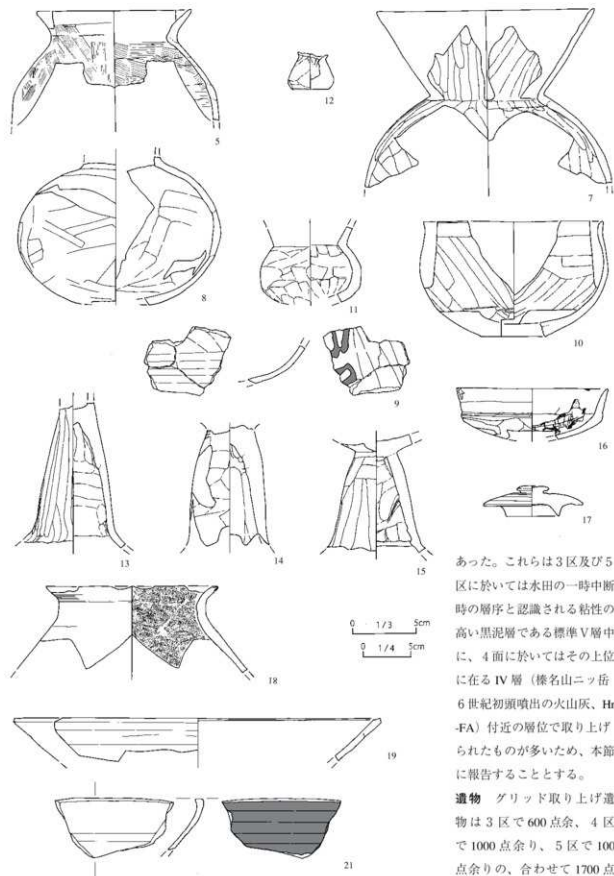
グリッド取り上げ遺物

（第231～233図、P L 88）

概要 本遺跡では、主に3～5区の低地部の調査に於いてグリッド毎に取り上げることでできた遺物が



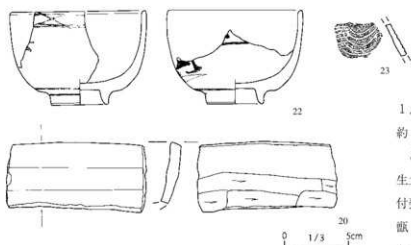
第231図 グリッド取り上げ遺物出土位置図



第232図 グリッド取り上げ遺物(その2)

あった。これらは3区及び5区に於いては水田の一時中断時の層序と認識される粘性の高い黒泥層である標準V層中に、4面に於いてはその上位に在るIV層(榛名山ニッ岳6世紀初頭噴出の火山灰、Hr-FA)付近の層位で取り上げられたものが多いため、本節に報告することとする。

遺物 グリッド取り上げ遺物は3区で600点余、4区で1000点余り、5区で100点余りの、合わせて1700点以上を数えるものであった。



第233図 グリッド取り上げ遺物（その3）

このうち明らかな弥生土器は20点余り、一部弥生土器を含む可能性を持つものもあるとは思われるが4・5世紀の土師器と認識されるもの1000点余り、また上位層からの耕作等に伴う潜り込みと見られる

遺物も見られ、これらは律令期中心の所産と見られる土師器が約300点、須恵器は約140点、灰軸陶器片が

1点、軟質陶器類44点、陶磁器は約140点を数えるものであった。

このような出土遺物の中には、弥生土器壺(1)、土師器の椀(2)・台付甕(3)・甕(4～6)・壺(7～9)・瓶(10)・高坏(13～15)・坏(16)や、手捏土器(11・12)、須恵器の長頸壺蓋(17)・甕(18)、軟質陶器

の鉢(19～21)、陶器椀(22)の他、樽式の弥生土器壺の破片(23)や種子(24)などの出土も見られた。

第5節 4面の遺構と遺物

9号溝 (第235・236図、P.L.62・38・69)

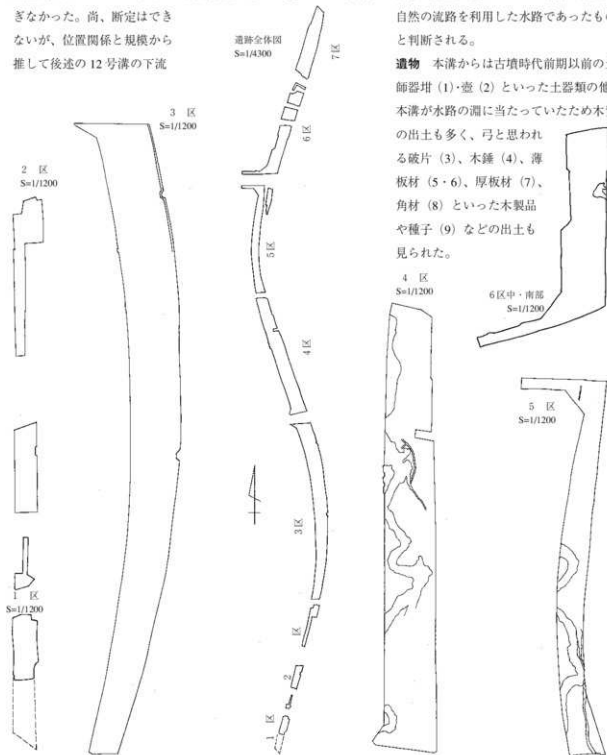
概要 本溝は4区南西部に所在する。南北両側が調査区外に出ているため、その一部を調査できたに過ぎなかった。尚、断定はできないが、位置関係と規模から推して後述の12号溝の下流

域に当たる可能性が考慮される。

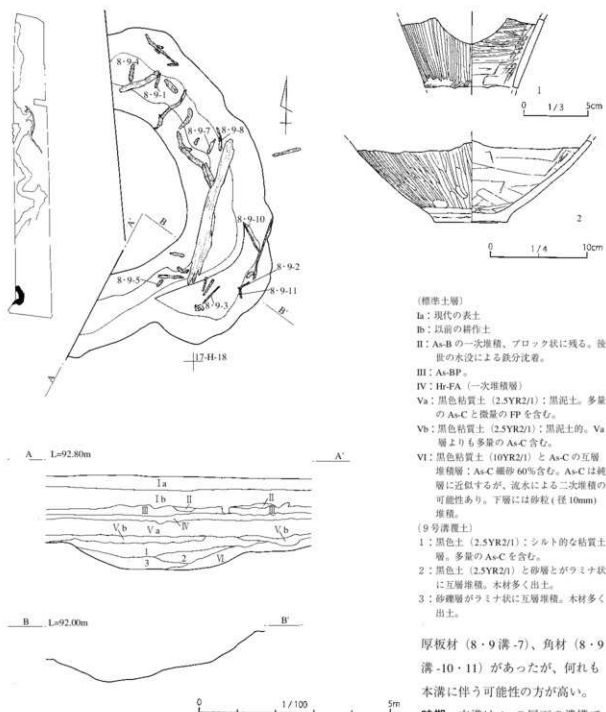
上位面の8・11号溝と重複している。

本溝には流水の痕跡が見られるため自然の流路か自然の流路を利用した水路であったものと判断される。

遺物 本溝からは古墳時代前期以前の土師器埴(1)・壺(2)といった土器類の他、本溝が水路の淵に当たっていたため木質の出土も多く、弓と思われる破片(3)、木錘(4)、薄板材(5・6)、厚板材(7)、角材(8)といった木製品や種子(9)などの出土も見られた。



第234図 富田大泉坊A遺跡4面 (左から、1区、2区、遺跡全体、3区、4区、5区、6区)

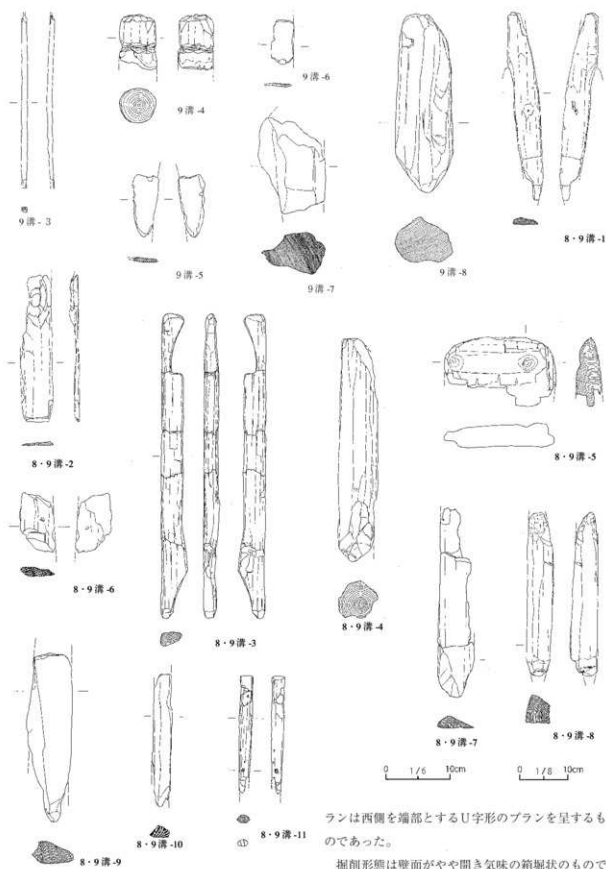


第235図 9号溝と出土遺物(その1)

また8号溝に伴うものか本溝に伴うものか判断のつかない遺物は何れも木製品で、又鋏(8・9溝-1)、狭鋏と見られるもの(8・9溝-2)、刀型木製品(8・9溝-3)、杭(8・9溝-4・8・9)、礎板と思われるもの(8・9溝-5)、板材(8・9溝-6)、

厚板材(8・9溝-7)、角材(8・9溝-10・11)があったが、何れも本溝に伴う可能性の方が高い。
時期 本溝はAs-C層下の遺構であることや出土遺物から推して、概ね西暦300年以前後の所産と判断される。
規模 長さ:10.85m 幅:265cm 深さ:29cm
構造 上述のように本溝はその一部を調査できたに過ぎなかったが、調査範囲で確認できたのは流路中の淵の部分に当たるものであった。確認範囲でのプ

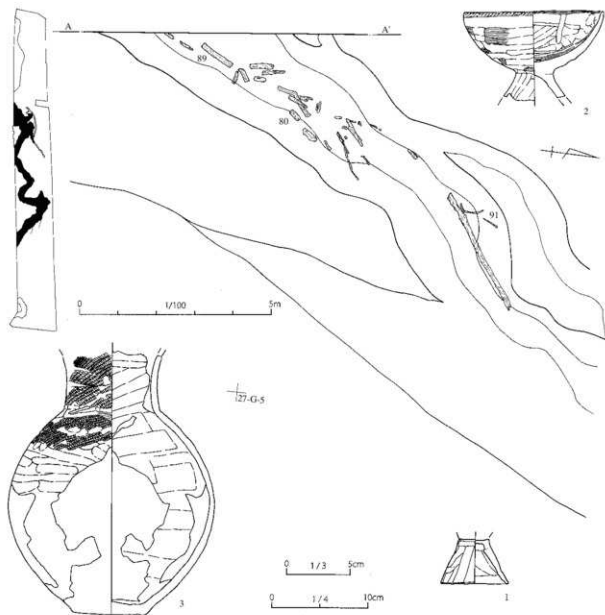
- (標準土層)
- Ia: 現代の表土
 - Ib: 以前の耕作土
 - II: As-Bの一次堆積、ブロック状に残る。後世の水没による鉄分沈着。
 - III: As-BP。
 - IV: Hr-FA (一次堆積層)
 - Va: 黒色粘質土 (2.5YR2/1); 黒泥土。多量のAs-Cと微量のFPを含む。
 - Vb: 黒色粘質土 (2.5YR2/1); 黒泥土的。Va層よりも多量のAs-C含む。
 - VI: 黒色粘質土 (10YR2/1) とAs-Cの互層堆積層; As-C細砂60%含む。As-Cは純層に近似するが、流水による二次堆積の可能性あり。下層には砂粒(径10mm)堆積。
- (9号溝覆土)
- 1: 黒色土 (2.5YR2/1); シルト的な粘質土層。多量のAs-Cを含む。
 - 2: 黒色土 (2.5YR2/1) と砂礫とがラミナ状に互層堆積。本材多く出土。
 - 3: 砂礫層がラミナ状に互層堆積。本材多く出土。



第236図 8・9号溝出土遺物（その2）

ランは西側を端部とするU字形のプランを呈するものであった。

掘削形態は壁面がやや開き気味の箱堀状のものである。



第237図の1 12号溝と出土遺物（その1）

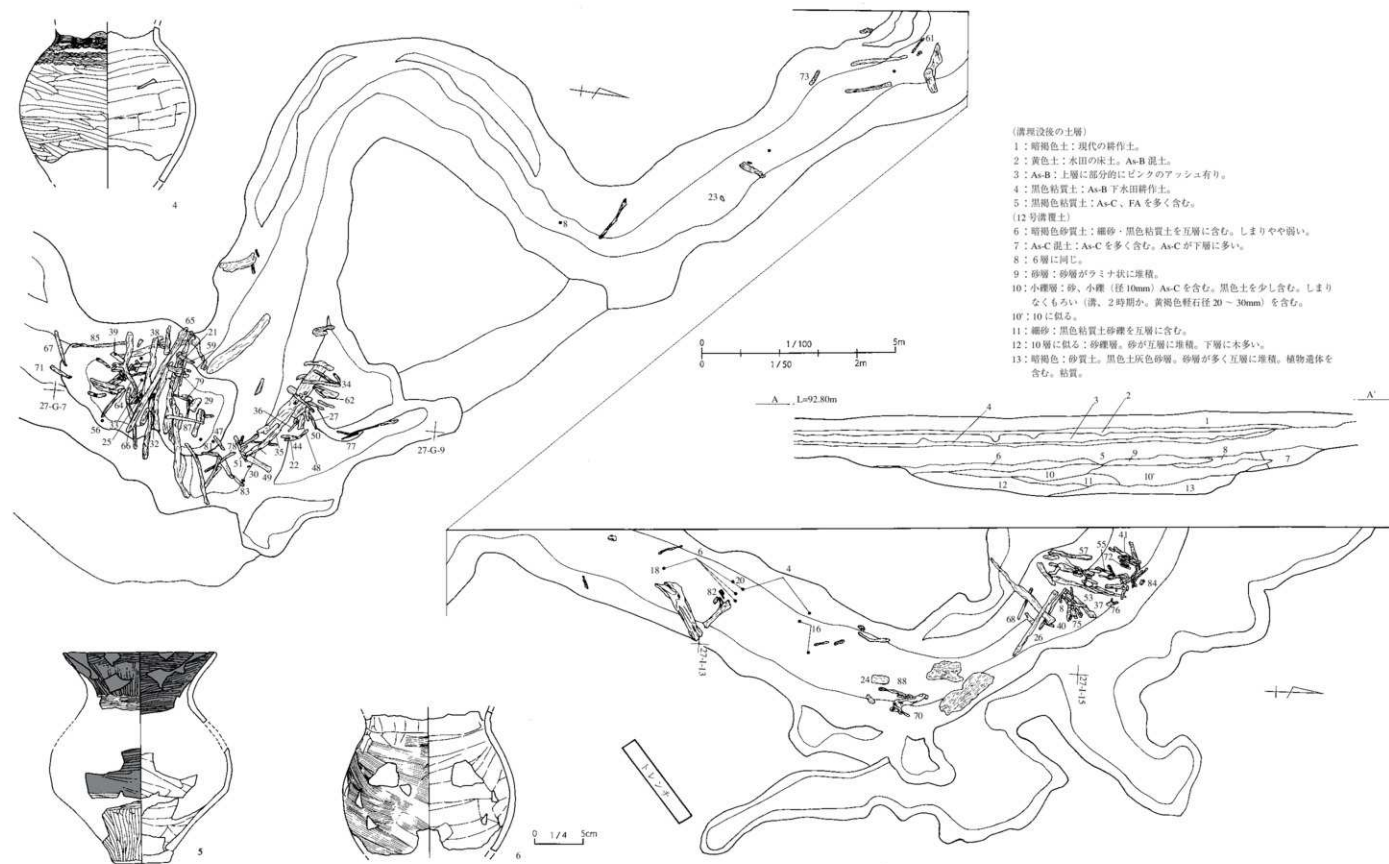
12号溝（第237～243図、P.L.63・64・69～75）

概要 本溝は4区中部から北部にかけて位置している。南北共に端部は西側調査区外に出ているため、全容を明らかにすることはできなかった。また位置関係と遺構の形態、並びに遺物の出土状況に照らして、本溝は前述の9号溝の上流域に当たる可能性があるものと判断している。

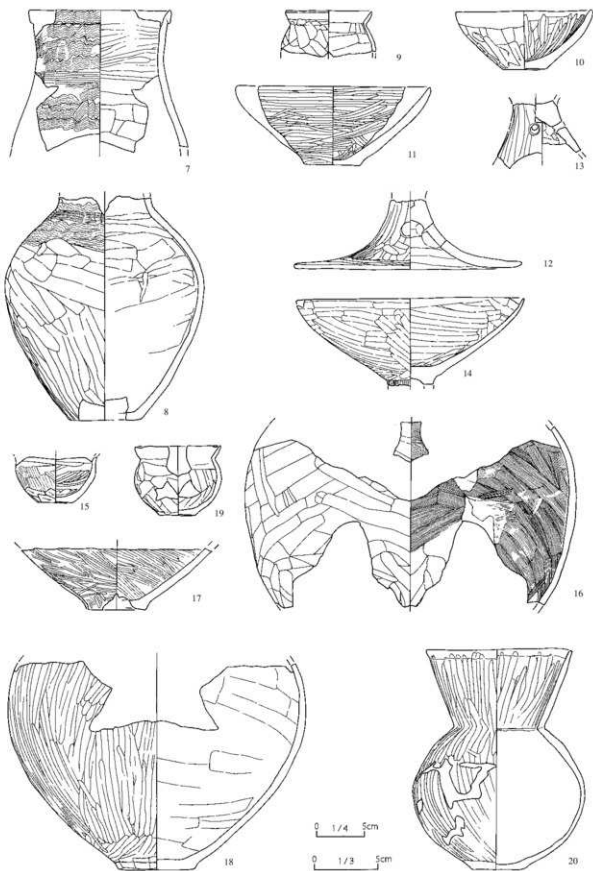
13号溝と重複するが新旧関係を特定することはできなかった。また上位面の10・11号溝と重複している。

本溝には流水の痕跡が認められることから急流路或いは自然地形を利用した南流する水路であったと判断される。尚、本溝は大泉坊川の旧流路であった可能性も考慮される。

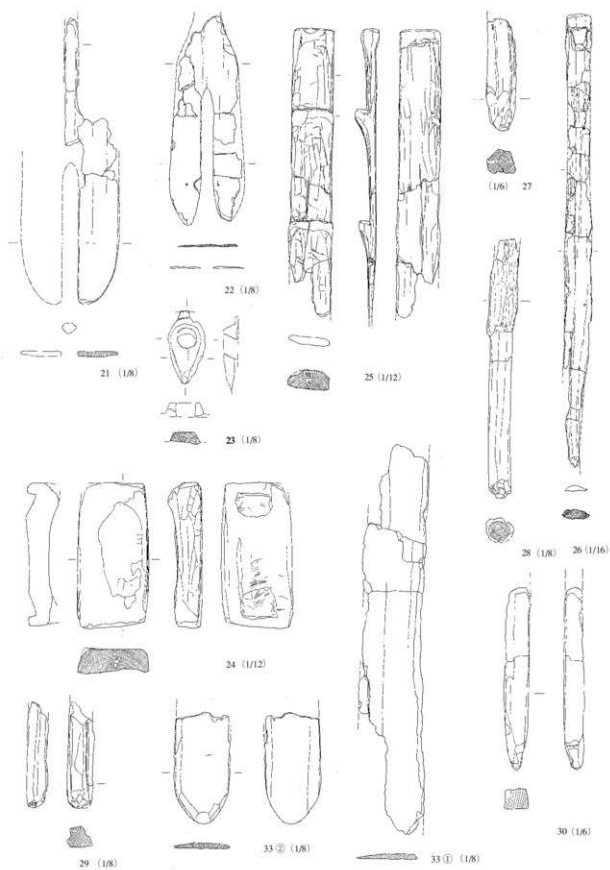
遺物 本溝に於いては淵部分を中心に、弥生時代～古墳時代前期のものや上位層からの落ち込みと見られる須恵器片、多量の木製品や流木、石製品等多くの出土遺物が得られた。この中には弥生土器の高坏(1・2)・甕(4～6)・壺(3・7・8)・小型甕(9)、土師器椀(10)・鉢(11)・高坏(14)・埴(15)・壺(16)



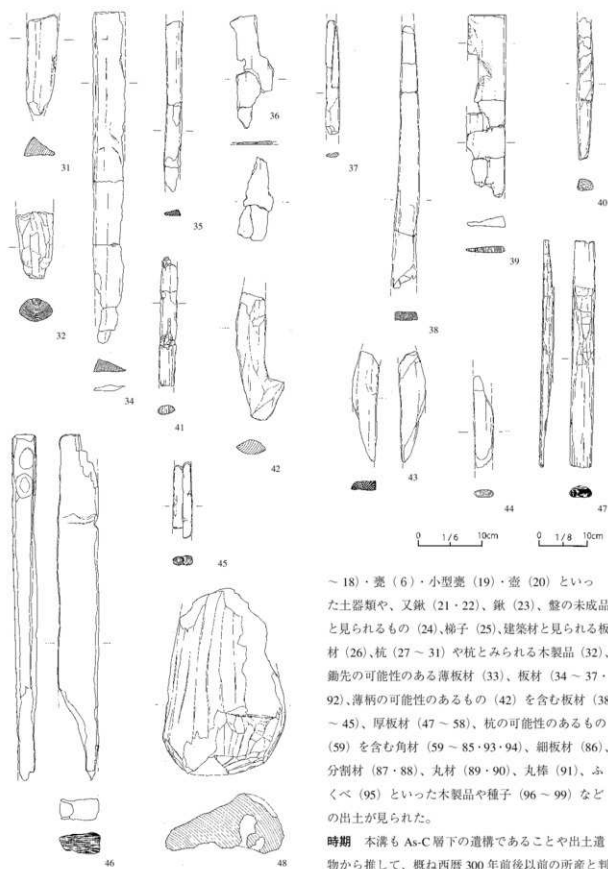
第237図の2 12号溝と出土遺物 (その2)



第238図 12号溝出土遺物(その2)



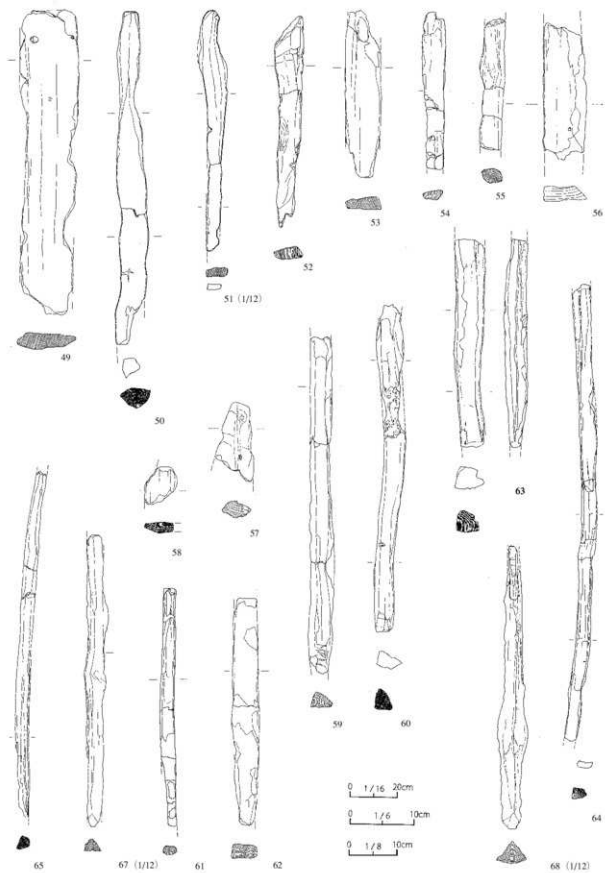
第239図 12号溝出土遺物 (その3)



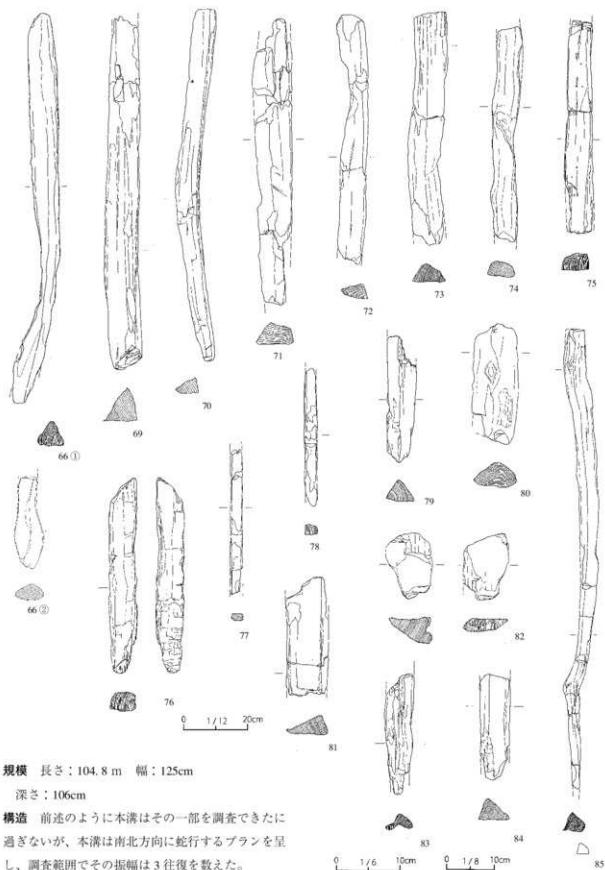
第240図 12号溝出土遺物(その4)

～18)・甕(6)・小型甕(19)・壺(20)といった土器類や、又鋏(21・22)、鋏(23)、盤の未成品と見られるもの(24)、梯子(25)、建築材と見られる板材(26)、枕(27～31)や枕とみられる木製品(32)、鋤先の可能性のある薄板材(33)、板材(34～37・92)、薄柄の可能性のあるもの(42)を含む板材(38～45)、厚板材(47～58)、枕の可能性のあるもの(59)を含む角材(59～85・93・94)、細板材(86)、分割材(87・88)、丸材(89・90)、丸棒(91)、ふくべ(95)といった木製品や種子(96～99)などの出土が見られた。

時期 本溝もAs-C層下の遺構であることや出土遺物から推して、概ね西暦300年前後以前の所産と判断される。



第241図 12号溝出土遺物(その5)



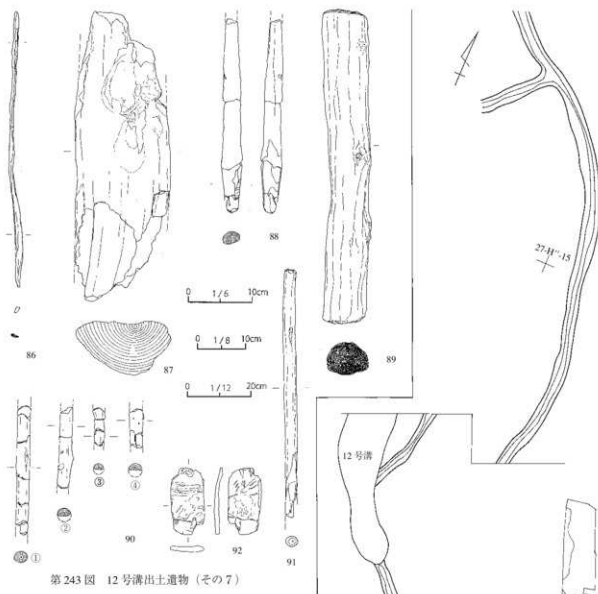
規模 長さ：104.8 m 幅：125cm

深さ：106cm

構造 前述のように本溝はその一部を調査できたに過ぎないが、本溝は南北方向に蛇行するプランを呈し、調査範囲でその振幅は3往復を数えた。

掘削形態は箱堀状である。

第242図 12号溝出土遺物（その6）



第243図 12号溝出土遺物(その7)

13号溝(第244図、P.L.62)

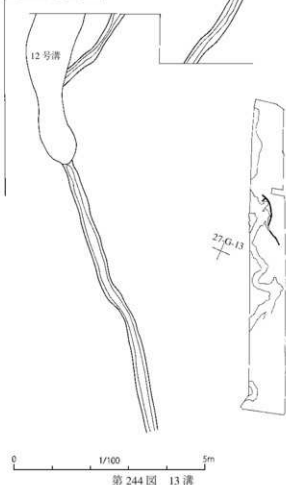
概要 本溝は4区北部、上述の12号溝の左岸部に位置する。南北両側は浅くなって消失していた。また北部で分岐する箇所が見られた。

本溝は12号溝と重複するが新旧関係は特定できなかった。

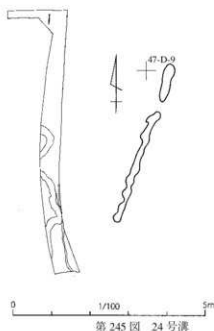
また本溝の掘削意図も特定することはできなかった。

遺物 本溝からの出土遺物は認められなかった。

時期 本溝の時期は特定できなかったが、As-C層下面にあるため、西暦300年前後以前の所産として把握される。



第244図 13溝



第245図 24号溝

規模 長さ：21.9 m（分岐部分：1.1m）幅：46cm

深さ：10cm

構造 上述のように本溝は全容を明らかにすることはできなかったが、北北西-南南東方向に蛇行するプランを呈し、確認範囲の北端付近で南東方向に分岐する。

掘削形態は全体としては箱堀状を呈する。

24号溝（第245図、P L 63）

概要 本溝は5区北端部の中程に位置している。

他遺構との重複は見られなかった。

また掘削意図も確認することもできなかった。

遺物 本溝からは古墳時代前期頃の土師器壺片5片と壺片2片、木質1点を出土したが、図示すべきものは見られなかった。

時期 本溝の時期は特定できなかったが、AsC下面に調査されていることと出土遺物等から推して凡そ4世紀初頭以前の所産と認識される。

規模 長さ：3.2 m 幅：26cm 深さ：— cm

構造 本溝は北北東-南南西方向に走行を取り、僅かな蛇行が見られる。

掘削形態は明瞭ではないが、凡そ箱堀状を呈するものと思慮される。

28号溝（第246～250図、P L 64・77～80）

概要 本溝は5区中部に在る。南北両側が調査区外に在ってその一部を調査できたに過ぎなかった。

本溝は上位層の27号溝と重複している。尚、位置関係と移行形態の比較から本溝は30号溝の上流部に当たる可能性を有する。

本溝には流水の痕跡が認められること及び流路中の淵に当たることから水路、若しくは自然の流路を利用した水路であったものと判断される。

遺物 本溝は壺等の弥生土器（1）や高坏（2）・鉢（3）・埴（4）・甕（5～7）・甕（8・9）等の土師器といった土器類の他、鋤と見られるもの（10）や槌（11）、杭（12～14）、細杭（15）、薄板材（16・17）、板材（18）、建築材（19）や杭（29）と見られるもの含む厚板材（19～33）、建築材（34～36）や杭（39）の可能性を持つものを含む角材（34～43）、丸材（44・45）、丸棒（46～49）、ふくべ（50）といった多量の木製品、そして種子（51）の出土などが見られた。

時期 出土遺物や覆土の状態から推して本溝は西暦300年前後以前の所産と見られる。

規模 長さ：15.7 m 幅：278cm 深さ：81cm

構造 本溝は蛇行する水路の淵の部分に当たり、西側に開くU字に近い形状のプランを呈する。

掘削形態は箱堀状を呈するが、底面の横断面形は丸底状を見せる。

29号溝（第251図、P L 80）

概要 本溝は4区に位置する。南北両端と西側部分が調査区外に出ていて全容は詳らかにすることはできなかった。

同一面での他遺構との重複は見られなかった。

本溝には流水の痕跡が見られるため、水路であったものと判断される。

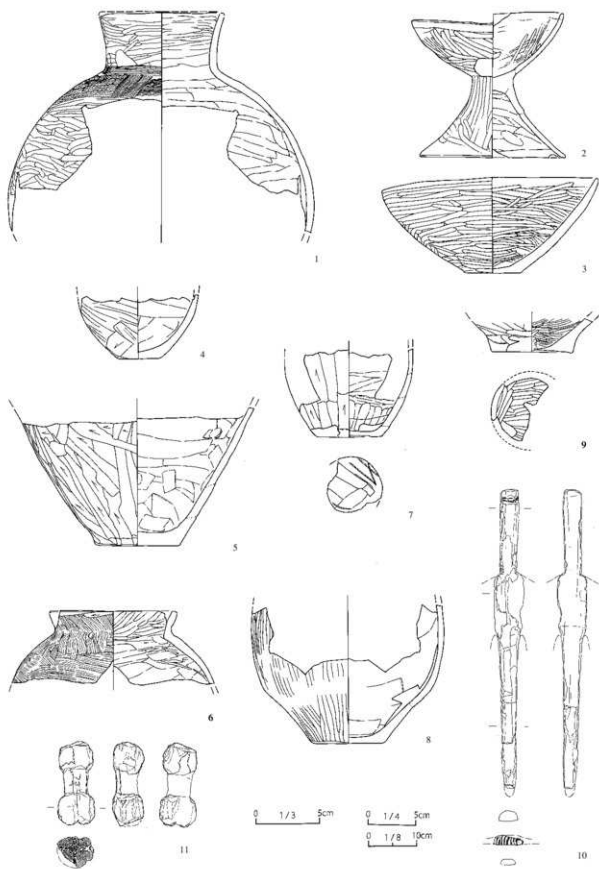
遺物 本溝では上位層からの潜り込みと見られる土師器・須恵器片の出土もあったが、弥生土器や古式土師器片も100点以上の出土があった。こうした土器類に図示すべきものは見られなかったが、木質の



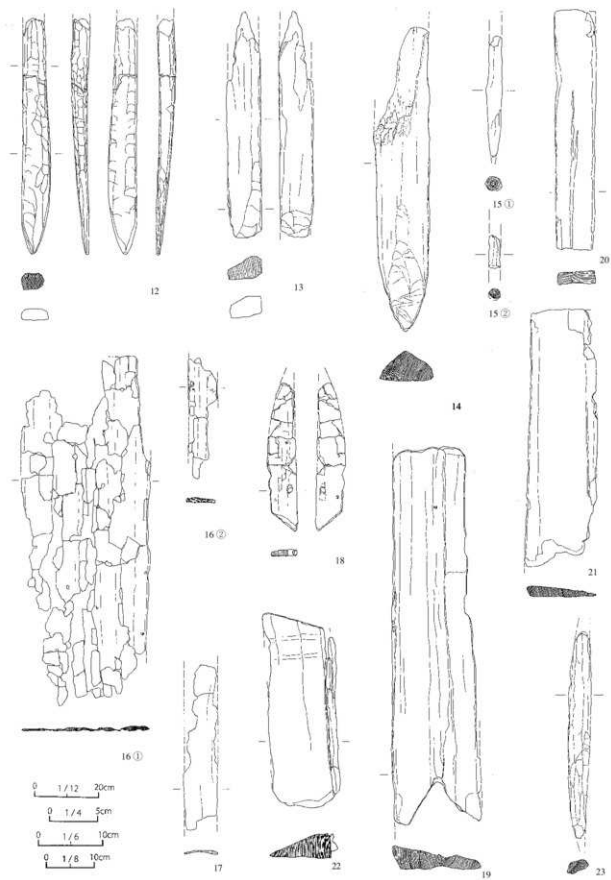
出土が見られ薄板材 (1) や板材 (2)、何かの柄 (3) かと思われるものを含む角材 (3・4) の出土が見られた。

時期 こうした出土遺物や覆土の状態から推して、

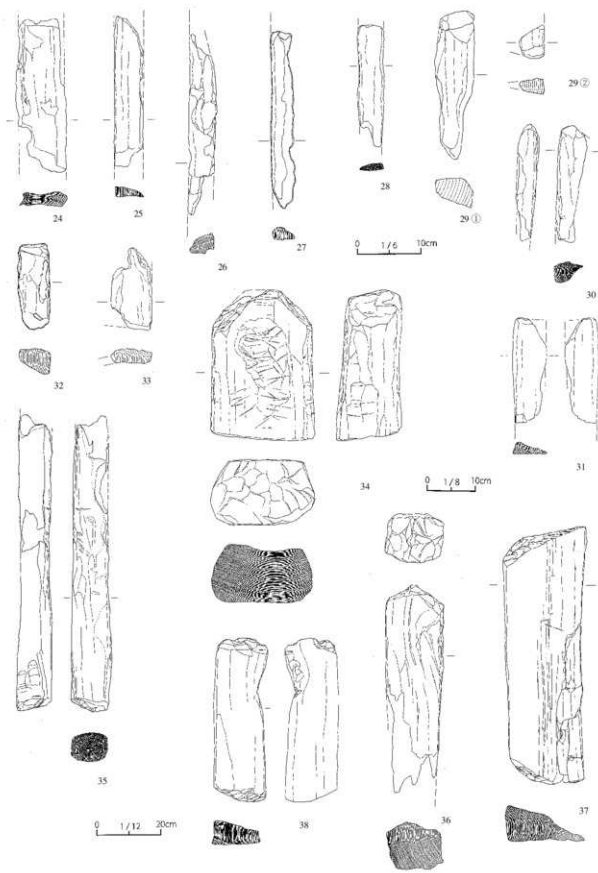
第246図 28号溝



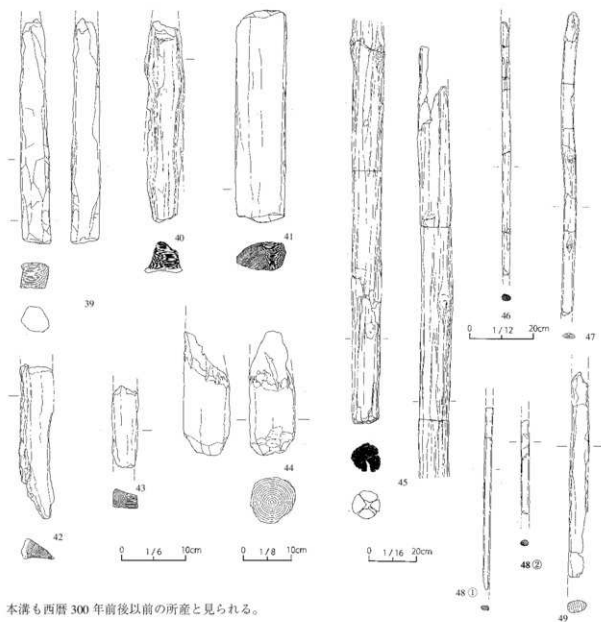
第247図 28号溝出土遺物(その1)



第248図 28号溝出土遺物(その2)



第249図 28号溝出土遺物(その3)



第250図 28号溝出土遺物(その4)

本溝も西暦300年前後以前の所産と見られる。

規模 長さ：32.4 m 幅：(340)cm 深さ：72cm

構造 本溝は調査範囲では南北に走行を取り、南北両端でそれぞれ南西、西北西方向に走行を変じている。側辺には伸縮が見られる。

掘削形態は箱堀状を呈するが、東壁は河岸段丘上に段々に立ち上がっている。

30号溝(第252～257図、P.L.65・80～85)

概要 本溝は5区中・南部に位置する。南北両端と南よりの西側が調査外に出ていて、全容を知ることはできなかった。

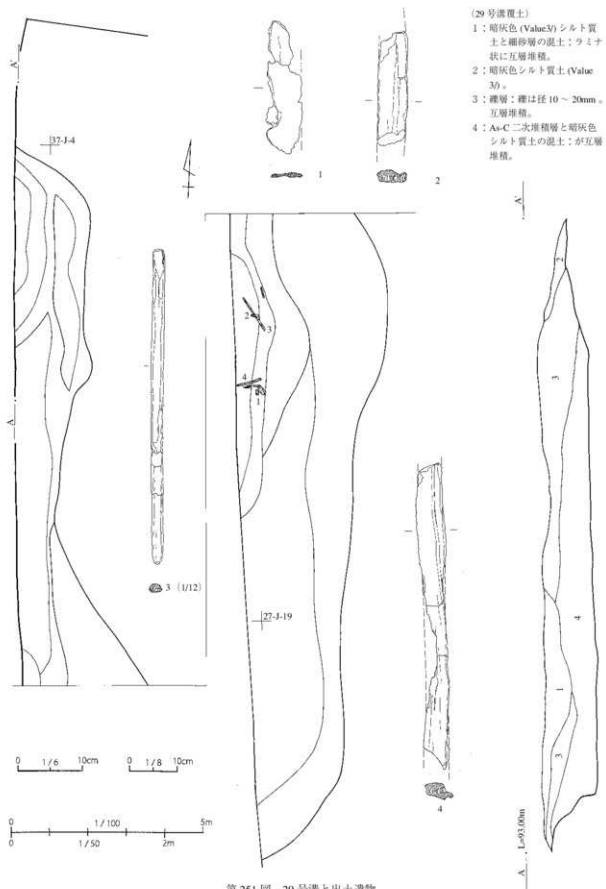
本溝は同一面での他遺構との重複関係は見られな

かった。高、位置関係と形態から推して前述の28号溝の下流域に当たる可能性が考慮される。

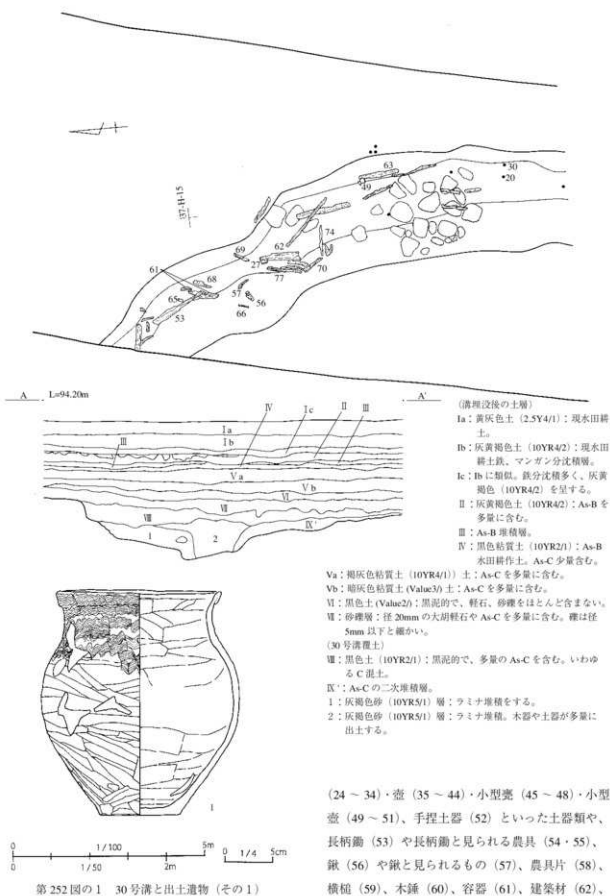
本溝も流水の痕跡が見られるため、(自然の流路を利用した)水路と認識される。

遺物 上位層に属する若干の土師器片や、古墳時代前期の土師器や弥生土器、或いは木製品や流木等の多量の出土遺物等が見られた。この中には弥生土器の甕(1～3)・壺(4～9)、土師器甕(10～13)・鉢(14)・埴(15)・器台(16)・高坏(17～20)・高坏又は器台の脚部(21)・台付甕(22・23)・甕

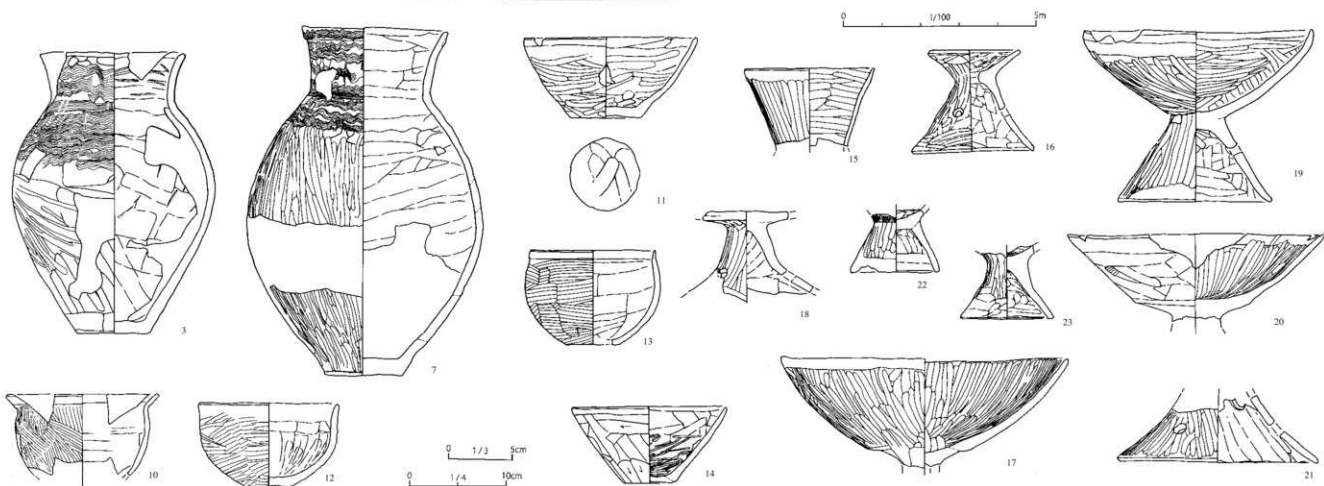
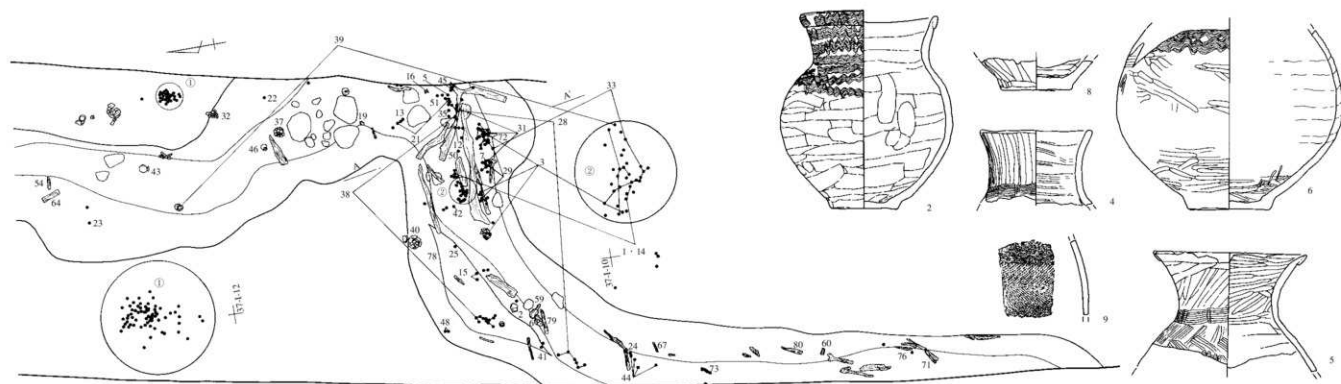
第5節 4面の遺構と遺物



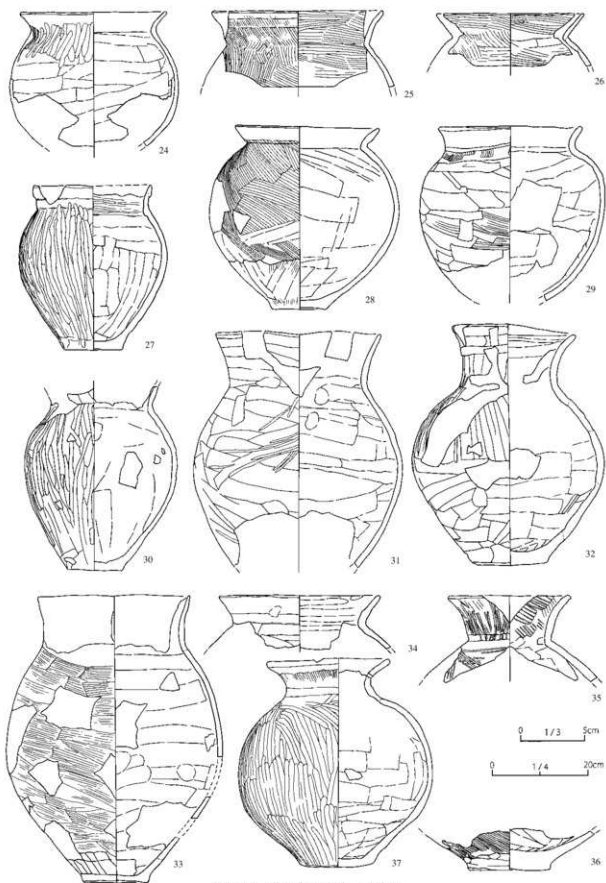
第251図 29号溝と出土遺物



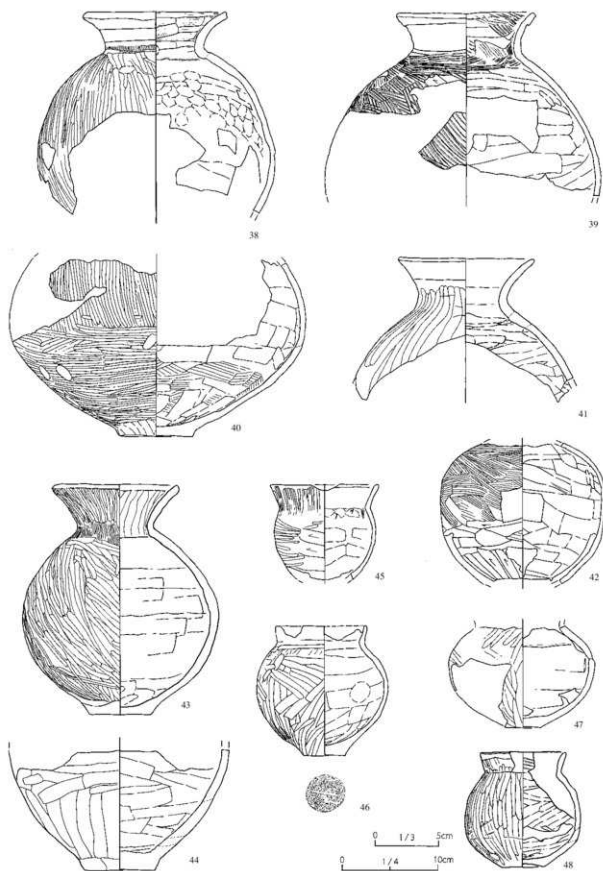
(24 ~ 34)・壺 (35 ~ 44)・小型甕 (45 ~ 48)・小型壺 (49 ~ 51)、手捏土器 (52) といった土器類や、長柄鋤 (53) や長柄鋤と見られる農具 (54 ~ 55)、鍬 (56) や鍬と見られるもの (57)、農具片 (58)、横植 (59)、木錘 (60)、容器 (61)、建築材 (62)、



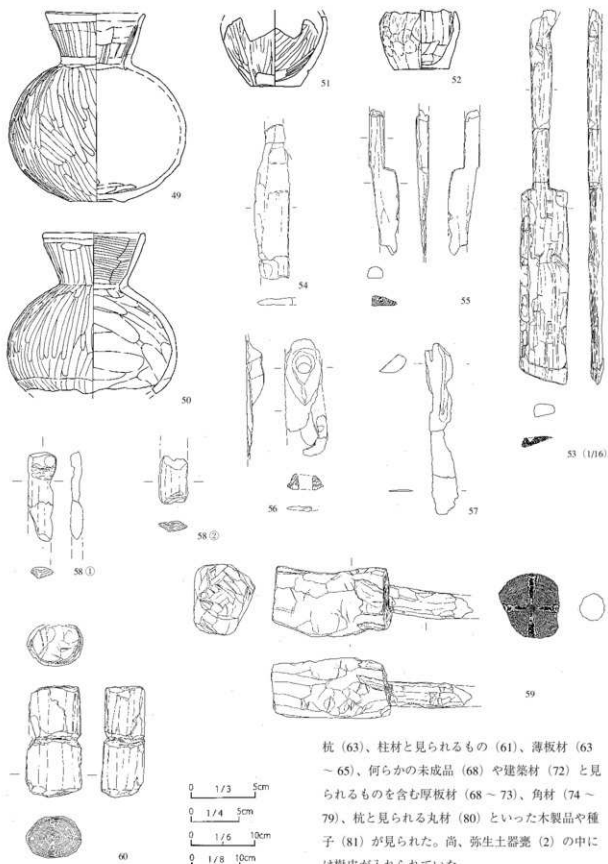
第252図の2 30号溝と出土遺物(その1)



第253図 30号清出土遺物 (その2)



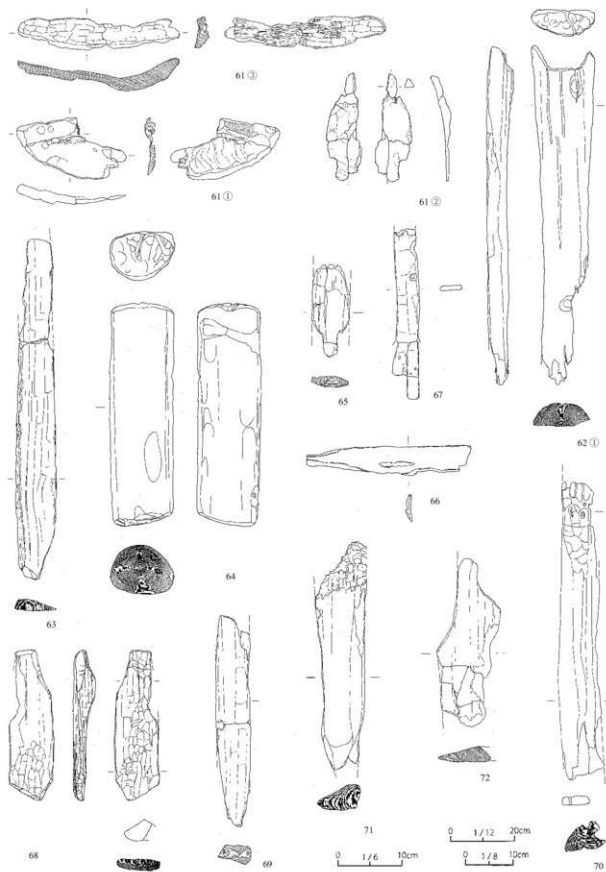
第254図 30号溝出土遺物(その3)



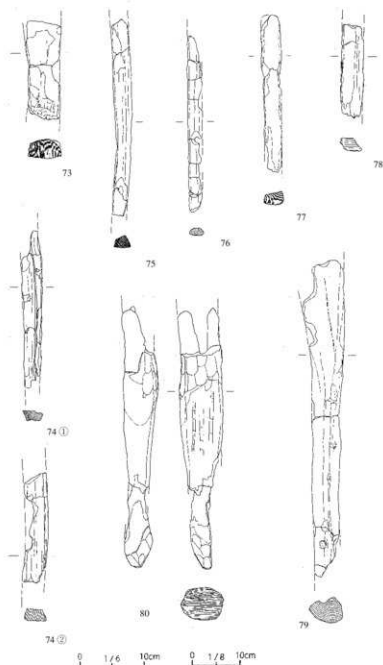
第255図 30号溝出土遺物(その4)

杭 (63)、柱材と見られるもの (61)、薄板材 (63～65)、何らかの未成品 (68) や建築材 (72) と見られるものを含む厚板材 (68～73)、角材 (74～79)、杭と見られる丸材 (80) といった木製品や種子 (81) が見られた。高、弥生土器甕 (2) の中には樹皮が入れられていた。

時期 出土遺物や覆土の状態から推して、本溝も西



第256図 30号溝出土遺物(その5)



第257図 30号溝出土遺物（その6）

暦300年前後以前の所産と認識される。

規模 長さ：43.5m 幅：200～376cm

深さ：68cm

構造 本溝は上述のようにその一部を調査したに過ぎないため全容は明らかではないが、調査範囲に於いては北西方向から調査区に入って東に膨らむ弧を描きながら調査区西壁際に戻るが、弧の南寄りでU字形に東に突出して淵を作り、その南端からは南流

して、走行を南西方向に変じて調査区外へ抜ける流路を見せる。

掘削形態は箱堀状であるが、底面の横断面形は丸底状を呈する。

32号溝（第258・259図）

概要 本溝は5区中・南部に位置している。南側は調査区外に延伸しており、中位では一旦東側調査区外に出ている箇所があり、また北側は上位面の27号溝に接してその延長部分を確認することができず、全容を明らかにできなかった。

上述のように本溝は27号溝に北端で接してこれに切られているが、同時期の他の遺構との重複関係は確認できなかった。

本溝は埋土に流水の痕跡が認められるため水路であったものと判断される。尚、その流路から推して、自然の流路を利用した可能性が考慮される。

遺物 本溝からは上位層からの流入と見られる土師器・須恵器片の出土も見られたが、古墳時代前期以前のものを中心に125片を上回る出土遺物が得られ、この中には弥生土器壺(1)、古墳時代前期の土師器壺(2)なども見られた。

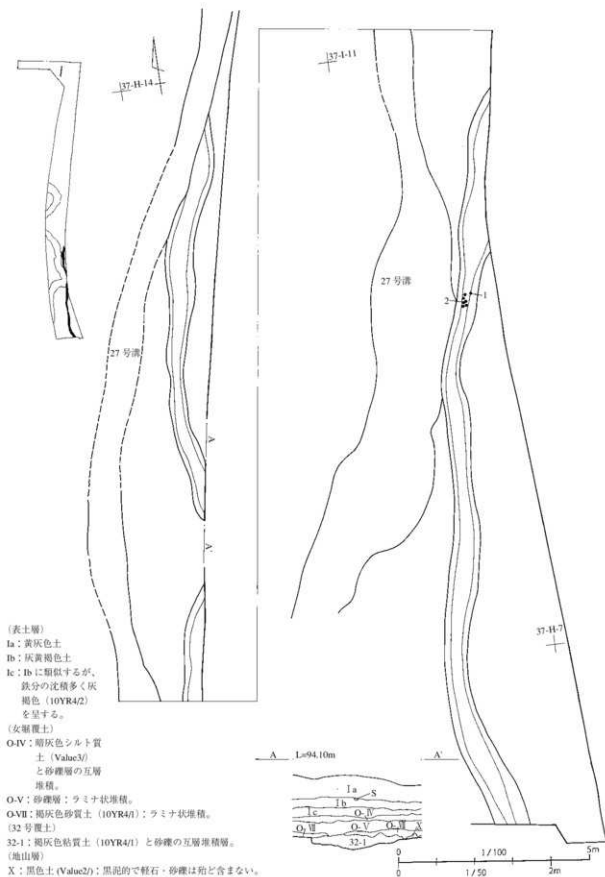
時期 本溝は出土遺物や確認層位から推して概ね西暦300年前後以前の所産として把握される。

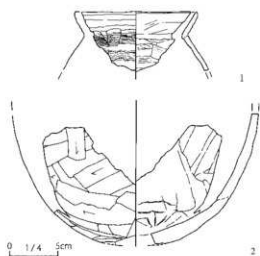
規模 長さ：35.7m 幅：38～124cm

深さ：17cm

構造 本溝は全体的には北北東-南南西方向に走行するものであるが、その地点地点に於いては蛇行するプランを見せている。

掘削形態は箱堀である。





第259図 32号溝出土遺物

As-C 下面 (第260～262図 P L 65・66)

概要 本遺跡では3～6区南西部にかけてAs-Cに被覆された面が確認されている。

3区では水田址と見られる遺構写真(P L 66)が撮影されている。

遺物 5区のAs-C下面では、上位層からの潜り込みと見られる須恵器1点を含む130点を上回る土器片であった。これらの中には弥生土器の甕(1)・壺(2～5)や器高83.2cmを測る大型壺(6)、土師器高坏(7)・甕(8～11)・壺(12～14)があり、この他に弥生土器の破片29点、古墳時代前期の土師器片101点があった。弥生土器には樽式と赤井戸式(吉ヶ谷式)が混在して見られた。

時期 As-C面は、As-Cに被覆されていることからAs-C降下の3世紀末以前の所産と判断される。

規模 (3区) 8.0×25.8 m

(4区) 9.7×46.3 m

(5区) 8.9×41.9 m

(6区) 19.9×3.2 m

[6区溝] (東部溝) 長さ: 3.7cm 全幅: 82cm

東溝 幅: 28cm 深さ: 4cm

西溝 幅: 38cm 深さ: 9cm

(西部北溝1) 長さ: 1.9cm 幅: 46cm

深さ: 10cm

(西部南溝2) 長さ: 2.5cm 幅: 23cm

深さ: 3cm

構造 畦畔が明瞭でないため記載事項は少ないが、以下6区南西の西張り出しについて若干を述べる。

6区南西の張り出し部はトレンチ状の調査区で、その東部は古い地形の影響と見られる谷状の落ち込みが在り、その東肩付近に南北走行の浅い溝、また調査区西部に鉤字形に不連続に位置する2条の浅い溝が在る。このうち東部の溝は二重堀状で、2条の溝は8～16cm隔てて並走する。一方西側の溝のうち南側のものは南西に下る緩傾斜に沿って在る。

この溝の東側には等高線によって北東-南西方向に畦畔の存在を窺がわせる僅かな隆起箇所(第260図「+」)が見られる。

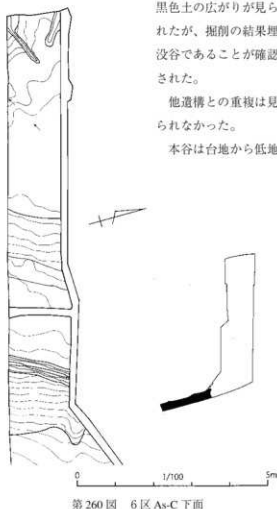
1号谷 (第263図, P L 66)

概要 6区中程の確認面で住居の可能性が疑われた

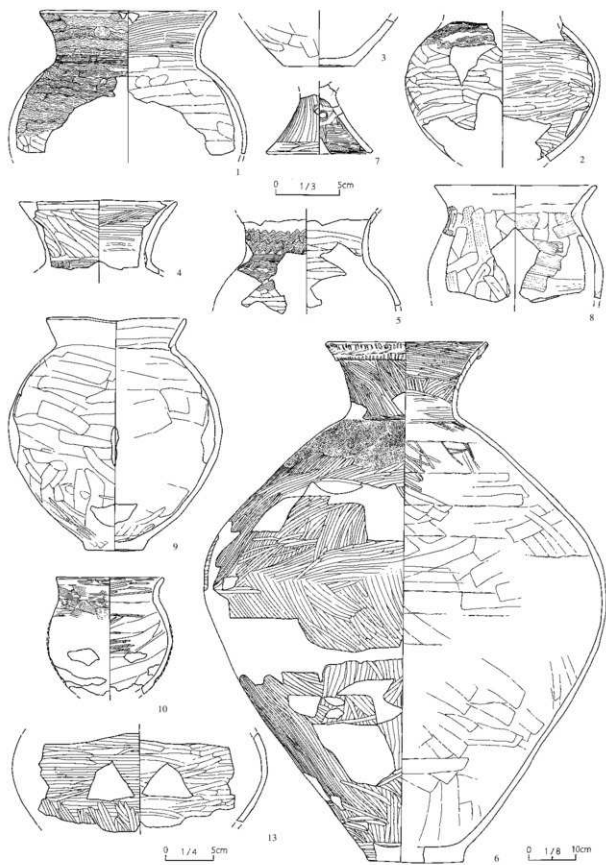
黒色土の広がりが見られたが、掘削の結果埋没谷であることが確認された。

他遺構との重複は見られなかった。

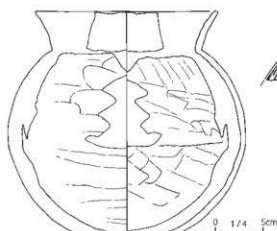
本谷は台地から低地



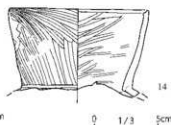
第260図 6区As-C下面



第261図 As-C下面出土遺物(その1)



第262図 As-C下面出土遺物(その2)



認められなかった。
遺物出土遺物は認められなかった。

時期 確認面最上部の土層にAs-Cが混入することから律令期を下限とする埋没谷として捉えている。

規模 残長：4.0m
幅：5.2m

深さ：23cm

構造 平面域には東に開くU字条を呈し、底面には凹凸が見られる。

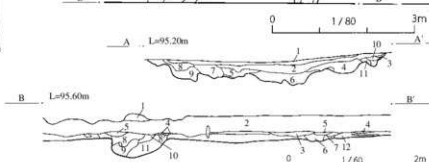
部への自然流路の痕跡と見られる。南北二筋の流路の合流する地点と見られるが、當時の流水の痕跡は

(A-A')

- 1: 青黒色土 (5B17/1): きめ細かくAs-Cと暗灰色土 (7.5YR5/1) ラミナ状ブロック入る。
- 2: 青黒色土 (5PB2/1): As-C及び僅かな灰黄褐色土 (10YR6/2) 混入。
- 3: 2層土と灰黄褐色土 (10YR6/2) のブロックの混土: As-C混入。
- 4: 暗褐色土 (7.5YR4/1): 砂と少量のAs-Cと黄灰色細砂質土 (2.5Y5/1)・明黄褐色ローム粒 (10YR6/8) 含む。
- 5: 褐灰色土 (10YR4/1): 細砂と少量の黄褐色ローム粒 (10YR6/3) 混入。
- 6: 5層土に灰黄色ロームブロック (2.5Y6/2) や多く入る混土: 砂と若干の1層土混入。
- 7: 明黄褐色ローム (2.5Y6/6) 入る褐灰色土 (7.5YR4/1) のブロック混土: 砂混入。やや砂質。
- 8: 青黒色土 (5PB2/1): 少量のAs-C・9層土・砂入りきめ細かい。
- 9: 灰黄褐色土 (10YR5/2): 少量のAs-Cとに黄褐色ローム粒 (10YR7/4 粒径大きい) 含む。砂混入。
- 10: 褐灰色土 (7.5YR4/1): 色調暗い。灰黄褐色土 (10YR5/2) のブロックと若干の1層土大粒、As-C混入。粘性あり。
- 11: 暗灰黄色土 (2.5Y4/2) 細砂入るが粘性ややある。砂混入。

(B-B')

- 1: 褐灰色土 (7.5YR5/1): 塊状土。粘性欠く。少量のAs-A混入。
- 2: 灰黄褐色細砂質土 (10YR5/2): 明黄褐色ローム粒 (10YR6/8) とAs-A 僅かに混入。



- 3: 明黄褐色細砂質ローム (10YR6/8) と暗灰色土 (N3) 入る暗灰黄色土 (2.5Y5/2) ブロック混土: 僅かなAs-A混入。
- 4: 灰オリープ色細砂質土 (5Y5/2): 3層土ブロック若干混入。
- 5: A-A'-1層に同じ。 / 6: A-A'-4層に同じ。
- 7: 灰オリープ色土 (5Y5/2): やや砂質。川砂とAs-A若干混入。
- 8: A-A'-5層に同じ。1層・灰黄褐色土 (10YR5/2) 混入。
- 9: A-A'-7層に同じ。
- 10: 褐灰色土 (10YR4/1) 黄褐色ローム (10YR7/6) 粒(粒径大)と8・9層土小ブロック混土。As-Cも入る。
- 11: A-A'-6層に同じ。
- 12: 灰色細砂質土 (5Y/1) とに黄褐色土 (2.5Y6/3) のブロック混土。青黒色土粒 (5PB2) と酸化鉄、風化・酸化した軽石入る。
- 13: 黄灰色土 (2.5Y5/1)・青黒色土粒 (5PB2) と12層土少量含む。古い段階の植物の痕跡。

第263図 1号谷

第6節 縄文時代の小河道と遺物

6区の旧河道 (第264図、P.L.66)

概要 6区南西の西張出し部の東側で、上位のAs-C下面に古い谷に伴うと思われる落ち込みが見られたため、5区の旧河道の続きの遺存を考慮してトレンチによる掘り下げを行ったところ、小型の河道跡が発見された。

遺物 縄文土器片1点や木質の出土があった。

時期 縄文時代の小河道と見られる。

規模 長さ：1.5 m 幅：(90)cm

深さ：24cm

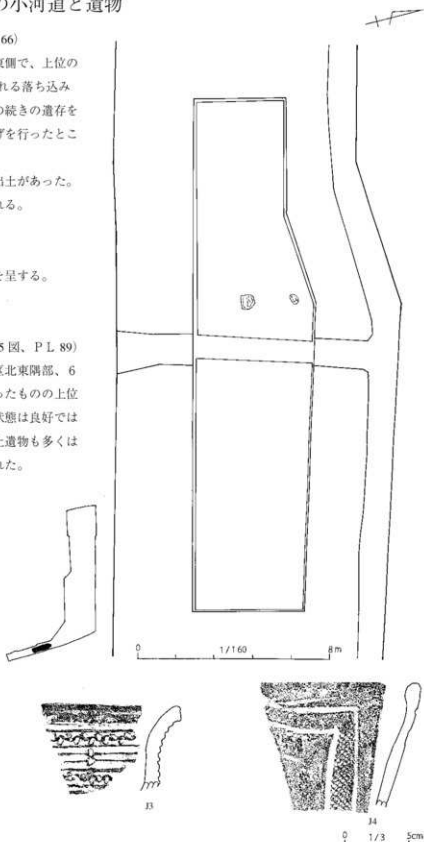
構造 南流する直線的なプランを呈する。

縄文時代の遺物

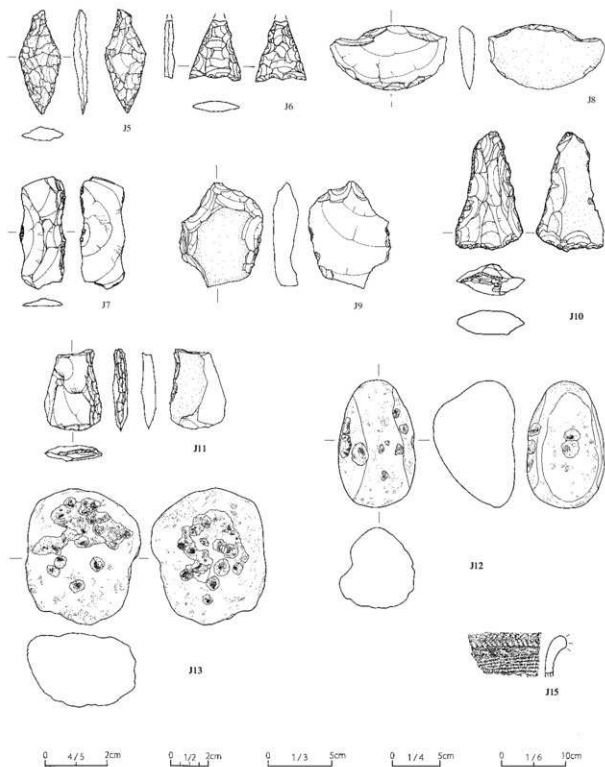
(第264・265図、P.L.89)

概要 1・2区と3区南部、5区北東隅部、6区の過半と7区に台地部分があったものの上位は削平されて縄文時代層の遺存状態は良好ではなかった。従って縄文時代の出土遺物も多くはなかったが、若干の資料が得られた。

遺物 出土遺物には前期から後期の縄文土器片(J1～4)や、尖頭器(J5)、石鏃(J6)、スクレーパー(J7～9)、撥型石器(J10)、打製石斧(J11)、多孔石(J13)などの石器、石製品が見られた。

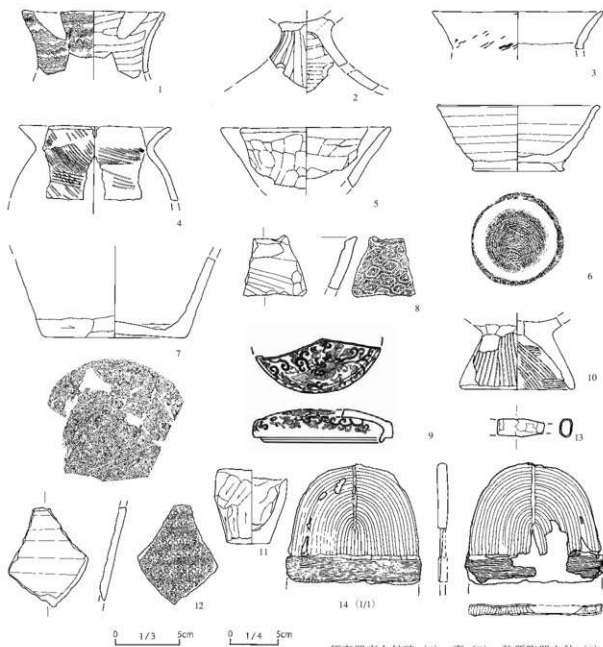


第264図 6区の小河道(上)と縄文時代の遺物(その1)



第265図 縄文時代の遺物（その2）

第7節 遺跡全域の出土遺物



第266図 遺跡全域からの出土遺物

富田大泉坊A遺跡の出土遺物

(第266図、P L 89)

概要 本節では区や層位不明の遺物を中心に、出土層位から前節までに含めなかった遺物((1)・(2))や、4節の報告に漏れた1点(4)を報告する。

遺物 これらには弥生土器甕(1)、土師器高坏(2)・甕(3・4)・鉢(5)・台付甕(10)・手捏土器(11)、

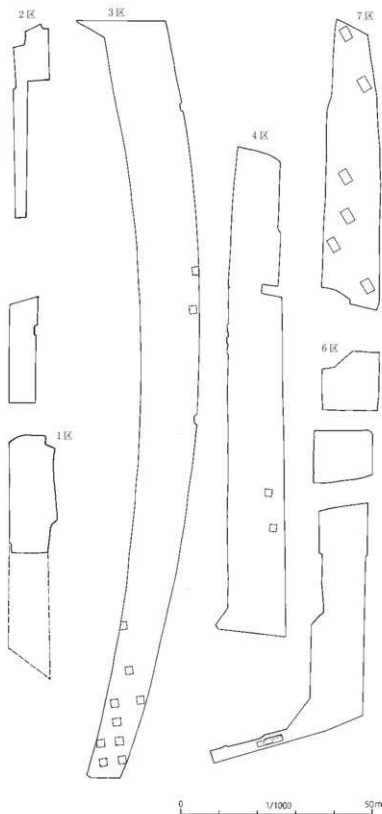
須恵器高台付碗(6)・甕(7)、軟質陶器火鉢(8)・(12)、煙管(13)、櫛(14)、種子(15・16)がある。

このうち櫛(14)はAs-C下の溝遺構に伴うものかと想定しているが、科学分析の結果、同型製品のような竹製ではなく、草の茎を編んだもので、黒漆を一回だけ塗布したものであることが確認された。

尚(1)は5区VII層(As-C下位層)、(2)はVIII層(灰黄褐色シルト層)、(4)は5区V層、(8)は6区の出土であった。

第8節 旧石器の試掘調査

本遺跡に於いては1面或いは2面終了時にグリッドに沿った調査区画を設定して旧石器の試掘調査を実施したが、当該時期の出土遺物を得ることはできなかった。



第267図 旧石器試掘坑設定位置図

第6章 富田宮田遺跡で発見された遺構と遺物

第1節 1面の遺構と遺物

本遺跡は原道藤岡大胡線の東側に在り、一般河川大泉坊川を南限とし、公道で区画される3区から成るが、第1章に述べたように最北の調査区は報告者の引継ぎの不手際から4区と呼称している。

本遺跡は低地部（1区南部）と台地部（1区北部及び2・4区）とに分かれ、低地部ではAs-B下、洪水層下、Hr-FA下、As-C混土下、As-C以下（旧河道）の5面の調査を行ったが、以下低地部1面と台地部を1面として報告し、低地部についてのみ2～5面について分けて報告することとする。

尚、南端の大泉坊川際は大きく攪乱されていて、遺構を確認することはできなかった。

1号溝（第269図、P.L.90・93）

概要 本溝は2区に位置している。

他の重複関係は何れの溝も認められなかった。

本溝の掘削意図を特定することはできなかった。

遺物 古墳時代前期と律令期の土師器片合わせて8点の出土があったが、この他に葎石（1）の出土も見られた。

時期 本溝は覆土中にAs-Aを含むことから近世後期以降の所産と判断される。

規模 長さ：7.9m 幅：104cm 深さ：43cm

構造 本溝は北北西-南南東方向に直線的に走行するプランを呈する。

掘削形態ははっきりした箱堀形をしていた。

2・3号溝（第269図、P.L.90）

概要 2・3号溝は2区に位置している。

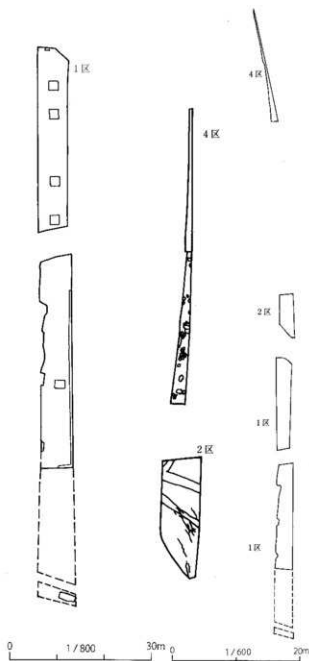
3号溝が2号溝を切っていることを確認したが、それ以外の遺構との重複関係は見られなかった。

両溝は共に流水の痕跡が認められることから、水路として使用されたものと判断される。

遺物 2号溝からは古墳時代の土師器片3片の出土

があり、3号溝からは古墳時代前期の土師器3片、律令期の土師器2片と陶器1片の出土があったが、共に図示すべきものは見られなかった。

時期 2・3号溝の時期は特定できなかった。3号溝からは陶器も出土するものの、土層観察所見と合



第268図 富田宮田遺跡1面全体図

わせて鑑みるに、概ね古墳～平安時代の所産ではないかと想定される。

規模 (2号溝) 長さ: 6.7 m 幅: 144 cm

深さ: 69 cm

(3号溝) 長さ: 4.5 m 幅: 89 cm 深さ: 27 cm

構造 2号溝は南東方向に流下するプランを呈し、3号溝は北東から入って時計回りに弧を描き、西南西に抜ける走行を呈する。

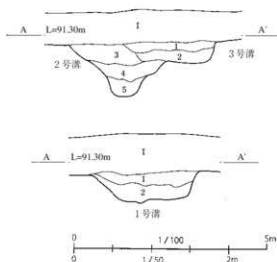
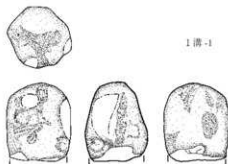
掘削形態は共にしっかりした掘り方を有し、2号溝は葉研堀状、3号溝は箱堀状を呈している。

土坑群 (第270図、P L 90)

概要 本遺跡の土坑は4区南半部に確認された。1a・1b号土坑は東側が、2号土坑は西側が調査区外

に出ている全容を確認することはできなかった。

このうち1号土坑は別遺構に分離されたため短冊形と想定される1a号土坑と、不整形な1b号土坑に分離したが、前者の方が新しい。また2・3号土坑には他遺構との重複は見られなかった。



(表土層)

I: 現耕作土。

(3号溝)

1: 黒色土 (10YR2/1); 黒褐色土 (10YR3/1) が20%混入。多量のAs-Cと少量の細砂を含む。IV層に類似。

2: 黒褐色土 (10YR3/1); ラミナ状堆積の細砂が20%混入。中量のAs-Cと少量の細砂を含む。

(2号溝)

3: 黒色土 (10YR2/1); 多量のAs-Cを含む。IV層に類似。

4: 黒色土 (10YR2/1); 砂礫が30%混入。

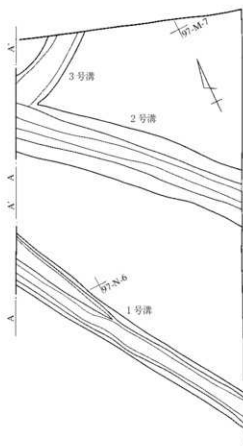
5: 黒色土 (10YR2/1) と細砂互層堆積。

(表土層)

I: 現耕作土。

(1号溝)

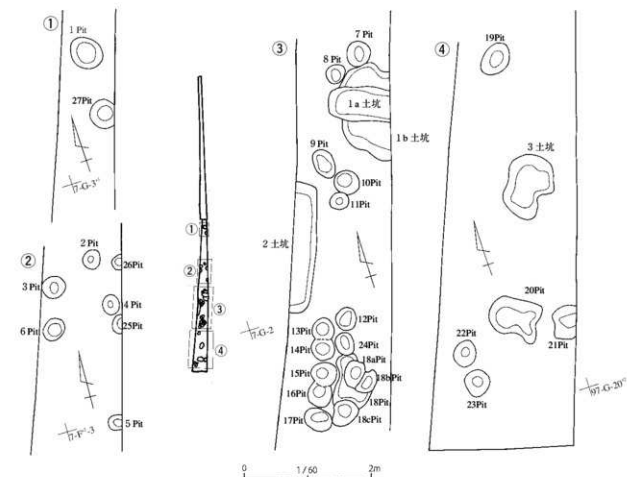
1: 黒褐色土 (10YR3/2); VI層ブロックが1%混入。As-Aを中量



含む。I層に近似する。

2: 黒褐色土 (10YR3/2); VI層ブロックが10%混入。As-Aを中量含む。I層に近似する。

第269図 1～3号溝



(1a号土坑覆土)

表土

(1b号土坑)

表土と黄灰色・黒色粘質土ブロック混土。

(2号土坑覆土)

表土と灰色と黒色の粘質土ブロックの混土；締まりない。

(3号土坑覆土)

表土と黄灰色粘質土ブロックの混土。

(1号ピット覆土)

黒褐色粘質土；軽石（遺物か）含む。

(2～4号ピット覆土)

As-C混黒色土；As-Cは細粒。

(5号ピット覆土)

As-C混黒色土。

(6号ピット覆土)

As-C混黒色・灰色土；粘質土ブロックを含む。

(7・8号ピット覆土)

灰褐色表土・黒色粘質土・黄灰色粘質土のブロック混土。

(9号ピット覆土)

As-C混黒色土；黄灰色粘質土小ブロック含む。

(10・11号ピット覆土)

灰褐色表土。

(12～18・20・22・23号ピット覆土)

灰褐色表土と黄褐色粘質土大粒の混土。

(19号ピット)

1・2号ピット覆土に似るが、黄褐色粘質土ブロックやや多い。

第270図 4区の土坑・ピット群

各土坑の掘削意図は特定できなかったが、1・3号土坑は貯蔵穴の可能性を有する。

遺物 何れの土坑からの出土遺物もなかった。

時期 4基の土坑は覆土の観察所見から何れも近世後期以降の所産で、近・現代のものと判断される。

規模 表9参照

構造 プランは1a号土坑は短冊形、1b号土坑は不整形、2号土坑は長方形、3号土坑は変形弧線形を呈するものであった。

表9 富田宮田遺跡土坑一覧

No.	径	深さ	平面形状	断面形状	位置	遺物	備考
1a	1000×56	21	短冊形	半底			
1b	1127×131	8	不整形	半底			
2	2071×136	22	長方形	半底			
3	1038×77	27	変形弧線形	丸底			

表10 富田宮田遺跡遺跡ピット一覧

No.	径	深さ	平面形態	掘削形態	遺物	備考
1	53×45	13	楕円形	丸底	4区	△
2	30×17	23	楕円形	丸底	4区	
3	37×34	22	楕円形	丸底	4区	
4	31×26	12	楕円形	丸底	4区	
5	(22)×24	9	隅丸長方形	丸底	4区	
6	38×32	12	楕円形	丸底	4区	
7	40×37	15	楕円形	丸底	4区	
8	30×28	13	楕円形	丸底	4区	
9	48×33	12	楕円形	丸底	4区	
10	41×40	13	円形	丸底	4区	
11	29×27	10	円形	丸底	4区	
12	26×24	14	楕円形	丸底	4区	
13	36×(33)	24	円形	丸底	4区	14ピットと重複
14	38×(34)	15	円形	丸底	4区	13ピットと重複
15	40×(39)	18	円形	丸底	4区	16ピットと重複
16	(40)×38	19	楕円形	丸底	4区	□ 15ピットと重複
17	45×33	14	楕円形	丸底	4区	
18	115×72	30	小楕三角形	平底	4区	
18a	43×(31)	30	楕円形	丸底か	4区	
18b	40×(15)	14	楕円形	丸底か	4区	
18c	43×40	14	隅丸三角形	丸底か	4区	
19	57×38	28	楕円形	丸底	4区	
20	80×57	19	変形長方形	丸底	4区	
21	(38)×50	16	隅丸方形	丸底	4区	
22	41×35	29	楕円形	丸底か	4区	
23	40×40	18	楕円形	丸底か	4区	
24	38×9	14	楕円形	丸底か	4区	
25	30×(14)	14	楕円形か	丸底か	4区	
26	(16)×16	6	楕円形	丸底か	4区	
27	45×(44)	10	円形	丸底か	4区	

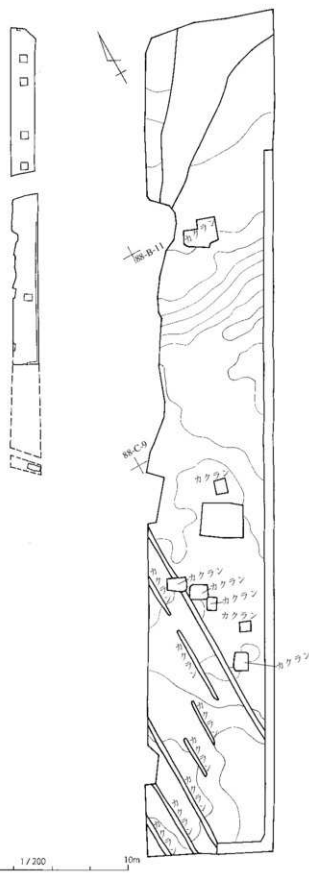
底面形態は3号土坑が丸底を呈する以外は平底であった。

ピット群 (第270図、P.L.90)

概要 本遺跡のピットは4区南半部に確認され、中～南部にかけて集中して分布する箇所があり、最南部のものが最も集中していた。

13・14号ピットと15・16号ピットが重複するものの新旧関係は特定できなかった。また18号ピットは18a・18b・18c号ピット等の集合体と見られる。また18号ピットは24号ピットと重複するが、18号ピット内各ピットを含め新旧関係を特定することはできなかった。またこれ以外のピットは他の遺構との調査区関係は見られなかった。

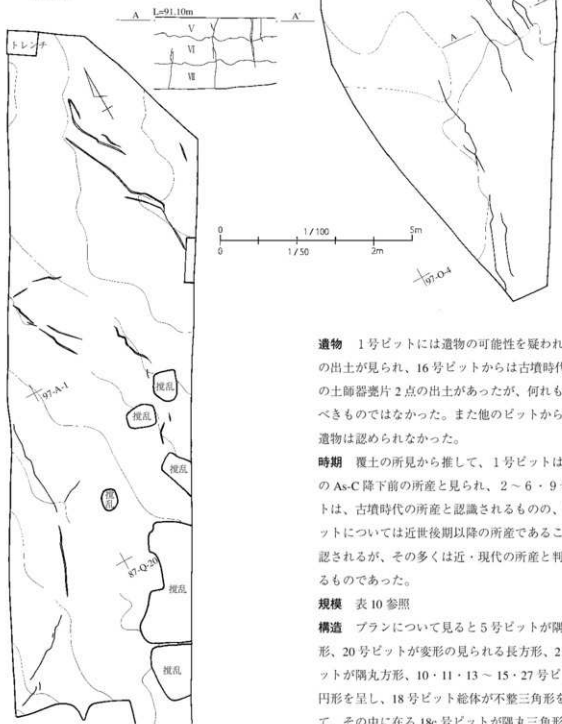
何れのピットも掘削意図を特定することはできなかった。高、1号ピットについては調査段階で植物の根の痕跡の可能性が考慮されている。



第271図 1区南部1面 (As-B下面)

第6章 富田宮田遺跡で発見された遺構と遺物

- V: 黒色粘質土 (10YR2/1) 黒泥層、粘性高い(黒泥、水田の一時中断)
 VI: 黒色粘質土 (10YR2/1) As-C 細砂 60% 含む。As-C 細砂と黒色粘質土が互層に堆積。下層には砂粒(径 10 mm)が堆積 (As-C 混土)
 VII: 黒色粘質土 (10YR2/1) 地山植物遺体有り。



第272図 1区北部の噴砂痕

遺物 1号ピットには遺物の可能性を疑われる軽石の出土が見られ、16号ピットからは古墳時代前期の土師器壺片2点の出土があったが、何れも図示すべきものではなかった。また他のピットからの出土遺物は認められなかった。

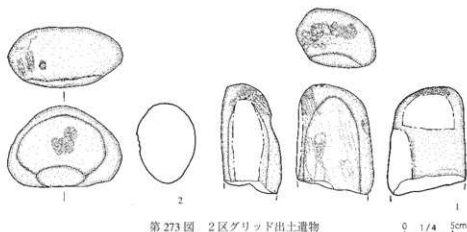
時期 覆土の所見から推して、1号ピットは3世紀のAs-C降下前の所産と見られ、2～6・9号ピットは、古墳時代の所産と認識されるものの、他のピットについては近世後期以降の所産であることは確認されるが、その多くは近・現代の所産と判断されるものであった。

規模 表10参照

構造 プランについて見ると5号ピットが隅丸長方形、20号ピットが変形の見られる長方形、21号ピットが隅丸方形、10・11・13～15・27号ピットが円形を呈し、18号ピット総体が不整三角形を成して、その中に在る18c号ピットが隅丸三角形を呈する以外の各ピットプランは楕円形若しくは楕円形を

呈するものであった。

一方底面の堀削形態は8・10・15号ビットが尖底、18号ビット本体が平底を呈する以外は丸底を呈するか丸底と見られる形状のものであった。



第273図 2区グリッド出土遺物

As-B 下面 (第271図、P.L.90・93)

概要 1区南部に於いてはAs-B下面を確認した。

畦畔が確認されなかったため、明確な水田面として断定することはできないが、その状態から水田面と認識している。

遺物 As-B下面から土師器片17点(坏1点、高坏1点、甕11点、壺4点)と須恵器甕片4点の出土を見たが、図示すべきものは見られなかった。

時期 本面はAs-Bに被覆されることから、天仁元(1108)年以前の所産と判断される。

規模 範囲：43.3×6.1m以上

構造 1区南部北側で概ね東西に走行する高さ28cmの段差を持って本面に下がっている。

As-B下面は平坦で畦畔等は確認されなかった。

噴砂痕 (第272図、P.L.91)

概要 1区の北部に於いて、は19筋以上の、2区に於いては11筋程度の噴砂痕を確認した。

1区に於いてはこれらの噴砂と他の遺構との重複関係は見られなかった。また2区に於いては1号溝との重複関係が認められた。遺構としての新旧完型は特定できなかった。

遺物 出土遺物は見られなかった。

時期 噴砂の形成時期は断定できないが、周辺での地震記録に照らして弘安9(818)年の地震によるものと考えたい。

規模 長さ：1.9～7.4m 幅60cm以下
深さ94cm以上

構造 噴出砂の走行は北部では北西-南東方向に走行するものが多く、南部では北北西から入って南南西に抜ける時計回りの弧を描くものも見られた。

確認箇所では幅は比較的一定で殆どが60cm以下であるが、深部では凡そ25cm以下である。

遺構外の出土遺物 (第273図、P.L.93)

概要・遺物 本遺跡1面に於いては土師器甕を中心とした遺構外出土の遺物を得た。

2区のグリッド取り上げ遺物として叢石(グリッド-1・2)があったが、この他に1区に於いては律令期の土師器片41点、須恵器片1点、石器片10点、磨石と思われる石製晶片1点が出土し、2区では律令期の土師器32点、須恵器片6点、陶磁器片1点、石器片2点、煙管の雁首1点、鉄滓1点、4区では古墳時代前期頃の土師器32点、律令期の土師器13点、須恵器1点、陶磁器片2点、石器片1点の出土が見られた。

第2節 2～4面に発見された遺構

2面（洪水層下面）

(第274図・第275図、P L 91)

概要 1区南部のAs-B下面とHr-FA層の間でグライ化した洪水層を確認しその下に耕作面と見られる遺構面を確認した。

畦畔が確認されなかったため、明確に水田面とすることはできないが、その状態から水田址と認識されるものである。

遺物 出土遺物は得られなかった。

時期 その時期はAs-B下面とHr-FA層の間に確認されたことから古墳時代後期～平安時代の間のものと把握されるに過ぎなかった。

規模 範囲：43.3×6.1m

構造 面は平坦で畦畔等は確認されなかった。

3面（Hr-FA下水田面）

(第274・275図、P L 91)

概要 1区南部のHr-FA層で水田面を確認した。

高、北側にHr-FA層は確認できず、As-C上の耕作土と認識される層の上面が南側のHr-FA下面と同一調

査段階に確認されているため、Hr-FA面として一括図化している。

遺物 出土遺物は得られなかった。

時期 Hr-FA降下層の間に確認されたことから6世紀初頭以前と認識される。

規模 範囲：43.3×6.1m

(南大畦)長さ：9.1m 幅：242cm 高さ10cm

(北大畦)長さ：4.7m 幅：168cm 高さ：5cm

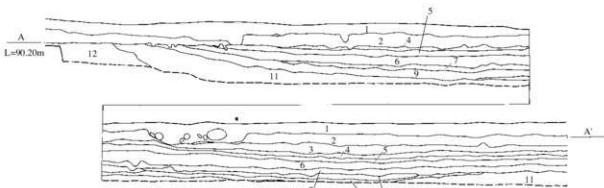
(大溝)長さ：11.4m 幅：371cm 深さ：34cm

(溝)長さ(東)：4.2m (西)：3.3m 深さ：5cm

(ビット1)径：64×56cm 深さ：4cm

(ビット2)径：(63)×52cm 深さ：13cm

構造 第275図(中)に図示した範囲で最南部には台地の縁辺があり、この台地の北側に沿って南西に流下する大溝(南大畦)が在る。南大溝の北側にも大畦(北大畦)が確認され、北大畦の北には小型の溝が在るが、この溝は途中で40cm程途切れ、調査区西端の溝際にビット2が掘削される。大畦の北3m程隔てたところに北側は不明瞭になるが大型の畦が確認される。この大畦と畦の間にはこれに直

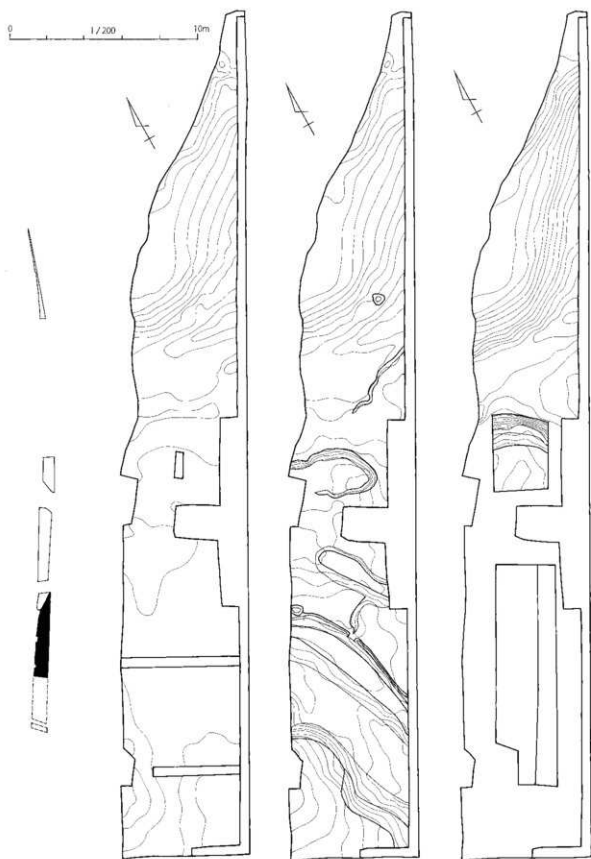


(富田宮田遺跡1区堆積層)

- 1：灰褐色土：現代の盛土。ビニール・種等含む。
- 2：暗褐色土：旧耕作土。混入物少なく、粘性弱くバサつく。
- 3：暗褐色土：As-B軽石全体下位ほど多く混入。2層より脆い。
- 4：赤灰褐色軽石層：As-B純層。層厚5～10cm程。北側台地上では確認できない。部分的に火山灰も確認される。
- 5：黒色土：As-B下水田耕作土。上位ほど黒く粘質。
- 6：灰褐色土：水田下のグライ化層。やや砂質臭味で粘性強い。全体に酸化傾向。

- 7：暗灰褐色土：6層より暗く、粘性かなり強い。砂質弱く、混入物少ない。
- 8：黒褐色粘質土：混入物少なく、かなり粘質。
- 9：暗褐色土：As-C多く混入する。下位ほど混入量多い。
- 10：白・赤褐色軽石層：As-C軽石の純層。部分的に良好な堆積。
- 11：黒色土：混入物なく、低地部ではかなり粘質となる。
- 12：黄灰色土：本図には含まれないが台地部に在る永生ローム。

第274図 1区東横断面図



第275図 1区2面(左)・3面(中)・4面(右)全体図

第6章 富田宮田遺跡で発見された遺構と遺物

するように3cmの段差があって東側が低くなっている。

畦の北側には長さ467cm、幅264cm、深さ9cmの窪地があり、その北側にピット1が見られる。

尚、上述の段差が水田区画を境するものと認識されるものの、明確な水田区画を確認することはできなかった。

4面 (As-C下面)

(第274図、第275図右、P.L.92)

概要 1区南部の北側ではAs-C下面を確認し、南側ではAs-C層、As-C混土層を確認できなかった

ため、下位層へのトレンチ調査を実施した。

また北側のAs-C下面に畦畔を確認することができなかったため、水田址になるか否かを特定することはできなかった。

遺物 南側の下位面での掘削で出土遺物が得られたが、第5面上の遺物包含層に属するため一括報告する。

時期 北側はAs-C下面であるため3世紀末以前と判断される。

規模 範囲：43.3×6.1m

構造 As-C下面は平坦で畦畔等は確認されなかった。

第3節 5面の遺構と遺物

旧河道 (第276～280図、P.L.92～95)

概要 4面での試掘の結果、1区南部に古い河道のあったことが確認された。安全確保のため、調査範囲を狭めて上位層では幅約3m、下位層では幅2mの範囲に限って調査を実施した。

この河道は大泉坊川の旧流路と認識されるが、藤岡大胡線西の富田大泉坊遺跡1区に確認されていないことから、同遺跡の1・2区間の市道下を通過して西に抜けているものと推察される。

また本河道は最終的には古墳時代にあって水路となっていたことが確認されるが、旧流路の覆土から漆を抽出することはできず、そのプランを確認することもできなかった。

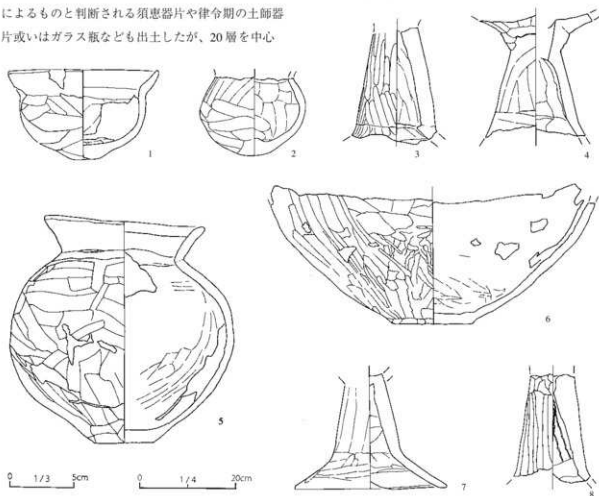
遺物 旧河道からは上位層裏の潜り込み或いは攪乱によるものと判断される須恵器片や律令期の土師器片或いはガラス瓶なども出土したが、20層を中心

に古墳時代前・中期の土師器や木製品や流木など、また下位層では縄文時代の遺物が出土している。の中には土師製の椀(旧河道-1)や埴・高坏(旧河道-3・4・7・8)・甕(旧河道-5)・壺(旧河道-6)の他、磨石や厚板材(旧河道9・10)の出土があった。

また縄文時代の遺物には礫石器(J1)、打裂石斧(J2・J3)や打裂石斧未成品(J4・J5)、剥片(J6・J7)、石皿(J8・J9)、磨石(J10・J11)、凹石(J12・J13)、多孔石(J14・J15)、台石(J16)があった。このうち石皿(J8)は最下層からの出土である。

時期 旧河道の覆土上位は古墳時代前・中期頃の遺物包含層であったが、下位層は出土遺物から縄文時代に遡るものと判断される。

規模 (全体) 長さ：2.2m 幅：19m以上



第276図 旧河道の出土遺物(その1)

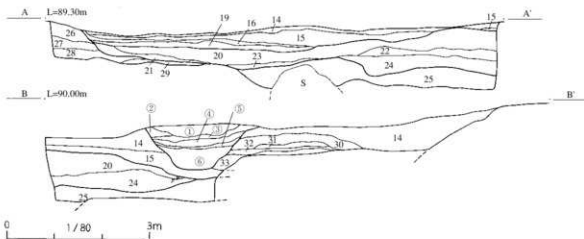
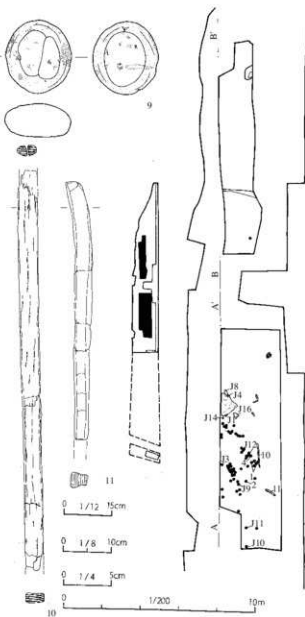
第6章 富田宮田遺跡で発見された遺構と遺物

(古墳時代と見られる A~C 降下後の溝覆土)

- ①: 黄灰色砂層: 黄灰色の砂で、黒褐色粘質シルトをわずかに薄く互層とする。
- ②: 暗褐色粘質土: 粘質土を主体とし僅かに砂を混在する。
- ③: 暗褐色粘質土: ②に近似するが、砂質ブロックを混入。
- ④: 暗褐色粘質土: 砂質が強く、部分的に砂層と粘質土が薄く互層になる。
- ⑤: 黒褐色粘質土: 混入物のない、粘性の強い土。
- ⑥: 暗灰色粘質土: 暗褐色粘質土と灰色系砂層との互層であるが、砂層が多く厚く砂質が強い。自然木を出土させる。

(旧河道覆土)

- 14: 黒色粘質土: 上面は凹凸があり水田面と考えられる。混入物なく、粘質が強い。
- 15: 灰色砂層: きめの細かい砂層である。
- 16: 黒褐色粘質土: 粘質がかなり強い。
- 19: 黒灰色砂質土: 黒色粘質土と灰色砂層の互層である。薄く7枚ぐらいの層を確認できる。
- 20: 黒褐色粘質土: 一部に砂層を有するが、黒褐色粘質土を主体とする。粘性がかなり強い。土器等の遺物出土させ、木製品・自然木等も多く出土している。
- 21: 明黒褐色粘質土: 黒褐色粘質土(20層)をベースとするが、砂質である。
- 22: 黒褐色粘質土: 20層より黒く、21層の砂質に近い。
- 23: 暗灰色砂質土: 灰色砂層をベースとし黒色粘質土を混在させる。かなり細かい砂層。
- 24: 黒灰色砂質土: 下位に礫や大粒砂粒堆積させ上位に23層的な細かい砂層と黒色粘質土を混在。自然木を出土する。
- 25: 黒色粘質土: かなり粘質が強い。自然木や縄文遺物出土させる。
- 26: 黒褐色土: 1~2mmほどの白色軽石混在させる。(微高地形成する、古墳時代以降の基盤層)
- 27: 灰色粘土: わずかに砂を混在させる。硬く締まっている。
- 28: 黒灰色粘質土: 黒色粘質土ベースに砂層薄く互層させる。
- 29: 灰色砂層: 砂層とし、縄文前期の土器(陶器)出土。
- 30: 灰色粘土: 27層に近似する。僅かに砂を混在させるが、硬く締まっている。
- 31: 灰色粘土: 30層よりも砂質となる。
- 32: 暗褐色粘質土: わずかに砂を混在させるが、締まっている。粘質。
- 33: 暗灰色砂質土: 15層に近似する。砂層を互層とする。

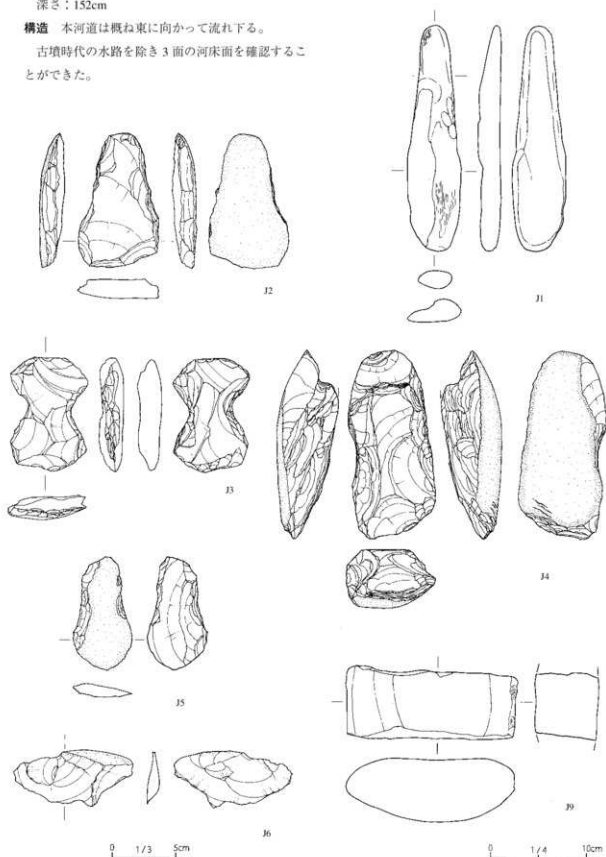


第277図 旧河道と出土遺物(その2)

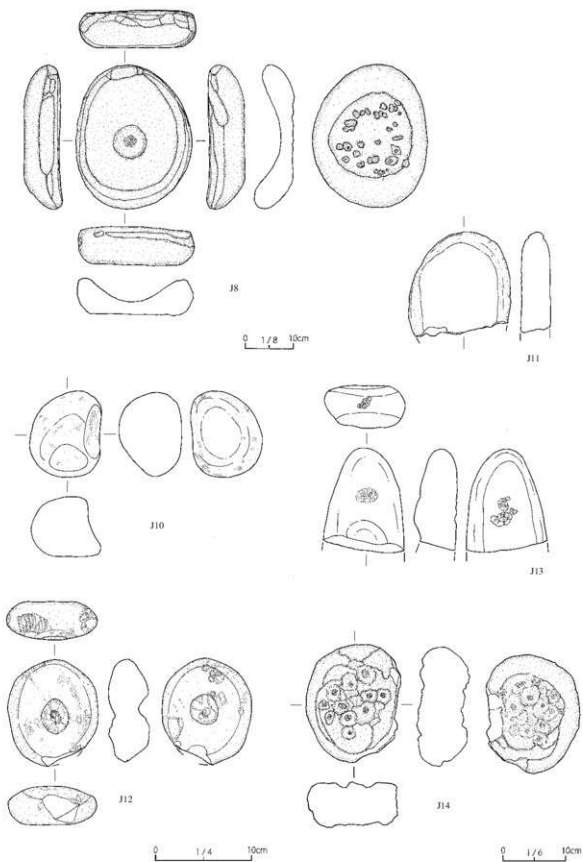
深さ：152cm

構造 本河道は概ね東に向かって流れ下る。

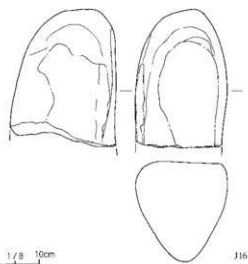
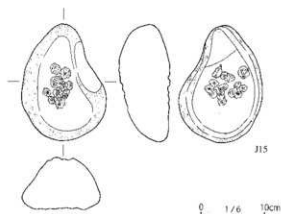
古墳時代の水路を除き3面の河床面を確認することができた。



第278図 旧河道の出土遺物（その3、縄文時代遺物）



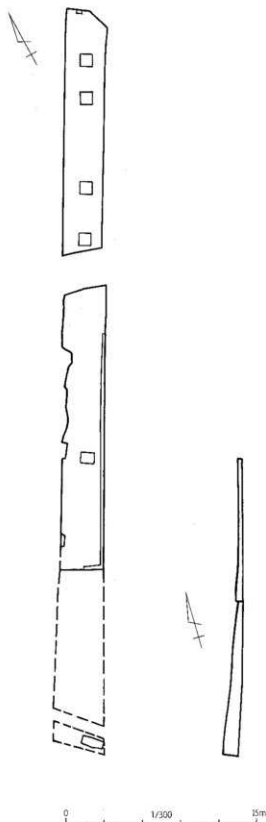
第279図の1 旧河道の出土遺物（その4、縄文時代遺物）



第279図の2 旧河道の出土遺物（その4、縄文時代遺物）

第4節 旧石器の試掘調査

本遺跡に於いては1面或いは2面終了時にグリッドに沿った調査区画を設定して旧石器の試掘調査を実施したが、当該時期の出土遺物を得ることはできなかった



第280図 旧河道の出土遺物（その5、縄文時代遺物）

第7章 富田宮下遺跡で発見された遺構と遺物

第1節 1面の遺構と遺物

本遺跡は県道藤岡大胡線の東側に在る。本遺跡のうち1区は国指定史跡女堀北の公道を南限とし、北側は途切れて、公道の北側に2区が在る。本遺跡は明瞭なローム台地上に立地している。

本遺跡は古墳時代以降の遺構、遺物が発見された1面と、旧石器の試掘調査に伴って発見された旧石器及び旧石器から縄文時代早期に至る遺物包含層の2面とからなる。

1区に於いては近代までは黒く土などの堆積があったようであるが、戦後の土木工事によって大きく削平されたことが地元住民の証言で確認された。発掘調査による掘削の結果、これを裏付けるように表土の直ぐ下はローム漸移層或いはローム層土が表出していた。このため古墳時代前、中期の住居が失われたようである。

一方北側の2区は削平が著しく、全く遺構を確認することができなかった。このため、遺構確認作業の後、1面の調査を直ぐに終え、下位面の調査に移っている。

1号住居（第282・283図、P.L.95・96・101）

概要 本住居は1区中部の南寄りに位置している。西側は擁壁が築造されていて調査ができず、南側は削平されて失われているため住居の東側のうち中・北部を調査できたに過ぎなかった。

本住居は1号溝と重複しこれを切っているが、本住居の覆土と1号溝覆土の区別がつけられなかったため、北端部は不明瞭な状態で形状等を明らかにすることはできなかった。

遺物 本住居からは古墳時代前期或いは律令期の土師器片を中心に調査面積に対して比較的多くの出土遺物が得られた。この中には土師器瓶(1)、須恵器高台付碗(2)、竈構茶材と見られる土製品(5)が見られた。また竈材に使用された礫(4)にはハツ

リによる調整痕が確認された。

時期 本住居の時期を明確にすることはできなかったが、須恵器高台付碗の時期から凡そ10世紀中葉頃の所産と認識される。

規模 径：(100)×(199)cm

深さ：53cm

(竈) 幅：(50)cm

奥行き：102cm

竈掘り方

径：66×(82)cm

深さ：16cm

(柱穴)か

径：(23)×31cm

深さ：46cm

(床下土坑)

径：44×64cm

深さ：26cm

構造 上述のように本住居はその一部を調査できたに過ぎなかったため、全容を詳らかにすることはできなかったのであるが、そのプランは概ね隅丸形状になるものと思慮される。

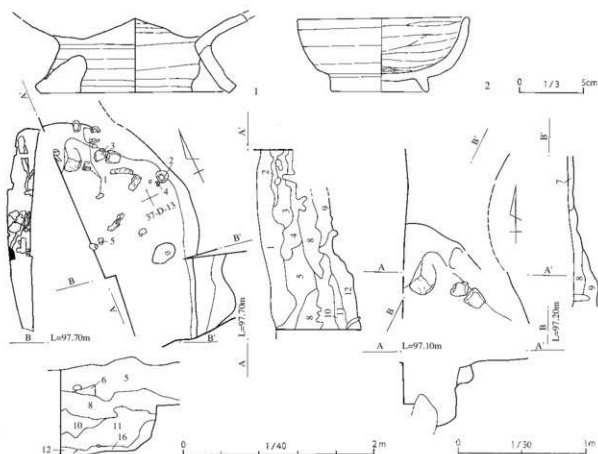
本住居は南寄りに床下土坑を持つ掘り方を有しており、これを灰褐色土等の土壌で埋め戻して床を作り、ロームの入るにふい黄褐色土で貼床を貼っている。

竈は北壁の東端近くに設



0 1/800 30m

第281図 富田宮下遺跡1面全体図



(表土・堆積層)

- 1: にぶい黄褐色土 (10YR5/3); 表土, As-A (か) 混入。小礫若干入る。小屋のコンクリートたたき下位の土。粘性欠。
- 2: にぶい黄褐色土 (10YR 4/3); As-A 少量混入。粘性欠。
- 3: 褐色土 (10YR4/4); 細礫と明黄褐色ローム粒 (10YR6/8) 若干混入。粘性欠。
- 4: 褐色土 (10YR4/6); 細礫と明黄褐色ローム粒 (10YR6/8)、黒褐色土 (10YR3/2) 若干混入。粘性欠。
- 5: にぶい黄褐色土 (10YR5/4); 若干の明黄褐色ローム粒 (10YR6/8) と微量の炭化物混入。粘性やや欠。
- 6: にぶい黄褐色土 (10YR6/4); 若干の明黄褐色ローム粒 (10YR6/8)・炭化物粒混入。粘性弱。
- 7: 灰黄褐色土 (10YR4/2); 黒色土粒 (10YR3/2) と若干の黄褐色ローム (10YR6/4) 混入。粘性やや欠。
- 8: にぶい黄褐色土 (10YR5/3); 明黄褐色ローム粒 (10YR6/5); 軽

石 (As-B か) と若干の黒色土小ブロック (10YR3/2) 含む。粘性ややあり。

(住居覆土)

- 9: 黒褐色土 (10YR3/2); 明黄褐色ローム粒 (10YR6/8)・明赤褐色土粒 (1.5YR5/8)。As-C を混入する。粘性ややあり。
- 10: 9層に似るが粘土含まず。他の混入物多し。
- 11: 暗褐色土 (10YR3/3); 小礫と As-C、明黄褐色ローム粒若干混入。粘性ややあり。黄色土 (10YR3/2) 若干の炭化物、小ブロック混入。粘性ややあり。
- 12: 暗褐色土 (10YR3/3); 11層に比し明るい。明黄褐色ローム粒・細礫・炭化物細粒やや多く含む。粘性ややあり。
- 16: にぶい黄褐色土 (10YR5/3) と黒色土 (10YR3/1 ~ 3/2) のブロック混入; 若干の明黄褐色ローム粒 (10YR6/6) 混入。粘性あり。

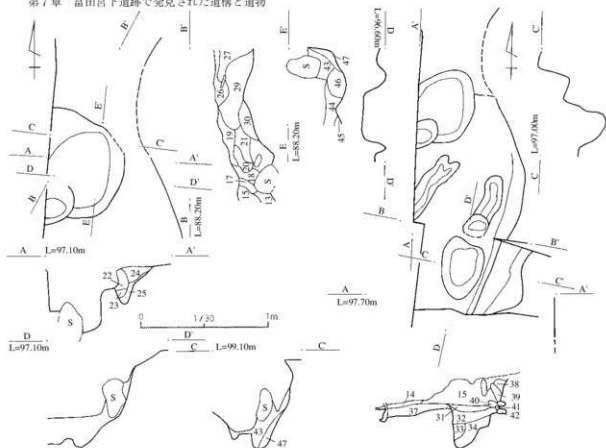
第282図の1 1号住居・竈及び出土遺物 (その1)

けられている。壁面を跨いで楕円形プランの掘り方を掘削し、これを褐色土等で埋め戻して燃焼面を作り出している。燃焼部周囲の奥壁には礫を立て、黒褐色土等を用いて燃焼部内側を作っている。袖土上部の構造は確認できなかったが、灰褐色土と明黄褐

色土で天井を作っている。

また床面に於いても掘り方面に於いても貯蔵穴を確認することはできなかったが、竈掘り方の南西隅にピットが確認され、これが柱穴になる可能性を有している。

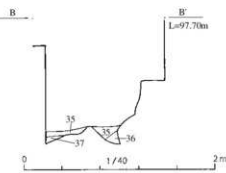
第7章 富田宮下遺跡で発見された遺構と遺物



(柱穴覆土か)

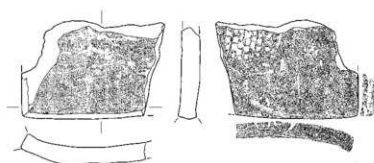
- 31: 褐色土 (7.5YR4/1); 黒褐色土とに
 ぶい黄褐色ローム粒混入。粘性やや弱。
 32: にぶい黄褐色土 (10YR5/3); 点線の左
 に黒褐色土右ににぶい黄褐色ロームの小
 ブロックやや多く混入。粘性やや弱。
 33: 黒褐色土 (10Y3/1); 灰黄褐色土小ブ
 ロック多く混入し、若干の明黄褐色ロ
 ーム小ブロック混入。粘性やや弱。
 34: にぶい黄褐色ローム (10YR6/4); 黄
 褐色土小ブロック混入。粘性やや弱。
 (周溝覆土)
 36: 灰黄褐色土 (10YR5/2); にぶい黄褐色
 ローム小ブロック混入。粘性やや弱。
 (胎床構築土)
 14: にぶい黄褐色土 (10YR5/3); 明黄褐色
 ローム小ブロック混入。粘性あり。
 35: にぶい黄褐色土 (10YR4/3) と黒褐色
 土 (10YR3/1) の混土; にぶい黄褐色
 ローム小ブロック混入。粘性あり。
 (住居掘り方覆土)
 15: 灰褐色土 (7.5YR4/2); 橙色焼土粒と
 明黄褐色ローム細粒やや多く含む。炭化
 物若干入る。粘性やや弱。
 37: にぶい黄褐色土 (10YR4/3); 黒褐色土
 とにぶい黄褐色ロームの小ブロックを混
 入する。粘性あり。
 (掘り方)
 38: 褐色土 (7.5YR4/1); 上位中心に明赤

- 褐色土粒混入し、明黄褐色ロ
 ーム粒若干混入。粘性やや弱。
 39: にぶい黄褐色土 (10YR5/4); 明
 黄褐色ローム小ブロック若干混入
 し、僅かの黒褐色土小ブロック含
 む。粘性あり。
 40: 黒褐色土 (7.5YR3/1); にぶい黄
 褐色ロームと少量の明赤褐色土
 粒混入。粘性やや弱。
 41: にぶい黄褐色土 (10YR5/4); 黒
 褐色土粒と明黄褐色ロームの小ブ
 ロック混入。粘性弱。
 42: 黒褐色土 (7.5YR3/1) とにぶい黄褐色
 ローム (10YR4/4) の混土; 粘性弱。
 43: 黒褐色土 (7.5YR3/1); にぶい黄褐色
 土小ブロック多く、若干の黄褐色ブ
 ロックと橙色焼土ブロック含む。粘性やや弱。
 44: 褐色土 (10YR4/4); 黒褐色土ブ
 ロックと若干の明赤褐色土ブ
 ロック混入。粘性やや弱。
 45: 明黄褐色ローム (10YR6/4); にぶい黄
 褐色ローム小ブロック若干黒褐色土小ブ
 ロック混入。粘性やや弱。
 46: 灰黄褐色土 (10YR4/2); 黒褐色土小ブ
 ロックと少量の黒色粒と黄褐色ロ
 ーム小ブロック混入。粘性やや弱。
 47: 明黄褐色ローム (10YR6/8); 1層土
 の小ブロックを上位に若干混入する。粘性



- やや弱。
 (1号溝覆土)
 26: にぶい黄褐色土 (10YR5/3); A-Cと黒
 褐色土小ブロック混入。粘性やや弱。
 27: 褐色土 (7.5YR5/2); 層上面より 15
 cm程を境にして下平中心に黒褐色土、
 にぶい黄褐色ローム・黄褐色土ブ
 ロック多く混入。粘性やや弱。
 29: にぶい黄褐色土 (10YR5/4); 黒褐色土
 と明黄褐色ロームの大ブロックやや多
 く含む。粘性やや弱。
 30: オリーブ褐色土 (2.5Y4/3) と黒褐色
 土 (10YR3/2) と明黄褐色ローム (10Y
 R6/6) ブロックの混土。

第282図の2 1号住居掘り方及び掘り方



時期 出土遺物から本住居は5世紀前半頃の所産と見られる。

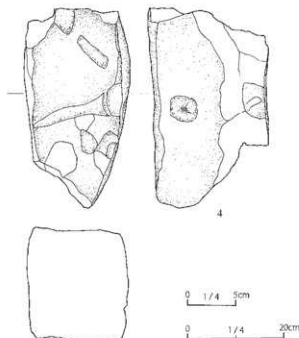
規模 径：378×317cm

深さ：(14)cm

構造 上述のように本住居は掘り方のみが確認できたに過ぎなかったため、全容は不明である。

プランはやや不明瞭だが、東西に長い隅丸方形を呈するものと思慮される。

貯蔵穴、柱穴を確認することはできなかった。



第283図 1号住居出土遺物(その2)

2号住居 (第284図、P L 96・101)

概要 本住居は1区中程に位置する竪穴住居跡である。本住居の上位は大きく削平されていて、遺存状態は不良であり、僅かに掘り方を確認できたに過ぎなかった。

本住居は1・2号溝と重複しており両溝に切られている。

遺物 本住居からは視乱によると見られる焙烙鍋等の出土も見られたが、中心となる出土遺物は古墳時代前・中期の土師器片であり、この中には土師器高坏(1・2)が見られた。尚、重複する1号溝出土遺物の中にも、本来本住居に属していた遺物が含まれるものと思慮される。

1号溝 (第285・286図、P L 96)

概要 本溝は1区中部に位置する。

南側は1号住居と、やや南寄りで2号溝と重複しており、またやや北寄りで1号風倒木痕と6号土坑と重複して5.8m程途絶えている。本溝は何れの遺構にも切られている。

その形状と位置から推して本溝は後述の4号溝と同質であり、同溝とは不連続であるが一連のものとして判断している。

本溝は人為的掘削溝としては規格性に乏しく、またその形状から推して地割れ痕と判断した。

遺物 本溝からは量的にはあまり多くの出土遺物は得られなかったが、弥生土器や古墳時代から律令期にかけての土師器片、石器剥片の出土が見られた。この中には土師器の鉢(1)・埴(5)・高坏(3)・甕(4)や、土師器の高坏か器台の脚部(2)など、4世紀から5世紀所産の出土遺物が得られた。

時期 本溝(地割)の形成時期は特定できないが、周辺地での地震記録に照らして弘安9(818)年の地震によるものと想定される。

規模 長さ：17.5m(中断部分は除く)

幅：30～85cm 深さ：72cm

構造 本溝は凡そ北北東-南南西方向に走行しているが、蛇行するプランを見せている。幅員は一部を除き約30cm幅でほぼ一定している。

横断面形態はV字或いは蕨研状を呈する。底面は凹凸が激しく一定していない。

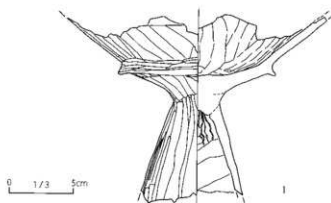


(1号溝覆土)

- 1: にぶい黄褐色土 (10YR5/3); 2・3層土ブロックと少量の黄褐色ローム小ブロック (10YR7/6) 混入。粘性や欠。
- 2: にぶい黄褐色土 (10YR4/3); 若干の明黄褐色ローム粒 (10YR6/8) と微量の小礫含む。粘性やや欠。
- 3: 黒褐色土 (10YR3/2); 若干のAs-Cと少量の1層土小ブロック混入。粘性やや欠。
- 4: 明黄褐色ローム (10YR6/8) ブロック層; 1~3層土ブロック多く混入。粘性やや欠。

(2号溝覆土)

- 5: にぶい黄褐色土 (10YR4/3); 明黄褐色ローム粒 (10YR6/8) と微量のAs-C混入。粘性欠。
- (2号住居掘り方覆土)
- 6: 灰黄褐色土 (10YR4/2) と明黄褐色ローム (10YR6/8) の混土; 黒褐色土 (10YR3/2) ブロック混入。粘性欠。
- 7: 黒褐色土 (10YR3/2); 明黄褐色ローム粒 (10YR6/8) 混入。
- 8: 黄褐色ローム (2.5Y5/4) とにぶい黄褐色土 (10YR5/3) のブロック混土; 明黄褐色ローム (10YR6/8) と黒褐色土 (10YR3/2) の小ブロックと若干のAs-C混入。粘性欠。
- 9: 黒褐色土 (10YR3/2) と明黄褐色ローム (10YR6/8) のブロック混土; 明黄褐色ローム粒 (10YR6/8) 小ブロック混入。粘性欠。
- 10: 灰黄褐色土 (10YR5/2); 黒褐色土 (10YR3/2) 入るブロック混土; 少量の明黄褐色ローム細粒 (10YR6/8) とAs-C混入。粘性やや欠ける。
- 11: 灰黄褐色土 (10YR5/2) と明黄褐色ローム (10YR6/8) のブロック混土; 若干の黒褐色土小ブロック (10YR3/2) 混入。粘性やや欠ける。
- 12: 黄褐色土 (10YR5/6) と灰黄褐色土 (10YR5/2) のブロック混土; 黒褐色土ブロック (10YR3/2) とAs-C若干混入。粘性やや欠ける。
- 13: 黄褐色ローム (2.5Y5/4); 極少量の灰黄褐色土粒 (10YR4/2) とAs-C混入。粘性欠。
- 14: 明黄褐色ローム (10YR6/6) と灰黄褐色土 (10YR5/2) のブロック混土。粘性欠。
- 15: にぶい黄褐色土 (10YR4/3); As-Cと若干の3層土ブロック、明黄褐色ローム粒・細粒 (10YR6/8) 混入。微量の焼土粒混入。粘性やや欠ける。

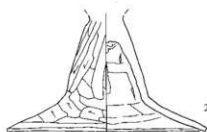


第284図 2号住居(掘り方)と出土遺物

2号溝 (第287図, P.L.96)

概要 本溝は1区中部に在って、そのやや南寄りに位置している。

2号住居及び1号溝と重複しているが、何れに対しても本溝の方が新しい。



尚、本溝の掘削意図を特定することはできなかった。

遺物 本溝では古墳時代前・中期の土師器壺片3点と壺片9点、律令期頃の須恵器坏片3点を出土したが、特に図示すべきものは見られなかった。

時期 本溝の時期を特定することはできなかったのであるが、覆土にAs-Aを含むことから近世後期以降の所産と判断される。

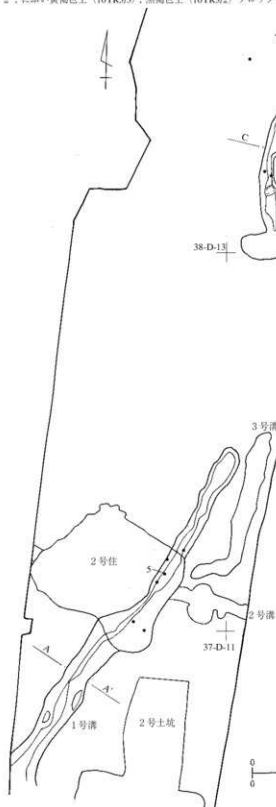
(A-A)

(1号溝覆土)

- 1: にぶい黄褐色土 (10YR5/4); 黒褐色土 (10YR3/2) 小ブロックとやや多くの黄褐色ローム粒 (10YR7/8) 混入。粘性やや欠
2: にぶい黄褐色土 (10YR5/3); 黒褐色土 (10YR3/2) ブロックと

若干の黄褐色ローム粒 (10YR7/8) 混入。粘性やや欠。

- 3: 黒褐色と (10YR3/2); にぶい黄褐色ローム (10YR6/4) 小ブロック混入。ロームの一部は植物直か。粘性やや欠。
4: 黒褐色土 (10YR3/2); 黒褐色土 (10YR3/2) ブロック混入。
5: 黄褐色ローム (2.5Y5/4) にかぶる黄褐色ローム粒 (10YR6/4) 入る。崩れやすく、粘性欠。



(B-B')

(1号溝覆土)

- 1: にぶい黄褐色土 (10YR4/3) とにぶい黄褐色土 (10YR6/4) の小ブロック混入; A^sC 又は A^sB やや多く混入。粘性ややあり。
2: 黒褐色土 (10YR3/2) とにぶい黄褐色土 (10YR6/4・10YR5/3) 層土のブロック混入。粘性ややあり。
3: にぶい黄褐色土 (10YR6/4); A^sC と若干の灰黄褐色土 (10YR4/2) 小ブロック混入。粘性やや欠。
4: 明黄褐色 (10YR6/6) ロームににぶい褐色土 (10YR5/3) 入る小ブロック混入。粘性やや欠。

(C-C')

(1号溝覆土)

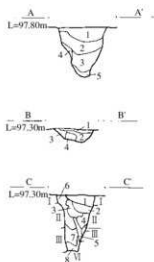
- 1: 暗褐色土 (10YR3/3) とにぶい黄褐色土 (10YR5/4) のブロック混入; 少量の A^sC 含む明黄褐色ローム (10YR3/2) 混入。粘性やや欠。
2: 黒褐色土 (10YR3/2) とにぶい黄褐色土 (10YR5/4) のブロック混入; 明黄褐色ローム小ブロック (10YR6/8) 少量混入。粘性やや欠。
3: 暗褐色土 (10YR3/3) にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 入るブロック混入; A^sC と少量の明黄褐色ローム (10YR6/8) 混入。粘性ややあり。
4: 2層に似るが混入物僅かでブロック径大きい。
5: 黒褐色土 (10YR3/2); にぶい黄褐色土小ブロック (10YR5/3) と明黄褐色ローム粒, A^sC 少量混入。植物の根成いは枝の痕跡の可能性あり。粘性やや欠。

- 6: 灰黄褐色土 (10YR5/2); 下位中心に入る明黄褐色ローム (10YR6/6) ブロック層; 黒褐色土ブロック (10YR3/2) 若干混入。粘性あり。
7: 黄灰色土 (2.5Y4/1) とにぶい黄褐色土 (10YR5/3) のブロック混入; 若干の明黄褐色ローム (10YR6/6) 混入。粘性あり。

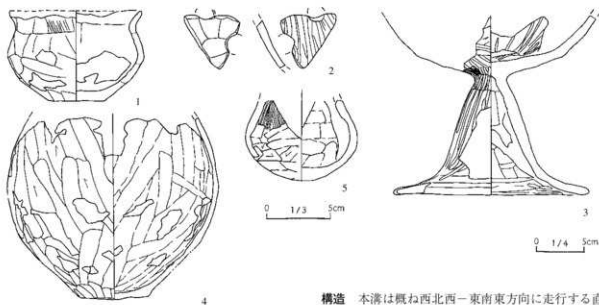
- 8: 黄褐色土 (2.5Y5/4) とにぶい黄褐色土 (10YR5/3) のブロック混入; 若干の黒褐色土 (10YR3/2) 小ブロック入り。粘性あり。

(地山層)

- I: にぶい黄褐色土 (10YR3/3)
II: 黄褐色ローム (10YR11/8); A^s-YP か混入。
III: 明黄褐色ローム (10YR6/6)。
VI: にぶい黄褐色ローム (10YR5/4)。



第285図 1号溝



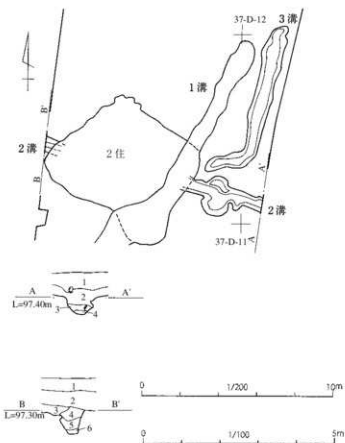
第286図 1号溝出土遺物

規模 長さ：6.1m 幅：34～106cm

深さ：14cm

構造 本溝は概ね西北西-東南東方向に走行する直線のプランを呈する。一部影らむ箇所があるが、幅員はほぼ一定している。

掘削形態は箱筒状で底面の横断面形はU字形を呈する。



第287図 2・3号溝

(A-A')

(溝埋没後の土層)

1：にぶい黄褐色土 (10YR4/3)；As-C 入る。粘性ややあり、締まる。表土。

(2号溝覆土)

2：黒褐色土 (10YR3/2)；明黄褐色ローム (10YR6/8)

粒少量含む。微量の炭化物粒・As-C 入る。粘性ややあり。

3：黒褐色土 (10YR3/1)；明黄褐色ローム (10YR6/8)

ブロック多く混入。粘性やや欠。

4：黒褐色土 (10YR3/1) 入る明黄褐色ローム (10YR6/6)

とにぶい黄褐色土 (10YR5/4) の小ブロックの混土。粘性ややあり。

(B-B')

(溝埋没後の土層)

1：にぶい黄褐色土 (10YR4/3)；As-C 入る。粘性ややあり、締まる。表土。

2：黒褐色土 (7.5YR3/2)；As-B 混入。粘性ややあり。

3：暗褐色土 (10YR3/3)；As-B 少量混入。粘性ややあり。

(2号溝覆土)

4：黒褐色土 (10YR3/2)；若干の As-C とにぶい黄褐色土 (10YR5/3) 小ブロック混入。粘性やや欠。

5：黒褐色土 (10YR3/2) に黒色土 (10YR2/1) 小ブロックと明黄褐色ローム (10YR6/6) の小ブロックの混土。粘性やや欠。

6：黒褐色土 (10YR3/1) 入る明黄褐色ローム (10YR6/6)

とにぶい黄褐色土 (10YR5/4) の小ブロックの混土。粘性ややあり。

3号溝 (第287図、P.L.96)

概要 本溝も1区中部のやや南寄りに位置する。

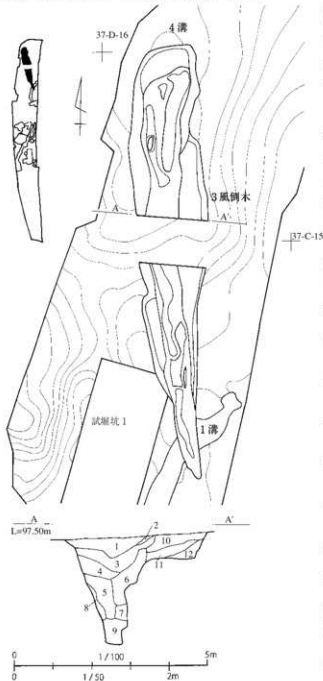
他遺構との重複は見られなかった。

本溝の掘削目的も特定できなかった。

遺物 本溝からの出土遺物は得られなかった。

時期 本溝の時期は特定できなかったが、2号溝に近いものと認識している。

規模 長さ:4.9m 幅:30から60cm 深さ:



第288図 4号溝と3号風倒木

12cm

構造 本溝は北北東-南南西方向で直線的に走行し、南端部でく字状に屈曲して西方に走行を転じている。

掘削形態は箱型状を呈するが、底面の横断面形はU字形を呈する。

4号溝

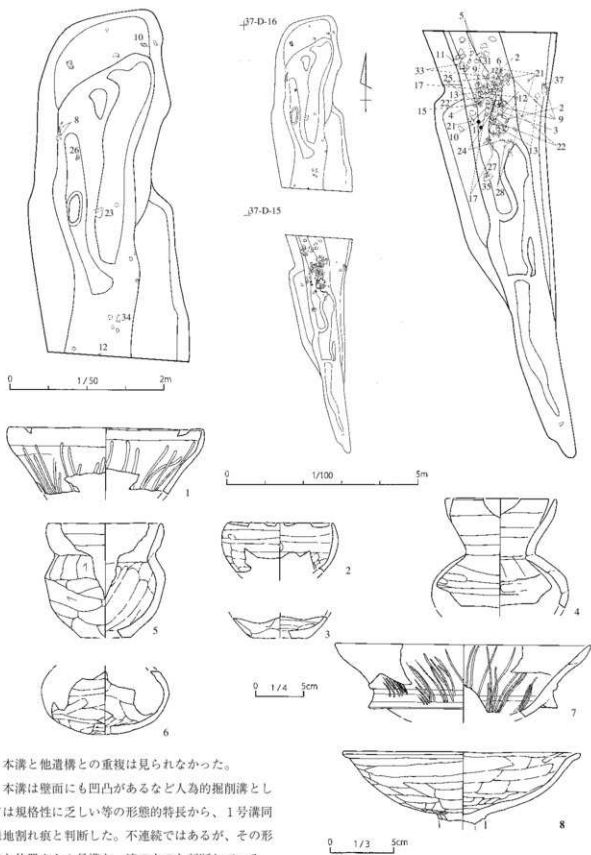
(第288～292図、P.L.96・97・101～103)

概要 本溝は1区北部に位置する。本溝の北側は調査区外に出ていて調査することができなかった。また中程は使用中の配管が在って125cmの間も掘削することができなかった。

この配管の北側から掘削を開始したが古い風倒木痕(3号風倒木)と重複していたため、暫くの間3号風倒木として調査を行っていたため、注記等に3号風倒木と記されたものもあるが、出土遺物と溝構造に関しては、本溝に属するものである。

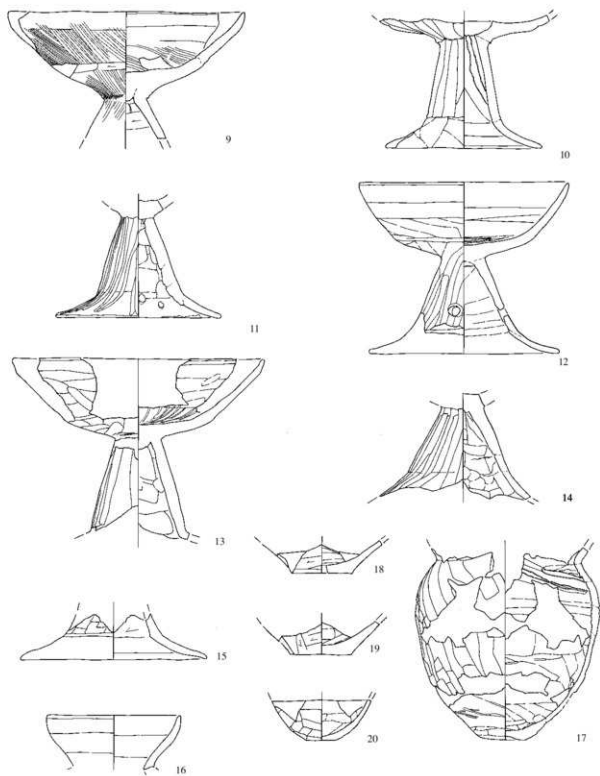
(4号溝覆土)

- 1: 灰黄褐色土 (10YR4/2): にぶい黄褐色ローム (10YR6/4) 小ブロック若干混入。粘性ややあり。
 - 2: 黒色土 (10YR2/1) 入るにぶい黄褐色土 (10YR6/3) のブロック混土: 黄褐色ローム小ブロック (10YR7/8) 混入。粘性弱。
 - 3: 黒色土 (10YR2/1) 入る黒褐色土 (10YR3/2) ブロック混土。にぶい黄褐色 (10YR6/4) と明黄褐色 (10YR6/6) のローム小ブロック混入。粘性ややあり。
 - 4: 灰黄褐色土 (10YR5/2) と明黄褐色ローム (10YR7/6) のブロック混土: 若干の黒褐色土 (10YR3/1) 小ブロック混入、黄褐色ロームブロック (10YR7/8) も若干入る。粘性弱。
 - 5: 黒色土 (10YR2/1) と灰黄褐色土 (10YR4/2) のブロック混土: 上位に黄褐色ロームブロック僅かに入る。粘性弱。締まり多少欠。
 - 6: 灰黄褐色土 (10YR6/2): 黒色土 (10YR2/1) と黄褐色ローム (10YR2/1) と黄褐色ローム (10YR7/8) ブロック若干混入。粘性ややあり。締まり多少弱。
 - 7: 灰黄褐色土 (10YR5/2): 黒色土 (10YR2/1) と黄褐色 (10YR7/8) ロームブロック、若干のにぶい黄褐色ロームブロック (10YR6/4) 混入。粘性やや弱。締まり弱。
 - 8: にぶい黄褐色ローム (10YR6/4) と黒色土 (10YR2/1) のブロック混土。粘性ややあり。締まり弱。
 - 9: にぶい黄褐色土 (10YR5/3) に灰黄褐色土 (10YR4/2) 入るブロック混土。粘性あり。締まりやや弱。
- (3号風倒木覆土)
- 10: 明黄褐色ローム (10YR6/6): 粘性弱。
 - 11: 明黄褐色ローム (10YR6/6) のロームと黄褐色ローム (10YR7/8) のブロック混土: As-SP 混ローム含む。粘性ややあり。
 - 12: にぶい褐色土 (10YR5/3): 僅かにAs-SP 混入。この層の下位にAs-SP 混のロームがある。粘性弱。



本溝と他遺構との重複は見られなかった。
 本溝は壁面にも凹凸があるなど人為的掘削溝としては規格性に乏しい等の形態的特長から、1号溝同様に割れ痕と判断した。不連続ではあるが、その形状と位置から1号溝と一連のものと判断している。
遺物 本溝には上位層からの攪乱によるものと見ら

第289図 4号溝遺物出土位置図と出土遺物(その1)

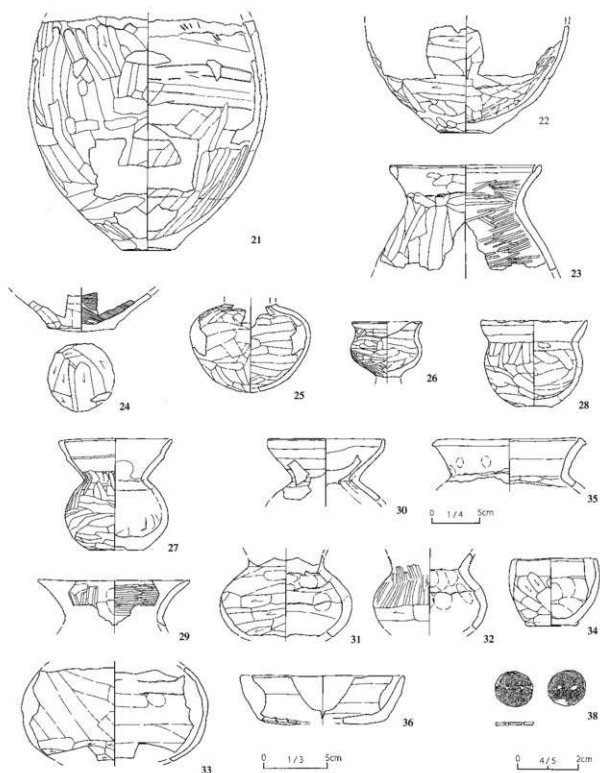


0 1/3 5cm

0 1/4 5cm

第290図 4号溝出土遺物(その2)

れる焙烙鍋等の出土もあったが、中心を成すのは弥生時代から古墳時代中期にかけての弥生土器片や土師器片であり1,300点を上回る出土遺物が得られた。この中には土師器の椀(1)・鉢(2)・小型壺(3・5)・埴(4・6)・高坏(7~16)・甕(17~20)・壺



第291図 4号溝出土遺物（その3）

(21～24)・小型壺 (25・31～33)・小型台付壺
(26)・小型壺 (27～30)、手握土器 (34)、土師
器環 (36)、陶器埴埴 (37)、鏡形石製模造品 (38)

の出土があり、その殆どが4・5世紀所産のものであった。縄文時代の出土遺物は第2節に一括掲載したが尖頭器 (J1)・撥形石器 (J4)も本溝からの出

土遺物である。

時期 本溝（地割れ）の形成時期は不明だが、周辺地での地震記録に照らして弘安9（818）年の地震によるものと判断される。

規模 長さ：13.1m（中断部分を除く） 幅：186cm 深さ：277cm

構造 本溝は概ね南北方向に走行するが、南端部では走行を若干東方に振っている。船形の直線的なプランを呈する。

掘削形態は箱堀状であるが、南に下るに従って狭くなり、壁面にも凹凸が見られる。最南部は切先状に立ち上がっている。

1号井戸（第293図、P.L 97・103）

概要 本井戸は1区中部に位置している。1面では確認できなかったが、2面の調査途中で確認することができ掘削調査を実施した。

確認層位に於いて本井戸と他の遺構との重複は見られなかった。

湧水層は底面から60～100cmの暗灰色軽石混じりの火山灰砂層であり、この付近にアグリが形成されている。

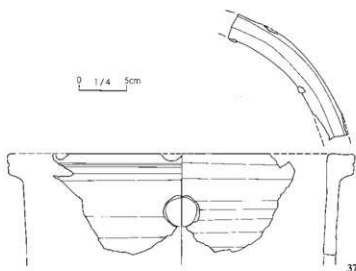
遺物 本井戸からは内耳鍋片1点や古式土師器6点が出土した他、横樋（1）といった木製品や、井戸埋設時の井戸神の息抜きを目的としたと見られる節を抜いた真竹（2）の出土が見られた。

時期 本井戸は上位の径が小さいため近世の可能性が考慮されるものの、その時期を特定することはできなかった。

規模 径：70×68cm 深さ：503cm

構造 本井戸のプランは上位では円形を呈し、底面では楕円形を呈する。

掘削形態は井筒型であるが、上位は極めて狭く、80cm以下では90～100cm程と若干広くなっている。また確認面から40cm程のところの東側壁面に



第292図 4号溝出土遺物（その4）

足掛け跡が確認されている。

アグリは底面から40～13cmの間に形成され、奥行きは10～50cm程を測る。

1面の土坑群（第294図、P.L 98）

概要 本遺跡に於いては1区中部南寄りに1～3号土坑、中部に4号土坑の4基の土坑を確認、調査した。このうち1・3・4号土坑は東側が調査区外に出ており、2号土坑は試掘トレンチによって中程を壊したため全容を確認することはできなかった。

このうち1・3号土坑は重複関係にあり、1号土坑の方が新しい。3号土坑は2基の土坑の重複である可能性を有し、2号土坑は掘り直しの痕跡が確認され、4号土坑は小型の溝遺構を切っている。

何れも掘削意図は特定できなかったが、その形状から貯蔵穴の可能性を有している。

遺物 1号土坑からは陶磁器片3点や内耳鍋片1点、古式土師器片2点を、2号土坑からは陶器片1点、軟質陶器片2点、古式土師器片と石器剥片各1点を、4号土坑からは陶磁器片8点、内耳鍋片1点、須恵器片1点、土師器片3点と古式土師器片4点の出土を見たが、特に図示すべきものは見られなかった。

時期 4基の土坑の時期は凡そ中世以降で近・現代



に下る可能性も考慮されたが、時期を特定には至らなかった。

規模 第11表

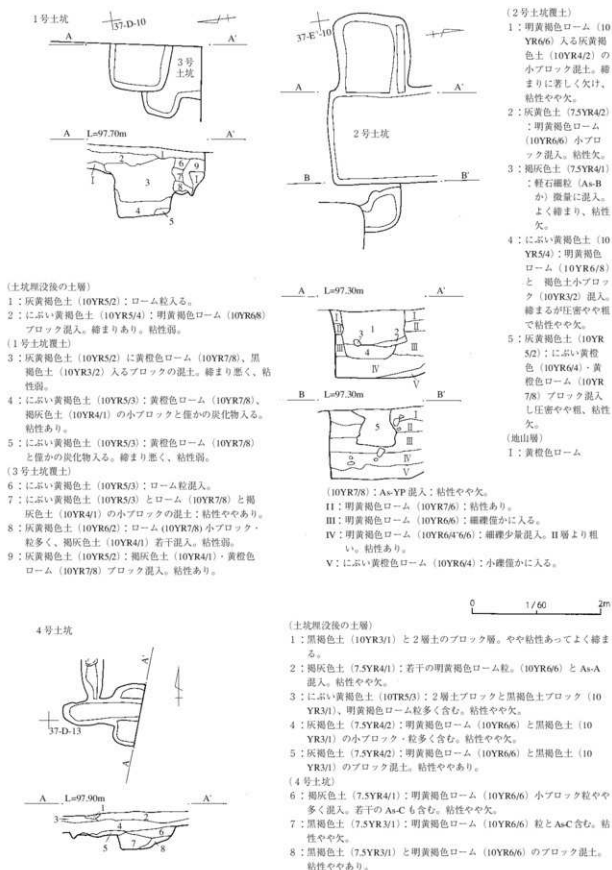
構造 1・4号土坑は長方形プランを呈すると見られ、2号土坑は長方形プランを呈する。3号土坑は靴形を呈するが、長方形プランの2基の土坑の重複である可能性が高い。

掘削底面は1号土坑が丸底を呈する以外は平底であった。

第293図 1号井戸と出土遺物 (その1)

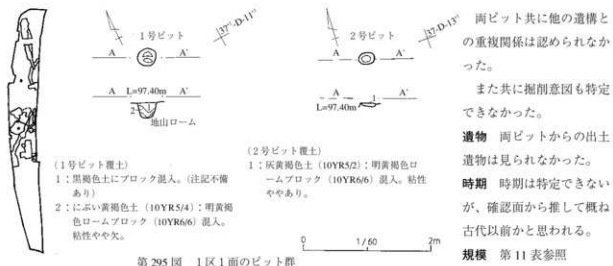
1面のピット群 (第295図、P.L.98)

概要 1号ピットは1区中部のやや南寄りに、2号ピットは1区中部のやや北寄りに確認された。両ピ



第294図 1区1面の土坑群

第7章 富田宮下遺跡で発見された遺構と遺物



第295図 1区1面のビット群

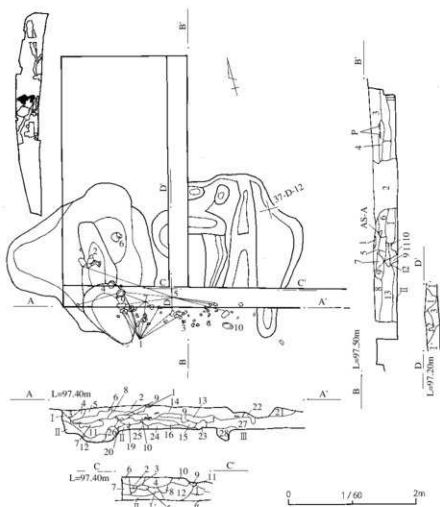
ット共に1面よりやや確認面を下げた時点で確認、調査した。

2号ビットは楕円形のプランを呈する。

掘削底面は1号ビットは丸底で、2号ビットは平底である。

(A-A')

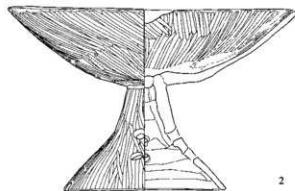
- 1: 明黄褐色ローム (10YR6/6)
- 1': 明黄褐色ローム (10YR6/8) 粘性やや弱い。
- II: にぶい黄褐色ローム (10YR6/4): 明部分的に黄褐色ローム混入。
- III: 黄褐色ローム (10YR7/6)。
- 1: 黒褐色土 (10YR3/2): As-A 混入。
- 2: にぶい黄褐色土 (10YR5/4): As-A と明黄褐色ローム粒含む。
- 3: 黒褐色土 (10YR3/2) とにぶい黄褐色ローム (10YR6/5) のブロック混土: As-A 混入。
- 4: 灰褐色土 (7.5YR5/2) と明黄褐色ローム (10YR6/6) 層土のブロック混土: As-A 若干混入。
- 5: 灰褐色土 (7.5YR5/2): As-A 若干混入。粘性弱。
- 6: 灰黄褐色土 (7.5YR5/2): 明黄褐色・にぶい黄褐色ローム小ブロックとやや多くのAs-A含む。
- 7: 黒褐色土 (10YR3/1): にぶい黄褐色小ブロックとAs-A 混入。
- 8: 灰褐色土 (10YR5/2): As-A 混入。
- 9: As-A: 純層。
- 10: にぶい黄褐色土 (10YR5/4) とAs-Aの混土。
- 11: 灰黄褐色土 (10YR5/2): 黒褐色土 (10YR3/2) と明黄褐色 (10YR6/6) ・にぶい黄褐色 (10YR6/4) ロームのブロック混土。
- 12: 灰黄褐色土 (10YR5/2)。
- 13: にぶい黄褐色土 (10YR6/4)、灰白色土 (10YR7/2) の小ブロック混土。
- 14: にぶい黄褐色土 (10YR6/4) と灰白色土 (10YR7/2) の小ブロック混入。粘性ややなし。
- 15: 明黄褐色 (10YR6/6) ・にぶい黄褐色・明黄褐色ローム (10YR6/8)



第296図の1 1号風倒木

表11 富田宮下遺跡土坑・ピット一覧

No.	径	深さ	平面形状	掘削形状	位置	遺物	備考
土坑							
1	174×99	53	長方形	丸底	1区	3号土坑切る	
2	342×116	81	長方形	平底	1区	掘り直し	
3	112×92.4	21	楕円形	平底	1区	1号土坑に切られる	
4	145	99	25 長方形	平底	1区	小孔溝切る	
ピット							
1	29×28	27	円形	丸底	1区		
2	24×19	32	楕円形	平底	1区		



- 0 1/3 5cm
- ブロックの混土：黒褐色土粒（10YR3/1）含む。
- 16：にぶい黄褐色土（10YR6/4）・明黄褐色（10YR6/6）・明黄褐色ローム（10YR6/8）の混土。
- 19：灰黄褐色土（10YR5/2）に明黄褐色ローム（10YR6/6）入るブロック混土。
- 20：褐灰色土（10YR4/1）：にぶい黄褐色ロームブロック混入。
- 21：灰黄褐色土（10YR4/2）：明黄褐色ロームブロック少量混入。
- 22：灰黄褐色土（10YR5/2）と明黄褐色（10YR6/6）：にぶい黄褐色（10YR6/4）・明黄褐色ローム（10YR6/8）のブロック混土。
- 23：にぶい黄褐色土（10YR5/4）：にぶい黄褐色ローム小ブロック入。
- 24：褐色土（10YR4/4）：にぶい黄褐色ローム小ブロック混入。
- 25：にぶい黄褐色ローム（10YR6/4）に灰黄褐色土（10YR5/2）入るブロック混土。
- 26：にぶい黄褐色ローム（2.5Y5/2）ブロック。
- 27：にぶい黄褐色ローム（10YR6/4）とにぶい黄褐色土（10YR5/3）土のブロックの混土。
- 28：褐灰色土（7.5YR4/1）と褐灰色土（10YR6/1）のブロックの混土。粘性ややなし。

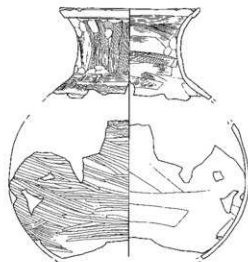
(B-B')

- I・I'・II・A'-A'' セクションに同じ。
- 1：明黄褐色ローム（10YR6/8）：部分的に黒褐色土混入。
- 2：灰黄褐色土（10YR5/2）：As-A や多く絡まり無し。
- 3：にぶい黄褐色土（10YR5/4）：にぶい黄褐色土・黄褐色ローム及びAs-A 混入。
- 4：灰黄褐色土（10YR5/2）：黒褐色土・明黄褐色ロームやや多し。
- 5：As-A セクション1層に同じ。
- 6：にぶい黄褐色土（10YR5/3）：As-A・明黄褐色ローム混入。
- 7：にぶい黄褐色土（10YR6/3）：明黄褐色土・にぶい黄褐色ロームと黒褐色土（10YR3/1）プロロ混入。
- 8：黒褐色土（10YR3/1）：As-A 多量、明黄褐色ローム若干混入。
- 9：にぶい黄褐色ローム（10YR6/4）：黒褐色土と多くのAs-A 混入。

1号風倒木（第306図、P.L.98・103・104）

概要 本例木痕は1区中部のやや南寄りに確認された。東西2基あるが同時期と見られる。

1号溝と重複しこれを切っている。

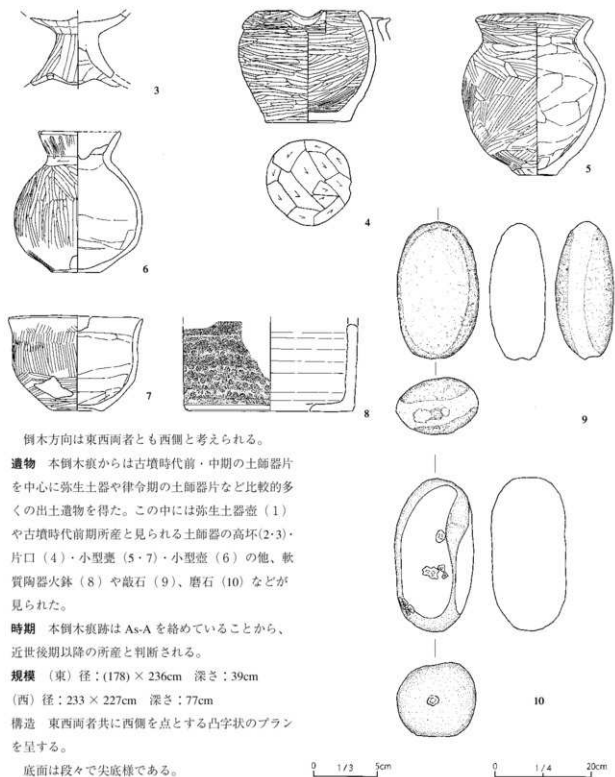


- 0 1/4 10cm
- 10：にぶい黄褐色土とAs-Aの混土。
- 11：As-A：2次堆積層。
- 12：にぶい黄褐色ローム（10YR6/4）・黄褐色ローム（10YR7/8）のブロック混土。
- 13：黄褐色ローム（10YR7/8）：明黄褐色ローム混入。
- (C-C')
- 1：褐色土（10YR4/4）：As-Aと明黄褐色ローム粒混入。
- 2：にぶい黄褐色土（10YR5/3）とAs-Aの混土
- 3：にぶい黄褐色土（10YR5/3）と明黄褐色ローム（10YR6/6）層土ブロックの混土：少量のAs-A 混入
- 4：黒褐色土（10YR3/2）とにぶい黄褐色土（10YR4/3）のブロック混土：As-Aと明黄褐色ローム、少量の炭化物混入。
- 5：明黄褐色ローム（10YR6/6）とにぶい黄褐色土（10YR5/3）のブロック混土：As-Aと黒褐色土混入。
- 6：黒褐色土（10YR3/1）：As-A 多量に、明黄褐色ローム若干混入。
- 7：黄褐色ローム（10YR7/8）：明黄褐色ローム混入。
- 8：黒褐色土（10YR3/2）：にぶい黄褐色土（10YR5/3）の混土。
- 9：にぶい黄褐色ローム（10YR6/4）：明黄褐色ロームと黒褐色土混入
- 10：にぶい黄褐色土（10YR5/3）：明黄褐色ローム粒、As-A 混入。
- 11：黄褐色ローム（10YR7/6）：にぶい黄褐色ロームブロック混入。密土。
- 12：にぶい黄褐色ローム（10YR6/4）：明黄褐色ロームと上位ににぶい黄褐色土若干混入。

(D-D')

- I'：明黄褐色ローム（10YR6/8）。
- 1：にぶい黄褐色土（10YR5/3）：As-A 多く入る。明黄褐色ロームと僅かの炭化物混入。
- 2：にぶい黄褐色土（10YR6/4）と明黄褐色ローム（10YR6/8）のブロック混土。
- 3：にぶい黄褐色土（10YR4/3）と明黄褐色土ローム（10YR6/6）ローム混土。粘性あり。

第296図の2 1号風倒木土層注記と出土遺物（その1）



第297図 1号風倒木の出土遺物(その2)

倒木方向は東西両者とも西側と考えられる。

遺物 本倒木痕からは古墳時代前・中期の土師器片を中心に弥生土器や律令期の土師器片など比較的多くの出土遺物を得た。この中には弥生土器壺(1)や古墳時代前期所産と見られる土師器の高坏(2・3)・片口(4)・小型甕(5・7)・小型壺(6)の他、軟質陶器火鉢(8)や敲石(9)、磨石(10)などが見られた。

時期 本倒木痕跡はAs-Aを絡めていることから、近世後期以降の所産と判断される。

規模 (東) 径：(178)×236cm 深さ：39cm

(西) 径：233×227cm 深さ：77cm

構造 東西両者共に西側を点とする凸字状のプランを呈する。

底面は段々で尖底様である。

3号風倒木(第299図)

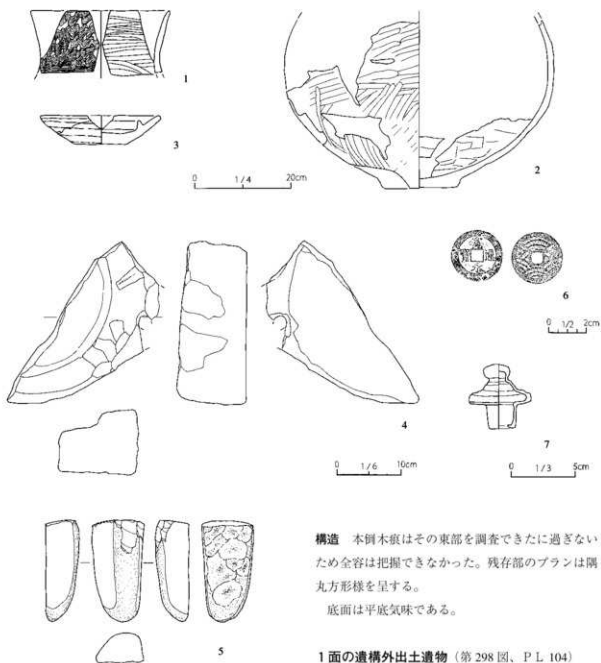
概要 本倒木痕は1区北部に確認された。

4号溝と重複しこれに切られており、南は配管によって切られるため、東部の一角を調査できたに遇

ぎなかった。

尚、倒木方向は確認できなかった。

遺物 出土遺物見られなかった。



第298図 1面の遺構外出土遺物

時期 4号溝に切られていることから律令期以前の所産と思慮される。

規模 径：(71) × (218) cm 深さ：35cm

構造 本例木痕はその東部を調査できたに過ぎないため全容は把握できなかった。残存部のプランは隅丸方形様を呈する。

底面は平底気味である。

1面の遺構外出土遺物 (第298図、P.L 104)

概要・遺物 1面に於いては古墳時代前・中期の土師器片を中心に、弥生時代遺構、近現代に至るまでの450点を超える比較的多くの出土遺物が遺構外から出土している。この中には弥生土器甕(1)や土師器壺(2)、陶器灯明皿(3)、石臼の上臼(4)、磨石(5)、寛永通宝(6)、ガラス瓶蓋(7)が見られた。

第2節 2面の遺物

旧石器確認のための試掘調査

(第299図 P L 100)

概要 本遺跡では1面の調査終了に伴い、旧石器の有無確認のための試掘調査を実施した。

1区北部で303図(309頁)に示したように、調査区の形状に合わせて、南北に直列させた2×4mの試掘グリッドを3箇所設定し、北側のグリッドから順次人力による掘削を行った。その結果、試掘坑1に於いてはAs-BP層付近とA T層下位から旧石器の剥片が出土し、試掘坑2の上位からは捻糸縄文土器や石器類の出土が確認された。

このためグリッドを拡張して遺物包含層の分布範囲を探ることとしたのであるが、As-BP層付近の旧石器の遺物包含層と縄文時代の遺物包含層がレベル的に近接していたこと、及び調査期間に鑑みて、両者は一まとまりで掘削することとした。

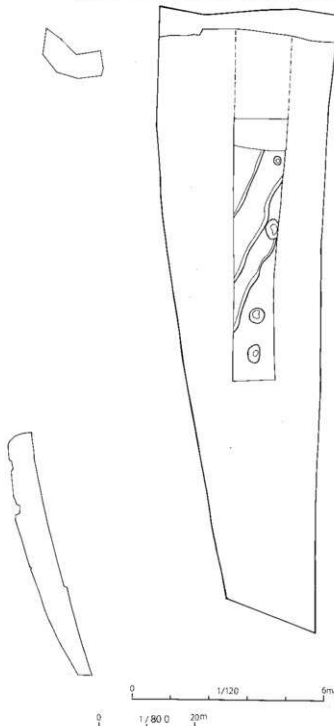
一方、1区南部では削平の激しい南端部を避けた南部北寄りに、調査区を縦断するように幅1.35～1.8m、長さ11.1mの試掘トレンチを設定し、2区に対しては調査区東寄りに4×3.5mのグリッドを設定してそれぞれ旧石器に対する試掘調査を実施した。前者に於いてはHr-FA下位層まで、後者についてはAT下の暗色帯下位まで掘削したが、何れの調査区でも縄文時代のものを含め、出土遺物を得ることはできなかった。

尚、縄文時代の出土遺物及び旧石器と下位層への試掘調査についてはそれぞれ、次項、次々項に後述する。

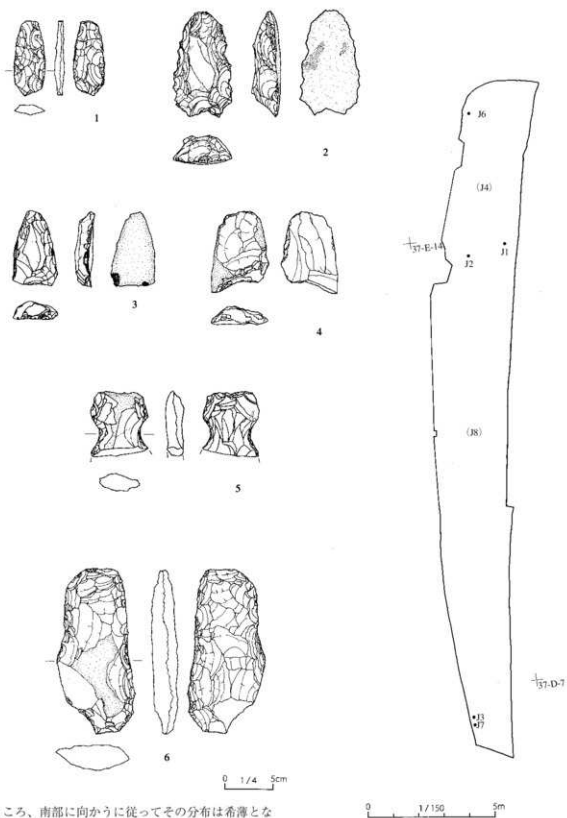
縄文時代遺物の包含層(第300図 P L 105)

概要 上述のように1区中部北寄り以北の区域で縄文時代の遺物包含層が確認された。

試掘グリッドを上位層に沿って拡張し、確認した



第299図 調査区と1区南部の試掘トレンチ

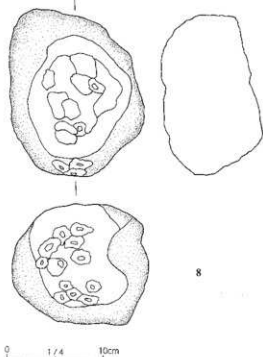


ところ、南部に向かうに従ってその分布は希薄となり、1区半ばでその広がりは途絶えた。

遺物 その数量は多くはなかったものの、石器を中心とした出土遺物が得られた。この中には擬形石器

第300図 1区中・北部の遺物分布図と
出土遺物(その1)

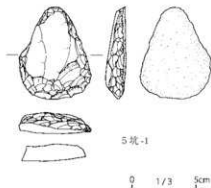
第7章 富田宮下遺跡で発見された遺構と遺物



第301図 1区・中北部の出土遺物(その2)

(J2)と打製石斧(J5)が見られた。

この他、1号住居から撥形石器(J3)と多孔石(J7)、4号溝から尖頭器(J1)と撥形石器(J4)及び打製石斧(J6)、1号井戸から多孔石(J8)の出土が見られた。



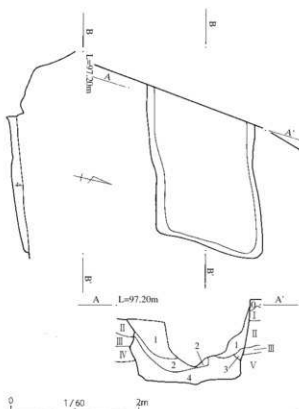
第302図 5号土坑と出土遺物

5号土坑(第302図 P L 99・104)

概要 本土坑は1区中部北寄りで確認された。

他遺構との重複はなく、掘削意図も特定できなかった。

遺物 攪乱によると見られる竈構築材や土師器片1点づつの出土もあったが、撥形石器(1)の他、石



(5号土坑覆土)

- 1: におい黄褐色ローム(10YR5/4); におい黄褐色ローム(10YR6/4) 小ブロックと若干のAs-SP流入。粘性あり。
- 2: 1層土に明黄褐色ローム(10YR6/6) 入るブロック混入。粘性ややあり。
- 3: 灰黄褐色(10YR5/2); 灰褐色(7.5YR5/2)・明黄褐色(10YR6/6)のロームブロックの混入。粘性あり。
- 4: 1層土と明黄褐色ローム(10YR6/6)のブロック混入。粘性あり。

(地山層)

- I: におい黄褐色土(10YR5/3); ロームか。細礫若干含む。粘性弱。
- II: 明黄褐色ローム(10YR6/6); 細礫混入。腐蝕区域ではII・III層間にAs-BP層あり。粘性やや弱。
- III: におい黄褐色ローム(10YR6/4); 小礫若干混入。粘性やや弱。
- IV: におい黄褐色ローム(10YR5/3) III・V層土ブロック入る。小礫若干混入。粘性あり。
- V: 灰褐色ローム(7.5YR5/2); 小礫若干混入。粘性あり。
- O: におい黄褐色土(10YR5/4); 明黄褐色ロームブロック混入。粘性弱。

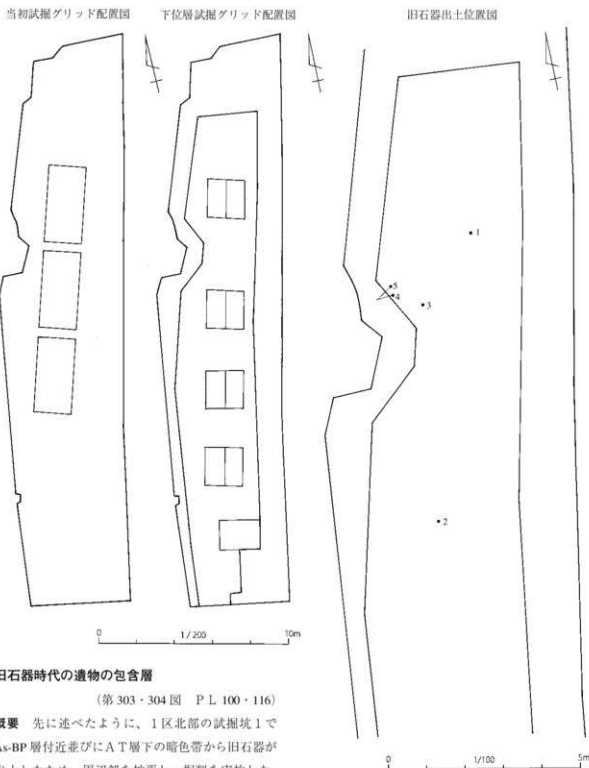
器剥片4点の出土が見られた。

時期 本土坑は縄文時代所産である。早期の可能性があるが特定できなかった。

規模 径:(267)×171cm 深さ:121cm

構造 本土坑は菱形様の長方形プランを呈する。

底面形態は平底を呈する。



旧石器時代の遺物の包含層

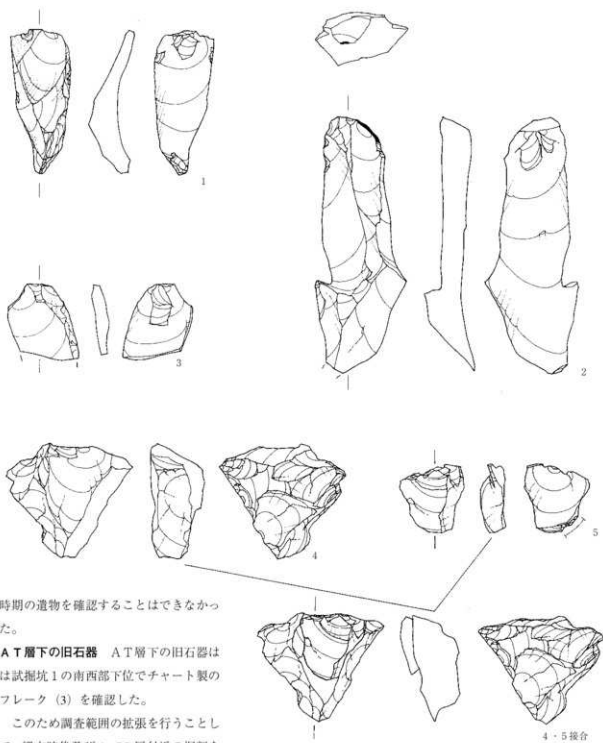
(第303・304図 P L 100・116)

概要 先に述べたように、1区北部の試掘坑1でAs-BP層付近並びにAT層下の暗色帯から旧石器が出土したため、周辺部を拡張し、掘削を実施した。この結果、後者に属する石器が新たに3点が得られた。

AS-BP層付近の旧石器 As-BP層付近の旧石器は試掘坑1の東寄り上位で黒曜石のフレーク(1)が出土した。

第303図 旧石器試掘グリッド配置図並びに遺物出土位置図

このため、調査区域の拡張を行うこととしたが、上述のように調査期間等に鑑みて縄文時代の遺物包含層を一括して掘削作業を実施した。しかし乍、同



時期の遺物を確認することはできなかった。

A T層下の旧石器 A T層下の旧石器は試掘坑1の南西部下位でチャート製のフレーク(3)を確認した。

このため調査範囲の拡張を行うこととして、縄文時代及びA_s-BP層付近の掘削を完了した後に、当該層位の掘削を行った。その結果、上記フレーク(3)の西側の直近でやはりチャート製の石核(4)とフレーク(5)、南側に少しはなれて黒色頁岩製の石刃(2)の出土が見られた。高、石核(4)とフレーク(5)は接合資料である。

第304図 旧石器出土遺物

下位層への試掘調査 A T層下層の旧石器調査を終了後、2×2mのグリッドを縦列に4箇所設定して試掘調査を実施し、Hr-HA層下位層まで掘削をしたのであるが、遺物を得ることはできなかった。

第8章 科学分析報告

本遺跡群に於いては、テフラ、植物珪酸体、プラント・オパール、の分析、或いは出土木製品や種子の同定や漆塗膜の分析を委託、実施した。本章では

その分析結果を以下に掲載する。尚、分析・同定者及び分析会社については各節・項の文末に記す。

第1節 群馬県、富田大泉坊B遺跡における自然科学分析

I. 富田大泉坊B遺跡の土層とテフラ

1. はじめに

前橋台地や赤城火山南麓に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、地名や浅間など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、層位や年代が不明な土層が検出された富田大泉坊B遺跡においても、地質調査を行い土層層序を記載するとともに、テフラ検出分析と屈折率測定を行って指標テフラの層位を把握し、土層の層位や年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、3区B地点、3区C地点、3区E地点の3地点である。

2. 土層層序

(1) 3区B地点

3区B地点では、下位より亜円礫層（層厚15cm以上、礫の最大径72mm）、亜円礫混じり褐色砂層（層厚20cm、礫の最大径39mm）、黄灰色砂層（層厚14cm）、暗灰褐色土（層厚21cm）、黄灰色砂層（層厚10cm）、灰色砂層（層厚32cm）、灰褐色砂質土（層厚21cm）、暗灰褐色表土（層厚27cm）が認められる（図305）。これらのうち、暗灰褐色土から撚糸文土器が検出されている。また灰色砂

層の上面では、縄文時代前期の土坑が検出されている。

(2) 3区C地点

3区C地点では、下位より暗灰色泥層（層厚8cm以上）、灰白色砂質シルト層（層厚16cm）、腐植質灰色砂層（層厚15cm）、灰色砂層（層厚29cm）、灰褐色砂質土（層厚14cm）、暗灰褐色表土（層厚38cm）が認められる（図305）。

(3) 3区E地点

3区E地点では、下位より灰色シルト質砂層（層厚8cm以上）、灰色砂質土（層厚5cm）、黄白色軽石混じり灰色砂質土（層厚9cm、軽石の最大径2mm）、黄色軽石混じり黄褐色砂質土（層厚32cm、軽石の最大径2mm）、黄白色砂質土（層厚23cm）、灰色がかった黄褐色砂質土（層厚7cm）、黄灰色砂質土（層厚10cm）、黄色軽石層（層厚12cm、軽石の最大径4mm）、灰色砂質土ブロック混じり灰褐色砂質土（層厚22cm）、灰褐色砂質土（層厚20cm）、暗灰褐色表土（層厚44cm）が認められる（図305）。これらのうち、黄色軽石層は、層相から約1.3～1.4万年前¹⁾に浅間火山から噴出した浅間板敷黄白色軽石（As-YP、新井、1962、町田・新井、1992など）に同定されよう。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

3区B地点において採取された試料のうち、3点を対象としてテフラ検出分析を実施した。分析の手順は次のとおりである。

1) 試料12gを秤量。

- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 分析篩により1/4-1/8mmの粒子を篩別。
- 5) 偏光顕微鏡下で250粒子を観察し、火山ガラスの色調・形態別比率を求める。

(2) 分析結果

結果を表12に示す。3区B地点で軽石やスコリアを認めることはできなかった。一方、火山ガラスはいずれの試料にも少量ずつ含まれており、試料18により多くの火山ガラスが含まれているようにみえる。試料18に含まれる火山ガラスは無色透明で、分厚い中間型ガラスのほか、繊維束状に発泡した軽石型ガラスが認められる。試料16や試料14には、無色透明の中間型ガラスのほか、無色や白色のスポンジ状や繊維束状に発泡した軽石型ガラスが含まれている。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

3区B地点の試料18より検出された火山ガラスを対象として、火山ガラスの屈折率測定を行った。測定には、温度変化型屈折率測定装置(MAIOT)を利用した。

(2) 測定結果

3区B地点の試料18に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、1.503-1.506である。

5. 考察

燃糸文土器が検出された土層より下位の砂層中に含まれる

火山ガラスの形態や色調さらに屈折率は、従来知られている関東地方北西部の後期更新

*I 放射性炭素(¹⁴C)年代。

表12 テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
3区B地点	14	-	-	-	+	md>pm(sp,fb)	cl,wh
	16	-	-	-	+	md>pm(sp,fb)	cl,wh
	18	-	-	-	+	md>pm(fb)	cl

++++:とくに多い, +++:多い, ++:中程度, +:少ない, -:認められない, bw:バブル型,

世末期以降のテフラの中では、約1.1万年前^{*)}に浅間火山から噴出したと推定されている浅間総社軽石(As-Sj, 早田, 1990, 1991, 1996)に特徴がよく似ている。また今回測定対象となった火山ガラスのうち、若干屈折率が低いものについては、As-YPに由来する可能性もあり、全体としては、As-YPやAs-Sjに由来する火山ガラスが混在していると考えた方が妥当と思われる。そうすると、燃糸文土器の包含層は、As-Sjより上位にあると思われる。

いずれにしても、今回As-Sjの一次堆積層が認められたわけではないことから、火山ガラスがさらに古いテフラに由来する可能性も完全には否定できない。今後、信頼度の高いEPMAを利用した火山ガラスの主成分化学組成分析を行って、さらに同定精度が高められると良い。

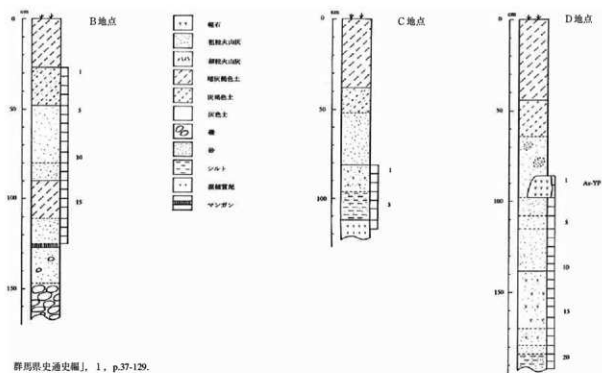
6. 小結

富田大泉坊B遺跡において、地質調査とテフラ検出分析さらに屈折率測定を行った。その結果、浅間板鼻黄色軽石(As-YP, 約1.3~1.4万年前^{*)}、それや浅間総社軽石(As-Sj, 約1.1万年前^{*)}に由来すると考えられる火山ガラスを検出することができた。本遺跡の燃糸文土器包含層については、As-Sjより上位と考えられる。

(株式会社 古環境研究所)

文献

- 新井房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年, 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス, 東京大学出版会, 276p.
 早田 勉 (1990) 群馬県自然と風土, 群馬県編さん委員会編「



第305図 3区の土層柱図

群馬県史通史編, 1, p.37-129.

早田 勉 (1991) 浅間火山の生い立ち, 佐久考古通信, no.53, p.2-7.

早田 勉 (1996) 関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴 - とくに御前第1テフラより上位のテフラについて -, 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p.256-267.

md: 中間型, pm: 軽石型, sp: スポンジ状, fb: 繊維束状, ct: 無色透明, wh: 白色.

II. 富田大泉坊B遺跡における植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 2000)。

2. 試料

分析試料は、3区B地点、3区C地点、1地点、2地点の4地点から採取された計5点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法 (藤

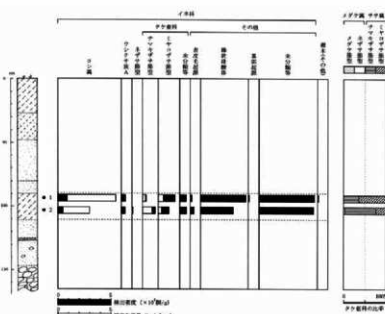
原, 1976) を用いて、

次の手順で行った。

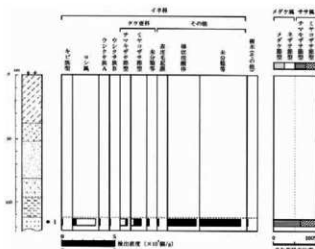
- 1) 試料を 105°C で 24 時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約 1g に対し直径約 40 μm のガラスビーズを約 0.02g 添加 (電子分析天秤により 0.1mg の精度で秤量) 3) 電気炉灰化法 (550°C・6 時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10 分間) による分散
- 5) 沈底法による 20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400 倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1g あたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料 1g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮



第 306 図 富田大泉坊 B 遺跡 3 区 B 地点における植物珪酸体分析結果



第 307 図 富田大泉坊 B 遺跡 3 区 C 地点における植物珪酸体分析結果

比重 (1.0 と仮定) と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位: 10^{-5} g) をかけて、単位面積で層厚 1 cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。ヨシ属 (ヨシ) の換算係数は 6.31、ススキ属 (ススキ) は 1.24、ネザサ節は 0.48、チマキザサ節型 (チマキザサ節・チシマザサ節) は 0.75、ミヤコザサ節は 0.30 である (杉山, 2000)。タケ亜科に

ついては、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

(1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表 1 および図 1 に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

キビ族型、ヨシ属、ススキ属型 (おもにススキ属)、ウシクサ族 A (チガヤ属など)、ウシクサ族 B (大型)、ジュズダマ属

[イネ科-タケ亜科]

ネザサ節型 (おもにメダケ属ネザサ節)、チマキザサ節型 (ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など)、ミヤコザサ節型 (ササ属ミヤコザサ節など)、未分類等

[イネ科-その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体 (おもに結合組織細胞由来)、茎部起源、未分類等

[樹木]

その他

(2) 植物珪酸体の検出状況

1) 3 区 B 地点 (第 306 図)

燃余文土器が検出された暗灰褐色土 (試料

1、2) では、ヨシ属、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が多く検出され、ウシクサ族 A、樹木 (その他) なども検出された。おもな分類群の推定生産量によると、ヨシ属が優勢となっている。

2) 3 区 C 地点 (第 307 図)

暗灰色泥層 (試料 1) では、ヨシ属、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が比較的多く検出され、キビ族型、ウシクサ族 A、樹木 (その他) なども検出された。おもな分類群の推定生産量によると、ヨシ属

第1節 群馬県、富田大泉坊B遺跡における自然化学分析
られるが、上下層を含めて連続的に分析するなど、
さらに詳細な検討が必要と思われる。

が優勢となっている。

3) 1地点・2地点

燃糸文土器が検出された層単では、ヨシ属、ミヤコザサ節型が比較的多く検出され、ウシクサ族A、チマキザサ節型、樹木（その他）なども検出された。おもな分類群の推定生産量によると、ヨシ属が優勢となっている。

5. 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

縄文時代草創期の燃糸文土器が検出された層単の堆積当時は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、周辺にはササ属などが生育する比較的乾燥したところも見られたと推定される。また、遺跡周辺には何らかの樹木（落葉樹）が分布していたと考えられる。

タケ亜科のうち、メダケ属は温暖、ササ属は寒冷の指標とされており、メダケ率（両者の推定生産量の比率）の変遷は、地球規模の水期-開水期サイクルの変動と一致することが知られている（杉山, 2001）。ここでは、ササ属が卓越していることから、当時は比較的寒冷な気候であったと推定される。また、ササ属のうちチマキザサ節とシマザサ節は日本海側の寒冷地などに広く分布しており、積雪に対する適応性が高いが、ミヤコザサ節は太平洋側の積雪の少ない比較的乾燥したところに分布している（室井, 1960, 鈴木, 1978）。ここでは、両者の比率が同程度であることから、積雪量が比較的多かった可能性も考え

文献

杉山真二 (1987) タケ亜科植物の機能細胞珪酸体, 富士竹類植物園報告, 第31号, p.70-83.

杉山真二 (2000) 植物珪酸体 (プラント・オパール), 考古学と植物学, 同成社, p.189-213.

杉山真二 (2001) テフラと植物珪酸体分析, 月刊地球, 23: 645-650.

鈴木貞雄 (1996) タケ科植物の概説, 日本タケ科植物図鑑, 星海書林, 8-27.

藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) - 数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法 -, 考古学と自然科学, 9, p.15-29.

室井卓 (1960) 竹叢の生態を中心とした分布, 富士竹類植物園報告, 5, p.103-121.

III. 富田大泉坊B遺跡における花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

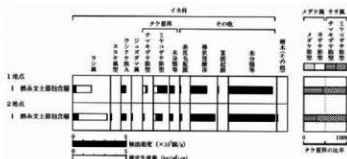
2. 試料

試料は、1地点と3区C地点の燃糸文土器包含層から採取された計2点である。これらは、植物珪酸体分析に用いられたものと同一試料である。

3. 方法

花粉粒の分離抽出は、中村 (1973) の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 0.5% リン酸三ナトリウム (12水) 溶液を加え15分間湯煎する。
- 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 25% フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 水洗処理の後、水酢酸によって脱水し、アセトリシス処理 (無水酢酸9:濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎) を施す
- 再び水酢酸を加えて水洗処理
- 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセ



第308図 富田大泉坊B遺跡における植物珪酸体分析結果

リンゼリーで封入してプレパラート作成

7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、鳥倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。イネ属については、中村(1974, 1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

4. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉11、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉15、シダ植物胞子2形態の計29である。分析結果を表1に示し、主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

マツ属複雑管束亜属、ハンノキ属、クマシデ属—アサダ、ブナ属、コナラ属アカガシ亜属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科—イラクサ科、

〔草本花粉〕

イネ科、イネ属型、タンポポ亜科

の原因で後代の花粉が混入した可能性が考えられる。

第2節 富田大泉坊A遺跡に

おける自然科学分析

1. 富田大泉坊A遺跡の土層とテフラ

1. はじめに

赤城山南麓とその周辺に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、赤城山、榛名山、浅間

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

1) 1地点

樹木花粉のマツ属複雑管束亜属、ハンノキ属、ブナ属、草本花粉のイネ科(イネ属型を含む)、タンポポ亜科などが検出されたが、いずれも少量である。

2) 3区C地点

花粉はほとんど検出されなかった。

5. 考察

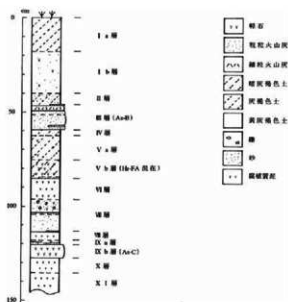
縄文時代草創期の撚糸土器が検出された層準では、花粉があまり検出されないことから植生や環境の推定は困難である。花粉があまり検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。なお、わずかながらイネ属型が検出されることから、何らか

文献

中村純(1973)花粉分析, 古今書院, p.82-110.
 金原正明(1993)花粉分析法による古環境復元, 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.
 鳥倉巴三郎(1973)日本植物の花粉形態, 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.
 中村純(1980)日本産花粉の標識, 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.
 中村純(1974)イネ科花粉について、とくにイネ(*Oryza sativa*)を中心として, 第四紀研究, 13p.187-193.
 中村純(1977)稲作とイネ花粉, 考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.

山をはじめ、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ(火山砕屑物(さいせつぶつ)、砕屑物、いわゆる火山灰)が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、低地部の良好な土層の断面が認められた



第309図 27・28号溝 A-A' セクション土層柱状図
数字はテフラ分析の資料番号

前橋市富田大泉坊 A 遺跡においても、地質調査を行って土層の観察を行い、テフラを含めた土層層序の記載を行った。また微化石分析のための試料を採取した。記載の対象となった地点は、27・28号溝 A-A' セクション、25・26号溝 A-A' セクション、調査区北壁 25・26号溝間地点の3地点である。

2. 土層の層序

(1) 27・28号溝 A-A' セクション

27・28号溝 A-A' セクションでは、下位より暗褐色砂質泥層 (層厚 10cm 以上, X I 層)、炭化材混じり黒泥層 (層厚 8cm, X 層)、黄灰色白色軽石層 (層厚 7cm, 軽石の最大径 3mm, IX b 層)、層理のある黄灰色白色軽石層 (層厚 2cm, 軽石の最大径 3mm, IX a 層)、暗灰色泥層 (層厚 5cm, III 層)、灰色砂層 (層厚 0.5cm)、灰色砂質泥層 (層厚 9cm)、暗灰色泥層 (層厚 0.4cm)、垂円礫を含む灰色砂礫層 (層厚 7cm, 礫の最大径 12mm, 以上 VII 層)、暗灰色泥層 (層厚 11cm, VI 層)、淘汰の良い灰色砂層 (層厚 0.8cm)、白色軽石を多く含む暗灰色土 (層厚 10cm, 軽石の最大径 13mm, 以上 V b 層)、灰白色軽石や白色軽石を含む灰褐色土 (層厚 13cm, 軽石

の最大径 5mm, V a 層)、暗灰褐色土 (層厚 3cm, IV 層)、成層したテフラ層 (層厚 13.7cm, III 層)、砂混じり灰褐色土 (層厚 6cm, II 層)、砂混じり黄灰褐色土 (層厚 22cm, I b 層)、灰褐色作土 (層厚 18cm, I a 層) が認められる (図 309)。

これらのうち IX b 層は、その層相や軽石の岩相などから、4 世紀初頭に浅間火山から噴出したと推定されている浅間 C 軽石 (As-C, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 友廣, 1988, 若狹, 2000) に同定される。そして IX a 層はその再堆積層と考えられる。さらに V a 層に含まれる灰白色軽石も、岩相から As-C に由来すると考えられる。また V b 層中に多く含まれる白色軽石については、発泡がさほど良くなく、また斑晶に角閃石が認められることなどから、6 世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ (Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992) または 6 世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ (Hr-FP, 新井, 1962, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992) に由来する可能性がある。他の地点では、この白色軽石を含む淘汰の悪い黄色細粒火山灰層が認められることから、前者の可能性がより高いと思われる。

III 層の成層したテフラ層は、下位より黄灰色粗粒火山灰層 (層厚 2cm)、青灰色砂質細粒火山灰層 (層厚 0.4cm)、かすかに成層した黄灰色粗粒火山灰層 (層厚 6cm)、暗灰色粗粒火山灰層 (層厚 2cm)、桃色細粒火山灰層 (層厚 3cm)、白色粗粒火山灰層 (層厚 0.3cm) からなる。このテフラ層は、層相から 1108 (天仁元) 年に浅間火山から噴出した浅間 B テフラ (As-B, 荒牧, 1968, 新井, 1979) に同定される。(2) 25・26号溝 A-A' セクション

25・26号溝 A-A' セクションでは、As-C に同定される灰白色軽石層 (層厚 7cm, 軽石の最大径 5mm) を認めることができた。その下位には、暗褐色泥層 (層厚 5cm) が認められる。肉眼で観察する限り、この土層中に As-C に由来する比較的粗粒の軽石は含まれていないようである。

(3) 調査区北壁 25・26号溝間地点

調査区北壁 25・26号溝間地点でも、As-Cに同定される灰白色軽石層（層厚7cm、軽石の最大径6mm）を認めることができた。その下位には、黒灰色泥層（層厚13cm以上）が認められる。ここでも、肉眼で観察する限り、この土層中にAs-Cに由来する比較的粗粒の軽石は含まれていないようである。

3. 小結

富田大泉坊A遺跡における地質調査の結果、下位より浅間C軽石（As-C、4世紀初頭）、榛名二ツ岳洪川テフラ（Hr-FA、6世紀初頭）あるいは榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr-FP、6世紀中葉）、浅間Bテフラ（As-B、1108年）を認めることができた。また複数の層単に、洪水堆積物を見ることができた。

文献

新井房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年, 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
 新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層, 考古学ジャーナル, no.157, p.41-52.
 荒牧重雄 (1968) 浅間火山の地質, 地団研専報, no.45, 65p.
 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス, 東京大学出版会, 276p.
 町田 洋・新井房夫 (2003) 新編火山灰アトラス, 東京大学出版会, 336p.
 坂口 一 (1986) 榛名二ツ岳起源 FA・FP 層下の土器と須恵器, 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.
 早田 勉 (1989) 6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害, 第四紀研究, 27, p.297-312. 友成哲也 (1988) 古式土器出現期の様相と浅間山C軽石, 群馬県埋蔵文化財調査事業団編「群馬の考古学」, p.325-336.
 若狭 徹 (2000) 群馬の弥生土器が終わるとき, かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動く—古墳が成立する頃の土器の交流」, p.41-43.

II. 富田大泉坊A遺跡における植物珪酸体（プラント・オパール）分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（ SiO_2 ）が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されてい

る（杉山, 2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山, 1984）。

2. 試料

試料は、27・28号溝 A-A' セクション、25・26号溝 A-A' セクション、10号溝セクションから採取された計 15 点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

3. 分析法

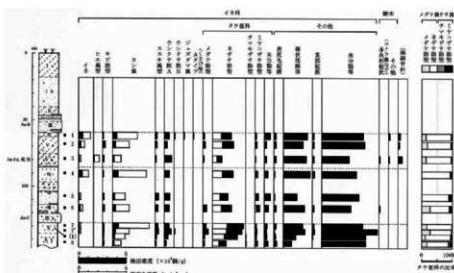
植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原, 1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を 105°C で 24 時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約 1g に対し直径約 40 μm のガラスビーズを約 0.02g 添加（電子分析天秤により 0.1mg の精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による 20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400 倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1g あたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料 1g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0 と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-5}g ）をかけて、単位面積で層厚 1cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は 2.94、ヒエ

属(ヒエ)は 8.40、ヨシ属(ヨシ)は631、ススキ属(ススキ)は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節・チシマザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である(杉山, 2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。



第310図 富田大泉坊A遺跡、27・28号溝A-A'セクションにおける植物珪酸体分析結果

※資料(1)は25・26号溝A-A'セクションのA5=C直下

4. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表13および第310・311図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

【イネ科】

イネ、ヒエ属

型、キビ族型、ヨシ

属、ススキ属型(おもにススキ属)、ウシクサ族A(チガヤ属など)、ウシクサ族B(大型)、ジュズガマ属、Aタイプ(くさび型)

【イネ科-タケ亜科】

メダケ節型(メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、チマキザサ節型(ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など)、ミヤコザサ節型(ササ属ミヤコザサ節など)、未分類等

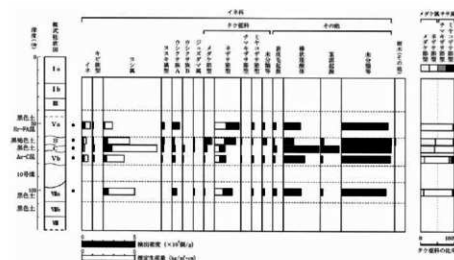
【イネ科-その他】

表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞出

来)、茎部起源、未分類等

【樹木】

多角形板状(ブナ科コナラ属など)、その他



第311図 富田大泉坊A遺跡、10号溝セクションにおける植物珪酸体分析結果

5. 考察

(1) 稲作跡の検討

水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体(プラント・オパール)が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している(杉山, 2000)。ただし、密度が3,000個

/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

1) 27・28号溝 A-A' セクション (図310)

As-B直下のIV層(試料1)からAs-C下位のXI層(試料8)までの層準について分析を行った。その結果、IV層(試料1)からX層(試料7、7')までの各層からイネが検出された。このうち、As-B直下のIV層(試料1)とHr-FA直下のVI層(試料4)では、密度が4,200個/gおよび3,500個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

As-C直下のX層(試料7、7')では、密度が700個/gと低い値であるが、同層は直上をテフラ層で覆われていることから、上層から後代のもものが混入したことは考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

その他の層では、密度が700～2,100個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、稲の生産性が低かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、稲葉が耕作地外に持ち出されていたこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

2) 25・26号溝 A-A' セクション (図310)

As-C直下層(試料1)について分析を行った。その結果、イネは検出されなかった。

3) 10号溝セクション (図311)

Hr-FA混のV a層からAs-C混のV b層までの各層、およびAs-C下位のVII a層について分析を行った。その結果、Hr-FA混のV a層からAs-C混のV b層までの各層からイネが検出されたが、密度は700～2,700個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

(2) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ

属型(ヒエが含まれる)、エノコログサ属型(アワが含まれる)、キビ属型(キビが含まれる)、ジュズダマ属(ハトムギが含まれる)、オヒシバ属(シコクヒエが含まれる)、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはヒエ属型とジュズダマ属が検出された。以下に各分類群ごとに栽培の可能性について考察する。

1) ヒエ属型

ヒエ属型は、27・28号溝 A-A' セクションのHr-FA混層(試料3)から検出された。ヒエ属型には栽培種のヒエの他にイヌヒエなどの野生種が含まれるが、現時点では植物珪酸体の形態からこれらを識別することは困難である(杉山ほか、1988)。また、密度も700個/gと低い値であることから、ここでヒエが栽培されていた可能性は低いと考えられる。

2) ジュズダマ属

ジュズダマ属は、27・28号溝 A-A' セクションのAs-B直下のIV層(試料1)、および10号溝セクションのB層、C層、VII a層から検出された。ジュズダマ属には食用や薬用となるハトムギが含まれるが、現時点では植物珪酸体の形態から野草のジュズダマと完全に識別するには至っていない。また、密度も700個/gと低い値であることから、ここでハトムギが栽培されていた可能性は低いと考えられる。

3) その他

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するもの含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

(3) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群では、ネザサ節型が多く検出され、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族Aなども検出された。また、部分的にコナラ属などの樹木起源も検出された。おもな分類群の推定生産量によると、ほとんどの層準でヨシ属およびネザサ節

表 13 群馬県、富田大泉坊遺跡における植物珪酸体分析結果

分類群	学名	27・28号溝 A-A' セクション								10号溝セクション					
		1	2	3	4	5	6	7	7a	8	9	10	11	12	
イネ科	<i>Oryza sativa</i>	42	21	7	35	7	14	7	7			27	13	7	19
ヒエ属	<i>Echinochloa</i> type			7											
キビ属	<i>Panicum</i> type	7	26	14	7	14	21	14	14	14	11	7	7	14	13
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	42	28	14	57	21	26	62	28	14	21	14	40	82	32
ススキ属	<i>Miscanthus</i> type	14	14	7			28	21	21	28	7	11	21	20	14
ウツクサ族 A	<i>Andropogoneae</i> A type	49	28	76	50	56	49	48	70	21	38	68	20	27	26
ウツクサ族 B	<i>Andropogoneae</i> B type	7							7					14	6
ジュズマク属	<i>Cyn.</i>												7	7	7
Aタイプ(くまび型)	A type	7													
タケ類	<i>Brachypodium</i> (Bambusoideae)														
メダケ属	<i>Phlebotilus</i> sect. <i>Negundo</i>	14	21	7			35	28	49	14	16		67	27	6
ネザサ属	<i>Phlebotilus</i> sect. <i>Neusa</i>	194	218	97	213	160	197	324	307	142	258	226	194	96	102
チマキサ属	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.										5		7		6
ミヤコザサ属	<i>Sasa</i> sect. <i>Crossostich</i>	14	21	7	28	35	49	14	21	28	16	21	7	19	14
その他植物	Others	62	21	21	35	62	42	28	21	36	27	21	40	19	21
イネ以外のイネ科	Others	21	21	21	7	7	21	21	7	28	16	27	13	34	19
奥良毛根属	<i>Hack-hair</i> origin														
草状根属	<i>Rhizoph.</i>	249	204	238	278	139	218	200	223	85	129	157	94	334	198
茎根属	<i>Stem</i> origin	14	14	14	21	14	14	21	5	5	27	171	179	19	21
その他	Others	437	450	285	361	389	303	428	585	462	462	438	469	464	460
薪木属	<i>Adiantum</i>														
多角形植物(コナラ属など)	<i>Polypod plant</i> (Dieron etc.)						7	7							
その他	Others	14	7												7
(炭屑合計)	Spores	21	14	42											
植物珪酸体総数	Total	1192	1090	827	1091	917	1020	1207	1387	860	1015	1027	1032	1200	952
おもな植物群の検出率(%)	検出率 (kg/㎡) : 試料の乾重量を1と仮定して算出														
イネ	<i>Oryza sativa</i>	1.22	0.62		1.64	0.20	0.41	0.20	0.20			0.81	0.39	0.20	0.56
ヒエ属	<i>Echinochloa</i> type			0.58											
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	2.82	1.77	0.88	3.58	1.31	1.78	3.92	1.76	0.80	1.36	0.86	2.54	5.17	2.02
ススキ属	<i>Miscanthus</i> type	0.17	0.17	0.09			0.34	0.26	0.26	0.35	0.09	0.13	0.25	0.25	0.17
メダケ属	<i>Phlebotilus</i> sect. <i>Negundo</i>	0.18	0.24	0.08			0.41	0.32	0.57	0.18	0.19		0.78	0.32	0.07
ネザサ属	<i>Phlebotilus</i> sect. <i>Neusa</i>	0.93	1.08	0.47	1.02	0.77	0.95	1.56	1.47	0.68	1.24	1.08	0.83	0.49	0.78
チマキサ属	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.										0.05	0.04			
ミヤコザサ属	<i>Sasa</i> sect. <i>Crossostich</i>	0.04	0.06	0.02	0.09	0.10	0.15	0.04	0.06	0.08	0.05	0.06	0.05	0.05	0.04
タケ類の比率 (%)	Others	14	18	14			27	17	27	17	12		44	41	11
メダケ属	<i>Phlebotilus</i> sect. <i>Negundo</i>	82	77	82	92	88	83	81	70	89	82	95	52	59	73
ネザサ属	<i>Phlebotilus</i> sect. <i>Neusa</i>	8	7	8	8	12	10	2	3	9	3	3	7	7	7
チマキサ属	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.														
ミヤコザサ属	<i>Sasa</i> sect. <i>Crossostich</i>														

型が優勢となっている。

以上の結果から、各層の堆積当時は、おおむねヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、周辺の比較的乾燥したところにはメダケ属(おもにネザサ節)を主体としてススキ属やチガヤ属、キビ族なども生育するイネ科植物が分布していたと推定される。

6. まとめ

植物珪酸体(プラント・オパール)分析の結果、27・28号溝 A-A' セクションでは、浅間 Bテフラ(As-B; 1108年)直下層(IV層)および榛名ニッ岳洗川テフラ(Hr-FA, 6世紀初頭)直下層(VI層)からイネが比較的多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、同地点の浅間 C軽石(As-C, 4世紀初頭)直下層(X層)およびその上位の各層でもイネが検出され、稲作が行われていた可能性が認められた。10号溝セクションでは、Hr-FA混層(Va層)からAs-C混層(V

b層)までの各層からイネが検出され、稲作が行われていた可能性が認められた。

各層の堆積当時は、おおむねヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、周辺の比較的乾燥したところにはメダケ属(おもにネザサ節)を主体としてススキ属やチガヤ属、キビ族なども生育するイネ科植物が分布していたと推定される。

(株式会社古環境研究所)

文献

- 杉山真二(1987)タケ亜科植物の機軸細胞珪酸体。富士竹類植物園報告, 31, p.70-83.
- 杉山真二(2000)植物珪酸体(プラント・オパール)。考古学と植物学, 同成社, p.189-213.
- 藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量的分析法-。考古学と自然科学, 9, p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二(1984)プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オパール分析による水田土の探索-。考古学と自然科学, 17, p.73-85.

第3節 富田大泉坊遺跡の樹種同定分析

1. はじめに

富田大泉坊遺跡は群馬県前橋市大泉坊にあり、古墳時代初期および平安時代末期の水田址や溝状遺構が検出されている。ここでは、本遺跡の4・5区のA8-C降下前後の谷から出土した古墳時代前期初頭と考えられている本製品と板材、角材などの加工木、自然木について樹種同定を行なった。

2. 方法

材組織の切片採取および器種の判別は群馬県埋蔵文化財調査事業団によって行われ、作成されたプレパラートを光学顕微鏡下で同定した。同定を行った試料のうち各分類群を代表する試料については写真図版(図版1～4)を添付し、その材組織の結果に記載した。なお、作成されたプレパラートは財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。

3. 結果と考察

同定された樹種の一覧は表1に、製品別の樹種の集計は表2に示した。樹種同定の結果、同一個体を含む全278試料中には、針葉樹であるスギ(7試料)・モミ属(4試料)、広葉樹であるコナラ属アカガシ亜属(1試料)・コナラ属コナラ亜属コナラ節(134試料)・コナラ属コナラ亜属クスギ節(101試料)・クリ(5試料)・ケヤキ(2試料)・エノキ属(1試料)・クワ属(1試料)・カエデ属(3試料)・エゴノキ属(5試料)の合計11分類群が同定された。なお、以下コナラ属アカガシ亜属はアカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属コナラ節はコナラ節、コナラ属コナラ亜属クスギ節はクスギ節と呼ぶ。

この他に、材組織の保存状態が悪いため、科以下の同定を行なうことができなかった針葉樹(2試料)と環孔材(1試料)があった。同様に、材組織の保存状態が悪いため横断面を観察することができず、コナラ亜属までの記載に留めた試料が5試料あり、放射組織の保存状態が悪いためニレ属またはケヤキまでの同定に留めた試料が1試料あった。一方、保

存状態が良いが採取された切片が小さいために、両種の同定根拠となる集合放射組織を確認できず、コナラ節またはクリまでの同定に留めた試料が4試料あった。これらの試料のうち、集合放射組織が認められず、とくに道管径が大きくコナラ節と異なるものと認識したものについてはクリと同定した。しかし、このクリについては採取された切片内に集合放射組織が認められなかったことが考えられ、コナラ節を含んでいる可能性がある。また、保存状態が良いが特徴が合致する樹種がなかったため散孔材までの記載に留めた試料が1試料あった。

表14には同一個体についても記載した。同一個体とされた試料のうち、樹種同定番号No.159～161(W-146)は同定結果が異なる。No.160と161は横断面の小道管の配列によりクスギ節としたが、No.159は横断面の保存状態が悪いため小道管の配列を観察できず、コナラ亜属とした。なお、表15の集計では、同一個体試料は一つの材として集計を行い、No.159～161はクスギ節として集計した。

次に同定された樹種の記載を行う。

- (1) スギ *Cryptomeria japonica* (L.fil.)D.Don スギ科 図版1(1a-1c) No.12 W-12

仮道管および樹脂細胞、放射柔細胞からなる針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で、放射組織は2～15細胞高になる。放射断面の放射組織と仮道管との間の分野壁孔は孔口の大きく開いたスギ型で、1分野に2～3個存在する。スギは高さ30～40mになる常緑高木で、自生状態では山地の沢沿いに多く生育する。

- (2) モミ属 *Abies* マツ科 図版1(2a-2c) No.120 W-112-1

仮道管および放射柔細胞によって構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は全て放射柔細胞によって構成され2～20細胞高になり、放射柔細胞の壁は厚く数珠状肥厚を有する。放射柔細胞の分野壁孔はスギ型で1分

野に1~4個存在する。日本に分布するモミ属には、北海道に分布するトドマツ、亜高山帯など高標高域に分布するシラビソ・オオシラビソ、標高1,000~2,000mに分布するウラジロモミ、ウラジロモミよりも低標高域に分布するモミなどがありいずれも常緑高木である。

(3) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図版1 (3a-3c) No.111 W-104

大型の道管が放射方向に連なり、柔細胞が接線方向に1~3細胞幅の帯状に配列する放射孔材である。放射組織は単列で同性、それに集合放射組織を伴う。道管の穿孔は単穿孔であり、放射組織と道管の壁孔は櫛状の壁孔が顕著である。アカガシ亜属は本州(宮城・新潟県以西)・四国・九州・沖縄に分布し、アカガシ、アラカシやシラカシなど8種があり、いずれも高さ20mに達する常緑高木である。

(4) コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版2 (4a-4c) No.7 W-7

大型の道管が年輪界で一列に並び、それ以外の部分では径を減じた壁の薄い角張った道管が配列する環孔材である。放射組織は同性の単列および集合放射組織から構成される。道管の穿孔は単穿孔であり、放射組織と道管の壁孔は櫛状となる。コナラ節には、カシワ、ミズナラ、コナラ、ナラガシワなどが含まれる。

(5) コナラ属コナラ亜属クヌギ節 *Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris* ブナ科 図版2 (5a-5c) No.8 W-8

大型の道管が年輪界において並び、孔圏外の道管は径を減じた円形の小道管が放射方向に並ぶ環孔材である。放射組織は同性で単列であるが集合放射組織も伴う。道管の穿孔は単穿孔で、道管と放射組織の壁孔には櫛状の壁孔が認められる。クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、本州(岩手県・山形県以南)・四国・九州の丘陵から山地に分布する高さ30mの落葉高木である。

(6) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科

図版2 (6a-6c) No.57 W-53

大型の道管が年輪界で一列に並び、それ以外の部分では径を減じた道管が火災状に配列する環孔材である。放射組織は単列で同性である。道管の穿孔は単穿孔であり、放射組織と道管の壁孔は櫛状である。クリは北海道(石狩・日高地方以南)・本州・四国・九州の丘陵から山地に分布する落葉高木で高さ20mほどになる。

(7) ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 図版3 (7a-7c) No.109 W-102

大型の道管が年輪界において1列に並び、孔圏外の小道管は数個複合して接線状に並ぶ環孔材である。放射組織は5細胞幅程度で紡錘形のものが目立ち、上下には大型の直立細胞がある。道管は単穿孔であり、小道管にはらせん肥厚がみられる。ケヤキは北海道・本州・四国・九州の溪畔林や丘陵部、山地によく生育する高さ20mほどの落葉高木である。

(8) エノキ属 *Celtis* ニレ科 図版3 (8a-8c) No.36 W-34

大型の道管が年輪界において並び、孔圏外的小道管は多数集まって円形または斜線状の集団管孔を形成する環孔材である。放射組織は異性であり、平伏細胞と上下端は方形細胞によって構成され、周囲にはさや細胞が発達する。道管は単穿孔であり、孔圏外的小道管にはらせん肥厚が発達する。エノキ属には落葉大高木であるエゾエノキ、エノキ、落葉高木のクワノハエノキ、落葉小高木のコバノチョウセンエノキがあり北海道・本州・四国・九州・沖縄に分布する。

(9) クワ属 *Morus* クワ科 図版3 (9a-9c) No.239 参-43

大型の道管が年輪界において並ぶ環孔材である。道管は孔圏部において単独あるいは2、3個複合し、孔圏外では小塊状に複合して分布する。放射組織は紡錘形で1~6細胞幅となり主に平伏細胞から構成されるが、上下端には直立細胞が見られる。道管の穿孔は単穿孔であり、壁孔は交互壁孔となる。小道管にはらせん肥厚が存在する。クワ属は高さ3~

10mになる落葉低木であり、ケグワ、マグワ、ヤマゲワなど5種がある。

(10) カエデ属 *Acer* カエデ科 図版4(10a-10c) No.193 W-175-1

小型の道管が放射方向に2、3個連なって散在する散孔材である。放射組織は1～5細胞幅の平伏細胞からなる同性で、紡錘形となる。道管の穿孔は単穿孔であり、道管には交互状の壁孔およびらせん肥厚が発達する。カエデ属には、イロハモミジやイタヤカエデなど28種がある。

(11) エゴノキ属 *Syrax* エゴノキ科 図版4(11a-11c) No.92 W-87-2

小型の道管が2～3個放射方向に連なり、晩材部では径を減じる散孔材である。放射組織は異性で1～2列、道管と放射組織との壁孔は階段穿孔となる。エゴノキ属にはエゴノキ、ハクウンボク、コハクウンボクの3種があり、いずれも落葉性小高木となり山地に生育する。

(12) 散孔材 *Difusse-porus wood* 図版4(12a-12c) No.142 W-131

やや小型の道管が散在する散孔材である。放射組織は異性で非常に高く、1～2細胞幅となる。道管は単穿孔となる。この散孔材の特徴に合致する樹種が当たらないため、ここでは散孔材までの同定に留まった。

4. 考察

富田大泉坊遺跡における樹種利用

本遺跡の樹種構成でもっとも特徴的であったのが、コナラ節とクスギ節が優勢に産出することであった。全試料合計に対する割合でみるとコナラ節は49.4%、クスギ節は36.8%産出し、ややコナラ節が多く認められた(表15)。

次に、木製品・加工木・自然木毎の樹種組成について検討する。農具など加工の程度の高い木製品についてみると、同定数は少ないがコナラ節とクスギ節が多く用いられる傾向が認められた。農具鋤(か)と薄板材においてアカガシ亜属とケヤキが用

いられている他は、梯子はコナラ節であり、刀形木製品と楯・長柄鋤および又鋤はクスギ節であった。また、農具?で同定された1点のアカガシ亜属について検討すると、当時でもアカガシ亜属は関東地方内陸部でも生育していたことは考えられるが、赤城山南麓に位置する二之宮千足遺跡の花粉分析結果(鈴木1992)をみてもアカガシ亜属花粉の出現率が低いことから、周辺植生の材の貯蓄量は少なかったものと考えられる。山田(1986)は、新保遺跡出土の木製品・加工材の樹種同定から、常緑のカシ類(アカガシ亜属)が、製品もしくは板材として製品化された姿で出土するという現象を認め、このことはカシ類の材が南関東以西の地から随時製材した状態で供給されていたことを示すものと推測した。また、山田(1986)は移入したカシ類でも賄いきれなかった分について、集落近くで入手できるクスギ類を集落内で製材してくわ・すきの素材を作り、その不足分を補っていたことを想定している。このことから、今回同定されたアカガシ亜属は南関東からの移入物である可能性が考えられる。

次に、板材や枕材など加工の程度の低い加工木について検討する。加工木135点中においてもコナラ節が53.3%、クスギ節が34.8%を占めており、両樹種が主要な構成樹種となっていた。これに少数であるが針葉樹ではスギ、モミ属、落葉広葉樹ではクワ、ケヤキ、エノキ属、カエデ属、エゴノキ属など様々な樹種を伴っていた。これらの樹種は本遺跡周辺でも普通に生育していたと考えられる樹種であることから、近距離から供給された材であることが示唆される。自然木ではコナラ節とクスギ節の産出割合に際立った差はなく、加工木においてもコナラ節とクスギ節の産出割合に際立った差は認められなかった。このことから、周辺の森林にはコナラ節とクスギ節が同程度の材貯蓄量を持ち、当時の人々は遺跡周辺の森林からどちらかの樹種を選択的に利用することなく利用していたと考えられる。

周辺遺跡での樹種同定結果をみると、高崎市に位置する新保遺跡(鈴木・能城1986)の古墳前期に

あたる木製品では、全206点のうちクスギ類（クスギ節）115点（55.8%）、ナラ類（コナラ節）6点（2.9%）が同定されており、クスギ節が多く産出する結果が得られている。また、前橋市に位置する二之宮千足遺跡（藤根1992）の古墳時代後期にあたる加工木や枕材などの木製品、元総社寺田遺跡（藤根・鈴木1994）の古墳時代にあたる枕材・板材・柱材などの木製品でも、コナラ節よりもクスギ節が多産している。遺跡により両種の産出割合が異なることは、局所的に遺跡周囲の植生が異なっていたことを示唆していると考えられる。コナラ節とクスギ節の産出割合に違いが見られるものの、両種が優勢に産出することは周辺遺跡の同定結果とも符号するものであった。山田（1993）による各地の樹種同定結果を集計した報告をみると、関東北部における古墳時代の木製品は、縄文時代でのクリ材利用から古墳時代を中心としてコナラ節・クスギ節を中心とした材利用へと大きく変化している。今回同定された結果は、古墳時代前期における当地域で一般的な木製品の樹種構成と概ね一致していた。

遺跡周辺の植生

次に当時の遺跡周辺に成立していた植生について検討する。二之宮千足遺跡の花粉分析結果では（鈴木1992）、1万年前から約千年前までの植生が明らかにされており、この結果ではコナラ亜属花粉が卓越して出現している。その他、前橋市にある前橋

炭層での花粉分析結果では（辻1985）、約1万3千年前からコナラ亜属花粉が急増し、その後優占していることが明らかにされている。本遺跡からコナラ節とクスギ節が大多数を占めて産出したことは、コナラ節とクスギ節の森林資源が豊富であったと考えられることと調和的である。

このほか、同定されたケヤキ・エノキ属は湿潤な環境に生育する樹種であることから、遺跡の周辺には溪畔林のような森林が成立していたと考えられた。また、クリ・クワ属・カエデ属・エゴノキ属などは二次林など開けた明るい森林で多く見られる樹種であることから、本遺跡周辺にはコナラ節やクスギ節を主体とし、それに二次林要素の樹種を交えた森林が成立していたことが考えられた。

野村敏江（パレオ・ラボ）

引用文献

- 藤根久・鈴木茂（1994）元総社寺田遺跡出土材の樹種同定と周辺植生。「元総社寺田遺跡Ⅱ」：135-185、群馬県埋蔵文化財調査事業団。
 藤根久（1992）二之宮千足遺跡出土材の樹種。「二之宮千足遺跡」：30-49、群馬県埋蔵文化財調査事業団。
 鈴木三男・能城修一（1986）新保遺跡出土加工木の樹種。「新保遺跡Ⅰ」：71-94、群馬県埋蔵文化財調査事業団。
 鈴木茂（1992）花粉分析。「二之宮千足遺跡」：80-95、群馬県埋蔵文化財調査事業団。
 江誠一郎・吉川昌輝・吉川純子・能城修一（1985）前橋台地における更新世末期から完新世初期の植物化石群集と植生。第四紀研究23（4）：263-269。
 山田昌久（1986）くわとすきの来た道。「新保遺跡Ⅰ」：168-188、群馬県埋蔵文化財調査事業団。

第14表の1 富田大泉坊A遺跡の出土材の樹種同定結果

同定番号	プロット番号	調査区	遺構名	遺物番号	樹種	木製品	加工木	自然木	備考
1	W-1	4区	8・9号溝	1	コナラ節		枕		4
2	W-2	4区	8・9号溝	2	クスギ節	又鋸			1
3	W-3	4区	8・9号溝	4	クスギ節		板材		7
4	W-4	4区	8・9号溝	6	コナラ節		角材		8
5	W-5	4区	8・9号溝	7A	環孔材	鋸			11
6	W-6	4区	8・9号溝	7B	クスギ節		節		2
7	W-7	4区	8・9号溝	9	クスギ節	刀?			3
8	W-8	4区	8・9号溝	14	コナラ節		板材		5
9	W-9	4区	8・9号溝	24	コナラ節		角材		10
10	W-10	4区	8・9号溝	包1	コナラ節		枕		9
11	W-11	4区	8・9号溝	包2	コナラ節		板材		6
12	W-12	4区	8・9号溝	包14	スギ		板材		9溝3
13	W-13	4区	8・9号溝	包15	コナラ節		角材		9溝8

第8章 化学分析報告

第14表の2 富田大泉坊A遺跡の出土材の樹種同定結果

同定番号	ポイント番号	調査区	遺構名	遺物番号	樹種	木製品	加工木	自然木	備考
14	W-14	4区	8・9号溝	包16	コナラ節		板材		9溝6
15	W-15	4区	8・9号溝	包17	クスギ節		板材		9溝5
16	W-16	4区	8・9号溝	包18	クスギ節		丸材		9溝7
17	W-17	4区	8・9号溝	包19	クスギ節		丸材		9溝4
18	W-18	4区	12号溝	28	クスギ節		角材		80
19	W-19	4区	12号溝	33	エゴノキ属		丸材		91
20	W-20	4区	12号溝	34	コナラ節		角材		67
21	W-21	4区	12号溝	35	クスギ節		角材		71
22	W-22	4区	12号溝	37	クスギ節		板材		39
23	W-23①	4区	12号溝	39	クスギ節		板材		同一個体 33
24	W-23②	4区	12号溝	39	クスギ節		板材		33
25	W-24	4区	12号溝	41	クスギ節		板材		56
26	W-25	4区	12号溝	42	コナラ節		角材		85
27	W-26①	4区	12号溝	43	コナラ節		角材		同一個体 66
28	W-26②	4区	12号溝	43	コナラ節		角材		66
29	W-27	4区	12号溝	44	コナラ節		角材		59
30	W-28	4区	12号溝	45	クスギ節	跡?			21
31	W-29	4区	12号溝	46	コナラ節		角材		74
32	W-30	4区	12号溝	47	針葉樹		角材		47
33	W-31	4区	12号溝	48	クスギ節		板材		54
34	W-32	4区	12号溝	49	コナラ節		板材		44
35	W-33	4区	12号溝	50	コナラ節		角材		27
36	W-34	4区	12号溝	51	エノキ属		板材		34
37	W-35	4区	12号溝	53	クスギ節		角材		51
38	W-36	4区	12号溝	54	クスギ節		板材		49
39	W-37	4区	12号溝	55	クスギ節	又跡			22
40	W-38①	4区	12号溝	56	クスギ節	又跡			同一個体 36
41	W-38②	4区	12号溝	56	クスギ節	又跡			36
42	W-39	4区	12号溝	57	クスギ節		角材		48
43	W-40	4区	12号溝	58	クスギ節		角材		77
44	W-41	4区	12号溝	65	コナラ節		角材		60
45	W-42	4区	12号溝	68	コナラ節		加工材		23
46	W-43	4区	12号溝	69	コナラ節		角材		73
47	W-44	4区	12号溝	73	コナラ節		角材		61
48	W-45①	4区	12号溝	76	コナラ節		角材		同一個体 82
49	W-45②	4区	12号溝	76	コナラ節		角材		82
50	W-46	4区	12号溝	77	クスギ節		加工材		24
51	W-47	4区	12号溝	79	エゴノキ属		角材		88
52	W-48	4区	12号溝	81	コナラ節		角材		70
53	W-49	4区	12号溝	84	クスギ節		角材		75
54	W-50	4区	12号溝	85	クスギ節		角材		26
55	W-51	4区	12号溝	87	コナラ節		角材		68
56	W-52	4区	12号溝	89	コナラ節		板材		37
57	W-53	4区	12号溝	90	クリ		角材		41
58	W-54	4区	12号溝	91	コナラ節		角材		84
59	W-55	4区	12号溝	92	コナラ節		角材		76
60	W-56	4区	12号溝	93	コナラ節		角材		57
61	W-57	4区	12号溝	95	クスギ節		角材		55
62	W-58	4区	12号溝	98	コナラ節		角材		72
63	W-59	4区	12号溝	103	コナラ節		板材		53
64	W-60	4区	12号溝	107	コナラ節		角材		40
65	W-61	4区	12号溝	108	コナラ節		角材		46
66	W-62	4区	12号溝	109	コナラ節				25
67	W-63	4区	12号溝	111	クスギ節		角材		38
68	W-64	4区	12号溝	112	コナラ節		角材		65
69	W-65	4区	12号溝	113	コナラ節		角材		64
70	W-66	4区	12号溝	116	コナラ節		板材		35
71	W-67	4区	12号溝	117	コナラ節		角材		87
72	W-68	4区	12号溝	118	コナラ節		角材		78

第3節 富田大泉坊遺跡の樹種同定分析

第14表の3 富田大泉坊A遺跡の出土材の樹種同定結果

同定番号	プレート番号	調査区	遺構名	遺物番号	樹種	木製品	加工木	自然木	備考
73	W-69	4区	12号溝	119	コナラ節		角材		69
74	W-70	4区	12号溝	120	コナラ節		丸材		89
75	W-71	4区	12号溝	121	コナラ節		角材		79
76	W-72	4区	12号溝	122	コナラ節		角材		29
77	W-73	4区	12号溝	124	クスギ節		角材		81
78	W-74	4区	12号溝	125	クスギ節		角材		32
79	W-75	4区	12号溝	128	コナラ節		角材		50
80	W-76	4区	12号溝	129	コナラ節		枕(丸材)		28
81	W-77	4区	12号溝	130	コナラ節		角材		83
82	W-78	4区	12号溝	131	クスギ節		枕		30
83	W-79	4区	12号溝	132	クスギ節		角材		62
84	W-80	4区	12号溝	包2	コナラ節		角材		63
85	W-81	4区	12号溝	包3	コナラ節		角材		52
86	W-82	4区	12号溝	包4	コナラ節		角材		31
87	W-83	4区	12号溝	包6	コナラ節		角材		45
88	W-84	4区	12号溝	包10	コナラ節		板材		42
89	W-85	4区	12号溝	包11	コナラ節		加工材		86
90	W-86	4区	12号溝	包13	スギ		角材		58
91	W-87①	4区	12号溝	包14	エゾノキ属		丸材		同一個体 90
92	W-87②	4区	12号溝	包14	エゾノキ属		丸材		90
93	W-87③	4区	12号溝	包14	エゾノキ属		丸材		90
94	W-87④	4区	12号溝	包14	エゾノキ属		丸材		90
95	W-88	4区	12号溝	包16	コナラ節		角材		43
96	W-89	5区	29号溝	1	コナラ産属		板材		1
97	W-90	5区	29号溝	2	クスギ節		棒材		3
98	W-91	5区	29号溝	3	コナラ節		板材		2
99	W-92	5区	29号溝	4	クスギ節		角材		4
100	W-93	5区	29号溝	5	コナラ節		角材		36
101	W-94	5区	25号溝	1	クスギ節		角材		14
102	W-95	5区	25号溝	2	コナラ節		角材		18
103	W-96	5区	25号溝	3	コナラ節		角材		17
104	W-97	5区	25号溝	5	コナラ節		角材		19
105	W-98	5区	25号溝	6	クスギ節		板材		10
106	W-99	5区	25号溝	7	コナラ節		角材		16
107	W-100	5区	25号溝	8	コナラ節		角材		13
108	W-101	5区	25号溝	9	コナラ節		角材		12
109	W-102	5区	25号溝	10	ケヤキ	農具?			15
110	W-103	5区	25号溝	11	コナラ節	弓?			11
111	W-104	5区	28号溝	1	アサギシ産属	農具?			10
112	W-105	5区	28号溝	2	コナラ節		角材		33
113	W-106	5区	28号溝	3	クスギ節		角材		43
114	W-107	5区	28号溝	4	クスギ節		角材		34
115	W-108	5区	28号溝	5	クスギ節		板材		25
116	W-109①	5区	28号溝	6	クスギ節		角材		同一個体 26
117	W-109②	5区	28号溝	6	クスギ節		角材		26
118	W-110	5区	28号溝	7	クスギ節		板材		31
119	W-111	5区	28号溝	8	コナラ節		枕		30
120	W-112①	5区	28号溝	9	モミ属		棒材		同一個体 15
121	W-112②	5区	28号溝	9	モミ属		棒材		15
122	W-113①	5区	28号溝	10	スギ		棒材		同一個体 48
123	W-113②	5区	28号溝	10	スギ		棒材		48
124	W-114	5区	28号溝	11	モミ属		角材		20
125	W-115	5区	28号溝	12	クスギ節		枕		39
126	W-116	5区	28号溝	13	クスギ節		枕		13
127	W-117	5区	28号溝	14	クスギ節		丸材		44
128	W-118	5区	28号溝	15	コナラ節		角材		35
129	W-119	5区	28号溝	16	クスギ節		板材		17
130	W-120	5区	28号溝	17	クスギ節		角材		49
131	W-121	5区	28号溝	18	コナラ節		加工材		42
132	W-122	5区	28号溝	19	クスギ節		角材		24

第8章 化学分析報告

第14表の4 富田大泉坊A遺跡の出土材の樹種同定結果

同定番号	ポイント番号	調査区	遺構名	遺物番号	樹種	木製品	加工木	自然木	備考
133	W-123	5区	2.8号溝	20	クスギ節		棒材		46
134	W-124	5区	2.8号溝	21	コナラ節またはクリ		角材		28
135	W-125	5区	2.8号溝	22	コナラ節		角材		14
136	W-126	5区	2.8号溝	23	ヒノ属		角材		23
137	W-127	5区	2.8号溝	24	コナラ節		角材		38
138	W-128	5区	2.8号溝	26	コナラ節		角材		37
139	W-129	5区	2.8号溝	27	コナラ節		角材		41
140	W-130①	5区	2.8号溝	28	クスギ節		枕		同一個体 29
141	W-130②	5区	2.8号溝	28	クスギ節		枕		29
142	W-131	5区	2.8号溝	29	散孔材		棒材		47
143	W-132	5区	2.8号溝	30	クスギ節		枕		12
144	W-133①	5区	2.8号溝	31A	ケヤキ		板材		同一個体 16
145	W-133②	5区	2.8号溝	31B	コナラ節		板材		16
146	W-134①	5区	2.8号溝	32	コナラ節		丸太		同一個体 45
147	W-134②	5区	2.8号溝	32	コナラ節		丸太		45
148	W-134③	5区	2.8号溝	32	コナラ節		丸太		45
149	W-135	5区	2.8号溝	34	コナラ節		板材		27
150	W-136	5区	2.8号溝	35	クスギ節		角材		32
151	W-137	5区	2.8号溝	36	クスギ節		角材		22
152	W-139	5区	2.8号溝	38	クスギ節		板材		21
153	W-140	5区	2.8号溝	39	コナラ垂属		礎		11
154	W-141	5区	2.8号溝	40	コナラ節		角材		40
155	W-142	5区	2.8号溝	41	コナラ節		板材		19
156	W-143	5区	2.8号溝	42	クスギ節		板材		18
157	W-144	5区	2.5号溝	4	コナラ節		角材?		20
158	W-145	5区	2.7号溝	1	クスギ節		枕		15
159	W-146①	5区	2.7号溝	2	コナラ垂属		角材		同一個体 13
160	W-146②	5区	2.7号溝	2	クスギ節		角材		14①
161	W-146③	5区	2.7号溝	2	クスギ節		角材		14②
162	W-147①	5区	2.7号溝	3	コナラ節		角材		同一個体 12
163	W-147②	5区	2.7号溝	3	コナラ節		角材		12
164	W-148	5区	3.0号溝	No.2ABC	クスギ節		幹		53
165	W-149①	5区	3.0号溝	No.3	クリ		幹		同一個体 61
166	W-149②	5区	3.0号溝	No.4	クリ		幹		61
167	W-150	5区	3.0号溝	No.5	針葉樹		幹		66
168	W-151	5区	3.0号溝	No.6	クスギ節		幹		56
169	W-152	5区	3.0号溝	No.7	クスギ節		幹		57
170	W-153	5区	3.0号溝	No.8	クスギ節		幹		69
171	W-154	5区	3.0号溝	No.9	コナラ節		幹		77
172	W-155	5区	3.0号溝	No.10	コナラ節		幹		62
173	W-156①	5区	3.0号溝	No.11	クスギ節		幹		同一個体 74
174	W-156②	5区	3.0号溝	No.11	クスギ節		幹		74
175	W-157	5区	3.0号溝	No.12	コナラ節		幹		70
176	W-158	5区	3.0号溝	No.13	クスギ節		幹		63
177	W-159	5区	3.0号溝	No.14	コナラ節		幹		54
178	W-160	5区	3.0号溝	No.15	コナラ節		幹		64
179	W-161	5区	3.0号溝	No.16	コナラ節		幹		72
180	W-162	5区	3.0号溝	No.17	コナラ節		幹		78
181	W-163	5区	3.0号溝	No.18	クスギ節		幹		55
182	W-164	5区	3.0号溝	No.19	コナラ節		幹		75
183	W-165	5区	3.0号溝	No.20	コナラ節またはクリ		幹		59
184	W-166	5区	3.0号溝	No.21	クスギ節		幹		79
185	W-167	5区	3.0号溝	No.22	コナラ節		幹		67
186	W-168	5区	3.0号溝	No.23	コナラ節またはクリ		幹		73
187	W-169	5区	3.0号溝	No.24	コナラ節		幹		80
188	W-170	5区	3.0号溝	No.25	コナラ節		幹		60
189	W-171	5区	3.0号溝	No.26	クスギ節		幹		76
190	W-172	5区	3.0号溝	No.27	コナラ節		幹		71
191	W-173	5区	3.0号溝	No.28	クスギ節		幹		68

第3節 富田大泉坊遺跡の樹種同定分析

第14表の5 富田大泉坊A遺跡の出土材の樹種同定結果

同定番号	プレート番号	調査区	遺構名	遺物番号	樹種	木製品	加工木	自然木	備考
192	W-174	5区	30号溝	No.291	クスギ節			幹	65
193	W-175①	5区	30号溝	北宮製No1	カエデ属			幹	同一個体 58
194	W-175②	5区	30号溝	北宮製No1	カエデ属			幹	58
195	参-1	4区	8・9号溝	3	コナラ節			破片	
196	参-2	4区	8・9号溝	5	コナラ節			破片	
197	参-3	4区	8・9号溝	8	コナラ節			破片	
198	参-4	4区	8・9号溝	10	コナラ節			破片	
199	参-5	4区	8・9号溝	11	コナラ節			破片	
200	参-6	4区	8・9号溝	12	コナラ節			破片	
201	参-7	4区	8・9号溝	13	コナラ節			破片	
202	参-8①	4区	8・9号溝	15A	クスギ節			幹	同一個体
203	参-8②	4区	8・9号溝	15B①	クスギ節			幹	
204	参-8③	4区	8・9号溝	15B②	スギ			幹	
205	参-9	4区	8・9号溝	16	クスギ節			幹	
206	参-10	4区	8・9号溝	17	クスギ節			幹	
207	参-11	4区	8・9号溝	18	クスギ節			幹	
208	参-12	4区	8・9号溝	19	クスギ節			幹	
209	参-13	4区	8・9号溝	20	クスギ節			幹	
210	参-14	4区	8・9号溝	21	クスギ節			幹	
211	参-15	4区	8・9号溝	22	クスギ節			幹	
212	参-16	4区	8・9号溝	23	コナラ葉属			幹	
213	参-17	4区	8・9号溝	包3	コナラ葉属			幹	
214	参-18	4区	8・9号溝	包4	クスギ節			破片	
215	参-19	4区	8・9号溝	包5	コナラ節			破片	
216	参-20	4区	8・9号溝	包6	コナラ節			破片	
217	参-21	4区	8・9号溝	包7	クスギ節			破片	
218	参-22	4区	8・9号溝	包8	ニレ属またはケヤキ			破片	
219	参-23	4区	8・9号溝	包9	コナラ節			破片	
220	参-24	4区	8・9号溝	包10	クスギ節			破片	
221	参-25	4区	8・9号溝	包11	コナラ節			破片	
222	参-26	4区	8・9号溝	包12	コナラ節			破片	
223	参-27	4区	8・9号溝	包13	クスギ節			破片	
224	参-28	4区	8・9号溝	包20	コナラ節			幹	
225	参-29	4区	12号溝	25	コナラ節		角材		
226	参-30	4区	12号溝	27	コナラ節			幹	
227	参-31	4区	12号溝	29	クスギ節			幹	
228	参-32	4区	12号溝	30	コナラ節			幹	
229	参-33	4区	12号溝	31	クスギ節			幹	
230	参-34	4区	12号溝	32	コナラ節			幹	
231	参-35	4区	12号溝	36	クスギ節			破片	
232	参-36	4区	12号溝	38	コナラ節			幹	
233	参-37	4区	12号溝	40	コナラ節またはクリ			破片	
234	参-38	4区	12号溝	59	コナラ節			破片	
235	参-39	4区	12号溝	60	コナラ節			破片	
236	参-40	4区	12号溝	61	クスギ節			破片	
237	参-41	4区	12号溝	62	コナラ節			破片	
238	参-42	4区	12号溝	63	コナラ節			幹	
239	参-43	4区	12号溝	64	タブ属			破片	
240	参-44	4区	12号溝	66	コナラ節			幹	
241	参-45	4区	12号溝	67	コナラ節			破片	
242	参-46	4区	12号溝	70	コナラ節			幹	
243	参-47	4区	12号溝	71	クスギ節			破片	
244	参-48	4区	12号溝	74	コナラ節			破片	
245	参-49	4区	12号溝	75	クスギ節			破片	
246	参-50	4区	12号溝	78	コナラ節			幹	
247	参-51	4区	12号溝	80	クスギ節			破片	
248	参-52	4区	12号溝	86	コナラ節			幹	
249	参-53	4区	12号溝	88	コナラ節			破片	
250	参-54	4区	12号溝	94	コナラ節			幹	

第8章 化学分析報告

第14表の6 富田大泉坊A遺跡の出土材の樹種同定結果

同定番号	プレート番号	調査区	遺構名	遺物番号	樹種	木製品	加工木	自然木	備考
251	参-55	4区	1 2号溝	96	コナラ節			破片	
252	参-56	4区	1 2号溝	97	コナラ節			破片	
253	参-57	4区	1 2号溝	99	コナラ節			破片	
254	参-58	4区	1 2号溝	100	クスギ節			破片	
255	参-59	4区	1 2号溝	101	コナラ節			破片	
256	参-60	4区	1 2号溝	102	クスギ節			破片	
257	参-61	4区	1 2号溝	104	コナラ節			破片	
258	参-62	4区	1 2号溝	105	コナラ節			破片	
259	参-63	4区	1 2号溝	106	コナラ節			破片	
260	参-64	4区	1 2号溝	110	コナラ節			破片	
261	参-65	4区	1 2号溝	114	コナラ節			幹	
262	参-66	4区	1 2号溝	115	コナラ節			幹	
263	参-67	4区	1 2号溝	123	クスギ節			破片	
264	参-68	4区	1 2号溝	126	クスギ節			破片	
265	参-69	4区	1 2号溝	127	コナラ節			幹	
266	参-70	4区	1 2号溝	包1	コナラ節			幹	
267	参-71	4区	1 2号溝	包5	コナラ節			幹	
268	参-72	4区	1 2号溝	包7	クリ			破片	
269	参-73	4区	1 2号溝	包8	クスギ節			破片	
270	参-74	4区	1 2号溝	包9	クスギ節			破片	
271	参-75	4区	1 2号溝	包12	スギ			破片	
272	参-76	4区	1 2号溝	包15	コナラ節			破片	
273	参-77	1区	田尻路内	No.なし	スギ			幹	
274	参-78	5区	2 8号溝	No.なし	クスギ節			幹	
275	参-79	5区	2 8号溝	No.なし	クスギ節			幹	
276	参-80	5区	2 8号溝	No.なし	クスギ節			幹	
277	参-81	5区	2 8号溝	No.なし	クスギ節			幹	
278	参-82	5区	2 8号溝	No.なし	クスギ節			幹	

表15 富田大泉坊A遺跡出土材の種別樹種構成

種別	木製品						加工木				自然木		合計								
	鋸 鋸 鋸?	文 器 ?	農 具 ?	桶 ?	弓 ?	刀 ?	櫛 子	杖・ 杖 (丸材)	板 材	角 材 ・ 角 材?	丸 材 ・ 丸 太	加 工 材		幹	破 片						
樹種																					
スギ								1	1	1	3	2.2	2	1	3	2.6	6	2.3			
オモミ属											2	1				0		3	1.1		
針葉樹									1		1	0.7	1		1	0.9		2	0.8		
アカガシ属			1				1				0				0			1	0.4		
コナラ節						1	2	4	12	51	2	3	72	53.3	28	27	55	48.2	129	49.4	
クスギ節	2	3				1	6	6	13	22	2	3	1	47	34.8	28	15	43	37.7	96	36.8
コナラ車属				1			1			1				1	0.7	2		2	1.8	4	1.5
クリ										1				1	0.7	2	1	3	2.6	4	1.5
コナラ節またはクリ										1				1	0.7	2	1	3	2.6	4	1.5
ケヤキ			1				1			1				1	0.7	0		0		2	0.8
エノキ属										1				1	0.7	0		0		1	0.4
クワ属														0		1	1	0.9		1	0.4
ニレ属またはケヤキ														0		1	1	0.9		1	0.4
カエデ属										1				1	0.7	2		2	1.8	3	1.1
エゴノキ属											2			2	1.5	0		0		2	0.8
環孔材	1						1							0		0		0		1	0.4
散孔材														1	0.7	0		0		1	0.4
合計	3	3	2	1	1	1	1	10	29	80	5	7	4	135	100	67	47	114	100	261	100

*同一個体試料を除き集計を行った。(No.159 ~ No.161はクスギ節として集計した)

第4節 漆塗り堅櫛の塗膜分析

1. はじめに

群馬県前橋市の富田大泉坊 A 遺跡の調査では、3～5 区の低地部から出土した黒色を呈す漆塗りの堅櫛（3 世紀後半～4 世紀）が出土した。ここでは、この堅櫛の漆塗膜構造を調べた。

2. 試料と方法

試料は、堅櫛頭部の塗膜である。分析試料は、頭部の 2 束に跨る漆塗膜を用いた（分析位置を図に示す）。分析は、赤外分光分析を行って、漆の確認を行い、その後薄片を作製して光学顕微鏡による塗膜構造の観察と元素分析を行った。

漆の同定は、薄片試料の残り部分から手術用メスを用いて 0.2mm 角程度を薄く削り取った。採取した試料は、押しつぶして厚さ 1mm 程度に裁断した臭化カリウム (KBr) 結晶板に挟んで、油圧プレス器を用いて約 7 トンで加圧整形した。測定は、フリエ変換型顕微赤外分光光度計（日本分光株製 FT/IR-410、IRT-30-16）を用いて透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

表 16

吸収%	生漆	
	位置	強度
1	2925.48	28.5337
2	2854.13	36.2174
3	1710.55	42.0346
4	1633.41	48.8327
5	1454.06	47.1946
6	1351.86	50.8030
7	1270.86	46.3336
8	1218.79	47.5362
9	1087.66	53.8428
10	727.03	75.3800

薄片試料は、製品から剥離した 1mm 角程度の塗膜部分を、エポキシ樹脂で包埋し厚さ 30 μ m 前後の薄片を作製した。作製した塗膜薄

片は、光学顕微鏡を用いて塗膜構造について観察した後、元素分析を行った。

元素分析は、薄片についてエネルギー分散型 X 線マイクロアナライザー（日本電子株製 JSM-5900 LV+JES-2200）を用いた。測定条件は、電圧 30kV、分解能 3.0nm、Si(Li) 検出器、測定時間 300 秒である。分析は、主な塗膜層について点分析を行った。なお、定量計算は、FP 法（ファンダメンタルパラメータ法）で計算した。

3. 結果および考察

図 1 に、現在の生漆とともに、塗膜試料の赤外吸収スペクトル図を示す。縦軸は透過率 (%R)、横軸が波数 (Wavenumber (cm⁻¹); カイザー) である。なお、スペクトルは、ノーマライズしてあり、吸収スペクトルに示した数字は、生漆の赤外吸収位置を示す。表 2 には、生漆の吸収位置とその強度を示す。赤外分光分析を行った結果、生漆の成分であるウルシオールの吸収 (No 6～No 8 など) と同様の吸収が見られることから漆と同定された。

堅櫛の塗膜薄片の光学顕微鏡による観察では、やや黒色の濁りのある塗膜のみであり、下地層は見られなかった（図版 1-5）。この黒色物は、元素分析において炭素 (C) を主とする組成であることから（表 2、図版 1-6）、炭粉と考えられる。

これらの結果から、堅櫛表面には炭粉を混ぜた黒色漆が塗布されていたことが明らかとなった。（藤根 久、ノレオ・ラゴ）

第5節 富田宮下遺跡・富田大泉坊 A 遺跡出土木製品の樹種同定

1. はじめに

群馬県前橋市に位置する富田宮下遺跡と富田大泉坊 A 遺跡から出土した計木製品 4 点の樹種同定結果を報告する。

2. 試料と方法

試料は、富田宮下遺跡の 1 号井戸から出土した横植（中近世）と旧道路内から出土した薄板材（中近世）、富田大泉坊 A 遺跡の 12 号溝から出土した農

表17 堅櫛塗膜の元素分析結果(単位%)

点%	C	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	SO ₃	Cl	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	FeO	Total
1	98.45	0.04	0.08	0.43	0.54	0.18	0.03	0.04	0.12	0.08	0.00	0.01	100.00
2	99.03	0.21	0.13	0.08	0.25	0.16	0.03	0.02	0.04	0.03	0.01	0.00	100.00

具状薄板材(3世紀後半～4世紀)、3～5区の低地帯から出土した黒漆塗りの堅櫛頭部(3世紀後半～4世紀)の計4点である。同定試料のプレバートは、木材の木取りや目視できる組織を観察しながら直接採取して作製した。切片は片刃剃刀を用いて、横断面(木口)・接線断面(板目)・放射断面(柎目)の3断面を採取し、ガムクロラール(抱水クロラール50g、アラビアゴム粉末40g、グリセリン20ml、蒸留水50ml)の割合で調整した混合液で封入した。同定はこれらのプレバートを光学顕微鏡にて40～400倍で検鏡し、現生標本と対照して行った。プレバートは、(株)パレオ・ラボに保管されている。

3. 結果

樹種同定結果を表1に一覧を示す。

同定した結果、針葉樹のヒノキ(薄板材)、広葉樹のコナラ属クスギ節(農具状薄板材)とヒイラギ(横槌)、単子葉植物(堅櫛)の4分類群が同定された。

以下に材組織の特徴や図版に光学顕微鏡写真を示し、同定の根拠とする。そのほか、生態・分布・材質を記載する。

(1) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endl. ヒノキ科 図版 1a-1c: 薄板材

仮道管と放射柔組織、および樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材部は量が少ない。分野壁孔はトウヒ型からヒノキ型でやや大きく、1分野にふつう2個。

ヒノキは福島県以南の主に暖温帯に分布し山地の尾根沿いや緩斜面などに生育する、高木になる常緑針葉樹である。現在のまとまった分布は中部地方や紀伊半島、四国南部にある。材は通直でやや軽軟、加工し易く強度に優れる上、耐朽性が著しく高い。

(2) コナラ属クスギ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版 2a-2c: 農具状薄板材

年輪のはじめに大型の丸い道管が単独で1～2列に並び、晩材では小型で丸い厚壁の道管が放射状～火災状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は単列同性的のものに大型の広放射組織が混在する。

クスギ節にはクスギとアバマキが含まれる。いずれも重硬で弾性を持つ材で、保存性は中庸、割裂・加工は困難である。

(3) ヒイラギ *Osmanthus heterophyllus* (G. Don)

P.S.Green モクセイ科 図版 3a-3c: 薄板材

ごく小型で角張った道管が道管状仮道管とともに斜め方向に断続的に連なる帯をなして配列する紋様孔材。斜めの帯は年輪内でもしばしば分岐したり収斂したり方向を変えたりする。年輪のはじめには木部柔組織が2～3細胞幅の帯をなす。道管の穿孔は単一。放射組織は上下端の1～2細胞が直立細胞からなる異形で1～3細胞幅、多列部は10細胞幅以下で背は低い。

ヒイラギは常緑小高木で、福島県以南に分布する。材は硬くしなやかで、耐久性が高い。

(4) 単子葉植物 *Monocotyledoneae* 図版 4b: 堅櫛 試料は漆膜に保護されて形状が保たれているものの、木質部の保存状態が著しく悪い。切片は放射断面のみ得られた。長方形の基本組織が径方向に4列程度配列し、不明瞭であるが維管束または維管束鞘に相当する組織が確認される。遺物の破断面の観察では、外形が直径1mm弱、中空の植物である。単子葉草本類の茎である可能性がある。

単子葉植物の草本類には、ヨシ属やカヤツリグサ科あるいはイグサ科などがある。

4. 考察

(1) 富田宮下遺跡

中近世の2点の材を同定した結果、1号井戸から出土した横槌はヒイラギであった。ヒイラギは耐久

性に高く、横植として用いるに適った材質を持つ。

旧流路内から出土した薄板材はヒノキであった。木取りが極目で薄い板であることから、樹種と形状から何らかの木製品の破片であったことも考えられる。

(2) 富田大泉坊 A 遺跡

3世紀後半から4世紀の2点の材を同定した結果、12号溝から出土した農具状薄板材はコナラ属クスギ節であった。この時期の鋸や鋸にはクスギ節の極目材が用いられることから、樹種と木取りからみても総合的である。

3～5区の低地部から出土した堅櫛は単子葉植物

であった。櫛を束ねて結束し、そこを折り曲げて頭部とした堅櫛は古墳時代からの出土例が多く、その樹種は竹筴類（タケ亜科）と同定されているものが多い（山田，2003）。しかし、本資料は直径1mm弱で揃っていることから、組織および形状から推定するとタケ亜科ではなく、中空の単子葉草本類の茎と考えられる。

（佐々木由香・藤根 久、パレオ・ラボ）

引用文献

山田昌久(1993)日本列島における木質出土遺跡文献集成—用材からみた人間・植物関係史。『植生史研究特別号1』242p, 日本植生史学会, 考古資料大観第8巻, 348, 小学館。

第6節 富田大泉坊 A 遺跡の大型植物遺体

1. はじめに

富田大泉坊 A 遺跡は前橋市富田町に位置する遺跡である。遺跡の立地する富田町は、赤城山南麓に延びる台地の先端部に位置し、標高は約100mである。Z遺跡は、南に流れる近大泉坊川左岸の台地上および低地に立地する。ここでは3世紀後半から4世紀前後の溝や、古墳時代の遺物を中心とする古墳時代から奈良時代の包含層（グリッド出土）から取り上げられた大型植物遺体9試料を同定し、食用などに利用された植物あるいは植生について検討する。

2. 試料と方法

試料は現場で取り上げられた9試料である。試料の出土位置は、9号溝（1試料）、12号溝（3試料）、28号溝（1試料）、30号溝（1試料）、5区47-F-9グリッド（1試料）、低地部（2試料）である。大型植物遺体の同定は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。点数は完形または1/2以上残存しているものを1とし、1/2未満を破片とした。破片でも接合できるものは個体数で計数を行った。同定された試料は（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団で保管している。

3. 結果同定の結果

木本植物のオニグルミ核、クスギ果実、コナラ属

クスギ節未熟果・殻斗、ナラガシワ果実、モモ核の5分類群が見いだされた。試料番号ごとの同定結果は表18に示す。以下に遺構別に産出した種実を記載する。

9号溝（4世紀）：モモ核が1点出土した。

12号溝（4世紀前後）：オニグルミ核1点、クスギ果実1点、コナラ属クスギ節（以下クスギ節）殻斗1点、ナラガシワ果実5点、モモ核1点が出土した。ナラガシワはいずれも潰れていた。

28号溝Ⅷ層（4世紀）：オニグルミ核破片1点、クスギ節未熟果1点・殻斗2点、モモ核1点が出土した。

30号溝（3世紀後半から4世紀）：オニグルミ核破片1点が出土した。

5区47-F-9グリッドⅤ層（古墳時代から奈良時代）：モモ核1点が出土した。

低地部：クスギ節殻斗1点、モモ核1点が出土した。

以下に、各試料の種実遺体を記載する。

(1) オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. 核 クルミ科

核が出土した。黄白色～暗褐色で、完形または半割程度。完形は下端部が一部欠損しているが、自然

表18 富田大泉坊A遺跡の種実同定結果(括弧は破片数を示す、現状で割れているが接合するものは完形とみなした)

分類群	整理番号 出土位置 部位	No.504 12号溝	No.505 12号溝	No.506 9号溝	No.507 12号溝	No.508 30号溝 No.1	No.509 低地部	No.510 28号溝 埋層	No.511 47-F-9G V層	No.512 低地部
オニグルミ	核				1	(1)		(1)		
クスギ	果実		1							
コナラ属クスギ節	未熟果 殻斗						1			
ナラガシワ	果実	4	1				2		1	
モモ	核			1	1		1	1	1	

か動物によるものかは不明であった。同様に、半割と約半割の2点は自然か人為、あるいは動物による食害痕か不明であった。完形は長さ34.2mm、幅28.3mm、厚さ23.3mm。側面観は広卵形。緻密で硬い。表面に縦方向の縫合線があり、浅い溝と凹凸が不規則に入る。

(2) クスギ *Quercus acutissima* Carruthers 果実 ブナ科

果実が出土した。茶褐色で、臍部は赤みが強い茶褐色。果実はつぶれた状態で産出した。臍は他のコナラ属と異なり、細かい円形～楕円形の鱗のようなクリに近い構造がみられる。また臍の中央部が顕著に窪む。果皮には縦方向に細かい筋がある。

(3) コナラ属クスギ節 *Quercus sect. Prinus* 未熟果・殻斗 ブナ科

未熟果と殻斗が出土した。黒褐色で、深い球形。クスギ節の成熟した殻斗には線形に長く伸びて外側に反り返る鱗片(総苞片)が螺旋状に密集するが、遺体ではほとんどが付け根付近で折れている。鱗片は厚い。クスギかアベマキは鱗片の形状で区別されるが、鱗片がほとんど残存していないため、クスギ節とした。未熟果はほとんど全体を殻斗が包み、厚く、線形に長く伸びる鱗片が折れた状態であったため、クスギ節とした。クスギ節にはクスギとアベマキがある。

(4) ナラガシワ *Quercus aliena* Blume 果実 ブナ科

果実が出土した。果実は明茶褐色、臍は黄褐色

で、果実はコナラより大きく寸割で、中心よりも下方に最大幅があり、側面観は逆U字形になる。着点は大まかに平坦な形状を呈すが、中央部がやや尖るものもある。大きさと最大幅の位置、着点の形状を基準としてナラガシワと同定した。長さ23.6mm、幅17.8mm。ナラガシワの個体数は臍の数を基準とした。

(5) モモ *Amygdalus persica* L. 核 バラ科

核が出土した。黄褐色～淡褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は円形～ゆがんだ楕円形で先が尖る。下端に大きな臍がある。表面に不規則な深い皺がある。また片側側面には縫合線に沿って深い溝が入る。長さ17.7～31.9mm、幅14.5～26.2mm、厚さ12.8～20.3mmと大きさの変異幅が大きい。表面がやや劣化しているものが多い。グリッド出土のNo.511は一回り小さく、動物か人為により、臍から縫合線にむかって1/3程度割られていた。

4. 考察

現地取り上げ試料で見いだされた種実、オニグルミ核、クスギ果実、コナラ属クスギ節未熟果・殻斗、ナラガシワ果実、モモ核であった。いずれの分類群も5点以下の出土であった。クスギ節にはクスギとアベマキが含まれるが、未熟果と殻斗には完形で残存する試料がなかったため、クスギ節の同定に留めた。クスギ節の果実ではクスギのみが出土した。モモは栽培植物であるが、大きさにばらつきがみられた。

オニグルミヤクスギ、ナラガシワは食用可能な種であり、クスギとナラガシワは食用するためにアケ抜きを必要とするが、形状からは人間が利用した痕跡は明確に見いだされなかった。ナラガシワは果実のみの出土で、頂部が割れて潰れているものが多かったが、出土時の情報が不明のため、利用については可能性を示すに留める。

ナラガシワはコナラ属の中でも、山地や山野のほか、谷内などの低地に生育する。しかし、現在関東地方の低地部ではナラガシワの生育はほとんど確認できない。しかし遺跡出土資料では縄文時代後・晩期を中心に、低地遺跡で現地性の高いナラガシワの出土例が多いことが知られている（佐々木ほか、2007）。群馬県内では上戸塚正上寺遺跡の縄文時代晩期から弥生時代中期の3面河道、元総社寺田遺跡の縄文時代から弥生時代の低地部と奈良・平安時代の河道、天引狐崎遺跡の弥生時代から古墳時代の旧河川、新保遺跡の弥生時代後期前半のC溝と古墳

時代前期のB溝から出土が確認されている（洞口、2007）。本遺跡では4世紀前後の12号溝から出土したが、ナラガシワの時空間的分布を追うことにより、植生の変化や人間の関与についての検討が可能になると考えられる。

5. おわりに

富田大泉坊A遺跡の溝などから出土した種実の同定を行った結果、木本植物のオニグルミとクスギ、クスギ節、ナラガシワ、モモが見いだされた。（佐々木由香・バンダーリスダグシヤン、

バレオ・ラボ）

引用文献

- 洞口正史（2007）群馬県埋蔵文化財調査事業団種実類調査遺跡集成、研究紀要25、139-154。群馬県埋蔵文化財調査事業団。
 佐々木由香・工藤雄一郎・百原 新（2007）東京都下宅部遺跡の大型植物遺体からみた縄文時代後半期の植物資源利用。植生史研究、15-1、35-50。

おわりに

以上のように、藤岡大胡線住宅街地基盤整備事業に伴って発掘調査が実施された、前橋市東部の富田町、小島下町、江木町に所在する富田新井遺跡、富田大泉坊B遺跡、富田大泉坊A遺跡、富田宮田遺跡、富田宮下遺跡の5遺跡の出土文化財等を報告してきた。詳細はくり返さないが、5遺跡からは縄文時代草創期から前期にかけての遺物、或いは古墳時代前・中期の遺物や律令期の集落址など、旧石器時代から江戸時代以降に至る時期の多くの遺構を調査し、遺物が得られ、様々な発見があった。この中で特に注目されるのは富田大泉坊A遺跡で発見された弥生時代の末から古墳時代の初めの時期の溝などの遺構やそこから出土した多くの土器群であり、木器群であろうと思う。弥生土器の大型壺を初めとする出土土器は端境期の良好な資料として整理段階から注目されており、今後の研究に大いに資するものと期待される。また内陸県の本県にあって木製品の出土は日常的ではないのであるが、富田大泉坊Aからは木製品が多く出土した。本県に於ける木製品は広葉樹を中心とするため劣化が早く進行するが、幸いも農具や梯子など幾つかについて保存処理を行うことができた。

こうした木製品の中で特に注目されたのは、黒漆を塗布された堅穴櫛であった。残念ながら出土位置が特定できなかったものの、木製品の出土状況やその形態から推して古墳時代前期頃かと思われるこの堅穴櫛は、細かい繊維を簾状に結束し、逆U字状に束ねて下位を横位に結束したもので、黒漆を塗布したものである。櫛部分は欠損していた。こうした堅穴櫛は本県では3基の古墳に続く出土であったが、綿貫観音山古墳例は漆部分が残るだけであるため、木質まで確認できた富田大泉坊A遺跡例は貴重な発見であった。また第8章第4節に報文を掲載したように、科学分析の結果、富田大泉坊A遺跡の堅穴櫛は炭を混ぜた黒漆を1回塗布しただけのものであり、木質は従来言われていた竹製とは異なる、種類までは分か

らなかったが、細い草の茎を編んだものであることを確認することができた点も貴重な発見であった。

さて、このように本遺跡群の発掘調査では様々な知見を得たのであるが、こうした遺構、遺物を十分に報告できたとは言えないかもしれない。また縄文時代の遺物包含層や弥生時代から古墳時代への移行期の土器など様々な素材があり乍ら、十分な分析や考察も行い得なかった。しかし最低限度の報告はできたと考えており、富田大泉坊A遺跡以下5遺跡のインデックスとしては利用載けるものと思う。今後本報告書をご活用できれば幸いである。

また、本報告書に掲載できなかった遺物や遺構記録類があることを付記しておきたい。これらは当事業団の管理において、群馬県埋蔵文化財調査センターに収蔵することになる。

最後になるが、お世話になった関係各位、特に群馬県中部県民局、前橋土木事務所の皆様と地元の皆様には心よりの御礼を申し上げます。そして四季の様々な気象条件の中で発掘作業に尽力して戴いた発掘作業員を始めとする関係者の皆さんと整理作業を支えてくれた整理補助員各位、並びに同僚達に謝意を述べ、稿を閉じたいと思う。

表 19 富田新井遺跡出土遺物観察表

※ 弥生時代末から古墳時代初期の土器は明確なものだけを弥生土器とし、その他のものは土器とした。従って土器としたものの中に弥生土器が混ざる可能性がある。
 ※ 非掲載遺物は遺構・構内・部位毎に一回だけ分類した。表末に遺跡で一括したものを掲載した。
 ※ 掲載遺物の石材鑑定は掲載遺物は飯島隆男先生によるものであるが、非掲載遺物の石材については編者が判断したものである。

1号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・図 版番号
1	土師器碗	口径 13.5 底径 7.3 器高 5.5 (1/2)	内面吸炭による黒色処理。回転軸調整形か。底面調整。内面整形後、口縁～体部横位の。底面一方への跳書き。	9世紀前半	第9図 P.L. 19
2	土師器杯	残径 4.7 × 3.5 厚 0.5 (底部破片)	外面跳削り。内面指撫でで「土」(か)の墨書。		第9図 P.L. 19
3	須恵器杯	口径 (12.7) 底径 7.0 器高 4.1 (2/3)	内面を中心とした酸化焙焼成。にぶい黄褐色。左回転軸調整形。底面回転赤切り磨し。	9世紀前半	第9図 P.L. 19
4	須恵器杯	口径 (13.4) 底径 (8.4) 器高 (4.0) (1/4)	挟雑物粗だが少量。灰白色。回転軸調整形。底面切り磨し後左回りの跳調整。	8世紀後半	第9図 P.L. 19
5	須恵器杯	口径 12.1 底径 7.2 器高 3.6 (1/4)	挟雑物粗でやや多量。灰色。左回転軸調整形。底面赤切り切り放し。	9世紀前半	第10図 P.L. 19
6	須恵器鉢	残径 6.0 × 5.6 厚 1.1 (破片)	外面平行印き目。内面青海流。	第10図	第10図 P.L. 19
7	須恵器鉢	残径 5.1 × 3.6 厚 0.6 (破片)	外面平行印き目。内面青海流。	第10図	第10図 P.L. 19
8	紡錘車	径 4.0 × 3.8 厚 1.3 1.638g	横断面台形。中央に径 0.85 × 0.82cm の穿孔。側面と底面に整形による磨痕見られる。表裏・側面よく研磨。	滑石	第10図 P.L. 19
9	台石	残幅 14.4 残長 5.6 厚 4.8 456g (一部破片)	平面形が円又は楕円形でやや扁平な河床礫使用。表面に研磨面形成される。	石英閃緑岩	第10図 P.L. 19
10	台石	残径 15.3 × 14.5 厚 4.9 108.5g (縁辺欠損+所散見)	平面形三角形の河床礫使用。表面に研磨面形成。	粗粒輝石安山岩	第10図 P.L. 19
11	鉄滓か	残径 5.0 × 3.8 厚 3.9 (破片、他に一小片)	土壌多く巻き込む。鉄分少量。網型鉄滓片か。		第10図 P.L. 19

2号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・図 版番号
1	土師器杯	口径 12.2 底径 8.4 器高 3.3 (4/5)	褐色。口縁横撫で。体部外面指撫でで型起こしによるものか一部ひび割れ。底部左回りの跳削りで、「田」字の墨書。内面体部横位の跳撫で。底部回し午の指撫で。	8世紀後半	第11図 P.L. 19
2	土師器杯	口径 12.3 底径 10.3 器高 3.0 (完形)	褐色良好。にぶい褐色。口縁横撫で。外面体部指撫で。底面左回りの跳削り。内面回し午跳撫で。腰部に指直痕見。	8世紀後半	第11図 P.L. 19
3	土師器杯	口径 12.4 底径 10.2 器高 3.3 (口縁～腰部 1/4 欠損)	褐色。口縁横撫で。外面体部指撫で。底面跳削り。内面体部～底部外周回し午の。底部中央細く指撫で。	8世紀後半	第11図 P.L. 19
4	土師器杯	口径 11.2 底径 10.0 残高 3.4 (口縁～腰部 2/3, 底面大半欠損)	褐色。口縁外周吸炭。口縁横撫で。外面体部指撫で。底面左回りの跳削り。体～底部内面回し午の跳撫でか。	8世紀後半	第11図 P.L. 19
5	土師器杯	口径 12.6 残高 3.0 (1/3)	褐色。口縁横撫で。体部外面指撫で。底面概ね一方への跳削り。	8世紀後半	第11図 P.L. 19
6	土師器杯	残径 2.2 × 2.7 厚 0.3 (底部破片)	にぶい黄褐色。底面跳削り。底部内面撫で後「日」の刻書。	第11図	第11図 P.L. 19
7	土師器鉢	口径 20.0 残高 12.4 (口縁～体部上位 1/4)	褐色。内面多少荒れる。口縁横撫で。体部外面何部横位。下位位位の跳削り。内面横位の跳撫で。	8世紀後半	第12図 P.L. 19
8	須恵器杯	口径 (13.8) 底径 (7.2) 器高 3.7 (1/4)	挟雑物やや粗。灰黄色。焼成汁一部酸化焙焼成。右回転軸調整形。底面切り磨し後、回転跳調整。	8世紀後半	第13図 P.L. 19
9	須恵器杯	口径 12.4 残高 3.5 (口縁～腰部 1/3)	灰白色。右回転軸調整形。焼成良好。	8世紀後半	第13図 P.L. 19
10	須恵器杯	口径 (12.7) 底径 (7.4) 器高 3.8 (1/4)	灰黄色。挟雑物粗粒で少。灰黄色。右回転軸調整形。底面回転赤切後、外周跳調整。	8世紀後半	第13図 P.L. 19

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
11	須恵器環	底径 7.9 底径 0.9 (腰部の一部及び底部片)	回転轆轤整形。内面吸炭による黒色処理。底面回転糸切接外周 左回りの回転轆轤調整。底面に「目」の墨書。	8世紀	第13図 P.L.19
12	砥石	径 4.1 × 4.2 残長 9.1 221g (下半部と縁の一部欠損)	表裏・左面と右側面の一部に研磨面形成され、表面の磨耗顕著。 右側面と上端面に切崩れ、整形痕が残る。	砥沢石	第13図 P.L.19

3号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
1	土師器環	口径 15.4 底径 11.3 残高 3.2 (口縁～底部破片)	橙色。口縁横撫で。体～底部外面丸削り、内面回転させ乍の指 撫で後放射状の磨文。	8世紀後半	第14図 P.L.19
2	須恵器蓋	口径 10.0 残高 1.2 (口、頂部欠損)	伏雑物少なく焼成良好。灰色。回転轆轤整形。腰部下方に引く。 上面左回りの轆轤調整。	8世紀後半か	第14図 P.L.19
3	砥石	長 17.9 幅 8.1 厚 4.4 1,030g (一部欠損)	河床礫使用。表裏両面に研磨面。左右両側とうえ下端に敲打痕。 特に上下の使用顕著。	粗粒輝石安山岩	第14図 P.L.19
4	こも編み石	径 5.1 × 3.4 長 7.8 162g (完形)	字形の河床礫使用。左右両側に敲打または研磨による袈れを作り、 この位置に幅 1.9 ～ 2.1cm の帯状の磨耗帯一帯。	粗粒輝石安山岩	第14図 P.L.19
5	白石	径 15.2 × 19.5 厚 6.3 1,982g (ほぼ完形)	丸餅形の河床礫使用。表裏面に強い研磨面形成される。	粗粒輝石安山岩	第14図 P.L.19
6	鉄製鉤	残長 10.3 幅 4.5 径 0.7 × 0.7 (上1/2欠損) 19.0g	淵伊裏鉤か。釣り針状を成し、尖端やや細まる。		第15図 P.L.19

4号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
1	土師器環	口径 13.6 器高 3.8 (完形)	焼成良。にぶい橙色。口縁横撫で。体部外面斜方向への指撫で、 底面左回りの丸削り、で「十」字の墨書。体～底部内面回し乍の 指撫で。	8世紀前半	第16図 P.L.19
2	土師器環	口径 13.4 器高 3.1 (完形)	橙色。口縁横撫で。体部外面指撫で、底面左回りの丸削り。体 ～底部内面左回りの指撫で。	8世紀前半	第16図 P.L.19
3	土師器環	口径 12.4 器高 3.3 (ほぼ完形)	器面寛れる。明褐色。口縁横撫で。体部外面指撫で、底面概ね 一方への丸削り。体～底部内面左回りの(丸)撫で。	8世紀前半	第16図 P.L.19
4	土師器環	口径 13.0 器高 3.5 (一部欠損、ほぼ完形)	にぶい褐色。口縁横撫で、外面体部指撫で、底面丸削りで指撫 痕集中的残存。内面体部横位、底面回し乍の指撫で。	8世紀前半	第16図 P.L.19
5	土師器環	口径 13.0 器高 3.5 (口縁1/4欠損)	焼成良好。橙色。口縁横撫で。外面体部指撫で、底面(左)回 りの丸削り。内面体部横位、底部概ね一方方向への指撫で。	8世紀後半	第16図 P.L.19
6	土師器環	口径 13.7 底径 6.5 器高 3.4 (3/4)	にぶい褐色。口縁横撫で。体部外面指撫で、底面左回りの丸削り。 内面体部横位、底部一方方向中心の指撫で。	8世紀前半	第16図 P.L.19
7	土師器環	口径 12.2 器高 4.0 (2/3)	橙色。口縁横撫で。体部外面指撫で、底面左回りの丸削り。内 面体部回し乍、底部回し乍の細かい指撫で。	8世紀前半	第16図 P.L.19
8	土師器環	口径 12.9 器高 3.0 (2/3)	焼成良好。橙色。口縁横撫で。外面体部指撫で、底面一方中心 の丸削り。内面回し乍の指撫で。	8世紀後半	第16図 P.L.20
9	土師器環	口径(12.0) 器高 2.3 (口縁～底部外周破片)	橙色。口縁一体部内面横撫で、体部外面指撫で、底面丸削り。 体～底部外面に「人」字の刻書。	8世紀後半	第16図 P.L.20
10	土師器環	口径(13.2) 器高 3.1 (1/2)	にぶい褐色。口縁横撫で。体部外面(左)回り、底面一方丸削り、 内面体部回転させ乍の丸、底部内面指撫で。	8世紀前半	第16図 P.L.20
11	土師器環	口径 13.4 器高 3.1 (1/2)	橙色。口縁横撫で。外面体部指撫で、底面左回りの丸削り。内 面体～底部回し乍の指撫で。	8世紀後半	第16図 P.L.20
12	土師器環	口径(15.4) 底径(8.5) 残高3.9 (1/3)	口縁横撫で。体部外面指撫で、底面左回りの丸削り。体～底部 内面回し乍の指撫で。	8世紀前半	第16図 P.L.20
13	土師器環	口径 13.5 底径 6.4 器高 3.0 (1/3)	焼成良好。にぶい褐色。口縁横撫で。体部外面指撫で、底面一 方への丸削り。体～底部内面左回りの指撫で。	8世紀後半	第16図 P.L.20
14	土師器環	口径 12.6 器高 3.0 (1/3)	にぶい褐色。口縁横撫で。体部外面指撫で・指押さえ、底面左 回りの丸削り。体～底部内面回し乍の指撫で。	8世紀後半	第16図 P.L.20
15	土師器環	口径(13.3) 残高 2.9 (1/3)	橙色。口縁横撫で。体部外面指撫で、回し乍の底面丸削り。体 ～底部内面回し乍の指撫で。	8世紀後半	第17図 P.L.20

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
16	土師器 杯	口径(12.9) 器高 2.7 (1/3)	にぶい褐色。口縁横撫で。外部外面指撫で、底面掘削り。体～底面内面回転させ乍の指撫で。	8世紀後半	第17図 P.L.20
17	土師器 杯	口径(13.0) 残高 3.4 (1/4)	にぶい褐色。口縁横撫で。外部外面指撫で、底面回し乍の掘削り	8世紀前半	第17図 P.L.20
18	土師器 杯	口径(14.2) 底径(12.6) 器高 3.0 (1/4)	焼成良好。にぶい褐色。口縁横撫で。外部外面～底面左回りの掘削り。体～底面内面回し乍の指撫で。底部中央に「山」字の指撫き。	8世紀後半	第17図 P.L.20
19	土師器 杯	口径(13.4) 残高 2.8 (1/4)	にぶい褐色。外面口縁横撫で、体～底面回し乍の掘削り後体部撫で。内面回し乍の指撫でで滑らか。	8世紀後半	第17図 P.L.20
20	土師器 杯	口径(13.0) 器高 3.1 (1/4)	にぶい褐色。口縁横撫で。外部外面指撫で。底面概ね一方向中心の掘削り。体～底面内面回し乍の指撫で。	8世紀後半	第17図 P.L.20
21	土師器 杯	口径(13.0) 残高 3.1 (1/4)	灰色。口縁横撫で。外部外面指撫で、底面左回りの掘削り。体～底面内面回し乍の指撫で。	8世紀後半	第17図 P.L.20
22	土師器 杯	口径(16.0) 残高 5.0 (1/4)	内面黒色処理。にぶい黄褐色。外面口縁横撫で、体部横位の指撫で、腰部回し乍の掘削り。内面口縁横撫で、口縁下位～腰部横位の発露後後位の暗文。	8世紀後半	第17図 P.L.20
23	土師器 盃	口径 15.6 底径 8.6 器高 5.0 (2/3)	褐色。口縁横撫で。外面体部指撫で、底面回し乍の掘削り。内面体～底面外周回し乍、底部中央一方へ指撫で。	8世紀前半	第17図 P.L.20
24	土師器 盃	口径 17.8 器高 5.2	焼成甘く、内面中心に器面莞れる。褐色。口縁横撫で。外部外面～底面(左)回転させ乍の掘削り後、体部上位指撫で。内面体部撫で、底面内面回し乍の指撫で。	8世紀後半	第18図 P.L.20
25	土師器 盃	口径(13.2) 残高 5.0 (口縁～体部 1/4)	にぶい赤褐色。口縁外面に輪積痕。扶簾物少。口縁横撫で。体部外面横位の細毛目後撫で、内面横位の指撫で。	8世紀後半	第18図 P.L.20
26	土師器 盃	口径(11.6) 残高 4.6 (口縁破片)	焼成良好だが外面莞れる。扶簾物比較的細く少量。口縁横撫で。	8世紀後半	第18図 P.L.20
27	土師器 盃	口径(24.0) 残高 3.4 (口縁部 1/4)	焼成比較的良好だが器面莞れる。褐色。口縁横撫で。	8世紀少	第18図 P.L.20
28	土師器 盃	口径(24.4) 残高 8.0 (口縁～胴部上位 1/3)	扶簾物粗で多し。にぶい黄褐色。口縁横撫で。外部外面後位の掘削り、内面横位の掘削り。	7世紀前半	第18図 P.L.20
29	土師器 盃	口径(24.0) 残高 12.0 (口縁～体部破片)	明赤褐色。口縁横撫で。外部外面後位の掘削り、内面後位の掘削り。	7世紀前半	第18図 P.L.20
30	須恵器 蓋	口径 底径 器高 (1/4)	扶簾物少。灰色。右回転軸線整形。頂部切り難し後、貼削り付け。	8世紀後半	第18図 P.L.20
31	須恵器 蓋	口径(15.0) 残高 1.5 (1/6)	扶簾物粗で少。灰サリーブ色。回転軸線整形。外面頂部回転調整。端部下方に折れる。	8世紀後半	第18図 P.L.20
32	須恵器 杯	口径(13.6) 底径(7.7) 器高 3.4 (1/4)	扶簾物細粒で少。灰白色。焼成やや甘い。右回転軸線整形。底面切り難し後調整。	8世紀後半	第18図 P.L.20
33	須恵器 杯	口径(12.5) 底径(8.0) 器高 3.7 (口縁～底部破片)	右回転軸線整形。底面切り難し後回転調整。腰部外面回し乍の掘削り。	8世紀前半	第18図 P.L.20
34	須恵器 杯	口径(12.4) 底径(5.0) 器高 3.7 (口縁～底部破片)	灰色。右回転軸線整形。焼成良好。底面回転赤切後、外周回転調整。	8世紀後半	第18図 P.L.20
35	須恵器 杯	口径(11.0) 底径(7.5) 残高 3.7 (腰～底部破片)	灰色。扶簾物粗でやや多。右回転軸線整形。底面回転赤切。腰部の一部に後位の掘削り痕。	8世紀後半	第18図 P.L.20
36	須恵器 盃	口径 15.2, 底径 11.5 器高 1.5 (1/2)	灰白色。内面に自然軸。右回転軸線整形。底面回転掘削り。腰部外面回し乍らの掘削り。	8世紀後半	第18図 P.L.20
37	甕焼 茶材	5.1 × 5.2 × 2.5 (破片)	表面に焼土が見られる。褐色。細粒とスサ混入する。表面指撫で。	第18図	P.L.20
38	磨石	径 4.4 × 4.0 厚 3.0 56g (完形)	楕圓形の河床礫使用。底面に研磨面形成され、敲打痕残る。	粗粒礫石安山岩	第18図 P.L.20
39	磨石	長 15.0 幅 7.1 厚 4.3 (完形) 714.7g	横断面三角形の河床礫使用。表裏面と右側面に研磨面形成。中位に幅 4.5 ～ 5.0cm の帯状の磨耗痕一周。	粗粒礫石安山岩 こも堀み石に転用	第18図 P.L.20
40	磨石	径 6.7 × 3.8 残長 10.0 (下半部欠損) 439.9g	コマペパン形の河床礫使用。裏面に研磨面形成され、中位に幅 3.8cm 以上の帯状の磨耗痕一周。	粗粒礫石安山岩 こも堀み石に転用	第18図 P.L.20

5号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	土師器杯	口径(12.1) 底径(8.0) 器高3.1 (1/2)	にぶい橙色。内面吸炭の痕跡。口縁横撫で。外面体部指撫で、底面(外周左回りの)甍削り。内面体部横位、底面不定方向の指撫で。	9世紀前半	第19国 P.L.20
2	土師器杯	口径(12.6) 器高3.2 (1/3)	橙色。口縁横撫で。体部外面指撫で、底面甍削り。体～底部内面回転させての指撫で。	8世紀後半	第19国 P.L.20
3	土師器杯	口径(13.0) 底径(10.1) 器高3.0 (1/4)	にぶい赤褐色。口縁横撫で。体部外面細かい指撫で、底面甍削り。体部～底部内面回し乍の指撫で指更直残る。	9世紀前半	第19国 P.L.20
4	土師器壺	口径20.0 底径3.7 器高28.8 (1/2)	内面やや変れる。にぶい橙色。口縁横撫で。体部外面上位横位、中下位段位の甍削り、底面甍調整。内面体部上半左方向への指撫で、体部下～底部段位の指撫で。	9世紀前半	第20国 P.L.20
5	土師器壺	口径20.4 底径2.7 器高28.2 (1/2)	にぶい黄褐色。内面やや変れる。口縁横撫で。外面肩部左方向への、胴～腰部下方向への甍削り。体部内面左方への指撫で中位接合部横位の指撫で。	8世紀後半	第20国 P.L.20

6号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	土師器塔	口径16.7 底径2.5 器高7.4 (1/3)	にぶい橙色。外面口縁横位、体部斜方向の甍削り。底面僅かな上げ底で指撫で。口縁～底部内面斜方向の刷毛目後口縁～肩部横位の指撫で、体部以下段位の甍削り。	4世紀後半	第22国 P.L.20
2	土師器台付 壺(別～体部1/4)	口径 底径 器高 (別～体部1/4)	埃雜物少。灰黄褐色。外面肩部横位、体部左上から下方への刷毛目。内面肩部横位、体部斜方向の指撫で。	4世紀後半	第22国 P.L.20
3	土師器壺	底径6.1 残高6.1 (腰部～底部1/3)	外面にぶい橙色。内面淡黄色。外面胴部横位の指撫で、腰部と底面中央指撫で、底面外周甍調整。内面胴部横位、腰部横位、底部概ね2方向への指撫で。	4世紀初	第22国 P.L.21
4	土師器塔	口径12.8 底径4.7×5.0 器 高15.8 (1は完形)	内面変れる。口縁外面横位、内面横位の刷毛目後口縁横撫で。体部外面横位の刷毛目後段位の甍削り、底面指撫でと甍削り。内面口縁部接合痕・横位の指撫で後一段段位の甍削り。内面体部段位の指撫で、底部刷毛による圧痕。	4世紀後半	第22国 P.L.21

7号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	土師器碗	口径11.6 底径5.0 器高7.1 (口縁1/5欠損)	にぶい黄褐色。口縁～体部外面段位の指撫で口縁部一部横撫で、底面弱い上げ底で外周指撫で。口縁～底部内面左回りの指撫で。	4世紀後半	第23国 P.L.21
2	土師器高杯 (杯部1/2)	口径17.0 残高79.3	にぶい橙色。内外面変れ。口縁横撫で後外面下段斜方向指撫で。体部外面左方向への甍削り後撫で、内面横位の指撫で。	4世紀後半	第23国 P.L.21

8号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	土師器杯	口径12.2 底径7.4 器高3.4 (4/8)	橙色。境成良好。口縁横撫で。外面体部指撫で、底面不定方向の甍削り。体～底部内面(左へ)回し乍の指撫で、底部中央に集中的な指更直。	8世紀後半	第24国 P.L.21
2	土師器杯	口径13.0 底径11.3 器高3.2 (3/4)	にぶい橙色。口縁横撫で。体部外面指撫で、底面左回りの甍削り。上「ト」字の墨書。内面体部横位の、底部一方への指撫で。	8世紀後半	第24国 P.L.21
3	土師器杯	口径12.6 器高3.2 (3/4)	橙色。口縁横撫で。外面体部指撫で、底面外周左回り、中央概ね一方へ甍削り。内面体部回し乍、底部細い指撫で。	8世紀後半	第24国 P.L.21

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
4	土師器 杯	口径(12.0) 器高 3.2 (2/3)	にぶい褐色。口縁横撫で。外部外面指撫で、底面一方向中心の 鹿削り。体～底部内面回し午の指撫で。	8世紀後半	第24回 P.L.21
5	土師器 杯	口径 12.7 器高 3.5 (2/3)	明褐色。口縁横撫で。外部外面指撫で、底面右回りの鹿削り。 体～底部内面回し午の指撫で。	8世紀後半	第24回 P.L.21
6	土師器 杯	口径 13.2 底径 9.6 残高 2.9 (1/2)	褐色。口縁横撫で。外部外面指撫で、底面鹿削り。内面体部指撫で、 底部指撫で。	8世紀後半	第24回 P.L.21
7	土師器 杯	口径(12.6) 器高 2.6 (1/2)	にぶい褐色。焼成良好。口縁横撫で。外部外面指撫で、底面回 し午の鹿削り。体～底部内面(鹿)撫で。	9世紀前半	第24回 P.L.21
8	土師器 杯	口径(13.0) 残高 3.0 (1/3)	にぶい褐色。口縁横撫で。外部外面指撫で、底面一方向への鹿 削り。体～底部内面回し午の指撫で。	8世紀後半	第24回 P.L.21
9	土師器 杯	口径(12.0) 残高 3.2 (1/3)	にぶい褐色。焼成良好。口縁横撫で。外部外面指撫で、底面回 し午の鹿削り。体～底部内面左回りの指撫で。	8世紀後半	第25回 P.L.21
10	土師器 杯	口径(12.4) 器高 3.2 (1/4)	褐色。外面口縁横撫で、体～底部回し午の鹿削り後体部撫で。 内面回し午の指撫でで滑らか。	8世紀後半	第25回 P.L.21
11	土師器 杯	口径(13.4) 器高 2.7 (1/4)	にぶい褐色。外面口縁横撫で、体部横位の鹿削り後上位撫で、 底部一方への鹿削り。内面回し午の指撫でで滑らか。	8世紀後半	第25回 P.L.21
12	土師器 杯	口径 11.9 器高 3.1 (1/4)	褐色。口縁横撫で。外部外面指撫で、底面左回りの鹿削り。内 面体部左回りの指撫で、底部指撫で。	8世紀後半	第25回 P.L.21
13	土師器 甕 (口縁～肩部破片)	口径(19.6) 残高 7.8 (口縁～肩部破片)	褐色。焼成良好。口縁横撫で、肩部外面上端部撫で、以下左方 への鹿削り。内面左方への指撫で。	8世紀後半	第25回 P.L.21
14	土師器 甕 (体部下位～底部 1/3)	底径 4.7 残高 9.2 (体部下位～底部 1/3)	暗褐色。外部外面斜方向の鹿削り、底面鹿調整。内面体部横位の、 底部内面左回りの指撫で。	8・9世紀	第25回 P.L.21
15	須恵器 甕	口径(14.0) 底径 4.5 器高 3.7 (1/2)	灰白色。外面に自然釉、トナチ片等付着。右回転軸輪盤整形。頂 部切り履し後縁貼り付け。口縁部下方に引く。	9世紀前半	第25回 P.L.21
16	須恵器 高台 付碗	口径 17.8 底径 11.0 器高 7.2 (2/3)	灰褐色少量。灰色。右回転軸輪盤整形。底面回転糸切後高台貼り 付け。	8世紀後半	第25回 P.L.21
17	土師器 甕 (肩部～肩部破片)	残径 4.9 × 4.5 厚 0.8 (肩部～肩部破片)	灰黄色。肩部外面沈線。鉛貼り付け。肩部外面位の鹿削り。内 面横位の鹿削り。	4世紀	第26回 P.L.21
18	紡錘車	径 3.6 × 3.6 厚 0.9 23.0g (完形)	円盤形。中央に径 0.70 × 0.74cmの穿孔。表面に整形による崩れ 見られる。表裏・側面研磨。	滑石	第26回 P.L.21
19	石製模造品 未製品か (表面破片)	残径 1.9 × 2.3 残厚 0.6 1.0g (表面破片)	表面研磨され、残存部上位に径 1mmの浅い未貫通孔穿たれる。	珪質頁岩	第26回 P.L.21
20	刀子	残長 8.1 幅 1.2 厚 0.05 (断部破片) 13.1g	横断面形は二等辺三角形を成す。やや厚手。		第26回 P.L.21
21	鉄板	長 13.5 幅 2.1 厚 0.1 16.3g (破片か)	扇形を成す薄手鉄板。片側隅寄りに径 2 × 1.5mmの孔が見ら れるが穿たれたものかは不明確。		第26回 P.L.21

9号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
1	土師器 杯	口径 11.7 器高 3.7 (ほぼ完形、口縁僅かに欠損)	褐色。口縁横撫で。外部外面指撫で、底面外周回りの、中央 一方への鹿削り。内面体部左回りの指撫で、底面回し午の指撫で。	7世紀後半	第27回 P.L.21
2	土師器 杯	口径 13.1 器高 4.4 (3/4)	焼成良好。にぶい褐色。口縁横撫で。体～底部外面左回りの鹿 削り。内面体部回し午の指撫で、底部回し午の指撫で。	7世紀後半	第27回 P.L.21
3	土師器 杯	口径(20.0) 器高 4.5 (1/3)	にぶい褐色。口縁開き、横撫で。外部外面～底面、概ね一方 向への鹿削り。体～底部内面回し午の(指)撫で。	8世紀前半	第27回 P.L.21
4	土師器 杯	口径 15.1 残高 4.8 (1/3)	褐色。外面口縁横撫で、体部横位の鹿削り後上位撫で、底部縦 横の鹿削り。内面回し午の指撫でで滑らか。	8世紀前半	第27回 P.L.21
5	土師器 碗 (口縁～体部破片)	口径(18.5) 残高 5.3 (口縁～体部破片)	にぶい褐色。口縁横撫で。外部外面型押さえが残り弱い撫で。 底面鹿削り。体～底部内面横位の撫で。	8世紀前半	第28回 P.L.21
6	土師器 甕	口径(25.0) 底径(4.8) 器高 31.2 (1/3)	灰褐色細砂でやや少。にぶい赤褐色。口縁横撫で。外部外面上 下部斜方向、中位位の縦位の鹿削り、内面横位の指撫で。底 部内面指撫で、底面鹿調整。	8世紀中葉	第28回 P.L.21

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
7	須恵器甕	口径一 残高 (12.0) (細一肩部)	頸部横撫で。肩部外面平行印さ、内面宛具痕残る。		第28回 P.L.21
8	須恵器横瓶	口径一 残高 (4.7) (腰～底部)	底部円盤状で胎り付け。腰部外面～底面回転させ乍の撫で、内面撫で。		第28回 P.L.21
9	磁石	長13.1 幅6.5 厚4.4 452g (完形)	箱型の河床礫使用。上端部に敲打痕残り、裏面上位に小さな研磨面形成。右側面中程の袈れに合わせ磨耗痕一周。	粗粒輝石安山岩 こもろみ石に転用	第29回 P.L.22
10	磨石	長15.4 幅6.6 厚3.9 722g (完形)	箱型の河床礫使用。表裏面に研磨面形成。中位に幅3.4cm程の帯状の磨耗痕一周。	粗粒輝石安山岩 こもろみ石に転用	第29回 P.L.22
11	磨石	長13.4 幅7.9 厚5.1 688g (完形)	横断面三角形の河床礫使用。底面に研磨面形成され、中位に幅3.6cm程の帯状の磨耗痕一周。	粗粒輝石安山岩 こもろみ石に転用	第29回 P.L.22
12	磨石	径5.3×4.5 長9.8 235g (完形)	平形の河床礫使用。裏面に弱い研磨面形成され、中位に幅2.6～3.1cmの帯状の磨耗痕一周。	粗粒輝石安山岩 こもろみ石に転用	第29回 P.L.22
13	磨石	径5.7×5.1 長11.6 595g (完形)	直方体状の河床礫使用。表裏、左右面と下端に研磨面形成する。中位に幅2.9cmの帯状の磨耗痕一周。	粗粒輝石安山岩 こもろみ石に転用	第29回 P.L.22
14	磨石	径5.9×4.4 長13.8 450g (完形品)	横断面三角形の河床礫使用。上面の一部と裏面に研磨面形成。中位に幅3.0～3.5cmの帯状の磨耗痕一周。	粗粒輝石安山岩 こもろみ石に転用	第29回 P.L.22
15	磨石	径4.5×3.0 長9.6 155g (完形)	横断面三角形の河床礫使用。裏面に研磨面残る。中位に幅2.6cmの帯状の磨耗痕一周。	粗粒輝石安山岩 こもろみ石に転用	第29回 P.L.22
16	磨石	径4.5×4.1 長12.0 390g	直方体状の河床礫使用。表裏、左右面に研磨面形成。中位に幅3.2～3.9cmの帯状の磨耗痕一周。	粗粒輝石安山岩 こもろみ石に転用	第29回 P.L.22
17	こもろみ石	長13.8 幅8.1 厚4.9 605g	河床礫使用。裏面に幅2.8cm、深さ2mm程の溝状の袈れを通して磨耗痕一周。裏面上位に小さな研磨面形成。	粗粒輝石安山岩 磨石に転用	第30回 P.L.22
18	こもろみ石	径6.0×5.1 残長12.4 465g (表面無上位欠損)	平形の河床礫使用。中位に幅3.8cm程の帯状の磨耗痕一周。	粗粒輝石安山岩	第30回 P.L.22
19	こもろみ石	径7.6×4.9 長15.8 733g (完形)	短靴状の河床礫使用。左側中位の袈れを利用して、幅3.0～3.5cmの帯状の磨耗痕一周。	粗粒輝石安山岩	第30回 P.L.22
20	こもろみ石	長13.2 幅5.5 厚3.5 425g (完形)	扁平された楕円球状の河床礫使用。中位に幅2.3cm程の帯状の磨耗痕一周。	変はんれい岩	第30回 P.L.22
21	こもろみ石	残長9.4 残幅4.8 厚3.5 230g (左縁～下端部欠損)	小判形の河床礫使用。中位に幅3.1～3.5cmの帯状の磨耗痕一周。	粗粒輝石安山岩	第30回 P.L.22
22	石製台座	残径17.1×16.2 厚7.3 2,160g (細縁一部欠損)	河床礫使用。表裏面敲打により平面を作り、表面は調整後研磨し、中央に径4.2×3.6cm、深さ0.8cmの窪み穿つ。	粗粒輝石安山岩	第30回 P.L.22
23	不明石製品 (破片)	残径5.8×7.8 残厚7.8 170g	表面に整形時の幅のある前後残り、平型に削られる。	ニッ佐石 掘り方出土	第30回 P.L.22
24	刀子	残長5.0 幅1.7 厚0.2 6.0g (刀部破片か)	切っ先側の破片と見られる。尖端欠損。薄刃。		第30回 P.L.22

11号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
1	土師器坏	口径13.0 器高3.7 (完形)	褐色。口縁横撫で。体部外面撫撫でで一部脱離で。底面外周左回りの、中央一方への磨削りで、外周部に「上」字の墨書。内面体部傾位の撫でで、底部磨撫で及び撫撫で。	8世紀後半	第33回 P.L.22
2	土師器坏	口径14.3 器高4.2 (4/5)	褐色。口縁～体部内面横撫で。体部外面撫撫で。底面外周左回り、中央一方への磨削りで、中央に「丁」の墨書。底部内面不定方向の撫撫で。	8世紀後半	第33回 P.L.22
3	土師器坏	口径(12.7) 残高3.6 (1/4)	褐色。口縁横撫で。体部外面撫撫で、底面回し乍の磨削り。体～底部内面回し乍の撫で。	8世紀前半	第32回 P.L.22
4	須恵器坏	口径(12.2) 底径(6.3) 器高3.8 (口縁～底部破片)	塊物物粗。右回転軸調整。底面回転さ切。	8世紀後半	第32回 P.L.22
5	土師器甕	口径22.6 残高22.0 (口縁～肩部破片)	塊成良好。褐色。口縁横撫で、外面に指押さえ痕残り。体部内面(底)撫でで肩上位指頭痕、外面磨削り。	9世紀前半 掘り方出土	第34回 P.L.22

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
6	龍天井石	左側 残長 31.0 幅 18.1 厚 12.2 右側 残長 21.0 幅 17.3 厚 13.3 (表・手前と一部裏面、右端割落)	前面電前、裏面燃焼部に接し、左側中心に裏面に狭痕が残る。 裏面と前面、左側手前面、右端端部にはつり調整痕。角柱状に 整形。	未田結凝灰岩 6,520g	第34図 P.L. 22

12号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
1	土師器 杯	口径 11.0 器高 3.6 (完形)	にぶい褐色。口縁横撫で。体部外面指撫で、底面左回り、底面 中央一方への巻削り。体～底部回し乍、底面中央一方への指撫で。	8世紀後半	第35図 P.L. 22
2	土師器 杯	口径 12.4 器高 3.8 (ほぼ完形)	褐色。口縁横撫で。体部外面指撫で、底面左回りの巻削り。体 ～底部内面回し乍の指撫で。	8世紀後半	第35図 P.L. 22
3	土師器 杯	口径 12.0 器高 3.5 (一部欠損、完形に近い)	にぶい褐色。口縁横撫で。体部外面指撫で、底面左回りの巻削り、 体～底部内面回し乍の指撫で又は指撫で。	8世紀前半	第35図 P.L. 22
4	土師器 杯	口径 11.9 器高 3.8 (一部欠損、完形に近い)	褐色。底部内面覓れる。焼成甘い。口縁横撫で。底部外面回し 乍の巻削り。底部か内面撫でか。	8世紀前半	第35図 P.L. 22
5	土師器 杯	口径 (15.2) 器高 3.8 (1/2)	褐色。器面覓れる。口縁横撫で。底面回し乍の巻削り。底部内 面指撫でか。	8世紀後半	第35図 P.L. 22
6	土師器 杯	口径 (13.2) 器高 3.7 (1/4)	褐色内面体部以下多少覓れる。口縁横撫で。体部外面指撫で、 底面巻削り。体～底部内面指撫で。	8世紀後半	第35図 P.L. 22
7	土師器 卵形 壺	口径 (23.4) 底径 (9.6) 器高 31.8 (2/3)	口縁横撫で。体部外面斜方向の巻削り、内面左方への巻撫で。 底部内面指撫で。底面やや丸底で巻調整。	8世紀前半	第35図 P.L. 23
8	土師器 甕	口径 (27.1) 残高 34.6 (口縁～体部破片と体部 1/3)	口縁～体部片: 焼成良好。口縁横撫で。体部外面下方への巻削り、 内面横位の指撫で。 体部破片外面に遺構基材付着。下位外面に吸炭。外面下方への 巻削り、内面横位の指撫で。	7世紀前半	第35図 P.L. 23
9	須恵器 杯	口径 14.6 底径 9.8 器高 3.3 (一部欠損)	灰雑物粗で少量。焼成やや良好。右回転縦軸整形。底面突起こし。	8世紀後半	第35図 P.L. 23
10	こも編み石 (完形)	径 5.1 × 3.9 長 11.0 298g	河床礫使用。中位に幅 2.4 ~ 2.7cm の帯状の磨耗痕一周。	粗粒理石安山岩	第36図 P.L. 23

15号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
1	土師器 杯	口径 (11.4) 残高 2.8 (1/3)	にぶい黄褐色。	8世紀後半	第38図 P.L. 23
2	須恵器 杯	口径 (13.0) 底径 (8.0) 器高 3.9 (1/4)	灰雑物少。褐灰色。内外面吸炭による黒色処理。左回転縦軸整形。 底面回転糸切。	9世紀前半	第38図 P.L. 23
3	須恵器 杯	底径 (8.0) 残高 1.0 (底部 1/4)	暗灰色。右回転縦軸整形。底部回転糸切り切り放し。外周に「高」 の墨書。	第38図 P.L. 23	
4	鉄板	径 2.0 × 2.0 厚 0.1 (破片)	薄い鉄板。	第39図 P.L. 23	

16号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
1	土師器 杯	口径 12.0 器高 3.5 (3/4)	褐色。口縁横撫で。体部外面指撫で、底面左回りの巻削り。体 ～底部内面回転させ乍の指撫で。	8世紀後半	第40図 P.L. 23
2	土師器 杯	口径 (12.0) 底径 6.5 器高 3.1 (1/2)	明褐色。口縁～体部内面横撫で。体部外面指撫で、底面左回り の巻削りで、「又」字墨書。底部内面回し乍の指撫で。	9世紀前半	第40図 P.L. 23
3	土師器 杯	口径 (14.4) 残高 4.6 (1/3)	焼成良好。にぶい褐色。口縁横撫で。体部外面指撫で、底面左 回りの巻削り。体～底部内面回転させ乍の指撫で。	8世紀後半	第40図 P.L. 23

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
4	土師器環	口径(13.0) 底径(9.3) 器高2.8 (1/3)	褐色。口縁横撫で。体部外面指撫で、下位斜方向内調整。底面縦わ一方へ磨削り。体～底部内面回し午の指撫で。	9世紀前半	第40図 P.L.23
5	土師器環	口径12.0 底径7.5 器高3.1 (1/4)	にぶい褐色。口縁横撫で。外面体部指撫で、底面回し午の磨削り。内面体～底部回し午指撫で。	9世紀前半	第40図 P.L.23
6	土師器環	残径4.1×3.7 厚0.5 (底部破片)	褐色。底面磨削り。底部内面指撫で後「目」の刻書。	第45図 P.L.23	
7	土師器蓋	口径(22.0) 残高5.8 (口縁～肩部1/4)	焼成良好。にぶい褐色。コ字口縁。口縁横撫で。肩部横位の磨削り。内面横位の(磨)撫で。	9世紀前半 P.L.23	
8	龍橋茶材か	8.1×6.1×6.3 他 (破片大1点、小3点程)	焼熱受けるが、やや粉質で遺存状態やや不良。崩れ易い。表面一面のこるが平滑。	P.L.23	

17号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
1	土師器環	口径12.8 底径9.6 器高3.8 (一部欠損)	褐色。口縁横撫で。体部外面指撫で、底面左回りの磨削り。内面体部横位の、底部不定方向の指撫で。	8世紀後半	第42図 P.L.23
2	土師器環	口径(12.6) 残高3.5 (1/4)	口縁横撫で。体部外面指撫で、底面回し午の指撫で。体～底部内面回し午の指撫で。	8世紀後半	第42図 P.L.23
3	土師器蓋	底径 残高7.0 (腰～底部)	挟雑物やや少。腰部外面磨削り、内面磨撫で。底部内面指撫で、底面磨削り。	8世紀後半 P.L.23	
4	須恵器蓋	天井径9.0 継径4.6 残高2.1 (蓋～底1/3)	挟雑物少量。黄灰色。右回軸輪整形。切り離し後、天井部外面左回りの内調整。貼り付け	8世紀	第42図 P.L.23
5	白石	径13.8×17.8 厚5.1 2,120g (完形)	板状の河床礫使用。表面に研磨面形成される。	石英閃緑岩	第43図 P.L.23
6	銅製か	①7.8×3.0×2.0 ②7.1× 4.1×1.2 ③5.9×2.4×1.2 他2片	内面は板状、或いは横断面扇形槽状を成して金属分付着。本体は細粒の粘質土。タカシコゾウの可能性あり。	P.L.23	
7	タカシコゾウか	①3.1×2.2×0.9 ②3.8× 2.0×0.7 ③2.9×2.2×1.0 他10片以上	基本的には管状を成す。細粒の粘質土からなり、鉄分が内面に多いが、上層6と異なり全体に鉄分比着が見られる。	P.L.23	

18号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
1	土師器環	口径11.8 底径10.0 器高3.4 (完形)	明赤褐色。口縁横撫で。体部外面指撫で、底面左回りの磨削り。体部～底部内面指撫でで中心と外周の中間に「田」字の刻書。	8世紀後半	第45図 P.L.24
2	土師器環	口径12.1 底径9.0 器高3.5 (口縁僅かに欠損。ほぼ完形)	にぶい褐色。口縁～底部内面指撫で。体部外面指撫で、底面左回りの磨削り。で、「丁」字の墨書。底部内面左回りの指撫で。	9世紀前半	第45図 P.L.24
3	土師器環	口径(12.0) 器高3.2 (1/2)	にぶい褐色。口縁横撫で。体部外面指撫で、底面左回り磨削り。体部内面回転させ午撫で、底面縦かい圧痕状指撫で。	8世紀後半 P.L.24	
4	土師器環	残径7.1×5.3 厚0.4 (体部破片)	にぶい褐色。外面磨削り、内面磨撫で。外面に「十」字の墨書。	第45図 P.L.24	
5	土師器環	残径3.9×4.4 厚0.3 (底面破片)	にぶい赤褐色。底面磨削りで「目」と思われる墨書。底部内面指撫で。	第45図 P.L.24	
6	土師器環	残径4.6×5.0 器高0.4 (底部破片)	褐色。底面磨削り「L」の墨書。底部内面指撫で。	第45図 P.L.24	
7	土師器環	残径4.9×2.7 厚0.3 (底部破片)	褐色。底面磨削り。底部内面指撫で後「日」の刻書。	第45図 P.L.24	
8	須恵器環	口径13.0 底径7.2 器高4.3 (1/4)	挟雑物粗でやや多。焼成甘い。右回軸輪整形。底面回転系切り切り離し。	9世紀前半	第45図 P.L.24
9	白石	径10.7×17.1 厚4.6 1,003g (完形)	胃袋形の河床礫使用。上面の中心に研磨面形成。上端に敲打痕残り、左側縁に平面面見られる。	粗粒輝石安山岩	第46図 P.L.24
10	磁石	径6.2×4.2 長18.6 830g (完形)	棒状の河床礫使用。上端部に敲打痕残り、中位に幅4.1～4.8cmの帯状の磨耗痕一箇。	ひん岩	第46図 P.L.24
11	刀子	残長13.1 幅2.1 厚0.4 (刃部片) 27.1g	幅広薄手の刀子。両端で整形。	こも堀み石に転用	第46図 P.L.24

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
12	鉄滓	残径 5.1 × 3.9 厚 2.7 (破片)	塊状鉄滓か。鉄分少量で底面と中心に集中。底面にスサ痕か。		P.L. 24
13	龍橋築材	① 3.7 × 3.1 × 2.9 ② 3.5 × 2.1 × 2.4 ③ 2.3 × 2.2 × 1.6 ④ 2.3 × 1.9 × 1.8	4片あり、何れも粘土質の土塊で焼熟。部分的に焼土化顕著3片、 表面は平坦。スサの痕跡不明瞭。		P.L. 24

19号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	土師器釜	口径 (22.4) 残高 18.0 (口縁～胴部1/2)	焼成良好。橙色。口縁横撫で。外面胴部左方へ、胴部下方への 巻削り。体部内面横位の巻撫で。	9世紀前半	第47回 P.L. 24
2	台石	径 8.7 × 9.3 長 20.2 2,640g (完形)	偏形の河床礫使用。表裏面に研磨面形成。	石美閃緑岩	第47回 P.L. 24

20号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	土師器杯	口径 (11.6) 底径 (7.5) 器高 3.0 (1/4)	橙色。口縁内面に巻撫で痕残るも横撫で。体部外面指撫で、底 面巻削り。体～底部内面回し乍の指撫で。	9世紀前半	第48回 P.L. 24
2	土師器杯	口径 (14.6) 底径 (8.8) 器高 3.5 (口縁～底部破片)	内外面寛れる。にぶい橙色。口縁横撫で。外面体部上位撫で、 下位～底面巻削り。内面体～底部撫で後放射状の暗文。	9世紀前半	第48回 P.L. 24
3	土師器杯	口径 (13.2) 残高 3.2 (口縁～底部破片)	内底面やや寛れる。橙色。口縁横撫で。体部外面指撫で、底面 巻削り。内面体部まで、底面巻撫で。	8世紀前半	第48回 P.L. 24
4	土師器羹	口径 底径 器高 (口縁～肩部破片)	扶雑物確切で少。にぶい橙色。口縁横撫で。肩～肩部外面縦位、 内面斜方向の刷毛目後頸部横撫で。	7世紀前半	第48回 P.L. 24
5	須恵器杯	口径 14.0 底径 7.0 器高 4.4 (1/6)	扶雑物少量。灰黄色。右回転轆轤整形。底面左回りの回転巻調整。	8世紀後半	第48回 P.L. 24
6	台石	残径 16.3 × 10.0 厚 3.3 965g (欠損品)	扁平な河床礫使用。表面に研磨面が形成され、右ノ縁辺に敲打 痕残る。	粗粒輝石安山岩	第48回 P.L. 24

21号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	土師器杯	口径 11.9 底径 9.5 器高 3.4 (2/3)	橙色。口縁横撫で。体部外面指撫で、底面外周左回り、中央一 方への巻削り。体～底部回し乍の指撫で。	9世紀前半	第50回 P.L. 24
2	土師器杯	口径 (11.8) 底径 (10.0) 器高 3.5 (1/2)	橙色。口縁横撫で。体部外面指撫で、底面左回りの巻削り。 内面体部～底部外周回し乍、底部中央一方への指撫で。	9世紀前半	第50回 P.L. 24
3	土師器杯	口径 (12.6) 器高 3.0 (1/2)	橙色。口縁横撫で。体部外面指撫で、底面外周回し乍、中央一 方への巻削り。体～底部回転させ乍の指撫で。	8世紀後半	第50回 P.L. 24
4	土師器小型 台付羹	口径 9.3 残高 11.9 (1/6)	にぶい橙色。口縁横撫で。体部外面上位左方、中・下位斜方向 への巻削り。内面体部縦位の指撫で、底部左回りの巻撫で。脚 部内外回転させ乍の指撫で。	8世紀後半	第50回 P.L. 24
5	土師器羹	口径 21.4 残高 22.2 (胴部の一部と底部欠損)	焼成良好。橙色。口縁横撫で。体部外面上方、腰部一部横位の 巻削り。体部内面概ね左方への巻撫で。	7世紀前半	第50回 P.L. 24
6	須恵器杯	口径 13.4 底径 8.0 器高 3.7 (口縁一部欠損)	焼成甘く、器面寛れる。灰色。右回転轆轤整形。底面回転糸切 後底部外周と腰部外面巻調整。	9世紀前半	第51回 P.L. 24
7	須恵器杯	口径 14.0 底径 8.2 器高 4.3 (3/4)	扶雑物やや多し。焼成甘く、器面寛れる。灰色。右回転轆轤整形。 底面回転巻切り。	9世紀前半	第51回 P.L. 24
8	砥石	径 5.6 × 1.9 残長 4.3 69g (中位破片)	表裏、左右面に研磨面形成。表・左右面縁部に溝状の整形痕。 表面に削痕あり。	砥沢石	第51回 P.L. 24

22号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
1	土師器坏	口径12.8 器高3.4 (一部欠損)	器面やや丸れる。にぶい橙色。口縁横撫で。体部外面指撫で、底面回し乍ら磨削り。内面左回りの体部指・底部磨撫で。	8世紀前半	第52図 P.L. 24
2	土師器坏	口径13.0 器高3.5 (3/4)	器面丸れる。橙色。口縁横撫で。体部外面指撫で、底面磨削り。体～底部内面回し乍らの指撫で。	8世紀前半	第52図 P.L. 24
3	土師器坏	口径(12.8) 器高3.7 (2/3)	橙色。口縁横撫で。体部外面指撫で、底面磨削り。体～底部内面回し乍らの指撫で。	7世紀後半	第53図 P.L. 24
4	土師器坏	口径(14.8) 残高2.7 (1/4)	橙色。口縁横撫で。体部外面指撫で、底面回し乍らの磨削り。体～底部内面回し乍らの指撫で。	8世紀前半	第53図 P.L. 24
5	土師器坏	口径(13.2) 残高2.7 (1/4)	にぶい橙色。口縁横撫で。体部外面指撫で、底面左回りの磨削り。体～底部内面回し乍らの指撫で。	7世紀前半	第53図 P.L. 24
6	土師器坏	口径(11.6) 残高3.2 (1/4)	橙色。口縁横撫で。体部外面指撫で、底面磨削り。体～底部内面回し乍らの指撫で。	8世紀前半	第53図 P.L. 24
7	土師器坏 (底部破片)	残存5.4×4.6 厚0.5	にぶい黄褐色。底面磨削り。底部内面左回りの指撫で後、平行な3条の刻線。文字ではない。	第53図	P.L. 24
8	土師器鉢	口径(20.5) 底径(4.4) 器高28.0 (1/2)	内面やや丸れる。内面に輪痕み痕残る。橙色。口縁横撫で。外面肩部と腰部横位または斜方向、胴部斜めまたは徒位の磨削り。底面磨撫調整。体部内面左方への指撫で。	8世紀前半	第54図 P.L. 25
9	土師器鉢	口径(11.6) 残高12.6 (口縁～肩部1/3)	扶輪物やや多し。明赤褐色。口縁横撫で。肩部外面横位の磨削り、内面横位の指撫で。	7世紀後半	第53図 P.L. 25
10	土師器鉢	口径18.0 残高7.4 (口縁～肩部1/3)	扶輪物やや多し。にぶい橙色。口縁横撫で。肩部外面斜徒位の磨削り、内面横位の指撫で。	7世紀後半か	第54図 P.L. 25
11	土師器鉢	口径18.0 残高9.3 (口縁～肩部破片)	扶輪物少。器面やや丸。橙色。口縁横撫で。肩部外面横位の磨削り、内面横位の指撫で。	7世紀	第54図 P.L. 25
12	須恵器坏	口径 底径 器高 (完形)	変形あり。扶輪物大きいが少ない。灰色。右回輪軸整形。底面切り離し後左回りの回軸調整。	8世紀前半	第54図 P.L. 25
13	砥石	径5.6×4.0 残長9.4 260g (下平・上端面欠損)	表裏・左右面に研磨面形成。裏面磨耗、表面の磨耗顕著。左面に削痕残る。上端面整形痕。	砥沢石	第54図 P.L. 25
14	磨石	径5.0×8.1 厚2.6 187g (左縁一部欠損)	板状の河床礫使用。表裏、左側に研磨面残る。右側縁に抉れ設けられる。	粗粒輝石安山岩	第54図 P.L. 25
15	こもろみ石	径3.4×2.3 長8.4 95g (完形)	棒状の河床礫使用。中に縦1.8～2.4cmの帯状の磨耗痕一周。	黒色頁岩	第54図 P.L. 25
16	こもろみ石	残径4.2×3.0 長8.9 107g (裏～右側面欠損)	棒状の河床礫使用。左側に敲打痕によるらしき抉れ残り。幅5.7cm程の帯状の磨耗痕一周。	粗粒輝石安山岩	第54図 P.L. 25
17	刀子	残長3.85 幅1.3 朝0.6 3.7g (切っ先破片)	横断面形二等近三角形を呈す。切っ先鋭利。	第54図	P.L. 25

23号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号
1	土師器坏	口径11.6 器高3.5 (ほぼ完形)	にぶい橙色。口縁横撫で。体部外面指撫で、底面不定方向磨削り。体～底部内面回し乍ら指撫で、底部内面磨削り。	8世紀前半	第55図 P.L. 25
2	粘漆单	径4.5×4.4 厚1.4 43g (下縁一部欠損)	中央に径1.76×1.8cmの穿孔。表裏・側面に整形時の削痕残る。表裏・側面丁寧な研磨。	蛇紋岩	第55図 P.L. 25

25号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
1	土師器鉢	口径(17.6) 残高7.5 (口縁～体部)	外面と内面体部丸れる。焼成やや弱。橙色。口縁横撫で。体部外面磨削り、内面指撫でか。	6世紀後半	第57図 P.L. 25

26号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	須恵器蓋	口径(15.0) 残高 3.9 (口縁～蓋部破片)	扶雑物少なく少ない。灰色。回転軸輪整形。端部下方に引く。	8世紀後半～9世紀前半	第58図 P.L. 25
2	須恵器蓋	口径(16.4) 残高 3.0 (口縁部付蓋破片)	灰色。回転軸輪整形。端部下方に引く。	8世紀後半～9世紀前半	第58図 P.L. 25

27号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	土師器碗	口径(12.0) 残高 3.8 (口縁～体部破片)	扶雑物少。浅黄褐色。折り返し口縁で横撫で。体部内外面横位の指撫で。	4世紀	第59図 P.L. 25
2	土師器高坏	最大径 9.4 残高 8.0 (胴部、腹部過半欠損)	にぶい黄褐色。内面下位に輪積痕。上位は絞り。外面従位の艶磨き。内面従位の指撫で。腹部横撫で若しくは指撫で。	5世紀前半	第59図 P.L. 25
3	土師器高坏	最大径 7.6 残高 8.2 (底部～胴部中・上位 1/3)	にぶい褐色。坏底部内面艶磨き。外面外・脚接合時の撫で。脚部上位絞り。脚部外面従位の艶磨き。内面従位の指撫で。	5世紀前半	第59図 P.L. 25
4	土師器小型 壺	口径 12.0 底径 4.3 器高 8.9 (一部欠損はぼ定形)	褐色。口縁～肩部横撫で。体部外面横位中心指撫で。底面僅かに上げ底で指撫で。内面体部横位。底部従位の指撫で。	4世紀後半	第59図 P.L. 25
5	土師器小型 壺	口径(10.8) 底径 3.3 器高 10.0 (1/2)	外面頸部輪積痕残る。浅黄褐色。口縁横撫で。体部外面横位の艶磨り後従位の指撫で。内面頸部横位。体～底部従位の指撫で。	5世紀前半	第59図 P.L. 25
6	土師器小型 壺	底径 3.3 残高 4.4 (腰～底部)	にぶい褐色。体部外面横位の指撫で。底面艶磨り。内面体～底部回転させの指撫で。	4世紀後半～5世紀前半	第59図 P.L. 25
7	土師器羹	口径(16.0) 残高 7.9 (口縁～肩部 1/4)	扶雑物少。器面寛れる。にぶい褐色。口縁横撫で。肩部外面艶磨り。内面横撫で。	4世紀後半	第59図 P.L. 25
8	土師器羹	口径(22.4) 残高 4.7 (口縁～肩部破片)	扶雑物少。にぶい黄褐色。口縁横撫で。肩部外面従位の網目目。内面横位の網目目地指撫で。	4世紀後半	第59図 P.L. 25
9	土師器蓋	最大径 20.4 残高 14.7 (体部 1/2)	内面頸部に口縁との接合痕残る。にぶい黄褐色。体部外面やや細かい艶磨で。体部内面横位やや左下に向く指撫で。	5世紀前半	第59図 P.L. 25
10	磁石	残径 6.8 × 4.2 残長 7.3 (上位破片) 189.1g	横断面三角形の可床礎使用。上端に敲打痕残る。	粗粒輝石安山岩	第59図 P.L. 25

29号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	土師器坏	口径 12.0 底径 9.0 器高 3.1 (口縁部 1/4 欠損)	器面寛れる。にぶい褐色。口縁横撫で。体部外面指撫で。底面左回りの艶磨りで「丁」字の墨書。体部～底部内面回し午の指撫で。	9世紀前半	第62図 P.L. 25
2	土師器坏	口径(12.4) 底径 9.7 器高 3.2 (1/2)	器面やや寛れる。褐色。口縁横撫で。体部外面指撫で。底面左回りの艶磨り。体部～底部内面回し午の指撫で。	9世紀前半	第62図 P.L. 25
3	土師器坏	口径(12.4) 底径(8.9) 器高 3.9 (1/4)	内面に鉄分付着。褐色。口縁横撫で。体部外面指撫で。底面概ね一方への艶磨り。体～底部回し午の指撫で。	9世紀前半	第62図 P.L. 25
4	土師器坏	口径(11.4) 器高 3.1 (1/3)	扶雑物少。褐色。口縁横撫で。体部外面指撫で。底面艶磨り。体～底部内面回し午の指撫で。	9世紀前半	第62図 P.L. 25
5	土師器坏	口径(12.0) 底径(9.0) 器高 3.0 (1/3)	にぶい褐色。口縁横撫で。体部外面指撫で。底面艶磨り。体～底部内面回し午の指撫で。	9世紀前半	第62図 P.L. 25
6	土師器碗	口径(17.6) 残高 6.3 (1/4)	器面やや寛れる。褐色。口縁横撫で。外面体部上位指撫で。下位～回し午の艶磨り。体～底部内面(艶)撫で。	8世紀後半	第62図 P.L. 25
7	土師器羹	口径(21.0) 残高 27.3 (口縁～腹部 1/2)	扶雑物細粒。器面やや寛れる。褐色。口縁横撫で。体部外面上部斜方向、中下位縦位の艶磨り。内面横位の指撫で。	9世紀前半	第62図 P.L. 25
8	須恵器蓋	口径(14.7) 底径 4.4 器高 3.2 (紐～蓋部 1/4)	灰白色。回転軸輪整形。頂部左回りの指調整後縁磨り付け。内面頂部研削痕顯著で墨痕遺く残る。	9世紀 転用優劣。	第62図 P.L. 25
9	須恵器坏	口径 12.0 底径 6.6 器高 4.2 (3/4)	扶雑物少。焼成甘い。灰色。右回転軸輪整形。底面回転糸切で外面横撫で。	9世紀前半	第62図 P.L. 25
10	須恵器坏	口径 12.5 底径 7.0 器高 3.1 (1/3)	扶雑物粗で多し。焼成良好。褐灰色。右回転軸輪整形。底面回転糸切。	9世紀前半	第62図 P.L. 25

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
11	須恵器環	口径(12.9) 底径(8.0) 器高4.1 (1/4)	内外面部分的に鉄分付着。挟雑物物で多く、片岩含むか。黄灰色。右回転軸線整形。底面回転糸切。	9世紀前半	第62国 P.L. 25
12	須恵器環	口径(13.0) 底径(7.3) 器高3.8 (1/3)	挟雑物やや粗。灰色。右回転軸線整形。底面回転糸切切り離し。	9世紀前半	第64国 P.L. 25
13	縄文土器	残存6.1×6.6 厚0.9 (口縁破片)	挟雑物やや粗。淡黄色。焼成やや甘い。内外面撫でて、外面に指痕押圧を伴う隆帯。	後期前葉	第63国 P.L. 25
14	磨石	径5.2×6.4 長10.4 439g (完形)	字形の河床礫使用。表裏左右面に細かい研磨面形成。上面に大きな凹痕。上端部に敲打痕残る。		粗粒輝石安山岩 第65国 P.L. 25
15	鉄滓	径7.5×(5.9) 厚2.4 (2/3)	碗型鉄滓。鉄分含有量少ない。		P.L. 25

30号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	土師器環	口径12.7 器高3.6 (ほぼ完形)	橙色。口縁横撫で。体部外面一部指撫で、以下底面まで削削り。体一部底面内面回し午の指撫で。	8世紀前半	第64国 P.L. 26
2	土師器甕	残高11.5 (体部下位1/3)	挟雑物若干多し。灰黄褐色。外面低位の範囲り、内面輪積み痕残り斜方向の指撫で。	律令期	第64国 P.L. 26
3	龍天弁石	残長31.0 幅18.1 厚12.1 (左側片、縁近一部欠損)	前面龍前、裏面龍後部に接する。表裏、左右面と左側端部はつり調整。中央部らむ角柱状に整形。	粗粒輝石安山岩	第66国 P.L. 26
4	龍天弁石	残長39.7 幅14.7 厚15.8 (左側片、裏面欠れ)	前面中心に放射状痕残る。表裏面と前・手前面に削りによる調整。左端付近研磨による調整。	4,560g	粗粒輝石安山岩 第66国 P.L. 26

31号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	磨石	径3.3×2.0 長7.6 70g (完形)	横前面形三角形の河床礫使用。裏面に研磨面形成され、中位に幅2.1～2.3cmの帯状の磨耗痕一箇。	黒色頁岩 こも堀み石に転用	第67国 P.L. 26
2	磨石	径3.5×3.3 長9.9 150g (完形)	屈曲した棒状の河床礫使用。底面に研磨面形成。下位に幅2cm程の帯状の磨耗痕一箇。	黒色頁岩 こも堀み石に転用	第67国 P.L. 26
3	磨石	長10.9 幅8.0 厚3.5 415g (完形)	小判形の河床礫使用。表面に径2.4cmと2.1cm、裏面に径1.8×2.4cm、2.8×1.9cmのそれぞれ2ヶ所の窪み並ぶ。左右両縁に顕著な研磨面形成。上端部に敲打痕残る。	粗粒輝石安山岩	第67国 P.L. 26

32号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	土師器環	口径11.8 器高3.5 (完形)	焼成良好。橙色。口縁横撫で。外面体部斜方向の指撫で、底面左回りの範囲り、中央から外周にかけて「目井」の遺書。内面体部底面回し午の、底部一方への指撫で。	8世紀後半	第68国 P.L. 26
2	土師器環	口径12.3 器高3.4 (完形)	焼成良好。にぶい橙色。口縁横撫で。体部外面指撫で、底面外周回し午、中央一方への削削り。体一部底面内面回し午の撫で。	8世紀後半	第68国 P.L. 26
3	土師器環	口径12.6 器高3.3 (2/3)	焼成良好。橙色。口縁横撫で。体部外面指撫で、底面概ね一方への削削り。内面体部回転させず、底部概ね一方への指撫で。	8世紀後半	第68国 P.L. 26
4	土師器環	口径(12.0) 底径(9.2) 器高3.2 (1/4)	口縁横撫で。にぶい橙色。外面体部内側からの圧迫痕。底面不定方向の削削り。内面体部一部回し午の指撫で。	8世紀後半	第68国 P.L. 26
5	土師器環	口径(12.4) 残高3.1 (1/4)	明赤褐色。外面口縁横撫で、体一部底面回し午の削削り後体部撫で、内面回し午の指撫でで滑らか。	8世紀後半	第68国 P.L. 26
6	須恵器環	口径(12.0) 底径7.0 器高3.3 (2/3)	挟雑物物多。片岩混入か。右回転軸線整形。底面糸切。	9世紀前半	第68国 P.L. 26

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
7	須恵器高台 付刷	口径(16.6) 底径10.6 器高7.9 (2/3-)	挟雑物粗度が少量。灰色。右回転轆轤整形。底面回転赤切後、 腰部にかけて回転調整し、高台貼り付け。	8世紀後半	第69国 版P.26
8	磨石	径4.8×3.9 残長8.3 253g (下部欠損)	棒状の河床礫使用。裏面に研磨面形成され、中に幅2.2cm以上 の帯状の磨耗痕一筋。	砂岩 こも福み石に転用	第69国 版P.26

33号住居

No.	資料名称	測定値 (cm)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	土師器釜	口径(21.0) 残高18.3 (口径-胴部1/2)	焼成良好。内面厚付帯。にぶい橙色。口縁横撫で。体部外面上 位右方、下位下方へ磨削り。内面左方へ磨撫で。	8世紀後半～9世 紀前半	第71国 版P.26
2	土師器釜	口径(21.4) 残高20.4 (口径-胴部1/4)	焼成良好。橙色。腰部に接合痕の段差。口縁横撫で。外面肩部 左方へ、胴部斜方向へ磨削り。内面横位の磨撫で。	8世紀後半～9世 紀前半	第71国 版P.26
3	土師器釜	口径(20.0) 残高19.2 (口径-胴部破片)	焼成良好。橙色。内面に輪痕。口縁横撫で。外面肩部横位、 胴部斜めから底位の磨削り。体部内面横位の磨撫で。	9世紀前半	第71国 版P.26
4	土師器付台 婆	胴部径8.2 残高3.3 (底-脚部)	焼成良好。にぶい橙色。奥底部内面指撫で。脚部内外面指撫で。 脚部内面指撫で。		第71国 版P.26
5	須恵器蓋	口径17.0 残高2.7 (頂部除く1/3)	挟雑物が多く、片岩包含か。焼成やや甘い。灰黄色。右回転 轆轤整形。端部下方に引く。	9世紀	第71国 版P.26
6	須恵器坏	口径11.7 底径6.5 器高4.0 (3/4)	挟雑物粗く少ない。灰白色。右回転轆轤整形。底面回転赤切り	9世紀前半	第71国 版P.26
7	須恵器釜	胴部径11.0 最大径21.0 残高10.3 (肩-胴部)	挟雑物少ない。黒灰色。口縁横撫で。肩部外面指撫で又は磨撫で、 内面指撫で。内面下位に青海波の引き痕残る。		第71国 版P.26
8	砥石	長18.9 幅6.6 厚4.7 1,122g (表面上位欠損)	直方体形の河床礫使用。自然に残るも表裏、左右側面に研磨面 形成。表面の一部と右側面に削痕見られる。	黒色頁岩	第72国 版P.26
9	砥石	径5.0×4.4 残長10.6 261g (下位欠損)	字形の河床礫使用。上端に敲打痕残り。表・右側面の一部と左 側面に研磨面形成。	粗粒輝石安山岩	第71国 版P.26
10	こも福み石 (完形)	長13.9 幅7.0 厚2.4 423g	扁平な河床礫使用。中に幅3.7～3.9cmの帯状の磨耗痕一筋。	粗粒輝石安山岩	第71国 版P.26
11	不明石製品 (破片)	残径10.2×7.5 厚9.7 498g	表裏面平頭に削られ、一部研磨痕残る。	二ッ岳石	第72国 版P.26
12	不明石製品 (角部破片)	残長8.9 残幅6.5 残厚6.6 135g	立方体、直方体の石製品成いは石製用材の破片。表・左側・上 側面にはつり痕残る。上面には削痕も残る。	二ッ岳石	第72国 版P.26
13	龍構築材か	残長10.2 幅12.4 厚10.9 (左右両側上段と表面一部欠損)	表裏・左右側面をチョウナ状の工具ではつり調整し、角柱状に 整形。	粗粒輝石安山岩 1,138g	第72国 版P.26

1号櫛列(4号建物)

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	土師器坏	口径(11.5) 残高4.1 (口径-底部破片)	焼成良好。外面暗赤褐色、内面にぶい赤褐色。口縁横撫で段差 有り。底面概ね一方へ磨削り。底部内面回し手磨撫で。	6世紀前半	第81国 版P.26

5号掘立柱建物

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	須恵器釜	底径14.2 残高3.6 (作-底部1/3)	挟雑物若干粗。灰色。右回転轆轤整形。底面左回転の調整後 高台貼り付け。	8世紀前半	第76国 版P.26

9号掘立柱建物

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	土師器坏 (底面破片)	残存5.6×3.6 厚0.5	橙色。底面磨削りで「富」かと思われる墨書。底部内面指撫で。		第80国 版P.26

1号溝

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	磨石	径4.3×4.2 残長7.6 192g (通平欠損)	棒状の河床礫使用。下面と左側面に磨面形成。上端に敲打痕残る。	粗粒輝石安山岩	第83回 P.L.26
2	磨石	径5.0×6.1 残厚5.6 213g (表面側欠損)	球形の河床礫使用。上面に研磨痕残る。	石英閃緑岩	第83回 P.L.26

2号溝

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	台石	長20.7 幅19.8 厚12.9 5300g (端部欠損、上面かせる)	直方体状の河床礫使用。上面に深さ1cm程の碗型の窪み形成され、弱く研磨される。	粗粒輝石安山岩	第84回 P.L.27

3号溝

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	須恵器碗	高台径8.2 残高2.0 (底部～高台)	焼成良好、灰色。右回転軸轆整形。底部回転糸切後、高台貼り付け、外側撫で。	8世紀後半～9世紀前半	第85回 P.L.27

4号溝

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	須恵器坏	口径(12.8) 底径(8.0) 器高3.1 (1/4)	块雑物粗でやや多。灰色。右回転軸轆整形。底部回転糸切り。	8世紀後半	第85回 P.L.27

9号溝

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	礫石	長14.2 幅7.3 厚3.7 573g (完形)	河床礫使用。上端に敲打痕残り、裏面に磨面形成。右側縁中に挟れが作られ、中に幅2.6cmの帯状の磨耗痕一周。	ひん岩	第88回 P.L.27

1号井戸

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	甕	残長13.1 残幅6.5 残厚0.8 (表面中心の測線破片)	上端面・裏面と表面海部の一部残る。		第89回 P.L.27

2号井戸

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	礫石	径4.2×3.8 長8.4 185g (完形)	芋形の河床礫使用。上端に敲打痕残り、中に2.0～2.4cmの帯状の磨耗痕一周。	粗粒輝石安山岩 こも堀み石に転用	第90回 P.L.27

3号井戸

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	土師器坏	口径(14.0) 残高3.0 (口縁～底部外周破片)	褐色。口縁～底部内面撫で。体部外面撫で。底部左回りの箇所残り。	9世紀前半	第91回 P.L.27

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
2	須恵器環	口径(13.8) 底径(9.0) 器高3.5 (1.4)	挟雑物粗。焼成良好。青灰色。回転軸離整形。底面回転糸切痕。外周回転調整。	9世紀前半	第91図 P.L.27
3	泥面子	径(1.65)×1.9 厚0.25 1.2g	土師質で器面施れる。土師質土器の転用品。橙色。外周削って整え、表裏粗い研磨。	第91図 P.L.27	第91図 P.L.27
4	泥面子	径2.0×2.0 厚0.45 1.6g	土師質で器面施れる。土師質土器の転用品。橙色。外周削って整え、表裏やや粗い研磨。	第91図 P.L.27	第91図 P.L.27

6号土坑

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	天聖元寶	径2.50×2.50 厚0.125 (完形)	横線銭と見られる。文字やや潰れる。蓋書。	室町時代か	第94図 P.L.27

31号土坑

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	台石	径13.2×17.4 厚4.4 1,385g (軸線中心に表面面落)	扁平な河床礫使用。表裏面に研磨面形成。	石英閃緑岩。風化 顕著	第96図 P.L.27
2	台石	径19.3×28.6 厚6.3 5,180g (左軸線と右軸線上位欠損)	扁平な河床礫使用。表面に研磨面形成。	石英閃緑岩	第96図 P.L.27
3	台石	径18.8×26.5 厚11.2 8,280g (完形)	河床礫使用。表裏面に外周中心に最打痕残り。表面～左軸線に研磨面形成。最打位置から小段治床石の可能性。	粗粒輝石安山岩	第96図 P.L.27

グリッド

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	土師器環	口径(12.6) 残高3.2 (口径～体部2/1)	橙色。口径横撫で。体部外面指撫で、底面旋削り。体～底部内面回転し午の指撫で。	8世紀前半	第103図 P.L.27
2	土師器環	口径12.4 底径9.5 器高3.1 (一部欠損)	橙色。口径横撫で。体部外面指撫で及び旋削り。底面(外周)回し午の旋削り。体～底部内面回し午の指撫で。	9世紀前半	第103図 P.L.27
3	土師器環	口径(12.0) 底径(8.0) 器高3.3 (口径～底部破片)	にぶい褐色。口径横撫で。体部外面指撫さえ、底面一方への旋削り。体～底部内面回し午の指撫で。	9世紀前半	第103図 P.L.27
4	土師器環	径3.1×4.5 厚0.5 (底部破片)	底面旋削り。底部内面撫で後格子状の刻書。	「九」字か	第103図 P.L.27
5	須恵器蓋	口径(14.4) 残高2.1 (頂部除く1/3)	挟雑物粗だが少ない。灰色。右回転軸離整形。頂部回転糸切り。	8世紀後半	第103図 P.L.27
6	須恵器環	口径(14.0) 底径(8.0) 器高3.8 (口径～底部破片)	器面施れる。挟雑物粗。灰白色。右回転軸離整形。底面回転糸切痕。	9世紀前半	第103図 P.L.27
7	須恵器短須恵	口径(6.8) 残高3.8 (口径～体部1/3)	挟雑物やや粗だが少。灰黄色。短須恵。口径内外面の一部と体部外面の一部に自然熱。内外面横位の撫で。	第103図 P.L.27	第103図 P.L.27
8	泥人形	径2.5×2.1 残高(2.6) (片面破片)	細粒。型による合わせ痕。種別不明。手の表現あり。	近世	第103図 P.L.27
9	結核車	径4.2×4.2 厚1.2 28g (軸下位1/4欠損)	横断面台形。中央に0.73×0.75cmの穿孔。側面に整形による削痕残り。表裏・側面よく研磨。	凝紋岩	第103図 P.L.27
10	おはじき	径1.8×1.7 厚0.6 4g (完形)	表裏は栗面残り。側面研磨により整形。	滑石	第103図 P.L.27
11	磁石	径3.9×4.1 厚2.8 52g (完形)	そろばん玉形の河床礫使用。小型。土層部に最打痕残り。	粗粒輝石安山岩	第103図 P.L.27
12	磨石	残径7.3×12.0 厚3.3 412g (破片)	扁平な河床礫使用。表面に研磨面形成。右側縁部に粗い最打痕残り。	粗粒輝石安山岩	第103図 P.L.27

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
13	こも編み石	径 5.6 × 4.3 残長 8.9 287g (下半分欠損)	横断面三角形の棒状の河床礫使用。中に帯状の磨耗面一周。 一縁辺に磨耗面残る。	粗粒礫石安山岩	第 103 図 P.L. 27
14	刀子	残長 23.4 幅 1.4 厚 0.7 4.9g (割断片)	刃部寄り破片か。下向き袋状。	50-E-9 グリッド	第 103 図 P.L. 27
15	角釘	径 0.6 × 0.5 長 2.8 1.0g (先端部片)	残存部は長い角錐上を呈し、尖端欠け。2 寸釘か。	50-G-6 グリッド	第 103 図 P.L. 27
16	網型鉄滓	径 11.3 × 7.8 厚 5.6 592g (外周過半欠損)	底面中央に径 3.8cm、深さ 0.5cm 程の窪み。鉄分はさして多くな い。		P.L. 27
17	鉄滓	① 3.2 × 2.1 × 1.3 ② 2.9 × 2.6 × 1.4 12.0g (破片)	鉄分少量。破片 2 に平坦面見られる。	50-G-5 グリッド	P.L. 27

表採

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
1	磨石	径 4.9 × 5.2 厚 3.3 107g (完形)	楕圓形の小型の河床礫使用。底面に 2 × 2.4cm の研磨面できる。	粗粒礫石安山岩	第 103 図 P.L. 27

縄文時代遺物

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
J1	縄文土器深 鉢 (割断片)	残存 8.5 × 5.1 厚 1.1	細沈瀬により縦位区画し、区画内に斜位に沈瀬を施す。	縄ヶ島台式	第 106 図 P.L. 27
J2	縄文土器 (口縁部片)	残存 5.7 × 4.8 厚 0.9	口縁部に、斜位に刻みを付した隆帯を 2 条めぐらす。0 段多条 R L 縄紋を施紋。	花積下層式	第 106 図 P.L. 27
J3	縄文土器 (割断片)	残存 5.4 × 6.8 厚 1.1	無節 R 1、L r 縄紋による羽状構成。内面にも施紋。No 4 と同 一形体。	花積下層式?	第 106 図 P.L. 27
J4	縄文土器 (割断片)	残存 12.1 × 7.4 厚 1.2	No 3 と同一形体。	花積下層式?	第 106 図 P.L. 27
J5	縄文土器 (割断～底部片)	残径 16.9 残高 18.6 厚 1.2	尖底。0 段多条縄紋を羽状施紋。	花積下層式	第 106 図 P.L. 27
J6	縄文土器 (割断片)	残存 4.9 × 6.5 厚 1.0	0 段多条 R L 縄紋を羽状施紋。	花積下層式	第 106 図 P.L. 27
J7	縄文土器 (割断片)	残存 6.7 × 8.4 厚 1.2	単節 R L、無節 L r 縄紋を羽状施紋。	花積下層式	第 106 図 P.L. 27
J8	縄文土器 (底部片)	残存 7.6 × 9.3 厚 1.2	丸底。単節 R L 縄紋を施紋。	花積下層式	第 106 図 P.L. 27
J9	縄文土器 (底部片)	残存 8.9 × 9.4 厚 1.2	尖底。付加条縄紋を羽状施紋。	花積下層式	第 106 図 P.L. 27
J10	縄文土器 (口縁部～割断片)	残幅 24.1 残高 16.4 厚 0.9	胴部上位で屈曲し、口縁が開く器形。小波状口縁を呈す。半截 竹管による平行沈瀬、コンパス紋を交互に横位 3 段施す。波積 部下には横円紋を配置。紋縁部下は単節 L R、R L 縄紋による 菱形構成。	黒浜式	第 106 図 P.L. 28
J11	縄文土器 (口縁部片)	残存 6.1 × 7.0 厚 0.7	波状口縁。口縁に沿って爪形紋を 4 条施し、以下、単節 L R 縄 紋を横位施紋。内面研磨。	黒浜式	第 106 図 P.L. 28
J12	縄文土器 (口縁部片)	残存 4.2 × 4.3 厚 0.9	単節 L R 縄紋を横位施紋し、口縁下にコンパス紋を 1 条めぐら す。内面研磨。	黒浜式	第 106 図 P.L. 28
J13	縄文土器 (口縁部片)	残存 4.1 × 4.1 厚 0.8	口縁下から平行沈瀬、コンパス紋を施す。	黒浜式	第 106 図 P.L. 28

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
J14	縄文土器	残存 5.5 × 4.0 厚 0.8 (口縁部片)	口縁下からコンパス線を横位多段に施す。内面研磨。No 13 と同一個体。	黒浜式	第 106 図 P.L. 28
J15	縄文土器	残存 3.5 × 4.7 厚 0.8 (胴部片)	No 14 と同一個体。	黒浜式	第 106 図 P.L. 28
J16	縄文土器	残存 5.0 × 4.8 厚 0.9 (胴部片)	くの字状に屈曲する部位。爪形紋を横位に複数条施す。	黒浜式	第 106 図 P.L. 28
J17	縄文土器	残存 5.3 × 3.8 厚 0.8 (口縁部片)	単節 R L 縄紋を横位施紋。	黒浜式	第 106 図 P.L. 28
J18	縄文土器	残存 3.5 × 4.2 厚 0.8 (口縁部片)	小突起を付す波状口縁。単節 R L 縄紋を横位施紋。内面研磨。	黒浜式	第 106 図 P.L. 28
J19	縄文土器	残存 9.4 × 7.7 厚 1.1 (口縁部片)	単節 L R、R L 縄紋による変形構成。	黒浜式	第 106 図 P.L. 28
J20	縄文土器	残存 7.2 × 7.9 厚 1.0 (口縁部片)	単節 R L 縄紋を横位施紋。	黒浜式	第 106 図 P.L. 28
J21	縄文土器	残存 11.6 × 13.3 厚 0.7 (口縁部片)	小波状口縁で細く内湾する器形。単節 R L 縄紋を横位施紋。	黒浜式	第 106 図 P.L. 28
J22	縄文土器	残存 7.7 × 7.7 厚 0.9 (口縁部-胴部片)	指定口径 10.4 cm と小型。くの字状に細く屈曲する器形。単節 L R、R L 縄紋による変形構成。内面研磨。	黒浜式	第 107 図 P.L. 28
J23	縄文土器	残存 7.8 × 5.6 厚 0.9 (口縁部片)	単節 L R、R L 縄紋による羽状構成。	黒浜式	第 107 図 P.L. 28
J24	縄文土器	残存 5.1 × 5.6 厚 1.0 (口縁部片)	単節 L R、R L 縄紋による羽状構成。	黒浜式	第 107 図 P.L. 28
J25	縄文土器	残存 5.1 × 4.5 厚 0.7 (口縁部片)	単節 L R 縄紋を横位施紋。内面研磨。	黒浜式	第 107 図 P.L. 28
J26	縄文土器	残存 3.6 × 5.6 厚 0.9 (口縁部片)	単節 L R、R L 縄紋による羽状構成。内面研磨。	黒浜式	第 107 図 P.L. 28
J27	縄文土器	残存 11.8 × 6.2 厚 1.0 (胴部片)	くの字状に屈曲する部位。単節 L R、R L 縄紋による変形構成。	黒浜式	第 107 図 P.L. 28
J28	縄文土器	残存 13.1 × 7.9 厚 0.8 (胴部片)	くの字状に屈曲する部位。単節 L R、R L 縄紋による変形構成。	黒浜式	第 107 図 P.L. 28
J29	縄文土器	残存 6.8 × 7.8 厚 1.0 (胴部片)	単節 L R、R L 縄紋による羽状構成。	黒浜式	第 107 図 P.L. 28
J30	縄文土器	残存 6.5 × 6.2 厚 0.8 (胴部片)	単節 L R、R L 縄紋による羽状構成。	黒浜式	第 107 図 P.L. 28
J31	縄文土器	残存 5.8 × 6.9 厚 0.9 (胴部片)	単節 L R、R L 縄紋による羽状構成。	黒浜式	第 107 図 P.L. 28
J32	縄文土器	残存 7.7 × 5.0 厚 0.7 (胴部片)	単節 L R、R L 縄紋による羽状構成。	黒浜式	第 107 図 P.L. 28
J33	縄文土器	残存 12.2 × 16.1 厚 0.9 (胴部片)	単節 L R、R L 縄紋による羽状構成。	黒浜式	第 107 図 P.L. 28
J34	縄文土器	残存 8.6 × 5.6 厚 0.8 (胴部片)	単節 L R、R L 縄紋による羽状構成。	黒浜式	第 107 図 P.L. 28
J35	縄文土器	残存 10.0 × 5.8 厚 0.7 (胴部片)	くの字状に屈曲する部位。無節 R 縄紋を横位施紋。	黒浜式	第 107 図 P.L. 28
J36	縄文土器	残存 5.8 × 7.8 厚 0.8 (胴部片)	無節 R 1 縄紋を横位施紋。内面研磨。	黒浜式	第 107 図 P.L. 28
J37	縄文土器	残存 6.6 × 5.3 厚 0.8 (底部片)	単節 R L 縄紋を横位施紋。	黒浜式	第 107 図 P.L. 28
J38	縄文土器	残高 5.5 残高 5.1 厚 0.7 (底部片)	指定底径 7.1 cm。単節 L R、R L 縄紋による羽状構成。	黒浜式	第 107 図 P.L. 28
J39	縄文土器	残存 10.9 × 4.0 厚 0.8 (口縁部片)	波状口縁で、口縁がくの字状に内折する器形。単節 R L 縄紋を地紋とし、口縁に沿って平行沈線を施す。	諸磯 b 式	第 107 図 P.L. 28
J40	縄文土器	残存 11.2 × 9.9 厚 1.2 (口縁部片)	波状口縁で、口縁が細く屈曲する器形。集合沈線による横帯構成。地紋に単節 R L 縄紋を横位施紋。No 41 と同一個体。	諸磯 b 式	第 107 図 P.L. 28
J41	縄文土器	残存 8.4 × 5.2 厚 1.0 (胴部片)	No 40 と同一個体。	諸磯 b 式	第 107 図 P.L. 28

No.	資料名称	測定値 (cm)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
		(残存状況)			
142	縄文土器 (底部片)	残幅 7.6 残高 5.2 厚 0.9	底部が張り出す器形。底部付近に横位集合沈線を施し、紋帯部内は縦位展開するモチーフを施す。	溝磯 c 式	第 107 図 P.L. 28
143	縄文土器 (口縁部片)	残存 11.2 × 5.1 厚 0.7	縦く外反する器形。付加条縄紋を横位施紋。No 44 と同一個体。	前期後葉	第 107 図 P.L. 28
144	縄文土器 (胴部片)	残存 14.5 × 7.2 厚 0.8	No 43 と同一個体。	前期後葉	第 107 図 P.L. 28
145	縄文土器 (口縁部～胴部片)	残幅 18.1 残高 31.8 厚 0.8	胴部が膨らみ、胴部ですぼまって口縁が開く器形。付加条縄紋を横位施紋。	前期後葉	第 108 図 P.L. 28
146	縄文土器 (口縁部片)	残幅 18.9 残高 32.0 厚 0.6	付加条縄紋を横位施紋。	前期後葉	第 108 図 P.L. 29
147	縄文土器 (胴部片)	残存 5.9 × 3.1 厚 0.6	単節 R L の結節縄紋を横位施紋。	前期後葉	第 108 図 P.L. 29
148	縄文土器 (口縁部片)	残存 × 厚	縦く内湾する器形。楕円状区画内に単節 R L 縄紋を充填施紋。	加曾利 E 3 式	第 108 図 P.L. 29
149	縄文土器 (胴部片)	残存 × 厚	沈線を垂下させ、区画内に単節 R L 縄紋を縦位施紋。	加曾利 E 3 式	第 108 図 P.L. 29
150	縄文土器 (口縁部片)	残存 4.3 × 7.1 厚 1.1	波状口縁。波頂部下に凹孔を穿つ。	堀之内 1 式	第 108 図 P.L. 29
151	縄文土器 (口縁部片)	残存 10.2 × 4.6 厚 0.9	口縁がくの字状に内湾する器形。口縁に沿って沈線を施紋。No 52 と同一個体。	堀之内 1 式	第 108 図 P.L. 29
152	縄文土器 (口縁部片)	残存 7.0 × 3.1 厚 1.1	No 51 と同一個体。沈線、円形刺突を施す。	堀之内 1 式	第 108 図 P.L. 29
153	縄文土器 (口縁部片)	残存 4.3 × 3.6 厚 0.5	口縁内折。隆線を 2 条横位に貼付。	堀之内 2 式	第 108 図 P.L. 29
154	縄文土器 (胴部片)	残存 3.4 × 3.5 厚 0.7	沈線により区画し、沈線間に単節 L R 縄紋を充填施紋。	堀之内 2 式	第 108 図 P.L. 29
155	縄文土器(浅鉢)	残存 10.1 × 7.1 厚 0.8	口縁に沿って平行沈線を施し、沈線間に円形刺突を施紋。口端に刺目を付す。	堀之内 1 式	第 108 図 P.L. 29
156	土製円盤 (完形)	径 3.0 × 2.95 厚 0.8	ほぼ円形形状を呈す。頂直式土器を転用。		第 108 図 P.L. 29
157	石鏡	長 1.52 残幅 1.95 厚 0.69 2.4g (裏面左側割落。左返し端欠損)	左側縁直線的、右側縁膨らみを持つ無基鏡。浅い返りを有する。表裏よりの割離調整。	チャート 2 区縄文包含層	第 108 図 P.L. 29
158	石鏡	残長 2.44 幅 1.6 厚 0.44 1.4g (尖端・基部欠損)	縦長の二等辺三角形を呈する。有基鏡の基部が欠損したものとされる。表裏より割離調整。	チャート 2 区縄文包含層	第 108 図 P.L. 29
159	石鏡	長 2.56 幅 1.6 厚 0.41 1.2g (完形)	左側縁は直線的、右側縁は弧に末を有する二等辺三角形様の無基鏡。やや浅い返しが付く。表裏より割離調整。	チャート 2 区縄文包含層	第 108 図 P.L. 29
160	石鏡	長 2.24 幅 1.5 厚 0.36 1.1g (完形)	左右両側縁が膨らみを持つ無基鏡。短い返しが付く。表裏よりの割離調整。	チャート 2 区縄文包含層	第 108 図 P.L. 29
161	石鏡	残長 1.77 幅 1.38 厚 0.45 0.8g (尖端欠損)	左側縁膨らみを持ち、右側縁内湾する無基鏡。極浅い返し付く。表裏からの割離調整。	チャート 2 区縄文包含層	第 108 図 P.L. 29
162	石鏡	長 1.96 残幅 1.52 厚 0.53 1.2g (左側返し欠損)	両側縁中に膨らみを有する無基鏡。本体に対しやや浅い返しが付く。表裏よりの割離調整。	チャート 2 区縄文包含層	第 108 図 P.L. 29
163	石鏡	長 3.1 残幅 1.7 厚 0.37 1.7g (左側縁中上位と右返し端部欠損)	縦長の二等辺三角形を呈する無基鏡。短い返し付く。表裏よりの割離調整。	チャート 2 区縄文包含層	第 108 図 P.L. 29
164	石鏡	長 2.45 幅 1.4 厚 0.2 1.0g (完形)	表裏面に自然の割離面を残す薄片使用。両縁に膨らみを持つ無基鏡。浅い返しを有する。表裏よりの割離調整。	チャート 2 区縄文包含層	第 108 図 P.L. 29
165	石鏡	長 1.8 残幅 1.5 厚 0.39 0.9g (右基部欠損)	両側縁が膨らみを持つ三角形様の無基鏡。浅い返しを有する。表裏よりの割離調整。	チャート 2 区縄文包含層	第 108 図 P.L. 29
166	石鏡	残長 2.0 残幅 1.55 厚 0.36 1.8g (尖端と左返し端部かに欠損)	両側縁中央がややくびれる無基鏡。浅い返しを有する。表裏よりの割離調整。	チャート 2 区縄文包含層	第 109 図 P.L. 29
167	石鏡	長 2.1 残幅 1.6 厚 0.19 0.5g (左側返し欠損)	きれいな縦長の二等辺三角形を呈する無基鏡。やや浅い返しを有する。表裏よりの割離調整。	チャート 2 区縄文包含層	第 109 図 P.L. 29
168	石鏡 (未製品か)	長 2.2 幅 1.76 厚 0.76 2.3g (完形)	裏面上位は割離か。両側縁が膨らみを持つ無基鏡。表面に凸部残る未製品か。	チャート 2 区縄文包含層	第 109 図 P.L. 29
169	石鏡	長 2.1 幅 1.6 厚 0.47 1.2g (完形)	両縁が膨らみを持ち、左側縁に括れを有する無基鏡。浅い返しを有する。	黒色安山岩 2 区縄文包含層	第 109 図 P.L. 29
170	石鏡	残長 2.5 残幅 1.25 残厚 0.25 0.8g (表裏割落)	表裏大きく割離するため詳らかでないが有基鏡か。尖端残存。	チャート 縄文包含層	P.L. 29

No.	資料名称	測定値 (cm)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
		(残存状況)			
J71	石鏝	残長 2.3 幅 1.3 厚 0.3 0.8g (先端欠損)	無蓋鏝。逆しの平面形方形。表裏面より剥離調整。	珧質頁岩	第109図 P.L. 29
J72	石鏝	残長 3.0 幅 1.6 厚 0.4 2g (先端部欠損)	幅狭でやや大型の有蓋鏝。表裏面より剥離調整。	チャート	第109図 P.L. 29
J73	石鏝	長 2.3 幅 1.2 厚 0.45 1g (ほぼ定形, 先端僅かに欠け)	平面形菱形を呈す。表裏面よりの押圧調整。	チャート	第109図 P.L. 29
J74	石鏝	長 2.4 幅 1.4 厚 0.4 1g (先端・茶端・左返し端部欠損)	平面形細長い二等辺三角形。逆しくの字上で基部付く。表裏より剥離調整。	黒色頁岩	第109図 P.L. 29
J75	石鏝	残長 2.1 幅 1.2 厚 0.4 1g (先端部欠損)	幅狭の有蓋鏝。表裏面より剥離調整。	チャート	第109図 P.L. 29
J76	石鏝	残長 2.4 残幅 2.2 残厚 0.4 2g (下位欠損, 中位表裏面剥落)	平面形三角形の大型製品。表裏面より剥離調整。	珧質頁岩	第109図 P.L. 29
J77	楕形石器 (定形)	長 9.8 幅 6.5 厚 2.3 140g	裏面に自然面残す薄片使用。表裏面からの剥離調整にて整形。	黒色頁岩	第109図 P.L. 29
J78	楕形石器	長 8.4 幅 6.5 厚 1.9 75g (定形)	裏面に自然面残す薄片使用。両側縁内湾。表裏面からの剥離調整にて整形で下端にやや鈍角な刃部。	珧質頁岩	第109図 P.L. 29
J79	スクレーパー (定形)	長 6.5 幅 9.6 厚 1.04 80g	裏面に自然面を残す薄片使用。表裏面より剥離調整し、下端縁に刃部形成。	黒色安山岩	第110図 P.L. 29
J80	スクレーパー (定形)	長 4.8 幅 9.4 厚 2.0 85g	裏面に自然面残す横長の薄片使用。表側から中心の剥離調整で下端縁に刃部形成。	黒色頁岩	第110図 P.L. 29
J81	スクレーパー (定形, 上端欠損の可能性有)	長 6.9 幅 5.3 厚 0.9 40g	裏面に自然面残す薄片使用。左側縁を裏面より、右側縁を表面より剥離調整し、刃部形成。	2区縄文包含層	第110図 P.L. 29
J82	スクレーパー (定形)	長 5.6 幅 8.5 厚 2.0 90g	横長、厚手の薄片使用。表裏より剥離調整し、上下縁に刃部形成。	黒色頁岩	第110図 P.L. 29
J83	スクレーパー (上端部遺棄以前に欠損)	長 7.3 幅 4.7 厚 1.9 81g	未成品。平面形は縦長石匙形。内厚。表裏面より剥離調整。	珧質頁岩	第110図 P.L. 29
J84	打製石斧	長 8.5 幅 3.1 厚 2.1 99g (上位側欠損, 裏面剥落)	遺棄時点での欠損品。楕形の打製石斧か。表裏面よりの剥離調整。	珧質頁岩	第110図 P.L. 29
J85	打製石斧 (定形)	長 7.55 幅 4.7 厚 1.8 60g	楕型。裏面に自然面残す。鈍表面からの剥離調整で縁辺整形。	黒色頁岩	第110図 P.L. 29
J86	打製石斧 (定形)	長 8.15 幅 4.34 厚 1.39 70g	古い薄片を使用。表裏面より剥離調整し、左右両側縁と下端縁を整形。	2区縄文包含層 黒色安山岩	第110図 P.L. 29
J87	打製石斧 (ほぼ定形)	長 14.4 幅 6.1 厚 1.8 165g	裏面に自然面広く残す。表面と裏面の一部に剥離痕。左右両側中程に表裏からの剥離調整痕。	細粒輝石安山岩	第110図 P.L. 29
J88	打製石斧 (刃部破片)	残長 4.3 幅 7.0 厚 2.4 90g	遺棄時点での欠損品。分銅形の打製石斧か。裏面に自然面残る。表裏面よりの剥離調整。	珧質頁岩	第110図 P.L. 29
J89	打製石斧 (未製品)	長 11.7 幅 5.9 厚 3.0 262g (ほぼ定形)	表面と下端面に自然面残す。表面と左右側面及び上端縁に剥離調整痕。	黒色頁岩	第110図 P.L. 29
J90	石核か (定形)	長 5.9 幅 6.6 厚 2.35 85g	裏面に自然面残す。表裏に剥離の痕跡。下端縁は鈍角な刃部状を呈す。	黒色頁岩	第110図 P.L. 29
J91	石核	長 8.3 幅 5.6 厚 3.3 140g (僅かに剥離痕所有)	表裏、左右、下縁に剥離痕跡残り、自然面は見られない。	黒色頁岩	第111図 P.L. 29
J92	フレーク (定形)	長 5.1 幅 1.7 厚 0.6 10g	旧石器のフレーク状を成す小型品。縦長の薄片。下位に打撃痕。表面に下位に剥離調整痕残す。	黒色頁岩	第111図 P.L. 30
J93	フレーク (定形)	径 5.0 × 3.5 厚 1.1 17g	スクレーパーの未製品か。裏面に自然面を残す。刃部円弧状を成し、表裏より剥離調整。	珧質頁岩	第111図 P.L. 29
J94	フレーク (定形)	径 4.1 × 2.1 厚 1.05 8.5g	上面に自然面残し、表裏に剥離面。	黒色頁岩	31号土坑 P.L. 30
J95	石皿	長 19.3 (幅 11.9 厚 9.1 2,106g) (定形)	表面に明瞭な研磨面。裏面に窪み多数。左側面にも研磨面形成。	粗粒輝石安山岩	第111図 P.L. 30
J96	磨石	残長 14.0 幅 5.8 厚 3.9 446g (下端面裏面欠損)	バナナ形の河床礫使用。裏面に顕著な研磨面形成。	ひん岩	第111図 P.L. 30
J97	磨石	残径 7.1 × 4.4 残厚 3.9 160g (破片)	河床礫使用。表面に研磨面形成され、上端部に亀打痕残る。	粗粒輝石安山岩	第111図 P.L. 30
J98	磨石	径 4.2 × 3.6 長 11.8 277g (定形)	河床礫使用。裏面と左側面に研磨面形成。こも編み石に転用。	粗粒輝石安山岩	第111図 P.L. 30
J99	磨石 (定形)	径 4.7 × 4.4 厚 3.2 90g	楕圓形の河床礫使用。表・裏面に弱い研磨面形成される。	粗粒輝石安山岩	第111図 P.L. 30

No.	資料名称	測定値 (cm)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
J100	磨石	径 5.1 × 4.6 厚 3.6 115g (完形)	楕円球上の河床礫使用。表面に研磨面形成され、上端に敲打痕残る。	岩 2区縄文包含層	第111国 P.L.30
J101	こも羅み石	長 9.8 径 4.2 × 3.8 172g (上端欠損)	右側縁が直線する短いバナナ形の河床礫使用。右側面上位は敲打により抉れ形成。	粗粒輝石安山岩 グリッド	第111国 P.L.30
J102	凹石	残径 5.9 残厚 2.6 222g (表面無破片。裏面欠損)	小円形の河床礫使用。表面に径 1.4cm と 1.1cm の 2ヶ所の窪みが並ぶ。	粗粒輝石安山岩 グリッド	第111国 P.L.30
J103	凹石	長 11.1 幅 6.7 厚 3.6 304.6g	河床礫使用。表面 3.1 × 2.5cm、深さ 2mm、裏面に 2.3 × 2.5cm、深さ 4mm の溝状の窪みを有する。左右両側中位を敲打によって平坦にし、この位置に幅 3.6cm 程の帯状の磨耗痕一箇。307g。	粗粒輝石安山岩 こも羅み石に転用 5号住居	第111国 P.L.30
J104	凹石	径 7.6 × 7.6 厚 3.2 250g (完形)	丸餅形の河床礫使用。表面中央に径 2.6 × 2.6cm、深さ 3mm、裏面中央に径 2.7 × 2.3cm、高さ 4mm の窪み穿たれる。	粗粒輝石安山岩 31号住居	第111国 P.L.30
J105	凹石	径 18.7 × 12.5 厚 10.2 2,078g (中央部破片)	表裏に鑿痕残り、表面に径 8.4cm、深さ 3.6cm の半球形の窪みが懸によって整形される。	ニッ缶石 1号溝	第111国 P.L.30
J106	凹石	残径 21.5 × 20.0 残厚 11.9 5,300g (表裏面の一部と下位欠損)	河床礫使用。表面に径 10.5 × 8.9cm、深さ 1.3cm の研磨による浅い窪み形成される。上端部研磨による調整か。石割の可能性を有する。	粗粒輝石安山岩 2号溝	第112国 P.L.30
J107	凹石	長 15.8 幅 8.4 厚 5.7 660g (ほぼ完形)	河床礫使用。表面に径 6.3 × 4.5cm、深さ 0.6cm、裏面に径 2.5 × 3.6cm、深さ 0.6cm と、径 3.2 × 2.6cm、深さ 0.5cm の窪み残る。	粗粒輝石安山岩 5号羅立柱建物	第112国 P.L.30
J108	多孔石	残径 11.7 × 20.8 残厚 8.2 2,225g (表面側 1/2)	河床礫使用。表面に径 1.8cm 以下、深さ 3mm 以下の浅い窪みが 9ヶ所穿たれる。	粗粒輝石安山岩 31号住居	第112国 P.L.30
J109	磨製石斧	長 16.8 幅 4.1 厚 2.8 300g (完形)	棒状の河床礫を研磨により平面形鋭状に加工。下端部研磨により刃部形成。	玄委武岩 2区縄文包含層	第112国 P.L.30
J110	石皿か	残径 19.0 × 11.7 厚 4.6 1360g (破片)	平たい河床礫加工。上面研磨され凹面を成す。表裏面に敲打痕残る。	粗粒輝石安山岩 2区縄文包含層	第112国 P.L.30
J111	砥石	長 12.5 幅 6.6 厚 3.1 345g (完形)	扁平な河床礫使用。裏面に研磨痕跡残り、裏面の中央及び頂部よりに強い敲打痕残る。	粗粒輝石安山岩 2区縄文包含層	第112国 P.L.30
J112	砥石	径 6.7 × 4.9 残長 9.4 510g (下位欠損)	鏡面の河床礫使用。下面に弱い研磨面形成され、上端部に敲打痕残る。	粗粒輝石安山岩 2区縄文包含層	第112国 P.L.30
J113	砥石	長 12.8 幅 5.4 厚 3.9 410g (完形)	河床礫使用。裏面に敲打痕伴う研磨面。上端部敲打痕。こも羅み石に転用され中位に幅 3.5cm 程の磨耗痕一箇。	粗粒輝石安山岩 2区縄文包含層	第112国 P.L.30
J114	砥石	残長 13.5 幅 7.3 厚 5.4 800g (下位欠損)	横断面三角形の棒状の河床礫使用。裏面と両側面に研磨面形成。右側面はやや削い。上端に敲打痕残る。	石英閃緑岩 2区縄文包含層	第112国 P.L.30
J115	砥石	長 13.4 幅 4.4 厚 5.8 500g (完形)	魚形の河床礫使用。下面に研磨面形成され、上端に敲打痕残る。	砂岩 2区縄文包含層	第112国 P.L.30
J116	砥石	径 7.1 × 6.2 厚 4.6 300g (完形)	鏡面形の河床礫使用。表・裏面に弱い研磨面形成され、上端と左側縁に敲打痕残る。	石英閃緑岩 2区縄文包含層	第112国 P.L.30
J117	磨石	径 1.04 × 9.3 厚 3.3 480g (完形)	扁平な河床礫使用。表裏面に研磨面残り敲打痕見られるが、裏面の方が凹凸顕著。	粗粒輝石安山岩 2区縄文包含層	第113国 P.L.30
J118	磨石	径 12.0 × 10.2 厚 4.6 823g (完形)	扁平な河床礫使用。表面に弱い研磨痕残り、裏面に明瞭な研磨面形成される。	石英閃緑岩 2区縄文包含層	第113国 P.L.30
J119	磨石	径 7.9 × 7.3 厚 4.0 350g (完形)	丸餅形の河床礫使用。表裏面に研磨面形成される。	石英閃緑岩 2区縄文包含層	第113国 P.L.30
J120	磨石	長 11.5 幅 8.1 厚 3.8 500g (完形)	扁平な河床礫使用。裏下面に研磨面形成され、表裏面に敲打痕残る。	粗粒輝石安山岩 2区縄文包含層	第113国 P.L.30
J121	磨石	長 7.9 幅 5.2 厚 3.6 200g (完形)	おぼろぎ形の河床礫使用。裏面に研磨面形成され、上端に敲打痕残る。	粗粒輝石安山岩 2区縄文包含層	第113国 P.L.30
J122	磨石	径 7.4 × 6.1 厚 2.4 150g (完形)	扁平な河床礫使用。表裏面に研磨面残り、敲打痕見られる。	粗粒輝石安山岩 2区縄文包含層	第113国 P.L.30
J123	磨石	長 13.2 幅 6.0 厚 3.5 470g (完形)	横断面二等辺三角形の河床礫使用。表裏面に明瞭な、右側縁に弱い研磨面形成。表裏面には敲打痕も見られる。	粗粒輝石安山岩 2区縄文包含層	第113国 P.L.30
J124	磨石	径 4.9 × 5.7 長 14.7 583g (完形)	三角柱状の河床礫使用。周囲3面に研磨面残り、頂部に敲打痕残る。中位にこも羅み石への転用示す幅 3cm の磨耗痕一箇。	ひん岩 2区縄文包含層	第113国 P.L.30
J125	凹石	径 8.6 × 7.7 厚 5.0 373g (完形)	三角結び形の河床礫使用。表裏右側面に径 3.3cm 以下、深さ 3mm 以下の窪みが穿たれる。	粗粒輝石安山岩 2区縄文包含層	第113国 P.L.30
J126	凹石	残長 10.6 幅 7.2 厚 4.8 420g (下位欠損。裏左側部落)	河床礫使用。表面に径 2.6 × 1.8cm、深さ 0.5cm の窪み穿たれる。	細結凝灰岩 2区縄文包含層	第113国 P.L.30
J127	凹石	径 12.2 × 11.2 厚 3.8 715g (完形)	扁平な河床礫使用。表面に弱い研磨面形成され。径 3.2 × 2.1cm、深さ 0.7cm のものなどの窪みが穿たれる。	粗粒輝石安山岩 2区縄文包含層	第113国 P.L.31

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
J128	凹石	径 6.3 × 5.6 厚 3.0 145g (定形)	丸餅形の河床礫使用。表裏面研磨か。表面中央に径 1.9 × 1.7cm、深さ 1mm 程の浅い窪み穿たれる。	粗粒輝石安山岩 2区縄文包含層	第 114 図 P L 31
J129	砥石	残長 8.2 幅 6.2 厚 5.9 374g (上位片)	棒状の河床礫使用。上部部に若干の砥打痕残る。	粗粒輝石安山岩 2区縄文包含層	P L 31
J130	磨石	残長 7.6 幅 6.4 厚 4.3 290g (裏面一部欠損)	丸餅形の河床礫使用。表面に研磨面。側面の一部に砥打痕残る。	粗粒輝石安山岩 2区縄文包含層	P L 31
J131	磨石	残長 5.3 残幅 8.3 厚 2.5 (上位片) 169.5g	丸餅形と思われる形状の河床礫使用。裏面に研磨面形成され、上部部に砥打痕残る。	粗粒輝石安山岩 2区縄文包含層	P L 31
J132	磨石	径 5.9 × 5.2 残長 7.3 400g (上位片)	角柱状の河床礫使用。側面 4 面のうち 3 面に研磨面形成。上部に砥打痕残る。	ひん岩 2区縄文包含層	P L 31
J133	磨石	残長 6.7 幅 10.0 厚 3.5 322g (上位片)	丸も地上的河床礫使用。裏面に研磨面形成され、上部に若干の砥打痕残る。	粗粒輝石安山岩 2区縄文包含層	P L 31
J134	磨石	残長 6.6 残幅 5.9 残厚 4.0 (上位片) 163g	河床礫使用。裏面に研磨面形成し、上部に砥打痕跡残る。	ひん岩 2区縄文包含層	P L 31
J135	打製石斧 (表面一部剥離)	長 11.4 幅 6.8 厚 0.7 128g	分銅型。表表面より剥離調整。表面上位左寄り古い剥離か。	頁岩 グリップ	第 114 図 P L 31

非縄文遺物	縄文土器 (1352 片、12,935g)、弥生土器壺 (2 片、25g)・弥生土器 (赤井戸式 4 片、21g)・古墳時代前・中期中心の土師器椀 (19 片、113g)・坏か碗 (10 片、80g)・高坏 (1 片、3g)・高坏か器台 (5 片、32g)・器台 (4 片、28g)・台付壺 (3 片、36g)・壺 (100 片、600g)・壺か甕 (53 片、622g)・小型壺 (4 片、33g)、土師器蓋 (1 片 6g)・坏 (鬼高、7 片、36g)・坏 (真間、1 片、3g)・坏 (内黒、10 片 68g)・坏 (墨書、14 片、102g)・坏 (その他、7,991 片、248g)・坏か碗 (12 片、86g)・碗 (29 片、310g)・坏か高坏 (19 片、68g)・高坏 (鬼高、1 片、11g)・高坏 (その他、2 片、8g)・皿 (内黒、1 片、5g)・壺 (12,485 片、10,668g)・壺か甕 (80 片、554g)・壺 (4 片、6g)・台付壺 (15 片、248g)・瓶 (1 片、84g)・埴 (7 片、6g)・その他 (23 片、35g)、土器片 (12 片、35g)、須恵器蓋 (100 片、820g)・坏 (201 片、1,388g)・坏か碗 (1,007 片、5,539g)・高坏か坏 (7 片、44g)・碗 (21 片、386g)・壺 (185 片、5,264g)・瓶 (1 点、5g)・長頸壺 (4 片、101g)・瓶 (1 片、13g)・壺 (14 片、249g)・その他 (1 点、1g)、羽釜 (1 点、13g)、灰輪陶器 (1 片、1g)、平瓦 (1 片、13g)、軟質陶器 (3 片 83g)、燒締陶器 (1 片 26 g)、施軸陶器碗 (7 片、74g)・その他 (13 片、62g)、陶器摺鉢 (2 片、63g)・その他 (32 片、142g)、磁器碗 (2 片、18g)・その他 (16 片、98g)、土塊 (23 片、72g)、電鍍染材か (1 片、28g)、砥石 (5 片、171g)、砥石 (1 片、30g)、こも編み石 (1 片、122g)、火打石 (2 片、10g)、剥片 (頁岩中心、660 片、5,697g)、頁岩剥片 (6 片)、チャート剥片 (9 片、22g)、鉄滓 (8 片、14g)、炭化物 (1 片、1g)、他				
-------	---	--	--	--	--

表 20 富田大泉坊B遺跡出土遺物一覧

※ 弥生時代末から古墳時代初期の土器は明確なものを弥生土器とし、その他のものは土師器とした。従って土師器としたものの中に弥生土器が混ざる可能性がある。

※ 非同軌遺物は遺構・構内・部位毎に一回だけ分類した。表末に遺跡で一括したものを掲載した。

※ 非同軌遺物の石片鑑定は非同軌遺物は飯島勝男先生によるものであるが、非同軌遺物の石材については編者が判断したものである。

1号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・図 版番号
1	土師器環	口径 13.1 残高 3.4 (口縁一部欠損、ほぼ定形)	挟雑物細かい。褐色。口縁横撫で。体～底部内面磨撫で。外面 体部指撫で、底面磨削り。	8世紀後半	第118図 P.L.46
2	土師器環	口径 (16.2) 底径 (11.3) 残高 3.5 (1.4)	粘土質。にぶい褐色。口縁横撫で。内面体部磨撫で、底部指撫で、 内面に放射状磨削る。外面体部指撫で、底面磨削り。	8世紀後半	第118図 P.L.46
3	須恵器環	口径 14.4 底径 10.0 器高 3.6 (4.5)	挟雑物細かい。灰白色。右回転輪軸整形。底面中央縦線の、外 側～腰部磨調整。	8世紀後半	第118図 P.L.46
4	磨石	径 7.4 × 7.3 厚 3.1 263g (定形)	やや平らな河床石使用。上面に研磨面形成。	粗粒輝石安山岩	第118図 P.L.46

2号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・図 版番号
1	土師器環	口径 12.3 底径 9.4 器高 3.8 (3.4)	挟雑物やや粗。にぶい褐色。口縁横撫で。体部内面磨撫で、外 面指撫で、底部内面指撫で、底面磨削り。	9世紀前半	第119図 P.L.46
2	土師器環	口径 (12.4) 底径 9.1 器高 3.3 (口縁過半欠損、1/2)	挟雑物細かい。褐色。口縁横撫で。体～底部内面磨撫で。体部 外面指撫で、底面磨削り。	9世紀前半	第119図 P.L.46
3	土師器鉢	口径 23.2 残高 23.8 (口縁～胴部)	挟雑物やや粗。褐色。コ字状口縁。口縁横撫で。体部内面磨撫 でで所々に指摺痕残る。外面磨削り。	9世紀前半	第120図 P.L.46
4	土師器鉢	口径 (21.6) 残高 6.2 (口縁～胴部)	挟雑物やや粗。明赤褐色。焼成良。口縁横撫で。肩部内面磨撫で、 外面磨削り。	9世紀前半	第120図 P.L.46
5	須恵器蓋	口径 17.7 底径 4.7 器高 5.3 (一部欠損、ほぼ定形)	挟雑物やや粗だが少ない。黄灰色。右回転輪軸整形。口縁下方 に引く。肩部回転磨削り後細磨付け。	8・9世紀	第120図 P.L.46
6	須恵器環	口径 (12.4) 底径 (7.6) 器高 4.2 (1/3)	挟雑物やや粗だが少ない。黄灰色。左回転輪軸整形。底面回転 糸切り切り離し。	9世紀前半	第120図 P.L.46
7	砥石	径 3.2 × (2.9) 長 8.2 135g (表面一部欠損)	欠損した石材を使用。上下両端割れ。表裏左右面に研磨面形 成し、特に表裏右面中央抉れ、削痕残る。	砥沢石	第120図 P.L.46
8	砥石	径 2.4 × 2.2 長 6.3 44g (定形か)	二面したものを使用。表裏左右面と上端面 (切磨面) に研磨面 形成。表裏面に削痕残る。下端面には割れ痕。	砥沢石	第120図 P.L.46

3号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・図 版番号
1	土師器環	口径 (11.6) 底径 (9.0) 残高 3.0 (底部中央部除く 1/6)	挟雑物やや粗。褐色。口縁横撫で。体～底部内面 (磨) 撫で。体 部外面指撫で、底面磨削り。	9世紀前半	第122図 P.L.46
2	須恵器環	口径 (13.0) 底径 (7.2) 器高 4.1 (底部中央部除く 1/4)	挟雑物細かい。灰色。左回転輪軸整形。底面回転磨削り。	8世紀後半	第122図 P.L.46
3	須恵器鉢	残存 15.7 × 15.5 厚 1.1 (腰部破片)	挟雑物多くないが粗。黄灰色。焼成良好。外面平行印き目、内 面指撫でで指摺痕残る。		第123図 P.L.46

3・4号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・図 版番号
1	土師器環	口径 (12.2) 底径 (10.0) 器高 3.4 (1/3)	挟雑物やや粗粒。褐色。口縁横撫で。体～底部内面磨撫で。体 部外面指撫で、底面磨削り。	9世紀前半	第124図 P.L.46
2	土師器鉢	口径 19.5 × 21.9 残高 21.0 (口縁～腰部 1/3)	挟雑物やや粗粒。褐色。口縁横撫で、外面に指摺痕。体部内 面磨撫で、外面磨削り。	8世紀後半	第124図 P.L.46

4号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・図 版番号
1	土師器甕	口径(20.6) 残高7.7 (口縁~肩部破片)	挟雑物やや粗粒。褐色。口縁横撫で。肩部寛撫で及び指撫で、外面寛削り。	9世紀前半	第125図 P.L.46

6号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・図 版番号
1	土師器杯	口径(13.4) 底径(9.4) 器高3.5 (1/4)	挟雑物比較的細粒。褐色。口縁~底部内面外周横撫で。体部外面と底部内面指撫で。底面寛削り。	9世紀前半	第128図 P.L.46
2	土師器杯	口径(13.5) 残高2.6 (1/4)	挟雑物比較的細粒で少量。にぶい黄褐色。口縁横撫で。体~底部内面寛撫で。体部外面指撫で。底面寛削り。	9世紀前半	第128図 P.L.46
3	土師器杯	口径(11.4) 底径(9.6) 残高2.9 (口縁~底部外周破片)	挟雑物やや粗粒。褐色。口縁横撫で。体~底部内面寛撫で。体部外面指撫で。底面寛削り。	9世紀前半	第128図 P.L.46
4	土師器杯	口径(11.2) 底径(9.4) 残高3.7 (口縁~底部外周破片)	挟雑物やや粗。褐色。口縁横撫で。体~底部内面(寛)撫で。体部外面指撫で。底面寛削り。	9世紀前半	第128図 P.L.46
5	土師器盤	口径19.2 底径 器高 3.5 (1/2)	挟雑物細かい。褐色。内面やや荒れる。底面保付着。口縁横撫で。底部内面指撫で。底面寛削り。	9世紀前半	第128図 P.L.46
6	須恵器杯	口径12.4 底径6.3 器高3.6 (口縁1/4欠損、完形に近い)	挟雑物粗。片岩含む。黄灰色。全体には還元焙焼成だが、底部酸化焙焼成。右回転軸線整形。底面回転糸切り切り履し後指撫痕等残る。	9世紀前半	第126図 P.L.46
7	須恵器高台付 側	底径11.0 残高2.5 (底~高台部1/4)	挟雑物やや少ない。黄灰色。腰部屈曲。回転軸線整形。底面静止糸切り後高台撫でによる貼り付け。	8世紀前半	第129図 P.L.46

7号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・図 版番号
1	須恵器杯	口径12.4 底径6.3 器高3.6 (口縁1/4欠損、完形に近い)	挟雑物やや粗く、焼成やや軟質。黄灰色。右回転軸線整形。底面回転糸切り切り履し。	9世紀前半	第130図 P.L.46
2	須恵器甕	残存9.6×13.4 残高11.3 (腰~底増部破片)	挟雑物少ない。灰色。内外面横位の撫で。高台貼り付け。	9世紀前半	第130図 P.L.46

9号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・図 版番号
1	須恵器甕	口径14.8 残高6.0 (腰部~高台片)	挟雑物細かい。黄灰色。腰部内外面横位の撫で。高台貼り付け後撫で。外面下位に指撫痕。	9世紀前半	第132図 P.L.46

10号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・図 版番号
1	台石	径20.0×18.1 厚12.9 7,000g (完形)	河床礫使用。裏面に保付着。表面に弱い研磨面形成。	粗粒碑石安山岩	第133図 P.L.47
2	台石	径14.9×17.9 厚8.0 3,445g (完形)	河床礫使用。表裏面に研磨面形成。	石英閃緑岩	第133図 P.L.47

11号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・図 版番号
1	縄文土器深鉢	口径28.7 残高31.0	胴部が膨らみ、頸部ですぼまって口縁が開く器形。単筋L R縄紋を横位施紋。	黒沢式	第134図 P.L.47
2	石皿	径10.2×10.0 厚4.5 6,329g	河床礫使用の小型の石皿。表裏・右側縁に剥離箇所見られるが右側縁の2箇所は研磨されるため磨り荒かと思われる。表面に研磨面残り、中央は径5.6×5.3cm、深さ1.0cmの窪みとなる。	粗粒碑石安山岩	第135図 P.L.47

12号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	土師器甕	口径(20.0) 残高7.4 (口縁～肩部片)	挟雑物細かく、焼成良好。にぶい赤褐色。コ字状口縁。口縁横撫で、肩底内面磨撫で、外面磨削り。	9世紀前半	第136図 P.L.47
2	須恵器坏	口径13.4 底径(6.6) 器高3.7 (1/2)	挟雑物少なく、焼成やや甘い。黄灰色。右回転軸轆整形。底面回転糸切り切り磨し。	9世紀前半	第136図 P.L.47
3	須恵器蓋	口径17.6 紐径2.9 器高4.9 (2/3)	石英中心の粗粒の挟雑物多く含む。焼成良好。灰色。右回転軸轆整形。上面切り磨し後回転磨削り。紐貼り付け。	8世紀	第137図 P.L.47

14号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	土師器坏	口径15.4 器高4.5 (一部欠損、ほぼ完形)	挟雑物細やか多いが、焼成良好。明赤褐色。口縁横撫で。体～底部内面磨撫で、体部外面～底面磨削り。	8世紀前半	第140図 P.L.47
2	土師器坏	口径(14.0) 残高3.3 (1/3)	挟雑物細やか多。焼成良。にぶい褐色。口縁横撫で。体～底部内面磨削り、体部外面～底面左回りの磨削り。	8世紀前半	第140図 P.L.47
3	土師器甕	残存12.0×13.0 (体部破片)	挟雑物粗。明赤褐色。破片下位に籠の構築材の土塊着付。体部内面磨撫で、外面磨削り。	古墳時代後期か	第140図 P.L.47
4	須恵器短頸 甕	口径(10.8) 残高6.9 (口縁破片)	挟雑物少なく、焼成良好。灰色。器厚薄く、内外面撫で。		第140図 P.L.47

15号住居(4区1号住)

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	土師器坏	口径(12.4) 底径(10.0) 残高2.8 (口縁～腰部1/2)	挟雑物細かい。にぶい褐色。口縁横撫で。体～底部内面磨撫で。体部外面磨撫で、底面磨削り。	9世紀前半	第141図 P.L.47
2	土師器甕	口径(13.8) 残高8.3 (口縁～体部上位1/2)	挟雑物やや粗い。鈍い赤褐色。口縁横撫で。体部内面左方への磨撫で、外面左方への磨削り。	9世紀前半	第141図 P.L.47
3	須恵器坏	口径13.2 底径8.3 器高4.0 (3/4)	挟雑物細かい。灰白色。左回転軸轆整形。底面回転磨削り。	8世紀後半	第141図 P.L.47
4	須恵器坏	口径13.0 底径7.5 器高4.0 (口縁～体部1/4欠損)	挟雑物粗く片岩含む。灰色。右回転軸轆整形。底面回転糸切り切り磨し。	9世紀前半	第142図 P.L.47
5	砥石	残長13.9 幅6.0 厚3.6 200g (上位欠損)	表裏、左右側面に研磨面形成。上面下位剥落。左右両側使用により挟れ。現況大腿骨下半上を成す。下端未調整。	砥沢石	第142図 P.L.47

16号住居(4区2号住)

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	須恵器坏	口径(13.0) 底径5.9 器高4.7 (1/3)	挟雑物荒く、片岩含む。部分的に酸化銅焼成。灰色或いはにぶい黄褐色。左回転軸轆整形。底面回転糸切り切り磨し。	10世紀前半	第143図 P.L.47
2	須恵器碗	口径(13.6) 底径6.7 器高5.8 (1/4)	挟雑物やや細かい。灰白色。右回転軸轆整形。底面回転糸切り後、高台貼り付けで底面撫で。	10世紀前半	第143図 P.L.47

1号道

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	須恵器小型 碗	口径(9.4) 底径(6.6) 器高4.8 (口縁～高台片)	挟雑物やや粗だが少量。黄灰色。右回転軸轆整形後回転糸切り、高台貼り付け時に撫で。	9世紀前半	第149図 P.L.47

1号溝

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	土師器壺	底径4.5 残高2.8 (腰部下位～底部)	挟雑物少ない。焼成良好。にぶい橙色。外面吸灰。内面左回りの磨いで。腰部外面荒削り。底面に木葉痕残る。	9世紀か	第150国 P.L.47

4号溝

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	須恵器壺	底径4.0×5.0 残高4.2 (腰部下位～底部)	挟雑物少量。焼成良好。灰色丸底。腰～底部内面磨いで。腰部外面並行叩き。底面撫でて平ら。		第152国 P.L.47
2	こもろみ石	径6.8×5.2 残長13.5 637g (下位欠損)	コップパン形の川原石使用。中位に幅3.8cm程の磨耗痕一周。		第152国 P.L.47
3	礫石	径8.4×10.3 厚4.4 576g (完形)	扁平な川原石使用。表表面に研磨面形成。一端に敲打痕残る。		第152国 P.L.47

6号溝

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	五輪塔地輪 か	残存11.8×16.8×14.2 1,640g (破片)	はつりされた2面が残る。裏方体状の石製品。		第155国 P.L.48
2	五輪塔地輪	径18.7×(20.6) 厚16.0 (欠損箇所数見) 7,200g	上面に径4×4cm、深さ0.8cmの浅い窪みが穿たれる。表面にノミ状工具によるはつり痕残る。		第155国 P.L.48

7号溝

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	陶器壺	肩部径19.9cm 残高9.6 (体部破片)	挟雑物雑物少ない。焼成甘い。浅黄色。肩部張る。内外面横位の撫で。		第155国 P.L.48

8号溝

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	須恵器壺	残高9.3 (腰～底部1/3)	挟雑物少量。灰色。腰～底部内面磨いで。腰部と底部の間に指押さえ痕。外面平行叩き目。		第154国 P.L.48
2	不明石製品	残径10.0×8.2 残厚8.8 663g (破片)	平面形が半円形となると見られる石製品の端部。側面2面が研磨によって形成される。		第154国 P.L.48

9号溝

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	須恵器坏	底径6.6 残高2.4 (腰部の一部と底部)	挟雑物少量。黄灰色。底面やや振れる。右回転機械整形。底面回転切り離し。	9世紀前半か	第154国 P.L.48

11号溝

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	須恵器罎	肩部径10.2 残高5.1 (体部1/4)	挟雑物少なく焼成良好。外面に自然釉。濃灰色。内面撫でて。肩部上位に指押痕。外面撫でて。肩部に縄押痕快んで沈線2条。		第154国 P.L.48

12号溝(4-1号溝)

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	土師器坏	口径16.0 器高3.3 (口縁~底部1/4)	挟雑物やや粗。焼成やや良。にぶい橙色。口縁横撫で。体~底部内面磨撫で、外面磨削りで体部外面磨撫で。	9世紀前半	第156国 P.L.48
2	土師器美	残高10.9 残高11.4 (口縁~肩部破片)	挟雑物やや粗。焼成やや良。にぶい橙色。口縁横撫で。体~底部内面磨撫で、外面磨削りで体部外面磨撫で。	8世紀後半	第156国 P.L.48

旧河道

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	青磁碗	残存6.2×5.5 厚0.4 (体部破片)	内外面施釉。オリーブ灰色。外面に明確なしのき。	龍泉窯系	第157国 P.L.48
2	陶器鉢	口径(25.8) 残高5.7 (口縁片)	焼成弱くやや軟質。内外面施釉。明赤褐色。内外面横位の撫で。	粗粒輝石安山岩	第157国 P.L.48
3	五輪塔空風輪	径18.5×17.5 長31.6 6.3kg (一部剥落)	空輪と風輪を幅3.2cm、深さ1.7cmの溝で両す。風輪底部に径7cm、長さ4.9cmの横断面形逆台形の円柱状のホゾが付く。	粗粒輝石安山岩	第157国 P.L.49
4	五輪塔空風輪	径19.0×18.4 残長28.0 7.9kg (宝珠尖端欠損、部分的に剥落)	空輪と風輪を幅2.6cm、深さ1.9cmの溝で両す。風輪底部に径5.8cm、長さ4.2cmの円柱状のホゾが付く。	粗粒輝石安山岩	第157国 P.L.48
5	五輪塔空風輪	径11.4×11.3 残長18.8 2400g (ホゾ尖端欠損、一部剥落)	空輪と風輪を幅2.8cm、深さ1.8cmの片葉研状の溝で両す。風輪底部に径8cm、長さ5.2の角柱状のホゾが付く。ホゾの四面には幅1.6cm、深さ3mm程の格状間。	粗粒輝石安山岩	第157国 P.L.48
6	五輪塔火輪	径32.3 残厚19.0 17.6kg (角一面欠損)	四方短い層根形。天井部に径8.5×8cm、深さ5.5cm程の円孔穿たれる。円孔底面には懸跡多数残る。	粗粒輝石安山岩	第158国 P.L.49
7	五輪塔火輪	残径12.3×10.4 厚7.3 650g (一隅頂部破片)	四方層根形か。頂部にハツリ痕残る。	粗粒輝石安山岩	第158国 P.L.48
8	五輪塔火輪	残径13.5×9.6 残厚3.9 480g (頂部破片)	上面幅13.3cm、径7.2cmの円孔穿たれる。	粗粒輝石安山岩	第158国 P.L.48
9	五輪塔火輪	径37.5×37.4 厚22.3 32kg (一部剥落)	四方層根形。上・下面平らに整形される。上面には凹凸あり。	粗粒輝石安山岩	第158国 P.L.50
10	墓石	長40.0 幅17.1 高9.2 7.2kg (杵表面等一部欠損、面変れる)	板碑形石塔。背面は弧状に彫らむ。刻線等判読不能。	二ッ石石	第158国 P.L.49

2号井戸(4区-1号井戸)

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	軟質陶器鉢	口径(32.2) 底径(14.4) 器高10.0 (1/6)	挟雑物やや粗。黄灰色。片口付く。口縁~体部内外面撫で。片口下位の体部外面に指頭痕。底面回転糸切り切り離し。	14世紀中葉	第160国 P.L.48

16号土坑(4区-3号土坑)

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	土師器鉢	口径13.1×12.4 底径5.9 器高7.4 (口縁一部欠損、ほぼ整形)	挟雑物少なく、胎土細かい。灰黄褐色。口縁横撫で。体~底部内面回し乍の磨撫で。体部外面磨撫で。底面磨撫で。	4世紀前半	第163国 P.L.48
2	須恵器尊	口径9.0 残高4.0 (口縁3/4)	挟雑物少ない。焼成良好。灰色。段を有し、外面に細い突帯一周。	TK23	第163国 P.L.48

19号土坑(4区-15号)土坑

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	磨石	残径8.4×7.2 厚3.5 (破片) 336.4g	方形様の河床石使用。1/4程度残存か。表面に敲打痕伴う弱い研磨面形成され。右側縁に明確な研磨面残る。	粗粒輝石安山岩	P.L.48

グリッド

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	土師器甕	口径(28.8) 残高7.0 (口縁～肩部)	扶雑物少量。造成良好。明褐色。口縁横撫で。肩部内面横位の 撫撫で、外面横位の摺削り。	8世紀後半 2区 50-H-10IV	第173図 P.L.50
2	青磁碗	残存 3.1 × 4.5 厚 0.4 (口縁破片)	灰青リーゾ色。釉薬中に気泡。内面にしぎで叢文。内外面施釉。 (口縁破片)	13世紀後半～14 世紀。龍泉窯系。 2区 59-K-6	第173図 P.L.50

全域

No.	資料名称	測定値 (cm)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
2	土師器杯	口径(13.2) 残高3.1 (1/4)	扶雑物やや粗。にぶい褐色。口縁横撫で。体～底部内面施撫でか、 外面施削り。	7世紀前半	第173図 P.L.50
3	土師器杯	口径(13.2) 残高3.7	扶雑物難かく少量。にぶい褐色。口縁横撫で。体部～底部内面 施撫で。体部外面指撫で、底面施削り。	8世紀後半	第173図 P.L.50
4	手鉄脚鉄	径 2.20 × 2.20 厚 0.9 (左下欠損。緑青吹く)	脚鉄。表面に「手鉄、二百枚(菊紋)換一円」当の陽刻。裏面に鳳凰、 「大日本」等の陽刻。	明治15年(1882)	第173図 P.L.50

縄文時代遺物

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
J1	縄文土器	残存 6.9 × 3.5 厚 0.8 (口縁破片)	口唇部肥厚。器面が荒れて原体は不明であるが、器底を縦位の 施釉。口唇部にも施釉。	井草式 縄文遺物包含層	第176図 P.L.50
J2	縄文土器	残存 10.5 × 7.1 厚 0.9 (胴部片)	底部に近い部位。0段多葉縄紋を施釉。器面の凹凸著しく、条 痕や指痕が見られる。	花横下層式 縄文遺物包含層	第176図 P.L.50
J3	縄文土器	残存 11.6 × 7.2 厚 0.9 (胴部片)	単節R.L.R. R.L縄紋による変形構成。	黒浜式 13号土埴	第176図 P.L.50
J4	縄文土器	残径 6.3 × 5.9 残高 1.7 厚 0.8 (底部片)	単節R.L縄紋を横位施釉。	黒浜式 13号土埴	第176図 P.L.50
J5	縄文土器	残存 8.7 × 5.5 厚 0.8 (胴部片)	くの字状に屈曲する器形。単節R.L縄紋を横位施釉。屈曲部に 爪形紋を複数施釉。内面研磨。No6と同一個体。	黒浜式 2区 50-L-3	第176図 P.L.50
J6	縄文土器	残存 9.2 × 5.7 厚 0.8 (胴部片)	No5と同一個体。	黒浜式 2区 50-L-3	第176図 P.L.50
J7	縄文土器	残存 3.1 × 3.5 厚 0.6 (胴部片)	単節R.L縄紋を地紋とし、平行沈線を斜位に施す。	講磯a式 3区 69-K-5VII	第176図 P.L.50
J8	縄文土器	残存 11.4 × 7.1 厚 0.8 (口縁部破片)	口縁が鋭く外反する。単節R.L縄紋を横位施釉。	講磯a式 3区 69-E-16V	第177図 P.L.50
J9	縄文土器	残存 × 厚 0.5 (胴部片)	沈線により幾何学モチーフを描き、沈線間に単節R.L縄紋を充 填施釉。	3区 69-E-16V	第177図 P.L.50
J10	石旗	長 2.22 残幅 1.41 厚 0.32 0.7g (左側送り端部欠損)	両側縁がやや膨らみを有する無葉錐。送りはやや長めで鋭角。 表裏面よりの剥離調整。	黒色安山岩 3区縄文包含層	第177図 P.L.50
J11	石旗	残長 1.60 幅 1.78 厚 0.3 0.7g (尖端部欠損)	無葉錐。送り鋭角。表裏面より剥離調整。	黒色安山岩 3区縄文包含層	第177図 P.L.50
J12	石旗	長 1.46 残幅 1.34 厚 0.27 0.4g (左側送り端部欠損)	表裏面下位剥落か。僅かに両側が膨らみを持つ小型の無葉錐。 表裏面より剥離調整。	黒色安山岩 3区縄文包含層	第177図 P.L.50
J13	石旗	残長 1.19 幅 1.52 厚 0.26 0.4g (尖端部欠損)	無葉錐。送り端部鋭角。表裏面より剥離調整。	黒色安山岩 3区縄文包含層	第177図 P.L.50
J14	石旗	残長 2.5 残幅 1.28 厚 0.38 0.8g (右下送り端部欠損)	細長い二等辺三角形の無葉錐。送り端部尖形。表裏面より剥離 調整。	黒色安山岩 3区 57ブロッケ	第177図 P.L.50
J15	石旗	長 2.05 幅 2.06 厚 0.45 1.0g (完形)	両側縁がやや内湾し、送り方形様を成す無葉錐。表裏面より剥 離調整。濃い褐色をなす。	黒結凝灰岩 縄文包含層	第177図 P.L.50
J16	石旗	長 3.31 幅 2.19 厚 0.55 3g (完形)	両側が僅かに膨らみを有する無葉錐。短い返しを有する。表裏 面よりの剥離調整。	黒曜石 2号住居	第177図 P.L.50
J17	石旗	長 2.31 幅 1.56 厚 0.36 1.0g (完形)	両側が膨らみを有する無葉錐。内湾する短い返しを有する。表 裏面よりの剥離調整。	チャート 10号住居	第177図 P.L.50

No.	資料名称	測定値 (cm)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
		(残存状況)			
I18	石槌	長1.37 幅1.30 残厚0.38 0.6g	三角形で下端が直線的な無彫。外側表裏両側よりの距離調整で整形。	チャート 5号溝	第177図 P.L.50
I19	彫形石器	長10.0 幅6.0 厚2.2 140g (完成)	表面に自然面残る。両側および下側よりの距離調整。刃部はほぼ垂直。	黒色頁岩	第177図 P.L.50
I20	彫形石器	長8.1 幅5.2 厚1.6 87.0g (一部剥落、ほぼ完成)	表面に自然面残る。両側および下側よりの距離調整。刃部鈍角。	4区1号トレンチ 4区表土、前期	第177図 P.L.50
I21	彫形石器	長7.4 幅4.1 厚0.9 38.0g (完成)	表面に自然面残る。両側および下側方向よりの距離調整。鈍角な刃部形成。	黒色頁岩 表土	第177図 P.L.51
I22	削器か	径8.3×4.7 厚1.2 51.0g (部分的に小さく剥落)	楕長の薄片使用。表裏両側から距離調整し、下端縁に刃部形成。	黒色頁岩 一括	第177図 P.L.51
I23	スクレーパー	径6.6×5.1 厚1.8 64.0g (完成)	自然面を残す薄片を使用。表面に距離調整を施し、左下縁に刃部を作る。	黒色頁岩 7ブロック	第177図 P.L.51
I24	スクレーパー	長4.0 幅4.5 厚1.3 20.0g (完成)	銀杏葉形の薄片使用。下端部を表裏両側から距離調整し、刃部を作る。	黒色安山岩 3区縄文包含層	第177図 P.L.51
I25	スクレーパー	径9.6×4.8 厚2.0 108.0g (完成)	表面に自然面を残す薄片使用。下縁と上縁両側に表裏からの距離調整を施す。	黒色頁岩 2区 50-K-TV	第177図 P.L.51
I26	スクレーパー	残長6.5 幅3.5 厚1.4 33.0g (上・下欠損)	表面に自然面を残す縦長の薄片使用。左右両縁と下端縁を表面中心の距離調整で刃部形成。	黒色頁岩 3区 69-D-IV・VII	第177図 P.L.51
I27	スクレーパー	長6.7 幅3.0 厚1.0 18.0g (下端欠損か)	縦長の薄片使用。左側縁に表裏からの距離調整を施し刃部形成。	黒色頁岩 2区 50-L-3	第178図 P.L.51
I28	スクレーパー	長7.4 幅4.3 厚1.4 56.0g (完成か)	縦長の薄片使用。表裏面からの距離調整により、左右量縁は鈍角、下端部は鋭角な刃部形成。	黒色頁岩 田波路	第177図 P.L.51
I29	スクレーパー	幅6.7 高3.1 厚1.0 12.0g (完成)	楕長の薄片を使用。下縁左側は刃直し、右側は表裏より距離調整。	黒色頁岩 一括	第178図 P.L.51
I30	スクレーパー	径8.1×9.1 厚2.2 210.0g (完成)	表面に自然面に残る薄片使用。表面の左上・左下縁と表面両側に距離調整。	黒色頁岩 一括	第178図 P.L.51
I31	スクレーパー	径6.7×5.3 厚2.2 85.0g (所々剥離欠損)	表面に自然面を残す薄片使用。表面を中心とした距離調整。	黒色頁岩 一括	第178図 P.L.51
I32	ブレードか	長5.8 幅3.9 厚1.2 23.0g (完成)	楕形の薄片使用。右側縁に鈍角な刃部を形成し、下端縁も表面からの距離調整。	黒色安山岩 3区縄文包含層	第178図 P.L.51
I33	石核	径9.0×8.6 厚4.5 350g (完成)	河床礫使用。自然面残す。表面に距離調整残す。	黒色頁岩 3区縄文包含層	第178図 P.L.51
I34	石核	径9.3×7.4 厚4.8 371.0g (完成)	河床礫使用。自然面残す。表裏面と左右両側に距離調整残す。	黒色頁岩 2区 50-K-6	第178図 P.L.51
I35	石核か	径9.2×6.2 厚4.4 272.2g (完成)	河床礫使用。自然面残す。表裏面に距離調整。下縁は鋭利で石器として使用か。	黒色頁岩 3区縄文包含層	第178図 P.L.51
I36	打製石斧	残長7.0 幅4.6 厚1.3 47.0g (上・下と表裏面の一部欠損)	楕型か。表裏面からの距離調整。	黒色頁岩 7ブロック	第178図 P.L.51
I37	打製石斧	長9.2 幅6.5 厚1.4 90g (表面一部欠損)	楕型。表面に自然面に残る薄片使用。左右両側と下端部表裏より距離調整。	粗粒輝石安山岩 2区縄文包含層	第178図 P.L.51
I38	打製石斧	長132.9 幅7.8 残厚0.23 (表面大きく剥離) 246.0g (完成)	分銅型。表面に古い剥離痕。表面に自然面残る。表裏面よりの距離調整。	黒色頁岩 2区 51-H-13	第178図 P.L.51
I40	打製石斧	長7.7 幅4.5 厚2.0 70g (1箇所僅かに欠け、ほぼ完成)	楕型。縦長の薄片使用。左右側と下端からの距離調整。	黒色頁岩 4区1トレンチ	第178図 P.L.51
I41	打製石斧	長11.4 幅7.3 厚2.7 288.0g (右側僅かに剥離、ほぼ完成)	楕型と分銅型の中間携帯。表面に自然面残る。両側および下方からの距離調整。	黒色頁岩 表土	第179図 P.L.51
I42	石皿	径24.5×21.6 厚4.8 5,106g (完成)	平面形長方形の扁平な河床礫使用。表裏面に研磨面形成。	かん岩 3区 59-S-9 VIII	第179図 P.L.51
I43	石皿	残径10.8×12.9 厚6.3 (中央寄り破片) 958.5g	表面に研磨面形成され、裏面も研磨により平坦に加工される。	粗粒輝石安山岩 2区 50-L-6 V	第179図 P.L.51
I44	石皿か (多孔石)	残径9.1×20.7 残厚11.3 (破片) 1265.7g	河床礫使用。上面に研磨面形成。側面に径2.0×1.7cm、深さ0.8cm、径2.4×1.9cm、深さ0.6cmの窪み。	粗粒輝石安山岩 8号溝	第179図 P.L.51
I45	台石	残径4.8×12.4 厚3.2 251.0g (破片)	河床礫使用。同上表面に研磨面形成される。	粗粒輝石安山岩 5ブロック	第179図 P.L.51
I46	台石	径11.8×12.9 厚4.4 817.0g (裏面一部欠損)	河床礫使用。表面に弱い研磨面見られ、弱い削痕残る。	粗粒輝石安山岩 3区縄文包含層	第179図 P.L.51
I47	敲石	長10.3 幅6.8 厚3.2 380.0g (右上縁欠損)	河床礫使用。表裏面に研磨面形成される。上面と右側面に若干の敲打痕残る。	粗粒輝石安山岩 2区7ブロック	第179図 P.L.51

No.	資料名称	測定値 (cm)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
		(残存状況)			
148	磁石	残長 6.6 残幅 8.5 厚 3.1 (上位破片) 200g	河床礫使用。表面に弱い研磨面形成され、上端縁に敲打痕残る。	粗粒輝石安山岩 3区縄文包含層	第179図 P.L. 51
149	磁石	径 7.0 × 6.9 厚 3.7 200g (下端欠損)	楕圓形の河床礫使用。表裏面の狭い範囲に弱い研磨面形成。	粗粒輝石安山岩 2区 50-L-6 IV	第179図 P.L. 51
150	磁石	残長 4.9 残幅 8.5 厚 3.5 (上位破片) 150g	河床礫使用。上端に若干の敲打痕残り、表裏面に弱い研磨面形成。	粗粒輝石安山岩 3区 5アブロック	第179図 P.L. 51
151	磁石	残長 7.2 残幅 6.9 残厚 3.6 (上位片) 252.2g	河床礫使用。上端に敲打痕残り、右側縁に弱い研磨面形成。	かん岩 2区 20-L-6 V	P.L. 51
152	磨石	残径 8.1 × 7.8 厚 2.3 190.0g (上位破片)	やや平たい河床礫使用。表裏面に研磨面形成。	粗粒輝石安山岩 5ブロック	第179図 P.L. 51
153	磨石	径 7.4 × 10.4 厚 3.4 430g (左下縁一部欠損)	河床礫使用。図上表面に研磨面残る。右側縁に敲打痕一箇所。	粗粒輝石安山岩 6ブロック	第179図 P.L. 51
154	磨石	長 13.7 幅 5.5 厚 3.2 345g (完形品)	河床礫使用。裏面と左側面に研磨面形成。中位に幅 4cm 前後の磨耗痕一箇所。こもろみ石に転用か。	粗粒輝石安山岩 3区縄文包含層	第179図 P.L. 51
155	磨石	長 11.9 幅 8.0 厚 3.9 566g (完形)	河床礫使用。表裏に研磨面形成される。中位に幅 3cm 程度の帯状の磨耗痕一箇所のため、こもろみ石に転用か。	石英閃綠岩 2区 50-L-6	第180図 P.L. 52
156	磨石	長 7.3 幅 5.1 厚 2.4 88g (ほぼ完形だが、部分的に割離)	河床礫使用。表面寛れる。上面に弱い研磨面見られる。	粗粒輝石安山岩 3区 69D-2 V	第180図 P.L. 52
157	磨石	残長 7.5 幅 6.4 厚 4.9 372.6g (上位片、上端部一部割離)	河床礫使用。裏面に研磨面形成。上端部に敲打痕残る。	石英閃綠岩 2区 50-K-4	P.L. 52
158	磨石	長 8.8 幅 7.9 厚 3.9 430g (完形)	河床礫使用。裏面に研磨面形成され、右側に小さい研磨面形成。後者により握りやすい。上端部に敲打痕残る。	粗粒輝石安山岩 2区 50-L-6 V	P.L. 52
159	磨石	長 11.0 残幅 6.7 厚 3.1 305g (右側欠損)	河床礫使用。表裏に研磨面形成され、左側縁に敲打痕残る。	粗粒輝石安山岩 3区 60-C-20 V	P.L. 52
160	磨石	長 11.1 幅 9.2 厚 4.1 680g (上端欠損。表裏面一部割離)	河床礫使用。表裏面に弱い研磨面が形成され、中央に敲打痕残り。上端に敲打痕残る。	粗粒輝石安山岩 2区 59-S-9 VIII	第180図 P.L. 52
161	凹石	残径 7.4 × 8.3 厚 3.8 297g (破片)	河床礫使用。表面に径 3.5 × 1.6cm、深さ 0.4cm の窪みが穿たれ、表面に研磨面形成される。	粗粒輝石安山岩 5ブロック	第180図 P.L. 52
162	凹石	残長 9.5 幅 9.3 厚 4.0 520g (下端欠損)	河床礫使用。上面に敲打痕による径 2.0 × 2.4cm の窪み。上端に敲打痕、裏面に研磨痕残る。	伊勢 2区縄文包含層	第180図 P.L. 52
163	凹石	残長 9.0 幅 5.8 厚 4.0 267g (下端部欠損)	河床礫使用。表裏面に 2箇所づつの窪み穿たれる。右側縁にも小さい窪み。こもろみ石に転用か。	粗粒輝石安山岩 2区 50-L-4	第180図 P.L. 52
164	凹石	残径 6.0 × 7.4 厚 3.9 212g (破片)	河床礫使用。表面に径 2.0、深さ 0.4cm の窪み穿たれる。表面寛れる。	粗粒輝石安山岩 2区 50-K-4	第180図 P.L. 52
165	凹石	径 9.9 × 8.9 厚 4.9 661g (ほぼ完形、裏面一部割離)	河床礫使用。表面に 2箇所、裏面に 1箇所の小なる窪みが穿たれる。上端縁に敲打痕残る。	粗粒輝石安山岩 2区 50-J-6 IV	第180図 P.L. 52
166	凹石	残長 8.8 残幅 7.6 厚 4.3 500g (上位破片)	河床礫使用。表裏に 2箇所づつの浅い窪み穿たれる。左右両側縁に研磨痕残る。	粗粒輝石安山岩 3区 69-J-6 VIII	第180図 P.L. 52
167	凹石	長 12.0 幅 6.7 厚 3.8 373g (一部欠損)	川原石使用。表面に径 2.0 × 1.8cm、深さ 0.5cm の窪み穿たれる。表面と右側面に研磨面形成され、右側面に敲打痕残り、中位に幅 3cm 程度の磨耗痕一箇所。	粗粒輝石安山岩 こもろみ石に転用 6号溝	第181図 P.L. 52
168	凹石	長 21.8 幅 12.7 厚 9.7 2,853g (完形)	河床石使用。上面中央に径 6.9 × 7.5cm、深さ 4.1cm の孔が、左側面には径 2.7 × 3.1cm、深さ 0.3cm の浅い孔穿たれる。左右、下面割離し、側面見られる。	粗粒輝石安山岩 6号溝	第181図 P.L. 52
169	凹石	径 9.0 × 8.6 厚 3.4 298g (一部欠損)	川原石使用。表面に径 2.5 × 1.3cm、深さ 0.2cm の窪み穿たれる。	粗粒輝石安山岩 8号溝	第180図 P.L. 52
170	凹石	径 12.1 × 10.1 厚 5.5 808g (ほぼ完形)	側面をほつて直方体状にした河床石使用。上面に径 3.0 × 3.1cm、深さ 0.6cm、下面に径 2.8 × 3.0cm、深さ 1.1cm の孔が穿たれる。	粗粒輝石安山岩 9号溝	第181図 P.L. 52
171	多孔石	径 10.7 × 15.6 厚 4.8 997g (完形)	河床礫使用。表面に弱い研磨面形成され、表面に浅い孔が複数穿たれる。	粗粒輝石安山岩 5ブロック	第181図 P.L. 52
172	多孔石	残存 10.0 × 11.8 残厚 10.5 (破片) 388.4g	河床石使用。上面中央に径 1.9 × (2.7cm)、径 1.5 × (1.1cm)、深さ 0.3cm の浅い孔穿たれる。	粗粒輝石安山岩 11号住居	P.L. 52
173	多孔石	径 11.3 × 12.8 厚 5.5 980g (ほぼ完形)	河床礫使用。表面に 6箇所程度の浅い窪みが集中的に穿たれ、表面上位と右側縁に弱い研磨面形成される。	粗粒輝石安山岩 7号溝	第181図 P.L. 52
174	多孔石	長 18.9 幅 14.3 厚 7.6 2050g (完形)	河床礫使用。表面に研磨面形成され、表面に 11箇所、裏面に 9箇所、径 2cm 前後、深さ 1cm 以下の窪み穿たれる。	粗粒輝石安山岩 7号溝	第181図 P.L. 52

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
115	縄文土器	残存 5.8 × 3.5 厚 0.7 ~ 1.1 (口縁部片)	口唇部が肥厚、外反する。単節直し縄紋を口唇部上端、口唇部 側面、頸部に施紋する。	井草1式 14号溝	第176図 P.L.116

非縄文遺物	<p>縄文土器 (524片、5,496g)、弥生土器類 (赤井戸式、4片、11g)、弥生土器壺 (樽式、3片、100g)、弥生土器 (赤井戸式、3片、12g)、古墳時代前・中期中心の土師器類 (4片、39g)・埴 (1片、20g)・高坏 (2片、23g)・台付壺 (4片、98g)・甕 (183片、1,168g)・小型甕 (10片、27g)・壺 (73片、669g)、その他 (2片、5g)、律令期中心の土師器類 (608片、2,426g)・坏か椀 (2片、11g)・椀 (5片、33g)、甕 (1,113片、4,191g)・小型甕 (1片、38g)・壺 (2片、6.1g)、須恵器蓋 (9片、116g)・坏 (14片、250g)・坏か椀 (141片、748g)・椀 (8片、113g)・甕 (94片、3,208g)・長頸壺 (1片、13g)・その他 (3点、7g)、灰輪陶器類 (2片、4g)、内耳罎 (2片、10g)、軟質陶鉢 (1片、22g)、軟質陶器蓋 (2片、105g)、地輪陶器鉢 (1片、24g)・甕 (2片、135g)、地輪陶器碗 (19片、135g)・皿 (1片、17g)・灯明皿 (1片、5g)・甕 (4片、36g)・椀鉢 (2片、20g)、陶器碗 (5片、14g)・甕 (4片、36g)・その他 (2片、7g)、磁器碗 (10片、61g)・皿 (1片、8g)・小鉢 (1片、14g)、瓦 (近世以降、2片、27g)、おはじき (1片、3g) 石匙か (1片、6g)、石芥 (1片、20g)、砥石か (1片、120g)、磨石 (8片、2,172g)、板碑か (緑色片岩、3片、271g)、割片 (頁岩中心、5片、182g)、黒曜石割片 (2片、2g)、頁岩割片 (503片、5,664g)、黒色安山岩割片 (6片、387g)、チャート割片 (32片、136g)、安山岩割片 (3片、49g)、片岩割片 (13片、64g)、鉄鎌か (1片、6g)、鉄片 (4片、135g)、炭化物 (1片、1g)、馬歯 (61g)、土塊 (11片、12g)</p>				
-------	---	--	--	--	--

富田大泉坊A遺跡出土遺物一覧

※ 弥生時代末から古墳時代初期の土器は明確なものを除き生土器とし、その他のものは土師器とした。従って土師器としたものの中に生土器が混ざる可能性がある。

※ 非掲載遺物は遺構・構内・部位毎に一回だけ分類した。表末に遺跡で一括したものを掲載した。

※ 掲載遺物の石材鑑定は掲載遺物は飯島隆男先生によるものであるが、非掲載遺物の石材については編者が判断したものである。

6号溝

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・図 版番号
1	土師器高坏	胴部径 10.5 残高 6.4 (坏底部～脚部 1/1)	挟雑物粗だが胎土細かい。三方に径 1.0cm 程の円孔。裾端部付 近横撫で。これを除き坏・脚部内面指撫で、外面磨き。	4世紀前半	第207図 P.L.68

7号溝

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・図 版番号
1	土師穴鉢か	残存 8.1 × 8.6 厚 1.4 (口縁破片)	生地細かく焼成甘い。浅黄色。内外面撫で。	近古か	第188図 P.L.68
2	陶器皿	口径(13.4) 底径(7.6) 器高 3.6 (1/6)	生地やや灰色掛かる。内外面に草花文の染付け。	18世紀前半 彫部・透後見	第188図 P.L.68
3	陶製筋こ き?	上径 6.1 底径 6.3 厚 1.2 (ほぼ定形)	挟雑物細かい。灰白色。円盤状で中央に径 1.8cm の円孔開く。 外縁面と円孔面に灰刷。	時期・産地不明 土器系に使用か	第188図 P.L.68
4	瓦尻(軒瓦)	径 7.5 × (5.6) 厚 (1.3) (軒瓦部分表面)	挟雑物少ない。灰色。表面磨し。八星の中央に巴紋。	近古後半以降	第188図 P.L.68

8号溝

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・図 版番号
1	土師器台台	口径 10.5 残高 7.6 (口縁～脚部上位)	挟雑物細粒。にぶい橙色。内面受部左回りの磨撫で、脚部磨撫で。 外面受部と脚部境に粘土粒指撫きで、その上下面磨撫で。	4世紀か	第218図 P.L.68
2	土師器塔	口径(16.0) 残高 4.4 (口縁～体部上位 1/3)	胎土少なく、生地細かい。にぶい黄橙色。口縁横撫で後内外面 放射状の磨き。体部外面磨りと撫で、内面撫で。	4世紀後半	第218図 P.L.68
3	土師器盃	底径 5.8 残高 19.2 (肩～底部 1/3)	挟雑物比較的粗だが胎土細かい。にぶい橙色。体～底部内面磨 撫で。体部外面磨き。底面上げ底で指撫で。	5世紀前半	第218図 P.L.68
4	土師器台付 罍	胴部径 9.4 残高 7.3 (罍底部～高台 4/5)	罍・台付部粗砂多い。脚部下位胎土細かい。にぶい黄橙色。台 部内側に折る。内面罍底部磨撫で、台部指撫で、外面刷毛目 度台部に磨き。台部磨撫で。	4世紀	第218図 P.L.68
5	土師器台付 罍	胴部径 10.0 残高 6.3 (台部はほぼ定形)	挟雑物やや粗。明赤褐色。罍部内側折り返し。罍底部中央・台 内面やや荒れ。台部内面指撫で。外面刷毛目後指撫で。	4世紀	第218図 P.L.68
6	土師器台付 罍	胴部径 9.4 残高 6.5 (罍底部中央～台部 1/2)	胎土細粒。にぶい褐色。罍底部内面指撫で。台部内側に折 返しで内面指撫で、外面細かい刷毛目後指撫で。	4世紀	第218図 P.L.68
7	手捏土器	口径 7.7 底径 3.5 器高 6.6 (口縁一部欠損、ほぼ定形)	楽形。挟雑物粗。にぶい黄橙色。一面圧平。内面口縁～体部刷 毛目後指撫で、底部指撫で。外面口縁撫で、体部刷毛目後 磨跡磨き指撫で。底面指撫で。	4世紀	第218図 P.L.68

8・9号溝

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・図 版番号
1	又楯	残長 39.7 幅 7.8 厚 1.9 (右側刃部内、上下欠損)	柾目材使用。中・下位左縁炭化。上位左縁折れ。上位に斜めの 貫通小孔 2箇所。中位に貫通孔 1箇所。	タヌギ節	第236図 P.L.68
2	鉄杖か	残長 31.1 幅 6.9 厚 2.0 (上端部と右側縁欠損)	柾目材使用。上位に径 3.7 × 2.1cm の長方形孔が穿たれ、周囲は 磨痕に削り残される。刃部は 1cm 厚程に削り込まれる。	タヌギ節	第236図 P.L.68
3	刀型木製品	長 64.2 幅 5.7 厚 3.3 (ほぼ定形)	みから削りの柾目板材使用。切先、柄基部削り出しにより形成。 刀身長 51.8cm。	タヌギ節	第236図 P.L.68

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
4	杖	径 8.5 × 8.0 残長 46.9 (上側欠損)	芯持ち材使用。一部側面削り、下端削りにより実形に加工。	コナラ節	部 236 図 P.L. 68
5	鹿杖か	長 23.6 残幅 14.6 厚 5.5 (一線欠損)	柘目材使用。表面の長軸両側に径 4.1 × 3.4cm 深さ 0.6cm と径 3.1 × 3.6cm 深さ 0.4cm の圧痕と見られる窪みを有する。	コナラ節	部 236 図 P.L. 68
6	板杖	残長 10.9 残幅 5.7 厚 1.4 (上下側、左側欠損)	板目材。特段の加工痕認められない。	コナラ節	部 236 図 P.L. 68
7	厚板杖	残長 40.0 幅 7.8 厚 3.3 (上位、右側欠損)	みかん割りの柘目材使用。下端削皮節を削りによる面取り。	クスギ節	部 236 図 P.L. 68
8	杖	径 5.9 × 5.7 残長 34.5 (上側、下端欠損)	みかん割り材使用し、芯節削り取り。下端近く削りにより尖端部形成。	クスギ節	部 236 図 P.L. 68
9	杖	残長 26.6 幅 7.2 厚 4.3 (上側欠損)	みかん割りの柘目材使用。下端を削りにより実形に形成。	コナラ節	部 236 図 P.L. 68
10	角材	残長 28.0 幅 4.1 厚 2.6 (上下側欠損)	みかん割りの樹皮節の一角を欠いて角棒状に整形。	コナラ節	部 236 図 P.L. 68
11	角材	残長 24.8 幅 2.8 厚 1.6 (下位欠損)	柘目材使用の棒状の角材。下位に径 0.8cm の貫通孔 1箇所と斜めの貫通小孔 2箇所。	環孔材	部 236 図 P.L. 68

9号溝

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
1	土師器埴	残高 5.5 (口縁下半 1/2)	挟雑物細かい。灰黄色。内面横位の隆溝で後、横位または従位の磨き。外面従位の磨き。	4世紀	部 235 図 P.L. 68
2	土師器壺	底径 7.5 残高 8.6 (腰～底部 1/2)	挟雑物少なく、粘土細かい。明赤褐色。腰部内面隆溝で、外面磨き。底部内面回し午の指撫で、底面一方への掘削り後外周指撫で。	4世紀か	部 235 図 P.L. 68
3	弓か	径 1.6 × 1.4 残長 36.5 (上端と下側欠損)	板目材を加工か。上端に径 0.5cm、長さ 0.6cm 以上の突出部を設ける。	スギ	部 236 図 P.L. 68
4	木鉢	径 8.0 × 7.5 残長 11.7 (下方欠損)	芯持ち材使用。上、側面削りにより整形。中ほどに幅 1.9cm 以下、深さ 4mm 以下のV字溝削り出す。	クスギ節	部 236 図 P.L. 68
5	薄板杖	残長 9.8 残幅 4.2 厚 0.8 (上下、左側欠損)	柘目材。特段の加工痕等は認められない。鋸、削片の可能性あり。	クスギ節	部 236 図 P.L. 68
6	薄板杖	残長 7.0 残幅 3.5 厚 0.5 (上下、左側欠損)	柘目材。特段の加工痕等は認められない。鋸、削片の可能性あり。	コナラ節	部 236 図 P.L. 68
7	厚板杖	残長 15.2 幅 10.7 厚 6.8 (上下欠損)	みかん割材使用し、樹皮節と樹皮節の一角を欠いて柘目板様に整形。	クスギ節	部 236 図 P.L. 69
8	角材	長 28.1 幅 9.1 厚 7.2 (欠損品の可能性あり)	板目材使用。腐食、粗造化著しく遺存状態も不明確。	コナラ節	部 236 図 P.L. 69
9	種子	(破片)	1点		P.L. 69

10号溝

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
1	土師器高坏	残高 4.2 (底底部～胴上部)	挟雑物粗だが粘土細かい。浅黄色。坏部内面隆溝で、外面刷毛目、胴部内外面指撫で。	4世紀前半	部 219 図 P.L. 69
2	土師器小型壺	口径(11.5) 残高 7.1 (口縁～肩部片)	挟雑物比較的細かい。にぶい黄褐色。内面中心に吸炭。口縁横溝で。体部内面隆溝で。外面掘削り。	4世紀前半	部 219 図 P.L. 69

11号溝

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
1	土師器壺	口径(16.4) 残高 4.2 (口縁～肩部片)	挟雑物比較的細かい。にぶい褐色。器面やや変れる。口縁横溝で、口縁～肩部内外面指撫で。	5世紀か	部 219 図 P.L. 69
2	土師器小型壺	胴部最大径 12.0 残高 7.6 (体部 3/4)	内面変れる。挟雑物やや粗。鈍い褐色。内面隆溝で、外面磨き様の隆溝で。	4世紀前半	部 219 図 P.L. 69

12号溝

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・図 版番号
1	弥生土器高 坏	胴部径 7.7 残高 4.7 (胴部定形)	挟雑物全体的に細粒。にぶい黄褐色。内面輪横み痕残り指撫で、 外面指撫で。	3世紀後半	部 237 図 P.L. 69
2	弥生土器高 坏	口径 11.1 残高 7.3 (口縁～胴部上位)	挟雑物細かい。淡黄色。口縁横撫で後、口部外面に縄文一周。 坏部内面磨き。坏外面体部上位細かい網目、下位～胴部内 外面指撫で。	3世紀後半 赤井戸式	部 237 図 P.L. 69
3	弥生土器壺	底径 2.8 残高 28.0 (口縁中位～底部 2/3)	挟雑物粗。赤褐色。口縁～腰部磨いで後、外面口縁～肩部前々 段反縁横位の縄文。底部内面指撫で、底面撫で。	3世紀後半 赤井戸式	部 237 図 P.L. 69
4	弥生土器壺	胴部最大径 18.5 残高 19.2 (胴部下端～腰部 1/3)	挟雑物粗だが生地細かい。橙色。内面上位指撫で、中下位指撫で、 外面胴部縹状文、肩部波状文、以下磨き。	3世紀後半	部 237 図 P.L. 69
5	弥生土器壺	口径 (16.0) 底径 (6.0) 残高 22.0 (口縁 1/2・胴部片・腰～底部 1/4)	3分割。生地比較的確かい。外面灰黄褐色、内面橙色。一部赤 色塗彩。口縁内外面磨きで胴部に縹状文。体～底部内面指撫で、 外面磨き。底面指撫で。	4世紀初頭	部 237 図 P.L. 69
6	弥生土器壺	胴部径 (18.2) 残高 14.7 (胴部～腰部 1/3)	挟雑物雑物やや粗で多し。橙色。内面と胴部外面指撫で。体部 外面粗撫で。	4世紀前半	部 237 図 P.L. 69
7	弥生土器壺	口径 15.0 残高 14.5 (口縁～肩部 3/4)	挟雑物細かい。胎土細かい。にぶい黄褐色。器面やや克れる。 内面口縁磨き。肩部指撫で。外面波状文で胴部に縹状文。	3世紀後半 橋式	部 238 図 P.L. 70
8	弥生土器壺	底径 (7.4) 残高 23.6 (胴部～底部 1/2)	挟雑物やや粗だが少なく胎土細かい。にぶい黄褐色。内面胴～ 体部指撫で、底部指撫で。外面口縁～肩部波状文で肩部上端に 縹状文、胴～腰部指撫で、底面撫で。	3世紀後半	部 238 図 P.L. 69
9	弥生土器小 型壺	口径 (9.0) 残高 4.2 (口縁～体部上半 1/4)	挟雑物細粒で生地細かい。灰黄色。口縁横撫で、胴部外面と体 部内外面指撫で。	3世紀後半か	部 238 図 P.L. 69
10	土師器碗	口径 10.8 底径 3.4 器高 4.6 (1/4)	挟雑物粗。にぶい黄褐色。口縁横撫で。体部内面指撫で後磨き。 外面磨削り。底面指撫で。	4世紀前半	部 238 図 P.L. 69
11	土師器鉢	口径 (7.5) 底径 3.8 器高 6.3 (1/2)	生地細かい。にぶい橙色。口縁～腰部内外面磨き。底面縹整 形後指撫で。	4世紀前半	部 238 図 P.L. 69
12	土師器高坏	胴部径 17.8 残高 5.4 (胴部 4/5)	挟雑物粗。にぶい橙色。三方に径 1.5cm 程の円孔。胴部横撫で。 これを除く胴部外面磨き。内面指撫でで上端指撫で。	4世紀前半	部 238 図 P.L. 70
13	土師器高坏	残高 5.0 (坏底部中央～脚部上半)	挟雑物細粒。灰黄褐色。四方に径 0.7cm 程の円孔。坏底部内面 指撫で。脚部内面上位指撫で、下位網目。坏～脚部外面磨き。	4世紀	部 238 図 P.L. 70
14	土師器高坏	口径 18.0 残高 6.3 (坏部 3/4)	挟雑物粗なもの含む。胎土細かい。にぶい橙色。坏部内外面 磨き。外面下位脚部接合付近位の網目。	4世紀前半	部 238 図 P.L. 70
15	土師器塔 壺	底径 3.6 残高 4.9 (頸～底部 4/5)	挟雑物粗。硬軟甘い。にぶい黄褐色。内面体部磨き。底部指撫で、 外面頸部横撫で。胴部網目、腰部磨削り、底面撫で。	4世紀前半	部 238 図 P.L. 70
16	土師器壺	最大径 (35.0) 残高 18.8 (体部片)	挟雑物粗だが生地細かい。橙色。内面左回りの磨いで。外面左 方への磨削り。	4世紀前半か	部 238 図 P.L. 70
17	土師器壺	底径 (6.0) 残高 6.5 (腰～底部 1/3)	挟雑物細かい。胎土細かい。腰部内面撫で後粗撫で、外面磨 き。底部内面指撫でか、底面撫で。	4世紀	部 238 図 P.L. 70
18	土師器壺	底径 8.0 残高 21.9 (頸～底部 1/2)	挟雑物やや多いが胎土細かい。にぶい黄褐色。体部内面指撫で、 外面磨き。底部内面・底面指撫で。	4世紀	部 238 図 P.L. 70
19	土師器小型 壺	口径 (8.8) 底径 3.7 器高 7.3 (1/4)	挟雑物細粒。にぶい黄褐色。口縁～肩部上位横撫で。以下内外 面指撫で。	4世紀前半	部 238 図 P.L. 70
20	土師器小型 壺	口径 11.4 底径 4.2 器高 17.4 (一部欠損、又は定形)	挟雑物細粒で生地細かい。にぶい橙色。口縁肩部近くは横撫で。 以下口縁内外面、体部外面磨き。体～底部内面指撫でなど。 底面指撫で。	4世紀	部 238 図 P.L. 70
21	又鋸	残長 60.4 幅 11.9 厚 2.2 (胴部部等欠損)	砥目材。腐食、粗造化進行。刃幅約 8.5cm。刃と刃の間隔は約 3cm。柄部幅約 3cm。	タヌギ節	部 239 図 P.L. 71
22	又鋸	残長 44.2 幅 14.3 厚 0.6 (粗造化進む。欠損部多し)	砥目材使用。腐食、粗造化が進行し加工痕跡などは確認できな かった。	タヌギ節	部 239 図 P.L. 71
23	砥	残長 15.5 残幅 7.8 厚 3.2 (着柄部片)	砥目材使用か。径 4.2 × 4.1cm の着柄の孔が穿たれ、瘤状の磨り 残り。面の厚みは 8mm 程と推定される。	コナラ節	部 239 図 P.L. 70
24	未成品 (盤か)	長 46.8 幅 23.0 厚 10.8 (定形)	干煎の芯持ち材。裏面に剛痕と新痕、右側面に新痕残る。	タヌギ節	部 239 図 P.L. 70
25	棒子	残長 92.4 幅 14.3 厚 7.4 (下位欠損)	砥目材。35cm 間隔の踏み板 2 段分残る。踏み板は端部で厚 4cm、長さ 3.5cm 程を測る。表裏面に新痕残る。	コナラ節	部 239 図 P.L. 70

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
26	板材 (建築材)	残長 191 幅 11.9 厚 7.8 (下位欠損)	板目材。粗造化進む。上位に炭化部分見られ、最上位に径6cm程の方形の孔が穿たれ、この部分も炭化する。下位に節穴と見られる円孔斜めに開く。	タヌギ節	部 239 図 P.L. 71
27	杖	残長 17.7 幅 4.6 厚 (3.8) (上側欠損し、裏面剥離)	裏面が剥離しているため明瞭ではないが芯持材を六角形に加工し、下は支部を削って尖端を形成。	コナラ節	部 239 図 P.L. 71
28	杖	径 6.0 残長 55.0 (上位と尖部一部欠損)	中下位は剥落しているが樹皮付芯持ち丸太材の下端を削って尖端を作る。	コナラ節	部 239 図 P.L. 71
29	杖	残長 22.3 幅 5.6 厚 4.5 (上側と下端欠損)	板目材の角柱使用。下端に削り痕跡残る。	コナラ節	部 239 図 P.L. 71
30	杖	径 4.0 × 3.2 残長 28.8 (上側欠損)	板目材の角柱を使用。下端削りにより実形に整形。	タヌギ節	部 239 図 P.L. 71
31	杖	残長 16.0 幅 5.0 厚 3.2 (上側と下端欠損)	みかん割材使用。下位狭くなる。	コナラ節	部 240 図 P.L. 71
32	杖か	残長 10.6 幅 6.0 厚 3.7 (下位破片)	芯持材使用。上面に削り痕跡残る。	タヌギ節	部 240 図 P.L. 71
33	薄板材 (製先か)	①残長 23.7 幅 11.0 厚 1.2 ②残長 82.3 幅 14.6 厚 2.5 (上側欠損)	①板目材使用。削りにより下端山形に整形し、左右両側角を取る。 ②みかん割りにする板目材。粗造化進む。背に加工跡見えず。	タヌギ節	部 239 図 P.L. 71
34	薄板材	残長 70.0 残幅 6.9 厚 2.7 (上下、右側欠損)	みかん割材。所々に節痕らしき加工痕見られる。	エノキ炭	部 240 図 P.L. 71
35	薄板材	残長 35.9 幅 3.7 厚 1.3 (上下側欠損)	剥離箇所あり。みかん割り材の板目材使用。芯持樹皮側を加工して直線的な貫板状に成す。	コナラ節	部 240 図 P.L. 71
36	薄板材	①残長 17.9 残幅 7.0 厚 0.6 ②残長 13.2 残幅 5.5 厚 0.5 (破片)	板目材の薄板片。2片に分かれるが、接合部分は認められなかった。	タヌギ節	部 240 図 P.L. 71
37	薄板材	残長 24.0 幅 3.1 厚 1.0 (上下側欠損)	幅狭の板目材。表面平坦、裏面丸みを持つ。	コナラ節	部 240 図 P.L. 71
38	板材	残長 55.5 幅 5.5 厚 2.1 (上下側欠損)	板目材。両側を加工して上位に向かって狭める。明瞭な加工痕は認められない。何らかの未製品か。	タヌギ節	部 240 図 P.L. 71
39	板材	残長 38.6 幅 8.3 厚 2.2 (下側と左側一部欠損)	みかん割材を加工し板目材の貫板材に整形。特段の加工痕跡は確認できなかった。	タヌギ節	部 240 図 P.L. 71
40	板材	残長 29.9 幅 3.6 厚 2.6 (上方欠損)	板目材を加工。下方がやや狭くなる横断面長方形の棒状に整形。上寄りに斜め方向の径3mm程の貫通孔。	コナラ節	部 240 図 P.L. 72
41	板材	残長 27.2 幅 3.6 厚 2.1 (上下側欠損)	全体に粗造化。板目材。表裏面やや膨らみを持つ。	ケリ	部 240 図 P.L. 72
42	板材 (柄か)	残長 20.1 幅 7.6 厚 3.1 (上側欠損)	粗造化進行。板目材。屈曲部利用して加工。	コナラ節	部 240 図 P.L. 72
43	板材	残長 17.5 幅 4.2 厚 1.5 (破片)	板目材。粗造化進行し不明瞭だが、中部が膨らむように加工か。	コナラ節	部 240 図 P.L. 72
44	板材	長 14.5 幅 3.2 厚 1.3 (上下側欠損)	板目材。貫板様に整形。特段の加工痕は確認できなかった。	コナラ節	部 240 図 P.L. 72
45	板材	残長 12.0 幅 3.0 厚 1.4 (上下欠損、左右に二折)	粗造化見られる。板目材。貫板状に加工。	コナラ節	部 240 図 P.L. 72
46	厚板材 (建築材か)	残長 73.1 幅 8.8 厚 5.0 (下側と上位右側欠損)	板目材使用。上位左側に径5.0 × 3.4cmの隅丸方形で深さ2.5cmの白抜の抉れが穿たれる。この抉れの上にも当り痕跡か極浅い窪みが見られる。	コナラ節	部 240 図 P.L. 72
47	厚板材	長 48.0 幅 4.7 厚 2.5 (上下表面剥離)	板目材。表面と左側面に削り痕残る。	針葉樹	部 240 図 P.L. 72
48	厚板材	残長 39.2 幅 25.9 厚 12.6 (下端面、所々欠損する)	みかん割りの板目材。下端直ぐ表面が削られ、進台形に整形される。	タヌギ節	部 240 図 P.L. 72
49	厚板材	残長 64.2 幅 12.4 厚 4.2 (上下側と過半の左右両側欠損)	板目材。上位に節と見られる円孔と右側端部に径5mm程の目釘穴と見られる孔開く。	タヌギ節	部 241 図 P.L. 72
50	厚板材	残長 70.2 幅 7.4 厚 6.1 (下位欠損)	四分割材。上位で樹皮側を屋根型に加工する。上端も欠けか。	コナラ節	部 241 図 P.L. 72
51	厚板材	残長 77.4 幅 9.4 厚 4.5 (下側欠損)	板目材。貫板様にきれいに整形。下位に人為か自然か判別できない小孔開く。	タヌギ節	部 241 図 P.L. 72
52	厚板材	長 44.6 幅 6.3 厚 2.9 (整形か、一部剥離)	板目材。表面上位右側に加工痕。この部分と中位右寄りに弱い窪み残る。下端二股か。	コナラ節	部 241 図 P.L. 72

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
53	厚板材	残長 35.4 幅 7.7 厚 3.0 (上下側欠損)	みかん割りによる板目材を使用し、芯割と樹皮割を加工。	コナラ節	第 241 図 P.L. 72
54	厚板材	残長 33.3 幅 5.0 厚 2.0 (上下側欠損)	板目材。両側を整えて貫板様に整形。	クスギ節	第 241 図 P.L. 72
55	厚板材	残長 27.8 幅 5.4 厚 2.9 (上下側欠損)	二分割材を加工。右側面を割り、他洗面長方形に加工。	クスギ節	第 241 図 P.L. 72
56	厚板材	残長 21.6 幅 6.9 厚 2.6 (上下側欠損)	板目材。粗造化見られる。特設の加工直は確認できない。	クスギ節	第 241 図 P.L. 72
57	厚板材	残長 12.5 残幅 6.1 厚 3.1 (上位片)	みかん割りの板目材。樹皮割 2 面に加工。	コナラ節	第 241 図 P.L. 72
58	厚板材	残長 8.0 残幅 7.0 厚 2.4 (破片)	板目材。上位右側狭められる。特設の加工直は確認できない。	スギ	第 241 図 P.L. 72
59	角材 (杭か)	残長 71.1 幅 5.1 厚 3.5 (上下側欠損)	みかん割の板目材。下位にはつり痕。	コナラ節	第 241 図 P.L. 72
60	角材	残長 138.4 幅 13.6 厚 9.3 (上端欠損、上位一部腐食)	みかん割材。下端側面に折痕。	コナラ節	第 241 図 P.L. 72
61	角材	残長 49.9 幅 3.0 厚 2.2 (上下側、中位側面欠損)	板目材。横断面長方形の棒状に整形される。	コナラ節	第 241 図 P.L. 72
62	角材	残長 48.1 幅 6.0 厚 3.6 (上側欠損)	板目材。粗造化見られる。横断面長方形に加工。下方に僅かに折痕残る。	クスギ節	第 241 図 P.L. 72
63	角材	残長 43.8 幅 6.7 厚 5.1 (上下側と、外周一部欠損)	板目材を角棒状に加工。上位外周の一部炭化。	コナラ節	第 241 図 P.L. 72
64	角材	径 6.8 × 6.0 残長 192.5 (上下端欠損、中位一部欠損)	みかん割材使用。芯・樹皮割を割って角柱状を成す。	コナラ節	第 241 図 P.L. 73
65	角材	径 9.6 × 8.0 残長 144.4 (上下方欠損)	みかん割材使用し、明瞭ではないが方形に割って整形。	コナラ節	第 241 図 P.L. 73
66	角材	①残長 124.4 幅 16.3 厚 8.1 ②残長 29.0 幅 9.3 厚 9.3 (欠損品)	みかん割材。腐食、粗造化進行。特設の加工直は見られない。②の左側面炭化。	コナラ節	第 242 図 P.L. 73
67	角材	残長 91.9 幅 7.4 厚 3.8 (上位欠損)	みかん割材使用。樹皮割と右側整形。右側面には新直しし痕跡見られる。	コナラ節	第 241 図 P.L. 73
68	角材	残長 89.1 幅 9.6 厚 8.8 (上下側欠損)	みかん割材。上位芯割に加工直 (か) 見られる他は、特設の加工直見られない。	コナラ節	第 241 図 P.L. 73
69	角材	残長 74.5 幅 8.1 厚 7.5 (上側欠損)	みかん割材。樹皮割を割り、下端に数回の切断痕残る。	コナラ節	第 242 図 P.L. 73
70	角材	長 74.1 幅 7.5 厚 4.5 (欠形か)	みかん割材。平面的に湾曲した材。表裏と樹皮割整形。表面に折痕残る。	コナラ節	第 242 図 P.L. 73
71	角材	残長 60.0 幅 8.6 厚 5.4 (上下欠け、7 片に割れる)	みかん割の板目材の芯・樹皮割を割って整形。	クスギ節	第 242 図 P.L. 73
72	角材	残長 52.7 幅 6.4 厚 4.8 (上下側欠損)	みかん割材。上位でやや狭まる部分あり。特設の加工直なし。	コナラ節	第 242 図 P.L. 73
73	角材	残長 49.4 幅 8.3 厚 4.0 (上下側欠損)	みかん割材。特設の加工は見られない。	コナラ節	第 242 図 P.L. 73
74	角材	残長 45.4 幅 6.0 厚 3.5 (上下側欠損)	みかん割りの板目材。芯・樹皮割両側を整形。特設の加工直確認できなかった。	コナラ節	第 242 図 P.L. 73
75	角材	残長 45.0 幅 6.0 厚 3.7 (上方欠損)	板目材使用。横断面長方形になるよう加工。表面に小孔散見されるが、上位の左よりのものは釘穴の可能性あり。	クスギ節	第 242 図 P.L. 73
76	角材 (折れ材か)	長 41.3 幅 5.9 厚 4.1	板目材。横断面長方形に整形され、表面左側に割り痕、下端、表面下側、左側縁に炭化部分あり。	コナラ節	第 242 図 P.L. 73
77	角材	残長 30.6 幅 2.8 厚 1.6 (上下側欠損し、中位に剥離)	直線的な板目材。横断面長方形に整形しているが、特設の加工直は見られない。	クスギ節	第 242 図 P.L. 73
78	角材	残長 28.9 幅 2.8 厚 2.2 (上下側欠損)	全体に粗造化進行し、表面剥離箇所散見。板目材の両側を加工して角棒上に整形。	コナラ節	第 242 図 P.L. 73
79	角材	残長 26.8 幅 6.0 厚 4.8 (上下側欠損)	みかん割材。樹皮割を剥離。	コナラ節	第 242 図 P.L. 73
80	角材	残長 25.4 幅 9.8 厚 5.4 (上下側欠損)	四分割材。加工の直跡は見られない。右側面に炭化部分見られる。	クスギ節	第 242 図 P.L. 73

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
81	角材	残長 25.2 幅 9.2 厚 4.4 (上下側欠損)	みかん割材。欵く段の加工痕は見られない。	タヌギ節	第 242 国 P.L. 73
82	角材	①長 10.5 幅 7.4 厚 4.1 ② 長 10.5 幅 7.2 厚 2.1 (破片)	接合できない 2 点。何れも榫目材で下端に炭化見られる。	コナラ節	第 242 国 P.L. 73
83	角材	残長 19.0 幅 4.5 厚 2.3 (上下側欠損)	粗造化進行。みかん割材。特段の加工痕見られない。	コナラ節	第 242 国 P.L. 74
84	角材	残長 16.6 幅 4.8 厚 3.4 (上側欠損)	みかん割材。特に加工痕はなく、下位左縁炭化。	コナラ節	第 242 国 P.L. 74
85	角材	残長 14.7 幅 11.1 厚 7.1 (下側欠損)	みかん割材。全体に屈曲する。未成品か。材の芯・樹皮側加工。	コナラ節	第 242 国 P.L. 74
86	細板材	長 88.9 幅 4.5 厚 2.2 (一部欠損、ほぼ完形か)	みかん割りの榫目材。全体にねじれる。両端木刀状に尖る。	コナラ節	第 243 国 P.L. 74
87	分割材	残長 61.2 幅 20.3 厚 12.1 (上下側欠損)	平截材。上下位表面に炭化部分あり。表面上位右端近くに径 4cm 程の窪み 2 箇所が縦長に並ぶ。	コナラ節	第 243 国 P.L. 74
88	分割材	残長 40.9 幅 4.5 厚 4.5 (上位欠損)	2 分割材。真縦的で上側に嵌まる。何れかの未成品と見られる。	カエデ節	第 243 国 P.L. 74
89	丸材	径 14.8 長 99.0 (完形)	枝払いのされた直縦様の芯持ち材。切断面以外加工痕なし。樹皮は残らない。	コナラ節	第 243 国 P.L. 74
90	丸材	①径 3.0 × 2.8 残長 27.2 ② 径 3.4 × 2.0 残長 17.2 ③径 2.7 × 1.4 残長 8.1 ④径 3.1 × 1.4 残長 8.3	接合できない 4 片あり。①芯持ち材、②-④は 2 分割材だが完全な直縦的な芯持ち材と見られる。	エゴノキ属	第 243 国 P.L. 74
91	丸棒	径 2.7 × 2.1 残長 52.4 (下側欠損)	直縦状の芯持ち材。一部に樹皮残り、樹皮付だったと見られる。上端削り直。	エゴノキ属	第 243 国 P.L. 74
92	薄板材	残長 10.5 幅 5.7 厚 0.8 (上下両側欠損)	榫目板使用。特段の加工痕跡は見られない。	コナラ節	第 243 国 P.L. 74
93	角材	残長 8.1 幅 5.0 厚 2.6 (両側切断か)	みかん割りの榫目材使用。芯割断る。樹皮側不明瞭。	広葉樹	P.L. 74
94	角材	残長 7.71 幅 6.3 厚 3.1 (両側切断か)	みかん割りの榫目材使用。芯割・樹皮側割る。	広葉樹	P.L. 74
95	ふくべ	最大片長 4.7 内厚 0.45 (破片)	16 片以上に分割。本来形状不明。	藁草か	P.L. 75
96	種子	(破片)	6 点		P.L. 75
97	種子	(破片)	2 点		P.L. 74
98	種子	(破片)	3 点		P.L. 74

14 号溝

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	土師器埴	口径 10.5 底径 3.5 器高 4.2 (4/5)	扶輪物少なく、胎土細かい。にぶい褐色。口縁横撫で。体部外面と体～内面両撫で後内面磨き。底部内面・底面指撫で後、内面磨き。	5 世紀前半	第 220 国 P.L. 75
2	土師器埴	口径 16.0 底径 6.2 器高 21.9 (2/3)	扶輪物やや粗。にぶい褐色。口縁横撫で。体～底部内外面両撫で。	4 世紀後半	第 220 国 P.L. 75
3	土師器小型 罌	口径 (17.2) 残高 10.5 (口縁～胴部上半片)	扶輪物粗。にぶい褐色。内面充れる。(口縁外面～) 胴部内外面両撫で後、口縁横撫で。	4 世紀前半	第 220 国 P.L. 75

15 号溝

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	土師器埴	口径 9.2 底径 2.0 器高 9.6 (口縁一部欠損、ほぼ完形)	扶輪物粗だがやや少量。にぶい黄褐色。口縁横撫で。体～底部内面と胴部外面指撫で。胴部外面両磨り、底面若干上げ底で指撫で。	5 世紀前半	第 221 国 P.L. 75

22号溝

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	弥生土器高 坏	残高 8.0 (上部底部～瓶除く脚部)	挟雑物細粒で胎土細かい。にぶい黄褐色。受部内外面と脚部内 面指撫で、脚部外面磨き様の撫で。	3世紀後半	第212回 P.L. 75
2	土師器白 脚部片	残高 8.3 (脚部片。瓶部除く1/2)	挟雑物粗。にぶい褐色。中位に径0.7mmの円孔。内面指撫で下 位に磨削り、外面磨き。瓶部横撫で。	4世紀後半	第212回 P.L. 75
3	土師器高 坏	残高 9.2 (坏底部中央と脚部中・上位 1/2)	挟雑物少なく、胎土細かい。にぶい橙色。坏底部内面と脚部外 面1/3克れる。脚部内面指撫で、外面磨き様の撫で。	5世紀前半	第212回 P.L. 75
4	土師器坏	口径(12.29) 残高 4.3 (口縁～体部1/4)	挟雑物少なく、胎土細かく焼成甘い。橙色。器面風化。口縁横撫で、 体～底部内面指撫で、外面磨削り。	6世紀後半	第212回 P.L. 75
5	土師器坏	口径(13.0) 残高 3.5 (口縁～体部片)	挟雑物細粒。灰褐色。焼成比較的良好。口縁横撫で。体部内面 指撫で、外面磨削り。	6世紀前半	第212回 P.L. 75
6	土師器坏	口径(11.8) 器高 3.6 (1/6)	挟雑物比較的細かい。にぶい黄褐色。内面やや克れる。口縁横撫で、 体～底部内面撫で、体部外面及び底部磨削り。	6世紀後半	第212回 P.L. 75
7	須恵器長頸 壺	残高 13.4 (頸部)	胎土細かく、焼成やや甘い。灰白色。圓形輪縁整形。	8世紀後半か	第212回 P.L. 75

25号溝

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	弥生土器高 坏	瓶部径 10.7 残高 4.9 (脚部及び坏底部、瓶部 1/2 欠 損)	挟雑物細粒で少なく胎土細かい。にぶい黄褐色。坏部底面およ び脚部内面指撫で、脚部外面磨き。	3世紀後半	第223回 P.L. 75
2	弥生土器壺	口径(20.0) 残高 6.5 (口縁～肩部上端破片)	胎土細かい。浅黄色。内面口縁磨き、肩部指撫で。外面口縁 波状文、頸部に縞状文、肩部撫で。	3世紀後半 橋式	第223回 P.L. 75
3	弥生土器壺	口径 18.0 残高 11.8 (口縁～頸部上半1/3)	挟雑物細かい。にぶい黄褐色。折り返し口縁。内面磨き様の撫 撫で。外面細かい波状文で頸部に縞状文一段。	3世紀後半 橋式	第223回 P.L. 76
4	弥生土器壺	口径 14.0 残高 15.6 (口縁～頸部上半2/3)	挟雑物粗だが少量。にぶい橙色。口縁部横撫で。内外面指撫で、 頸部を除く口縁～肩部外面波状文。	3世紀後半 橋式	第223回 P.L. 76
5	弥生土器壺	口径(14.8) 残高 9.8 (口縁～頸部上位破片)	挟雑物粗。にぶい橙色。口縁～肩部指撫で後、外面口縁～肩部 上位前々段反摺横位の縞文で、以下指撫で。	3世紀後半 赤井戸式	第223回 P.L. 76
6	弥生土器壺	口径(19.3) 残高 24.1 (口縁～腰部1/5)	挟雑物少なく胎土細かい。上位外面吸灰。にぶい橙色。口縁横 撫で、体部内外面指撫で後、口縁～頸部上位に前々段反摺横 位の縞文。	3世紀後半 赤井戸式	第224回 P.L. 76
7	土師器鉢	口径(22.8) 残高 7.7 (口縁～体部破片)	胎土細かい。にぶい黄褐色。口縁やや内傾き。口縁付近横撫で、 以下内外面磨き。	4世紀前半	第224回 P.L. 76
8	土師器甕	口径 17.0 残高 7.2 (口縁～肩部上端5/6)	挟雑物・胎土細かい。にぶい黄褐色。内外面吸灰。折り返し口縁。 口縁部横撫で。内外面指撫でで外面中心に指痕痕。	4世紀前半	第223回 P.L. 76
9	土師器壺	口径 16.5 底径 8.5 器高 30.7 (3/4)	挟雑物やや粗。褐色。折り返し口縁。口縁横撫で後外面下指 撫で、体部内面指撫でで下位～底部内面指撫で、体部外面磨き、 底面撫で。	4世紀前半	第224回 P.L. 76
10	又綱	残長 40.2 残幅 6.8 厚 1.8 (片側の刃部片)	砥目材使用。粗造化見られ加工痕跡ははっきりしない。	クヌギ節	第224回 P.L. 76
11	指物	残長 8.7 幅 3.0 厚 1.1 (上部片)	砥目材使用。上端に幅0.9cm、長さ1.2cmの突部を削り出して設 ける。	コナラ節	第224回 P.L. 76
12	角材 (建築材)	残長 40.3 幅 18.4 厚 11.6 (端部破片)	砥目材。端部に幅13.7cm、深さ4.9cm程の抉れが設けられる。	コナラ節	第224回 P.L. 76
13	板材	残長 47.9 幅 7.1 厚 2.8 (上下側欠損)	砥目材。上位表面に炭化部分あり。やや粗造化。	コナラ節	第224回 P.L. 76
14	板材	残長 14.7 幅 7.1 厚 3.6 (上下側欠損)	砥目材。左側表面割れにより薄くなるが、人為か自然かは特定 できない。	クヌギ節	第224回 P.L. 76
15	薄板材	残長 11.0 幅 6.4 厚 1.8 (下方欠損)	みかん割りの砥目材。上端の角欠き。特段の加工痕見られず。	ケヤキ	第224回 P.L. 76
16	角材	残長 68.5 幅 5.1 厚 4.6 (上下側欠損)	砥目材の両側を削り出して角棒状に整形。	コナラ節	第224回 P.L. 76
17	角材	径(6.6)×長 4.3 幅 64.4 (両端欠損)	みかん割材。芯割を削って角材に成す。	コナラ節	第224回 P.L. 76

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
18	角材	残長 50.2 幅 10.5 厚 6.0 (上下側欠損)	みかん割材。樹皮側を加工する他は特段の加工は見られない。	コナラ節	第 224 国 P.L. 76
19	角材	残長 28.2 幅 4.8 厚 3.5 (上下側欠損)	みかん割りの板目材。表面上寄り左側に削り残れるが、全体に特段の整形痕なし。	コナラ節	第 224 国 P.L. 76
20	角材 (建築材か)	残長 20.7 幅 2.6 厚 2.2 (上下側・右側一部欠損)	板目材。特段の加工痕は確認できなかったが、右側欠き横断面形状欠加工。	コナラ節	第 224 国 P.L. 76

27 号溝

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	弥生土器壺	残存 10.0 × 6.3 厚 0.6 (口縁破片)	扶雑物やや細かい。にぶい橙色。折り返し口縁。口縁内面磨きで上端横撫で。外面波状文、下端垂文。	樽式 3 世紀後半	第 225 国 P.L. 77
2	土師器高坏	底径 9.5 残高 8.0 (片部 1/8、脚部一部欠損)	粘土細かく扶雑物少。にぶい黄褐色。坏底部～脚部外面磨き。坏底部と脚部内面指撫で。脚底面撫で。	4 世紀前半	第 225 国 P.L. 77
3	土師器高坏 または器台 脚部	底径 (10.2) 残高 9.0 (脚部 3/4)	扶雑物少量。にぶい黄褐色。脚部外面磨き。内面脚部指撫で後下位指撫で、脚部横撫で。	4 世紀後半	第 225 国 P.L. 77
4	土師器甕	口径 (14.8) 残高 8.2 (口縁～肩部片)	扶雑物粗で少。にぶい黄褐色。折り返し口縁。口縁折り返し部と内面横撫で。肩部内面磨き。口縁中位～肩部磨削り。	4 世紀前半	第 225 国 P.L. 77
5	土師器壺	底径 7.0 残高 3.4 (腰部下位～底部)	粘土細かい。にぶい赤褐色。腰～底部内外面指撫で後、底部外面左回りの磨削りまたは磨き。	4 世紀前半	第 225 国 P.L. 77
6	土師器壺	口径 17.6 残高 11.7 (口縁～肩部 1/3)	扶雑物少なく、粘土細かい。にぶい褐色。口縁上位横撫で。口縁中位～肩部磨削り。	4 世紀後半	第 225 国 P.L. 77
7	土師器小型 甕 (無彫文形)	口径 10.6 底径 3.1 器高 10.5	扶雑物やや粗。浅黄褐色。焼成良好。口縁横撫で後、内外面口縁下位～腰部磨削り。底部内面指撫で、底面磨削り。	4 世紀前半	第 225 国 P.L. 77
8	土師器小型 甕	底径 4.3 残高 8.4 (口縁過半欠損)	扶雑物やや粗。にぶい褐色。口縁輪縁部所で刮落さ。口縁内外面刷毛撫で。体部内面磨削り、外面細かい磨削り。底部内面指撫で、底面磨削り。	4 世紀初	第 226 国 P.L. 77
9	土師器小型 壺	底径 5.8 残高 3.3 (腰～底部 1/4)	扶雑物粗だが少量。にぶい黄色。体部外面磨き、底部外面～底面と腰～底部内面指撫で。	4 世紀前半	第 226 国 P.L. 77
10	土師器坏	口径 (13.6) 残高 5.5 (口縁～体部 1/4)	扶雑物比較的細かく、粘土も細かい。体部内面に輪縁み痕。口縁横撫で。体部上位内外面指撫で、下位内面磨削り、外面磨削り。	6 世紀前半	第 226 国 P.L. 77
11	須恵器短頸 壺	口径 10.0 残高 11.3 (口縁～体部 1/4)	扶雑物粗だが少なく生地細かい。灰色。内部酸化焙焼成、表面還元焙焼成。外面に自然輪縁見。回転輪縁整形。	8 世紀	第 226 国 P.L.
12	板材	①残長 26.8 幅 4.7 厚 2.1 ② 残長 11.8 幅 2.2 厚 1.2 (2 片)	みかん割りの板目材使用。①・②樹皮整形。①は裏面と左右両面炭化。②は裏面欠け、左右輪縁整形。	コナラ節	第 226 国 P.L. 77
13	板	残長 11.2 幅 3.4 厚 1.7 (上側・下側欠損)	樹皮側の板目材使用。下端失われるが③下位左側削りにより実形整形。上位炭化。	コナラ節属	第 226 国 P.L. 77
14	角材	①残長 7.8 幅 3.5 厚 2.5 ② 残長 3.8 幅 1.8 厚 0.7 (2 片)	板目材使用。②は下面剥落。両片共に表面削りにより六尺棒形に整形。	クスギ節	第 226 国 P.L. 77
15	丸材 (板か)	径 11.5 残長 37.9 (上側とした端欠損)	芯持ち材。下位に削り残れる、実形に整形した可能性を有する。	クスギ節	第 226 国 P.L. 77

28 号溝

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	弥生土器壺	口径 (13.2) 残高 23.3 (口縁～脚部 1/4)	扶雑物粗だが少量。にぶい褐色。口縁内外面と脚部外面磨き。外面口縁下端に瘤状文、肩部波状文の一部に刷毛目。体部内面磨削り。	3 世紀後半 樽式	第 247 国 P.L. 77
2	土師器高坏	口径 11.8 底径 11.4 器高 11.5 (一部欠損、欠形に近い)	扶雑物粗いものもある粘土細かい。器面やや変れる。にぶい黄褐色。口端部横撫で、以下の坏部内外面と脚部外面磨き。脚部内面指撫で。	4 世紀前半	第 247 国 P.L. 77
3	土師器鉢	口径 (17.0) 底径 4.5 器高 7.6 (2/3)	扶雑物少量で、粘土細かい。浅黄褐色。口縁横撫で、体部内外面細かい磨き。底面撫で。	4 世紀後半	第 247 国 P.L. 77
4	土師器埴	底径 3.3 残高 5.0 (胴から底部 1/2)	扶雑物細かく。器面一部剥落。にぶい褐色。内面指撫で。外面刷毛削り刷毛目、腰部磨削り、胴面指撫で。	4 世紀	第 247 国 P.L.

No.	資料名称	測定値 (cm)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
			(残存状況)		
5	土師器甕	底径 9.0 残高 14.5 (脛～底部は成形)	挟雑物粗だが少量。橙色。体部外面磨削り、内面磨撫で。底部内面磨撫で、底面磨削り。	5世紀後半	第247国 P.L.
6	土師器甕	口径(13.4) 残高 7.6 (上脛～体部1/4)	挟雑物粗だが少量。にぶい灰色。比較的細かい外面刷毛目。内面口縁磨磨き、体部比較的細かい磨撫で。	4世紀前半	第247国 P.L.
7	土師器甕	底径 6.8 残高 9.2 (体部下半部と底部1/2)	粘土細かい。にぶい黄褐色。外面体部～底面磨削り。内面胴部磨撫で、脛～底部指撫で。	4世紀後半	第247国 P.L.
8	土師器壺	底径 7.7 残高 14.5 (脛～底部1/3)	挟雑物粗。焼成やや低温。内面荒れる。暗褐色。内面磨撫で。体部外面磨磨き。底面撫で。	4世紀か	第247国 P.L.
9	土師器壺	底径 6.7 残高 3.6 (脛～底部1/2)	挟雑物粗。にぶい黄褐色。脛～底部内面磨磨き。腰部外面指撫で、底面若干上げ底で磨磨き。	4・5世紀	第247国 P.L. 77
10	駒か	長 63.1 幅 6.3 厚 2.2 (刃部両側欠損)	柾目材。裏面平頭を成し、刃部板状。柄部かまぼこ形を成す。	アカガシ亜属	第247国 P.L. 78
11	楯	径 7.8 × 6.6 長 17.8 (欠損部あり)	芯持ち材使用。粗造化進行し加工痕不明。中位に幅 5cm、深さ 1.3cm 程の挟れ部が有。鉄アレー形を呈する。	コナラ亜属	第247国 P.L. 78
12	杖	残長 49.7 幅 6.0 厚 3.9 (上脛欠損)	柾目の厚板材転用。表裏・左右側面に新痕残り、下端削りにより尖形に整形。	クスギ節	第248国 P.L. 78
13	杖	残長 47.7 幅 7.4 厚 5.4 (上脛・下脛欠損)	柾目の厚板材転用。下端に削りによる整形痕あり。尖形を意図したと見られる。	クスギ節	第248国 P.L. 78
14	杖	長 63.9 幅 11.9 厚 6.6 (上脛欠損)	削皮加工のみかん割材の下端を削り尖形に整形。上端は燃焼により炭化し欠失する。	コナラ節	第248国 P.L. 78
15	細杖	①径 2.6 × 2.3 残長 19.1 ② 径 1.9 残長 3.2 (2片あり)	芯持ち材使用。①の先端欠け、加工痕不明瞭だが削り様の加工で尖端部形成。	モミ属	第248国 P.L. 78
16	薄板材	①残長 112.5 残幅 41.5 厚 2.8 ②残長 38.6 残幅 9.7 厚 1.8	柾目材。側面は部分的に遺存か。腐食、粗造化やや進む。加工直等は確認できなかった。	クスギ節	第248国 P.L. 78
17	薄板材	残長 34.9 幅 7.3 厚 6.1 (上下側欠損)	柾目材。粗造化進行し、加工直等は確認できなかった。	クスギ節	第248国 P.L. 78
18	板材	残長 61.2 幅 6.3 厚 1.4 (先端欠損)	柾目材。左右、下側整形。下位左寄りに径 1.9 × 1.3cm の長方形の孔が穿たれる。	クスギ節	第248国 P.L. 78
19	厚板材 (建築材)	残長 79.6 幅 18.8 厚 4.9 (一方欠損、端部片側欠損)	みかん割による柾目材。一端に幅 11cm 以上、深さ 9.0cm の挟れを有する。	コナラ節	第248国 P.L. 78
20	厚板材	長 90.7 幅 9.1 厚 2.6 (部分的に欠失)	板目材。少々反る。横断面形長方形に加工。	モミ属	第248国 P.L. 78
21	厚板材	残長 82.8 幅 22.9 厚 3.7 (一側欠損)	みかん割による柾目材。残存端部平ら。	クスギ節	第248国 P.L. 78
22	厚板材	長 40.2 幅 16.5 厚 5.5 (尖形か)	削皮付のみかん割材。特段の加工痕は認められない。	クスギ節	第248国 P.L. 78
23	厚板材	残長 32.7 幅 3.6 厚 2.4 (上下側欠損)	みかん割材を横断面形長方形に加工。表面に強い削り痕残る。	モミ属	第248国 P.L. 78
24	厚板材	残長 32.5 幅 10.8 厚 4.2 (上下側欠損)	板目材。粗造化進行。明瞭な加工痕は見られなかった。	クスギ節	第249国 P.L. 78
25	厚板材	残長 31.7 幅 6.2 厚 2.1 (上下側欠損)	みかん割材。削皮磨撫は所々欠ける。特段の加工痕見られない。	クスギ節	第249国 P.L. 79
26	厚板材	残長 28.6 幅 4.5 厚 4.0 (上下側欠損)	腐食、粗造化進行。両側割材使用すが芯は欠ける。表面荒れ加工痕観察困難。	クスギ節	第249国 P.L. 79
27	厚板材	残長 27.9 残幅 3.8 厚 2.1 (上下側・右側欠損)	柾目材使用。左側縁く字状を成し、表面全体に炭化。	コナラ節	第249国 P.L. 79
28	厚板材	残長 25.7 幅 5.8 厚 1.8 (上下側欠損)	みかん割りの柾目材。特段の加工痕は認められない。	コナラ節またはク リ	第249国 P.L. 79
29	厚板材 (杖か)	①残長 23.3 幅 6.2 厚 4.7 ② 残長 5.3 幅 3.9 厚 2.7 (2片)	柾目材。①の下位は尖形を成し、上位は調査時の欠け。②の上 面には削り痕。	クスギ節	第249国 P.L. 79
30	厚板材 (杖か)	残長 18.4 幅 4.5 厚 3.3 (欠損品)	柾目材使用。表面と右側面に削り痕跡見られる。杖の未製品か。	コナラ節	第249国 P.L. 79
31	厚板材	残長 16.6 幅 5.3 厚 2.1 (上下側欠損)	みかん割材。遺存状態悪くと件の加工痕見られない。	クスギ節	第249国 P.L. 79
32	厚板材	残長 13.6 幅 5.1 厚 4.4 (下方欠損)	みかん割りの柾目材。表面と上端面を削りに寄り平頭面に加工。	クスギ節	第249国 P.L. 79
33	厚板材	残長 12.9 幅 6.5 厚 2.7 (下右側破片)	柾目材。ダリ髄縁付近炭化。特段の加工痕は確認されない。	コナラ節	第249国 P.L. 79

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
34	角材 (建築材か)	残長 23.7 幅 16.5 厚 10.3 (端部片か)	板目材。端部厚削に加工。表裏左右面と欠損側断面削により加工。	タヌギ節	第 249 図 P.L. 79
35	角材 (建築材か)	径 13.1 × 11.1 残長 94.7 (欠損品)	芯持ち材。表裏左右面と端部に新痕残る。柱材の可能性あり。	タヌギ節	第 249 図 P.L. 79
36	角材 (建築材か)	残長 43.8 幅 12.3 厚 10.3 (下位欠損)	四分割材を整形して角柱状に成す。上端を削って屋根形に整形する。	コナラ節	第 249 図 P.L. 79
37	角材	残長 54.3 幅 17.6 厚 8.1 (一部割れるがほぼ完成)	みかん割材。上下両端削り直多く見られ、皮側に丸く整形される。	コナラ節	第 249 図 P.L. 79
38	角材	長 51.5 幅 16.9 厚 8.0 (完成品か)	みかん割りの板目材。上下端に削り直。芯・削皮側平らに加工。上位右側削り直残る。	コナラ節	第 249 図 P.L. 79
39	角材 (杖か)	径 6.2 × 6.2 残長 47.5 (上側欠損、下位削れか)	みかん割材の両側を削って整形。下位面に削り直残る。	タヌギ節	第 250 図 P.L. 79
40	角材	残長 42.5 幅 8.4 厚 7.7 (上下側欠損)	横断面二等辺三角形様のみかん割材。表面削り取り。表面はほぼ前面に削皮残る。	コナラ節	第 250 図 P.L. 79
41	角材	長 44.9 幅 10.7 厚 5.8 (完成品か)	四分割材を加工。削皮側そのまま、芯削りか。	コナラ節	第 250 図 P.L. 79
42	角材	残長 24.4 幅 5.5 厚 4.2 (上側欠損)	削皮付のみかん割材。特設の加工直は認められない。	コナラ節	第 250 図 P.L. 79
43	角材	残長 13.0 幅 4.2 厚 3.0 (上下側欠損)	板目材使用。四角を削って棒状に成す。	タヌギ節	第 250 図 P.L. 79
44	丸材	径 7.4 × 7.2 残長 19.6 (上側欠損)	芯持ち材。上位は炭化により欠失。下端は削りにより鈍い尖形に整形。	タヌギ節	第 250 図 P.L. 79
45	丸材	径 14.4 × 12.0 残長 350.4 (欠損品)	芯持ちの丸太材。削皮はがれ加工されたものと判断される。下端削れ、上端欠損。	コナラ節	第 250 図 P.L. 80
46	丸棒	径 2.8 残長 81.1 (上下側欠損)	削皮見られず、直線的な芯持の丸棒。	タヌギ節	第 250 図 P.L. 80
47	丸棒	径 2.8 × 1.1 残長 64.3 (上側欠損、下端切断)	削皮見られず、枝払いのされた芯持の丸棒。直線状を成す。	散孔材	第 250 図 P.L. 80
48	丸棒	①径 1.7 × 1.1 残長 38.6 ②径 1.3 × 1.9 残長 19.8 (2片)	板目材を用いて棒状に加工。特設の削り直は確認できない。	スギ	第 250 図 P.L. 80
49	丸棒	残長 32.4 幅 3.0 厚 2.3 (上下端欠損)	粗造化進行。板目材使用。削り棒と見られる加工で横断面円形棒に整形。	タヌギ節	第 250 図 P.L. 80
50	ふくべ	残長 11.3 幅 6.5 以上 厚約 7.4 (先端・元部等欠損)	12 片以上に分割していた。保存処理を施し復元を試みたが変形進み完全な接合不能。洋梨形を呈すと見られる。	楓葉か	第 251 図 P.L. 80
51	種子	(破片)	3 点	オニグルミ、クスギ、モモ	P.L. 80

29 号溝

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
1	薄板材	残長 20.9 残幅 5.7 厚 0.8 (破片)	板目材。粗造化進みと件の加工痕跡は見られない。	コナラ葉	第 251 図 P.L. 80
2	板材	残長 18.1 幅 4.8 厚 2.2 (上下側欠損)	板目材。特設の加工直等は認められない。	コナラ節	第 251 図 P.L. 80
3	角材 (駒か)	長 100.5 幅 4.6 厚 2.9 (下端部かに欠け、一部側欠損)	直線的な板目材の角棒。両側は影みを以て加工。上端は直線的。下端はやや細くなり丸みを持つ。	タヌギ節	第 251 図 P.L. 80
4	角材	残長 64.5 幅 6.2 厚 3.8 (上下端及び中位側欠損)	みかん割の板目材。特設の加工直は見られない。	タヌギ節	第 251 図 P.L. 80

30 号溝

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
1	赤生土器甕	口径 17.3 底径 8.6 器高 23.8 (ほぼ完成)	挟雑物やや粗。橙色。折り返し口縁。外面口縁一肩部波状文、以下甕腹でで、底面一方向への甕腹で。内面横位の甕腹でで、底部指腹で。	3世紀後半 棒式	第 252 図 P.L. 81

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・彫形・調整等の特徴	備考	国・版番号
2	弥生土器壺	口径14.4 底径7.0 器高20.8 (口縁1/4欠損)	焼成良好。橙色。折り返し口縁。外面口縁～肩部波状文、以下 隆起で、底面隆起。内面横位の隆起で、底部隆起で。	3世紀後半 棒式	第252回 P.L.80
3	弥生土器壺	口径15.0 底径7.6 器高29.4 (3/4)	焼成良好。挟雑物比較的細粒。内面口縁隆起で、底部隆起で、 底部隆起で。外面口縁横帯で後波状文、頸部波状文、肩部波状文、 体部隆起で後隆起で。底面圧痕残り隆起で。	3世紀後半 棒式	第252回 P.L.81
4	弥生土器壺	口径11.6 残高7.7 (口縁1/2)	粘土細かい。にぶい橙色。口縁横帯で後、内面上位を除き粗い 隆起で。外面底位の隆起で肩部に波状文。	3世紀後半 棒式	第252回 P.L.81
5	弥生土器壺	口径(16.0) 残高12.3 (口縁～肩部1/2)	挟雑物、粘土細かい。にぶい黄褐色。口縁内外面隆起で。頸部 外面に波状文。肩部内面隆起で、外面刷毛か隆起で。	3世紀末 棒式	第252回 P.L.81
6	弥生土器壺	口径8.9 残高19.0 (体部下半～底部1/2)	挟雑物細かく雲母目立つ。にぶ黄褐色。器内面中心に寛れる。 内面に輪積み痕残り。内面左回りの隆起で、外面体部隆起で 肩部に波状文。底面極僅かに上底で隆起で。	3世紀末 棒式	第252回 P.L.81
7	弥生土器壺	口径15.5 底径8.0 器高36.3 (1/2)	挟雑物やや粗。にぶい黄褐色。折返し口縁。内面口縁磨き様の 隆起で、体部隆起で、腰部下位～底部隆起で。外面口縁肩部波 状文。体部隆起で。底面磨き様の隆起で。	3世紀末 棒式	第252回 P.L.81
8	弥生土器壺	底径7.4 残高3.3 (腰部下位～底部1/3)	挟雑物少量。にぶい黄褐色。腰部外面磨き様の隆起で、内面隆 起で。底面隆起で。底面内面一方中心の隆起で。	3世紀後半 棒式	第252回 P.L.81
9	弥生土器壺	残存4.2×6.2 厚0.4 (肩部破片)	挟雑物、にぶい黄褐色。内面、外面赤色塗彩で、中に帯縞紋施文。	3世紀末 赤丹式	第252回 P.L.81
10	土師器碗	口径15.6 残高8.5 (口縁～腰部片)	挟雑物細かい。明赤褐色。外面吸炭。口縁横帯で、体部内面隆起で、 外面刷毛目。	4世紀後半 棒式	第252回 P.L.81
11	土師器碗	口径(13.4) 底径5.5 器高6.4 (1/3)	粘土細かいが挟雑物やや多。灰白色。口縁横帯で。口縁下位～ 腰部隆起で。底面と底面内面隆起で。	4世紀前半 棒式	第252回 P.L.81
12	土師器碗	口径(11.1) 底径3.2 器高6.6 (1/3)	粘土細かくやや軟質。浅黄褐色。口縁横帯で。体部外面刷毛目、 底面刷毛目後隆起で。体～底面内面隆起で。	4世紀前半 棒式	第252回 P.L.81
13	土師器碗	口径(9.9) 底径(2.2) 器高7.5 (1/4)	挟雑物細かい。橙色。口縁反て横帯で。体部内面隆起で、外 面刷毛目。底面内面隆起で、底面刷毛目後隆起で。	4世紀後半 棒式	第252回 P.L.81
14	土師器鉢	口径12.2 底径3.8 器高6.2 (1/2)	挟雑物やや粗。にぶい黄褐色。口縁横帯で。体～底面内面隆起 で後半隆起で。体部外面隆起で。底面一方への隆起で。	4世紀後半 棒式	第252回 P.L.81
15	土師器埴	口径10.0 残高6.2 (口縁部のみ、僅かに口縁欠損)	挟雑物粗だが少量で粘土細かい。にぶい橙色。口縁部隆起で。 それ以下の外面及び、内面口縁部近くまで隆起で。	4世紀後半 棒式	第252回 P.L.81
16	土師器台付 壺	口径7.2 底径9.5 器高8.1 (口縁1/4欠損、ほぼ定形)	粘土細かい。にぶい橙色。口縁と脚部横帯で。受部上位外面 と体～脚部内面隆起で。受部下半～脚部隆起で。	4世紀前半 棒式	第252回 P.L.81
17	土師器高坏	口径22.6 残高8.3 (坏部～脚部上端)	挟雑物粗だが粘土細かい。にぶい橙色。口縁部外面隆起で。体部外面と口縁～ 体部内面隆起で。坏底部内面と底面及び脚上位隆起で。	4世紀前半 棒式	第252回 P.L.81
18	土師器高坏	受部残径6.4 残高6.6 (坏底部～脚部除く脚部3/4)	挟雑物粗。橙色。器面やや寛れる。坏底部外縁を欠いて坏部円 盤状に加工。円孔2孔残るが、三方に円孔穿孔と見られる。坏 底部・脚部内面隆起で、外面磨き様の隆起で。	4世紀前半 器台に転用か	第252回 P.L.81
19	土師器高坏	口径18.0 脚部径12.0 器高 13.5 (ほぼ定形)	挟雑物粗いものを含む。にぶい褐色。脚部中位上寄りの四隅に 径6mm程の円孔。口縁部と脚部横帯隆起で。これを除く坏内外 面と脚外面隆起で。脚部内面隆起で。	4世紀前半 棒式	第252回 P.L.81
20	土師器高坏	口径(20.0) 残高7.3 (坏部及び脚部上端2/3)	挟雑物粗で少なく粘土粗い。にぶい橙色。口縁横帯で、坏体～ 底面内面隆起で、坏外面体部隆起で、底部隆起で。脚上端部外 面隆起で。	5世紀前半 棒式	第252回 P.L.82
21	土師器高坏 または器台 脚部	脚部径15.6 残高5.2 (脚部中下位5/6)	挟雑物粗。三方に径12cm程の円孔。縦帯隆起で。これを除く 内面隆起で、外面隆起で。	4世紀前半か 棒式	第252回 P.L.82
22	土師器台付 壺	脚部径9.3 残高6.6 (腰底部中央～台部)	接合部挟雑物やや多。にぶい黄褐色。腰底部内面隆起で。台脚 部と内面縦帯隆起で。台部外面隆起で。内面隆起で。	4世紀 棒式	第252回 P.L.82
23	土師器台付 壺	脚部径9.8 器高6.8 (腰底部中央1/3と台部定形)	挟雑物細かい。にぶい橙色。腰底部内面、台部内面と台部下位 隆起で。台部外面中～上位隆起で。	4世紀 棒式	第252回 P.L.82
24	土師器壺	口径(15.4) 残高14.3 (口縁～腰部1/3)	粘土細かく挟雑物少。灰褐色。口縁横帯で。体部内外面隆起で、 外面頸部下位～肩部底位の隆起で。	4世紀前半 棒式	第253回 P.L.82
25	土師器壺	口径(17.7) 残高8.0 (口縁～肩部片)	挟雑物やや粗だが生地細かい。明赤褐色。口縁～肩部内外面刷 毛目後、口縁外面隆起で。	4世紀前半 棒式	第253回 P.L.82
26	土師器壺	口径(14.4) 残高5.5 (口縁～肩部破片)	挟雑物細かい。にぶい赤褐色。内外面(横)帯で後頸部の一部 を除き刷毛目。	4世紀前半 棒式	第253回 P.L.82

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
27	土師器 甕	口径 12.2 底径 6.2 器高 17.3 (口縁一部欠損、ほぼ完形)	扶輪物比較的細粒。外面下半やや丸れ、下位に吸気。にぶい褐色。折り返し口縁。肩部との接点も折り返し気味。口縁横撫で。口縁内面下半と体部外面磨毛。体部内面磨毛で、底面磨毛。	4世紀前半	第253図 P.L. 82
28	土師器 甕	口径 15.2 底径 5.7 器高 19.2 (3/5)	扶輪物細粒。褐色。底部やや上げ底。口縁横撫で。体一部内面磨毛で、体部外面刷毛目後腰部磨毛で、底面撫で。	4世紀前半	第253図 P.L. 82
29	土師器 甕	口径 15.2 残高 18.5 (口縁～腰部 4/5)	扶輪物粗だが少量。外面に吸気。灰黄褐色。口縁横撫で。体部内面磨毛で、外面刷毛目後磨毛。	4世紀前半	第253図 P.L. 82
30	土師器 甕	底径 5.8 残高 19.4 (口縁部下位～底部)	扶輪物粗。焼成やや軟。にぶい黄褐色。内面中心にやや丸れる。口縁横撫で。体部内面磨毛で、外面磨毛。底面内面磨毛で、底面撫で。	4世紀前半	第253図 P.L. 82
31	土師器 甕	口径 17.4 残高 25.0 (口縁～腰部 4/5)	扶輪物細粒。褐色。口縁横撫で後外面横位の撫で。体部内面横撫で、外面磨毛後磨毛。	4世紀前半	第253図 P.L. 82
32	土師器 甕	口径 13.1 底径 7.5 器高 25.6 (一部欠損、完形に近い)	焼成良好。扶輪物粗。赤褐色。折返し口縁か。口縁内面磨毛で、口縁～肩部外面刷毛目後口縁上位横撫で。体部内面磨毛で、外面磨毛。底面内外面磨毛。	4世紀後半	第253図 P.L. 83
33	土師器 甕	口径 (14.5) 底径 6.8 器高 30.4 (2/3)	焼成良好。扶輪物やや粗。にぶい黄褐色。口縁横撫で。内面体部磨毛で、底部磨毛。体部外面刷毛撫で、底部下位と底面磨毛。	4世紀後半	第253図 P.L. 82
34	土師器 甕	口径 (17.0) 残高 5.5 (口縁～肩部 1/4)	扶輪物少なく、粘土細かい。褐色。口縁横撫で、肩部外面磨毛で、内面磨毛及び指撫で。	5世紀前半	第253図 P.L. 82
35	土師器 甕	口径 (13.0) 残高 8.7 (口縁～肩部片)	扶輪物やや細かい。褐色。焼成良好。口縁内面刷毛撫で、外面磨毛で。肩部内外面磨毛。	4世紀	第253図 P.L. 82
36	土師器 甕	底径 8.4 残高 3.8 (腰～底部 1/3)	扶輪物少量。にぶい黄褐色。腰部外面刷毛目。底部外面～底面磨毛で。腰～底部内面磨毛。	4世紀前半	第253図 P.L. 82
37	土師器 甕	口径 (13.0) 底径 7.3 器高 22.1 (口縁 1/3 と体部一部欠損)	焼成良好。赤褐色。折り返し口縁。口縁外面刷毛目後横撫で、体部外面磨毛。内面磨毛で、底面撫で、底面内面磨毛。	4世紀前半	第253図 P.L. 83
38	土師器 甕	口径 14.8 残高 21.2 (口縁～胴部 2/3)	扶輪物粗いが粘土細かい。にぶい褐色。口縁刷毛目後下縁除く外面と下位内面横撫で。体部内面磨毛で指直直目立ち、外面磨毛。	4世紀前半	第254図 P.L. 83
39	土師器 甕	口径 14.3 残高 19.4 (口縁～胴部上半)	扶輪物粗だが粘土細かい。褐色。折り返し口縁。口縁内面刷毛目又は磨毛で、外面撫で。肩部内面上位刷毛目、体部磨毛で、肩～体部外面刷毛目。	4世紀前半	第254図 P.L. 83
40	土師器 甕	最大径 31.7 底径 7.7 残高 18.8 (胴～底部)	扶輪物比較的細粒。体～底部内面反時計回りの磨毛または刷毛撫で。体部外面磨毛。底部外面磨毛で、底面撫で。	4世紀前半	第254図 P.L. 83
41	土師器 甕	口径 (14.4) 残高 15.0 (口縁～体部上位 2/3)	扶輪物細粒。口縁横撫で。体部内面刷毛目後磨毛様の磨毛で。口縁下位～体部磨毛。	4世紀後半	第254図 P.L. 83
42	土師器 甕	胴部最大径 17.4 残高 15.0 (体部 1/2)	扶輪物やや粗だが、粘土細かい。外面やや吸気。暗褐色。体部内面磨毛で。肩～胴部刷毛目。腰部磨毛。	4世紀	第254図 P.L. 83
43	土師器 甕	口径 13.3 底径 6.5 器高 23.4 (口縁一部欠損の他は無傷)	扶輪物粗だが少量。粘土細かい。褐色。口縁横撫で。外面肩部上位に刷毛による撫で施される以外は磨毛。口縁内面磨毛。以下磨毛で。底面磨毛。	5世紀前半	第254図 P.L. 84
44	土師器 甕	底径 7.4 残高 12.7 (胴部下～底部 1/2)	扶輪物細粒で生地細かい。にぶい黄褐色。体部内外面磨毛で。底面内面磨毛で、底面尖部僅かに上がり磨毛。	5世紀か	第254図 P.L. 84
45	土師器 小型 甕	口径 (11.6) 残高 10.0 (口縁～胴部 1/4)	扶輪物やや粗だが粘土細かい。褐色。口縁横撫で後外面磨毛。体部内面磨毛で、外面磨毛。	4世紀前半	第254図 P.L. 84
46	土師器 小型 甕	口径 9.6 底径 4.2 器高 13.7 (口縁 1/2 弱欠損、ほぼ完形)	扶輪物細粒。にぶい褐色。焼成良好。口縁横撫で。内面肩～胴部磨毛で、腰～底部磨毛で、外面体部上半磨毛で、下半磨毛。底面撫でで縦溝圧痕が残る。	4世紀前半	第254図 P.L. 84
47	土師器 小型 甕	底径 2.5 残高 8.1 (肩～底部 3/4)	扶輪物細粒。にぶい褐色。器面やや丸れる。体部内面磨毛で、外面磨毛。底部内面磨毛で、底面撫で。	4世紀前半か	第254図 P.L. 84
48	土師器 小型 甕	口径 (9.0) 底径 4.7 器高 12.2 (1/2)	扶輪物細粒。焼成良好。褐色。口縁付定横撫で。内面口縁刷毛目。体～底部磨毛で。口縁～腰部外面磨毛。底面口縁底で磨毛。	4世紀後半	第254図 P.L. 84
49	土師器 小型 甕	口径 2.8 底径 4.4 器高 14.8 (ほぼ完形。口縁一部欠損の他無傷)	扶輪物やや粗。焼成良好。明赤褐色。口縁付定横撫で。口縁内面磨毛で、頸部横撫での他口縁～腰部外面磨毛。体部内面撫でか、底面内面磨毛で、やや上底で磨毛。	5世紀前半	第255図 P.L. 84

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
50	土師器小型 壺	口径 7.8 残高 12.7 (口縁～腹部 2/3)	挟雑物比較的粗だが胎土細かい。にぶい橙色。口縁近く横撫で。 内面に緑線毛目。腰部指撫で。口縁近く縁く外面磨き。	5世紀前半	部 255 図 P.L. 84
51	土師器小型 壺	底径 5.2 残高 7.4 (胴部～底部 1/2)	挟雑物やや粗。にぶい赤褐色。腰部内外面及び底部内面磨き。 底面指撫で。	4世紀前半	部 255 図 P.L. 84
52	手捏土器 小壺	口径 5.5 底径 4.3 器高 4.8 (口縁一部欠損、ほぼ完整)	陶の模倣品。生地細かく外面に割れ。にぶい橙色。口縁～腰部 外面と底面指撫でと指頭圧痕。口縁～底部内面指撫で。	4世紀か	部 255 図 P.L. 84
53	長柄鋸	残長 158.6 幅 20.8 厚 6.2 (柄端部欠損)	みかん割りの柾目材使用。刃部長さ 82.9cm、柄部幅約 9cm、前 りにより整形し、折痕残る。	タヌギ節	部 255 図 P.L. 84
54	長柄鋸か	残長 32.7 残幅 7.4 厚 1.6 (刃部上位付着破片)	柾目材使用。粗造化進み整形痕跡は明瞭でない。	コナラ節	部 255 図 P.L. 84
55	長柄鋸か	残長 30.6 残幅 6.5 厚 2.6 (刃部上位付着破片)	みかん割の柾目材使用。粗造化進み整形痕跡は明瞭でない。柄 は幅 3.1cm、厚 2.6cm。	タヌギ節	部 255 図 P.L. 84
56	鋸	残長 24.7 残幅 9.0 厚 3.7 (番柄部付着破片)	柾目材使用。鋸の削り残しを伴う径 3.2 × 3.5cm の着柄の孔穿 たれている。刃の厚みは 1.2cm 程を測る。	タヌギ節	部 255 図 P.L. 84
57	鋸か	残長 26.8 残幅 4.4 厚 2.8 (破片)	下位に帯状の削り残しを設け、刃部は 2mm 厚を測る。	タヌギ節	部 255 図 P.L. 84
58	農具か	①残長 14.0 幅 4.4 厚 1.9 (下方欠損) ②残長 7.5 幅 4.6 厚 1.6 (上位欠損)	①はみかん割の柾目材使用し、柄と見られる。上位に長さ 2cm、 深さ 0.6cm の溝状の抉れ作られる。②はみかん割材。	カエデ属	部 255 図 P.L. 84
59	楕圓	径 13.8 × 12.7 残長 42.5 (柄端部欠損)	本体長さ約 25cm、柄部径 5cm 以下。芯持ち材。削り出しで整形。 (柄端部欠損)	コナラ節またはク リ	部 255 図 P.L. 84
60	木鉢	長 17.4 幅 8.8 厚 6.7 (一部割落、ほぼ完整)	芯持ち材使用。上下両端切断し、中に縦 2cm 以下、深さ 0.7cm 以下の溝を刻んで一周させる。	コナラ節	部 255 図 P.L. 84
61	容器	①長 34.8 幅 18.9 厚 3.7 ②長 31.5 幅 10.0 (破片)	柾目材使用。粗造化進み明瞭ではないが、削りにより内外面整形。 (破片)	タリ	部 256 図 P.L. 85
62	建築材	残長 109.0 幅 20.2 厚 8.6 (下方欠損)	二分割材使用。上端左右両側に幅 5cm 程の直角状の突起を削り により設ける。これ以外の加工は特になし。	コナラ節	部 256 図 P.L. 84
63	杖	残長 109.4 幅 13.0 厚 5.4 (上側欠損)	みかん割りの柾目材使用。削りにより下端を尖形に整形。	タヌギ節	部 256 図 P.L. 85
64	柱材か	径 13.5 × 10.4cm 残長 47.2 (一端残欠損品)	芯持ち材。表面は平滑化され折痕残る。端部にも折痕残る。	タヌギ節	部 256 図 P.L. 85
65	薄板材	残長 14.7 幅 5.9 厚 1.8 (上下側欠損)	柾目材。左側炭化。特段の加工痕跡見られない。	タヌギ節	部 256 図 P.L. 84
66	薄板材	残長 15.8 残幅 4.5 厚 (0.7) (破片)	柾目材の破片。右側縦直線的に加工。	針葉樹	部 256 図 P.L. 85
67	薄板材	残長 26.8 幅 4.2 厚 0.8 (上下側欠損)	柾目材使用。粗造化進み整形痕跡は明瞭でない。	コナラ節	部 256 図 P.L. 85
68	厚板材 (未製品か)	長 48.2 残幅 14.7 厚 7.2 (右側縁欠損)	柾目材。下半板状を成し削のはつりにより板状、端部楔状を成す。 上半部中央横断面三角形、上位削りにより板状に削られ、端部切ら れる。	タヌギ節	部 256 図 P.L. 85
69	厚板材	残長 44.5 幅 7.4 厚 5.2 (上下両端欠損)	柾目材。表面下位炭化。表面一部に折痕。	タヌギ節	部 256 図 P.L. 85
70	厚板材	残長 62.9 幅 9.8 厚 6.5 (下位欠損)	四分割材使用。上位に削り直残り、径 5mm 程の貫通孔見られる。	コナラ節	部 256 図 P.L. 85
71	厚板材	残長 48.1 幅 11.0 厚 5.7 (下方欠損)	みかん割材。背に加工痕なし。上端炭化により失われている。	コナラ節	部 256 図 P.L. 85
72	厚板材 (建築材か)	残長 26.5 幅 10.0 厚 2.4 (下側欠損)	粗造化見られる。みかん割りの柾目材。やや薄手。上位左側(芯 側)曲線的に取られる。	コナラ節	部 256 図 P.L. 85
73	厚板材	残長 15.8 幅 5.5 厚 3.2 (上下側欠損)	粗造化進行。柾目材。下端は炭化による欠損。	コナラ節またはク リ	部 257 図 P.L. 85
74	角材	①残長 33.2 幅 4.3 厚 2.4 ② 残長 17.3 幅 4.0 厚 1.9 (2片)	粗造化進行。柾目材使用し角棒状に加工。	タヌギ節	部 257 図 P.L. 85
75	角材	残長 41.5 幅 4.8 厚 2.9 (上下側欠損)	分割材の柾目材使用。樹皮側上面を削取り。特段の加工痕見ら れず。	コナラ節	部 257 図 P.L. 85
76	角材	残長 37.1 幅 3.1 厚 1.6 (上側欠損)	粗造化見られる。柾目材使用。下端削り直残り。横断面形跡鈍形。 (上側欠損)	タヌギ節	部 257 図 P.L. 85
77	角材	残長 33.2 幅 4.3 厚 25.9 (下側欠損)	粗造化進む。柾目材使用。特段の加工痕なく、上位に炭化部分 あり。	コナラ節	部 257 図 P.L. 85

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
78	角材	残長 14.7 幅 3.7 厚 2.3 (上下側欠損)	板目材使用。特徴の加工痕跡は見られない。	コナラ節	第 257 国 P.L. 85
79	割材	残長 66.9 幅 8.9 厚 5.9 (上下両側欠損。一部側も欠損)	四分割材。上位で樹皮側を扇根型に加工する。上端も欠けか。下位に孔が開く。	クスギ節	第 257 国 P.L. 85
80	丸材 (杖小)	径 (9.3 × 7.8) 長 55.1 (上側欠損)	板目材。下端を尖状に削り出し。側面にも一部新痕が残る。中位炭化。	コナラ節	第 257 国 P.L. 85
81	種子	(破片)	1点	オニグルミ	P.L. 85

31号溝

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	弥生土器高 坏	胴部径 9.7 残高 6.1 (胴部、ほぼ定形)	扶雑物細かく、胎土細かい。内面指撫で、外面磨き様の撫で。裾端部磨撫で。	3世紀後半	第 212 国 P.L. 86
2	須恵器坏	口径 12.9 底径 8.1 器高 3.4 (4/5)	胎土粗粒のものも含む。明るい灰色。右回転輪軸整形。底面回転直切り後、腰部外面磨調整。	8世紀半	第 212 国 P.L. 86

32号溝

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	弥生土器 壺	口径 (12.9) 残高 6.3 (口縁～肩部破片)	扶雑物粗いものも含む。橙色。口縁部外面輪軸痕残る。口縁横撫で。肩部内面磨撫で、外面撫でで頸部に縷状文、肩部に波状文。	4世紀初頃	第 259 国 P.L. 86
2	土師器壺	底径 (7.2) 残高 12.6 (腰～底部 1/2)	扶雑物粗。にぶい黄橙色。体～底部内面左回りの磨撫で。体部が雲面磨削り。底面磨撫で少。	4世紀か	第 259 国 P.L. 86

1号土坑

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	弥生土器高 坏	残高 2.3 (坏底部中央～脚部上位)	坏底部中央扶雑物粗粒。にぶい橙色。二次焼成受く。坏底部内面変れる。坏底部外面と脚内外面指撫で。	3世紀後半	第 192 国 P.L. 86
2	手捏土器	底径 4.5 残高 5.4 (口縁殆ど欠損)	葉のミニチュア。扶雑物細粒の雲母目立ち胎土細かい。にぶい黄橙色。口縁～底部内面指撫で。外面口縁磨撫で、体部指撫で。底面僅かに上げ底で外周磨調整、中央指撫で。	弥生土器か	第 192 国 P.L. 86

25号土坑 (旧 7-16号土坑)

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	焙烙鍋	口径 (29.8) 底径 (27.6) 器高 2.7 (破片)	扶雑物少ない。酸化焙烙成で外面炭化。橙色。内外面横位の撫で、内面に内耳筋付け。		第 195 国 P.L. 86

33号土坑 (旧 7-24号土坑)

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	軟質陶器火 鉢	残幅 4.9 器高 5.2 (破片)	扶雑物比較的細かい。参加焙烙成。橙色。外面に亀甲形の陰刻。底部内面磨撫でに段差あり。		第 195 国 P.L. 86
2	御歯	残長 4.4 幅 0.5 厚 0.15 (歯 1 本文、基部若干残る)	セルロイド製か。若干湾曲。扁平尖形を呈す。		第 195 国 P.L. 86

As-B 下水田

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	土師器 甕	口径(6.2) 残高 13.4 (口縁～胴部上位 1/4)	挟雑物粗。にぶい黄褐色。口縁横撫で。体部内面磨撫で、外面磨削り。	5世紀前半	第215国 P.L. 86
2	砥石	残長 4.7 幅 3.8 厚 3.0 50g (欠損品。端部有り)	所々剥落。表裏、左右、上端面に研磨面形成され、右側・裏面に削痕残る。	流紋岩	第215国 P.L. 86
3	玉	径 0.35 × 0.35 厚 0.26 0.1g (完形)	径 1mm 弱の孔が縦位に穿たれる。側面と上下面きれいに研磨される。		第215国 P.L. 86

As-C 上水田

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	弥生土器 甕	口径 15.9 残高 22.0 (口縁～体部 3/4)	挟雑物粗だが少量。にぶい黄褐色。口縁部横撫で。口縁～肩部外面粗い波状文。口縁内面磨き。体部内外面磨撫で後、外面磨削り。内面一部に磨磨き。	3世紀後半 樽式	第230国 P.L. 86
2	弥生土器 甕	胴部径 6.4 残高 4.8 (胴部、一部胴部含む)	挟雑物粗だが胎土細かい。徳利形。にぶい黄褐色。内外面磨き様の磨撫で。胴部下端外面に刺突加えた粘土帯一帯。	4世紀前半	第230国 P.L. 86
3	土師器 甕	口径 16.0 残高 6.5 (口縁 1/2)	挟雑物粗。明赤褐色。折り返し口縁。口縁近く横撫で。以下内面磨撫で。外面磨撫で。肩部磨削り。口縁文見える。	4世紀初頭	第230国 P.L. 86
4	土師器 甕	口径(26.6) 残高 16.0 (口縁～体部破片)	挟雑物粗。にぶい黄褐色。口縁横撫で後口縁部除き磨撫で。体部内面磨撫で。外面磨削り。	4世紀か	第230国 P.L. 86
5	土師器 甕	底径(10.1) 残高 17.2 (胴～底部 1/4)	挟雑物粗だが胎土細かい。にぶい黄褐色。底面に径 3cm 程の隅丸九角形の孔細かく開く。体部外面凹凸有って磨削り。内面磨撫で。底部内外面磨撫で。	5世紀前半	第230国 P.L. 86
6	土師器 小型 甕	底径 4.6 残高 9.6 (胴～底部 1/2)	挟雑物やや粗い。にぶい褐色。体部内面磨撫で。外面研毛目。底部内面磨撫で。底面磨撫で。	4世紀前半か	第230国 P.L. 86
7	須恵器 埴	口径(12.0) 底径(6.0) 器高 4.0 (1/3)	挟雑物やや粗だが少ない。灰色。右回転機軸形。底面回転赤きり切り施し。	9世紀前半	第230国 P.L. 86
8	土製紡錘車	径 5.7 × 5.5 厚 2.0 (完形)	挟雑物比較的細かい。胎土細かい。中央に径 5 × 4mm の穿孔。上面磨撫で。下面磨撫で。	4、5世紀か	第230国 P.L. 86

As-C 下水田

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	弥生土器 甕	口径 18.6 残高 15.0 (口縁～胴部 1/3)	挟雑物細粒で胎土細かい。にぶい黄褐色。口縁と肩部縁の縞状文を挟んで口縁～体部上外面に波状文。口縁内面磨き。体部外面下平と体部内面に磨撫で。	3世紀後半 樽式	第261国 P.L. 87
2	弥生土器 甕	胴部最大径 20.4 残高 14.6 (胴部 1/3)	挟雑物やや粗く。胎土やや細かい。灰褐色。内外面磨撫で。肩部外面粗い波状文 2 条。	3世紀後半 樽式	第261国 P.L. 87
3	弥生土器 甕	底径 7.4 残高 5.0 (胴部下位～底部)	胎土細かい。底部内面やや荒れる。内面磨撫で。腰部外面磨撫で。底面磨撫で。	3世紀後半か	第261国 P.L. 87
4	弥生土器 甕	口径(16.4) 残高 7.2 (口縁～肩部上端破片)	挟雑物細かい。灰褐色。口縁付近横撫で。口縁内面磨き。外面磨撫で。肩部外面縞状文。肩部内面磨撫で。	4世紀初頭か	第261国 P.L. 87
5	弥生土器 甕	胴部径(13.0) 残高 10.5 (口縁～肩部片。胴部 1/3)	挟雑物少量。にぶい褐色。口縁～肩部外面波状文で胴部下端に縞状文。体部磨磨き。内面は口縁横撫で。胴部下半から体部磨撫で。	3世紀後半 樽式	第261国 P.L. 87
6	弥生土器 大型 甕	口径 26.0 底径 12.1 器高 83.2 (2/3)	挟雑物やや粗。雲母目立つ。明褐色。折返し口縁で口縁に輪積み痕跡残る。外面と口縁内面磨磨き。体部内面磨撫で。口縁外面に 2 段の磨削り。肩部外面に 3 段の雷縄文。底面平底で撫で。	3世紀後半 赤井戸式	第261国 P.L. 87
7	土師器 高 埴	胴径 11.5 残高 7.4 (胴部のみ。一部欠損)	挟雑物やや粗。褐色。上寄り四方に径 1.0cm 程の円孔。内面上端磨撫で。以下研毛目。外面縦部横撫で。底部位外磨磨き。	4世紀前半	第261国 P.L. 87
8	土師器 甕	口径(17.0) 残高 12.0 (口縁～体部上位 1/4)	挟雑物粗。焼成やや不良。にぶい黄褐色。口縁横撫で。体部内外面研毛目様の後で、外面に一部磨削り。	4世紀前半	第261国 P.L. 87
9	土師器 甕	口径(14.4) 底径 6.0 器高 24.6 (2/3。口縁過半欠損)	器面内面中心に荒れる。にぶい褐色。内外面口縁横撫で。体部磨撫で。底部内面磨撫で。底面磨撫で。	4世紀前半	第261国 P.L. 87

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
10	土師器壺	口径 11.2 残高 12.7 (口縁～腰部 3/4)	胎土細かい。外面口縁・肩部除き剥落。口縁横撫で後、内外面細かい荒撫で。体部内外面荒撫で。	4世紀前半	第261図 P.L. 87
11	土師器壺	口径(19.4) 残高 24.0 (口縁～腰部 1/4)	挟雑物細かい。器面やや荒れる。口縁横撫で。内面肩部指撫で、胴～腰部荒撫で。体部外面荒撫で。	5世紀前半	第262図 P.L. 88
12	土師器壺	残高 8.0 (肩部 1/4)	挟雑物細かい。口縁横撫で。肩部内面荒撫で、外面荒撫で。	4世紀か	第262図 P.L. 87
13	土師器壺	体部最大径(27.0) 残高 10.7 (体部破片)	胎土細かい。内外面吸炭。口縁横撫で。内外面荒撫で。	4世紀か	第261図 P.L. 87
14	土師器壺	口径 11.0 残高 6.5 (口縁及び肩部の一部)	挟雑物粗だが少なく、胎土細かい。口縁横撫で。口縁内縁で内外面荒撫で。肩部内外面荒撫で。	4世紀前半	第262図 P.L. 87

旧流路

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	薄板材 (個板)	残長 11.0 幅 1.2 厚 0.3 (一端欠損)	柘目材。長さ 0.9cm、幅 0.2cm の短冊形の孔穿たれる。曲物か箱物の個板と見られる。	ヒノキ	第191図 P.L. 88

グリッド取上げ遺物

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	弥生土器壺	底径(6.2) 残高 16.8 (胴～底部 1/4)	挟雑物細かい。体部内面吸炭。底部内面荒れ。橙色。体部内面横撫で、外面荒撫で。肩部に波状文2段。底面荒撫で。	3世紀後半	第231図 P.L. 88
2	土師器壺	口径(12.0) 底径 7.8 器高 5.4 (1/3)	内面かなり荒れる。胎土細かく挟雑物少量。口縁横撫で。体部外面～底面指撫で。	4世紀前半	第231図 P.L. 88
3	土師器台付 壺	胴部径 9.5 残高 7.1 (台部 2/3)	挟雑物少量。胎土やや粗い。胴部内面折り返し。口縁横撫で。外面は17目後荒撫で。	4世紀(後半か)	第231図 P.L. 88
4	土師器壺	口径(15.6) 残高 3.7 (口縁 1/3)	挟雑物細かい。灰黄色。圧平された折り返し口縁。口縁内面上位横撫で。中・下位及び外面強い刷毛目。	4世紀前半	第231図 P.L. 88
5	土師器壺	口径(16.2) 残高 11.8 (口縁～肩部片)	胎土細かい。口縁横撫で。器面やや荒れる。口縁横撫で後、口縁外面下位と肩部内外面刷毛目。	4世紀前半か	第232図 P.L. 88
6	土師器壺か	底径 3.4 器高 2.9 (腰部下位～底部)	挟雑物粗粒。橙色。内面指撫で、外面荒削り。	4世紀か	第232図 P.L. 88
7	土師器壺	口径(17.2) 残高 13.7 (体部 4/5)	挟雑物細粒。口縁横撫で。内外面指撫で。内面肩部には指頭直残る。	4世紀前半	第232図 P.L. 88
8	土師器壺	胴部最大径 16.6 残高 11.7	挟雑物やや粗。口縁横撫で。器面やや荒れる。内外面荒撫で。	4世紀前半	第232図 P.L. 88
9	土師器壺	残存 6.1 × 5.4 厚 0.6 (体部破片)	挟雑物細粒。口縁横撫で。内面吸炭による黒色処理。外面縦位に縦長方形の墨書と思われる縦線2箇所見られる。	4世紀	第232図 P.L. 88
10	土師器瓶	口径(14.0) 底径(5.0) 器高 9.0 (1/2)	胎土細かい。口縁横撫で。底部は径 3.7cm の穿孔。口縁と肩部内面横撫で。体部外面と体部上位内面荒撫で。体部下指撫で。	4世紀前半	第232図 P.L. 88
11	手捏土器	残高 6.0 (口端と底部除く 1/5)	挟雑物粗。口縁横撫で。体部内外面指撫で。	4世紀か	第232図 P.L. 88
12	手捏土器	底径 1.9 残高 2.9 (口縁～肩部 1/3)	胎土細かい。口縁横撫で。壺のミニチュアか。	4世紀か	第232図 P.L. 88
13	土師器高坏	残高 11.4 (胴部・胴部大半欠損)	大粒の挟雑物含むが少なく、胎土細かい。口縁横撫で。紋りにより整形。内面指撫で、外面荒撫で。	5世紀前半	第232図 P.L. 88
14	土師器高坏	残高 9.5 (脚部中・上位 2/3)	胎土細かい。口縁横撫で。内面上位に紋り痕。内面中・下位指撫で。外面荒撫で。	5世紀	第232図 P.L. 88
15	土師器高坏	残高 9.3 (坯底部の一部と脚部中・上位)	挟雑物細粒。赤褐色。坯底部内面剥落。脚部横撫で、脚部内面中・下位に紋り痕。以下指撫で。外面指撫で。	5世紀後半	第232図 P.L. 88
16	土師器坏	口径(12.0) 残高 4.0 (1/4)	胎土細かく挟雑物少。焼成甘く表面風化。橙色。内面に黒漆付着。口縁横撫で。体～底部内面指撫で。外面荒削り。	6世紀前半	第232図 P.L. 88
17	須恵器長頸 壺蓋	口径 7.8 鉦径 2.3 器高 2.4 (ほぼ完形)	器面荒れ。焼成やや軟質。灰褐色。右回転機械整形。切り離し後縁・返し貼り付け。	8世紀以降	第232図 P.L. 88

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
18	須恵器 (酸化焙焼 成)	口径(18.0) 残高 8.7 (口径～肩部片)	挟雑物細粒。表面のみ還元焙焼成で灰黄色ですが、全体的には酸化焙焼成で焼成不良。口径と肩部外面撫で、肩部内面に青海波印し痕。	平安期か	第232図 P.L. 88
19	軟質陶器鉢	口径(38.8) 残高 4.5 (口径～体部上位破片)	挟雑物細かく、粘土細かい。機械整形。	15世紀か	第232図 P.L. 88
20	軟質陶器鉢	残存 10.9 × 5.4 厚 0.9 (口径～体部上位破片)	挟雑物少なく、粘土細かい。表面吸灰で黒褐色。口径と体部内面横位の撫で。体部外面横位の彫削り。	15世紀後半	第233図 P.L. 88
21	軟質陶器鉢	残存 9.5 × 4.8 厚 0.5 (口径～体部上位破片)	粘土細かい。表面吸灰による黒色処理で暗灰色。口径内縁、内外面横位の撫で。内面下端若干の研削。	近世か	第232図 P.L. 88
22	陶器碗	口径(11.2) 底径 4.5 器高 7.3 (口)	陶胎染付。高台底縁除き灰軸、灰色。外面に山水等の染付け。	18世紀 肥前	第233図 P.L. 88
23	赤生土器 (肩部破片)	残径 3.7 × 2.9 厚 0.5	挟雑物やや粗。にぶい黄褐色。内面荒れてかせる。外面集合沈線による連続弧文。	3世紀後半 博式か	第233図 P.L. 88
24	種子	(破片)	1点	モモ	P.L. 88

4区南北トレンチ

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
1	10銭白銅 貨	径 2.19 × 2.18 厚 0.10 (完形)	中央に4.35mmの円孔開く。腐食進み判読極めて困難。裏面孔周辺と青海波文の一部が見える。	大正9年制定貨。 発行年不明。	第204図 P.L. 88

確認品

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
1	須恵器高 坏	胴部径 4.9 残高 8.1 (坏底部～脚部中位)	挟雑物細粒。灰色。坏部右回軸機械整形。脚部貼り付け。		第204図 P.L. 88

表土(表土・表探・攪乱)

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
1	土器練灰起 し	口径(9.0) 底径(8.6) 器高 3.7 (口)	挟雑物細粒。焼成良好橙色。上端、外面に弱い吸灰。横位の撫で、吸灰孔の一部残る。底面に不明の刷印。	三河土器か。近 現代。7区	第204図 P.L. 88
2	焙烙鍋	口径(37.4) 底径(36.0) 器高 2.7 (破片)	挟雑物少ない。酸化焙焼成で外面吸灰。表面ざらつく。橙色。内外面横位の撫で、内面に内耳貼り付け。	7区	第204図 P.L. 88
3	陶器鉢鉢	底径 8.7 残高 3.3 (腰部下位～底部)	挟雑物少量。軸暗赤褐色。外面浅黄色。内面褐色。外面腰部上位施釉。内面底部中央除き、磨掃きで滑面形成。	4区攪乱	第204図 P.L. 88
4	磁石	径 6.4 × 6.2 厚 4.9 261.4g (完形)	球状の河原石使用。表面端部の一箇所に敲打痕残る。	相模碑石安山岩 6区南表探	第204図 P.L. 88
5	竜水通寶	径 2.49 × 2.50 厚 0.125 (一部腐食し小孔)	竜字の12・13画間相接続し、13画ぬね部右に出て大きく内湾。寶字ハ貝寶。	古竜水 7区	第204図 P.L. 88
6	鉄製工具か	径 1.9 × 1.7 残長 3.9 (尖端欠けか)	鋸出る。横断面円形。台座(長0.2)、体部(径1.4、長2.3)、先端部(径0.6、残長1.4)に別れ、台座底面に径1cmの窪み。	5区表探	第204図 P.L. 88

全城

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
1	赤生土器鉢	口径(15.0) 残高 6.5 (口径1/4)	挟雑物粗だが少量。にぶい橙色。折り返し口径。外面波状文、内面やや細かい磨掃で。	3世紀後半 博式	第266図 P.L. 89
2	土師器高坏	残高 5.0 (坏底部中央から脚部上半)	粘土細かい。にぶい黄褐色。恐らく四圍に径1.0cm程の円孔。坏底部内面指撫で、脚部内面指撫で、外面磨掃き。	4世紀前半	第266図 P.L. 89
3	土師器鉢	口径(18.0) 残高 4.0 (口径1/3)	挟雑物やや粗。にぶい橙色。器面やや変れ、内面一部剥落。口径内外面撫で。外面下位に刷毛目らしい痕跡残る。	4世紀	第266図 P.L. 89

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
4	土師器甕	口径(16.0) 残高 7.7 (口縁～肩部片)	杖雑物組。明褐色。表面吸炭。内外面刷毛目後、口縁横撫で、肩部内面撫で。	4世紀前半	部 266 図 P.L. 89
5	土師器鉢	口径(17.7) 残高 6.4 (口縁～底部破片)	杖雑物細粒。にぶい黄褐色。焼成やや小良。口縁横撫で。体部内外面撫で。	5世紀前半	部 266 図 P.L. 89
6	須恵器高台付甕	口径(12.8) 底径 7.2 器高 5.2 (1/2)	杖雑物やや粗。酸化焙焼成。にぶい黄色。内面に筆着。右回転軸線整形。底面回転赤切り後高台貼り付け。	9世紀前半	部 266 図 P.L. 89
7	須恵器甕	底径(17.2) 残高 8.5 (腰～底部 1/4)	杖雑物組で焼成良好。灰色。体部内外面及び底部内面撫で。底面荒削り。	部 266 図 P.L. 89	
8	杖貫陶器火鉢	残存 6.8 × 6.4 厚 1.1 (体部破片)	生地細かい。内外面吸炭。口縁横撫で。左側盛り上がり把手付くか。体部内面玉位の撫で。外面亀甲形の押し型。	部 266 図 P.L. 89	
9	磁器蓋	口径(10.5) 最大径(11.0) 器 高 2.6 (3)	染付けで唐草文等描かれる。	部 266 図 P.L. 89	
10	土師器台付 壺	底径(9.1) 残高 5.9 (腰底部中央～脚部 1/3)	杖雑物組。焼成やや小良。器面やや変れる。灰白色。変成部内面撫で。台部内外面刷毛目後、内面撫で。	4世紀前半	部 266 図 P.L. 89
11	土師器手捏 土器	口径 5.3 底径 3.3 残高 5.8 (完形)	鉢のミニチュア。杖雑物組。焼成やや小良。にぶい黄褐色。口縁上体～底部内面、対面外下半部撫で。体部外面上半部削り。	4～5世紀	部 266 図 P.L. 89
12	杖貫陶器壺	残存 8.4 × 10.6 厚 0.9 (体部破片)	生地比較的精細い。酸化焙焼成。にぶい橙色。内面横位の撫で。外面鉄線の端割帯 6 列見られる。	部 266 図 P.L. 89	
13	鎌管	径 1.3 × 1.0 残長 3.6 (吸口ラウ破片)	左右に厚平されて菱形。肩部縦やか。	18世紀後半以降	部 266 図 P.L. 89
14	簪	残長 3.1 幅 3.5 厚 0.25 (頭部、一部剥離)	細く削った材(竹か)を 20 枚束ねて半円形を作り、従位中央にも細材を掛け、頭部基部を繊維状のもので横位に 24 回巻いて押さえ、全面に黒漆を塗布。	第 8 章 4・5 節 照	部 266 図 P.L. 89
15	種子	(破片)	1点	クヌギ蒴	P.L. 89
16	種子	(破片)	2点	モモ	P.L. 89

縄文時代遺物

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・国 版番号
J1	縄文土器	残存 2.9 × 3.2 厚 0.6 (胴部片)	波状口縁で、波頂部に竹管挿挿による刻みを付す。波頂部下に平行沈線による菱形モチーフを描く。	講義 a 式 グリッド	部 264 図 P.L. 89
J2	縄文土器	残存 8.0 × 4.3 厚 0.7～1.5 (胴部片)	底部付近の部位。横位 2 条。レンズ状。縦位の浮線を描す。	講義 b 式 縄文遺物包含層	部 264 図 P.L. 89
J3	縄文土器	残存 8.2 × 7.4 厚 1.2 (胴部片)	キャリバー状の器形。横位多段に沈線。縦面紋を施す。	三原田タイプ 14号溝	部 264 図 P.L. 89
J4	縄文土器	残存 9.7 × 10.4 厚 0.9 (胴部片)	沈線により幾何学モチーフを描き、沈線間に華道しL線紋を充填施す。	称名寺1式 12号溝	部 264 図 P.L. 89
J5	尖頭器	残長 5.4 幅 2.2 厚 0.7 7g (茎端部欠損)	細長い菱形を成す。表裏よりの剥離調整。	A+S-C 上水田	部 265 図 P.L. 89
J6	石眼	残長 2.07 幅 1.67 厚 0.31 1.1g (先端欠損)	縦長二等辺三角形の無葉無だが、下端中央に僅かな膨らみを残す。表裏よりの剥離調整。	チャート グリッド	部 265 図 P.L. 89
J7	スクレーパー	長 12.0 幅 4.7 厚 0.8 56.3g (完形)	両片を使用。右側に表裏からの剥離調整。		部 265 図 P.L. 89
J8	スクレーパー	長 5.1 幅 9.2 厚 1.1 62.0g (ほぼ完形。一部剥離)	裏面に自然面を残す薄片使用。表裏からの剥離調整により、幅広い銀杏葉に整形。下縁に刃部形成。	黒色頁岩 4区東西トレンチ	部 265 図 P.L. 89
J9	スクレーパー	径 6.6 × 8.4 厚 1.9 110g (完形)	自然面を残す薄片使用。右側と上縁部に剥離調整で刃部形成。	黒色頁岩 7区	部 265 図 P.L. 89
J10	彫型石器	長 9.4 幅 5.3 厚 2.4 80.0g (所々剥離)	裏面に自然面を残す薄片使用。剥離調整により鈍い刃部を形成。	黒色頁岩	部 265 図 P.L. 89
J11	打製石斧	長 6.25 幅 4.5 厚 1.2 38.0g (上位及び左側縁付近欠損)	残存部は彫形を呈す。裏面に自然面を残し表裏よりの剥離調整。	A+B 下水田	部 265 図 P.L. 89
J12	多孔石	長 13.5 幅 8.2 厚 8.7 960g (完形)	横断面形近三角形の河床礫使用。上面磨礫され、上面に 2 箇所、左側に 8、右側に 4 箇所のくぼみ穿たれる。	粗粒輝石安山岩 6区5面トレンチ	部 265 図 P.L. 89
J13	多孔石	長 21.8 幅 18.1 厚 11.8 3,990g (表面一部欠損)	河床石使用。表裏面に多数の未貫通小孔穿たれる。	粗粒輝石安山岩 6区5面トレンチ	部 265 図 P.L. 89
J14	多孔石	残径 19.5 × 10.4 残厚 8.1 (破片)	河床石使用。残存する 3 面の内に径 31 × 24cm、深さ 5mm 以下の未貫通孔が 9 箇所以上穿たれる。	粗粒輝石安山岩	P.L. 89

非掲載遺物	<p>縄文土器 (154 片、2,804g)、弥生土器蓋 (赤井戸式、1 片、8g)・高坏 (1 片、79g)・台付甕 (3 片、13g)・甕 (赤井戸式、20 片、165g)・甕 (樽式、104 片、1,329g)・甕 (29 片、298g)・甕か壺 (赤井戸式、14 片、103g)・甕か壺 (樽式、5 片、40g)・甕か壺 (赤色塗彩、5 片、68g)・壺 (赤井戸式、9 片、153g)・壺 (樽式、赤色塗彩、2 片、43g)・壺 (樽式、45 片、882g)・壺 (赤色塗彩、13 片、194g)・壺 (26 片、513g)・その他 (赤井戸式、2 片、16g)・その他 (樽式、33 片、332g)、古墳時代前・中期中心の土師器碗 (113 片、826g)・埴 (5 片、51g)・器台 (8 片、238g)・高坏か器台 (15 片、184g)・高坏 (83 片、3,069g)・台付甕 (石田川式、3 片、9g)・台付甕 (155 片、1,563g)・甕 (4,092 片、45,786g)・甕か壺 (3 片、45g)・壺 (1,633 片、34,721g)・小型甕 (26 片、435g)・小型壺 (12 片、134g)・手捏 (1 片、21g)・その他 (2 片、36g)、律令期中心の土師器坏 (鬼高、24 片、121g)・坏 (鬼高中心、15 片、86g)・坏 (1,042 片、4,853g)・坏か碗 (5 片、53g)・碗 (16 片、224g)・高坏 (3 片、126g)・甕 (541 片、2,861g)・小型甕 (3 片、20g)・壺 (5 片、81g)・その他 (2 片、5g)、土師質板 (1 片、21g)、須恵器蓋 (14 片、217g)・坏 (30 片、193g)・坏か碗 (154 片、915g)・碗 (21 片、329g)・高坏や坏 (10 片、25g)・甕 (192 片、4,741g)・小型甕 (1 点、6g)・小型壺 (1 片、5g)・瓶 (1 片、5g)・壺 (7 片、83g)・長頸壺 (3 片、48g)、須恵器か (1 片、4g)、灰釉陶器碗 (4 片、19g)・その他 (1 片、4g)、平瓦 (古代、2 片、256g)、内耳鍋 (20 片、258g)、焙烙鍋か内耳鍋 (34 片、727g)、焙烙鍋 (10 片、146g)、軟質陶器碗 (1 片、16g)・浅鉢 (1 片、28g)・鉢 (30 片、551g)・播鉢 (2 片、16g)・盤 (1 片、16g)・火鉢 (2 片、21g)・甕 (2 片、65g)・その他 (1 片、39g)、施釉陶器蓋 (1 片、3g)・碗 (146 片、1,310g)・碗 (近世、4 片、40g)・皿 (近世、1 片、26g)・段重 (1 片、4g)・須恵器羽釜 (1 片、58g)</p>
-------	--

富田宮田遺跡

※ 弥生時代末から古墳時代初期の土器は明確なものだけを弥生土器とし、その他のものは土師器とした。従って土師器としたものの中に弥生土器が混ざる可能性がある。

※ 非掲載遺物は遺構・構内・部位毎に一回だけ分列した。表末に遺跡で一括したものを掲載した。

※ 掲載遺物の石材鑑定は掲載遺物は飯島隆男先生によるものであるが、非掲載遺物の石材については編者が判断したものである。

1号溝

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・団 版番号
1	礫石	残長 7.9 幅 7.1 厚 6.5 (下半欠損、上端に割傷)	河床礫使用。上面に深い削痕残り。表面の一部と表面左側縁に小さい研磨面。上端と右側縁に残存部に敲打痕残る。	粗粒輝石安山岩 中部拡張部	第 269 団 P.L. 93

旧河道

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・団 版番号
1	土師器椀	口径 11.6 底径 2.6 器高 7.1 (3/4)	挟雑物粗。底面方形。橙色。口縁横撫で。体～底部内面回し午の磨撫で後指撫で。体部外面上端指撫で。以下笊削り。底面指撫で。	4 世紀後半	第 276 団 P.L. 93
2	土師器埴	体部最大径 8.4 残高 6.2 (体～底部)	挟雑物細かい。灰白色。内面と体部外面上位指撫で。体部中位～底部外面笊削り。	5 世紀前半	第 276 団 P.L. 93
3	土師器高坏	残高 9.6 (胴部・上位)	挟雑物細かい。浅黄色。絞りで内面に裾部貼り付け時の段差残る。	5 世紀	第 276 団 P.L. 93
4	土師器高坏	残高 11.0 (坏底部～脚部中位 1/3)	挟雑物やや粗。褐色。脚部絞りで。坏底部～脚部内外面指撫で。脚部横撫で。	5 世紀後半	第 276 団 P.L. 93
5	土師器甕	口径 17.0 底径 6.1 器高 23.2 (体部一部欠損)	挟雑物粗。内外面吸込。浅黄色。口縁横撫で。体部内外面と底部内面磨撫で。底面笊削り。	5 世紀前半	第 276 団 P.L. 93
6	土師器壺	底径 8.3 残高 (13.1) (腰～底部)	挟雑物やや粗。内面荒れる。にぶい黄橙色。腰～底部内面磨撫で。体部外面磨撫で後、磨き様の指撫で。底面笊削り。	4 世紀	第 276 団 P.L. 93
7	土師器高坏	底径 (12.7) 器高 9.0 (脚部 1/3)	挟雑物粗。灰色。裾部横撫でで外面に指痕。上半部内面笊削り。外面指撫で。	中部拡張部	第 276 団 P.L. 93
8	土師器高坏	残高 8.3 (脚部中・上位 3/4)	挟雑物粗やや粗。にぶい黄橙色。絞りで。内面指撫で。外面磨磨き。	中部拡張部	第 276 団 P.L. 93
9	磨石	径 6.9 × 7.7 厚 3.4 (完形)	河床礫使用。表裏に研磨面残るが、上面の研磨面は壁根状に分かれる。	粗粒輝石安山岩 中部拡張部	第 277 団 P.L. 93
10	厚板材	長 (128.0) 幅 6.3 厚 3.3 (上下両側欠損)	板目材。上位では横断面形長方形。下位では表裏やや丸みを持つ。下位に小孔開く。	ヒノキ	第 277 団 P.L. 93
11	角材	径 5.6 × 3.8 残長 54.8 (下側欠損)	幅狭のみかん割り材を使用。芯・樹髄を削って角材を形成。下位表面にチヨウナ痕様のもの見られ、図示はしていないが不明瞭なものを含め 5 箇所ほどの多い刃当直様のもの見られる。	第 277 団 P.L. 284	

As-B 下水田

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・団 版番号
1	たかしこぞう	鉄画片 長 21.8 残幅 5.6 厚 5.0 (破片)	大きなものだけでも 3 片以上に分かれる。内面 L 字状。角材の周囲に沈着か。酸化鉄より土壌目立ち転質。		P.L. 93

グリッド

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・団 版番号
1	礫石	長 11.9 幅 8.5 厚 6.2 510g	河床礫使用。表面に敲打痕残り、下縁縁に弱い研磨痕残る。	粗粒輝石安山岩	第 273 団 P.L. 93
2	礫石	残長 12.6 幅 8.1 厚 5.8 525g (下方欠損)	河床礫使用。上端に敲打痕。上面左上隅に削痕残存。左側と裏面上位に研磨面形成される。	粗粒輝石安山岩	第 273 団 P.L. 93

縄文時代遺物

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・図 版番号
J1	礫石器	長 23.9 幅 5.7 厚 2.5 450g (表面左下側磨離)	河床石使用。上位に研磨により掘り箇所も受ける。表面に研磨面、中位左側の敲打痕は新しいか。	黒緑片岩	第 278 図 P.L. 94
J2	打製石斧	長 10.6 幅 6.3 厚 1.9 165g (完形)	風化進行。表面に自然面残す薄片使用。縁辺は裏面中心の磨離調整。	粗粒輝石安山岩 田河道	第 278 図 P.L. 94
J3	打製石斧	長 9.0 幅 6.1 厚 1.8 110g (完形)	分調型。表面風化。裏面に自然面残る。表裏よりの磨離調整。	黒色頁岩	第 278 図 P.L. 94
J4	打製石斧未製品	長 19.0 幅 8.8 厚 6.1 1,300g (完形)	大型品。裏面に自然面残る。表面・側縁に磨離調整痕。表面上側に小型品分離を意図したと思われる段差あり。	黒色頁岩	第 278 図 P.L. 94
J5	打製石斧未製品化	長 8.9 幅 4.8 厚 0.9 95g (完形)	表面に自然面残る縦長の薄片を用い、左右とも側片中・上位を表裏面から磨離し洋梨状に整形。	黒色頁岩	第 278 図 P.L. 94
J6	割片 (石鎌か)	長 9.3 幅 4.5 厚 1.1 35.0g (完形)	木業上の割片使用。下縁裏面からの磨離調整で、幅 1.4cm、長さ 0.8cm の凸部残る。	黒色頁岩	第 278 図 P.L. 94
J7	割片 (完形)	長 4.7 幅 1.8 厚 0.5 4.8g (完形)	狭長の薄片。上縁の一部に加工の痕跡。	田河道	P.L. 94
J8	石皿	長 30.8 幅 24.5 厚 8.0 (完形) 5,400g	やや大型の河床石を加工。表面の研磨面は使用により 5cm 程度没。下側に片状の削い加工痕跡。裏面も研磨により平坦面形成。多孔石上の印石が残る。脣も研磨による平坦な帯はほぼ一箇。	粗粒輝石安山岩	第 279 図 P.L. 94
J9	石皿	残長 7.5 幅 18.0 厚 6.7 1,550g (中位破片、右側やや欠け)	河床礫使用。表面に研磨面形成。研磨面は若干窪みを持つ。	デイスайト	第 278 図 P.L. 94
J10	磨石 (完形)	長 9.2 幅 7.5 厚 6.5 490g (完形)	河床礫使用。表面の一部と裏面に研磨面形成される。	粗粒輝石安山岩	第 279 図 P.L. 94
J11	磨石	残長 11.4 幅 10.5 厚 3.2 (下半欠損) 520g	河床礫使用。表面に研磨面形成される。	粗粒輝石安山岩	第 279 図 P.L. 94
J12	凹石	残長 11.0 幅 9.4 厚 4.2 (下縁磨落) 410g	河床礫使用。表裏に敲打痕による窪み作られる。上端に敲打痕残る。	粗粒輝石安山岩 田河道	第 279 図 P.L. 94
J13	凹石	残長 10.7 残幅 8.6 厚 4.5 (下半欠損) 590g	河床礫使用。表裏面に敲打による凹部作られ、裏面に研磨面形成。	粗粒輝石安山岩 田河道	第 279 図 P.L. 95
J14	多孔石	残長 18.4 残幅 14.6 厚 8.4 (側縁 1/2 欠損) 2,550g	河床石使用。表裏面敲打により平たく加工され、多数の未貫通孔穿たれる。	粗粒輝石安山岩	第 279 図 P.L. 95
J15	多孔石	長 17.9 幅 13.4 厚 8.0 20,545g (完形)	L 字形の河床石使用。裏面に研磨面形成され、表裏面に複数の孔が穿たれる。左右側に研磨痕残る。	粗粒輝石安山岩 田河道	第 279 図 P.L. 95
J16	白石	長 29.59 幅 19.6 厚 20.2 18,400g (完形)	横前面形三角形の大型の河床礫使用。上面とに研磨面が形成され、左側面に研磨面形成。披熱による磨離と研磨痕残る。	粗粒輝石安山岩	第 279 図 P.L. 95

非縄文遺物	縄文土器 (47 片、721g)、弥生土器類 (4 片、21g)、古墳時代前・中期中心の土師器類 (26 片、171g)・高坏 (9 片、396g)・器台 (2 片、24g)・台付壺 (1 片、26g)・壺 (218 片、2,042g)・小型壺 (2 片、16g)・壺 (197 片、2,078g)・古式土師器か (6 片、23g)・律令期中心の土師器坏 (68 片、285g)・壺 (96 片、328g)・須恵器碗 (4 片、24g)・坏か碗 (24 片、141g)・高坏 (1 片、39g)・壺 (16 片、555g)・その他 (1 点、3g)・内耳鍋 (2 片、23g)・焙烙鍋 (1 片、14g)・軟質陶器鉢 (1 片、15g)・火鉢 (1 片、22g)・施軸陶器碗 (4 片、27g)・鉢 (1 片、5g)・壺 (1 片、3g)・その他 (1 片、1g)・陶器蓋 (1 片、3g)・碗 (2 片、9g)・壺 (1 片、6g)・磁器碗 (1 片、12g)・磨石か (2 片、441g)・頁岩割片 (41 点、1,772g)・黒色安山岩割片 (1 片、44g)・チャート割片 (2 片、20g)・煙管首直 (1 片、4g)・鉄滓 (1 片、8g)・ガラス瓶 (本舗山田安眠ルート目録、近代、1 点、17g)・耕作土等土壌サンプル (9)・須恵器羽釜 (1 片、7g)				
-------	--	--	--	--	--

富田宮下遺跡出土遺物一覧

- ※ 弥生時代末から古墳時代初期の土器は明確なものを除き土器とし、その他のものは土師器とした。従って土師器としたものの中に弥生土器が混ざる可能性がある。
 ※ 非同軌遺物は遺構・構内・部位毎に一回だけ分類した。表末に遺跡で一括したものを掲載した。
 ※ 同軌遺物の石材鑑定は同軌遺物は飯島勝男先生によるものであるが、非同軌遺物の石材については編者が判断したものである。

1号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	土師器鉢	底径 20 残高 7.8 (腰～底部 1/3)	挟雑物粗粒。片岩含むか。にぶい赤褐色。焼成良好。内外面横位の撫で。	9世紀末～10世紀中葉	第282回 P.L.101
2	須恵器高台付皿	口径 13.4 底径 7.8 器高 5.9 (口縁一部欠損、ほぼ完形)	挟雑物やや少なく、焼成不良。一部酸化銅焼成。右回転機軸整形。底面切り離し後底部磨削り。高台貼り付け時に撫で。	10世紀中葉	第282回 P.L.101
3	男瓦	残径 10.45 × 15.1 厚 2.0 (破片)	挟雑物やや粗粒。焼成やや良好。明赤褐色。表面に布目痕残り、表面は指撫で後一部に格子目付き。縁縁は磨削り。	律令期	第283回 P.L.101
4	龍石	長 32.1 幅 18.0 厚 17.2 9,600g (最大破片)	横断面三角形の。河床石使用。底面に若干のハワリと研磨痕入り。中・下位平坦に加工か。下位中心に被熱し吸炭。	竜夷の立石。 粗粒輝石安山岩	第283回 P.L.101
5	龍崎茶材	最大破片 残長 9.3 残幅 6.8 残厚 2.8 (10片程度の破片)	挟雑物粗粒が少なく、きめ細かい。焼成やや軟。にぶい橙色。表面・内面にスヤの圧痕多く見られる。表面平らだが凹凸を成す。内面に一葉の吸炭。		P.L.101

2号住居

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	土師器高坏	胴部径 3.6 残高 14.7 (坏部下～胴部中位)	挟雑物雑粗。焼成やや雑。にぶい褐色。坏腰部に突帯状の横一周。坏部内面指撫で、外面磨き様の磨撫で。胴部内面上位に紋り痕、中・下位磨撫で、外面磨削り。	5世紀前半	第284回 P.L.101
2	土師器高坏	胴部径 15.6 残高 9.2 (脚部 1/2)	挟雑物やや粗。明赤褐色。胴端部横撫で。脚部内面磨撫で、外面磨削り。	5世紀前半	第284回 P.L.101

1号溝

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	土師器鉢	口径 (10.4) 底径 4.3 器高 7.1 (口縁部の多くと一部体部欠損)	挟雑物少。にぶい赤褐色。器面荒れる。口端部横撫で。口縁下半～底部内面指撫でか、外面刷毛目後磨撫で。	4世紀前半	第286回 P.L.101
2	土師器台・高坏	残存 4.3 × 4.2 残高 4.1 (脚部破片)	生地細かい。にぶい褐色。上下に部定 2.5cm 離し、左右に部定 3cm ずらした、径 1cm 程と部定される上下 2 段の内孔穿たれる。内面指撫で、外面磨削り。	4世紀か	第286回 P.L.101
3	土師器高坏	胴部径 15.4 残高 13.9 (坏体～胴部 1/3)	挟雑物少。橙色。坏部内外面と脚部外面磨削り。脚部内面上端部に紋り面跡残り、以下磨撫で。内外面裾端部横撫で。	5世紀前半	第286回 P.L.101
4	土師器甕	底径 7.4 残高 19.8 (体～底部 1/2)	挟雑物やや粗。にぶい赤褐色。焼成良好。内面に吸炭。内面磨撫で後指撫で。体部外面磨削り。底面磨削り。	4世紀後半か	第286回 P.L.101
5	土師器埴	胴部最大径 9.0 残高 6.2 (体部 1/2)	挟雑物やや多。にぶい黄褐色。内面磨撫で、外面体部上位刷毛目。下位磨削り、底面磨撫で。	4世紀前半	第286回 P.L.101

4号溝

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	土師器鉢	口径 (15.3) 残高 (5.2) (口縁～体部 1/3)	挟雑物少量。橙色。口縁横撫で。体部内外面横位の後、放射状の磨削り。	4世紀前半か	第289回 P.L.101
2	土師器鉢	口径 (11.2) 残高 5.2 (口縁から腰部 1/4)	挟雑物少量。にぶい黄褐色。内外面横位の指撫で。腰部内面下位不定方向への指撫で。	4世紀前半か	第289回 P.L.101
4	土師器埴	口径 (8.8) 残高 8.6 (口縁～胴部 1/4)	挟雑物やや粗だが少量。焼成やや甘い。にぶい黄褐色。口縁横撫で。体部内面指撫で、外面磨き様の指撫で。	5世紀前半	第289回 P.L.101

No.	資料名称	測定値 (cm)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・図 版番号
		(残存状況)			
3	土師器小型壺	底径(6.0) 残高 2.2 (腰～底部 1/4)	扶雑物やや粗。にぶい黄褐色。内面まわし年の指撫で。外部内面指撫でまたは指撫で。底面指撫。	4世紀	部 289 図 P.L 101
5	土師器罎	口径(9.0) 底径(4.0) 器高 9.0 (1/6)	扶雑物やや粗。焼成やや甘い。明赤褐色。口縁指撫で。内部内面指撫で。外面肩部指撫で。胴部以下指撫。	5世紀前半	部 289 図 P.L 101
6	土師器罎	胴部最大径(10.0) 残高 5.0 (体～底部 1/4)	扶雑物細粒。胴部内外面横位の指撫で。腰部から底部内面左回りの指撫で。底面指撫。	5世紀前半	部 289 図 P.L 102
7	土師器高坏	口径(20.2) 残高 5.6 (坏～体部破片)	扶雑物少ないが粗。焼を有す。口縁指撫で。外部外面指撫で。内外面全体に放射状の磨磨き。	4世紀前半	部 289 図 P.L 102
8	土師器高坏	口径(18.6) 残高 5.2 (坏部 3/4)	扶雑物細粒。にぶい黄褐色。口縁指撫で。内部内外面指撫で。坏底部内面指撫で。	4世紀前半	部 289 図 P.L 102
9	土師器高坏	口径 18.6 残高 10.0 (口径～脚上端部 1/2)	扶雑物比較的細かい。にぶい黄褐色。口縁と体部上位内面指撫で。体一脚部外面と体部下平から底部内面刷毛目後、脚部外面指撫で。脚部内面指撫で。	4世紀前半	部 290 図 P.L 102
10	土師器高坏	瓶部径(12.4) 残高 10.5 (坏底部一脚部 1/4)	扶雑物やや粗。にぶい褐色。坏腰部に段。坏内外面指撫で。脚部絞り。内面指撫で。外面磨き様の指撫で。瓶部指撫で。	5世紀前半	部 290 図 P.L 102
11	土師器高坏	瓶部径 13.0 残高 9.3 (坏底部中央～脚部 1/2)	扶雑物少なく、焼成多少甘い。褐色。坏底部内面指撫で。外面指撫で。脚部絞りで内面上位指撫で。中位指撫。外周中～上位磨磨き。瓶部指撫で内面に粘上粒付着。	5世紀前半	部 290 図 P.L 102
12	土師器高坏	口径(16.6) 底径(15.0) 器高 13.5 (1/2)	扶雑物粗粒。褐色。口縁指撫で。体～底部内外面指撫で。脚中～上位内面指撫で。外面磨磨き。瓶部指撫で。	5世紀後半	部 290 図 P.L 102
13	土師器高坏	口径(19.8) 残高 14.2 (瓶部除く 1/2)	扶雑物やや粗。褐色。坏底部に凸部作り脚に差し込み。口縁と体部内面指撫で。底部内面指撫で後放射状の指撫で。外部外面～底面指撫で。脚部内面指撫で。外面粗い磨磨き。	5世紀後半	部 290 図 P.L 102
14	土師器高坏	残高 8.2 (坏底部中央～脚部上半部)	扶雑物細かく、坏底部密。にぶい褐色。坏底部内面指撫で。脚部内面指撫で。外面粗い磨磨き。	5世紀	部 290 図 P.L 102
15	土師器高坏	底径(14.7) 残高 3.6 (脚部下位 1/4)	扶雑物細かく、焼成良好。にぶい黄褐色。脚部内面指撫。外面指撫で。瓶部指撫で。	5世紀	部 290 図 P.L 102
16	土師器高坏	口径(10.4) 残高 4.2 (口縁破片)	扶雑物細かい。焼成比較的良い。にぶい黄褐色。内外面横位の指撫で。	4世紀	部 290 図 P.L 102
17	土師器壺	底径 5.2 残高 20.3 (頸～底部 2/3)	扶雑物粗。にぶい赤褐色。上げ底。口縁指撫で。内面肩～腰部上位指撫で。腰部中位～底部指撫で。外部外面指撫で。底面指撫で。	4世紀後半	部 290 図 P.L 102
18	土師器壺	底径 6.4 残高 3.5 (頸部下位～底部 1/2)	扶雑物粗。明赤褐色。内外面やや吸炭。僅かに上げ底。内面左回りの指撫で。外面指撫。	4・5世紀	部 290 図 P.L 102
19	土師器壺	底径(6.4) 残高 3.5 (頸下部～底部 1/3)	扶雑物やや粗。赤褐色。僅かに上げ底。内面左回りの指撫で。外面指撫。	4・5世紀	部 290 図 P.L 102
20	土師器壺	底径 3.1 残高 4.3 (腰～底部 1/2)	扶雑物やや粗。赤褐色。底面僅かに上げ底。内面回し年の指撫で。外面指撫。	4・5世紀	部 290 図 P.L 102
21	土師器壺	底径 5.4 残高 24.3 (頸～底部 2/3)	扶雑物粗。黄褐色。焼成良好。上げ底。内面体部刷毛目後左肩への指撫で。頸～底部放射状の指撫で。外面体部指撫で。腰部下位指撫で。底面指撫で。	5世紀か	部 291 図 P.L 102
22	土師器壺	底径 5.4 残高 11.2 (腰～底部 1/2)	扶雑物やや細かい。褐色。上げ底。内面回し年の指撫で。腰部外面指撫で。底面左回りの指撫で。	4世紀か	部 291 図 P.L 102
23	土師器壺	口径(16.0) 残高 10.8 (口縁～肩部片)	扶雑物粗。焼成良好。にぶい黄褐色。口縁指撫で。肩部内面指撫で後粗い磨磨き。外面指撫で。	5世紀後半か	部 291 図 P.L 102
24	土師器壺	底径 7.0 残高 3.8 (頸部下位～底部)	扶雑物少量。褐色。腰～底部内面左回りの刷毛指撫で。腰部外面指撫後指撫で。底面指撫。	4世紀か	部 291 図 P.L 102
25	土師器小型壺	胴部最大径(12.7) 残高 9.4 (体部 1/3)	扶雑物細かいもの多く、焼成やや甘い。褐色。内面指撫で。外面指撫後好部指撫で。	4世紀後半	部 291 図 P.L 102
26	小型付付壺	口径 7.5 残高 5.7 (頸部、口縁一部欠損)	扶雑物細粒。外面の手は保付着。にぶい褐色。口縁指撫で。体部内面指撫で。頸部～腰部外面指撫。	4世紀前半	部 291 図 P.L 102
27	土師器小型壺	口径(8.8) 底径 4.0 器高 8.7 (口縁 2/3 欠損)	扶雑物粗。にぶい赤褐色。有段口縁。底面中央径 1.6cm 程の上げ底。口縁指撫で。体部内面上位不明、下位指撫で。頸～腰部磨磨き。底面指撫で。	4世紀前半	部 291 図 P.L 102
28	土師器小型壺	口径(11.0) 底径 3.6 器高 9.1 (1/2)	扶雑物やや粗。赤褐色。焼成良好。上げ底。口縁指撫で。内面体～底部指撫で後好部指撫で。外部外面刷毛目後指撫で。底面指撫。	4世紀後半	部 291 図 P.L 102

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
29	土師器小型 壺	口径(12.0) 残高 3.6 (口縁～肩部片)	挟雑物細粒。にぶい黄褐色。内外面横撫で後尻磨き。	4世紀	第291図 P.L.102
30	土師器小型 壺	口径(12.4) 残高 6.2 (口縁～肩部)	挟雑物細粒。焼成やや甘い。浅黄褐色。口縁横撫で。肩部内面に髹残り指撫で。外面指撫でか。	5世紀前半	第291図 P.L.102
31	土師器小型 壺	胴部最大径(10.4) 残高 6.3 (頸～腰部片)	挟雑物細粒。内面に輪積み痕残る。にぶい黄褐色。口縁横撫で。体部内面指撫で。外面上半磨き様の撫で。下半磨削り。	4世紀前半	第291図 P.L.102
32	土師器小型 壺	胴部最大径(8.9) 残高 5.9 (頸～腰部片)	挟雑物少量。にぶい黄色。内外面吸炭。内面に輪積み痕残る。内面指押し状の撫で。外面刷毛め後。下位中心に指撫で。	4世紀前半	第291図 P.L.102
33	土師器小型 壺	最大径 14.6 残高 7.4 (体部 1/4)	挟雑物やや粗。にぶい褐色。内面上位に輪積み痕見られ、横位の指撫で。指頭直残る。外面肩・胴部指撫で。腰部磨削り	5世紀か	第291図 P.L.103
34	手捏土器	口径(6.6) 底径 4.0 器高 5.3 (口)	挟雑物細粒。にぶい黄褐色。変形。口縁横撫で。体～底部内面指撫で。体部外面磨削り後指撫で。底面撫で。	4・5世紀	第291図 P.L.103
35	土師器壺	口径(15.0) 残高 4.6 (口縁～肩部上端破片)	挟雑物比較的細かく。焼成良好。口縁横撫で。肩部内面磨削り。外面磨削り。	6世紀か	第291図 P.L.103
36	土師器杯	口径(13.0) 底径(10.0) 器高 (3.8) (口縁～底部破片)	挟雑物少量。褐色。口縁横撫で。体～底部内面磨削りか。体部外面指撫で。底面磨削り。	9世紀前半	第291図 P.L.103
37	陶器足形	口径(36.5) 残高 10.7 (口縁破片)	挟雑物粗。にぶい褐色。口縁内外面すす付着。内外面横位の撫で。体部上位に径 2.9cmの円孔穿たれる。	中・近世	第291図 P.L.103
38	石製模造品 (鏡)	径 2.4 × 2.3 厚 0.2 (ほぼ完形。裏面若干割離)	表裏両面に細顆粒磨きされるが、表面は明瞭な研着面残る。径 1mmの小孔 2箇所穿たれる。	紀統岩	第292図 P.L.103

1号井戸

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	横楕	径 10.8 × 9.3 長(25.2) (胴端部欠損)	芯持ち材加工。柄は芯よりややずれる。本体削皮残り、部分的に削痕残る。柄は削り出し。	ヒヤラギ	第293図 P.L.103
2	竹	径 3.1 × 2.4 長 31.9 (完形か)	先端斜めに刃物で切断。元節で水平に切断か。節3箇所あり。何れも抜かれる。最上位節は切断途中にあって内面きれいに削られる。	真竹 井戸神の息吹き の竹か	第293図 P.L.103

1号風倒木

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	弥生土器壺	口径 14.8 残高 26.4 (口縁～肩部 1/2 と胴部 1/4)	挟雑物少ない。にぶい褐色。折り返し口縁。口端部横撫で。口縁内外面刷毛目。体部内面磨削り。体部外面染葉文1段と2段以上の波状文。	3世紀末～4世紀 初頭	第296図 P.L.103
2	土師器高坏	口径 22.6 胴部 径 12.6 器高 14.5 (口縁-脚部一部欠損。ほぼ完形)	坏底部中心に内面一部剥落。挟雑物少量。にぶい褐色。脚部に 1.9 ～ 2.4cm 離れた上下一組の径 1cm 程度の円孔三方に開く。坏内外面と脚部外面磨削り。脚部内面横位の指撫で。	4世紀前半	第296図 P.L.103
3	土師器高坏	胴部径 3.2 残高 7.2 (坏底部中央～脚部上半)	今日少ない。褐色。色調明るい。脚部中心に五方向と見られる円形の透かしの残決三箇所残る。坏底部内面磨削り。坏底部外面と脚部内外面指撫で。	4世紀	第297図 P.L.103
4	土師器片口	口径 8.5 底径 6.6 器高 8.8 (口縁僅かに欠損。概ね完形)	挟雑物細かい。褐色。折り返し口縁で一箇所引き出して片口整形。口縁～体部と底部内面細かい磨削り。底面磨削り。	4世紀後半か	第297図 P.L.103
5	土師器小型 壺	口径 12.2 底径 4.0 器高 17.0 (口縁等一部欠損。ほぼ完形)	挟雑物粗。にぶい褐色。外面と口端内面吸炭。口縁内外面と体部外面刷毛目。内面体部磨削り。腰～底部指撫で。底面上げ底気味で撫で。	4世紀後半	第297図 P.L.103
6	土師器小型 壺	口径(8.7) 底径 5.2 器高 14.9 (口縁 5/4 欠損)	挟雑物粗少量。外面器面半ば変れ。にぶい褐色。口縁内外面と体部外面磨削り。体～底部内面磨削りか。底面撫で。	4世紀後半	第297図 P.L.103
7	土師器小型 壺	口径 10.4 底径 3.8 器高 7.5 (口縁～体部一部欠損)	挟雑物少なく。生地細かく軽い。上げ底。口縁横撫で。体～底部内面磨削りか。底部に指頭直残る。体部外面上半刷毛目。下半磨削り。底面撫で。	4世紀後半	第297図 P.L.103
8	軟質陶器火 鉢	底径 18.0 残高 8.9 (体部下端と底部外周破片)	挟雑物少ない。黄灰色。内面に部分的に集着。内外面撫で。外面底部に曜文様の密集した彫刻。	中井か	第297図 P.L.103

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
9	磨石	長14.5 幅8.7 厚6.0 (下端部最打痕の一部欠損)	やや大きめの河床礫使用。下部部に大きな最打直痕残る。	粗粒輝石安山岩	第297国 P.L.104
10	磨石	径8.3×7.8 長16.1 (完形)	直方体形の河床石使用。下面に研磨面形成され、研磨面と頂部に若干の最打直痕残る。	粗粒輝石安山岩	第297国 P.L.104

1区

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	赤生土器(土埴)	残存 6.5×6.8 厚0.7 (土埴破片)	块雑物やや粗。橙色。内面横位の磨磨き、外面波状文で頸部に條状文。	3世紀後半	第298国 P.L.104
2	土師器	底径(7.8) 残高17.4 (胴下半～底部2/3)	内面荒れる。块雑物粗。橙色。体～底部内面回し午の刷毛撫でか磨撫で。体部外面と底面磨磨き。	4世紀	第298国 P.L.104
3	陶器灯明皿	口径9.4 底径4.2 器高2.3 (1/3)	回転輪軸整形。表裏面粘結。	瀬戸・美濃 19世紀前・中葉	第298国 P.L.104
4	石臼(上臼)	径26.1×24.4 厚10.6 5800g (1/6)	上面縁部にハワリ調整痕残る。側面に上相型の挽き手付き、径3.3cmの各柱状の孔穿たれる。磨面磨耗甚し分測確認不能。	粗粒輝石安山岩	第298国 P.L.104
5	磨石	残長10.3 幅5.3 厚3.4 (下半欠損)	棒状の河床石使用。左右側面に研磨面形成。特に右側面顕著。表面は剥離面だが、研磨痕残る。	粗粒輝石安山岩	第298国 P.L.104
6	寛永通寶(四文銭)	径2.78×2.79 厚0.12 (完形)	表面研磨され偏平。裏面に管21成。寛字12・13画順、寶字貝画末尾八貝寶。	新寛永。	第298国 P.L.104
7	ガラス瓶蓋	径4.7 器高5.1 (蓋)	若干暗黄色掛かる透明なガラス使用。型使用し、中空。気泡入る。バリ残る。経径2.1、差込部径2.3、高さ1.6。	近代か	第298国 P.L.104

5号土坑

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
1	楕形石器	長7.3 幅5.8 厚1.5 75.0g (完形)	表面に自然面を残す薄片使用。裏面方向より中心の剥離調整で整形。下縁に鈍角な刃部形成。	黒色頁岩 5号土坑	第294国 P.L.104

縄文時代遺物

No.	資料名称	測定値 (cm) (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	国・国 版番号
J 1	尖頭器	残長7.7 幅3.1 厚1.04 (尖端欠損)	板長の薄片使用。表裏面からの剥離調整。	黒色頁岩 草創期、4号溝	第300国 P.L.105
J 2	楕形石器	長11.1 幅6.2 厚2.9 (完形)	やや大型。裏面に自然面を残す。裏面よりの剥離調整で整形し、下縁に鈍角な刃部形成。	黒色頁岩	第300国 P.L.105
J 3	楕形石器	長8.0 残幅4.7 厚1.7 (縁辺部一部欠損)	表面に自然面を残す薄片使用。裏面方向よりの剥離調整で整形。下縁に鈍角な刃部形成。	黒色頁岩 1号住居	第300国 P.L.105
J 4	楕形石器	残長8.7 残幅5.8 厚2.0 (下位欠損)	身製品の欠損品か。表面と右側面に自然面残す。薄片使用。裏面中心の剥離調整。	黒色頁岩 4号溝	第300国 P.L.105
J 5	打製石斧	残長6.9 残幅5.9 厚1.96 (下位欠損)	分銅型石斧の欠損品。裏面に自然面残る薄片を使用。表裏面より剥離調整。	黒色頁岩	第300国 P.L.105
J 6	打製石斧	長16.6 幅7.7 厚2.8 (右上欠損)	大型品。鋸型に近い。表裏、左右、下縁より剥離調整。	黒色頁岩 4号溝	第300国 P.L.105
J 7	白石	長25.8 幅17.7 厚10.5 (1/2以上欠損)	河床礫使用。被熱痕あって粘土部分的に付着。一面に研磨面形成される。覆軸石への転用品か。	粗粒輝石安山岩 1号住居	P.L.105
J 8	多孔石	径17.5×14.2 残厚10.4 (裏面剥落)	河床石使用。表面と下面平滑に加工され、径2cm以下の浅い未貫通孔多数開く。	粗粒輝石安山岩 1号井戸	第301国 P.L.105

旧石器時代遺物

No.	資料名称	測定値 (cm)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図・図 版番号
1	フレーク (残存状況)	長 4.76 幅 1.88 厚 1.10 7.4g 〔下端一部欠損〕	縦長の剥片。上位の稜を剥離により作り出す。	黒曜石	第 304 図 P.L. 116
2	石刃	長 8.98 幅 3.06 厚 1.05 24.6g (ほぼ定形)	刃部の調整等は見られない。	黒色頁岩	第 304 図 P.L. 116
3	フレーク (定形)	長 2.70 幅 2.0 厚 0.6 3.8g	縦長の剥片。	チャート	第 304 図 P.L. 116
4	石核 (定形)	長 3.80 幅 3.53 厚 2.85 21.9g	フレーク (5) を剥離する。	チャート 5 と接合	第 304 図 P.L. 116
5	フレーク (定形)	長 2.19 幅 2.16 厚 0.81 3.1g	石核 (4) より剥離している。	チャート 4 と接合	第 304 図 P.L. 116

非掲載遺物	縄文土器 (53 片, 428.6g)、弥生土器高坏 (赤色塗彩, 1 片, 15g)・甕 (赤井戸式, 39 片, 483g)・甕 (樽式, 13 片, 113g)・甕 (4 片, 27g)・壺 (赤井戸式, 6 片, 87g)・壺 (樽式, 16 片, 246g)・壺 (赤色塗彩, 2 片, 13g)・壺 (1 片, 8g)、古墳時代前・中期中心の土師器椀 (26 片, 259g)・埴 (5 片, 104g)・高坏 (52 片, 609g)・高坏か器台 (34 片, 431g)・台付甕 (6 片, 65g)・甕 (1,056 片, 7,637g)・小型甕 (23 片, 306g)・壺 (416 片, 4,302g)、律令期中心の土師器坏 (110 片, 422g)・坏か碗 (1 片, 2g)・椀 (2 片, 18g)・甕 (210 片, 845g)、須恵器坏 (4 片, 64g)・坏か碗 (9 片, 62g)・坏か碗 (9 片, 62g)・碗 (3 片, 91g)・甕 (7 片, 393g)、内耳鍋 (7 片, 111g)、内耳鍋か焙烙鍋 (10 片, 57g)、軟質陶器鉢 (1 片, 12g)、焼塩釉薬陶器碗 (8 片, 73g)・急須 (1 片, 13g)・甕 (1 片, 58g)・その他 (2 片, 12g)、陶器碗 (2 片, 10g)・播鉢 (1 片, 63g)・甕 (1 片, 4g)、磁器碗 (1 片, 44g)・徳利 (近世, 1 片, 45g)、素焼鉢 (1 片, 33g)・火鉢 (1 片, 29g)、龜背茶材か (2 片, 14g)、黒曜石剥片 (6 片, 18g)、黒色安山岩剥片 (1 片, 4g)、頁岩剥片 (26 片, 330g)、チャート剥片 (3 片, 28g)、片岩礫 (被熱, 1 点, 12,000g)、鉄滓片 (1 片, 8g)、銅片 (4 片, 4g)、更新世土壌サンプル他 (17)
-------	---

第24表の1 富田新井遺跡遺構一覧

遺構番号	区	面	規模(長×幅×深) 数字のみは(m)	時期	遺物	備考
1号(竪穴)住居	2区	1面	400×332×46	平安時代前期	土師器、須恵器、石製紡錘車、他	
2号(竪穴)住居	2区	1面	438×(356)×48	奈良時代	土師器、須恵器、磁石	12号住居と重複
3号(竪穴)住居	2区	1面	(280)×(352)×47	奈良時代	土師器、須恵器、打製石斧、他	9号住居を切る
4号(竪穴)住居	2区	1面	308×(181)×47	奈良時代	土師器、須恵器、榎葉瓦、他	11号住居に切られる
5号(竪穴)住居	2区	1面	(319)×(490)×56	平安時代前期	土師器、須恵器、円石、他	10号住居を切る
6号(竪穴)住居	1区	1面	312×(361)×32	古墳時代前期	土師器	
7号(竪穴)住居	1区	1面	(305)×(287)×0	古墳時代前期	土師器	
8号(竪穴)住居	2区	1面	554×437×45	奈良時代	土師器、須恵器、石鏝、他	1号井戸に切られる
9号(竪穴)住居	2区	1面	(280)×(352)×47	奈良時代	土師器、須恵器、石製台座、他	3号住居に切られる
10号(竪穴)住居	2区	1面	(125)×(91)×72	平安時代以前	なし	5号住居に切られる
11号(竪穴)住居	2区	1面	(386)×(207)×53	奈良時代	土師器、須恵器、炭化物、他	4号住居を切る
12号(竪穴)住居	2区	1面	(315)×308×50	奈良時代	土師器、須恵器、こも礫み石、他	3号井戸に切られる
13号(竪穴)住居	3区	1面	(49)×(39)×(32)	不特定	土師器片1片	
14号(竪穴)住居	3区	1面	(176)×(81)×40	不特定	須恵器片1片	
15号(竪穴)住居	2区	1面	348×328×31	奈良末～平安初	土師器、須恵器、他	19号住居を切る
16号(竪穴)住居	2区	1面	348×266×35	平安時代前期	土師器、須恵器、他	17・18号住居を切る
17号(竪穴)住居	2区	1面	553×407×44	奈良時代	土師器、須恵器、埴輪か、他	16・18号住居に切られる
18号(竪穴)住居	2区	1面	420×362×42	奈良末～平安初	土師器、須恵器、円石、他	17号住居を切る
19号(竪穴)住居	2区	1面	(331)×(335)×28	平安時代か	土師器、須恵器、円石、他	15号住居に切られる
20号(竪穴)住居	4区	1面	405×273×41	奈良末～平安初	土師器、須恵器、円石、他	焼失家屋か
21号(竪穴)住居	4区	1面	(463)×(299)×	奈良末～平安初	土師器、須恵器、磁石、石鏝	
22号(竪穴)住居	4区	1面	482×308×26	飛鳥末～奈良初	土師器、須恵器、磁石、他	3号溝に切られる
23号(竪穴)住居	4区	1面	296×303×	奈良時代	土師器、須恵器、石製紡錘車	焼失家屋に切られる
24号(竪穴)住居	4区	1面	(305)×(406)×20	不特定	土師器14片	4号溝に切られる
25号(竪穴)住居	4区	1面	(185)×(139)×16	不特定	土師器3片	
26号(竪穴)住居	3区	1面	(348)×(176)×25	奈良末～平安初か	土師器、須恵器	
27号(竪穴)住居	2区	1面	(330)×652×28	古墳時代初頭	土師器、須恵器、磁石	
28号(竪穴)住居	1区	1面	(228)×(77)×17	不特定	土師器、輪軸陶器	
29号(竪穴)住居	1区	1面	570×(375)×41	平安時代前期	土師器、須恵器	焼失家屋か
30号(竪穴)住居	2区	1面	(243)×(222)×56	奈良時代か	土師器、他	
31号(竪穴)住居	2区	1面	347×336×8	不特定	多孔石、円石、磨石	
32号(竪穴)住居	2区	1面	(164)×(344)×25	奈良時代	土師器、須恵器	9号溝に切られる
33号(竪穴)住居	2区	1面	398×335×22	平安時代前期	土師器、須恵器、磁石、他	10号溝を切る
1号掘立柱建物	3区	1面	(277)×349	不特定	土師器2片	
2号掘立柱建物	2区	1面	420×456	平安時代以前	土師器	2号溝と重複
3号掘立柱建物	4区	1面	500×627	中世	なし	1号溝と重複
5号掘立柱建物	3区	1面	66×840	飛鳥～平安時代	土師器、須恵器	6号掘立柱建物と重複
6号掘立柱建物	3区	1面	(350)×708	飛鳥～平安時代	なし	6号掘立柱建物と重複
7号掘立柱建物	3区	1面	272	奈良時代以降	土師器	焼失家屋の可能性
8号掘立柱建物	3区	1面	410×482	平安時代以前	土師器	22号土坑と重複
9号掘立柱建物	3区	1面	750×995	奈良・平安時代	土師器、須恵器、灰輪陶器	3面か4面の底付き
1号溝列	4区	1面	405、618、586	中世か	土師器、須恵器	3列あり
2号溝列	3区	1面	340	中世か	なし	掘立柱建物の一部か
1号溝	2区	1面	11.3m×120×40	奈良時代以降	土師器、須恵器、磨石、他	2号住居・4号土坑を切る
2号溝	2区	1面	8.1m×140×47	飛鳥～平安時代か	土師器、須恵器、磨石、他	流木の痕跡
3号溝	4区	1面	7.4m×108×	奈良時代以降	土師器、須恵器、炭化物、鉄滓	
4号溝	4区	1面	4.8m×74×	奈良時代以降	土師器、須恵器	3号溝から分岐
5号溝	2区	1面	7.5m×50×14	奈良時代以降	土師器	道の轉漕の可能性
6号溝	2区	1面	8.7m×80×18	奈良時代以降	須恵器、貝貝割片	道の轉漕の可能性
8号溝	1区	1面	9.2m×48×15	平安時代か	土師器片4片	
9号溝	2区	1面	14.6m×78×35	平安時代末以降	土師器、輪軸陶器、磁石	32号住居・10号溝を切る
10号溝	2区	1面	11.4m×78×18	平安時代以前	土師器4片、須恵器1片	33号住居に切られる
1号井戸	2区	1面	142×114×206	奈良時代以降	土師器、須恵器	井筒型
2号井戸	1区	1面	92×80×98	奈良時代以降	土師器2片、磁石	井筒型
3号井戸	2区	1面	133×132×182	平安時代	土師器、須恵器、裏面瓦	井筒型、あぐり形成
4号井戸	2区	1面	114×105×175	不特定	土師器1片、石鏝割片1片	井筒型

第24表の1 富田新井遺跡遺構一覧

遺構番号	区	面	規模(長×幅×深 数字のみはcm)	時期	遺物	備考
1号土坑 / 41号土坑			第3表(100頁)参照		1号土坑:土師器、須恵器、打製石斧 2号土坑:土師器 3号土坑:土師器、須恵器、銅片 4号土坑:土師器、須恵器 5号土坑:土師器、須恵器、施釉陶器 6号土坑:土師器、天聖元寶 8号土坑:縄文土器 9号土坑:須恵器 10号土坑:土師器、須恵器 11号土坑:須恵器 12号土坑:土師器、須恵器 14号土坑:礫片 15号土坑:土師器、須恵器 18号土坑:土師器 22号土坑:土師器、須恵器 23号土坑:土師器 24号土坑:土師器 27号土坑:土師器 30号土坑:土師器 31号土坑:土師器、台石 33号土坑:黒色頁岩銅片	第3表(100頁)参照
1号ピット / 47号ピット			第4表(100頁)参照		2号ピット:土師器 3号ピット:土師器、須恵器 7号ピット:土師器、須恵器 8号ピット:土師器 10号ピット:土師器 11号ピット:土師器 12号ピット:土師器 13号ピット:土師器	第4表(100頁)参照
Aa-B下水田	1区	1面	35m×7.5m	天仁元(1108)年	なし	

第25表の1 富田大泉坊B遺跡遺構一覧

遺構番号	区	面	規模(長×幅×深 数字のみはcm)	時期	遺物	備考
1号(塀穴)住居	3区	1面	508×(220)×28	奈良時代	土師器、須恵器	
2号(塀穴)住居	3区	1面	345×306×32	平安時代前期	土師器、須恵器、磁石	
3号(塀穴)住居	3区	1面	360×(153)×29	奈良末~平安初	土師器、須恵器	4号住居に切られる
4号(塀穴)住居	3区	1面	351×(303)×36	平安時代前期	土師器、他	3号住居を切る
5号(塀穴)住居	3区	1面	(201)×(120)×5	不特定	なし	
6号(塀穴)住居	3区	1面	(430)×(342)×50	平安時代前期	土師器、須恵器	地味家屋か
7号(塀穴)住居	3区	1面	(276)×(180)×54	平安時代前期	土師器、須恵器	8号住居に切られる
8号(塀穴)住居	3区	1面	(370)×(484)×44	平安時代	土師器20片	7号住居を切る
9号(塀穴)住居	2区	1面	(230)×(344)×20	奈良・平安時代	土師器、須恵器	11号土坑に切られる
10号(塀穴)住居	2区	1面	(240)×284×24	不特定	土師器、石皿、台石、他	
11号(塀穴)住居	2区	1面	(357)×(330)×4	縄文時代前期	縄文土器、石皿	地味家屋か
12号(塀穴)住居	2区	1面	(314)×(266)×34	平安時代前期	土師器、須恵器	
14号(塀穴)住居	3区	1面	(352)×(350)×30	奈良時代	土師器、須恵器	
15号(塀穴)住居	4区	1面	328×271×17	平安時代前期	土師器、須恵器、磁石	旧4-1号住居
16号(塀穴)住居	4区	1面	320×276×28	平安時代中期	土師器、須恵器	旧4-2号住居
1号榎立柱建物	2区	1面	458×(420)	平安時代以前	土師器	
2号榎立柱建物	2区	1面	531×(328)	室町時代以降か	土師器	2b号榎立柱建物より古いか

第25表の2 富田大泉坊B遺跡遺構一覧

遺構番号	区	面	規模(長×幅×深 数字のみはcm)	時期	遺物	備考
2b号掘立柱建物	2区	1面	626×(243)	室町時代以降か	なし	
3号掘立柱建物	4区	1面	(314)×(466)	平安時代以前	土師器1片	
4号掘立柱建物	4区	1面	605×(687)	平安時代以前	土師器、須恵器	3期に亘るか
1号溝	2区	1区	14.0m×466×40	古代末～中世初	須恵器1片	
2号溝	3区	1区	11.5m×196×36	中～近世以降	なし	6号溝を切る
1号溝	3区	1区	9.6m×96×23	飛鳥～平安時代	土師器2片	1号井戸に切られる
2号溝	1区	1区	5.8m×260×28	不特定	土器、陶磁器、灰碑、鉄	水路か
3号溝	2区	1区	22.6m×84×37	室町時代以降	なし	区画溝か
4号溝	2区	1区	11.3m×94×10	飛鳥時代以降	土師器、須恵器、硝石、他	
5号溝	2区	1区	11.0m×62×10	不特定(新)	なし	
6号溝	3区	1区	30m×180×10	平安時代(Aa-B被覆)	土師器、須恵器、五輪塔	2号溝に切られる。水路
7号溝	3区	1区	27.5m×185×48	飛鳥～平安時代	土師器、須恵器	8～11号溝を切る。水路
8号溝	3区	1区	2.975×(110)×60	飛鳥～平安時代	土師器、須恵器、石器剥片	7～11号溝に切られる。水路
9号溝	3区	1区	605×(205)×28	飛鳥～平安時代	土師器、須恵器、石器剥片	7号溝に流入か
10号溝	3区	1区	25m×109×13	飛鳥～平安時代	土師器	7～8号溝と重複
11号溝	3区	1区	985×165×18	飛鳥～平安時代	土師器、須恵器、石器剥片	
12号溝	4区	1区	10.4m×57×39	平安時代	土師器、須恵器	2号井戸に切られる
旧河道	1区	1区	9.4m×600×一	中世～近代	青磁、五輪塔、基石	土大目旧用水田水路
1号井戸	2区	1区	(165)×(63)×一	不特定	なし	井筒朝顔型
2号井戸	4区	1区	152×126×204	南北朝時代	軟質陶器、土師器、須恵器	1号溝を切る。井筒朝顔型
3号井戸	4区	1区	204×200×93	中～近世	土師器、須恵器、鎌	稲鉢型。鉄むらぎ使用か
1号土坑 / 27号土坑			第5表(161頁)参照		12号土坑：土師器、須恵器 13号土坑：石器剥片 14号土坑：土師器、須恵器 16号土坑：土師器、須恵器 18号土坑：土師器、須恵器 19号土坑：土師器、灰輪陶器 22号土坑：土師器 23号土坑：須恵器 24号土坑：土師器、須恵器 25号土坑：土師器、須恵器、陶器	第5表(161頁)参照
1号土坑 / 27号土坑			第6表(167頁)参照		2号ピット：土師器 5号ピット：土師器 6号ピット：土師器 8号ピット：土師器 10号ピット：土師器、須恵器 13号ピット：土師器、須恵器 14号ピット：石器剥片 18号ピット：須恵器 19号ピット：土師器 22号ピット：土師器、須恵器	第6表(167頁)参照
Aa-B下水田	1区	1面	35m×7.5m	天仁元(1108)年	なし	
畠	4区	1面	8.3m×7.6m×	中～近世以降	土師器1片、須恵器1片	2号井戸と重複
地割れ痕(噴砂痕)	2区	1区	15.4m×122×90他	弘安9(818)年か	なし	

第26表の1 富田大泉坊A遺跡遺構一覧

遺構番号	区	面	規模(長×幅×深 数字のみはcm)	時期	遺物	備考
1号道路	5区	1面	29.2m×71	近世以降	土器、陶磁器	常道森岡大胡麻旧道
女堀	4区	1区	13.0m×21.3m×40	平安時代末葉	土師器、須恵器、陶器	Aa-B 災害復旧時の用水路 (未完)
1a号溝	3区	1面	2.1m×50×20	中世前期か	なし	
1b号溝	3区	2面	4.6m×68×25	平安時代後期	なし	AS-B降下直前

第26表の2 富田大泉坊A遺跡遺構一覧

遺構番号	区	面	規模(長×幅×深) 数字のみは(m)	時期	遺物	備考
2号溝	3区	1面	12.1m × 38 × 20	中世前期	なし	Aa-B 災害復旧溝か
3号溝	3区	1面	50.6m × 70 × 10	中世前期	土師器	Aa-B 災害復旧溝か
4号溝	4区	2面	15.9m × 78 × 10	平安時代後期	なし	Aa-B 降下直前
5号溝	4区	2面	10.8m × 66 × 10	飛鳥～平安時代	なし	7号溝に連続の可能性残す
6号溝	4区	2面	28.9m × 147 × 12	飛鳥～平安時代	弥生土器、土師器、須恵器	中世の可能性も残る
7号溝	6区	1面	9.0m × 95 × 25	近世・近代	土師器、軟質陶器、陶器、瓦、他	
8号溝	4区	3面	15.2m × 140 × 35	古墳時代前期	弥生土器、土師器、須恵器、(木器)	水路
9号溝	4区	4面	10.8m × 265 × 29	弥生末～古墳初	土師器、木器	水路、12号溝下流か
10号溝	4区	3面	47.8m × 240 × 55	古墳時代前期	土師器	水路
11号溝	4区	3面	67.0m × 300 × 36	古墳時代前期	土師器、輪軸陶器	10号溝を切る。水路
12号溝	4区	4面	104.8m × 125 × 106	弥生末～古墳初	弥生土器、土師器、須恵器、木器	水路
13号溝	4区	4面	21.9m × 46 × 10	弥生末～古墳初	なし	12号溝と重複
14号溝	1区	3面	16.4m × 250 × 90	古墳時代後期以降	弥生土器、土師器	水路
15号溝	1区	3面	9.5m × 220 × 90	古墳時代前・中期	弥生土器、土師器	14・20号溝に切られる
16号溝	2区	2面	11.8m × 106 × 25	飛鳥～平安時代	土師器	19号溝と重複。水路か
18号溝	2区	2面	3.6m × 90 × 53	平安時代以前	なし	水路
19号溝	2区	2面	3.7m × 54 × 22	平安時代以前	なし	16号溝と重複
20号溝	1区	3面	9.5m × 225 × 90	古墳時代前・中期	なし	15号溝を切る
21号溝	4区	2面	27.1m × 75 × 17	平安時代後期	なし	Aa-B 水田の水路か
22号溝	4区	2面	40.7m × 64 × 20	古墳末～平安時代	弥生土器、土師器、須恵器、他	水路
23号溝	5区	2面	59.0m × 72 × 11	平安時代後期	弥生土器、土師器、須恵器、他	Aa-B 水田の水路か
24号溝	5区	4面	3.2m × 26 × —	弥生末～古墳初	土師器、木質	
25号溝	5区	3面	3.3m × 555 × 83	古墳時代前記以前	弥生土器、土師器、木器	26号溝に切られる。水路
26号溝	5区	3面	5.5m × 146 × 36	古墳時代前記以前	なし	25号溝を切る。水路
27号溝	5区	3面	78.0m × 316 × 72	古墳時代前期	弥生土器、土師器、木器、他	水路、5回以上掘り直し
28号溝	5区	4区	15.7m × 278 × 81	弥生末～古墳初	弥生土器、土師器、木器	水路、30号溝の上流か
29号溝	4区	4面	32.4m × (340) × 72	弥生末～古墳初	弥生土器、土師器、木器、他	水路
30号溝	5区	4区	43.5m × 376 × 68	弥生末～古墳初	弥生土器、土師器、木器、他	水路
31号溝	5区	2面	35.0m × 174 × 44	飛鳥～平安時代	弥生土器、土師器	
32号溝	5区	4区	35.7m × 124 × 17	弥生末～古墳初	弥生土器、土師器、須恵器	
33号溝	6区	1面	43.2 × 88 × 13	中・近世	なし	水路
34号溝	6区	1面	6.0m × 40 × 7	不特定	なし	
1号土坑 / 64号土坑			第7表(192頁)参照		1号土坑：弥生土器、土師器 10号土坑：須恵器 14号土坑：土師器、七輪、磁器、炭化物 15号土坑：輪軸陶器 16号土坑：弥生土器、土師器、焙烙鍋 17号土坑：土師器 18号土坑：土師器、磁器 19号土坑：磁器 20号土坑：土師器、石器剥片 25号土坑：土師器、焙烙鍋 27号土坑：土師器 29号土坑：土師器、須恵器 30号土坑：土師器、軟質陶器 32号土坑：軟質陶器、他 33号土坑：土師器 37号土坑：須恵器 46号土坑：輪軸陶器 59号土坑：土師器	第7表(192頁)参照
1号土坑 / 82号土坑			第8表(202頁)参照		42号ピット：石器剥片 49号ピット：須恵器	第8表(202頁)参照
Aa-A 水田	6区	1面	20.2m × 3.3m	近世中期	なし	溝含む

第26表の3 富田大泉坊A遺跡遺構一覧

遺構番号	区	面	規模(長×幅×深 数字のみはcm)	時期	遺物	備考
As-B 下水田	2	3区	10.7m × 60.7m	平安時代後期	土師器、礫石	
			10.6m × 46.8m			
			13.6m × 41.9m			
			20.5m × 3.1m			
As-A 上洪水層下水田	6区	3面	19.9m × 3.2m	古墳時代前・中期	なし	
As-C 上水田	3面	4区	8.0m × 25.8m	古墳時代前期	弥生土器、土師器、須恵器、他	
			9.7m × 46.3m			
			8.9m × 41.9m			
As-C 下(水田) 面	4面	3区	8.0m × 25.8m	平安時代後期	土師器、礫石	
			9.7m × 46.3m			
			8.9m × 41.9m			
			10.9m × 3.2m			
			溝3を含む			
1号谷	6区	4面	4.0m × 5.2m × 23	古墳～平安時代	なし	降水時等の自然流路
旧河道	6区	4面	1.5m × (90) × 24	縄文時代	縄文土器、木質	

第27表 富田宮田遺跡遺構一覧

遺構番号	区	面	規模(長×幅×深 数字のみはcm)	時期	遺物	備考
1号溝	2区	1面	7.9m × 104 × 43	近世後期以降	土師器、礫石	
2号溝	2区	1面	6.7m × 144 × 69	不特定	土師器	水路
3号溝	2区	1面	4.5m × 88 × 27	古墳～平安時代	土師器、陶器	水路
1a号土坑	4区	1面	(100) × 56 × 21	近世後期以降	なし	貯蔵穴か
1b号土坑	4区	1面	(127) × 133 × 8	近世後期以降	なし	
2号土坑	4区	1面	(207) × (38) × 22	近世後期以降	なし	
3号土坑	4区	1面	103 × 77 × 27	近世後期以降	なし	貯蔵穴か
1号ピット / 27号ピット			第10表(277頁)参照		1号ピット: 軽石 16号ピット: 土師器2片	第10表(277頁)参照
洪水層下水田	1区	2面	43.3m × 6.1m	古墳後期～平安時代	なし	
Hs-FA 下水田	1区	3面	43.3m × 6.1m	古墳時代後期	なし	ピット、畦畔
As-C 下	1区	4面	43.3m × 6.1m	弥生末～古墳初	なし	
噴砂痕	1区	1面	7.4m × 20 × 94 他	弘安 9(818) 年か	なし	
2区	2区	1面				
旧河道	1区	5面	2.2m × (19m) × 152	縄文～古墳時代中期	石器、石製品、土師器、木器、他	大泉坊川跡か。河床3面

第28表の1 富田宮下遺跡遺構一覧

遺構番号	区	面	規模(長×幅×深 数字のみはcm)	時期	遺物	備考
1号住居	1区	1面	(100) × (199) × 53	平安時代中期	土師器、須恵器、他	1号溝を切る
2号住居	1区	1面	378 × 317 × (14)	古墳時代中期	土師器、軟質陶器	1・2号溝に切られる
1号溝	1区	1面	17.5m × 85 × 72	弘安 9(818) 年か	弥生土器、土師器、石器割片	地割、4号溝と一連か
2号溝	1区	1面	6.1m × 106 × 14	近世後期以降	土師器、須恵器	2号住居、1号溝を切る
3号溝	1区	1面	4.9m × 60 × 12	不特定	なし	
4号溝	1区	1面	13.1m × 186 × 277	弘安 9(818) 年か	弥生土器、土師器、陶器、石器、他	地割、1号溝と一連か
1号井戸	1区	1面	70 × 68 × 503	不特定(近世か)	軟質陶器、木器、石製品	井筒型。小径
1号土坑	1区	1面	(74) × (99) × 53	中世以降(近・現代か)	土師器、軟質陶器、陶磁器	
2号土坑	1区	1面	342 × 116 × 61	中世以降(近・現代か)	土師器、軟質陶器、陶器、石器	
3号土坑	1区	1面	(112) × (92) × 21	中世以降(近・現代か)	土師器、須恵器、軟質陶器、陶磁器	
4号土坑	1区	1面	45 × 99 × 25	中世以降(近・現代か)	土師器、須恵器、軟質陶器、陶磁器	

第28表の2 富田宮下遺跡遺構一覧

遺構番号	区	面	規模 (長×幅×深) 数字のみは cm)	時期	遺物	備考
5号土坑	1区	2面	27 × 17 × 12	縄文時代	石器	
1号ピット	1区	1面	29 × 28 × 27	平安時代以前か	なし	
2号ピット	1区	1面	24 × 19 × 32	平安時代以前か	なし	
1号風倒木 (東)	1区	1面	(178) × 236 × 39	近世後期以降	弥生土器、土師器、軟質陶器、他	1号溝を切る。西側に倒木 西側に倒木
(西)			233 × 227 × 77			
3号風倒木	1区	1面	(71) × (218) × 35	平安時代前期以前	なし	4号溝に切られる

写 真 图 版



調査区付近航空写真（中央縦位の道が藤岡大胡線）
（平成 16 年 10 月 2 日撮影、国土地理院「前橋」）



調査区付近航空写真（中央縦位の道が藤岡大胡線）
（平成 18 年 10 月 12 日撮影、国土地理院「前橋」）



1号住居全景及び遺物出土状況 (西より)



1号住居掘り方全景 (西より)



2号住居全景 (西より)



2号住居遺物出土状況



2号住居居窟 (西より)



2号住居掘り方 (西より)



2号住居掘り方全景 (西より)



3号住居全景 (西より)



3号住居遺物出土状況（西より）



4号住居全景（西より）



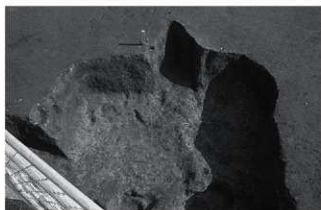
4号住居遺物出土状況（南より）



4号住居窟（西より）



4号住居窟掘り方全景（西より）



4号住居掘り方全景（西より）



5号住居全景及び遺物出土状況（西より）



5号住居窟（西より）



5号住居掘り方（西より）



5号住居・10号住居掘り方全景（南より）



6号住居全景（西より）



6号住居出土遺物出土状況



7号住居全景（西より）



7号住居炉（西より）



7号住居遺物出土状況



8号住居全景及び遺物出土状況（西より）



8号住居窟（西より）



8号住居窟掘り方（西より）



9号住居全景及び遺物出土状況（西より）



9号住居掘り方全景（北より）



11号住居全景（南より）



11号住居窟（西より）



11号住居窟掘り方（西より）



11号住居掘り方（南より）



12号住居全景 (西より)



12号住居窟 (西より)



12号住居掘り方全景 (西より)



14号住居土層断面 (西より)



15号住居全景 (西より)



15号住居窟 (西より)



15号住居掘り方全景 (西より)



16号住居全景 (西より)



16号住居窠（西より）



17号住居全景（西より）



17号住居窠（西より）



17号住居窠掘り方（西より）



17号住居掘り方全景（西より）



18号住居全景（南より）



18号住居遺物出土状況（西より）



18号住居遺物出土状況



18号住居掘り方全景（西より）



19号住居全景（西より）



20号住居全景（南より）



20号住居窟（西より）



20号住居窟掘り方（西より）



20号住居掘り方全景（南より）



21号住居全景及び遺物出土状況（西より）



21号住居窟（西より）



22号住居全景（西より）



22号住居窟（西より）



22号住居遺物出土状況（北より）



22号住居掘り方全景（北より）



23号住居全景（西より）



23号住居窟（西より）



23号住居掘り方全景（西より）



24号住居全景（西より）



25号住居全景（西より）



25号住居遺物出土状況（北より）



26号住居全景（西より）



27号住居全景及び遺物出土状況（南より）



27号住居貯蔵穴（西より）



28号住居全景（西より）



29号住居全景及び遺物出土状況（西より）



29号住居掘り方全景（南より）



30号住居全景（西より）



30号住居貯蔵穴（西より）



30号住居裏（西より）



30号住居遺物出土状況（南より）



30号住居掘り方竈（西より）



30号住居掘り方全景（西より）



31号住居全景及び遺物出土状況（西より）



31号住居掘り方全景（北より）



32号住居全景（西より）



32号住居貯蔵穴及び周辺の出土遺物（西より）



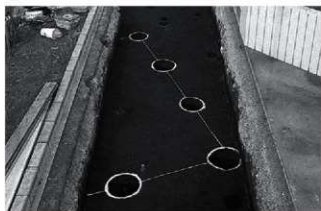
32号住居掘り方（西より）



33号住居全景（西より）



33号住居掘（西より）



1号掘立柱建物（南より）



2号掘立柱建物全景（南より）



3・4号掘立柱建物と1号相列（南より）



3号掘立柱建物 Pit 3 土層断面 (南より)



5号掘立柱建物 (南より)



5号掘立柱建物 Pit 1 全景 (南より、旧24号土坑)



6号掘立柱建物 (南より)



7号掘立柱建物 (西より)



8号掘立柱建物 Pit 1 柱痕土層除去状態 (南より)



8号掘立柱建物 (南より)



8号掘立柱建物 Pit 1 土層断面 (南より)



9号掘立柱建物全景 (南より)



1号溝全景 (南より)



2号溝全景 (東より)



3・4号溝全景 (北より)



5号溝全景 (東より)



6号溝全景 (東より)



8号溝全景 (北より)



9号溝土層断面 (南より)



1号井戸全景 (東より)



2号井戸全景 (東より)



3号井戸全景 (西より)



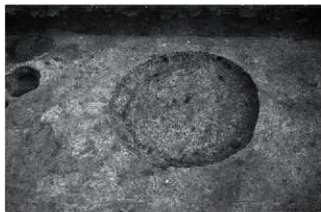
4号井戸全景 (東より)



1号土坑断面 (西より)



5号土坑全景（北より）



8号土坑全景（西より）



12号土坑全景（東より）



26号土坑全景（南より）



31号土坑全景（西より）



15号ビット土層断面（南より）



16号ビット土層断面（南より）



As-B 下水田全景（北より）



噴砂痕（北より）



縄文包含層遺物出土状況（南東より）



2区縄文包含層（南より）



縄文包含層遺物出土状況（西より）



縄文包含層遺物出土状況（南より）



2区縄文包含層試掘状況（北より）



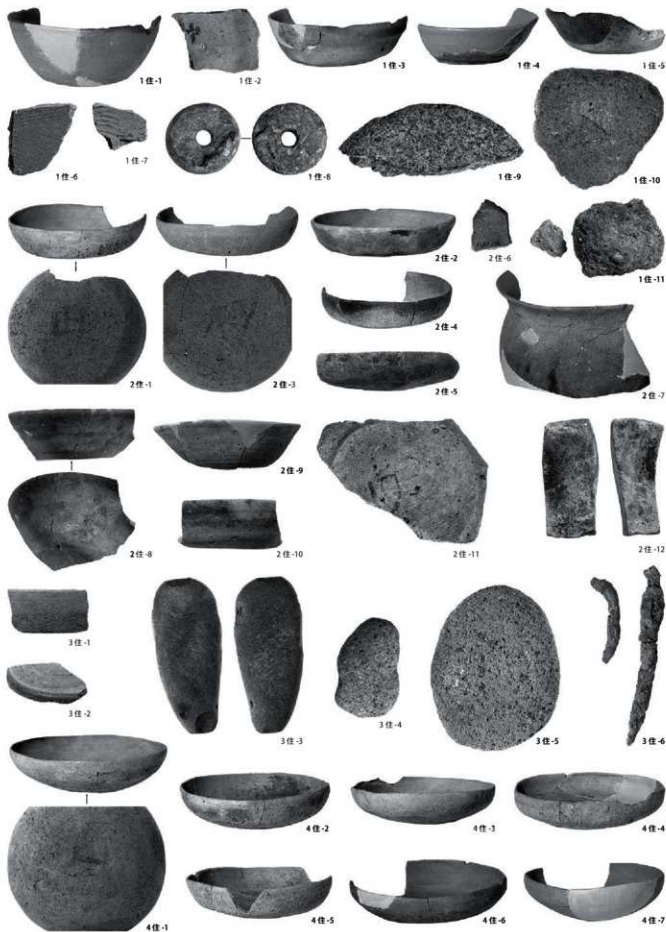
2区基本土層（西より）

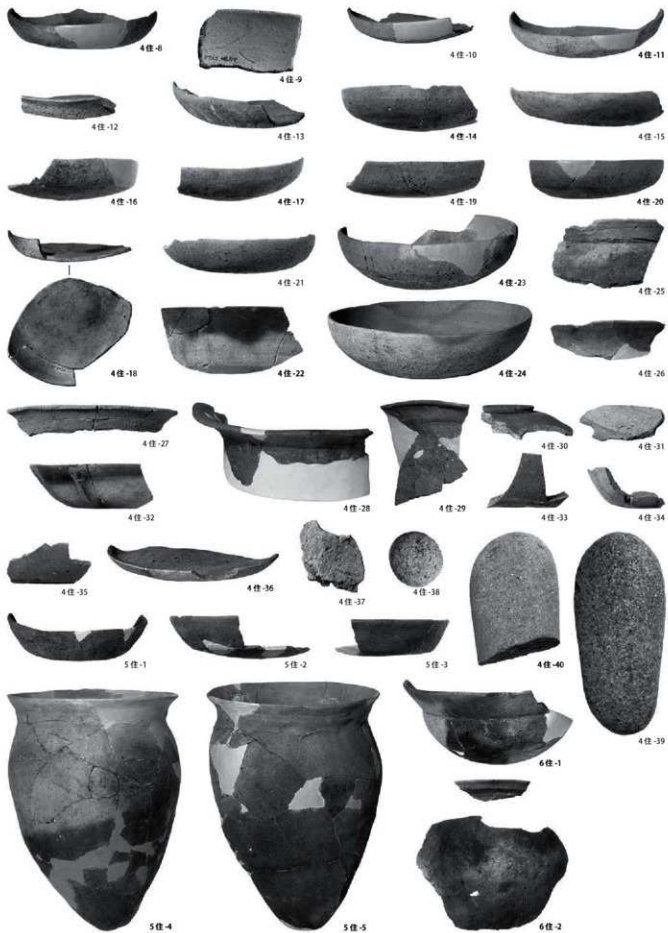


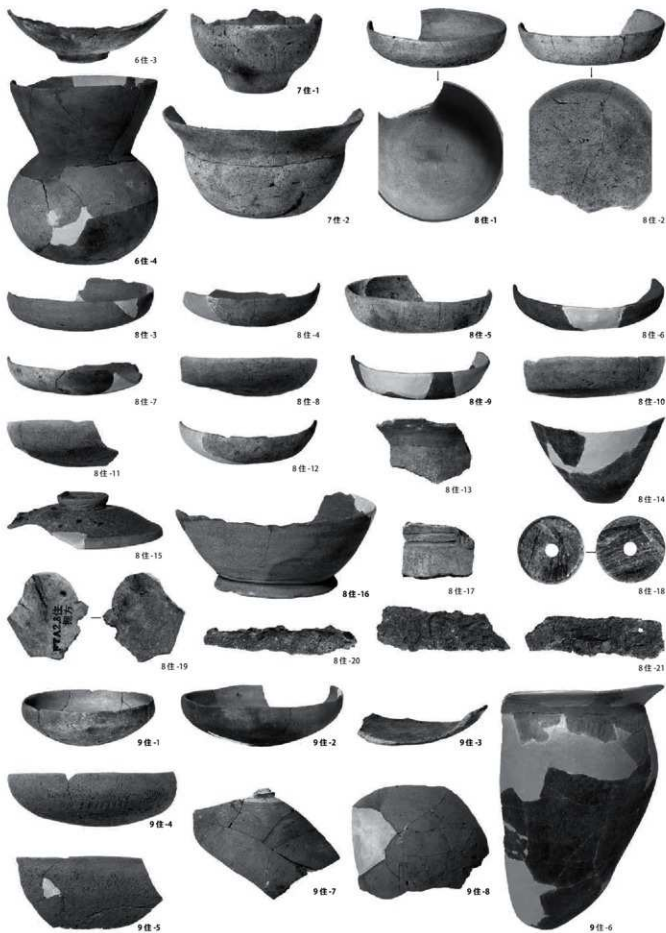
4区全景（平成18年度調査分、南より）

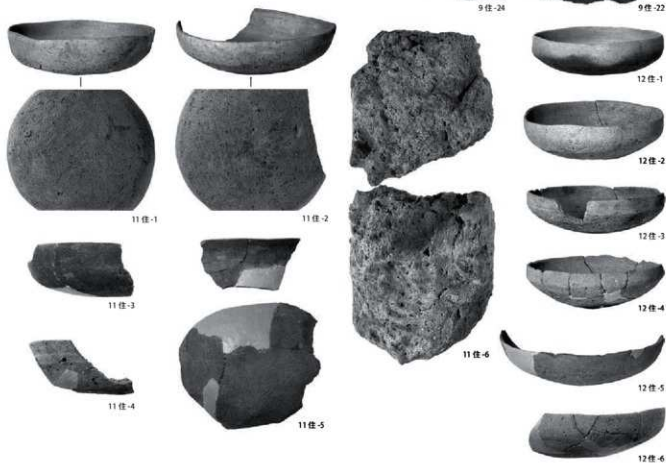
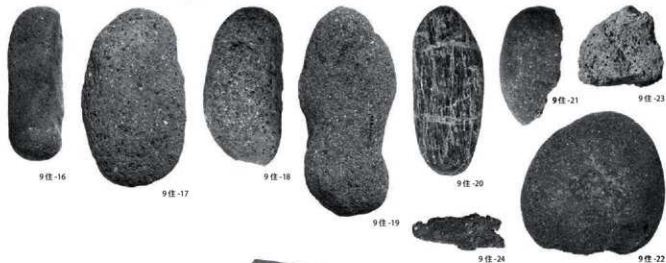


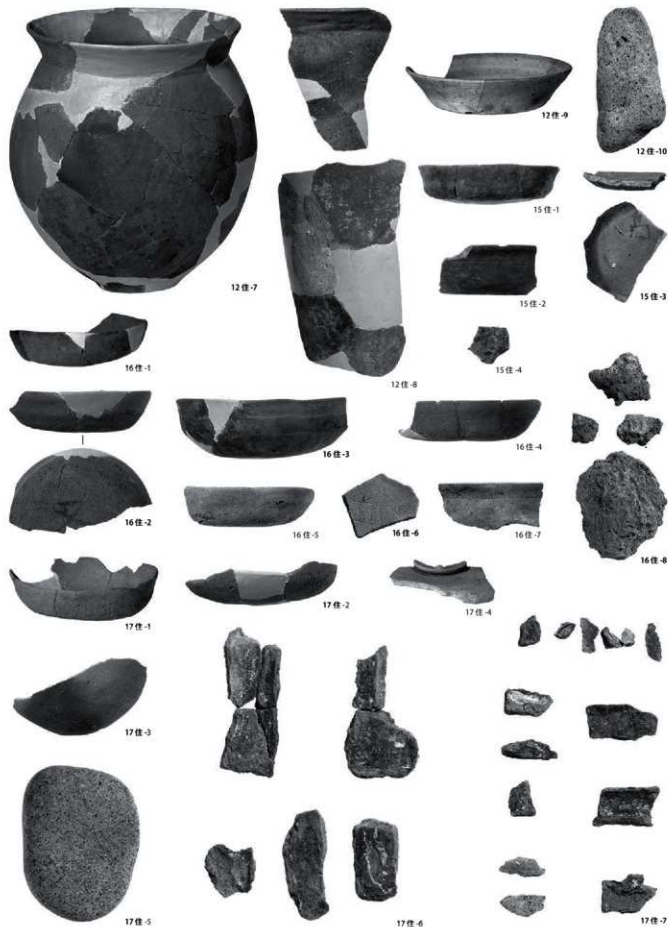
調査風景（5号掘立柱建物付近、南より）

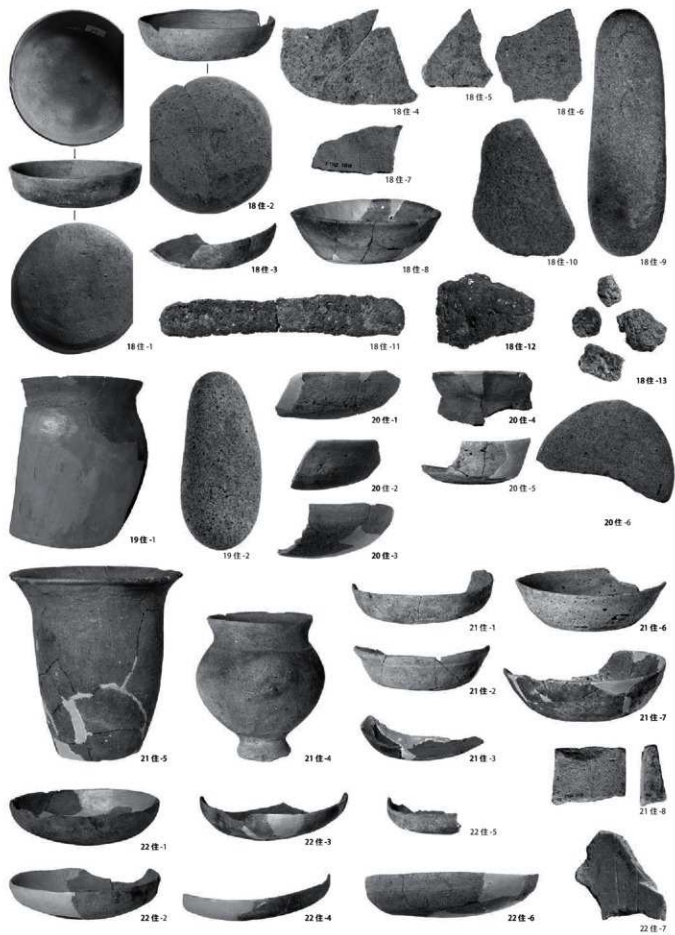


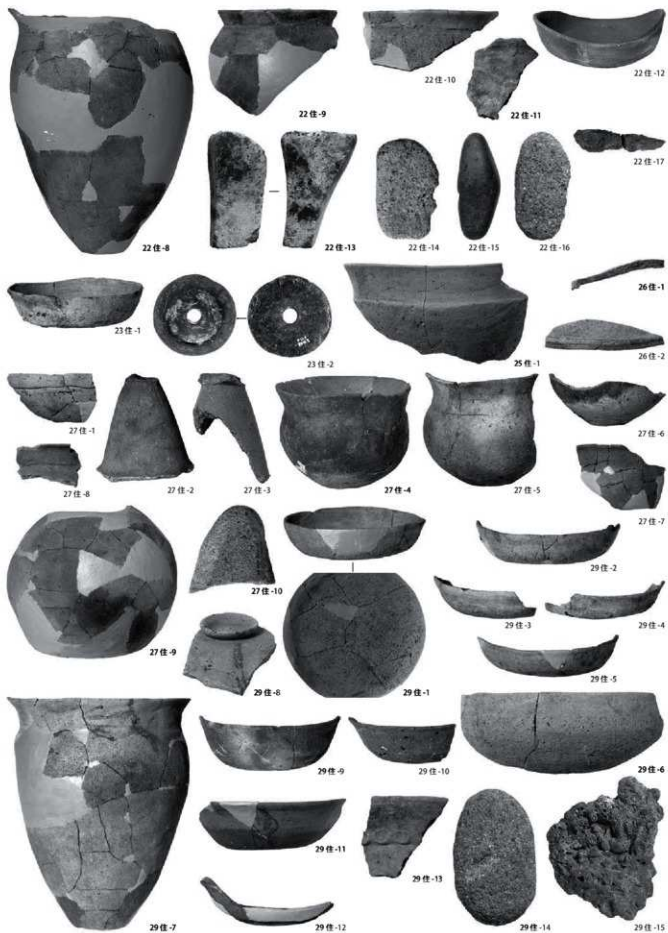


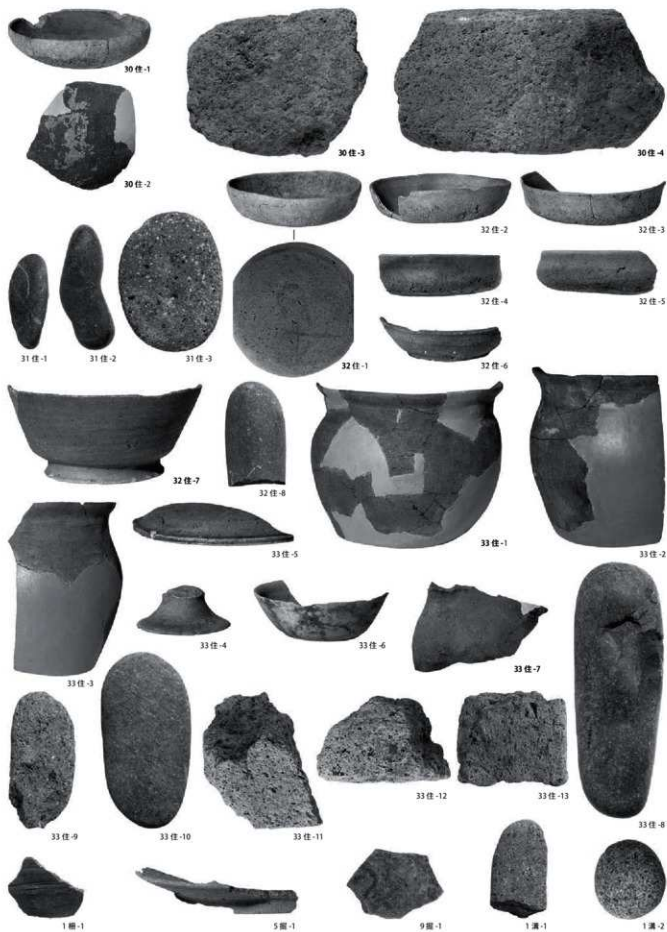


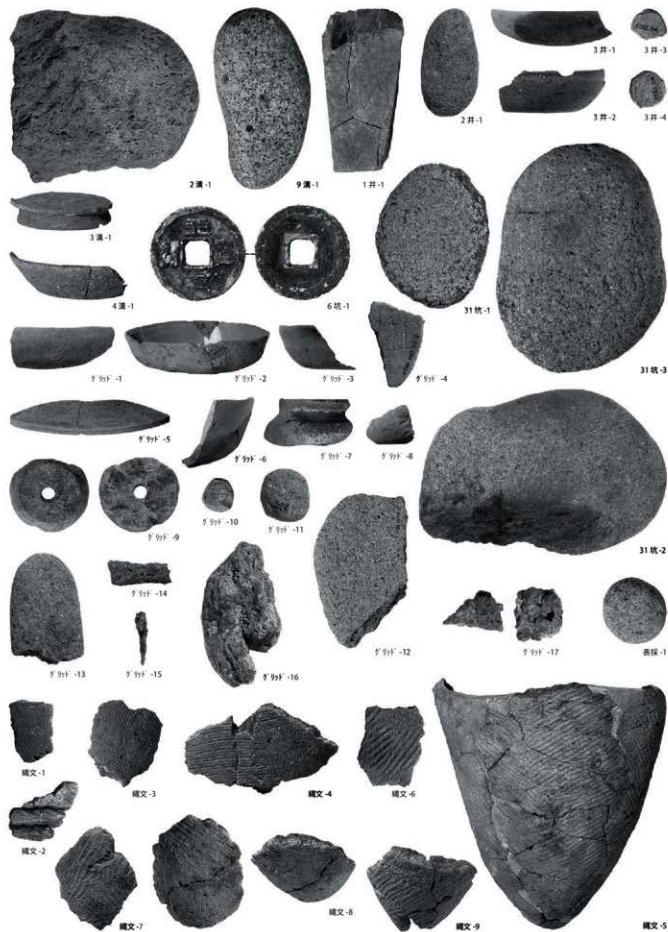


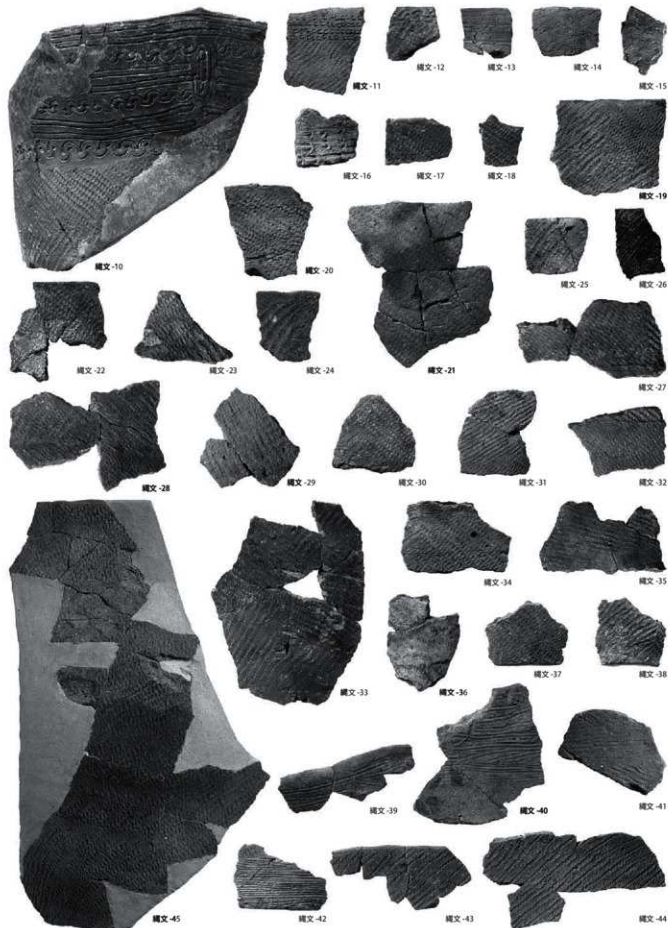


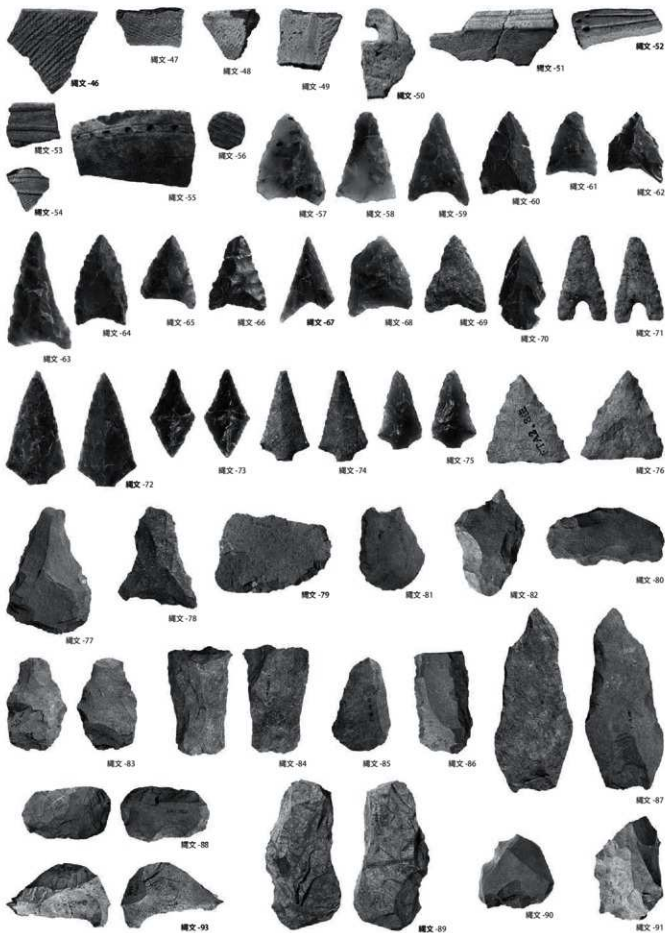














縄文-92



縄文-94



縄文-99



縄文-100



縄文-95



縄文-96



縄文-97



縄文-98



縄文-101



縄文-102



縄文-103



縄文-104



縄文-105



縄文-106



縄文-107



縄文-108



縄文-109



縄文-110



縄文-111



縄文-112



縄文-113



縄文-115



縄文-114



縄文-117



縄文-118



縄文-119



縄文-120



縄文-116



縄文-121



縄文-122



縄文-123



縄文-124



縄文-125



縄文-126



縄文-127



縄文-128



縄文-129



縄文-130



縄文-131



縄文-133



縄文-132



縄文-134



縄文-135



2区中・北部（北より）



4区南部（北より）



4区北部（北より）



4区北部（南より）



2区南部全景 (南より)



1号住居西 (西より)



1号住居全景 (南より)



1号住居掘り方全景 (南より)



2号住居全景及び遺物出土状況 (西より)



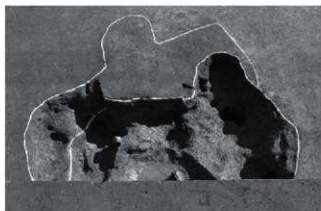
2号住居掘り方全景 (西より)



3号住居全景及び遺物出土状況 (西より)



3号住居窟（西より）



3号住居掘り方全景（西より）



4号住居全景（西より、内側手前は3号住居）



4号住居窟（西より）



4号住居掘り方全景（西より）



5号住居全景及び土層断面（西より）



5号住居掘り方全景（西より）



6号住居全景及び遺物出土状況（西より）



6号住居掘り方全景 (西より)



7号住居 (右) 及び8号住居 (左) 全景 (西より)



7号住居及び8号住居掘り方全景 (西より)



9号住居全景 (西より)



9号住居遺物 (1) 出土状況 (西より)



9号住居掘り方全景 (西より)



10号住居全景 (西より)



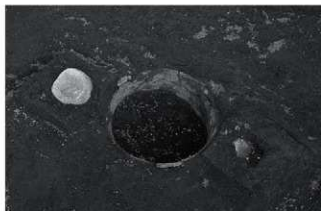
10号住居掘り方全景 (西より)



11号住居全景（西より）



11号住居遺物出土状況（南より）



11号住居埋燹炉（南より）



11号住居埋燹炉断ち割り状況（南より）



12号住居遺物（1他）出土状況（南より）



12号住居竈（西より）



12号住居竈掘り方（西より）



12号住居掘り方全景（南より）



14号住居全景 (南より)



14号住居窟 (西より)



14号住居窟掘り方 (西より)



15号住居全景 (西より)



15号住居窟 (西より)



15号住居窟掘り方 (西より)



15号住居掘り方全景 (西より)



16号住居全景 (西より)



16号住居遺物出土状況 (西より)



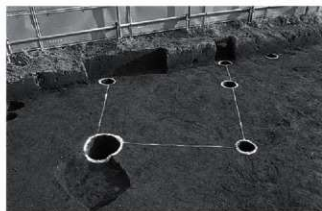
16号住居窟 (西より)



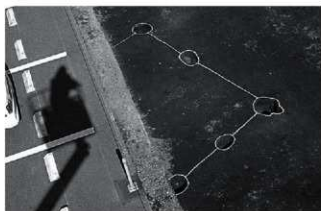
16号住居掘り方全景 (西より)



1号掘立柱建物柱建物全景 (東より)



旧2号掘立柱建物 (西より、2a・b掘立交差部分)



3号掘立柱建物 (旧4-1号掘立) 全景 (南より)



4号掘立柱建物 (旧4-2掘立柱) 全景 (西より)



1号道全景及び地割れ痕 (北より)



2号道全景 (北より)



3号溝土層断面 (A-A'、東より)



1号溝全景 (西より)



4号溝全景 (西より)



5号溝全景 (南より)



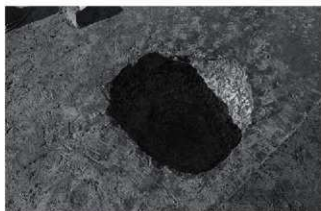
6号溝全景 (南より)



7～10号溝全景 (南より)



7～10号溝全景 (北より)



1号井戸全景 (東より)



2号井戸 (旧2区井戸) 土層断面 (西より)



3号井戸 (旧4区 - 1号井戸) 全景



4号井戸 (旧4区 - 2号井戸) 全景



2号土坑全景 (南より)



4号土坑全景 (南より)



5号土坑全景 (南より)



8号土坑全景 (東より)



9号土坑全景 (東より)



10号土坑全景 (北より)



12号土坑全景（北より）



16号土坑（旧4-3号土坑）遺物出土状況（南より）



17号土坑（旧4-4号土坑）全景（北より）



18号土坑（旧4-6号土坑）全景（南より）



19号土坑（旧4-15号土坑）全景（北より）



20号土坑（旧4-16号土坑）全景（北より）



21号土坑（旧4-17号土坑）全景（北より）



22号土坑（旧4-18号土坑）全景（北より）



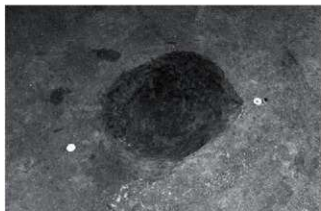
23号土坑 (旧4-19号土坑) 全景 (北より)



16号ピット (旧4-3号ピット) 全景 (南より)



7号ピット (旧4-1号ピット) 土層断面 (南より)



16号ピット (旧4-12号ピット) 全景 (北より)



24号ピット (旧4-20号ピット) 全景



1区 As-B 下水田全景 (南より)



1区 As-B 下水田畦畔 (北より)



2区地割痕（南より）



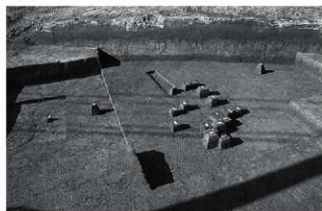
2区地割痕（北より）



縄文包含層 2号ブロック遺物集中部全景（南より）



縄文包含層 2号ブロック遺物出土状況（東より）



縄文包含層 3号ブロック遺物出土状況（東より）



縄文包含層 4号ブロック遺物出土状況（西より）



縄文包含層 5号ブロック遺物出土状況（南より）



縄文包含層 7号ブロック遺物出土状況（東より）



旧石器1号ブロック全景（南より）



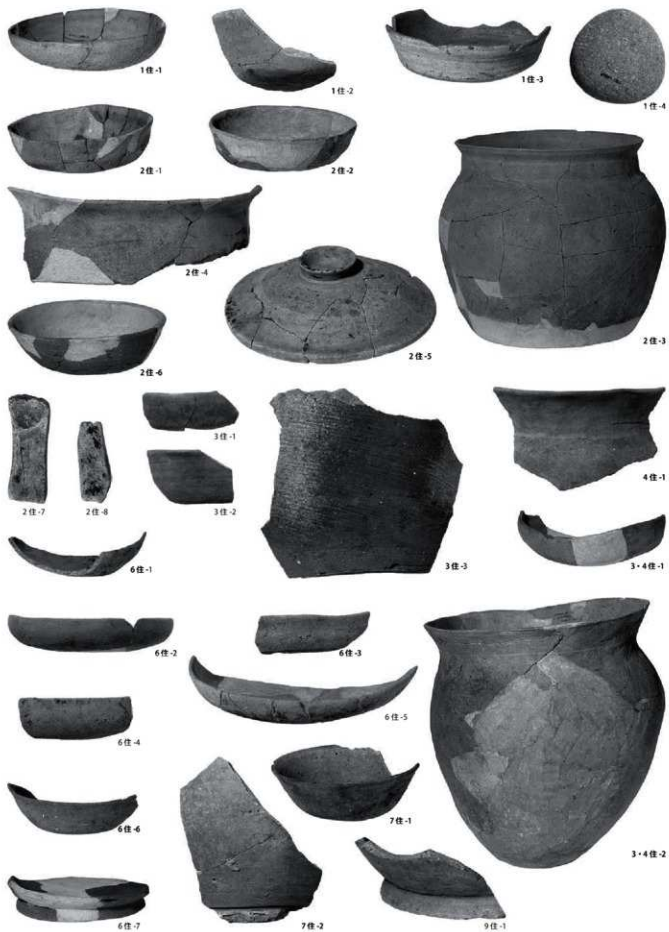
旧石器1号ブロック遺物出土状況（東より）



3区基本土層（E-E'、東より）



3区旧石器試掘調査風景（北より）





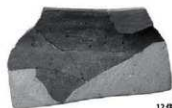
10 住-1



10 住-2



11 住-2



12 住-1



12 住-2



12 住-3



11 住-1



14 住-1



14 住-3



14 住-2



14 住-4



15 住-1



15 住-3



15 住-4



15 住-2



16 住-1



16 住-2



15 住-5



1 溝-1



4 溝-1



4 溝-2



4 溝-3



1 溝-1



6 溝-1



6 溝-2



7 溝-1



8 溝-1



8 溝-2



12 溝-1



9 溝-1



12 溝-2



2 号井戸-1



11 溝-1



19 坑-1



16 坑-1



16 坑-2



伯河溝-1



伯河溝-5



伯河溝-2



伯河溝-7



伯河溝-8



伯河溝-4



旧河溝-3

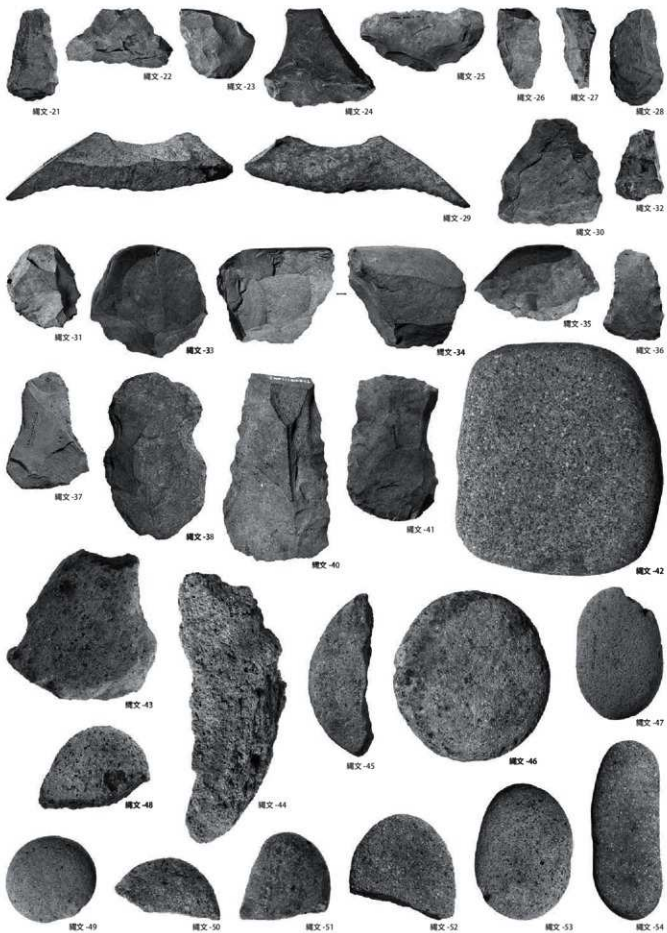


旧河溝-10



旧河溝-6







縄文-55



縄文-56



縄文-57



縄文-58



縄文-59



縄文-60



縄文-61



縄文-62



縄文-63



縄文-64



縄文-65



縄文-66



縄文-67



縄文-68



縄文-69



縄文-70



縄文-71



縄文-72



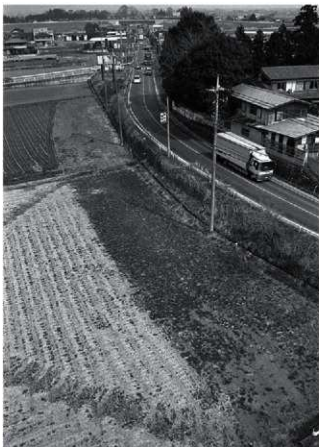
縄文-73



縄文-74



2区北側全景



5区調査前状況



3・4区調査区全景



5区全景（北より）



5区遺構確認状況（北より）



6区中・南部全景（北より）



6区北部遺構確認状況（北より）



7区南部全景（南より）



7区北部全景（南より）（向こう側は上武道路との立体交差）



1号道路（北より）



女堀（北より）



史跡女堀（西より、手前は4区）



31号溝遺物出土状況（北より）



33号溝（旧6-1号溝）全景（北より）



34号溝 (旧6-2号溝) 全景 (北より)



10号土坑 (旧7-1号土坑) 全景 (南より)



21・22号土坑 (旧7-12・13号土坑) 全景 (西より)



29～31号土坑 (旧7-20～22号土坑) 全景 (南より)



48号土坑 (旧7-39号土坑) 全景 (北より)



1～4号ビット全景 (東より)



6区拡張部 As-A 下水田全景 (西より)



2区南部 As-B 下面と試掘トレンチ (南より)



14・15・20号溝全景（南より）



1A号溝土層断面（東より）



2・3号溝（東より）



3号溝全景（東より）



4号溝全景（北より）



5号溝全景（北より）



7号溝全景（北より）



6号溝全景 (南より)



21号溝全景 (南より)



23号溝全景 (南より)



1号土坑全景 (南より)



3号土坑 (旧6-1号土坑) 全景 (東より)



13号土坑 (旧7-4号土坑) 全景 (北より)



41号土坑 (旧7-32号土坑) 全景 (南より)



50号ピット (旧7-9号ピット) 全景 (北より)



52号ピット (旧7-11号ピット) 全景 (南より)



As-B 下水田全景 (3区、北より)



As-B 下水田 (4区、南より)



As-B 下水田全景 (6区張出部、東より)



2区中南部全景 (南東より、平成18年度調査分)



噴砂確認状況（2区中・北部、南より）



噴砂確認状況（2区中・北部、東より）



噴砂断面（2区中・北部、北より）



噴砂断面（2区中・北部、北より）



11号溝全景（北より）



11号溝全景（南より）



27号溝水口 (南より)



13号溝全景 (北より)



22号溝全景 (北より)



22号溝遺物出土状況 (北より)



27号溝全景 (北より)



27号溝全景 (南より)



32号溝全景 (南より)



As-C 上水田全景 (3区、南より)



As-C 上水田 (4区南半、東より)



As-C 上水田・水口付近 (北より)



As-C 混土下水田 (6区張出し、東より)



As-C 混土下面 (6区張出し、東より)



9号溝全景 (北より)



10・12号溝全景 (北より)



12号溝遺物出土状況 (北より)



12号溝杭列 (西より)



12号溝遺物出土状況



12号溝遺物出土状況



12号溝遺物出土状況



12号溝遺物出土状況



12号溝遺物出土状況



12号溝遺物出土状況



24号溝全景 (北より)



25号溝遺物出土状況



25・26号溝全景（東より）



25号溝遺物出土状況



25号溝遺物出土状況



28号溝全景（北より）



28号溝遺物出土状況（東より）



28号溝土層断面（南東より）



29号溝全景 (北より)



30号溝遺物出土状況 (東より)



30号溝遺物出土状況 (東より)



30号溝遺物出土状況



30号溝遺物出土状況



5区 As-C 下面全景 (南より)



As-C 下水田全景 (4区、南より)



As-C 下水田全景 (4区、北より)



As-C 下面全景 (5区北半部、北より)



As-C 下面遺物出土状況 (5区、東より)



As-C 下面までの土層断面 (5区、東より)



6区張出し部6面掘削状況 (東より)



6区張出し部6面木質出土状況 (南より)



1号谷全景 (東より)



旧石器試掘状況（5区、北より）



旧石器試掘状況（6区、南より）



2区1号基本土層（南より）



4区深掘り（東より）



6区西強出し部北壁セクション（東より）



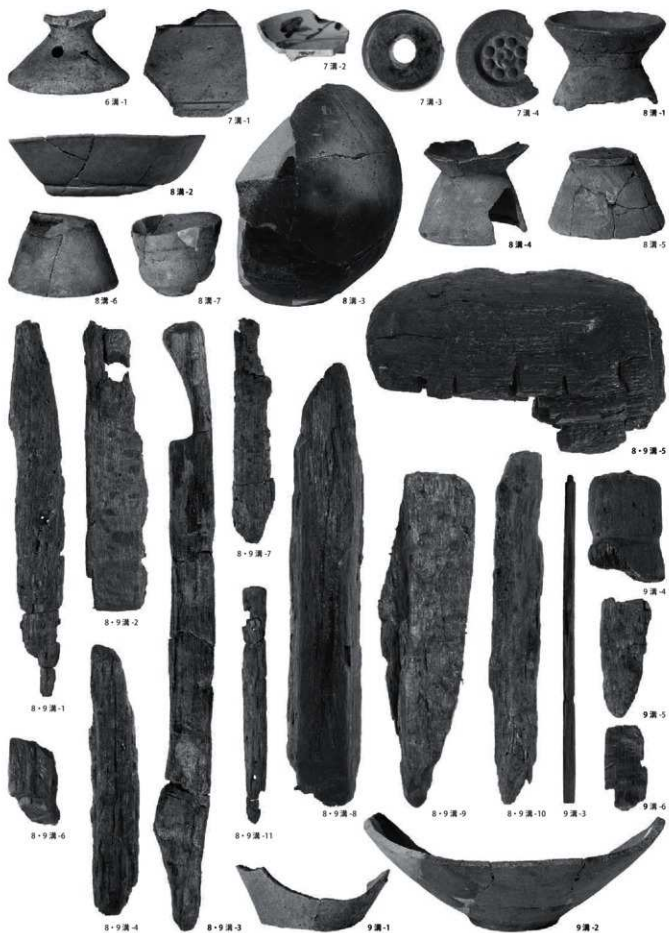
3区As-B下水田調査風景（北より）

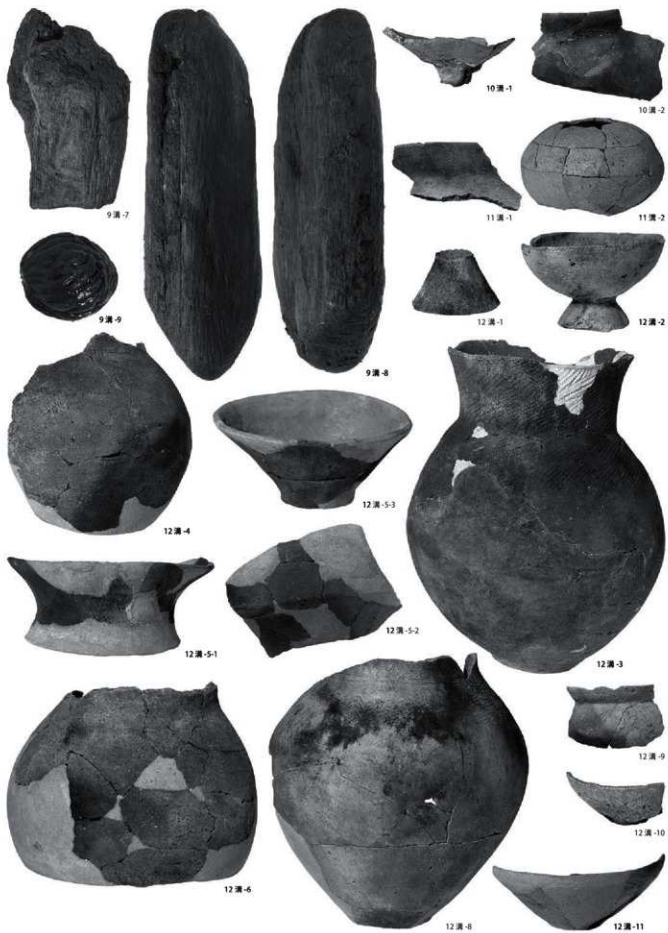


3区As-C下水田調査風景（南より）



5区木器等調査風景（北より）







12 遺-7-1



12 遺-12



12 遺-14



12 遺-17



12 遺-13



12 遺-15



12 遺-7-2



12 遺-18



12 遺-19



12 遺-16



12 遺-20



12 遺-24

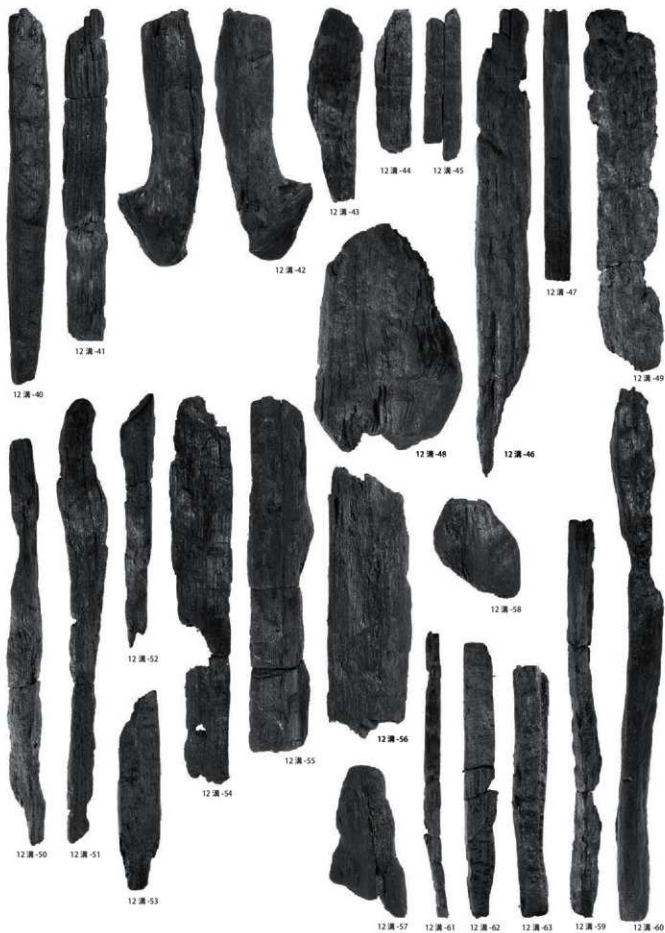


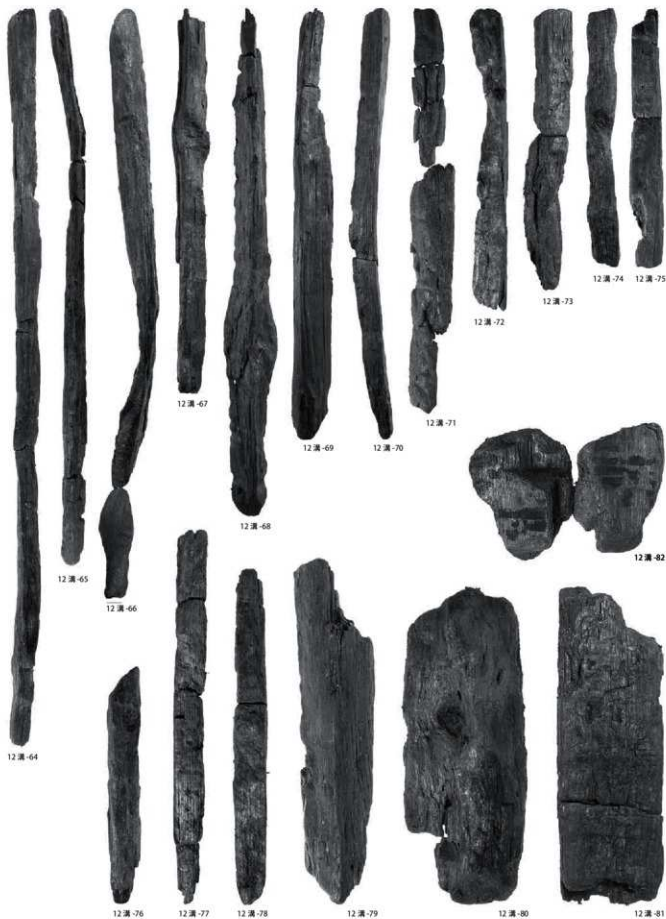
12 遺-23



12 遺-25









12 遺-83



12 遺-84



12 遺-87



12 遺-88



12 遺-89



12 遺-90



12 遺-91



12 遺-92



12 遺-85



12 遺-86



12 遺-93



12 遺-94

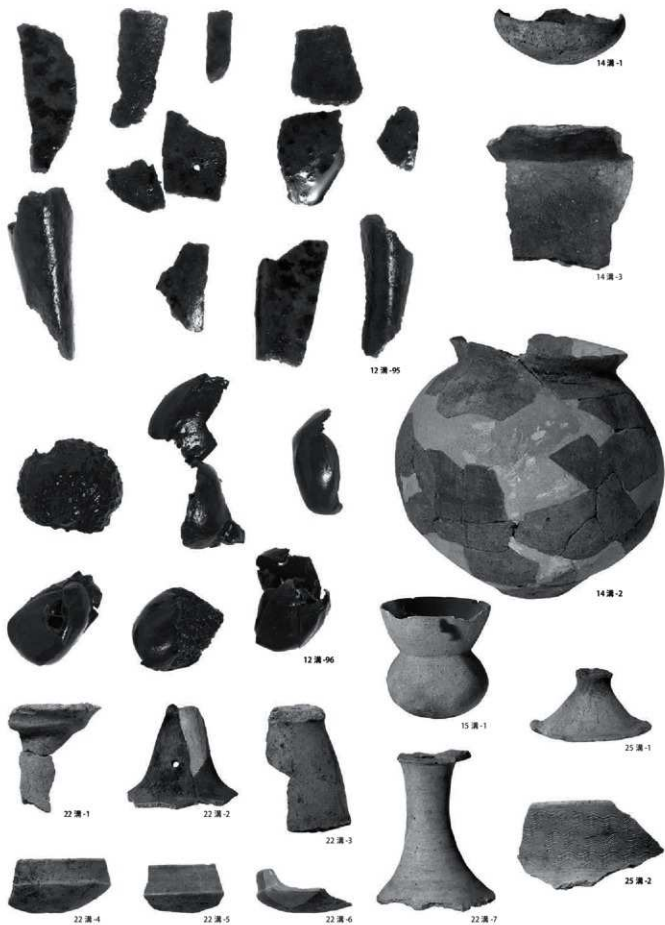


12 遺-97



12 遺-98







25 遺-3



25 遺-4



25 遺-5



25 遺-9



25 遺-7



25 遺-6



25 遺-8



25 遺-10



25 遺-12



25 遺-13



25 遺-16



25 遺-17



25 遺-18



25 遺-19



25 遺-20



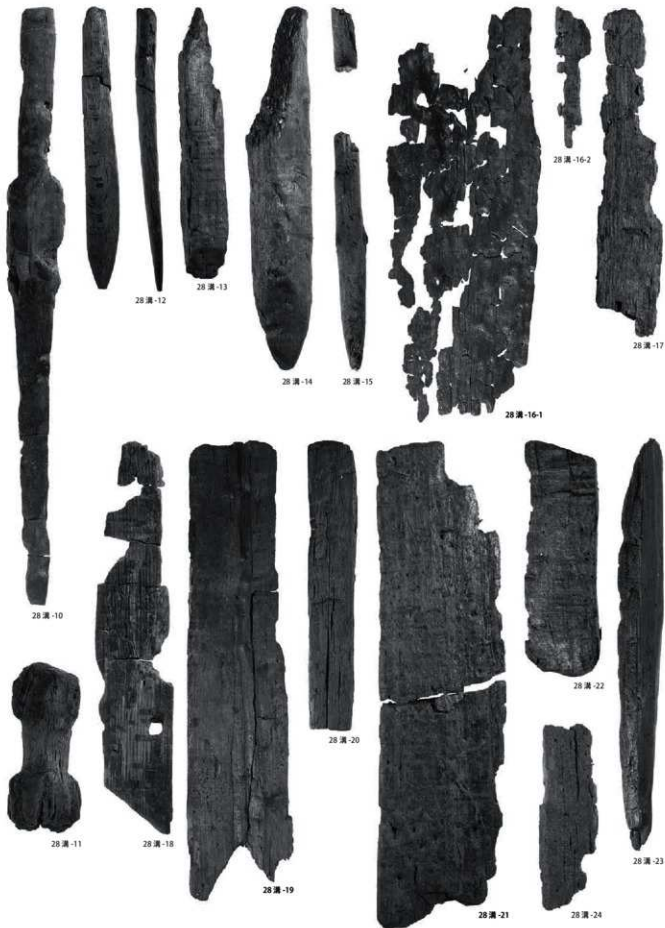
25 遺-14



25 遺-15

25 遺-11













30 遺-20



30 遺-21



30 遺-22



30 遺-23



30 遺-24



30 遺-25



30 遺-26



30 遺-27



30 遺-28



30 遺-30



30 遺-33



30 遺-31



30 遺-29



30 遺-35



30 遺-34



30 遺-36



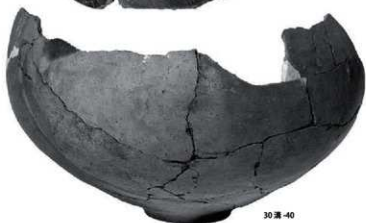
30 遺-32



30 遺-39



30 遺-37



30 遺-40



30 遺-41



30 遺-38



30 遺-42



30 遺-43



30 遺-44



30 遺-46



30 遺-45



30 遺-47



30 遺-51



30 遺-48



30 遺-49



30 遺-50



30 遺-52



30 遺-59



30 遺-65



30 遺-62



30 遺-53



30 遺-55



30 遺-56



30 遺-57



30 遺-58 (1)



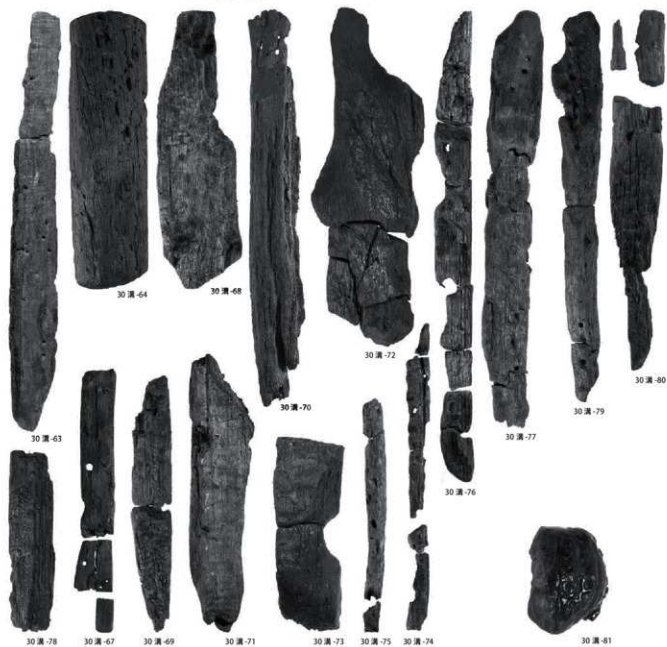
30 遺-58 (2)

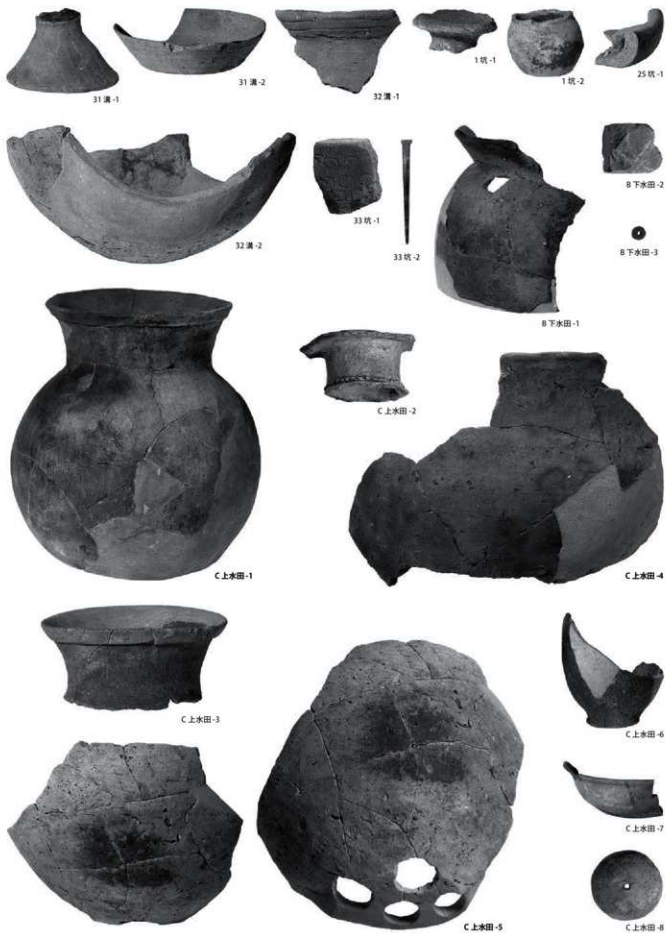


30 遺-54



30 遺-60







C下永田-1



C下永田-2



C下永田-3



C下永田-4



C下永田-5



C下永田-7



C下永田-6



C下永田-8



C下永田-10



C下永田-12



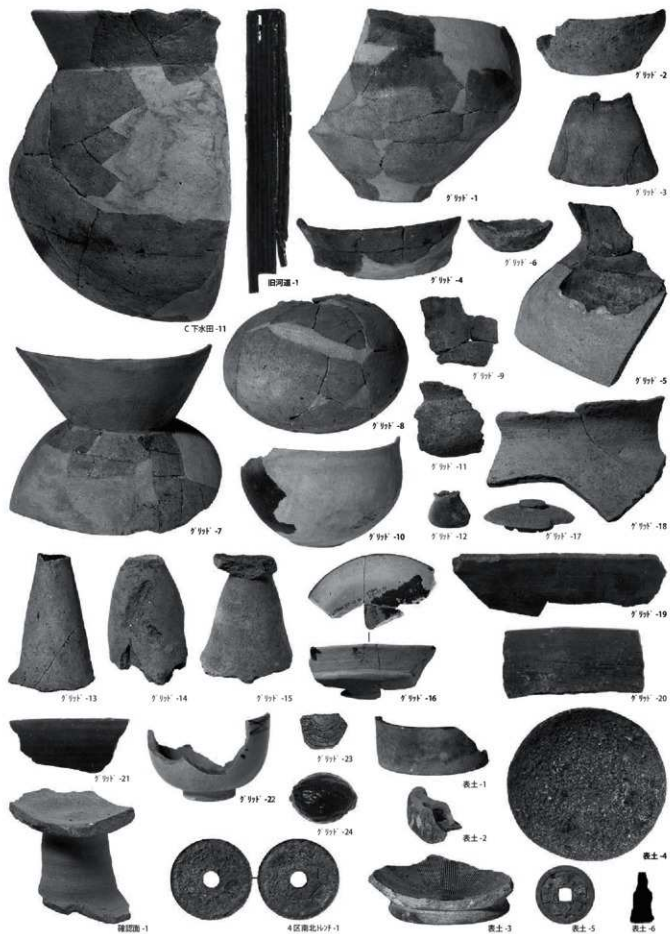
C下永田-13

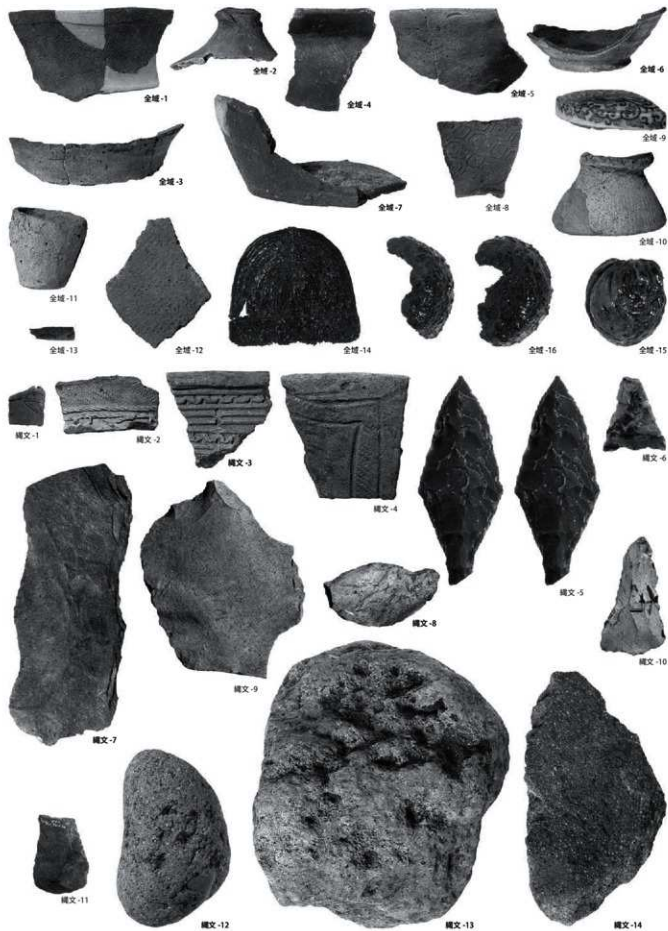


C下永田-14



C下永田-9







1区中・南部全景（北より）



1区北部全景（南より）



1～3号溝全景（北より）



4区全景（南より）



As-B下水田全景（1区、南より）



As-B下水田全景（1区、北より）



噴砂痕（2区、南より）



噴砂痕断面（2区、南より）



1区南端トレンチ調査（東より）



2面全景（1区、南より）



Hr-FA 上水田全景（1区、南より）



Hr-FA 上水田面（1区南部、南東より）



Hr-FA 下水田（1区、南より）



As-C 混土下水田全景 (1区、南より)



As-C 混土下水田面 (1区南部、南東より)



旧河道調査状況 (1区、南より)



As-C 混土下水田面 (1区中部、南西より)



旧河道出土遺物 (1区20・21層、西より)



試掘調査状況 (2区、南より)



下位面試掘調査状況 (4区、南より)

富田宮田遺跡

PL.93



1遺-1



旧河遺-1



旧河遺-2



旧河遺-3



旧河遺-4



旧河遺-5



旧河遺-7



旧河遺-8



旧河遺-6



旧河遺-9



旧河遺-10

旧河遺-11



8下水田-1



9別荘-1



9別荘-2



縄文-1



縄文-2



縄文-3



縄文-4



縄文-5



縄文-7



縄文-6



縄文-8



縄文-9



縄文-10



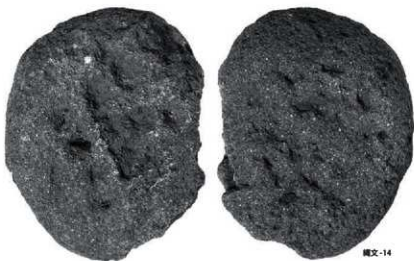
縄文-11



縄文-12



縄文-13



縄文-14



縄文-15



縄文-16



1区北半部全景 (北より)



1区北半部全景 (南より)



1区南半部全景 (南より)



2区調査状態 (西より)



1号住居北半全景 (平成18年度調査区、南より)



1号住居南半全景 (平成19年度調査区、北より)



1号住居窟 (南より)



1号住居窟掘り方 (南東より)



1号住居北半部掘り方(南より)



2号住居(中央)と1号溝全景(南より)



1号溝北端付近遺物出土状況(西より)



2号溝全景(西より)



3号溝全景(北より)



4号溝遺物中部北寄り上位出土状況(西より)



4号溝中部南寄り上位遺物出土状況(西より)



4号溝北半全景 (南より)



4号溝南半全景 (北より)



4号溝遺物出土状況 (中下部位、北より)



4号溝南端部遺物出土状況 (北より)



1号井戸全景 (北より)



1号井戸横樋出土状況 (北西より)



1・3号土坑全景（西より）



2号土坑全景（西より）



4号土坑全景（西より）



5号土坑全景（西より）



1号風倒木全景（南より）



1号風倒木遺物出土状況



1号風倒木遺物出土状況



1号風倒木遺物出土状況（南より）



2号試掘トレンチ (南東より)



2区旧石器試掘状況



縄文・旧石器上位遺物包含層遺物出土状況 (南より)



旧石器下位遺物包含層遺物出土状況 (南より)



縄文・旧石器上位遺物包含層遺物出土状況



旧石器下位遺物包含層遺物出土状況

富田宮下遺跡

PL.101



1住-1



1住-2



1住-5



1住-3



1住-4



2住-1



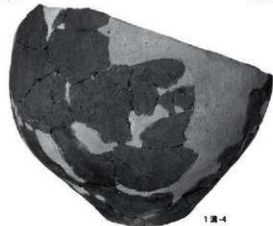
2住-2



1溝-1



1溝-3



1溝-4



1溝-2

1溝-5



4溝-1



4溝-2



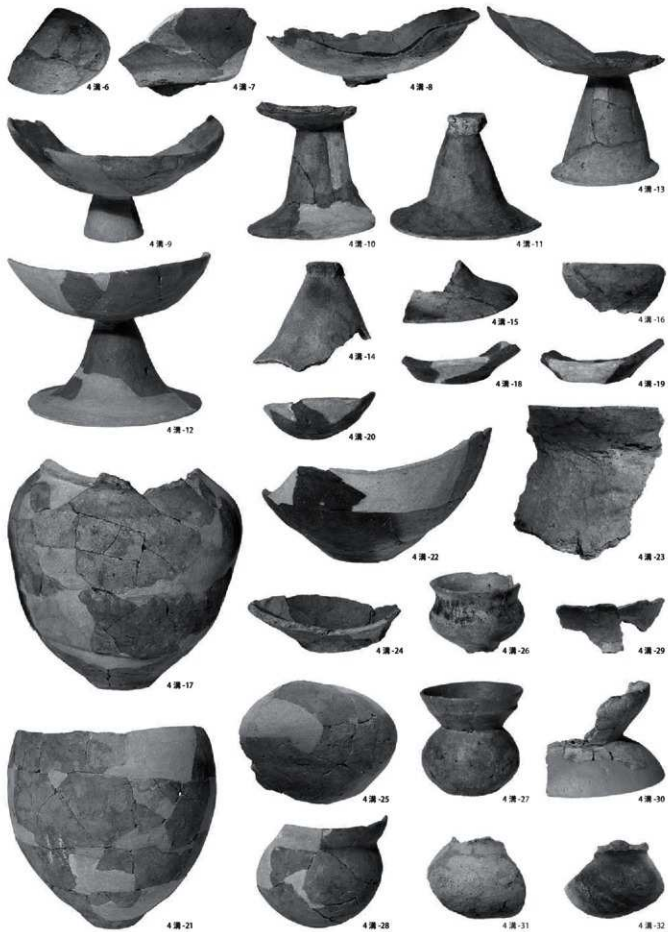
4溝-3



4溝-4



4溝-5





4遺-33



4遺-34



4遺-35



4遺-36



4遺-38



4遺-37



1井-2



1井-1



1遺-10



1遺-2



1遺-12



1遺-3



1遺-5



1遺-6



1遺-4



1遺-7



1遺-8



1区-9



1区-10



1区-2



1区-1



1区-3



1区-5



1区-6



1区-7



5区-1



1区-4



縄文-1



縄文-2



縄文-3



縄文-4



縄文-5



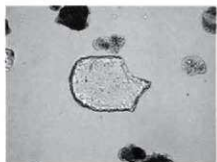
縄文-6



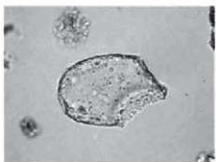
縄文-7



縄文-8



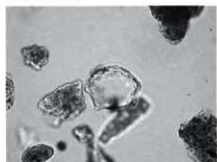
ヨシ属
3区B地点 1



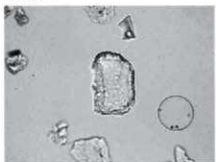
ヨシ属
2地点 1



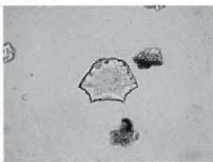
ススキ属型
2地点 1



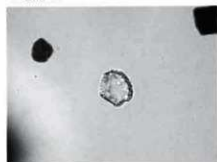
ジュズダマ属
2地点 1



チャマキザサ節型
3区B地点 2



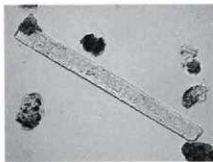
チャマキザサ型
3区B地点 2



ミヤコザサ節型
1地点 1



ミヤコザサ節型
2地点 1



棒状珪酸体
3区B地点 1

富田大泉坊B遺跡の植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真 ————— 50 μm



1 マツ属複雑管束胚乳属



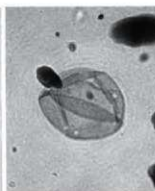
2 ハンノキ属



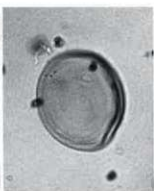
3 プナ属



4 コナラ属アカガシ亜属



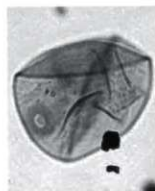
5 クワ科-イラクサ科



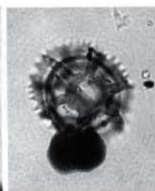
6 イネ科



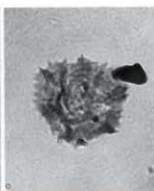
7 イネ属型



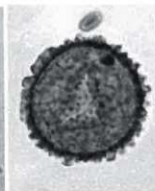
8 イネ属型



9 タンボボ亜科



10 タンボボ亜科



11 シダ植物三条溝胞子

富田大泉坊B遺跡の花粉・胞子

— 10 μm



イネ
27・28号溝A-A' 1



イネ
27・28号溝A-A' 5



ヒエ属型
27・28号溝A-A' 3



ジュズダマ属
10号溝セクション VII



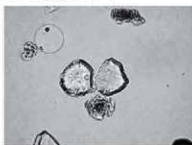
ヨシ属
27・28号溝A-A' 7



ススキ属型
27・28号溝A-A' 1



ネザサ節型
10号溝セクション Va



ミヤコザサ節型
27・28号溝A-A' 5



表皮毛起原
27・28号溝A-A' 2



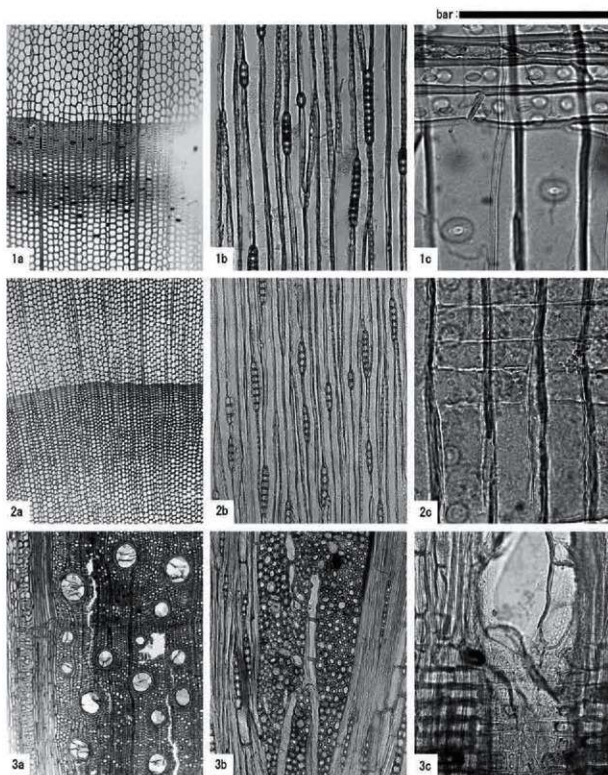
棒状珪酸体
27・28号溝A-A' 1



イネ科の茎部期限
27・28号溝A-A' 1



海綿骨針
27・28号溝A-A' 3

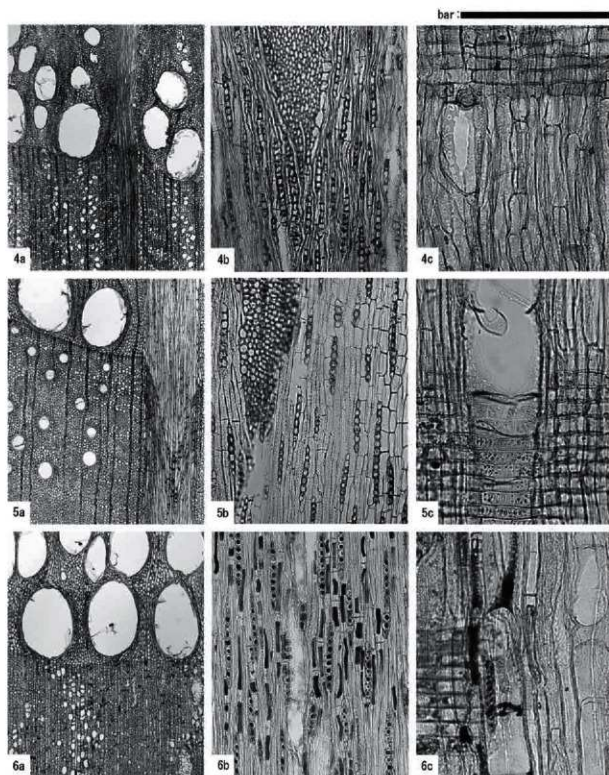


富田大泉坊A遺跡出土材の材組織の光学顕微鏡写真(1)

1a-1c: スギ (No. 12 W-12) 2a-2c: モミ属 (No. 120 W-112-1) 3a-3c: アカガシ亜属 (No. 111 W-104)

a: 横断面 b: 接線断面 c: 放射断面

Scale bar=スギ・モミ属 a:1.0mm, b:0.4mm, c:0.1mm アカガシ亜属 a:1.0mm, b:0.4mm, c:0.2mm

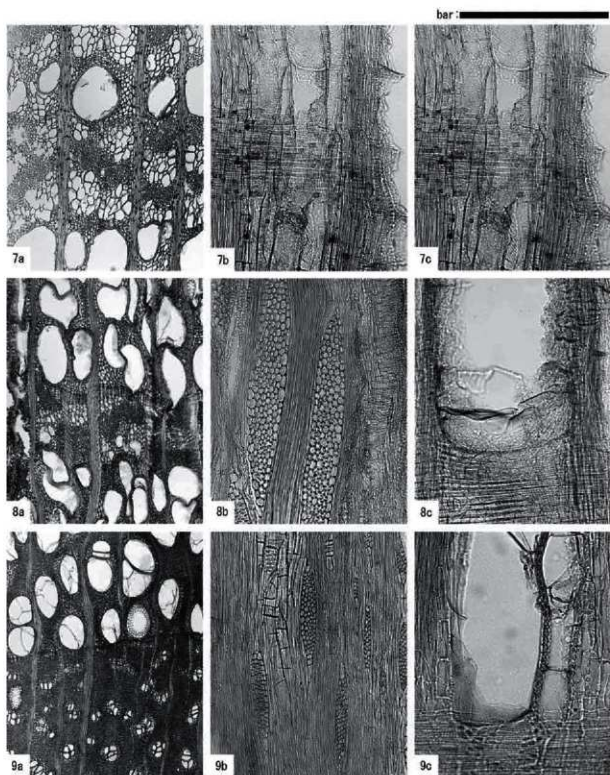


富田大泉坊A遺跡出土材の材組織の光学顕微鏡写真(1)

4a-4c: コナラ節 (No. 8 W-8) 5a-5c: クスギ節 (No. 7 W-7) 6a-6c: クリ (No. 57 W-53)

a: 横断面 b: 接線断面 c: 放射断面

Scale bar=a:1.0mm, b:0.4mm, c:0.2mm

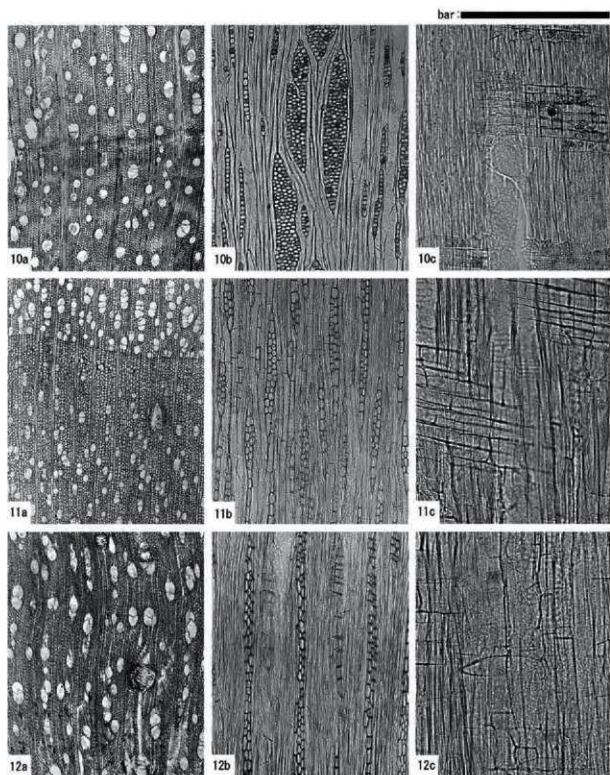


富田大泉坊A遺跡出土材の材組織の光学顕微鏡写真(3)

7a-7c: ケヤキ (No. 109 W-102) 8a-8c: エノキ属 (No. 36 W-34) 9a-9c: クワ属 (No. 239 参-43)

a: 横断面 b: 接線断面 c: 放射断面

Scale bar=ケヤキ・エノキ属 a:1.0mm, b:0.4mm, c:0.4mm クワ属 a:1.0mm, b:0.4mm, c:0.2mm

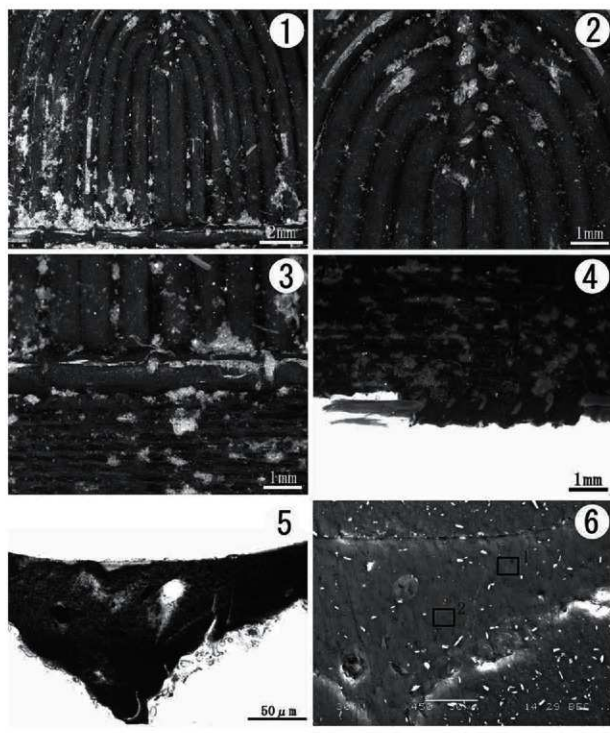


富田大泉坊A遺跡出土材の材組織の光学顕微鏡写真(4)

10a-10c: カエデ属 (No. 193 W-175-1) 11a-11c: エゴノキ属 (No. 92 W-87-2) 12a-12b: 散孔材 (No. 142 W-131)

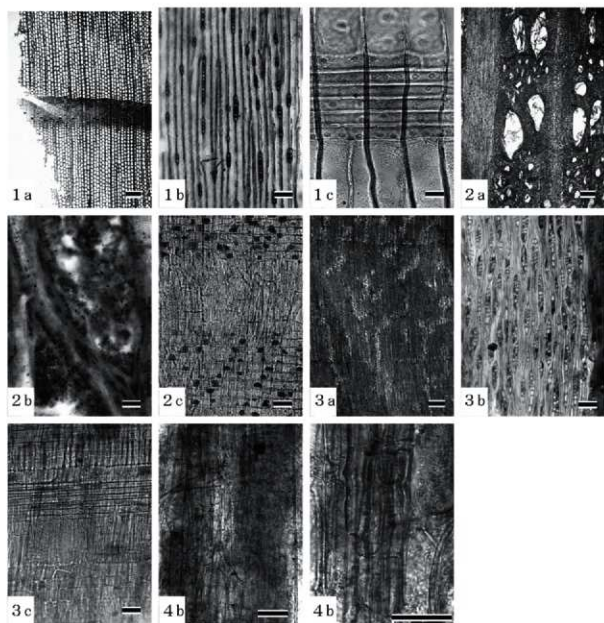
a: 横断面 b: 接線断面 c: 放射断面

Scale bar=a:1.0mm, b:0.4mm, c:0.2mm



櫛表面および塗膜断面とその反射電子像（組成像）

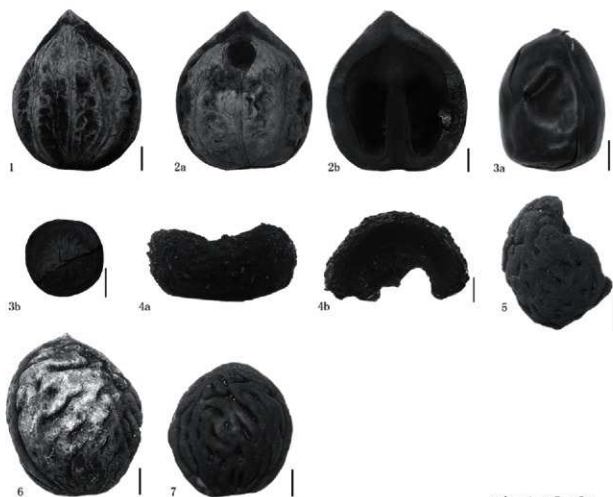
1-4. 櫛の表面写真 5. 塗膜断面 6. 反射電子像 (No. : 点分析位置)



富田大泉坊A遺跡・富田宮下遺跡の木材組織の光学顕微鏡写真

1a-1c: ヒノキ (富田宮下遺跡、薄板材)、2b-2c: コナラ属クヌギ節 (富田大泉坊A遺跡: 農具状薄板材)、3a-3c: ヒイラギ (富田宮下遺跡、横釘)、4b: 単子葉植物 (富田大泉坊A遺跡、堅櫛)

a: 横断面 (スケール=200 μ m)、b: 接線断面 (スケール=100 μ m)、c: 放射断面 (スケール=1:25 μ m、2-4: 50 μ m)



スケール 1-7 : 5mm

富田大泉坊 A 遺跡から出土した大型植物遺体

1. オニグルミ核 (No. 507)、2. オニグルミ核 (No. 510)、3. ナラガシワ果実 (No. 505)、4. コナラ属クヌギ節殻斗 (No. 512)、5. モモ核 (No. 511)、6. モモ核 (No. 510)、7. モモ核 (No. 506)



大泉場 B J-75



大泉場 A J-15



宮下 旧石器-1



宮下 旧石器-4



宮下 旧石器-2



宮下 旧石器-4・5接合



宮下 旧石器-5



宮下 旧石器-3

報告書抄録

書名ふりがな	とみだあらいいせきとみだだいせんぼういせきとみだだいせんぼういせきとみだみやたいせきとみだみやたいせき
書名	富田新井遺跡富田大泉坊B遺跡富田大泉坊A遺跡富田宮田遺跡富田宮下遺跡
副書名	主要地方道藤岡大湖線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	465集
編著者名	石守 晃
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	平成21年3月16日
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北極町下箱田 784-2
遺跡名ふりがな	とみだあらいいせきとみだだいせんぼういせきとみだだいせんぼういせきとみだみやたいせきとみだみやたいせき
遺跡名	富田新井遺跡富田大泉坊B遺跡富田大泉坊A遺跡富田宮田遺跡富田宮下遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんえさばしとみだまちこじたまちまちえきまち
遺跡所在地	群馬県前橋市富田町・小島田町・江本町
市町村コード	10201
遺跡番号	前橋 00289・00292・00294・00371・00584
北緯（日本測地系）	富田新井遺跡 36°22'21"/富田大泉坊B遺跡 36°22'22"/富田大泉坊A遺跡 36°22'44"/富田宮田遺跡 36°22'32"/富田宮下遺跡 36°22'47"
東経（日本測地系）	富田新井遺跡 139°08'39"/富田大泉坊B遺跡 139°08'37"/富田大泉坊A遺跡 139°08'46"/富田宮田遺跡 139°08'46"/富田宮下遺跡 139°08'48"
北緯（世界測地系）	富田新井遺跡 36°22'33"/富田大泉坊B遺跡 36°22'34"/富田大泉坊A遺跡 36°22'56"/富田宮田遺跡 36°22'44"/富田宮下遺跡 36°22'59"
東経（世界測地系）	富田新井遺跡 139°08'27"/富田大泉坊B遺跡 139°08'25"/富田大泉坊A遺跡 139°08'34"/富田宮田遺跡 139°08'34"/富田宮下遺跡 139°08'36"
調査期間	2004/001-2005/03/30、2005/03/31-2005/05/31、2005/10/01-2006/03/31、2006/10/01-2006/12/31、2007/04/01-2007/05/31、2008/01/01-2008/03/31
調査面積	20163.51 m ²
調査原因	県道拡幅改良工事
種別	集落/生産地/水跡/遺物包含層/地割れ/その他
主な時代	旧石器/縄文/弥生/古墳/奈良/平安/中近世
遺跡概要	富田新井：集落・縄文・土坑Ⅱ集落・古墳時代・竪穴住居2・土坑1・土師器/集落・奈良平安・竪穴住居25・掘立柱建物7・溝8・井戸3・土坑1・ビット3・土師器・須恵器他/集落・中世以降・掘立柱建物1・欄干3・溝1・土坑6・ビット9・軟質陶器他/集落・不明・竪穴住居5・土坑12・ビット30/田畑・平安・水田1/その他・包含・縄文・縄文土器・石器他/自然・平安・噴砂 富田大泉坊B：集落・縄文・竪穴住居14・縄文土器・石器他/集落・奈良平安・竪穴住居12・掘立柱建物2・溝5・井戸3・土坑22・ビット15・土師器・須恵器他/集落・中世以降・掘立柱建物1・道1・溝2・田河道1・井戸2・土坑6・ビット15・軟質陶器他/集落・不明・竪穴住居2・掘立柱建物1・溝1・井戸1・ビット16/田畑・平安・水田1/田畑・中世以降・高1/その他・包含・縄文・縄文土器・石器/自然・平安・噴砂 富田大泉坊A：集落・弥生末～古墳・溝7・弥生土器・土師器・木製品/集落・古墳・溝8・土坑1・ビット13・土師器・木製品/集落・奈良平安・溝4・土坑4・ビット19・土師器・須恵器他/集落・中世以降・溝4・土坑43・ビット22/集落・不明・土坑25/田畑・古墳・水田2・弥生土器・土師器/田畑・平安・水田1/田畑・江戸・水田1/包含・縄文土器・土師器他/自然・縄文・旧河道/自然・古墳・谷1/自然・平安・噴砂 富田宮田：集落・古墳・ビット7/集落・近世以降・溝1・土坑4・ビット20/田畑・古墳・水田3/田畑・平安・水田1/自然・平安・噴砂 富田宮下：集落・古墳・竪穴住居1・ビット2・土師器/集落・平安・竪穴住居1・土師器・須恵器他/集落・中世以降・溝2・井戸1・土坑4・木製品他/包含・旧石器・石器/包含・縄文・縄文土器・石器/自然・平安・地割れ2・土師器
特記事項	古墳時代前期頃の所産と見られる黒漆塗り堅輪が出土。中世の単子葉草本類の葉で作ったことと1回の漆塗布が確認された。
要約	前橋市東部の本城山麓の末端近くに位置する。台地部と低地部が交差し、前者からは縄文時代の遺物包含層や律令期の集落や地割・噴砂等の地痕跡等。後者からは弥生時代～古墳時代に至る時期の遺構や溝に伴う土器類や木製品。更に4面ほどの水田耕作遺構などが確認された。

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第465集

富田新井遺跡・富田大泉坊B遺跡・富田大泉坊A遺跡・
富田宮田遺跡・富田宮下遺跡

主要地方道藤岡大胡線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成21年3月9日 印刷

平成21年3月16日 発行

発行／編集 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北碓町下箱田784-2

電話 0279-52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org>

印刷／松本印刷工業株式会社